ポー・カレン語文法

A Pwo Karen Grammar

加藤昌彦

Atsuhiko KATO

2004

東京大学博士学位申請論文

はじめに

本論文の位置づけ

ビルマ (ミャンマー) 連邦カレン州 (Karen State) パアン市 (Hpa-an) 周辺で話されるポー・カレン語 (Pwo Karen) パアン方言 (Hpa-an dialect) の文法記述を言語学的な立場から包括的に行うことが、この論文の目的である。カレン系言語の文法を言語学的にかつ包括的に扱った研究には、カヤー語 (Kayah) に関する Solnit (1997) がある。実用的な目的で編纂された文法書であれば、スゴー・カレン語 (Sgaw Karen) に関するものがいくつか出版されているが (Wade 1888, Gilmore 1898, Saya Kan Gyi 1915, Ballard 1993 など)、カレン系の一つの言語を言語学的な立場から包括的に記述した文法書は、おそらくこの Solnit によるカヤー語文法しか存在しない。

ポー・カレン語の文法を多少とも扱ったものとしては、Duffin (1913) や Purser and Saya Tun Aung (1922) がある。前者は会話用の例文集であり、後者は巻末に文法の概略を付した語彙集である。これらは、80 年以上前のポー・カレン語の様子を現代の我々に垣間見せてくれる良書であるが、実用向けに編まれたものであって、また時代が時代だけに、厳密性に乏しい。また、両著書とも、基本的には西部方言を扱ったものであるにもかかわらず、キリスト教ポー・カレン文字が最初に作られた東部方言の言語現象に引きずられて説明している部分が多く、そのため異なる言語体系に属する言語現象が混在してしまっており、一言語の記述としては大きな問題がある。おそらく、ポー・カレン語の一方言の文法に関する言語学的な包括的記述は、本論文が初めてである。

本論文を書く上で、常に留意したのは次の二点である。まず一つは、できるだけたくさんの実例を挙げるということである。特に、助詞の記述を行った章においては、一つの助詞につき最低数個の実例を挙げることにした。文法の分析には作例による検証が欠かせない。しかし、それだけでは、日常的に使われている言語の姿と異なる様相が描き出されてしまう危険性がある。ポー・カレン語はあまり知られていない言語であるから、できるかぎり分析者の色眼鏡を通さないありのままの姿を提示したいという気持ちがあった。もう一つの点は、様々な言語の記述的研究に共通に使われる基礎的な概念のみをなるべく用いて記述するということである。筆者は、あまり知られていない言語のありのままを提示したいときには特に、このような態度が有効であると思っている。この考え方は、Dixon が提唱している基礎的言語理論 (basic linguistic theory) を用いた記述という考え方に共通する (Dixon 1997 を参照)。言語の記述研究に携わっている研究者の多くは、理論を用いて記述をしているという意識を持っていない。しかし、例えば「語」とか「節」というような基礎的な概念を用いずに言語の記述をする研究者はいないし、どの研究者もこのような術語について共通する何らかの理論的認識を持っている。だとしたら、理論を用いずに言語の記述を行っていると考えている研究者も、実は理論に基づいて研究を行っているこ

とになる。基礎的言語理論とは、基礎的な言語学的概念に理論的価値を見出し、基礎的な概念を主として用いつつ言語現象を一般化しようとする考え方である。

ポー・カレン語の記述に関する先行研究

ポー・カレン語の文法を簡単に概観したものには、Duffin (1913) や Purser and Saya Tun Aung (1922) がある。しかし、先ほど述べたように、これらは厳密性に乏しく、また、東西の方言の特徴を混在させてしまっているという点で大きな問題がある。Kato (2003a) は、パアン方言の文法を簡単にまとめたものである。

ポー・カレン語の音声について記述したものとしては、Jones (1961) がある。この本は、カレン系諸言語を比較言語学的立場から研究したもので、ポー・カレン語に関しては、パテイン方言 (Bassein dialect) とモールメイン方言 (Moulmein dialect) を扱っている。しかし、記述の部分ではスゴー・カレン語にページ数を大きく割いており、ポー・カレン語についてはごく簡単にしか述べていない。また、音素の設定の仕方が比較に便利なようになされており、共時的な研究としては少々問題がある。Cooke et al. (1976) はタイ北部 Hot district の音素体系を、Kato (1995) はビルマ側の三つの方言の音素体系を、Phillips (1996,2000) はタイ西部の方言の音素体系を、それぞれ記述している。Cooke et al. (1976) と Phillips (1996,2000) を Jones (1961) や Kato (1995) と比べてみると、ビルマ側の方言とタイ側の方言の差異がうかがえて興味深い。

ポー・カレン語の個々の文法現象についての研究は、筆者のものを除くと皆無と言ってもよい。加藤 (1998) はパアン方言の動詞連続についての記述、Kato (1999) はパアン方言の使役構文についての記述、加藤 (2001a) はパアン方言の関係節についての記述である。

ポー・カレン語の文字について扱ったものとしては、人類学者 Stern によるものがある (Stern 1968)。キリスト教ポー・カレン文字、仏教ポー・カレン文字、レーケー文字と発音の対応について述べているが、音声の扱いが粗雑で言語研究用には利用できない。Phon Myint (1975) は、1851 年から 1970 年の間に東部ポー・カレン語で書かれてた文書 (主として仏教文書) に解題を付けたものである。著者はビルマ人 (ビルマ族) であるが、貝葉を丹念に集めてポー・カレン語を読み込んでおり、実証的な研究として高く評価できる。ポー・カレン語貝葉を扱った唯一の文献でもある。Cooke et al. (1976) は、タイ文字による Hot district の方言の表記法を提案している。加藤 (2001b,c) は、キリスト教ポー・カレン文字および仏教ポー・カレン文字の綴字法と発音との関係について述べたものである。キリスト教ポー・カレン文字については東部方言と西部方言の両方の読み方を対照して示している。

本論文の構成

本論文は、全 32 章から成る。これを第 I 部から第 IX 部に分ける。

第 I 部「序論」(第 1 章から第 4 章) では、本論文での議論を展開するにあたっての基本的な事項の説明や定義を行う。まず第 1 章では、本論文で扱うポー・カレン語の系統的位置づけや話者の置かれた社会状況などについて概説する。第 2 章では、ポー・カレン語の音素体系を記述する。第 3 章では、本論文で用いる品詞分類と分類の基準を示す。第 4 章

では、ポー・カレン語の基本的語順を示し、さらに、本論文で用いる様々な概念の定義を行う。

第 II 部「形態論」(第 5 章から第 7 章) では、形態論レベルの現象を記述する。ポー・カレン語における形態論的現象には、接辞による派生、複合、繰り返し (reduplication) による派生がある。第 5 章では接辞による派生を、第 6 章では複合を、第 7 章では繰り返しによる派生を扱う。

第 III 部「名詞に関連する諸問題」(第 8 章から第 14 章) では、名詞や名詞句に関連する文法現象についての議論、あるいは、名詞句に付く助詞の記述を行う。第 8 章では、名詞句の構造を記述する。第 9 章では、名詞の下位範疇の一つである代名詞について論じ、第 10 章では、やはり名詞の下位範疇の一つである数詞および助数名詞について論じる。第 11 章では、様々な側置助詞を記述する。側置助詞というのは、他の言語のいわゆる前置詞や後置詞に相当する助詞である。続く、第 12 章と第 13 章では、側置名詞および場所名詞という名詞の下位範疇を取り上げて記述する。これらは、品詞としては名詞に属するが、側置助詞と共通する特徴も持ち合わせている。第 14 章では、様々な名詞修飾助詞を記述する。

第 IV 部「動詞に関連する諸問題」(第 15 章から第 18 章) では、動詞や動詞句に関連する文法現象についての議論、あるいは、動詞に付く助詞の記述を行う。第 15 章では、本論文で用いる動詞の分類方法およびその分類基準を示す。第 16 章では、動詞句という単位の定義を行い、動詞句という単位を設定する理由を述べる。第 17 章では、この言語の動詞連続の定義を行い、二つのタイプの動詞連続を記述する。第 18 章では、動詞に付く助詞である動詞助詞の記述を行う。

第 V 部「副詞と感嘆詞」(第 19 章から第 20 章) では、名詞と動詞以外の自由形式すなわち副詞と感嘆詞を扱う。第 19 章では副詞を、第 20 章では感嘆詞を扱う。

第 VI 部「従属節に関連する諸問題」(第 21 章から第 23 章) では、従属節に関連する諸問題を扱う。第 21 章では、様々な従属節助詞を記述する。第 22 章では、補語として機能する従属節を補文と定義し、様々な補文を見ていく。第 23 章では、関係節を定義し、三つのタイプの関係節のテキストにおける現れを観察する。

第 VII 部「その他の助詞」(第 24 章から第 26 章) では、それまでの章で扱うことのできなかった助詞についての記述を行う。第 24 章では副助詞の記述を、第 25 章では文助詞の記述を、第 26 章では一般助詞の記述を、それぞれ行う。

第 VIII 部「その他の重要な文法現象」(第 27 章から第 29 章) では、第 VII 部までで扱わなかった重要な文法現象を見る。第 27 章では、「疑問語」を定義し、どのような疑問語があるかを概観する。第 28 章では、二つのタイプの使役構文を定義し、それぞれを記述する。第 29 章では、類似要素反復という現象を記述する。

最後の第 IX 部「付録」(第 30 章から第 32 章) は参考資料である。第 30 章は、本論文の分析に用いた様々な資料のリストである。第 31 章には、第 30 章に示した資料の中から、パアン方言の昔話 4 篇を選んで挙げてある。第 32 章は、東部方言と西部方言の対照基礎語彙集である。

この論文全体の構成は、Kato (2003a) を大きくふくらませたものである。また、各章のうち、第 2 章「音論」は Kato (1995)、第 17 章「動詞連続」は加藤 (1998)、第 23 章「関係節」は加藤 (2001a)、第 28 章「使役構文」は Kato (1999)、第 32 章「語彙」は加藤 (2002)

にそれぞれ基づいている。ただし、これらはすべて大幅に加筆修正をほどこしてある。

研究の経緯

1992年10月から1995年3月まで、筆者は文部省アジア諸国等派遣留学生として(1992.10-1994.9)、および私費留学生として(1994.10-1995.3)、ビルマ(ミャンマー)連邦ヤンゴン市の国立外国語学院に留学した。1987年からスゴー・カレン語の調査を日本で始めた筆者は、スゴー・カレン語の研究を深めることを第一の目的としてヤンゴンに向かった。しかし、留学当初の1992年12月に、スゴー・カレンの友人に招かれてヤンゴンで開かれたカレンの新年祭を見、そこで初めてポー・カレンの伝統芸能に触れ、また、ポー・カレン語にカレン人自身が作った文字があることを知った。このときポー・カレン語に対する学問的関心が生じ、ポー・カレン語の研究を始めることにした。

調査協力者を探すのに手間取ったため、ポー・カレン語の調査を開始することができたのは1993年4月だった。最初に手をつけたのは西部方言だった。ポー・カレンの伝統芸能が発達していて、また、カレン独自の文字が作られたのは、東部方言が話されている地域であるが、93年当時は外国人のカレン州への入域が許可されておらず、また、西部方言の話者がヤンゴンに多かったこともあり、まずは西部方言を研究対象として選んだ。93年5月ごろ、西部方言の先生として来てもらっていた、チョウンビョー(Kyonbyaw)出身の元看護士の女性デリアウィン(Dahlia Win)さんが、自分を家事手伝いとして雇ってもらえないかと提案してきた。毎日ポー・カレン語に触れられるという魅力的な環境と、当時のレートで一月五千円以下という安い賃金に惹かれ、提案を受け入れることにした。その後二年近く西部方言の勉強が継続できたのはこのデリアウィンさんのおかげである。

94年の始め頃、パアンの治安が良くなってきたので外国人も入れるのではないかという噂を聞きつけ、ターマニャ山参詣という名目で、カレン州旅行の申請を出してみた。ターマニャ山というのは、ターマニャ山僧正(Thamanya Shayadaw)が暮らすカレン州パアン郊外の小さな山である。僧正は2003年暮れに亡くなるまで、ビルマ中の信仰を集め続けた。百パーセント却下されるだろうという大方の予想に反して、思いがけず教育省から旅行許可が下りた。そこで94年4月、五日間の日程でパアン市を旅行し、東部方言の簡単な調査を行い、貝葉が保存されている僧院などを見てまわった。このとき、仏教徒ポー・カレンの育んできた豊かな文化に触れ、どうしても東部方言を本格的に研究したいという気持ちが湧き起こった。

ヤンゴンに帰ってからさっそく、東部方言を教えてくれる人を探し始めたが、なかなか見つからなかった。雨期も本格化した94年6月ごろ、やっと知り合いのつてでパアン市出身の獣医師兼旅行ガイドの男性ソー・フラチッ(Saw Hla Chit)さんを紹介してもらうことができた。ソー・フラチッさんから集中的に東部方言を学んだが、9月に予定していた日本帰国が刻々と迫っていた。最終的には留学期間を半年間延長できたものの、途中、病床に伏した事情もあり、95年3月の帰国までに文法が書けるほどのデータを集めることはできなかった。

95年4月に大学院に復学したが、帰国後もまだ、自分の研究の中心を西部方言にするか東部方言にするか決められないでいた。データとしては西部方言のデータのほうが揃っていたけれども、希望としては東部方言を中心に据えたかった。それに踏み切れなかったの

は、カレン州への入域が制限されていて、東部方言の調査がしにくいということだった。ヤンゴンでも、ソー・フラチッさん以外、細かい文法調査に耐えうるほど勘の良い母語話者が見つからなかった。

その後状況が一変したのは、タイ側の町で東部方言の調査が可能かもしれないという情報を得たからである。そこで 95 年暮れから 96 年始めにかけて、タイのビルマ国境の町、メーソット (Maesot) に行ってみた。メーソット郊外にはカレン人の難民キャンプ、ホエカローク (Huaikalok) 難民キャンプがあり、住民の半数以上が東部ポー・カレン人である。初めて行ったときに驚いたのは、パアンよりも難民キャンプのほうが生き生きとしたポー・カレン語が聞けるということだった。例えば、パアンの店や市場での買い物にはビルマ語が使われることが多い。しかし、難民キャンプの中にある雑貨店では、徹底してポー・カレン語が使われている。ポー・カレン語による買い物のやり取りを聞いたのはこのときが初めてだった。この調査旅行で東部方言の本格的な調査が可能だという確信が得られ、その後の研究においては東部方言を中心に据えることを決意した。

それからは、東部方言を調査するための環境は徐々に良くなっていった。97 年頃からはパアンまでなら旅行者が無許可でカレン州に入域できるようになった。時を同じくして、AA 研の新谷忠彦教授のプロジェクトに参加させてもらい、97 年 (1-2 月)、98 年 (2-3 月)、99 年 (2-3 月) と、96 年の調査から数えれば四年連続でメーソットまたはパアンで調査することができた。その後、2000 年 (11 月) にはパアンで、2001 年 (2-3 月) にはヤンゴンで追加調査を行った。

本論文の執筆に着手したのは、98 年の半ばごろである。結局、完成までに 6 年かかってしまった。今後も調査を続行し、新しい言語事実が見つかればその都度、改訂を続けようと考えている。

最近、新谷忠彦教授の調査によって、いくつもの新しいカレン系言語の存在が知られるようになった (Shintani 2003a,b,c 参照)。今後は、ポー・カレン語の研究と並行して、このような新発見の言語を含む別のカレン系言語の文法を同じように調査・研究してみたいと考えている。

謝辞

本論文を書くにあたっては、実に様々な方々にお世話になった。

まず、東京大学大学院在学中に指導教官として直接ご指導をいただいた土田滋先生と湯川恭敏先生に心から厚くお礼を申し上げたい。また、同大学の上野善道先生、熊本裕先生、角田太作先生、松村一登先生、菊地康人先生、福井玲先生からは、筆者の研究発表に対して様々な言語研究の視点からご意見をいただいた。土田先生と湯川先生をはじめとして、東京大学の先生方には、言語現象を謙虚に観察することの大切さを教わった。坂本恭章先生、坂本比奈子先生、新谷忠彦先生、武内紹人先生、長野泰彦先生、西義郎先生、三谷恭之先生、藪司郎先生からは、東南アジアやチベット・ビルマ諸言語の専門家としての立場から様々なご意見をいただいた。このうち三谷先生は、筆者が東京外国語大学在学中に最初にカレン語の研究を勧めてくださった。また、長野先生と藪先生には職場の同僚としても研究に多大なご協力をいただいた。他に、様々な学会や研究会で本論文の内容に直接かかわる貴重なご意見をくださった方々として、沈力、澤田英夫、塩原朝子、中山俊秀、笹

間史子、峰岸真琴、野島本泰、蝦名大助、佐々木惣平、阿部優子、長田俊樹、花園悟、遠藤光暁、月田尚美、風間伸次郎、江畑冬生、星泉、宇佐美洋、高橋慶治、鈴木玲子、Randy J. LaPolla、Graham Thurgood、Audra Phillips 各氏 (順不同) のお名前を挙げておきたい。これ以外の方々からも様々な場で様々なご意見を頂戴している。研究面に関して、以上の方々に厚く感謝の意を表したい。

それから、ポー・カレン語の研究そのものを可能にしてくれたポー・カレンの友人達に感謝の意を表したい。まず、筆者に最初にポー・カレン語を教えてくれた西部方言話者の Violet Kyaw さんと Dahlia Win さん。それから、10 年近くにわたって筆者に東部方言を教えてくれている Saw Hla Chit さん。東部方言に関しては、Saw Hla Chit さん以外に、Saw Thurein、U Sandawara、Saw Htalon、U Pyinnyathami に教えを乞うてきた。その他にも、筆者の Hpa-an あるいは Mae Sot 滞在中に、生活の様々な場面でポー・カレン語を教えてくれた何十人もの人々がいる。彼らがいなければこの研究は成り立たなかった。心から厚くお礼を申し上げたい。

なお、これまでの調査は、財団法人三菱信託山室記念奨学財団、および、文部省 (文部科学省) の国際学術研究「シャン文化圏における言語学的・文化人類学的調査」(研究代表者新谷忠彦)、「中国・東南アジア大陸部の国境地域における諸民族文化の動態に関する人類学的調査研究」(研究代表者塚田誠之) の助成によって可能になった。

ポー・カレン語の表記に関する注意事項および略号など

例文番号は、章ごとに (1) からカウントしなおす。

分かち書きは、基本的に単語ごとに行う。ただし、表記上の煩雑さを避けるために、この原則を破り、複数の単語を分かたずに表記することもある。逆に、単語の内部構造に言及する場合は、形態素ごとに分かち書きする場合がある。

グロスは、基本的に分かち書きのひとまとまりごとに付す。ただし、助詞についての説明を行っている箇所で、その助詞が節の見出しになっている場合は、一貫して当該の助詞にグロスを付さない。グロスを付すことがかえって議論の妨げになる場合があるからである。側置名詞などの助詞に似た働きを示す一群の語についても同様。

例文の和訳に付した (V-04.86) などの番号は、筆者の手持ちの資料における整理番号である。これについては第 30 章を参照されたい。なお、例文によっては、読みやすくするために適格性に問題の生じない範囲で一部を改変したものもある。

ポー・カレン語の例文に付す様々な略号などの一覧を下に掲げる。

• 単語ごとに付すもの

以下は代名詞に付す略号である。

1sg, 2sg, 3sg	単数人称代名詞第一形 (主に主語形・所有形として使われる)
1SG, 2SG, 3SG	単数人称代名詞第二形 (主に目的語形として使われる)
1se, 2se, 3se	単数人称代名詞強勢形
1pl, 2pl, 3pl	複数人称代名詞第一形 (主に主語形・所有形として使われる)
1PL, 2PL, 3PL	複数人称代名詞第二形 (主に目的語形として使われる)
1pe, 2pe, 3pe	複数人称代名詞強勢形
CHə	不特定のものを指す代名詞

次に挙げるのは、日本語の逐語訳を付けにくい単語に付す略号である。漢字を用いたものは音読み順に並べてある。

(のだ): 日本語の「(～する) のだ」に似た意を表す副助詞 nɔ́ に付す。これを付したからといって、その文が常に日本語の「のだ」を用いて訳せるわけではない。; **BO** : 文助詞の bò に付す。 **CHAI** : 文助詞の chài に付す。; **DU** : 文助詞の dɯ̀ に付す。; **JA** : 文助詞の jā に付す。; **JABO** : 文助詞の jābò に付す。; **KANE** : 文助詞の kənɛ̂ に付す。; **NE** : 文助詞の nɛ̂ あるいは一般助詞の nɛ̂ に付す。; **XO** : 文助詞の xɔ̄ に付す。; **(意外)**: 意外性を表す動詞助詞 kràɴ に付す。; **(詠嘆)**: 詠嘆を表す動詞助詞 dáchəθà などに付す。; **(遠隔)**: 遠方から行う動作を表す動詞助詞 cò に付す。; **(婉曲)**: 婉曲、断定の回避を表す副助詞 chī に付す。; **(遠方)**: 距離の遠さを表す名詞修飾助詞 ʔò に付す。; **(引寄)**: 対象物を引き寄せることあるいは携帯することを表す動詞助詞 nī に付す。; **(皆)**: 複数性を表す動詞助詞 chɔ̀ɴ, kóɴ, ɕòɴ などに付す。; **(過去)**: 過去の時点を表す名詞修飾助詞 dáʔò に付す。; **(下方)**: 下方向への移動を表す動詞助詞 làɴ に付す。; **(外方)**: 外方向への移動を表す動詞助詞 tháɴ に付す。; **(学習)**: 動詞の表す動作によって学ぶことまたは教えることを表す動詞助詞 lɔ́ に付す。; **(完)**: 完了 (perfect) を表す副助詞 jàʊ に付す。; **(関)**: 関係節を導く従属節助詞 lé に付す。; **(願望)**: 願望、希望を表す動詞助詞 lā に付す。; **(完成)**: 事態の末端への到着を表す動詞助詞 tháɴ に付す。; **(疑)**: 疑問。文助詞 ʁâ, lɛ̂ に付す。また、補文を導く ʁâ, lɛ̂ にもこれを付す。; **(基準)**: 判断の基準点を表す動詞助詞 bá, nī に付す。; **(帰的)**: 再帰的な動作を表す動詞助詞 làɴ に付す。; **(逆)**: 逆向きの動作を表す動詞助詞 kədà に付す。; **(逆接)**: 逆接を表す従属節助詞 lānâɴ などに付す。; **(共)**: 道具、共同参加者、随伴者、相互的な状況の相手などを表す側置助詞 dè に付す。; **(強意)**: 強意、強調を表す動詞助詞 wê や wêdá に付す。; **(驚愕)**: 驚愕を表す動詞助詞 ɕàʊ に付す。; **(強調)**: 強調を表す名詞修飾助詞 lé に付す。; **(禁止)**: 禁止を表す副助詞 ləxì に付す。; **(近傍)**: 距離の近さを表す名詞修飾助詞 jò に付す。; **(繋)**: コピュラ動詞 mwɛ̄ に付す。; **(継起)**: 「～して (...する)」意。従属節助詞 ɣòɴ や θɛ̀ɣòɴ に付す。; **(経験)**: 経験を表す動詞助詞 bá に付す。; **(傾向)**: 傾向を表す動詞助詞 kràɴ に付す。; **(元位)**: 元の位置への移動を表す動詞助詞 thàiɴ に付す。; **(限界)**: 事象が存続する限界となる時点を表す従属節助詞 thòɴ に付す。; **(限定)**: 限定を表す動詞助詞 dá や、名詞修飾助詞 kəjɛ̄, kənī などに付す。; **(再帰)**: 再帰を表す動詞助詞 θà に付

す。; **(最上)**: 「最も ～ な」の意を表す動詞助詞 tháʊ に付す。; **(催促)**: 催促を表す動詞助詞 bá に付す。; **(再度)**: 繰り返しを表す動詞助詞 thàiɴ に付す。; **(使役)**: 使役を表す動詞助詞 dà や mà などに付す。; **(試行)**: 試行を表す動詞助詞 jʊ̄ に付す。; **(自然)**: 自然な成り行きを表す動詞助詞 mèiɴ に付す。; **(執拗)**: 執拗さを表す動詞助詞 nī に付す。; **(自発)**: 自発を表す動詞助詞 θà に付す。; **(条件)**: 条件や仮定を表す従属節助詞 ʔè あるいは càibò に付す。ʔè と共に現れる bò や càibò には(条件') を付す。; **(常時)**: 常時性を表す動詞助詞 thâɴ に付す。; **(少数)**: 少数を漠然と表す名詞修飾助詞 nāɴ に付す。; **(将来)**: 発話時点より後を表す一般助詞 khó に付す。; **(上方)**: 上方向への移動を表す動詞助詞 tháɴ に付す。; **(新局)**: 新しい局面を表す動詞助詞 θâ に付す。; **(人名)**: 人の名前に付す。; **(先行)**: 「先に ～ する」意を表す動詞助詞 wī に付す。; **(前提)**: 前提となる事象を表す、nɔ́ や tā を始めとする従属節助詞に付す。; **(専念)**: 専念を表す動詞助詞 pjáʊ に付す。; **(相互)**: 相互的な動作を表す動詞助詞 lóθà に付す。; **(題)**: 主題を表す一般助詞 nɔ́ や jò などに付す。; **(代行)**: 代行を表す動詞助詞 khè に付す。; **(対比)**: 対比、対照を表す一般助詞 khɔ̂ に付す。; **(断定)**: 断定を表す副助詞 lɔ̂ や tàlɔ̂ などに付す。; **(地名)**: 地名に付す。; **(追加)**: 異なる事象が累加的に生起することを表す動詞助詞 thàiɴ に付す。; **(提示)**: 提示を表す動詞助詞 pjà に付す。; **(徹底)**: 徹底して行うことを表す動詞助詞 khwái に付す。; **(当為)**: 当為、義務を表す動詞助詞 bá に付す。; **(努力)**: 努力を表す動詞助詞 nī に付す。; **(内方)**: 内方向への移動を表す動詞助詞 làɴ に付す。; **(内密)**: 内密を表す動詞助詞 θʊ́ʊ́ に付す。; **(任意)**: 任意性を表す従属節助詞 ɣì に付す。; **(場)**: 場所・起点・着点、または時間を表す側置助詞 lé あるいは thōɴ に付す。; **(否)**: 否定を表す動詞助詞 lə- あるいは 副助詞 ʔé に付す。(否') は、lə- と共に現れる bá(wá) に付す。; **(裨益)**: 裨益を表す動詞助詞 phí に付す。; **(非常)**: 程度の甚だしさを表す副詞 châ や、副助詞 mā などに付す。; **(備え)**: 何らかの事態に備えて結果を保持することを表す動詞助詞 wè に付す。; **(比較)**: 比較を表す動詞助詞 dá や náiɴ に付す。; **(非現)**: 非現実法を表す動詞助詞 mə- に付す。; **(比定)**: 「～ のように」の意を表す側置助詞 bê(θò) ... θò の bê(θò) に付す。なお、θò に(比定') を付す。; **(複)**: 複数を表す名詞修飾助詞に付す。; **(不抗)**: 不可抗力的な状況「～ することになる」を表す動詞助詞 bá に付す。; **(別個)**: 別個の物や事象を表す一般助詞 dɔ̀ に付す。; **(変化)**: 状態の変化を表す動詞助詞 tháɴ または làɴ に付す。; **(返答)**: 動作が何かに対する返答であることを表す動詞助詞 thàiɴ に付す。; **(補)**: 補文を表す従属節助詞 lé あるいは dè に付す。; **(保持)**: 結果の保持を表す動詞助詞 thá に付す。; **(毎)**: 「すべての ～」を表す抽象数詞 kò ... dè の kò に付す。dè には(毎') を付す。; **(未来)**: 未来の時点を表す一般助詞 khó に付す。; **(無意)**: 無意志的に行う動作を表す動詞助詞 bá に付す。; **(無根)**: 根拠のなさを表す動詞助詞 kràɴ に付す。; **(無信)**: 信念や確信のなさを表す動詞助詞 ɕàʊ に付す。; **(目的)**: 目的を表す従属節助詞 bê ... θò の bê に付す。θò には(目的') を付す。; **(模倣)**: 模倣を表す動詞助詞 dòɴ に付す。; **(遊び)**: 「遊び」で行うことを表す動詞助

詞 kwè に付す。; **(欲求)**: 欲求を表す動詞助詞 báθà に付す; **(理由)**: 理由を表す従属節助詞 ʔəkhʊ́còɴ, dè などに付す; **(臨場)**: 事態の発生の生き生きとした描写を表す副助詞 phɔ̄ に付す。; **(類似)**: 「～も」の意を表す一般助詞 θí に付す。; **(列挙)**: 列挙を表す名詞修飾助詞 dè に付す。;

• 文の構造やイントネーションに関わるもの

以下は必要な場合にのみ付す。

|	節の境界。なお、従属節を導入する助詞そのものは、厳密に考えると主節の要素だと考えられるが、見やすさを優先して、そのような助詞も従属節側の要素であるかのような表記を行う。
↩	これ以降が付け足し (afterthought) であることを表す
< >	統語構造に直接関わらない感嘆詞などの要素
$[_R$]	関係節
$[_C$]	補文
⊂ ⊃ ⊂ ⊃	類似要素反復
△	倒置された主語
[ ](v1)	連結型動詞連続を構成する最初の動詞複合体
[ ](v2)	連結型動詞連続を構成する二番目の動詞複合体
[ ](V1)	分離型動詞連続を構成する最初の動詞複合体
[ ](V2)	分離型動詞連続を構成する二番目の動詞複合体
(⤊)	急激な上昇調
(↗)	緩慢な上昇調

• その他

▹ 各例文に関する注意事項をこの記号の後に示す。

目 次

はじめに **i**
本論文の位置づけ i
ポー・カレン語の記述に関する先行研究 ii
本論文の構成 ii
研究の経緯 iv
謝辞 v
ポー・カレン語の表記に関する注意事項および略号など vi

第 I 部　序論 **1**

第 1 章　ポー・カレン語について **3**
1.1 本論文で扱う方言とポー・カレン語の概況 3
1.2 通時的観点から見たカレン系諸言語 7
1.3 ポー・カレン語の文字 10

第 2 章　音論 **15**
2.1 音節構造 15
2.2 子音音素 15
2.3 子音結合 17
2.4 母音と韻母 18
2.4.1 開音節韻母 18
2.4.2 閉音節韻母 20
2.5 声調 21
2.6 軽声音節 22
2.7 イントネーション 23
2.7.1 穏やかな上昇調イントネーション 24
断定を表す副助詞 lɔ̀ の前 24
完了を表す副助詞 jàʊ の前 24
確認の意を込めた応答の文において 25
2.7.2 急激な上昇調イントネーション 25
2.8 本論文の表記 26

第 3 章　品詞分類 **27**
3.1 五つの品詞 27
3.2 助詞の分類 29

第 4 章　基本語順および本論文での記述に用いる様々な基本的概念 **31**
4.1 基本語順 31
4.1.1 動詞と項 31
主語の倒置 32
4.1.2 動詞と副詞 33
4.1.3 名詞と関係節 33
4.1.4 名詞と名詞 34
4.1.5 動詞と動詞助詞 35
4.1.6 動詞と否定を表す助詞 35
4.1.7 名詞と側置助詞 35
4.1.8 主節と副詞節 36
4.1.9 疑問を表す文の作り方 36
4.2 主語と目的語と斜格補語 37
4.2.1 主語 37
4.2.2 目的語 40
4.2.3 斜格補語 43
4.3 述部と述語 44
4.4 主題化および分裂文 46
4.4.1 補語 (側置助詞句を含む) 46
4.4.2 分離型動詞連続の「主語 +V1 動詞句」 48
4.4.3 従属節 48
4.4.4 補語あるいは副詞以外の部分: 分裂文 48
4.5 意味役割 50
4.6 文の分類 51
4.7 態について 52
4.8 時制について 53
4.9 所有を表す文について 54

第 II 部　形態論 **55**

第 5 章　接辞 **57**
5.1 ʔə- 58
5.2 nʊ́- 60
5.3 pə- 60
5.4 ʔè- 60
5.5 phà- 60
5.6 phɔ̄- 61

5.7 làɴ- 61
5.8 thə̂ɴ- 61
5.9 -phǒ 61
5.9.1 指小辞的に 62
5.9.2 構成員 62
5.10 -lé 62

第 6 章 複合 **63**
6.1 複合名詞 63
6.1.1 「名詞」＋「名詞」の構成を持つもの 64
後部要素が主要部になっているもの 65
前部要素が主要部になっているもの 70
両要素とも主要部であると考えられるもの 71
6.1.2 「名詞」+「動詞文として成立可能な要素」の構成を持つもの . . . 72
主語 72
目的語 74
斜格補語 74
非節内要素 75
「名詞」+「動詞文として成立可能な要素」の構成を持つものについての補足 76
6.1.3 「動詞文として成立可能な要素」+「名詞」の構成を持つもの . . . 77
主語 77
斜格補語 78
非節内要素 78
6.1.4 「動詞文として成立可能な要素」+「動詞文として成立可能な要素」の構成を持つもの 79
6.2 複合動詞 79
6.2.1 「名詞」+「動詞」の構成を持つもの 79
6.2.2 「動詞」+「名詞」の構成を持つもの 80
6.2.3 「動詞」+「動詞」の構成を持つもの 81
6.3 その他の複合語 82

第 7 章 繰り返し **83**
7.1 動詞の繰り返し 83
7.1.1 AA 型 83
7.1.2 ABAB 型 83
7.1.3 AABB 型 83
7.2 助数名詞の繰り返し 85
7.2.1 lə- AA 85
7.2.2 ʔə- AA 86
7.3 補足:動詞の繰り返しについて 86

第 III 部　名詞に関連する諸問題 **89**

第 8 章　名詞句 **91**

第 9 章　代名詞 **95**

9.1 第一形 96
9.1.1 主語として 96
9.1.2 名詞の前 97
9.2 第二形 98
9.2.1 目的語として 98
9.2.2 側置助詞と共に 98
9.2.3 主題として 99
9.2.4 助数名詞句の前 99
9.2.5 その他 100
9.3 強勢形 100
補足: 102
9.4 代名詞化 (pronominalization) は存在するか? 102
9.5 chà 104
9.5.1 chà の第一形と第二形 104
主語として 104
名詞修飾助詞 jò, nɔ́, ʔò の前 104
側置助詞句の前 105
名詞 (助数名詞句を含む) の前 105
関係節の前 105
9.5.2 chà の第二形 105
目的語として 105
他の代名詞の後 106
関係節の後 106
9.5.3 chà の表すもの 106
人間を含む生物を表す例 106
無生物を表す例 106
生物を表しているのか無生物を表しているのか不明な例 . . . 107
事象を表す例 107
9.5.4 修飾語を伴わない chà の様々な用法 107
9.5.4.1 特定できない行為者や被動者などを表す 107
9.5.4.2 特定できる行為者や被動者などを表す 109
9.5.4.3 感情や生理現象の経験者を表す 110
9.5.4.4 自然現象 110
9.5.5 語彙化 111

第 10 章 数詞と助数名詞 **113**
10.1 具体数詞 113
10.2 助数名詞 115
10.2.1 主な助数名詞 116
10.2.2 名詞句と助数名詞句の順序 118
10.2.3 補語に対応する助数名詞句——いわゆる数量詞遊離 119
10.2.4 補足 121
10.3 抽象数詞 122
10.3.1 nāɴ 122
10.3.2 kò ... dè 124
10.3.3 kò ... dèmèiɴká 125
10.3.4 thònɴ ... θâ 126
10.3.5 xwē 126
10.3.6 khɔ̀khɔ̂ 127

第 11 章 側置助詞 **129**
11.1 lé (lɔ́, lə- , lʉ́) 129
11.1.1 空間を表す場合 129
11.1.2 時間を表す場合 131
11.2 thònɴ 132
11.2.1 空間を表す場合 132
11.2.2 時間を表す場合 133
11.3 dè 134
11.3.1 道具・手段 134
11.3.2 随伴者・付帯物 134
所有表現 ʔɔ́ dè (be with) 135
11.3.3 相互的な状況の相手 136
11.3.4 様態 136
11.3.5 「目的語」に付く dè 137
11.4 bê ... θò 137
11.5 nî 140
11.6 xwè 140
11.7 báchâiɴ 141
11.8 təkhɔ̂lé (khɔ̀khɔ̂lé) 141
11.9 phɔ̄ 142

第 12 章 側置名詞 **145**
12.1 ʔəɣāɴ 146
12.2 ʔəcòɴ 149
12.3 ʔəʔɔ́ 150
授受を表す文において受領者を表す名詞句に付く 151
所有者を表す名詞句に付く 152

第 13 章 場所名詞 **153**
13.1 ʔəphânkhʉ́ 154
「感情の向かう対象」を表す ʔəphânkhʉ́ 154
13.2 ʔəphânlá 157
13.3 ʔəlá 157
13.4 ʔəphàn 158
13.5 ʔəkhlôʊn 158
13.6 ʔəlòn 159
13.7 ʔəméjâ 159
13.8 ʔəkhâin 160
13.9 ʔəlānkhâin 160
13.10 ʔəklà 160
13.11 ʔəkhánthài 161
13.12 ʔəthài 161
13.13 ʔəkhʉ́dà 162
13.14 ʔəkhʉ́thò 162
13.15 ʔənàin 163
13.16 ʔəxònnàin 163

第 14 章 名詞修飾助詞 **165**
14.1 chəlé 165
14.2 lé 165
14.3 chàmwɛ̄ 166
14.4 kənī 167
14.5 kəjɛ̄ 168
14.6 láʊdè 169
14.7 dè 170
14.8 指示の働きをする jò, nɔ́, ʔò 170
14.8.1 jò 171
14.8.2 nɔ́ 172
14.8.3 ʔò 173
14.8.4 名詞化された形 ʔəjò, ʔənɔ́, ʔəʔò 174
14.9 dáʔò 175
14.10 jàʊ 176
14.11 複数を表す ləphá, θí, θɛ̀ 176
14.11.1 ləphá 177
14.11.2 θí 178
14.11.3 θɛ̀ 178
14.11.4 その他の複数を表す助詞 180
14.11.4.1 θíləphá 180
14.11.4.2 θɛ̀ləphá 181
14.12 láʊ 181

14.13xāɴ 182
14.14ɣì 183
14.15呼びかけを表す助詞 183
ʁē 183
ʁà 184
chài 184

第 IV 部　動詞に関連する諸問題 185

第 15 章 動詞の分類 187
15.1 「意志動詞 (volitional verb)」対「無意志動詞 (unvolitional verb)」 187
15.2 「動態動詞 (active verb)」対「状態動詞 (stative verb)」 190
15.3 「自動詞 (intransitive verb)」対「他動詞 (transitive verb)」 192
15.3.1 動詞の自他に関する補足 194
(1) 自他の対応 194
(2) いわゆる ‘locative alternation’ を起こす動詞 195
15.4 動詞の実例 196
15.5 三つの動詞分類の関係 199

第 16 章 動詞句 201
16.1 分離型動詞連続の単位になる 201
16.2 一部の動詞の目的語になる 202
16.2.1 動詞句を目的語として取ることのできる動詞 202
ʔánkèiɴ 202
θànánɴ 203
báθà 203
thōʊɴ 204
16.2.2 動詞句が目的語として現れた文の統語的および意味的特徴 204
16.2.3 動詞句が主語として現れる可能性 205

第 17 章 動詞連続 207
17.1 ポー・カレン語の動詞連続の規定 207
17.2 動詞連続の分類 208
17.3 連結型 208
17.3.1 連結型動詞連続が表す事象間の関係 209
17.3.2 連結型における自動詞・他動詞の組み合わせ 211
17.3.3 連結型における主動詞 214
17.3.3.1 主語同一型の主動詞 214
17.3.3.2 主語非同一型の主動詞 219
17.3.3.3 連結型における主動詞のまとめ 222
17.3.4 連結型における動詞の配列規則 222
17.3.5 V2 事象の実現が含意されない動詞連続 228

17.3.6 3 個以上の動詞からなる連結型動詞連続 231
17.3.7 連結型動詞連続の形態統語論上の位置づけ 233
17.3.8 連結型動詞連続のまとめ 235
17.4 分離型 236
17.4.1 描写タイプ 239
17.4.1.1 V1 が表す事象の実現の含意 239
17.4.1.2 描写タイプの V2 の特徴 240
17.4.1.3 V2 の論理的主語が指示するもの 243
• 節の主語と同一指示の場合 243
• V1 の目的語と同一指示の場合 244
• V1 が表す事象の様態を指示する場合 246
17.4.2 可能タイプ 249
17.4.2.1 V2 の種類と意味的特徴 250
17.4.2.2 V2 の論理的主語が指示するもの 253
17.4.3 分離型動詞連続における主動詞について 254
17.4.4 3 個以上の動詞からなる分離型動詞連続 257
17.4.5 分離型動詞連続のまとめ 257
17.5 動詞連続と外見が類似する構造 257
17.5.1 動詞句が目的語として現れた場合 258
17.5.2 補文を表す助詞を伴わない補文が現れた場合 259
17.5.3 従属節助詞を伴わない副詞節が現れた場合 262
17.5.4 関係節を導く助詞を伴わない関係節が現れた場合 265
17.6 動詞連続と文法化 266
17.7 動詞連続の実例 267
• 連結型、「自動詞＋自動詞」の例 267
• 連結型、「自動詞＋他動詞」の例 269
• 連結型、「他動詞＋他動詞」の例 270
• 連結型、「他動詞＋自動詞」の例 271
• 分離型、描写タイプの例 273
• 分離型、可能タイプの例 274

第 18 章 動詞助詞 277

18.1 mə- ＜非現実＞ 277
18.2 lə- ＜否定 (従属節)＞ 281
18.3 bá ＜当為＞ 285
18.4 dà ＜使役＞ 286
18.5 mà ＜使役＞ 287
18.6 phílâɴ ＜使役＞ 288
18.7 kò ＜使役＞ 289
18.8 lɔ̀ ＜使役＞ 289
18.9 ɣɛ̂ ＜漸次的変化＞ 289
18.10lòɴ ＜無分別＞ 290

18.11ʔánɣɯ́ ＜違法、反道徳＞ 290
18.12tháɴ 291
18.12.1 tháɴ(1) ＜上方＞ 291
18.12.2 tháɴ(2) ＜状態の変化＞ 292
18.12.3 tháɴ(3) ＜外方向への移動＞ 294
18.12.4 tháɴ(4) ＜完成＞ 296
18.13làɴ 297
18.13.1 làɴ(1) ＜下方＞ 297
18.13.2 làɴ(2) ＜状態の変化＞ 299
18.13.3 làɴ(3) ＜内方向への移動＞ 299
18.13.4 làɴ(5) ＜再帰的な動作＞ 300
18.14thàiɴ 301
18.14.1 thàiɴ(1) ＜元の位置への移動＞ 301
18.14.2 thàiɴ(2) ＜繰り返し＞ 302
18.14.3 thàiɴ(3) ＜事象の追加＞ 302
18.14.4 thàiɴ(4) ＜返答、応酬＞ 304
18.15kədà ＜逆向き＞ 304
18.16lɯ́ ＜学習＞ 305
18.17dòɴ ＜模倣＞ 306
18.18kràɴ 307
18.18.1 kràɴ(1) ＜根拠のなさ＞ 307
18.18.2 kràɴ(2) ＜傾向＞ 308
18.18.3 kràɴ(3) ＜意外性＞ 308
18.19θâɴ ＜最前、最近＞ 308
18.20θɯ́ ＜内密＞ 309
18.21ɣɯ́ ＜違法、反道徳＞ 310
18.22cò ＜遠隔＞ 310
18.23lì ＜慣れ＞ 311
18.24jʊ̄ ＜試行＞ 312
18.25khwái ＜徹底＞ 313
18.26lā ＜願望＞ 315
18.27dáwê ＜願望＞ 320
18.28mèiɴ ＜自然な成り行き＞ 323
18.29θâ ＜新局面＞ 325
18.30plɔ̀ 326
18.30.1 plɔ̀(1) ＜無価値＞ 326
18.30.2 plɔ̀(2) ＜無料＞ 327
18.31ɕàʊ 327
18.31.1 ɕàʊ(1) ＜驚愕＞ 327
18.31.2 ɕàʊ(2) ＜信念のなさ＞ 328
18.32ɕòɴ ＜共同＞ 328

18.33kòʊɴ < 共同 > 329
18.34kóɴ < 共同 > 330
18.35xáʊ < 共同 > 330
18.36chɔ̀ɴ 330
18.36.1 chɔ̀ɴ(1) < 協力 > 330
18.36.2 chɔ̀ɴ(2) < 一斉 > 331
18.37thàʊ < 続行 > 332
18.38thâɴ < 常時 > 332
18.39pjáʊ < 専念 > 333
18.40wê < 強意 > 334
18.41wêdá < 強意 > 335
18.42tɛ̀ < 甚だしさ > 335
18.43mātɛ̀ < 甚だしさ > 336
18.44dáchəθà < 詠嘆 > 336
18.45chóɴ < 強制 > 337
18.46báθà < 欲求 > 338
18.47thá < 保持 > 339
18.48wɛ̀ < 備え > 340
18.49wī < 先行 > 341
18.50kwè < 遊び > 342
18.51mábá < 過誤 > 343
18.52bá 343
18.52.1 bá(1) < 無意志 > 343
18.52.2 bá(2) < 不可抗力 > 345
18.52.3 bá(3) < 経験 > 346
18.52.4 bá(4) < 判断の基準点の導入 > 347
18.52.5 bá(5) < 催促 > 348
18.53nī 348
18.53.1 nī(1) < 努力 > 348
18.53.2 nī(2) < 引き寄せ > 349
18.53.3 nī(3) < 執拗 > 351
18.53.4 nī(4) < 判断の基準点の導入 > 351
18.54khè < 代行 > 352
18.55phílâɴ < 裨益 > 353
18.56pjà < 提示 > 356
18.57dá 357
18.57.1 dá(1) < 限定 > 357
18.57.2 dá(2) < 比較 > 358
18.58náiɴ < 比較 > 359
18.59tháʊ < 最上 > 360
18.60θà 361

18.60.1 θà(1) ＜再帰＞ 361
18.60.2 θà(2) ＜自発＞ 363
18.61lóθà ＜相互行為＞ 364
18.62動詞助詞全体のまとめ 369

第 V 部　副詞と感嘆詞 **373**

第 19 章 副詞 **375**
19.1 動詞句の中に現れるもの 375
19.1.1 動詞からの派生による副詞 375
19.1.2 動詞からの派生によらない副詞 376
19.1.3 名詞を修飾する場合 379
19.2 文頭に現れるもの 379
19.2.1 文と文の文脈的な関係を表すもの 379
dè 379
lānânɴ 380
cānbò 380
ʔəkhʊ́còɴ 380
ʔèɣòɴ 381
thòɴnɔ́ 381
19.2.2 話者の心情を表すもの 381
kəbá 381
thəmjânūū 382
kəjāɴ 383
19.3 副詞的に使うことのできる名詞 383

第 20 章 感嘆詞 **385**

第 VI 部　従属節に関連する諸問題 **387**

第 21 章 従属節助詞 **389**
21.1 ʔè 389
21.2 càibò 391
21.3 ʔəkhʊ́còɴ 393
21.4 ɣòɴ 393
21.5 θɛ̀ɣòɴ 395
21.6 lānânɴ 396
21.7 bê ... θò 397
21.8 dè 398
21.8.1 dè(1) ＜理由＞ 398
21.8.2 dè(2) ＜即時性＞ 399

21.8.3 dè(3) ＜同時性＞ 400
21.9 thòɴ 400
21.10xwè 401
21.11dèiɴ 402
21.12ɣì 402
21.13xì 403
21.14kəlā 403
21.15khə̄ 404
21.16chə̀ɴchə̂ɴ 404
21.17nɔ́ 405
21.18tā 406
21.19nɔ́tā 406
21.20jò 406
21.21θí 406
21.22lé 407
21.23lé と dè 407
21.24ʁâ と lɛ̂ 407
21.25従属節助詞に似た働きをする名詞 408
21.25.1 ʔəkhâ 408
21.25.2 ʔəɣāɴ 409
21.26従属節助詞を伴わない副詞節 409

第 22 章 補文 **413**
22.1 主語相当の補文 413
22.2 目的語相当の補文 415
22.2.1 発話等を介した情報の授受に関する動詞 417
22.2.2 視覚に関する動詞 418
22.2.3 聴覚に関する動詞 419
22.2.4 思考に関する動詞 420
22.2.5 知識や記憶に関する動詞 421
22.2.6 喜び、好き嫌い、心配、恐れ、後悔などの様々な感情に関する動詞 422
22.2.7 使役を表す動詞 423
22.2.8 繋辞動詞 mwɛ̄ 424
22.2.9 現実法・非現実法の対立 425
22.3 斜格補語相当の補文 426
22.4 ʁâ や lɛ̂ の現れる補文 426
thîchà「確かな」 428
lɔ̀「話す, 物語る, 言う」 428
kətɔ̀「心配する」 428
θíjâ「知る」 428
22.5 目的語として補文を取る動詞の特殊なもの 429

第 23 章 関係節 **433**
23.1 ポー・カレン語の関係節の定義と種類 433
23.1.1 後置型 (postnominal type) 434
23.1.2 前置型 (prenominal type) 434
23.1.3 標識介在型 (marked type) 435
23.1.4 主要部内在型の関係節は存在するか? 436
23.2 調査と考察 437
23.2.1 関係節の使用の実態 437
23.2.2 後置型と前置型 442
主語の場合 442
非主語の場合 446
23.2.3 標識介在型 450
23.3 まとめ 451

第 VII 部　その他の助詞 **453**

第 24 章 副助詞 **455**
24.1 程度にかかわるもの 455
24.1.1 mā 455
24.1.2 kɨ̄ 456
24.1.3 pəθài 456
24.2 様態にかかわるもの 456
24.2.1 phɔ̄ 456
24.2.2 bjāɴ 457
24.2.3 pōʊɴ 458
24.2.4 tō 458
24.3 事象のアスペクト的把握にかかわるもの 459
24.3.1 dài 459
24.3.2 jàʊ 462
24.3.3 lənɴ 466
24.4 否定にかかわるもの 467
24.4.1 ʔé 467
24.4.2 ləxì 469
24.5 話し手の態度にかかわるもの 470
24.5.1 chū 470
24.5.2 lɔ̂ 472
24.5.3 dàlɔ̂ 473
24.5.4 bòlɔ̂ 474
24.5.5 nɔ́ 474

第 25 章 文助詞 **477**
25.1 ʁâ 477
25.2 lɛ̂ 478
25.2.1 lɛ̂ (1) 478
25.2.2 lɛ̂ (2) 480
25.3 nɛ̂ 481
25.4 kənɛ̂ 482
25.5 jā 482
25.6 jābò 483
25.7 xɔ̄ 484
25.8 bɔ́ 485
25.9 jɛ̄ 485
25.10kə̄ 486
25.11wê 486
25.12jāɴ 486
25.13dʉ̀ 486
25.14chə̀ 487
25.15nà 488
25.16bò 488
25.17mɨ̂ 489
25.18chài 489
25.19lāchài 490
25.20báʁɔ̂ 491
25.21lɔ̀wê 491
25.22dɛ́ 492

第 26 章 一般助詞 **493**
26.1 主題化された要素にしか付かないもの 493
26.1.1 nɔ́ 494
26.1.2 nɔ́ 以外の主題を表す一般助詞 496
jò 496
ʔò 497
tā 497
nɔ́tā 497
nɔ́ʔò 497
26.1.3 θí 497
26.1.4 khɔ̂ 500
26.1.5 má 502
26.1.6 thōɴ 503
26.1.7 ʁɔ̄ 503
26.1.8 nɛ̂ 504
26.2 主題化された要素以外にも付くもの 504

26.2.1 dɔ̀ 504
26.2.2 khó 506
26.3 一般助詞を用いた慣用表現 508

第 VIII 部　その他の重要な文法現象 509

第 27 章 疑問語 511
27.1 名詞に属するもの 511
27.1.1 chənɔ́ 511
27.1.2 pɔ̂ 512
27.1.3 pɔ̀wê 513
27.1.4 phlòʊɴ 513
27.1.5 khɔ̀khɔ̂ 513
27.1.6 xwē 513
27.2 副詞に属するもの 513
27.2.1 bêθíθò 513
27.2.2 ɕá 514
27.2.3 phɔ̄phɔ̂bàʊ 514
27.2.4 ɕèɕé 515
27.2.5 khɔ̂ 515
27.2.6 khɔ̀khɔ̂ 516
27.2.7 bánɔ́ 516

第 28 章 使役構文 517
28.1 使役構文の二つのタイプ 517
28.2 TYPE 1 517
28.2.1 使役助詞を用いる場合 518
28.2.1.1 dà 520
28.2.1.2 mà 522
28.2.1.3 phílâɴ 524
28.2.1.4 kò 525
28.2.1.5 lɔ̀ 526
28.2.2 一般の動詞を用いる場合 527
28.3 TYPE 2 528
28.3.1 ʔánmə̂ɴ 530
28.3.2 plɛ̀tɔ̀ 531
28.3.3 phílâɴ 531
28.4 まとめ 533

第 29 章 類似要素反復 **535**
29.1 様々な例 536
29.1.1 名詞句の反復 536
単独の名詞から成る名詞句 536
「代名詞 + 名詞」から成る名詞句 536
29.1.2 動詞句の反復 537
単独の動詞から成る動詞句 537
「動詞 + 目的語」からなる動詞句 537
「動詞 + 斜格補語」から成る動詞句 538
「動詞助詞 (前置されるもの)+ 動詞」から成る動詞句 538
「動詞 + 動詞助詞 (後置されるもの)」から成る動詞句 538
29.1.3 「主語 + 動詞」の反復 538
29.1.4 分離型動詞連続の反復 538
29.1.5 「主語 + 分離型動詞連続」の反復 539
29.1.6 副詞の反復 539
29.1.7 従属節の反復 539
29.2 動詞を含む要素の反復について 539
29.3 単独では使われない形態素を含む類似要素反復 540
29.4 対応する二音節語との関係について 542
29.5 類似要素反復の拡張 546

第 IX 部 付録 **547**

第 30 章 分析に用いた資料 **549**

第 31 章 テキスト **553**
31.1 テキスト 1「叩くと若くなる」(資料番号 020) 554
31.2 テキスト 2「タマリンドの枝」(資料番号 018) 562
31.3 テキスト 3「子供はできるさ」(資料番号 021) 564
31.4 テキスト 4「なぞなぞ」(資料番号 019) 566

第 32 章 語彙 **571**

参考文献 **591**

索引 **597**

第Ⅰ部

序論

第1章　ポー・カレン語について

1.1　本論文で扱う方言とポー・カレン語の概況

カレン諸語は、シナ・チベット (Sino-Tibetan) 語族チベット・ビルマ (Tibeto-Burman) 語派に属するとされる言語群で、ビルマ (ミャンマー) およびタイで 300 万から 400 万の人々によって話されている。他のチベット・ビルマ系言語の大部分が SOV を基本語順とするのに対し、カレン諸語の基本語順は SVO であり、この系統の諸言語の中では特異な存在となっている。新谷忠彦 (p.c.) によれば、カレン系言語には最低でも 30 種類以上存在し、最高では 40 種類近くにのぼる可能性があるという。このうち、最も狭義のカレン語にはスゴー・カレン語 (Sgaw Karen) とポー・カレン語 (Pwo Karen; Pho Karen) のみが含まれる。1993 年のビルマ政府の人口推計によればカレン人の人口は 286 万人で、ビルマ国内では、ビルマ人 (Burmese) の 2887 万人、シャン人 (Shan) の 398 万人に次いで多い。おそらく 286 万人のうちの大部分はスゴーおよびポーの人口であると見なしてもよいと考えられるが、その内訳は統計がないので分からない。なお、日本や欧米では、タイの山岳地帯に住むカレン人の印象が強いためか、カレン人がいわゆる山岳民族と見なされることが多いけれども、少なくともミャンマーに居住しているカレン人は、平地に住んでいることが多く、またそのうちのかなりの部分が都市に住んでいる (加藤 2000 を参照のこと)。

ポー・カレン語は、スゴー・カレン語と同様、ビルマおよびタイで話されている。ビルマで話されるポー・カレン語は、イラワジ・デルタ周辺で話される西部方言と、カレン州およびテナセリム管区周辺で話される東部方言に大きく分けることができる。西部方言と東部方言は意志疎通がほとんど不可能である。本論文で扱う方言は、東部方言のうちカレン州の州都パアン (Hpa-an;Pa-an; Burmese /pəʔàɴ/; East Pwo Karen /thəʔàɴ/) 周辺で話される方言で、この地域における最も主要な言語である。以下、ポー・カレン語と言う場合、このパアン周辺で話される東部方言を指す。この地域は、ポー・カレン人の伝統芸能が盛んな地域で、即興で歌を作って男女が愛を語り合う歌垣や、ドン (don; ビルマ語の呼称 /dóuɴ/ にちなむ。ポー・カレン語の呼称は /tōʊɴ/) と呼ばれる集団舞踊がある。これらはポー・カレン人のみならずビルマに住むカレン人の文化的象徴にもなっている。

Kato (1995) などに述べたとおり、ビルマに住むカレン人の間では、いわゆるカレン語に「スゴー・カレン語 (Sgaw)」「東部ポー・カレン語 (East Pwo)」「西部ポー・カレン語 (West Pwo)」の 3 言語があるとされることが多い。これはこの 3 言語の相互理解が不可能なことを根拠としている。確かに、スゴー・カレン語とポー・カレン語の間はもとより、東西のポー・カレン語の間においても、会って話した経験のない者同士の相互理解は相当に難しく、ビルマ語を使わなければ円滑な会話はできない。ただしどの 2 言語をとっても、数ヶ月一緒に暮らして慣れてくればある程度は類推できるようになるとも言われている。

ポー・カレン語の東部方言と西部方言が通じにくい最大の理由は発音の違いである。特

図 1.1: パアンの風景

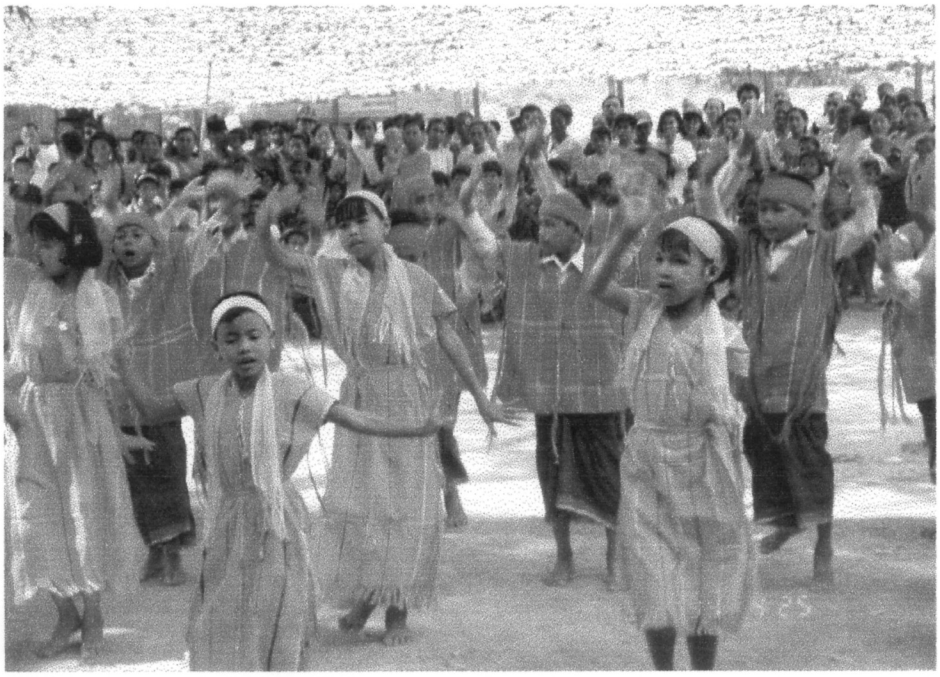


図 1.2: ドンを踊る子供達

に声調は、東が「高」なら西は「低」、西が「高」なら東は「低」というように高低が逆転している場合が多く、このことが意志疎通の最大の障害になっているように思われる。また、同源語でも意味が異なる場合も多い。例えば、東部方言の cáiɴ は「歩く walk」という意味を持つが、対応する西部方言の sàiɴ は「走る run」という意味である (第 32 章の項目番号 173,174 参照)。同様に、東部方言の mə- は非現実法を表す助詞であるが、これに対応する西部方言の mô は「〜したい」という意味を表す (第 32 章の項目番号 452,452-b 参照)。もう一つは借用語の問題であろう。スゴー・カレン語もポー・カレン語も過去にモン語 (Mon) の影響を強く受けたと考えられるけれども、特にポー・カレン語東部方言は近代以降にもモン語の影響を受け続けており、他のカレン語よりもモン語からの借用語が多い。例えば、東部方言では「砂 sand」を表すのにモン語からの借用語 pətì を用いるが、西部方言ではカレン語固有の形式 meʔ を用いる (第 32 章の 287 参照)。仏教にまつわる語彙には特にモン語起源の語彙が多く、例えば東部方言では僧侶が「死ぬ」ことを、モン語の借用語を用いて pɔ̀ と言う (第 32 章の 137,138-c 参照)。東部方言と西部方言の差異については、第 32 章の対照語彙表を参照していただきたい。

東西のポー・カレン語が同じでないことは、1911 年に既に Settlement Officer の Duffin が記している (Duffin 1913:viii)。また Purser and Saya Tun Aung (1922) は、東西方言の話者が会話をしたい時にはビルマ語に頼らざるを得ないことを指摘している (p.172)。また、同様に、Linguistic Survey of India も、L.F.Taylor の言として東西の方言が異なることを伝えている (Vol.1, part II, p.15)。東西方言の差異は、ポー・カレンがイラワジ・デルタに入ってから決して短くない時間が経過していることを示唆する。

東部方言の話される地域はカレン州を中心とし、モン州 (Mon state) やタニンダーイー管区 (Tanindhayi division; Tenasserim division) を含む地域である。ポー・カレン語東部方言が話されている地域の主要な都市としては、カレン州のパアン (Hpa-an)、フラインボエー (Hlaingbwe)、コーカレイ (Kawkareik)、モン州のモーラミャイン (Mawlamyaing; Mawlamyine; Moulmein)、タニンダーイー管区のダウェー (Dawe; Dawei; Tavoy)、ベイッ (Myeik; Beik; Mergui) などがある。特にパアン、フラインボエー、コーカレイは、住民の相当多くがポー・カレンである。ベイッの対岸に広がるベイッ諸島 (Myeik Archipelago; Beik Archipelago; Mergui Archipelago) の一部にも、ポー・カレン語の話者が住んでいるとの情報もある。本論文で扱うパアン方言 (Hpa-an dialect)、Jones (1961) の Moulmein Pho、また Kato (1995) の扱った Tavoy dialect 等はこの方言に属する。Purser and Saya Tun Aung (1922) はこの方言群を Tenasserim Pwo と呼んでいる。主要な都市の位置については図 1.3 を参照していただきたい。

一方、西部方言の話されるのはエーヤーワディー管区 (Ayeyarwadi division; Irrawadi division) を中心とする地域である。ポー・カレン語西部方言が話されている地域の主要な都市としては、パテイン (Pathein; Bassein)、チョンビョー (Kyonbyaw; Kyonpyaw)、ミャウンミャ(Myaungmya)、パンタノー (Pantanaw) などがある。第 32 章で扱うチョウンビョー方言 (Kyonbyaw [Kyonpyaw] dialect)、Jones (1961) の Bassein Pho はこの方言に属する。Purser and Saya Tun Aung (1922) はこの方言群を Delta Pwo と呼んでいる。なお、Purser and Saya Tun Aung (同上) におさめられた語彙は西部方言が中心になっている。

ところで、タイ側のポー・カレン語諸方言の大部分もビルマ側の東部方言と同じ方言群

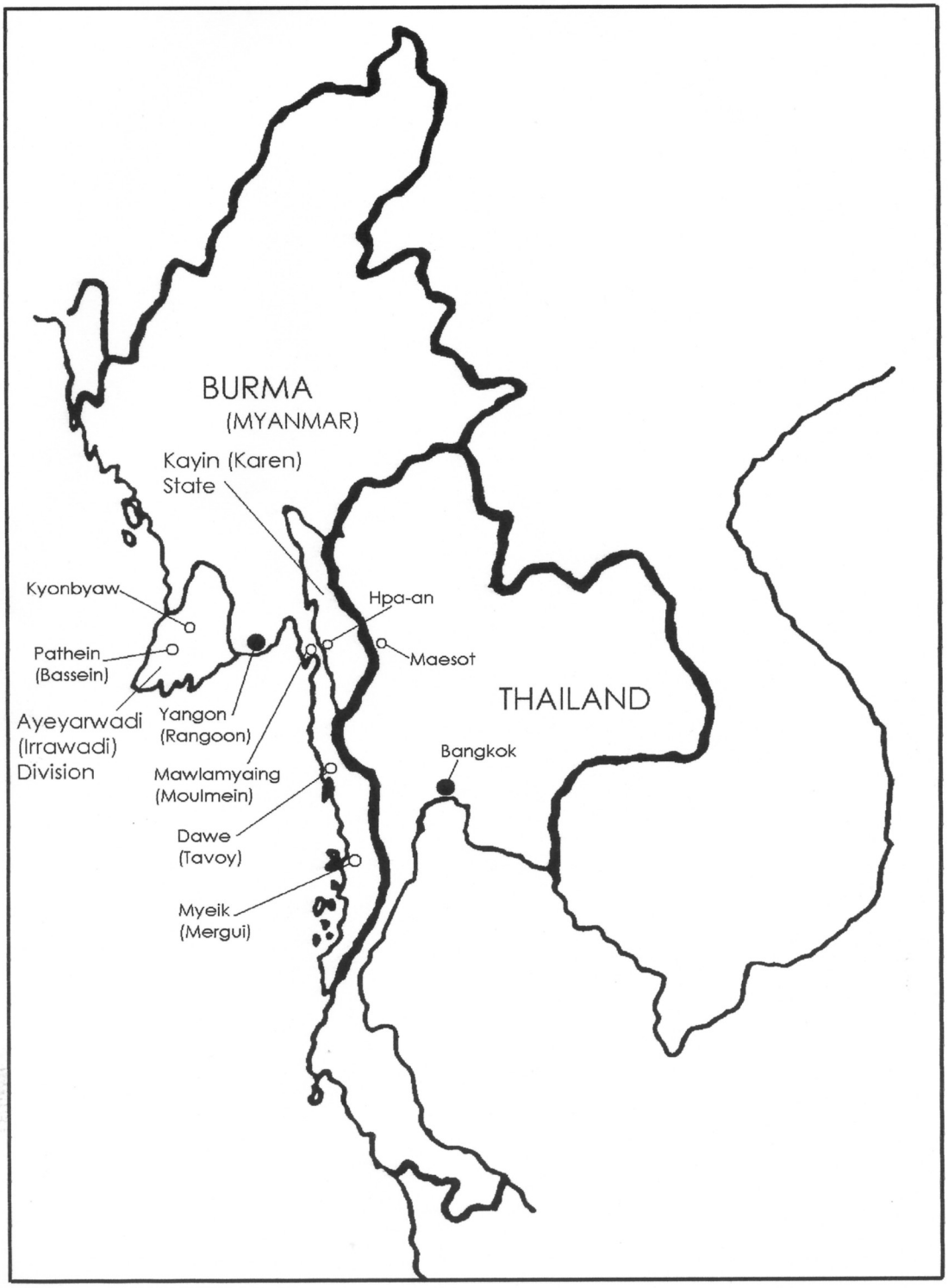


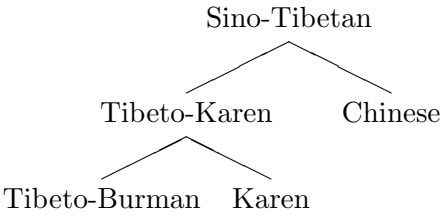
図 1.3: ポー・カレン語東西方言が話される地域の主要都市

に属すると思われる (Cooke et al.1976, Phillips 1996,2000 参照)。しかしタイ側の方言の中に、同じタイ側の諸方言との相互理解がかなり困難な方言が存在するという (Phillips p.c.)。したがって将来、ポー・カレン語を東西の二大方言に分けるのとは違った方言分類の必要が出てくることもあり得るだろう。

東部方言が話される地域と西部方言が話される地域にポー・カレン人がそれぞれどれくらいいるのかは、正確な統計がないので分からない。一説によれば、それぞれ 50 万人はいるのではないかという。民族としての人口は多いけれども、ポー・カレン語の母語話者の人口は減ってきているというのが現地のポー・カレン人達の大方の意見である。東西方言を比べると、特に西部方言が話せる人の数は相当な勢いで減ってきているように見える (加藤 2003b 参照)。西部方言地域の若いポー・カレン人は、ポー・カレン語の運用能力よりもビルマ語の運用能力のほうが高い場合が多いようで、人によってはビルマ語しか話せない。ポー・カレン人が書いた様々な文章 (加藤 2003b 参照) を読むと、この状況に関してポー・カレン人自身がかなりの危機意識を抱いていることが分かる。一方、東部方言地域に住むポー・カレン人の場合は、若い世代であってもポー・カレン語が流暢に話せることが多いように見える。しかしそれでさえ、母語話者の中には言語が衰退する危険を訴える人が少なくなく、このことは東部方言さえもが決して安泰とは言えないことを物語っている (加藤 1997, 2003b 参照)。

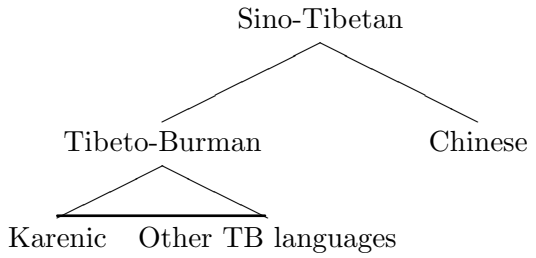
1.2　通時的観点から見たカレン系諸言語

カレン系言語のシナ・チベット諸語における位置づけについては、これまで様々な説が出されてきた。その中で学界に大きな影響を与えたのが、Benedict (1972) が提示した、次の系統樹に示す説である。



Benedict は、Sino-Tibetan の下に Tibeto-Karen という範疇を設定し、カレン系諸言語をチベット・ビルマ諸語に対置した。これは、カレン系諸言語の SVO 型という特徴を重視した結果である。

しかし Matisoff は、カレン系諸言語の SVO 型という特徴は Mon-Khmer 系諸言語等との接触によって生じたものであり、系統的にはチベット・ビルマ系の他の言語と同列に扱うべきだと、以前から主張してきた (Matisoff 2003 参照)。系統樹で示せば次のとおりである。



現在ではこの Matisoff の考え方が最も有力である。ただ、これが定説になるには、今後、カレン系諸言語の広汎かつ詳細な調査が必要である。

カレン系諸言語の史的音韻論の研究としては、Haudricourt (1946,53) が有名である。Haudricourt は、スゴー・カレン語とポー・カレン語を比較して、カレン祖語 (Karen commun) における有声音の系列が、スゴー・カレン語では無声無気音に、ポー・カレン語では無声有気音に変化したのだと説いた。その後、Luce や Henderson によって有声閉鎖音を持つ Bwe Karen 語の存在が報告され、Haudricourt の説が正しいことが証明された (Luce 1959,91; Henderson 1961,79,97; Weidert 1987; Shintani 2003a などを参照)。

Jones (1961) は、スゴー・カレン語について簡単な記述を行い、また、彼が調査した六つのカレン系言語 (Bassein Pwo[=Jones 自身の表記では Pho], Moulmein Pho, Pao[=Jones 自身は Taungthu と呼んでいる], Palaychi, Moulmein Sgaw, Bassein Sgaw) のデータに基づいて比較言語学的研究を行っている。Jones は図 1.2 のような分類を示した。この分類で

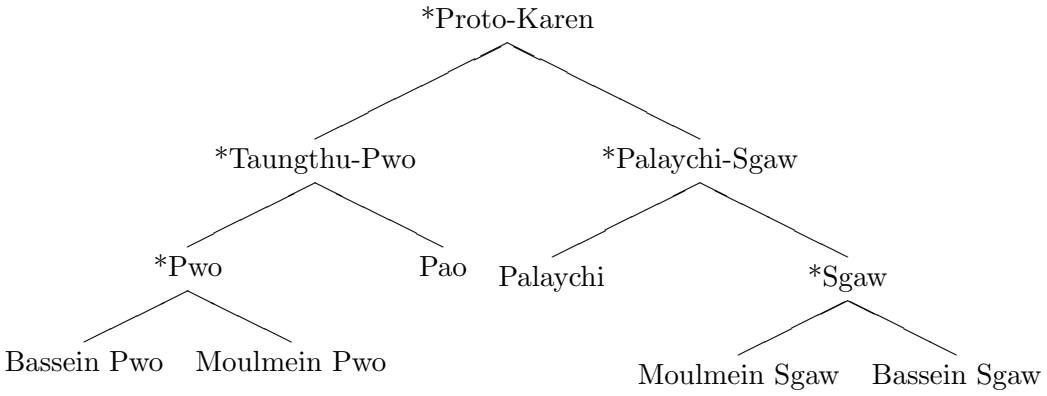


図 1.4: Jones (1961) によるカレン系諸言語の分類

目立つのは、パオ語 (Pao=Taungthu) がポー・カレン語に近い位置に置かれているということである。これに対し、西田龍雄 (1964) は、Jones の示したデータに基づいて、図 1.2 に示す分類を示した (Jones のものと対比しやすいように改変した)。ここではパオ語がスゴー・カレン語やポー・カレン語から離れた位置に置かれている。パラチー語 (Palaychi) をこの位置に置くことが妥当かどうかはともかくとして、パオ語をスゴー・カレン語やポー・カレン語から離れた位置に置くことは妥当だと思われる。

カレン系諸言語の分類に関して、最も最近の、かつ最も信頼に足るものは、Shintani (2003a) が示した説である。Shintani は、二十言語に近いカレン系言語を調査し、声調分岐の違いや語彙の一致率に基づいてそれらを分類した。これを図 1.2 に示す。これによれ

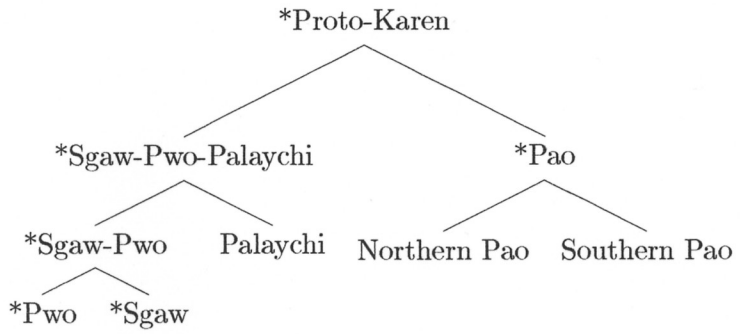


図 1.5: 西田 (1964) によるカレン系諸言語の分類

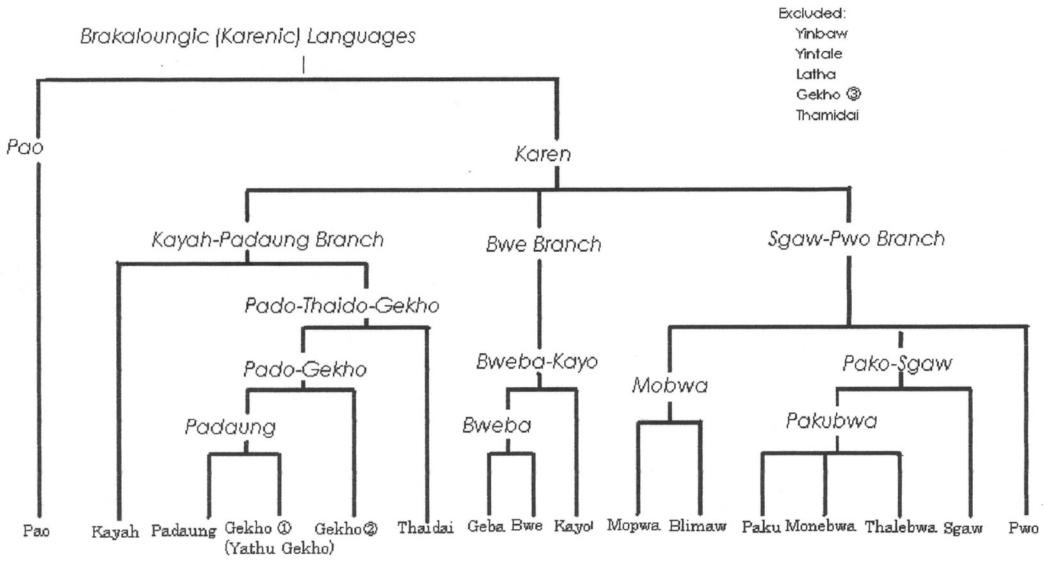


図 1.6: Shintani (2003a) によるカレン系諸言語の分類

ば、ポー・カレン語はカレン系諸言語の中で比較的スゴー・カレン語に近い位置にあるということになる。

1.3　ポー・カレン語の文字

ポー・カレン語の文字について語るには、カレン人が仏教やキリスト教を受容した経緯についてある程度知っておく必要がある。文字の起源が仏教やキリスト教と密接に結びついているからである。

カレン人が仏教を受容したのは、ビルマ人からではなく、モン人 (Mon) からだとカレン人の間では考えられている。ポー・カレン人の言い伝えによると、18 世紀の半ば頃にプーターマイ (Phutamai) という名のポー・カレン人僧侶がタトン (Thahton) で学んだ仏教をパアン周辺のポー・カレン人やスゴー・カレン人に伝えたことがきっかけとなって、カレン人に仏教が普及したという。ただし、これ以外の地域における仏教の受容の経緯については、ほとんど分かっていない。

その後、19 世紀のはじめ頃からアメリカのバプティスト派宣教師がカレン人に対する宣教を始め、キリスト教信者も増えていく。1931 年の国勢調査によれば、スゴー・カレンの人口約 477,000 人のうち仏教徒は 346,000 人、キリスト教徒は 131,000 人であった。一方、ポー・カレンの人口約 483,000 人のうち仏教徒は 451,000 人、キリスト教徒は 32,000 人だった (池田一人氏のご教示)。現在ではキリスト教徒の割合がこれよりも多いことが推定されるが、正確な統計がないため詳しいことは不明である。

ちなみに、カレン人は、最も先鋭的な反ビルマ政府活動を行ってきた民族として有名である。その歴史はビルマ独立 (1948 年) 直後の 1949 年以降、半世紀以上に及ぶ。カレン人とビルマ人の関係は、ビルマにおける民族間関係のうち最も険悪なものと言ってもよいかもしれない。その原因としては、イギリスの植民地政策がクローズアップされることが多い。イギリスは、英緬戦争 (1824-26,1852,1885) の後ビルマを植民地化した (1886 年英領インドに併合)。イギリス植民地政府は、カレン人を役人などとして積極的に登用し、ビルマ人の上に置くことで、植民地ビルマが一枚岩となることを阻止した。同時に、一部のカレン人は 1830 年代頃からキリスト教化したためイギリス人への親近感を増しており、イギリスにとっては使いやすい存在だった。様々な理由によりキリスト教に改宗するカレン人も増加した。研究者によっては、民族間関係険悪化の原因としてキリスト教化に重きを置く。例えば、人類学者の飯島茂 (1974) は、カレン人のキリスト教化が反ビルマ意識を誘発したという構図を描く。しかし、現在でもカレン人の多数派は仏教徒である。飯島の描く構図は単純に過ぎるだろう。

カレン語には上記のような宗教受容の経緯を反映した様々な文字が存在している。スゴー・カレン語には、キリスト教スゴー・カレン文字、仏教スゴー・カレン文字がある。ポー・カレン語にも、キリスト教ポー・カレン文字、仏教ポー・カレン文字がある。なお、これらは筆者による呼び名であり、定着したものではないことに留意されたい。

このうちキリスト教スゴー・カレン文字 (Sgaw Karen missionary script; 一般には単にスゴー・カレン文字 Sgaw Karen script と呼ばれる) は、1830 年代にアメリカ人のキリスト教宣教師 Wade が考案したもので、カレン系言語の文字のうち最も普及している (図 1.7)。一方、比較的最近になって、カレン州に住むスゴー・カレンの僧侶が作ったという

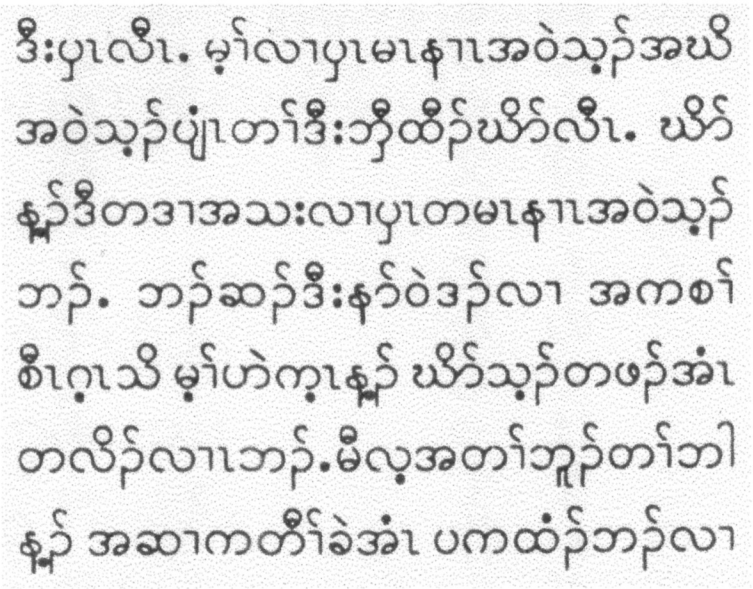


図 1.7: キリスト教スゴー・カレン文字

仏教スゴー・カレン文字 (Sgaw Karen buddhist script) が現れ、仏教徒スゴー・カレンの間で使われ始めている (図 1.3)。聖書を書くために作られたキリスト教スゴー・カレン文字の使用を仏教徒達が嫌ったため、この文字が作られたと聞く。

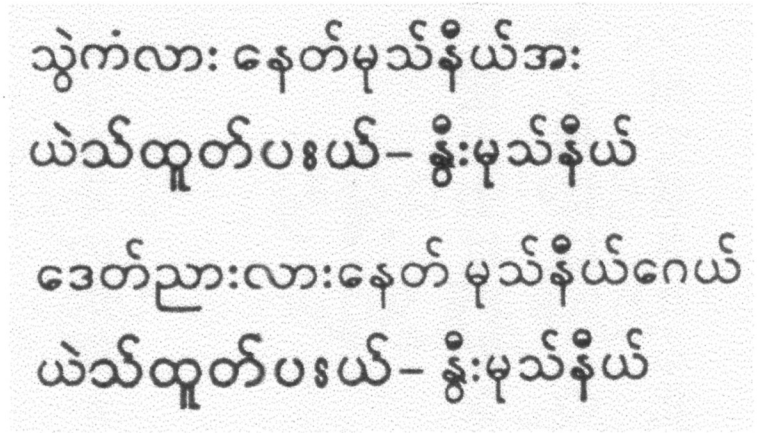


図 1.8: 仏教スゴー・カレン文字

さて、ポー・カレンの文字のうち、キリスト教ポー・カレン文字 (Pwo Karen missionary script) は、やはりアメリカのキリスト教宣教師 Braton が、1840 年代から 1850 年代頃にキリスト教スゴー・カレン文字に倣って作ったものである (図 1.3)。この文字は、東部方言の発音に基づいて作られたものであるが、仏教徒の多いこの地域のポー・カレンには受け入れられず、後に、カレン民族主義の高揚とともに仏教からキリスト教への改宗者が増えた西部方言地域で受け入れられるようになった。そのためビルマのカレン人達は、この文

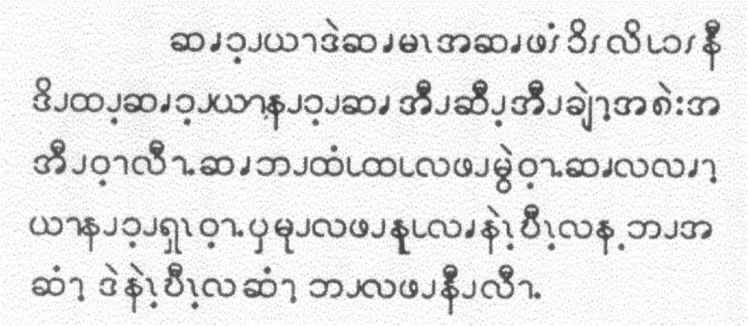


図 1.9: キリスト教ポー・カレン文字

字を「西部ポー・カレン語の文字」と呼ぶことが多い。元々は東部方言を書き表すために作られた文字なので、西部方言の発音を書き表すのには少々無理がある。この文字を使っているのはキリスト教徒が大部分なので、西部方言地域のポー・カレン仏教徒達は、自分達の言語を表す文字を持たないという状況が続いている。東部方言地域でも、キリスト教徒はこの文字を使用している。

一方、仏教ポー・カレン文字 (Pwo Karen buddhist script) は、カレン人自身が作った文字の中で最も普及しているという点で非常に重要である (図 1.3 および図 1.3)。また、本論文で扱う方言の話者の間で最も多く使用されているのがこの文字である。 東部方言地

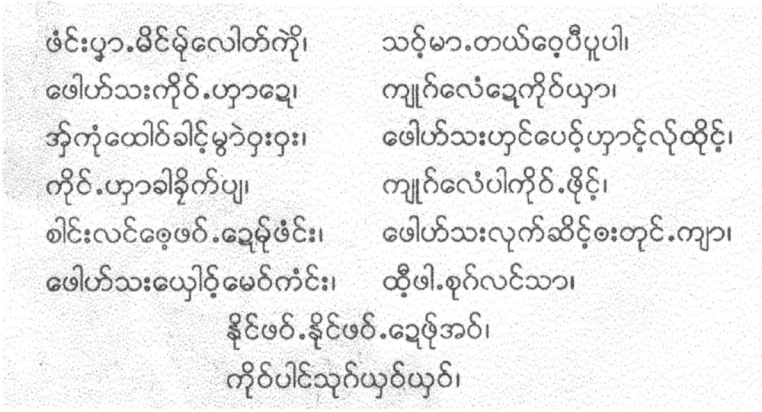
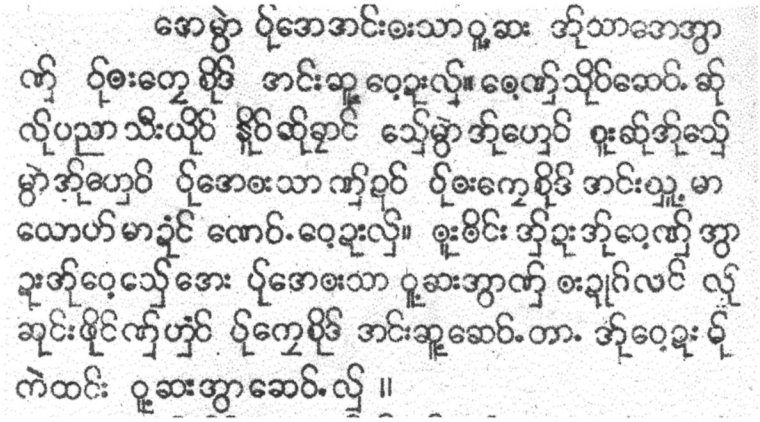


図 1.10: 仏教ポー・カレン文字 (1)

域のポー・カレンは、古くからモン人との交流が盛んであり、モン人から仏教を取り入れる過程でモン文字を改変してこの文字を作った。今でもパアン周辺の僧院にはたくさんの貝葉が残っている (図 1.3)。現存する最も古い文献は、1851 年に書かれたとされる貝葉である (Phon Myint 1975 参照)。しかし、当地の仏教徒カレン人の言い伝えでは、カレン語の文字の中でこの文字が最も古いとされる。カレン人が初めて文字を持ったのは、宣教師がキリスト教スゴー・カレン文字を作った時だという説明がしばしばなされることがある。しかし、それより以前にこの仏教ポー・カレン文字の萌芽があった可能性は否定できない。カレン州の僧院の多くは、この文字を少年僧達に教えている。この文字は、一般的



ဖေမ္ပွဲ ပုံဖေအင်းဝးသာ ဝူ့ဆး အိုသာဖေအ္ကာ
ကျ့ ပုံစးကျ့ စိုဒ် အင်းဆူ့ ဝေ့ဉုးလ့်။ ဒေ့ကျ့်သိုင်ဆော်. ဆို
လိုပညာ သီးယိုင် နိုင်ဆိုရှာင် သ့ေ်ပွဲ အ့ိုဟ့ေ်ဝ် စူးဆိုအ့ိုသ့ေ်
ပွဲ အ့ိုဟ့ေ်ဝ ပုံဖေစးသာ ကျ့်ဝုင် ပုံစးကျ့စိုဒ် အင်းလ့ှ့ မာ
သောဟ်မာ ခ့ုံင် ဟောင်. ဝေ့ဉုးလ့်။ ဝူးဒိင်း အ့ှ့ဉုးအ့ိုဝေ့ကျ့် အ္ကာ
ဉုးအ့ိုဝေ့သ့ေ်အေး ပုံဖေစးသာ ဝူ့ဆးအ္ကာကျ့ စးဉုဂ်လင် လ့ှ
ဆုင်းဖိုင်ကျ့ဟ့ှ်ဝ် ပုံကျ့စိုဒ် အင်းဆူ့ဆော်. တာ. အ့ိုဝေ့ဉုး မ့ှ
ကဲထင်း ဝူ့ဆးအ္ကာဆော်. လ့ှ ။

図 1.11: 仏教ポー・カレン文字 (2)

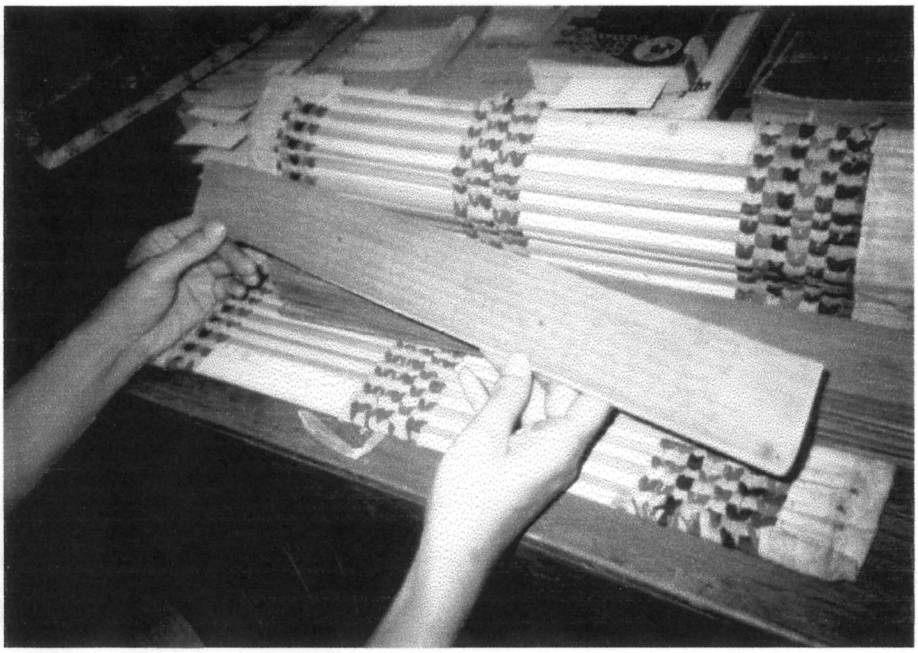


図 1.12: 仏教ポー・カレン文字の貝葉

に「東部ポー・カレン語の文字」と呼ばれている。なお、筆者はこの文字をその起源にちなんで「仏教ポー・カレン文字」と呼んでいるが、この文字は狭義のカレン語を書き表す文字の中で最も宗教色の薄いものであり、そのためキリスト教徒の中にはこの文字の読み書きができる者もいる。

実は、東部地域のポー・カレンにはもうひとつレーケー文字 (Leke script) という文字がある。これは、レーケー (Leke) 教という、弥勒菩薩を信仰するポー・カレン独特のカルト的宗教において使われている文字である (図 1.3)。この文字はその形態から「鶏の足跡」と呼ばれている。この文字の成立は 19 世紀半ばだとされる。

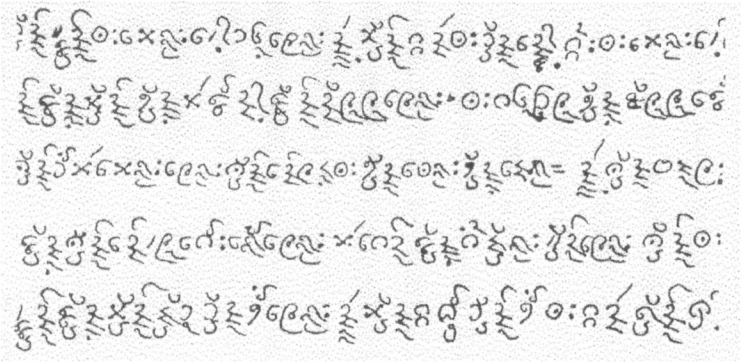


図 1.13: レーケー文字

カレン州に住むポー・カレン人は大多数が仏教徒なので、カレン州のポー・カレン人の間では仏教ポー・カレン文字の普及率が最も高い。最近では、子供を対象とした暑期の文字講習が開かれていることもあり、この文字の読み書きができる人もかなり増えている。そのためか、パアンやフラインボエーなどの都市では政府のスローガンもこの文字を用いて書かれている。

キリスト教ポー・カレン文字と仏教ポー・カレン文字の体系および綴りと発音との関係については、加藤 (2001b,c) に詳しい解説がある。

第2章　音論

2.1　音節構造

ポー・カレン語の音節構造は、一般的に C1(C2)V(V2)(C3)/T と表すことができる。C は子音、V は母音、T は音節全体にかぶさる声調を表す。C1 の位置に現れた子音を頭子音 (initial)、C2 の位置に現れた子音を介子音 (medial)、C3 の位置に現れた子音を末子音 (final) と呼ぶ。また、C1(C2)- の部分を声母 (onset)、-V(V2)(C3) の部分を韻母 (rhyme) と呼ぶ。

2.2　子音音素

子音音素には次の 26 個がある。ɴ を除くと、すべて C1 として現れることができる。

閉鎖音						
p	θ	t	c	k		ʔ
ph		th	ch	kh		
b		d				
摩擦音						
			ɕ	x		h
				ɣ	ʁ	
鼻音						
m		n	ɲ	ŋ	ɴ	
半母音						
w			j			
流音						
		l				
		r				

次に、上に示した子音音素の音声学的説明を行い、語例を示す。

/p/ 無声無気両唇閉鎖音 [p]。
/pənā/ 水牛、/pɔ̄/ 読む (cf. Mon /pòh/)、/pàʊ/ 開ける、/pî/ 小さい、/pàiɴ/ 満ちる、/pàpâ/ お父さん (幼児語)

/θ/ 無声無気歯間閉鎖音 [t̪]。ビルマ語の/θ/に比べると開放がゆるやかで、破擦音 [t̪θ] になる場合がある。話者によっては、無声歯間摩擦音 [θ] で発音する者もいる。
/θî/ 死ぬ、/θò/ 友人、/θí/ できる (能力)

/t/ 無声無気歯茎閉鎖音 [t]。
/tàiɴ/ 作る、/tàʊ/ 建物、/təwâɴ/ 村

/c/ 無声無気歯茎硬口蓋破擦音 [tɕ]。この音素は、変異音 (variant) として、無声無気の歯茎摩擦音 [s] を持つ。変異音 [s] は、主として、(1) 書かれたものを読む場合、(2) 演説などのかしこまった場面での発話、などで用いられる。通常の会話では [tɕ] と発音される。なお、同じ東部方言でも、モールメイン (Moulmein) 近郊のポー・カレン語では、パアン方言の/c/に対応する音素が、常に [s] と発音される。
/cɯ́/ 手、/cáiɴ/ 歩く、/cì/ 銀

/k/ 無声無気軟口蓋閉鎖音 [k]。
/káiɴ/ 曲がった、/ká/ 難しい、/kò/ 呼ぶ

/ʔ/ 声門閉鎖音 [ʔ]。
/ʔéiɴ/ 狭い、/ʔá/ 多い、/mìʔàiɴ/ もち米

/ph/ 無声有気両唇閉鎖音 [p^h]。
/phó/ 欠ける、/phʊ́/ 子供、/phā/ 父、/phjā/ 僧院, 学校 (Cf. Mon /phɛ̀a/)

/th/ 無声有気歯茎閉鎖音 [t^h]。
/thî/ 水、/thé/ 切れる、/thɔ̄/ 収容できる

/ch/ 無声無気歯茎硬口蓋破擦音 [$tɕ^h$]。この音素は、変異音として、無声有気の歯茎摩擦音 [s^h] を持つ。この変異音は、先に挙げた/c/が [s] と発音されるのと同じ場合において用いられる。モールメイン近郊のポー・カレン語では、これに対応する音素が常に [s^h] と発音される。
/chó/ 運ぶ、/chɔ́ɯ/ 臼、/chòɴ/ 雨が降る

/kh/ 無声有気軟口蓋閉鎖音 [k^h]。
/khā/ 折れる、/kháɴ/ 足、/khài/ 暗い

/b/ 両唇入破音 [ɓ]。
/bà/ 信仰する、/bòɴ/ 石灰、/bá/ 正しい

/d/ 歯茎入破音 [ɗ]。時として egressive な [d] で発音されることもある。上記 /b/ はほとんどの場合 [ɓ] である。
/dá/ 見える、/déíɴ/ ゴマ、/dò/ (水を) ためる

/ɕ/ 無声歯茎硬口蓋音 [ɕ]。ただし、人によっては [s] に近い発音になることがある。パアン周辺のビルマ語方言でも、/ɕ/が/s/に近く発音されることが多い。このことと何らかの関係がある可能性もある。
/ɕà/ 少ない、/ɕá/ 星、/mèiɴɕā/ 義父・義母

/x/ 無声軟口蓋摩擦音 [x]。
/xé/ 刀、/xwè/ 買う、/xâiɴ/ 乾く

/ɣ/ 有声軟口蓋摩擦音 [ɣ]。
　/ɣéiɴ/ 家、/ɣə̂ɴ/ 聞こえる、/ɣì/ 良い

/ʁ/ 有声口蓋垂摩擦音 [ʁ]。ごく一部の助詞などにのみ現れる。Purser and Saya Tun Aung (1922:174) は、この音を表すために用いるキリスト教ポー・カレン文字の字母について、“voiced H” を表すとしている。現代パアン方言でも、/ʁ/が弱化して [ɦ] のように発音されることもある。なお、仏教ポー・カレン文字では、この音素は/ɣ/を表すのと同じ字母で書かれる。
　/ʁâ/ 〜か (疑問を表す助詞)、/ʁɔ̄/ 〜は?(対比・対照を表す助詞)

/h/ 無声声門閉鎖音 [h]。出現頻度は多くない。
　/hə-/ 人間を表す接頭辞、/hwɛ́phə̀ɴ/ 高床式家屋の床下、/hàidài/ 便所

/m/ 有声両唇鼻音 [m]。
　/mâ/ 妻、/mà/ する, 作る、/mí/ 火

/n/ 有声歯茎鼻音 [n]。
　/néiɴ/ 年、/nɛ̀/ 信じる、/nî/ 2(数詞)

/ɲ/ 有声硬口蓋鼻音 [ɲ]。出現頻度は極めて少ない。
　/jāthəɲā/ 祈る (cf. Mon /rɛ̀atənɛ̀a/)、/kəɲà/ (僧侶が) 来る、/pəɲāɴ/ あぜ道

/ŋ/ 有声軟口蓋鼻音 [ŋ]。出現頻度は極めて少ない。
　/ŋɛ̀ŋɔ̂/ ためらう、/khəŋāiɴ/ (世界を) 周遊する

/ɴ/ C3 の位置にのみ現れる。有声口蓋垂鼻音 [ɴ]。ただし、しばしば閉鎖は完全ではなく、前の母音が鼻音化したのみで音節が終了することがある。2.4.2 を参照のこと。
　/ʔáɴ/ 食べる、/kòɴ/ (腰巻きなどを) 穿く

/w/ 有声唇軟口蓋接近音 [w]。
　/wɛ̄/ 兄, 姉、/wá/ 竹、/ʔəwê/ 三人称単数代名詞、/wɔ̀/ 赤い (=/ɣɔ̀/)

/j/ 有声硬口蓋接近音 [j]。前舌母音の前では摩擦音 [j̞] となる傾向がある。
　/já/ 魚、/jɔ̂/ 易しい、/jɛ̄/ 5(数詞)

/l/ 有声歯茎側面接近音 [l]。
　/lái/ 文字、/là/ 月、/ʔəlāɴ/ 場所

/r/ 有声歯茎顫動音 [r]。あまり出現頻度は多くない。また、通常の会話では/l/と交替して [l] と発音されることのほうが多い。
　/pàitərâɴ/ ドア、/thərài/ 費用、/thərɛ̄/ 鹿の一種

2.3　子音結合

C2 の位置に現れることができる子音 (介子音) は、/w, l, r, j/の四つである。すべての子音音素のうち 19 個が、C1(頭子音) としてこれらの介子音を従えることができる。C1 と C2 との可能な組み合わせを表にして示す。

	p	θ	t	c	k	ʔ	ph	th	ch	kh	b	d	x	h	m	n	ɲ	j	l
w	+	+	+	+	+	+		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
l	+				+		+			+	+				+				
r	+				+														
j	+						+					+			+				+

例を示す。

/pwài/ 疲れた、/plɔ̀/ 無駄な、/prɔ̀ɴ/ 競う、/pjò/ 吐く、/θwí/ 血、/ʔətwà/ 問題 (=/ʔəkwà/)、/cwà/ 這う、/lókwè/ 遊ぶ、/klà/ 正確な、/krɨ̀/ 〜しなければならない (=/kərɨ̀/)、/ʔwí/ おいしい、/phlɛ̄/ 弟子、/phjâ/ 市場 (cf. Mon /phya/)、/thwí/ 犬、/chwí/ 去勢する、/khwâ/ 男、/khlɔ́/ ござ、/bwɛ́/ 盛る、/blà/ (味が) 薄い、/bjàɴ/ 治す、/dwɛ́/ 燃やす、/xwíkàiɴ/ だるい、/hwɛ́phàɴ/ 高床式家屋の床下、/mwɛ̄/ 〜である、/kəmlɔ̂ɴ/ 井戸、/təmjâɴ/ 奇妙な (cf. Mon /təmeaŋ/)、/nwɛ̄/ ジャックフルーツ、/ɲwā/ (言葉が) 達者な、/lwī/ 山鳩、/kəljâɴ/ 帰る (cf. Mon /kəleaŋ/)

先に、C1 として現れた/r/は/l/と交替することが多いと述べた。同じことは C2 として現れた/r/にも言える。通常の会話では、例えば上に挙げた/prɔ̀ɴ/「競う」と/krɨ̀/「〜しなければならない」は、それぞれ、/plɔ̀ɴ/,/klɨ̀/と発音されることのほうが多いようである。

2.4　母音と韻母

母音音素には下に示す 11 個がある。

i	ɨ	ɯ
ɩ		ʊ
e	ə	o
ɛ	a	ɔ

韻母は、これら 11 個の母音と末子音/ɴ/との組み合わせで作られる。母音音素は、単独で現れた場合と他との組み合わせで現れた場合とで音価が異なる場合があるので、音価の説明は韻母ごとに行う。

2.4.1　開音節韻母

開音節韻母には単純母音と二重母音がある。単純母音は以下に示す 11 個である。

i	ɨ	ɯ
ɩ		ʊ
e	ə	o
ɛ	a	ɔ

二重母音は以下に示す 2 個である。

ai　　aʊ

次に、上に示した開音節韻母の音声学的説明を行い、語例を示す。

/i/ 入り渡りに中舌母音 [ə] が現れ、[ᵊi] と発音される。ちなみに、母語話者たちは、この母音がビルマ語の/i/[i] とは異なる音であることを明確に意識している場合が多いようである。
/lì/ 風、/chíchâ/ 小便する、/nī/ 笑う、/θwí/ 血

/ɨ/ 中舌非円唇狭母音 [ɨ]。
/phɨ́/ 短い、/chɨ̀/ 民族、/chəkɨ̄/ ずいぶん

/ɯ/ 基本母音の [ɯ] にわずかな唇の突き出しが伴った [ɯ̹]。キリスト教ポー・カレン文字の表記および西部ポー・カレン語との対応を見ると、この音素は、19 世紀の半ばには存在していた 2 個の母音*u および*ɯ の両方に由来していると考えられる。パアン方言ではこの二つの区別はなくなって、/ɯ/ に一本化している。
/phɯ̂/ 跳ねる；祖父、/mɯ́/ 女、/phɯ̄/ 弟, 妹、/jɯ̀/ 飛ぶ、/jɯ̄/ ねずみ、/ɕɯ́máʊ/ 平和な

/ɩ/ 基本母音 [i] よりもわずかに低めの前舌非円唇母音 [i̞]。/w/(C1,C2 を問わない) の後ろには現れない。
/nɩ̄/ 得る、/lɩ̀/ 行く、/mɩ̀/ ご飯、/bɩ́/ ヤギ

/ʊ/ 基本母音 [u] よりもわずかに低めの後舌円唇母音 [u̟]。
/mʊ̄/ 母、/jʊ̄/ 見る、/khʊ́/ 頭、/phʊ́/ 子供

/e/ 基本母音 [e] に近い。
/mé/ 顔、/xé/ 刀、/dè/ 〜と共に、/nwê/ 7(数詞)

/ə/ 中舌母音 [ə]。
/lə́/ 場所を表す前置詞、/jə̀/ 一人称単数代名詞、/klə̀/ いつも

/o/ 基本母音 [o] に近い。
/mó/ たばこ、/thò/ 豚、/kò/ すべての〜

/ɛ/ 基本母音 [ɛ] に近い。
/jɛ̄/ 5(数詞)、/ʔɛ́/ 愛する、/dàʊnɛ́/ 見せる、/mwɛ̄/ 〜である、/lɛ̀lɔ̄/ グラグラする

/a/ 中舌広母音の [ᴀ]。
/má/ ワニ、/nā/ 耳、/wà/ 夫、/mâ/ 妻

/ɔ/ 基本母音 [ɔ] に近い。
/ʔɔ́/ ある、/tɔ̀/ まっすぐな、/ʔáɴkɔ́/ 避難する、/nɔ́/ あの

/ai/ 中舌広母音 [ᴀ] から基本母音の [i] に移行する二重母音 [ᴀi]。
/chái/ 田、/bài/ ふさがる、/jái/ 久しい

/aʊ/ 中舌広母音 [ɐ] から、/ʊ/あるいは/o/と同じ母音に移行する二重母音 [ɐu̯ ～ ɐo]。したがって、音素論的には/ao/と解釈することも可能であろう。
/dàʊ/ 部屋、/máʊ/ 快適な、/náʊ/ 入る、/láʊ/ 尽きる、/thàʊ/ こする

2.4.2　閉音節韻母

閉音節韻母は子音/ɴ/で終わる韻母であり、単純母音を含むものと二重母音を含むものがある。/ɴ/は基本的には [ɴ] であるが、閉鎖が不完全に行われて母音が鼻音化しただけで音節が終了することがある。

「単純母音 +/ɴ/」からなる閉音節韻母には、次に示す 4 個がある。/ɪɴ/はビルマ語からの借用語にのみ見られるので括弧でくくってある。

(ɪɴ)	əɴ
aɴ	oɴ

「二重母音 +/ɴ/」からなる閉音節韻母には、次に示す 4 個がある。上段の三つは、個々の音声学的説明に示すように、/ɴ/が脱落することがある。

eiɴ	əɯɪɴ	oʊɴ
	aiɴ	

次に、上に示した閉音節韻母の音声学的説明を行い、語例を示す。

/ɪɴ/ ビルマ語からの借用語にのみ見られる。発音は [i̯ɴ]。借用語にのみ見られる音なので、ポー・カレン語の音素として認めることには問題があるかもしれない。ただし、ビルマ語が話せない話者でも楽に発音することができるので、この発音自体はポー・カレン語にかなり定着していると思われる。
/pjîɴθí/ フランス (Burmese /pyìɴθiʔ/)、/pjîɴ/ 直す (Burmese /pyìɴ-/)、/lèjìɴpjâɴ/ 飛行機 (Burmese /lèyìɴbyàɴ/、/thîɴ/ 考える (Burmese /thìɴ/)、/kəjìɴpjìnɛ̂/ カレン州 (Burmese /kəyìɴpyìnɛ̀/)

/əɴ/ 調音位置は開音節韻母の/ə/と同じである。すなわち、[əɴ]。ただし、人によっては、もっと低めの [ɐɴ] に近い発音をする場合もある。
/khə̂ɴ/ 固い、/phə̀ɴθà/ 道、/nə̂ɴ/ 臭い

/aɴ/ 音声学的には、後舌広母音 [ɑ] から後舌半広母音 [ʌ] に移行する二重母音である。すなわち、[ɑʌɴ]。ときとして [ɑɴ] という単純母音的な発音も聞かれる。このことも考慮して、音素論的には単純母音と見なす。また、音素論的には/ɔɴ/ と解釈することも可能かと思われる。
/ʔáɴ/ 食べる、/làɴ/ 落ちる、/tháɴ/ 上る

/oɴ/ 調音位置は開音節韻母の/o/と同じである。すなわち、[oɴ]。
/khôɴ/ 外、/chóɴ/ 強い、/thòɴ/ 橋

/eiɴ/ 基本母音に近い [e] から基本母音の [i] に移行する二重母音。すなわち、[eiɴ]。しばしば/ɴ/が脱落し、[ei] と発音されることも多い。
/mèiɴ/ 名、/chêiɴ/ 清らかな、/néiɴ/ 年、/ʔánlèiɴ/ 借りる

/əɯɴ/ 唇の軽い突き出しを伴った [ə̹ʉ̹ɪɴ]。しばしば/ɴ/が脱落し、[ə̹ʉ̹ɪ] と発音されることも多い。
/tháɯɴlī/ 踊る、/kháɯɴ/ 掘る、/θáɯɴ/ 建てる

/oʊɴ/ 開音節韻母の/o/と同じ調音位置から、開音節韻母の/ʊ/ と同じ調音位置に移行する二重母音 [oʊ̯ɴ]。しばしば/ɴ/が脱落し、[oʊ̯] と発音されることも多い。
/phōʊɴ/ 穴があく、/dòʊɴ/ 町、/θôʊɴ/ 送る、/tōʊɴ/ ドン・ダンス (ポー・カレンの集団舞踊)
なお、同じパアン市内でも、話者によっては/əɯɴ/と/oʊɴ/の区別がなくなって、/oʊɴ/ 一つになっている。これが地域的差異であるのか、年代的差異であるのか、あるいは個人差なのかは現段階では不明である。

/aiɴ/ 中舌広母音 [ɑ] から基本母音の [i] に移行する二重母音。すなわち、[ɑiɴ]。他の閉音節二重母音/eiɴ/、/əɯɴ/、/oʊɴ/とは違って、/ɴ/が脱落することはない。
/jàiɴ/ 遠い、/thàiɴ/ 帰る、/khâiɴ/ 尻

2.5 声調

ポー・カレン語の声調素には次に掲げる四つがある。

/˧/ 高平調（こうへいちょう；たかだいらちょう）

/˦/ 中平調（ちゅうへいちょう；なかだいらちょう）

/˨/ 低平調（ていへいちょう；ひくだいらちょう）

/˩/ 下降調（かこうちょう）

以下にそれぞれの音声学的説明を行う。

/˧/ [˥ 44] 高く平らに発音される。この声調は Jones (1961) の Moulmein Pho の/˧ʔ/に対応する。Jones の記述によれば、モールメイン方言の/˧ʔ/は末尾に向けて下降するようであるが (p.69)、パアン方言の/˧/は、いかなる場合も下降せずに平らに発音される。
/khá/ 苦い、/má/ 誤った、/bá/ 正しい

/˦/ [˦ 33] 中ほどの高さで平らに発音される。単独で発音した場合やポーズの前などでわずかに上昇し、[334] のように発音されることもある。この声調と共起した母音は少し breathy に発音される。
/khā/ 折れる、/phā/ 父、/mʊ̄/ 母

/ˎ/ [˩˨ 22] 低く平らに発音される。この声調は Jones (1961) の Moulmein Pho の/ /(無表記) に対応する。Jones が示した図 (p.69) において、この声調は中くらいの高さで発音されるかのように図示してある。しかし、著者の接したことのあるポー・カレン語東部方言では、これに対応する声調は低く平らに発音される場合がほとんどである。
/ɣà/ 〜人 (助数名詞)、/thà/ 針, 鉄、/mà/ する、/nà/ 夜

/ˏ/ [˥˩ 52] 高平調よりもわずかに高い位置から、低い位置へ急激に下降する。この声調と共起した母音は少し creaky になることがある。
/mâ/ 妻、/châ/ 痛い、/jɔ̂/ 易しい

頭子音のうち、p, t, c, k, ʔ, b, d は、/˗/(中平調) と /ˏ/(下降調) とは基本的には共起しない。ただし、少数の例外がある。例えば、/pî/「小さい」、/bê/「〜のように (側置助詞)」など。この分布の偏りは、Haudricourt (1946,53) が述べる声調の分岐に起因するものである。したがって、歴史的なものであり、共時的な共起制限ではない。その証拠に、ビルマ語やモン語などからの借用語にはこの制限がない。例えば、/kâɴ/「運、業」(Burmese /kàɴ/)、/lèjìɴpjâɴ /「飛行機」(Burmese /lèyìɴbyàɴ/)、/pɔ̄/「読む」(Mon /pòh/) など。

Phillips (2000) は、Kato (1995) が声調と頭子音の間にこのような分布の制限があると述べていることに対して、そのような事実がないとしている。彼女のこのような主張は、この分布上の偏りが共時的な制限ではないという意味では正しい。しかし、この主張が彼女の観察不足かあるいは声調の聞き取りの誤りに起因している可能性もある。

2.6　軽声音節

ポー・カレン語には声調を持たない音節がある。これを軽声音節 (atonic syllable) と呼ぶ。表記上は、声調符号を付さないことによってこれを示す。軽声音節に現れる母音は、/ə/ のみである。軽声音節が発話末に現れることは決してない。一部の付属語では単語末に軽声音節が現れることがある。このような場合、後ろに別の形式が現れなければ発話が不可能であることを明確に示すため、/jə- lì/(1sg-行く)「私は行った」のように、軽声音節の後ろにハイフンをつける。下に例を示す。

/ləcɛ̀/ 少し、/həmənī/ 人間、/chəkhlàiɴ/ 言葉、/chəʔàiɴlàɴ/ ポー・カレンの祭りの一種 (ビルマ語ではオーボエーと呼ばれる; Burmese /ʔɔ́bwɛ́/)、/ləpɔ̀/ 波、/kəchâɴ/ 象、/thəʔàɴ/ パアン (Hpa-an)

Phillips (2000) は、Cooke et al.(1976) や Kato (1995) が音素レベルで軽声音節を定めているのに反論し、軽声音節は音素レベルで設定すべきものではないと主張する。これらは、句や節における場所に基づいて強勢を失ったもの (reduced based on their position in a phrase or clause rather than their inherent morphemic quality) だとする。確かに、軽声音節は絶対語末には現れない。また、語中にはあまり現れない。そのため、軽声音節の本来の音素的ステイタスは、例えば /Cə̀/ であり、絶対語末以外の位置に現れた場合に出

現場所の影響を受けて強勢を失うのだとする解釈は不可能ではなく、また、軽声音節という範疇を設定しなくてもよいことになって魅力的である。しかし、本論文ではこの考え方を採用しない。なぜなら、このように考えると、次のような問題が生じるからである。

まず、この考え方の前提は、軽声音節としての発音と声調を持つ音節としての発音は自由変異だということである。しかし、例えば /kəchâɴ/「象」が、*/kəchâɴ/ と発音されることはあり得ない。また、例えば /chəchàlàɴthò/「雨期の始まり」という単語を例にとると、/ə/ と /à/ がもし自由変異であるなら、*/chəchəlàɴthò/ あるいは */chàchəlàɴthò/ のような発音もあり得るはずだが、実際にはそのような発音はあり得ない。したがって、軽声音節は音素レベルで設定されていると考えるべきである。このことを確認した上で、次の例を見られたい。

(1) phílâɴ　**jà**　láiʔàʊ
　与える　1SG　本
　「私に本をください」

(2) phílâɴ　**jə-**　láiʔàʊ
　与える　1sg　本
　「私の本を (誰かに) 与えよ」

この二つの文の意味の違いを、聞き手は、一人称単数代名詞が jà と発音されるか jə- と発音されるかに基づいて判断する。確かに、(1) の構造は、

phílâɴ [$_{NP}$ **jà**] [$_{NP}$ láiʔàʊ]

であろうし、(2) の構造は、

phílâɴ [$_{NP}$ **jə-** láiʔàʊ]

であろうから、この二つの発音の違いの原因を構造上の位置に求めることは不可能ではない。しかし、/kəchâɴ/ や /chəchàlàɴthò/ では語彙レベルで決まっているものが、ここでは統語上の位置によって決定されると考えるのは極めて不自然である。したがって、代名詞の jà と jə- の違いは語彙レベルで設定されていると見なすべきである。本論文では、jə- を代名詞の第一形、jà を代名詞の第二形と呼ぶ (第 9 章)。

2.7　イントネーション

東南アジアの声調言語には、イントネーションがあまり自由には付かない言語がある。例えば、タイ語はそのような言語の一つである (宇佐美洋 p.c.)。その原因は、音の高低が既に音素レベルで設定されているため、イントネーションを自由にしてしまうと単語の意味が正確に伝わらない危険性が増すことにあると思われる。しかしながら、ポー・カレン語東部方言は、声調言語でありながら、イントネーションによるピッチの歪みが比較的頻繁に観察される言語である。その頻度は、明らかに、同じカレン系言語であるスゴー・カレン語やポー・カレン語西部方言よりも高い。

今のところ、イントネーションにいくつの型があるかについてははっきりとは言えない。しかし、頻繁に用いられる二つのタイプの上昇調イントネーションについては言及しておかねばならない。一つは、[22345] くらいの穏やかな上昇調イントネーションである。以下ではこれを (↗) で表す。もう一つは、[345**67**] とでも表せるような、急激な上昇調イントネーションである。このイントネーションでは、通常の会話で用いられる音域を越えて、極めて高いピッチに達する。そのことを [6] および [7] という通常は用いられない表記で示した。以下ではこれを (⇑) で表す。これらのイントネーションが付くと、音節固有の声調は完全にうち消され、声調の対立が失われてしまう。どちらのイントネーションとも、一つの音節に付くことが多いようである。

2.7.1　穏やかな上昇調イントネーション

穏やかな上昇調イントネーション (↗) がしばしば観察されるのは次のような環境においてである。

断定を表す副助詞 lɔ̂ の前　断定を表す副助詞 lɔ̂(第 24 章) の直前の音節がしばしばこのイントネーションを伴う。

(3) lə-　ɣà(↗)　lɔ̂
　一　～人　(断定)
　「一人だけだ」

(4) lə-　béɪɴ(↗)　lɔ̂
　一　～枚　(断定)
　「一枚だけだ」

(5) jə-　mə-　ʔáɴ(↗)　lɔ̂
　1sg　(非現)　食べる　(断定)
　「(もうすぐ) 私は食べる」

(6) jə-　mə-　jʊ̄(↗)　lɔ̂
　1sg　(非現)　見る　(断定)
　「(もうすぐ) 私は見る」

(7) chə-　mə-　chə̀ɴ(↗)　lɔ̂
　CHə　(非現)　降る　(断定)
　「(もうすぐ) 雨が降る」

完了を表す副助詞 jàʊ の前　完了 (perfect) を表す副助詞 jàʊ(第 24 章) の前でもしばしばこのイントネーションが観察される。

(8) bá(↗)　jàʊ
　正しい　(完)
　「もう正しくなった」

(9) nī(↗)　jàʊ
得る　(完)
「もうもらった」

(10) ɣɛ̂(↗)　jàʊ
来る　(完)
「もう来た」

Phillips (2000) は、これを助詞 jàʊ の前における中平調への声調の交替と考えている。しかし、これは声調の交替ではない。中平調 [33(4)] の調値とこのイントネーションの旋律線 (contour) は異なるというのが理由の一つである。もう一つは、例えば、(8) を普通に次のように発音してもかまわないからである。すなわちこれは、特定の環境における声調交替ではない。

(11) bá[44]　jàʊ
正しい　(完)

(8) と (11) の違いは、(8) が、「正しい」という状態が発生することを話者が強く望んでいたことを表すのに対し、(11) にはそのような意味合いがないということである。このような、特定の旋律線が特定の意味を担うという現象は、イントネーションに見られるものである。服部四郎 (1960:102) は「音調の型は或種の意味を表すのに対し、音素・強め、韻素・単語高さアクセントはそれ自身何等の意味をも表わさない。」と述べている。「音調の型」とは本論文のイントネーションに相当する。

確認の意を込めた応答の文において　さらに、相手の意向を確認する質問の文、および、それに対する答えの文において、このイントネーションが現れる。

(12) nə-　mə-　ɣɛ̂(↗)　ʁâ
2sg　(非現)　来る　(疑)
「あなたは本当に来ますか?」

—— jə-　mə-　ɣɛ̂(↗)
1sg　(非現)　来る
「私は本当に来ます」

2.7.2　急激な上昇調イントネーション

もう一つの急激な上昇調イントネーション (⇑) は、話者が特に強調したい音節に付ける。

(13) ɣánɴ　mjâ(⇑)
泣く　大変
「ひどく泣きじゃくった」

(14) lì　lʉ́ʉ(⇑)　ləkōʊɴ　jàʊ
来る　(場)　(地名)　(完)
「ヤンゴンに行ってしまった」

(15) ʔɔ́　　nāɴ(⇑)　mèiɴ　　ʔé
　　ある　(少数)　～種類　(否)
　　「まったく存在しない」

このイントネーションに関して特筆すべきことがある。それは、女性の発話において、このイントネーションが付いた音節は、しばしば裏声 (falsetto) で発音されるということである。この現象は、東部方言だけでなく、西部方言においても、ひいてはスゴー・カレン語においても観察される。そのため、この裏声の起源は相当古い可能性がある。この現象は、女性の発話にのみ見られるという点でも興味深い。

2.8　本論文の表記

本論文におけるポー・カレン語の発音表記は、すべて音素表記である。/　/ は、ビルマ語やタイ語やモン語などのポー・カレン語以外の言語の形式を引用する場合以外には用いない。

第3章　品詞分類

3.1　五つの品詞

拙論では、ポー・カレン語の単語を以下に掲げる 5 品詞に分類する。

- **名詞** (noun)
- **動詞** (verb)
- **副詞** (adverb)
- **助詞** (particle)
- **感嘆詞** (interjection)

感嘆詞は他の語と統語的な関係を持たない特殊な品詞である。これを除いた残り四つの品詞を区別するためのテストとして、(i) 単独で文を形成することができる、(ii) 動詞助詞をつけることができる、(iii) 動詞の項になることができる、の三つを設定する。これらの基準に合致するかどうかを yes/no で示すと次のとおりである。

	(i)	(ii)	(iii)
名詞	yes	no	yes
動詞	yes	yes	yes
副詞	yes	no	no
助詞	no	no	no

まず (i) について。これは助詞とそれ以外の品詞を区別するための基準である。名詞・動詞・副詞は次のように単独で文を形成することができる。

(1) [名詞]　phlòʊɴ　「(その人は) カレン人だ」
　　カレン人

(2) [動詞]　lɩ̀　「(その人は) 行った」
　　行く

(3) [副詞]　ləpòʊɴ　「たくさん (ある)」
　　たくさん

しかし、助詞は単独で文を形成することができない。次の例の lé は、場所を表す助詞である。

(4) [助詞]　*lé
　　(場)

次に (ii) について。これは単独で文を形成することができる単語の中から動詞を選び出すための基準である。動詞助詞には動詞の前に置かれるものと後に置かれるものがあり、その数は多い。そのうち、非現実法を表す mə- や否定を表す lə- が、どのような動詞とも共起し得るため、テストを行うためには便利である。次のように、動詞にはこれら動詞助詞をつけることができる[1]。

(5) [動詞]　mə-　lì　「行くだろう」
　　(非現)　行く

(6) [動詞]　lə-　lì　「行かないこと」
　　(否)　行く

しかし、名詞や副詞にこれら助詞を付けることはできない。

(7) [名詞]　*mə-　phlòʊɴ
　　(非現)　カレン人

(8) [名詞]　*lə-　phlòʊɴ
　　(否)　カレン人

(9) [副詞]　*mə-　ləpòʊɴ
　　(非現)　たくさん

(10) [副詞]　*lə-　ləpòʊɴ
　　(否)　たくさん

次に (iii) について。これは単独で文を形成することができる単語の中から副詞を選び出すための基準である。名詞や動詞は、次に示すように、動詞の項、すなわち動詞の主語や目的語になることができる。下に示すのは、名詞および動詞が、主語として現れた例である[2]。

(11) [名詞]　**phlòʊɴ**　ʔɔ́　「人がいる」
　　人　いる

[1]動詞助詞は、動詞に付く助詞である。一方、次節で述べるとおり、側置助詞や名詞修飾助詞は名詞句に付く助詞である。であれば、単独で文を形成することができる単語の中から名詞を選ぶために、側置助詞や名詞修飾助詞が付くかどうかを見るという方法が可能かというと、そうではない。なぜなら、動詞は (iii) の基準に見るように、主語や目的語になることができる。これはすなわち文中で名詞句の役割を担っているということである。動詞が文中で名詞句の役割を担う場合に、側置助詞や名詞修飾助詞が共起することがある。したがって、この方法を、名詞を選び出すために用いることはできない。

[2]動詞が項になっているように見える現象は、正確には、一個の動詞から成る補文 (第 22 章を参照) が主語や目的語の位置に現れた現象と捉えるべきである。なぜなら、項になった動詞のまわりには補語が現れることができるからである。例えば、hə- lì cəpâɴ jɔ̂ (1pl-行く-日本-容易な)「私達が日本に行くのは簡単だ」。また、動詞句も目的語の位置に現れることがあるので、一個の動詞から成る動詞句が目的語の位置に現れた場合も、動詞が項になっているように見える (第 16 章参照)。

(12) [動詞]　**lì**　　jɔ̀　　「行くのは簡単だ」
　　行く　容易な

しかし、副詞は主語になることができない。

(13) [副詞]　***ləpòʊɴ**　ʔɔ́
　　たくさん　ある

つまり、単独で文を形成することができる単語のうち動詞の項になることができないものが副詞である。

以上が、名詞、動詞、副詞、助詞の 4 品詞を見極めるためのテストである。残り一つの感嘆詞については、第 20 章を見ていただきたい。

3.2　助詞の分類

上で定義した 4 品詞のうち、助詞には様々な機能を持つ単語が含まれている。これらは単独で文を形成することができないという点においてのみ共通するのであって、名詞や動詞に見られるような均質性を持たない。ある任意の助詞を取り上げれば、その助詞は一部の助詞とのみ特徴を共有するだけであり、他の助詞とは必ずしも共通する特徴を持たない。そこで、ポー・カレン語の文法記述を精度の高いものにしていくためには、助詞をさらにいくつかのグループに分類しておく必要がある。

拙論では助詞を分類する基準として次の二つを用いる。

(1) 文中に何らかの統語的単位を導入するか。
(2) どのような単位に付くのか。

この二つの基準により、側置助詞、従属節助詞、一般助詞、名詞修飾助詞、動詞助詞、副助詞、文末助詞という 7 種類の助詞を設定する。次の表にまとめた通りである。

何らかの統語的単位を導入する機能を持つもの

助詞の種類	何に付くか?
• **側置助詞**(adpositional particle)	名詞句
• **従属節助詞**(subordinate clause particle)	節

何らかの統語的単位を導入する機能を持たないもの

助詞の種類	何に付くか?
• **一般助詞**(general particle)	補語, 従属節など様々
• **名詞修飾助詞**(noun modifying particle)	名詞句
• **動詞助詞**(verb particle)	動詞
• **副助詞**(adverbial particle)	動詞句または述語名詞句
• **文助詞**(sentence particle)	文

まず、何らかの統語的単位を導入する機能を持つものには、側置助詞と従属節助詞がある。

側置助詞は英語等の言語における前置詞に似た働きを持つ助詞で、名詞句に付くことによって、その名詞句を補語 (次章参照) として働かせる機能を持つ。名詞句は主語と目的語を除けばそのままでは補語になることはできない。しかし、側置助詞が付けば名詞句は補語として機能することができるようになる。すなわち、側置助詞は、文中に補語を導入する働きを持つと考えることができる。

節は、補語として現れた場合 (すなわち補文) を除くと、従属節助詞が付かなければそのまま文中に現れることができないのが一般的である。すなわち、従属節助詞は文中に従属節を導入する働きを持つ。

一方、側置助詞と従属節助詞以外の助詞、すなわち、一般助詞、名詞修飾助詞、動詞助詞、副助詞、文助詞は、何らかの統語的単位を文中に導入する働きを持たない。これらの助詞は、いわば、付いた相手の要素を「修飾」するために使われると言うことができる。

一般助詞は、補語や従属節など、様々な要素に付く助詞であるが、助詞によって付けることのできる要素は異なる。名詞修飾助詞は、名詞句に付く助詞である。動詞助詞は、動詞に付く助詞である。副助詞は、動詞句あるいは述語名詞句に付く助詞である。最後の文助詞は、文に付く助詞である。

上記 7 種類の助詞については、それぞれ独立の章をもうけて詳細を記述してある。側置助詞は第 11 章、従属節助詞は第 21 章、一般助詞は第 26 章、名詞修飾助詞は第 14 章、動詞助詞は第 18 章、副助詞は第 24 章、文助詞は第 25 章をそれぞれ見ていただきたい。

第4章　基本語順および本論文での記述に用いる様々な基本的概念

ポー・カレン語は周辺の東南アジア大陸部諸言語と似て、形態論があまり複雑ではない。屈折変化は、代名詞の体系がそのように捉えられる可能性があるのみで、存在しないと言ってしまうことも可能であろう。代名詞の体系を除けば、形態論は派生と複合からなると言ってよい。一方、文中に現れる名詞句のうち、行為者や被動者を表す名詞句のような、動詞の表す意味にとって重要なものは語順によって表され、修飾語と被修飾語の関係も語順によって表されることが多いと言ってもよい。したがって、ポー・カレン語文法の類型的特徴を至極大雑把に捉えるならば、全体としては「孤立語的」と言えるような特徴を持っている。

この章では、4.1 においてまずポー・カレン語の基本語順を概観し、4.2 以降で、本論文の様々な議論のために必要となる基本的概念についての定義を行っていく。

なお、本論文では、動詞や節や文の表す動作 (action)/状態変化 (change of state)/状態 (state) などすべてを含めて、**事象**(event) と呼ぶ[1] 。

4.1　基本語順

様々な要素の配列順序をここで概観しておく。

4.1.1　動詞と項

自動詞 (厳密な定義は第 15 章) の場合の唯一項と動詞の順序は「唯一項 (=主語)+ 動詞」となる。

(1) láiʔàʊ　làɴthé
　本　　落ちる
　「本が落ちた」

(2) θàʔwà　chînàɴ
　(人名)　座る
　「ターワーが座った」

この語順は、存在や出現を表す文においても保たれる。これは名詞の表すものが既知の場合であれ未知の場合であれ同様である[2] 。

[1]Lyons (1977) は、本論文の「事象」に相当する用語として ‘situation’ を用いている (p.483)。

[2]東南アジアから東アジアにかけての SVO 型言語には、存在や出現を表す文 (いわゆる存現文) の場合に主語名詞と動詞を倒置させる言語が少なくない。

(3) láiʔàʊ　ʔɔ́
本　　ある
「本がある」

(4) lái　ɣɛ̂
手紙　来る
「手紙が来た」

(5) chənɔ́　ʔɔ́　lɛ̂
何　　ある　(疑)
「何があるのか?」

次に、他動詞 (厳密な定義は第 15 章) の場合は、「行為者を表す名詞句 (=主語)+ 動詞 + 被動者を表す名詞句 (=目的語)」という語順になる。

(6) θàʔwà　dʊ́　cɔ̀khléiɴ
(人名)　殴る　(人名)
「ターワーはチョークレインを殴った」

(7) θàʔwà　pɔ̄　láiʔàʊ
(人名)　読む　本
「ターワーは本を読んだ」

(8) θàʔwà　ɣə̂ɴ　ʔəθɔ̂
(人名)　聞こえる　音
「ターワーには音が聞こえた」

主語の倒置

次の二つの場合にのみ、主語が動詞 (+ 目的語) の後に置かれることがある。これを主語の**倒置**と呼ぶ。一つは、命令文において行為者を強調する場合である。この場合、主語名詞句にはしばしば名詞修飾助詞の nɔ́「その、あの」が付く。下に例を挙げる。倒置された主語の前に △ を付ける。

(9) phà　nàiɴ　△ nə̀　nɔ́　nàɴ　thí　dɔ̀
当てる　(返答)　2SG　その　(少数)　～回　(別個)
「今度はあなたが (なぞなぞに) 答えてください」(019.26)

(10) thàiɴ　wī　△ nə̀　nɔ́
帰る　(先行)　2SG　その
「あなたが先に帰ってください」(001.472)

(11) ʔánɴ　kʊ́　△ nə̀　nɔ́
食べる　菓子　2SG　その
「あなたが菓子を食べてください」

もう一つは、特定の助詞が文中で用いられた場合である。すなわち、限定を表す名詞修飾助詞の kəjɛ̄ や kənī (第 14 章 14.4, 14.5)、また、新しい局面を表す動詞助詞の θâ (第 18 章 18.29) が使われたときに、主語の倒置がしばしば生じる。以下に例を挙げる。

(12) ʔáɴ　kʊ́　△ kənī　həkhwâ　lɔ̂
食べる　菓子　(限定)　男　(断定)
「男だけが菓子を食べた」(001.1607)

(13) θàʊ　△ kənī　pəθí　lɔ̂　kà　ʔé
うるさい　(限定)　1pl　(断定)　限る　NEG
「うるさいのは私達だけではない」(V-03.50)

(14) ɣɛ̂　△ kənī　ʔəkhwâ　lɔ̂
来る　(限定)　男　(断定)
「男だけが来た」(001.1607)

(15) ʔɔ́　θâ　△ ʔəxí　dè　ʔəphài
ある　(新局)　骨　(列挙)　皮
「骨と皮しか残っていなかった」(V-01.78)

(16) ʔɔ́tʰɔ̄　θâ　△ ʔətʰàiɴ　xâiɴ　θɛ̀　tʰəmā　lɔ̂
残る　(新局)　枝　乾いた　(複)　専ら　(断定)
「(木々は葉が落ちて) 乾いた枝だけになってしまっていた」(V-05.5)

4.1.2　動詞と副詞

動詞を修飾する副詞は動詞 (+ 目的語) の後に置かれる。

(17) θàʔwà　ʔáɴ　mì　**phlɛ́phlɛ́**
(人名)　食べる　ご飯　速く
「ターワーは速くご飯を食べた」

副詞には文頭に置かれるものもある。副詞については第 19 章をご覧いただきたい。

4.1.3　名詞と関係節

この言語では、名詞を修飾する単独の動詞と関係節とを区別しなければならない理由はない。関係節の作り方のうち頻度が高いのは、関係節をそのまま名詞の前や後に置く方法である。主要部名詞が関係節の主語に相当する場合には、関係節を後に置く場合が多い。

(18) dòʊɴ　[$_R$ phàdʊ́]
町　大きな
「大きな町」

(19) phlòʊɴ　[$_R$ lì　　lé　　cəpâɴ]
　　人　　行く　(場)　日本
　　「日本に行った人」

それ以外の場合には、関係節を前に置く場合が多い。

(20) [$_R$ nə-　pɔ̄]　láiʔàʊ
　　2sg　読む　本
　　「あなたが読んだ本」

実際には、主要部名詞が関係節の主語に相当する場合であっても、その名詞の特定性が高い場合には関係節が名詞の前に置かれるなど、単純ではない問題がある。詳細については、第 23 章を見ていただきたい。

4.1.4　名詞と名詞

名詞と名詞の順序についての詳細は第 8 章を参照されたい。ここではごく大雑把に述べておく。

意味的に限定する側の名詞は、限定される側の名詞の前に置かれることが多い。

(21) thîkhāɴ　ʔəɣāiɴʔəbjà
　　国　　力
　　「国の力」

固有名詞も、一般の名詞の前に置かれる[3] 。

(22) pəjàɴ　khāɴ
　　ビルマ　国
　　「ビルマ国」

(23) thəʔàɴ　dòʊɴ
　　パアン　町
　　「パアン市」

所有者を表す名詞は、所有物を表す名詞の前に置かれる。

(24) chərâ　(ʔə-)　láiʔàʊ
　　先生　3sg　本
　　「先生の本」

[3]実は、地名を表す固有名詞の場合に限り、例外的に後に置かれることもある。この語順はあらゆる場合に可能というわけではなく、一部の地名にのみ見られる。
khāɴ　pəjàɴ　「ビルマ国」
国　ビルマ
dòʊɴ　thəʔàɴ　「パアン市」
町　パアン
このような「逆」の語順の使用は文体を高める効果を持っているようであるが、詳しいことはまだ分からない。

側置助詞に導かれた名詞が名詞を修飾する場合、修飾される側の名詞の後に置かれる。

(25) chərâ　lé　cōɴ　jò
先生　(場)　学校　この
「この学校の先生」

4.1.5　動詞と動詞助詞

動詞に付く助詞である動詞助詞 (いわゆる助動詞に相当する) には、次のように動詞の前に付くものや、

(26) bá　lì
(当為)　行く
「行かなければならない」

次のように動詞の後に付くものがある。

(27) lì　jū
行く　(試行)
「行ってみる」

動詞助詞の詳細については第 18 章を見ていただきたい。

4.1.6　動詞と否定を表す助詞

ポー・カレン語では、主節と従属節とで使われる否定の助詞が異なる。主節では、述部に副助詞の ʔé が置かれる。詳細については第 24 章 24.4.1 を見ていただきたい。

(28) jə-　ʔáɴ　mì　ʔé
1sg　食べる　ご飯　(否)
「私はご飯を食べなかった」

従属節では、動詞の直前に動詞助詞の lə- が置かれる。そのとき、動詞または動詞句の後に、lə- を補助するための特殊な形式 bá が置かれることが多い。詳細については、第 18 章 18.2 を見ていただきたい。

(29) ʔəwê　lə-　ʔáɴ　mì　bá　ʔəkhʊ́còɴ |　jə-　ʔáɴ
3sg　(否)　食べる　ご飯　(否')　(理由)　1sg　食べる
「彼がご飯を食べなかったので、私が食べた」

本論文では、否定を表す lə- と ʔé を**否定辞**と呼ぶことがある。

4.1.7　名詞と側置助詞

側置助詞 (いわゆる前置詞や後置詞に相当する) には、次のように名詞の前に付くものと、

(30) dè　kā
(共)　自動車
「自動車で」

次のように名詞の両側に付くものとがある。

(31) bê　cəpâɴ　θò
(比定)　日本人　(比定')
「日本人のように」

側置助詞の詳細については第 11 章を見ていただきたい。

4.1.8　主節と副詞節

副詞節のほとんどは、次のように主節の前に置かれるのが普通である。

(32) chəchàɴ　ʔá　ʔəkhʊ́còɴ | chəkáchəɣɛ̀　ʔá
雨　多い　(理由)　困難　多い
「雨が多いので困難が多い」

しかし、次のように主節の後に置かれるものもある。

(33) mə-　ʔɔ́khò | thōɴ　ʔəwê　ɣɛ̂　thàiɴ　khó
(非現)　待つ　(限界)　3sg　来る　帰る　(将来)
「彼が来るまで待つよ」(004.34)

詳細については第 21 章を見ていただきたい。

4.1.9　疑問を表す文の作り方

疑問を表す文において語順をかえる必要はまったくない。疑問は、文助詞の ʁâ や lɛ̂ によって表す。疑問語 (第 27 章参照) がない場合は ʁâ が使われ、疑問語が現れた場合には lɛ̂ が使われる。

(34) nə-　ʔáɴ　mʉ̀　ʁâ
2sg　食べる　ご飯　(疑)
「あなたはご飯を食べましたか?」

(35) nə-　ʔáɴ　chənɔ́　lɛ̂
2sg　食べる　何　(疑)
「あなたは何を食べましたか?」

詳細については第 25 章 25.1,25.2 および第 27 章を見ていただきたい。

以降、本論文の様々な議論のために必要となる様々な基本的概念の定義を行っていく。

4.2　主語と目的語と斜格補語

文中に現れる名詞句を**補語**(complement) と呼ぶ[4]。ただし、述語になった名詞句と、名詞(句) を直接修飾する名詞句は補語とは呼ばない。補語は、**主語**(subject)、**目的語**(object)、**斜格補語**(oblique complement) の 3 種類に分けることができる。このうち主語と目的語をあわせて**項**(argument) と呼ぶことがある。以下に、主語、目的語、斜格補語の順に定義を示す。

4.2.1　主語

本論文では動詞 (正確には動詞複合体。第 16 章参照) の直前に現れた名詞句をその節の主語と呼ぶ。すなわち、次に太字で示したような名詞句である。

(36) **θàʔwà**　chînàɴ
　　(人名)　座る
　　「ターワーは座った」

(37) **θàʔwà**　ʔáɴ　mì
　　(人名)　食べる　ご飯
　　「ターワーはご飯を食べた」

次の文における θə̂ɴ jò は主語ではない。

(38) θə̂ɴ　jò　ʔáɴ　ʔé
　　おかず　この　食べる　(否)
　　「このおかずは食べない」

なぜなら、この名詞句の後に別の名詞句が現れ得るからである。例えば、次のように θə̂ɴ jò の後に θàʔwà を補うことができる。正真正銘の主語はこの θàʔwà である。

(39) θə̂ɴ　jò　θàʔwà　ʔáɴ　ʔé
　　おかず　この　(人名)　食べる　(否)
　　「このおかずはターワーは食べない」

文頭に現れた θə̂ɴ jò は、後で述べる主題化によって目的語が文頭位置に置かれただけにすぎない。

さらに、次の (A)(B)(C) のような名詞句も主語と見なす。

(A) 分離型動詞連続 (第 17 章参照) において、最初の動詞 (V1 と呼ぶ) の直前に現れた名詞句。本論文では、これを V1 の主語ではなく、分離型動詞連続全体の主語だと考える。

(40) **θàʔwà**　ʔáɴ　mì　ʔwí
　　(人名)　食べる　ご飯　おいしい
　　「ターワーがご飯を食べたらおいしかった」

[4]補語という用語は、伝統的英文法などでコピュラ動詞の目的語などを表すために用いられるが、本論文ではより広い意味でこの用語を用いる。

(41) **θàʔwà**　ʔánɴ　mì　blɛ̀
(人名)　食べる　ご飯　腹一杯の
「ターワーはご飯を食べて腹一杯になった」

(42) **θàʔwà**　jū　ʔəwê　ɣì
(人名)　見る　3se　美しい
「ターワーが彼女を見たところ、(彼女は) 美しかった」」

(B) 次のような文における最初の名詞句。この文では、名詞句が二つ並び、二番目の名詞句が、最初の名詞句が表すものの属性を表している。

(43) **ʔəwê**　phlòʊɴ
3se　カレン人
「彼はカレン人だ」

(44) **θàʔwà**　phʊ́θá　dài
(人名)　子供　まだ
「ターワーはまだ子供だ」

(C) 次のような文における最初の名詞句。この文では、< > でくくった部分が「名詞句 + 動詞」という形をしており、この部分の名詞句は動詞の前に現れているので、上の定義により主語である。ところが、この主語の前にもう一つの名詞句が現れている。二番目の名詞句が指示するものは、最初の名詞句の指示するものの所有物である。

(45) **θàʔwà**　< khʊ́náʊ　ɣì >
(人名)　脳　良い
「ターワーは頭が良い」

(46) **θàʔwà**　< kháɴ　khā >
(人名)　脚　折れる
「ターワーは脚の骨が折れた」

上の (A)(B)(C) の名詞句をすべて主語と見なすのには理由がある。それは、これらの名詞句が、最初の定義による「動詞の直前に現れた名詞句」と、次に挙げる二つの点において共通だからである。

一つは、「自分」という意味の名詞 nâɴkəchā がこれらの名詞句のみを指示するということである。

「動詞の直前に現れた名詞句」:

(47) **θàʔwà**$_i$　dʊ́　ʔəwê　dè　**nâɴkəchā**$_i$　lé
(人名)　殴る　3se　(共)　自分　棒
「ターワーは自分の棒で彼を殴った」

(A) の例:

(48) **θàʔwà**$_i$　jū　ʔəwê　ɣì　lé　**nâɴkəchā**$_i$　təwânɴ　phànɴ
(人名)　見る　3se　美しい　(場)　自分　村　中
「ターワーが自分の村で彼女を見た時、(彼女は) 美しかった」」

(B) の例:

(49) **ʔəwê**$_i$　khǔklànɴ　lé　**nâɴkəchā**$_i$　təwânɴ　phànɴ
3se　首長　(場)　自分　村　中
「彼は自分の村の中では首長である」

(C) の例:

(50) **θàʔwà**$_i$　khánɴ　khā　lé　**nâɴkəchā**$_i$　ɣéinɴ　phànɴ
(人名)　脚　折れる　(場)　自分　家　中
「ターワーは自分の家で脚の骨を折った」

もう一つは、後置型の関係節 (第 23 章参照) を作る際の振る舞いが共通しているということである。例えば次の文の同一指示の二つの名詞句 ʔəwê を関係節化することを考える。この文における二つの ʔəwê は最初の「動詞の直前」という基準による主語である。

(51) **ʔəwê**$_i$　mà　thàkhǔ　ɣònɴ |　**ʔəwê**$_i$　thə́ɯɴlī　tōʊɴ
3se　作る　歌　(継起)　3se　踊る　ドン舞踊
「彼は歌を歌って、ドン舞踊を踊った」

この例では、両方の名詞句を削除することによって、次のように関係節化することができる。

(52) phlòʊɴ　[$_R$ ∅　mà　thàkhǔ　ɣònɴ |　∅　thə́ɯɴlī　tōʊɴ]
人　作る　歌　(継起)　踊る　ドン舞踊
「歌を歌ってドン舞踊を踊った人」

一方、次の複文における二つの節の ʔəwê を同時に関係節化することはできるだろうか。

(53) **ʔəwê**$_i$　mà　thàkhǔ　ɣònɴ |　chərâ　dǔ　**ʔəwê**$_i$
3se　作る　歌　(継起)　先生　殴る　3se
「彼は歌を歌って、先生に殴られた」

答えは否である。次を見られたい。

(54) *phlòʊɴ　[$_R$ ∅　mà　thàkhǔ　ɣònɴ |　chərâ　dǔ　∅]
人　作る　歌　(継起)　先生　殴る
(歌を歌って、先生に殴られた人)

これが不適格である理由は、関係節化された要素が先行する節では主語、後続する節では目的語であり、統語的な役割が異なるからである。すなわち、複文の二つの節に存在する同一指示の名詞句を関係節化する場合、その名詞句は統語的に同等の役割を持っていなければならないのである。この観点から見ると、上の (A)(B)(C) は、「動詞の直前に現れた名詞句」と同等の役割を持っていると考えられる。なぜなら、(A)(B)(C) の条件に合致する名詞句は、「動詞の直前に現れた名詞句」と共に関係節化することが可能だからである。まず、次の例では、先行する節における (A) の基準に合致する名詞句と、後続する節における「動詞の直前に現れた名詞句」が同時に関係節化されている。

(55) phlòʊɴ　[$_R$ ∅　ʔánɴ　jáθêiɴ　ʔwí　ɣòɴ |　∅　lì　cəpâɴ]
人　食べる　生魚　おいしい　(継起)　行く　日本
「生魚を食べるのが好きで、日本に行った人」

次の例では、先行する節における (B) の基準に合致する名詞句と、後続する節における「動詞の直前に現れた名詞句」が同時に関係節化されている。

(56) phlòʊɴ　[$_R$ ∅　phʊ́θá　dài　lānânɴ |　∅　lì　cəpâɴ]
人　子供　まだ　(逆接)　行く　日本
「まだ子供なのに日本に行った人」

次の例では、先行する節における (C) の基準に合致する名詞句と、後続する節における「動詞の直前に現れた名詞句」が同時に関係節化されている。

(57) phlòʊɴ　[$_R$ ∅　khʊ́náʊ　ɣì　ɣòɴ |　∅　lì　cəpâɴ]
人　脳　良い　(継起)　行く　日本
「頭が良くて日本に行った人」

上の二つの理由により、(A)(B)(C) の名詞句はすべて「動詞の直前に現れた名詞句」と同じ統語的範疇、すなわち主語に属するものであると考えることができる。本論文では、(B) のような文を**等式文**(equational sentence)、(C) のような文を**二重主語文**と呼ぶ。

なお、等式文が表す命題は、いわゆる繋辞動詞 (copula verb) mwɛ̄ を用いた次のような文によっても表すことができる。

(58) ʔəwê　mwɛ̄　phlòʊɴ
3se　(繋)　カレン人
「彼はカレン人だ」

4.2.2　目的語

動詞文において動詞 (正確には動詞複合体) の直後に現れた名詞句を目的語と呼ぶ。以下の例で太字で示した名詞句が目的語である。

(59) cɔ̀khléiɴ　dʊ́　**θàʔwà**
(人名)　殴る　(人名)
「チョークレインはターワーを殴った」

(60) cɔ̀khléiɴ　dá　**θàʔwà**
1sg　見える　(人名)
「チョークレインにはターワーが見える」

(61) θàʔwà　lì　**phjā**
(人名)　行く　僧院
「ターワーは僧院に行った」

(62) θàʔwà　pɔ̄　jʊ̄　**láiʔàʊ**
(人名)　読む　(試行)　本
「ターワーは本を読んでみた」

(63) cɔ̀khléiɴ　dʊ́　θî　**θàʔwà**
(人名)　殴る　死ぬ　(人名)
「チョークレインはターワーを殴った」

なお、目的語を取ることのできない動詞を自動詞、目的語を取ることのできる動詞を他動詞と呼ぶ。自動詞と他動詞についての厳密な定義と詳しい議論は第 15 章で行う。

ところで、動詞の直後に二つの名詞句が連続して現れることがある。このような二つの名詞句も目的語と呼ぶ。二つの名詞句を従えることのできる動詞は、これまでに次のようなものが見つかっている。

phílâɴ「与える」

(64) chàɴkhɯ́ʔwà　phílâɴ　**θàʔwà**　**khòθá**
(人名)　与える　(人名)　マンゴー
「チャウンクーワーはターワーにマンゴーをやった」

dàʊnɛ́「見せる」

(65) chàɴkhɯ́ʔwà　dàʊnɛ́　**θàʔwà**　**khòθá**
(人名)　見せる　(人名)　マンゴー
「チャウンクーワーはターワーにマンゴーを見せた」

ʔáɴcà「尋ねる」

(66) chàɴkhɯ́ʔwà　ʔáɴcà　**θàʔwà**　**láiphlòʊɴ**
(人名)　尋ねる　(人名)　カレン文字
「チャウンクーワーはターワーにカレン文字について尋ねた」

chônmóɴ「考える」

(67) chàɴkhɯ́ʔwà　chônmóɴ　**θàʔwà**　**cəpâɴ**
(人名)　考える　(人名)　日本人
「チャウンクーワーはターワーを日本人だと考えている」

なお、ビルマ語からの借用語 thîɴ (cf. Burmese /thìɴ-/) も二つの目的語を従えることができる。

(68) ʔəwê　mə-　thîɴ　bá　**nə̀**　**cəpâɴ**
(人名)　(非現)　考える　(無意)　2SG　日本人
「彼はあなたを日本人だと思ってしまうだろう」

kò 「呼ぶ」

(69) chàɴkhɯ́ʔwà　kò　**θàʔwà**　**cɔ̂**
(人名)　呼ぶ　(人名)　兄
「チャウンクーワーはターワーをお兄さんと呼ぶ」

本論文では、二つ連続して現れた目的語のうち、最初のものを**第一目的語**(first object)、2 番目のものを**第二目的語**(second object) と呼ぶ[5] 。

第二目的語は、道具や随伴者を表す側置助詞の dè によって切り離すことができる。動詞 phúlâɴ を例に取って示す。

(70) chàɴkhɯ́ʔwà　phúlâɴ　θàʔwà　**dè**　**khòθá**
(人名)　与える　(人名)　(共)　マンゴー
「チャウンクーワーはターワーにマンゴーをやった」

下に示すとおり、他の動詞の場合も、第二目的語に dè を前置するパラフレーズが可能である。

(71) chàɴkhɯ́ʔwà　dàʊnɛ́　θàʔwà　**dè**　**khòθá**
(人名)　見せる　(人名)　(共)　マンゴー
「チャウンクーワーはターワーにマンゴーを見せた」

(72) chàɴkhɯ́ʔwà　ʔánɴcà　θàʔwà　**dè**　**láiphlòʊɴ**
(人名)　尋ねる　(人名)　(共)　カレン文字
「チャウンクーワーはターワーにカレン文字について尋ねた」

(73) chàɴkhɯ́ʔwà　chônmónɴ　θàʔwà　**dè**　**cəpâɴ**
(人名)　考える　(人名)　(共)　日本人
「チャウンクーワーはターワーを日本人だと考えている」

(74) ʔəwê　mə-　thîɴ　bá　nə̀　**dè**　**cəpâɴ**
(人名)　(非現)　考える　(無意)　(人名)　(共)　日本人
「彼はあなたを日本人だと思ってしまうだろう」

[5]Dryer (1986) は、ditransitive verb のいわゆる間接目的語が monotransitive verb の目的語と同じ振る舞いを示す場合、これらをまとめて primary object という言葉で呼んでいる。また、このような場合の ditransitive verb が取るいわゆる直接目的語を secondary object と呼んでいる。本論文における第一目的語と第二目的語という呼び方はあくまでも語順を基準としたものであり、Dryer の primary object / secondary object の概念とは異なることに留意されたい。

(75) chàɴkhɯ́ʔwà　kò　θàʔwà　**dè**　**cɔ̂**
(人名)　呼ぶ　(人名)　(共)　兄
「チャウンクーワーはターワーをお兄さんと呼ぶ」

また、上記の動詞のうち、phílâɴ「与える」を用いた文は、第一目的語に側置名詞 ʔəʔɔ́ (第 12 章 12.3 参照) を付けて、場所を表す側置助詞 lé を前置するパラフレーズが可能である (lé は省略可能)。

(76) jə-　phílâɴ　láiʔàʊ　(lé)　ʔəwê　ʔɔ́
1sg　与える　本　(場)　3se　ところ
「私は彼に本を与えた」

4.2.3　斜格補語

主語と目的語以外の名詞句を**斜格補語**と呼ぶ。斜格補語には 2 種類ある。

一つは、次に太字で示したような、側置助詞に導かれて現れた名詞句である。側置助詞とそれに導かれて現れた名詞句が作る句を**側置助詞句**と呼ぶ。

(77) cɔ̀khléiɴ　lɯ̀　lé　**thəʔàɴ**
(人名)　行く　(場)　(地名)
「チョークレインはパアンに行った」

(78) cɔ̀khléiɴ　lɯ̀　dè　**kā**
(人名)　行く　(共)　自動車
「チョークレインは自動車で行った」

(79) cɔ̀khléiɴ　ʔánlūɪ　thî　bê　**cəpâɴ**　θò
(人名)　浴びる　水　(比定)　日本人　(比定')
「チョークレインは日本人と同じ方法で水浴びをした」

(80) ʔəwê　cōɴ　chərâ　lé　**cəpâɴ**　ʔò
3sg　学校　先生　(場)　日本　(遠方)
「彼は (ビルマでは商売をやっているが) 日本では学校の先生である」

▷ これは名詞文に現れた斜格補語の例である。

もう一つは、次のように側置助詞なしで現れた名詞句である。側置助詞の助けがなくとも斜格補語になれるのは、時を表す名詞句と、助数名詞句 (第 10 章参照) に限られる。下に太字で示す。

(81) **mɯ̀ɣá**　cɔ̀khléiɴ　thánɴ　rōʊɴ
昨日　(人名)　上る　事務所
「昨日チョークレインは出勤した」

(82) phlòʊɴ　ɣɛ̂　jò　**θōɴ**　**ɣà**
人間　来る　ここ　三　～人
「人間がここに 3 人来た」

4.3　述部と述語

任意の節において、主語名詞句より後の部分を**述部**と呼ぶ。下に挙げた例の < > でくくった部分が述部である。

(83) θàʔwà　< ʔánɴ　mì　dè　nʊ́thòʊɴ　phlɛ́phlɛ́ >
(人名)　食べる　ご飯　(共)　匙　速く
「ターワーは匙で速くご飯を食べた」

(84) θàʔwà　< ʔánɴ　mì　blɛ̀　châ　mā　jàʊ >
(人名)　食べる　ご飯　腹一杯の　(非常)　(非常)　(完)
「ターワーはご飯を食べて非常に腹一杯になった」

(85) θàʔwà　< phʊ́θá >
(人名)　子供
「ターワーは子供だ」

(86) θàʔwà　< khʊ́náʊ　ɣì　kə̄ >
(人名)　脳　良い　(非常)
「ターワーはとても頭が良い」

述部の末尾は次のように確認することができる。すなわち、従属節助詞や文助詞が現れていれば、その直前の要素までが述部である。なぜなら、従属節助詞は節に付く要素であるため、また、文助詞は文に付く要素であるため、節の内側の要素である述部の中に入ることはないからである。

(87) θàʔwà　< ʔánɴ　mì >　**nɛ̂**
(人名)　食べる　ご飯　NE
「ターワーはご飯を食べたんですよね」

(88) θàʔwà　< ʔánɴ　mì >　**ʔəkhʊ́còɴ** | jə̀　θí　ʔánɴ
(人名)　食べる　ご飯　～なので　1SG　(類似)　食べる
「ターワーがご飯を食べたので私も食べた」

次に、述部の性質を決定する要素を**述語**と呼ぶ。(83) を例に取ると、この文の述語は ʔánɴ である。なぜなら、この動詞が述部全体の性質を決定しているからである。その証拠として、この述部を次のように命令文として使うことができるということが挙げられる。

(89) ʔánɴ　mì　dè　nʊ́thòʊɴ　phlɛ́phlɛ́
食べる　ご飯　(共)　匙　速く
「匙で速くご飯を食べよ」

命令文として用いることができるという性質は、意志動詞である ʔánɴ によって決定されている。また、補語の選択も、動詞 ʔánɴ に依存している。それは次の例が意味的に奇妙であることを考えれば分かる。

(90) ʔán　　ɕúkhló　dè　　kəbàɴ　phlɛ́phlɛ́
　　食べる　川　　(共)　船　　速く
　　「船で速く川を食べる」

この文が奇妙なのは、ʔáɴ の目的語が食べられないものを表しており、かつ、食べるための道具としては使用できないものが道具として選択されているからである。この例の ʔáɴ を例えば khâɴthé「渡る」にすれば、意味の通る文になる。したがって、補語の選択も動詞 ʔáɴ によって決定されていると言える。

上の事実から、(83) の述部の性質を決定しているのは ʔáɴ であると考えることができるだろう。すなわち、動詞 ʔáɴ が述語である。しかし、ここでは、動詞としての ʔáɴ が述語になっていると考えるよりも、第 15 章で述べる「動詞複合体」としての ʔáɴ が述語になっていると考えるほうがより一般性がある。なぜなら、動詞に様々な要素が付いている場合、述部の性質は 1 個の動詞によって決定されるのではなく、動詞複合体全体の性質によって決定されるからである。例えば、次の文の動詞複合体 dàʊ ʔáɴ bá を見てみたい。

(91) jə-　dàʊ　ʔáɴ　　bá　　ʔəwê　mì
　　1sg　(使役)　食べる　(無意)　3se　　ご飯
　　「私は彼に (誤って) ご飯を食べさせてしまった」

この述部に二つの目的語が存在するのは、被使役者を導入する助詞 dàʊ と一つの目的語を取る動詞 ʔáɴ の相互作用の結果であるし、この文の述部が無意志動詞としての性質を持つのは、動詞助詞 bá の働きによる。したがって、述部全体の性質を決定しているのは、いずれか一つの単語ではなく、dàʊ ʔáɴ bá 全体である。先ほどの ʔáɴ は、たまたま動詞複合体が一つの動詞によって形成されていると考えることができる。

(84) のような分離型動詞連続の場合は、2 番目の動詞複合体 (この場合は blɛ̀) が述語であると考えることができる。なぜなら、第 17 章で述べるとおり、分離型動詞連続では、2 番目の動詞複合体が動詞連続全体の性質を決定するからである。

(85) のような等式文の場合は、属性を表す名詞句 (この場合は phʊ́) が述語であると考えられる。この文の述部 phʊ́ は、いかなる助詞の助けがあろうとも命令文として機能することができない。これは phʊ́ が動詞ではないことに起因している。つまり、述部の特徴を phʊ́ が決定していると考えられる。

(86) のような二重主語文の場合は、述部に現れた動詞複合体が述語である。この例では ɣì が述語ということになる。これも例えば次の (a) と (b) を対比することによって証明されよう。

(92) a. θàʔwà　khʊ́náʊ　ɣì
　　(人名)　脳　　良い
　　「ターワーは頭が良い」

　　b. θàʔwà　kháɴ　khā
　　(人名)　脚　　折れる
　　「ターワーは脚の骨が折れた」

1 回だけの生起に限った場合、(a) の khʊ́náʊ ɣì「頭が良い」は発話時点の状態を表すことができるのに対し、(b) の kháɴ khā「脚の骨が折れる」は発話時点より以前に生起した

事象しか表すことができない。この違いは、(a) の ɣì が状態を表す動詞であるのに対し、(b) の khā が瞬間的な変化を表す動詞であることに起因している。したがって、二重主語文の場合、述部に現れた動詞複合体を述語と見なすことができる。

このように、述語は動詞複合体である場合と名詞句である場合の二つの場合がある。

4.4　主題化および分裂文

ポー・カレン語では、ある文が何かについての説明であるとき、その「何か」を表す要素を文頭に置くことがある。次の例を見られたい。

(93) **kʊ́**　**nɔ́**　jə-　ʔánɴ　khwái　jàʊ
　　菓子　あの　1sg　食べる　(徹底)　(完)
　　「あの菓子は私が食べてしまった」

この文は、次の文の目的語を文頭に置いたものであると考えることができる。

(94) jə-　ʔánɴ　khwái　**kʊ́**　**nɔ́**　jàʊ
　　1sg　食べる　(徹底)　菓子　あの　(完)
　　「私があの菓子を食べてしまった」

このようにして文頭に置かれた要素を**主題**(topic) と呼び、このように何らかの要素を文頭に置く操作を**主題化**(topicalization) と呼ぶことにする。そして、主題化された要素以外の部分を**評言**(comment) と呼ぶ。文例 (93) は表面上 OSV という語順を取っているが、ポー・カレン語の基本的な語順に OSV という語順が存在するとは考えないほうがよい。なぜなら、この文は事象の中立的な叙述ではなく、あくまでも「あの菓子」についての説明であるとしか取ることができないからである。つまり、この文は主題化によってこのような語順を取っていると考えることができる。

ポー・カレン語には、主題化された要素を明示する助詞がいくつかある。そのうち最も頻繁に現れるのが、次の例に現れた nɔ́ である。

(95) kʊ́　nɔ́　**nɔ́**　jə-　ʔánɴ　khwái　jàʊ
　　菓子　あの　(題)　1sg　食べる　(徹底)　(完)
　　「あの菓子は私が食べてしまった」

主題を表す助詞については第 26 章をご覧いただきたい。

主題を「主題化されたもの」と捉えるのではなく、もともと主題の位置にあるのだと考えることも可能だろう。しかし、主題化という概念で捉えたほうが、主題の位置に現れた要素が統語的にはどのような役割を持っているかを捉えることが容易である。したがって、本論文では、あくまでも便宜的に「主題化」という用語を用いていくことにする。

ポー・カレン語では文中の次のような要素を主題化することができる。

4.4.1　補語 (側置助詞句を含む)

まず、補語が主題化可能である。次の例は主語を主題化したものである。

(96) **ʔèiɴmúɪʔwà**　nɔ́　màchèɴ　chàɴkhúɪʔwà　lənìjò
(人名)　(題)　手伝う　(人名)　今日
「エインムーワーは今日チャウンクーワーを手伝った」

(97) **jə̀**　nɔ́　phlòʊɴ　lɔ̂
1SG　(題)　カレン人　(断定)
「私はカレン人だ」

次の例は目的語を主題化したものである。

(98) **chàɴkhúɪʔwà**　nɔ́　ʔèiɴmúɪʔwà　màchèɴ　lənìjò
(人名)　(題)　(人名)　手伝う　今日
「チャウンクーワーはエインムーワーが今日手伝った」

(99) **láiʔàʊ**　**jò**　nɔ́　jə-　báθà　ʔé
本　この　(題)　1sg　気に入る　(否)
「この本は私は気に入らない」

次の例は斜格補語を主題化したものである。(100) は側置助詞の付いていない斜格補語、(101) は側置助詞の付いた斜格補語である。

(100) **lənìjò**　nɔ́　ʔèiɴmúɪʔwà　màchèɴ　chàɴkhúɪʔwà
今日　(題)　(人名)　手伝う　(人名)
「今日はエインムーワーがチャウンクーワーを手伝った」

(101) lé　**ɣéiɴ**　**phèɴ**　nɔ́　ʔèiɴmúɪʔwà　màchèɴ　chàɴkhúɪʔwà
(場)　家　中　(題)　(人名)　手伝う　(人名)
「家の中ではエインムーワーがチャウンクーワーを手伝った」

厳密に言うと、(101) は斜格補語そのものの主題化ではなく、側置助詞が付いているので、側置助詞句 (第 11 章参照) の主題化と考えるべきである。

なお、補語を主題化した場合、元の位置に主題化した要素と同一指示の代名詞が現れることがある。この現象がチベット・ビルマ諸語の代名詞化 (pronominalization) と呼ばれる現象の一例と考えられる可能性があるが、この問題についての議論は、第 9 章で行う。

(102) jə̀　nɔ́　**jə-**　ʔáɴ　kʊ́
1sg　(題)　1sg　食べる　菓子
「私は菓子を食べた」

(103) chàɴkhúɪʔwà　nɔ́　**ʔəwê**　lókwè　dè　ʔə-　phā
(人名)　(題)　3se　遊ぶ　(共)　3sg　父
「チャウンクーワーはお父さんと遊んでいる」

(104) ʔèiɴmúɪʔwà　nɔ́　jə-　dá　**ʔə̀**　klə̀　lɔ̂
(人名)　(題)　1sg　会う　3SG　いつも　(断定)
「エインムーワーには私はいつも会っている」

(105) ʔà　nɔ́　jə-　lókwè　dè　**ʔà**　phléphlé
3SG　(題)　1sg　遊ぶ　(共)　3SG　一緒に
「彼女は、私が一緒に遊んだ」

4.4.2　分離型動詞連続の「主語 +V1 動詞句」

次に、分離型動詞連続の V1 が形成する動詞句を V1 動詞句と呼ぶことにすると、「主語 +V1 動詞句」を主題化することもできる。

(106) **chànkhúʔwà　ʔánphôɴ　mì**　nɔ́　θí　ɣì
(人名)　炊く　ご飯　(題)　できる　良い
「チャウンクーワーのご飯の炊き方は上手だ」

(107) **chànkhúʔwà　ʔánphôɴ　mì**　nɔ́　phlɛ́　mā
(人名)　炊く　ご飯　(題)　速い　(非常)
「チャウンクーワーのご飯の炊き方は大変速い」

4.4.3　従属節

次に、従属節の主題化も可能である。

(108) **chànkhúʔwà　ʔánphôɴ　mì　ʔəkhúcòɴ**　nɔ́　|　hə-　θà　máʊ
(人名)　炊く　ご飯　(理由)　(題)　1pl　心　快適な
「チャウンクーワーがご飯を炊いたので私達は嬉しかった」」

4.4.4　補語あるいは副詞以外の部分: 分裂文

一つの補語あるいは副詞を残してそれ以外の部分を主題化することもできる。例を見られたい。

(109) ʔáɴ　khòθá　nɔ́　θàʔwà　lɔ̂
食べる　マンゴー　(題)　(人名)　(断定)
「マンゴーを食べたのはターワーだ」

この主題化は特殊である。なぜなら、上で見てきた主題化では文の中核である述語が評言の中にとどまっているのに対して、この場合の主題化では、述語を含む部分が主題化されているからである。

このような主題化は、もう一つの点で特殊である。というのは、これまで見た主題化では、連続する要素のみを主題化しているのに対し、この種類の主題化では不連続な部分を主題化しているからである。

(110) ʔáɴ　lé　ləkōʊɴ　nɔ́　khòθá　lɔ̂
食べる　(場)　(地名)　(題)　マンゴー　(断定)
「ヤンゴンで食べたのはマンゴーだ」

この例で主題化されている部分は、下に示した主題化が施される前の文を見れば分かるとおり、不連続である。

(111) **ʔánɴ**　khòθá　**lé**　**ləkōʊɴ**　lɔ̂
　　食べる　マンゴー　(場)　(地名)　(断定)
　　「ヤンゴンでマンゴーを食べた」

本論文では、このような文を**分裂文**(cleft sentence) と名付ける。なぜなら、このような文は情報論的に、一般に分裂文と呼ばれる文と共通の特徴を持つからである。英語を例に取ると、“It is X that Y” では、名詞句 X が焦点となり、述語を含む Y の部分が前提となる。ポー・カレン語の分裂文では焦点と前提の部分の順序が逆になるが、補語が焦点となり、述語を含む部分が前提となるという点で、英語の分裂文と似ている。このことは次のやりとりを見れば分かるだろう。

(112) nə-　ʔánɴ　khòθá　ʁâ
　　2sg　食べる　マンゴー　(疑)
　　「お前がマンゴーを食べたのか」

　　—— ʔánɴ　khòθá　nɔ́　θàʔwà　lɔ̂
　　食べる　マンゴー　(題)　(人名)　(断定)
　　「マンゴーを食べたのはターワーだ」

ポー・カレン語文法における分裂文は主題化が施された文の一種であるわけだが、述語を含む部分が主題化されてるということと、不連続な部分を主題化することができるという二点において特殊であるため、これを特別扱いすることに問題はないだろう。

分裂文において評言の位置に現れる要素は補語または副詞である。下に、主語、目的語、斜格補語、副詞がそれぞれ評言の位置に現れた例を挙げる。斜格補語には側置助詞が付く場合と付かない場合がある。

(113) [主語]　tàiɴ　kʊ́　nɔ́　**jə̀**　lɔ̂
　　作る　菓子　(題)　1SG　(断定)
　　「菓子を作ったのは私だ」

(114) [目的語]　ʔəwê　dʊ́　nɔ́　**jə̀**　lɔ̂
　　3se　殴る　(題)　1SG　(断定)
　　「彼が殴ったのは私だ」

(115) [斜格補語]　jə-　lì　nɔ́　(lé)　**thəʔàɴ**　lɔ̂
　　1sg　行く　(題)　(場)　(地名)　(断定)
　　「私が行ったのはパアン (へ) だ」

(116) [斜格補語]　jə-　lì　nɔ́　(dè)　**kā**　lɔ̂
　　1sg　行く　(題)　(共)　自動車　(断定)
　　「私が行ったのは自動車 (で) だ」

(117) [副詞]　ʔəwê　ɣì　nɔ́　châ
　　3se　美しい　(題)　非常に
　　「彼女が美しいのは、尋常でない」

分裂文において評言の位置に現れる要素の前には、次のように、繋辞動詞 mwɛ̄ が置かれることもある。

(118) mà　θî　phɔ̂ʔwà　jò　**mwɛ̄**　jə̀　lɔ̂
　　(使役)　死ぬ　(人名)　(題)　(繋)　1SG　(断定)
　　「このポーワーを殺したのは私なのだ」(V-01.96)

4.5　意味役割

主語という統語役割を持つ名詞句が持つ意味役割は様々である。例えば、次の文の主語は「殴る」という動作を意志的に行う遂行者を表している。

(119) **θàʔwà**　dʊ́　ʔə̀
　　(人名)　殴る　3SG
　　「ターワーは彼を殴った」

次の文の主語は物の受け取り手を表している。

(120) **θàʔwà**　nɪ̄　lái
　　(人名)　得る　手紙
　　「ターワーは手紙をもらった」

次の文の主語は音の知覚者を表している。

(121) **θàʔwà**　ɣə̂ɴ　thàkhʊ́
　　(人名)　聞こえる　歌
　　「ターワーには歌が聞こえた」

次の文の主語は能力の保持者を表している。

(122) **θàʔwà**　θí　phlòʊɴ　chəkhlàiɴ
　　(人名)　できる　カレン　言葉
　　「ターワーはカレン語ができる」

このように、主語が表す意味は様々であることが分かる。

一方、目的語も様々な意味を表し得る。(119) の目的語 ʔə̀ は動作の受け手である。(120) の目的語 lái は移動物である。(121) の目的語 thàkhʊ́ は聴覚的な刺激である。(122) の目的語 phlòʊɴ chəkhlàiɴ は習得した能力の種類である。

本論文では、補語のうち主語と目的語として現れ得るものは、動詞にとって特別な意味を持つものとして選び取られているのだと考える。うち他動詞の主語は、自ら動こうとするものとして捉えられていると考え、これを**行為者**(actor) と呼ぶ。一方、他動詞の目的語は、外的な作用を受けるものとして捉えられていると考え、これを**被動者**(patient) と呼

ぶ[6] 。自動詞の主語については、次のような意志動詞 (第 15 章参照) の場合、自ら動こうとするものとして捉えられていると考え、他動詞の主語と同じく行為者と呼ぶ。

(123) **θàʔwà**　chînàɴ
　　(人名)　座る
　　「ターワーは座った」

一方、次のような無意志動詞の場合、外的な作用を受けるものとして捉えられていると考え、他動詞の目的語と同じく被動者と呼ぶ。

(124) **θàʔwà**　bóɴ
　　(人名)　太っている
　　「ターワーは太っている」

次のような二つの目的語を取る動詞の場合には、第一目的語が優先的に被動者の意味役割を担っていると考えることにする。なぜなら、4.2.2 で示したとおり、第二目的語は斜格補語になる場合があるからである。

(125) chàɴkhɯ́ʔwà　phílâɴ　**θàʔwà**　(dè)　**khòθá**
　　(人名)　与える　(人名)　(共)　マンゴー
　　「チャウンクーワーはターワーにマンゴーをやった」

4.6　文の分類

ポー・カレン語の文は、いくつかの観点から分類が可能である。本論文では、名詞文と動詞文という分類、および、命令文と非命令文という分類を記述に用いる。

4.3 で論じたとおり、ポー・カレン語の述語は動詞複合体である場合と名詞句である場合とがある。述語が動詞複合体の場合、その文を**動詞文**と呼ぶ。一方、述語が名詞句の場合、その文を**名詞文**と呼ぶ。

次に、命令文と非命令文を次のように定義する。**命令文**とは、否定するときに副助詞 ləxì (第 24 章 24.4.2) を用いるものである。一方、**非命令文**とは、否定するときに副助詞 ʔé (第 24 章 24.4.1) を用いるものである。例えば、

(126) ʔáɴ　mì
　　食べる　ご飯
　　「ご飯を食べよ」

を否定すると、ləxì を用いて次のようになる。

(127) ʔáɴ　mì　ləxì
　　食べる　ご飯　(禁止)
　　「ご飯を食べるな」

そこで (126) は命令文であると判断することになる。一方、

[6]本論文における意味役割についてのこのような考え方は、Van Valin and LaPolla (1997) の macrorole の概念にならっている。

(128) jə-　ʔáɴ　mì
　　1sg　食べる　ご飯
　　「私はご飯を食べる」

を否定すると次のようになる。

(129) jə-　ʔáɴ　mì　ʔé
　　1sg　食べる　ご飯　(否)
　　「私はご飯を食べない」

そこで (128) は非命令文であると判断することになる。

文の分類には、これ以外にも疑問文と平叙文、肯定文と否定文というような様々な分類が可能であるかもしれないが、本論文における記述において重要な意味を持つのは上記の二つの分類である。本論文では、疑問を表す文を疑問文と呼んだり、否定を表す文を否定文と呼んだりすることがあるが、これらはそのような文の範疇があるということを主張しているわけではないことに注意されたい。

4.7　態について

本論文では、ポー・カレン語文法に態 (voice) という範疇を設定する必要はないと考える。文の真理条件的意味を保ちつつ、かつそれ以外の意味をも変えずに主語のみを転換する手段がポー・カレン語にはないからである。

スゴー・カレン語にはその意味で受動態 (passive voice) と呼ぶことができるかもしれない文が存在する。(a) に対応する (b) がその例である。

[Sgaw Karen]

(130) a. sɔ̄wá　dô　nɔ̀wá
　　(人名)　殴る　(人名)
　　「ソーワーはノーワーを殴った」

　　b. nɔ̀wá　bà　tà　dô　ʔɔ̄　lə́　sɔ̄wá
　　(人名)　当たる　(名詞化)　殴る　3sg　Obleque　(人名)
　　「ノーワーはソーワーに殴られた」

この (b) に対応するような文はポー・カレン語には存在しない。

[Pwo Karen]

(131) a. θàʔwà　dʊ́　nàɴʔwà
　　(人名)　殴る　(人名)
　　「ターワーはナウンワーを殴った」

　　b. *nàɴʔwà　bá　chə-　dʊ́　ʔə̀　lé　θàʔwà
　　(人名)　当たる　CHə　殴る　3SG　(場)　(人名)
　　「ナウンワーはターワーに殴られた」

しかし、主語が交替する現象がポー・カレン語に皆無なわけではない。単文のまま主語が変わる現象には、使役を表す動詞助詞を動詞へ付加する操作と、自発を表す動詞助詞 θà を動詞へ付加する操作の 2 種類がある。

使役を表す動詞助詞には、dà, mà, phílâɴ, kò, lɔ̀ の五つがある。これらを動詞に前置すると、使役者を表す名詞句が主語として導入され、元の主語は目的語の位置に現れるようになる。dà を例に取ると、元の文では次の (a) のように主語の位置に現れていた ʔəwê が、dà が現れた (b) の文では、目的語の位置に現れている。

(132) a. **ʔəwê**　klí
　　3se　　走る
　　「彼は走った」

　　b. jə-　dà　　klí　　**ʔəwê**
　　1sg　(使役)　走る　3se
　　「私は彼を走らせた」

使役を表す動詞助詞の詳細については、第 18 章と第 28 章を参照されたい。

自発を表す動詞助詞 θà の場合には、これを動詞に後置すると、元の文の目的語が主語の位置に現れるようになる。次の (a) が元の文、(b) が θà を用いた文である。

(133) a. ʔəwê　pàʊ　　thánɴ　**pàitərâɴ**
　　3se　　開ける　(完成)　窓
　　「彼は窓を開けた」

　　b. **pàitərâɴ**　pàʊ　　thánɴ　θà
　　窓　　開ける　(完成)　(自発)
　　「窓が (ひとりでに) 開いた」

この動詞助詞については、第 18 章 18.60 を参照されたい。

本論文では、これらの操作を態の現象と捉えることはしない。なぜなら、これらの操作を行ったとき、操作前と操作後の文の意味が異なるからである。使役を表す動詞助詞の場合、使役者が被使役者に何らかの働きかけを行ったという意味が付け加わる。また、自発を表す θà の場合、操作後の文は「ひとりでに」という意味が付け加わっている。したがって、「元の文」と意味が異なっているのであり、純粋に名詞の統語的役割のみを転換する操作ではないのである。

4.8　時制について

ポー・カレン語に時制を表す形式はない。しかし、非現実法 (irrealis modality) を表す動詞助詞 mə- があり、これの有無が間接的に時 (とき) を表すことがある。主節に限れば、発話時点より後に生起する事象を指示するためには必ず mə- を動詞の前に付けなければならない。逆に、主節の動詞の前に mə- が付いていなければ、その節が指示する事象は未来のものではないということが分かる。動詞助詞 mə- については、第 18 章 18.1 に詳しく論じてあるので、そちらを見られたい。

4.9　所有を表す文について

所有は、動詞 ʔɔ́「ある」を用いて次のように表現する。

(134) kā　ʔɔ́　lé　jə-　ʔɔ́
自動車　ある　(場)　1sg　所
「私は自動車を持っている」

この場合の主語は所有物を表す。なお、最後の ʔɔ́ は側置名詞 (第 12 章) の ʔəʔɔ́ である。

これ以外に、所有者を表す名詞句を主語とし、ʔɔ́ dè (いる-(共); 英語に直訳すれば be with ...) という表現を用いて所有を表すことがある。次の例を見よ。

(135) ʔə-　phā　θí　ʔɔ́　**dè**　ʔəmèiɴ
3sg　父　(類似)　いる　(共)　名
「彼の父にも名前があった」(023.20)

この表現が可能なのは、所有物が譲渡不可能な (inalienable) 所有物の場合に限られるようである。この表現についての詳細は、第 11 章 11.3 の側置助詞 dè についての記述を見られたい。

第II部

形態論

第5章　接辞

接辞 (affix) と考えられる形態素はあまり多くない。現在のところ、8 個の接頭辞と 2 個の接尾辞が見つかっている。なお、本論文では全編を通じて、ハイフンは軽声音節が語境界の直前に現れた場合の表記に用いるが、本章でのみ、接頭辞および接尾辞を表す記号として用いる。接辞を X で表すと、X- が接頭辞、-X が接尾辞である。

接辞と助詞 (particle) は拘束形態素という点では共通の特徴を持つ。しかし、付く相手との密着度が異なる。接辞のほうが密着度が高く、助詞のほうが密着度が低い。密着度の違いは次のような事実に現れる。例えば、接尾辞 -phʉ́ と複数を表す名詞修飾助詞 ləphá は、名詞の後に付くという点では同じ特徴を持つ。

(1) thʉ́phʉ́「小鳥」　←　thʉ́ (鳥)　＋　-phʉ́ (指小)

(2) thʉ́ ləphá「鳥たち」：　thʉ́ (鳥)　＋　ləphá (複数)

しかし、ləphá が名詞との間に動詞などの他の要素の介在を許すのに対して、phʉ́ はそのような要素の介在を許さない。

(3) thʉ́　ɣì　ləphá
　鳥　良い　(複)
　「良い鳥たち」

(4) *thʉ́　ɣì　-phʉ́
　鳥　良い　(指小)
　「良い鳥たち」

同様に、接頭辞 ʔə- と使役を表す動詞助詞 mà は、動詞の前に現れるという点では同じである。

(5) ʔədʉ́「大きいもの」　←　ʔə-　＋　dʉ́ (大きい)

(6) mà dʉ́「大きくする」：　mà (使役)　＋　ɣɔ̀ (大きい)

しかし、助詞 mà が動詞部分の統語的拡張を許すのに対して、ə- は許さない。例えば、dʉ́ に変化を表す動詞助詞 tháɴ を付けることは mà の場合はできるが、ʔə- の場合はできない。

(7) mà　dʉ́　tháɴ
　(使役)　大きい　(変化)
　「(徐々に) 大きくする」

(8) *ʔə-　　dʊ́　　thánɴ
　　(名詞化)　大きい　(変化)

このように、接辞は付く相手との密着の度合いが強いのであり、付く相手を統語的に拡張することができない。

以下に、現在までに見つかっている接辞を見ていく。それぞれの接辞がどの程度生産的に用いられるのかについては分からないことが多い。

5.1　ʔə-

動詞から名詞、あるいは名詞から名詞を作る。また、指示を表す名詞修飾助詞から名詞を作る。まず、動詞の前に付いた例を挙げる。

(9) ʔəkàiɴ「破片」　←　ʔə-　+　kàiɴ (離れる)

(10) ʔəkàʊ「部分」　←　ʔə-　+　kàʊ (切る)

(11) ʔəkhɯ́「霧, 煙」　←　ʔə-　+　khɯ́ (煙る)

(12) ʔəkhléiɴ「寒さ, 冷たい物」　←　ʔə-　+　khléiɴ (寒い)

(13) ʔəcɔ́「湿り気」　←　ʔə-　+　cɔ́ (濡れた)

(14) ʔəchâ「傷」　←　ʔə-　+　châ (痛い)

(15) ʔəchā「もろい物」　←　ʔə-　+　chā (もろい)

(16) ʔəcháiɴ「酸味, 酸っぱい物」　←　ʔə-　+　cháiɴ (酸っぱい)

(17) ʔəchə̂ɴ「甘み, 甘い物」　←　ʔə-　+　chə̂ɴ (甘い)

(18) ʔədʊ́「大きい物」　←　ʔə-　+　dʊ́ (大きい)

(19) ʔəpî「小さい物」　←　ʔə-　+　pî (小さい)

(20) ʔədà「敷き物」　←　ʔə-　+　dà (敷く)

(21) ʔətháʊ「終わり、終末」　←　ʔə-　+　tháʊ (終わる)

(22) ʔəphɔ̂「花」　←　ʔə-　+　phɔ̂ (咲く)

(23) ʔəmá「間違い」　←　ʔə-　+　má (間違っている)

(24) ʔəlâ「青」　←　ʔə-　+　lâ (青い)

(25) ʔəɣɔ̀「赤」　←　ʔə-　+　ɣɔ̀ (赤い)

(26) ʔəθə̂ɴ「黒」 ← ʔə- + θə̂ɴ (黒い)

(27) ʔəʔwà「白」 ← ʔə- + ʔwà (白い)

次に、名詞に付いた例を挙げる。

(28) ʔəkhʊ́「屋根; 指導者」 ← ʔə- + khʊ́ (頭)

(29) ʔəthî「液体」 ← ʔə- + thî (水)

ʔə- は助数名詞にも付き、その助数名詞が表す形状や様子を持つものを表す名詞を作る (詳細は第 10 章を参照のこと)。

(30) ʔəbòɴ「細長いもの」 ← ʔə- + bòɴ (細長いものを数える助数詞)

(31) ʔəbéiɴ「平らなもの」 ← ʔə- + béiɴ (平らなものを数える助数詞)

(32) ʔəphlóʊɴ「丸いもの」 ← ʔə- + phlóʊɴ (丸いものを数える助数詞)

(33) ʔəmèiɴ「種類」 ← ʔə- + mèiɴ (種類を数える助数詞)

次に、ʔə- は指示を表す名詞修飾助詞 jò「この」、nɔ́「その、あの」、ʔò「あの」に付いて、名詞を作る (詳細は第 14 章を参照のこと)。

(34) ʔəjò「これ」 ← ʔə- + jò (この)

(35) ʔənɔ́「それ、あれ」 ← ʔə- + nɔ́ (その、あの)

(36) ʔəʔò「あれ」 ← ʔə- + ʔò (あの)

なお、名詞の中には、音節 ʔə- で始まるもので、ʔə- を取り除いた部分が単語としては機能することができないものが多数見つかる。これらも起源的には接辞 ʔə- による派生であった可能性がある。以下にその例をいくつか挙げておく。

ʔəkhlî「種」, ʔəcòɴ「匂い」, ʔəkhɔ̂「コップ」, ʔəcí「右」, ʔəxò「左」, ʔəchâɴ「段階」, ʔəchóɴ「毛」, ʔəchə̂ɴ「境目」, ʔəchə̂ɴʔəthɔ̄「時間」, ʔəchɨ̀「民族, 家系」, ʔədài「翼」, ʔədì「へそ」, ʔətà「水祭り」, ʔəthá「河口」, ʔəthóɴ「筋、腱」, ʔəmā「借金」

第 12 章で述べる側置名詞や第 13 章で述べる場所名詞のうち ʔə- で始まるものも、元から音節 ʔə- を含んでいると考えられる名詞である。例えば、ʔəɣāɴ「～のため」, ʔəphâɴkhʊ́「上」, ʔəphâɴlá「下」など。

5.2　nʊ́-

動詞の前に付いて、道具を表す名詞を作る。

(37) nʊ́kwà「フック、吊り金具」　←　nʊ́-　+　kwà (掛ける)

(38) nʊ́wái「鍵」　←　nʊ́-　+　wái (回す)

(39) nʊ́wé「ほうき」　←　nʊ́-　+　wé (掃く)

(40) nʊ́wīθʊ́ɪ「うちわ」　←　nʊ́-　+　wīθʊ́ɪ (扇ぐ)

5.3　pə-

動詞や名詞の前に付いて、人間を表す名詞を作る。hə- とも発音される。

(41) pəθàbáɴ「若者」　←　pə-　+　θàbáɴ (*v.* 若い)

(42) pəphlòʊɴ「カレン人」　←　pə-　+　phlòʊɴ (*n.* カレン; 人間)

(43) pəmʊ́ɪnàɴ「乙女」　←　pə-　+　mʊ́ɪnàɴ (*n.* 乙女)

▷ (43) は、pə- が付いても付かなくてもよい。

5.4　ʔè-

動詞 (状態動詞) の前に付いて副詞を作る。ʔə- とも発音される。

(44) ʔèɣì「良く」　←　ʔè-　+　ɣì (良い)

(45) ʔèphlɛ́「速く」　←　ʔè-　+　phlɛ́ (速い)

(46) ʔèthî「正確に」　←　ʔè-　+　thî (正確な)

5.5　phà-

動詞 (状態動詞) の前に付いて程度の甚だしさを表す動詞を作る。

(47) phàdʊ́「大変大きい」　←　phà-　+　dʊ́ (大きい)

(48) phàpî「大変小さい」　←　phà-　+　pî (小さい)

(49) phàjàiɴ「大変遠い」　←　phà-　+　jàiɴ (遠い)

5.6 phɔ̄-

動詞の前に付いて、動詞の表す事象がかろうじて成立することを表す動詞を作る。

(50) phɔ̄ɣì「ほどほどに良い」 ← phɔ̄- + ɣì (良い)

(51) phɔ̄kɛ́「やっただけの、中途半端な出来具合の」 ← phɔ̄- + kɛ́ (成る)

(52) phɔ̄klà「見えるだけの、やっと見える状態の」 ← phɔ̄- + klà (明瞭な、はっきりとした)

5.7 làɴ-

動詞に付いて、その動詞が表す事象を引き起こすような性質を持っていることを表す新たな動詞を作る。

(53) làɴʔɛ́「愛らしい」 ← làɴ- + ʔɛ́ (愛する)

(54) làɴnī「可笑しい」 ← làɴ- + nī (笑う)

品詞は動詞のままであるが、名詞句の取り方に大きな変化が起きる。làɴ- の付いた動詞は、感情の向かう対象を表す名詞句を主語として取るようになる。

(55) phʊ́ jò làɴʔɛ́
子供 この 愛らしい
「この子供は可愛い」

話者によっては、làɴ- の後に音節 hə (一人称代名詞の第一形に由来?) を入れて、làɴhəʔɛ́, làɴhənī のようにすることがある。

5.8 thə̂ɴ-

この後に相互関係にある親族名称を二つ置き、双方を包含する概念を表す名詞句を作る。

(56) thə̂ɴphūɪwɛ̄「きょうだい」 ← thə̂ɴ- + phūɪ (年下のきょうだい) + wɛ̄ (年上の兄弟)

▷ しばしば təphûɪwɛ̄ と発音される。

(57) thə̂ɴphʊ́mʊ̄「母子」 ← thə̂ɴ- + phʊ́ (子) + mʊ̄ (母)

(58) thə̂ɴphʊ́phā「父子」 ← thə̂ɴ- + phʊ́ (子) + phā (父)

5.9 -phʊ́

名詞 phʊ́「子供」に由来する接尾辞。名詞や副詞の後に付く。wʊ́ とも発音される。品詞は元の品詞のままである。次の二つの用法がある。

5.9.1　指小辞的に

小ささや可愛らしさを表す。

(59) thʉ́phʉ́「小鳥」　←　thʉ́ (*n.* 鳥)　+　-phʉ́

(60) jáphʉ́「小魚」　←　já (*n.* 魚)　+　-phʉ́

(61) chəmʉ́ɯphʉ́「少女」　←　chəmʉ́ɯ (*n.* 女)　+　-phʉ́

(62) ləcɛ̀phʉ́「少しだけ」　←　ləcɛ̀ (*adv*, 少し)　+　-phʉ́

5.9.2　構成員

構成員を表す。

(63) phlòʊɴphʉ́「ポー・カレン族」　←　phlòʊɴ (*n.* カレン; 人間)　+　-phʉ́

(64) ɕàɴphʉ́「スゴー・カレン族」　←　ɕàɴ (*n.* スゴー・カレン)　+　-phʉ́

(65) θàʊphʉ́「兵士」　←　θàʊ (*n.* 軍隊)　+　-phʉ́

5.10　-lé

動詞の繰り返しによって作られた副詞の後について、程度の甚だしさを表す。品詞は副詞のままである。

(66) ʔáʔálé「たくさん」　←　ʔáʔá (たくさん)　+　-lé　　cf. ʔá (多い)

(67) dʉ́dʉ́lé「大きく」　←　dʉ́dʉ́ (大きく)　+　-lé　　cf. dʉ́ (大きい)

第6章　複合

ポー・カレン語はいわゆる孤立語的な特徴を持つ言語であり、屈折はないと言ってもよく、また接辞も少ないので、豊富な活用や格変化を持つ言語や派生接辞を豊富に持つ言語に比べれば、形態論は豊かでないと言ってもよいかも知れない。しかし、ポー・カレン語にはかなり多くの複合語があり、複合という点から見ると形態論が貧弱であるとは言い切れない。

ポー・カレン語の複合語には、主に、複合名詞と複合動詞がある。副詞や助詞も複合することがあるが、数は少ない。複合語においては、二つの要素の複合が最も基本的である。三つ以上の要素が複合した複合語も、二つの要素の複合に還元して考えることができる。

ところで、二つの要素からなる任意の形式が複合語であるのか、それとも統語的な構造を持った句であるのかは、少なくとも一方の要素を統語的に操作できるかどうかを見れば判別することができる。統語的な操作ができなければ複合語、できれば句である。例えば、phɔ̂klò「花畑」は、phɔ̂「花」と klò「畑」からなるが、この前部要素に状態動詞を付けて統語的拡張を行うことはできない。

(1) *[phɔ̂　phàdʊ́]　klò
　　花　大きい　畑

したがって、phɔ̂klò は複合語である。一方、θɛ̀thî phʊ̂ɥcā「金持ちの老人」は、θɛ̀thî「金持ち」と phʊ̂ɥcā「老人」という二つの要素からなる。この例の場合、前部要素に状態動詞を付けて統語的拡張を行うことが可能である。

(2) [θɛ̀thî　phàdʊ́]　phʊ̂ɥcā
　　金持ち　大きな　老人
　　「大金持ちの老人」

このことから、θɛ̀thî phʊ̂ɥcā は、θɛ̀thî および phʊ̂ɥcā という二つの名詞句からなる、統語的構造を持った名詞句であると考えられる。以下で見る様々な複合語は、その内部要素を統語的に操作することができない。

6.1　複合名詞

ポー・カレン語の複合名詞を構成する要素の組み合わせには次の四つのパターンがある。

- 「名詞」＋「名詞」
- 「名詞」＋「動詞文として成立可能な要素」
- 「動詞文として成立可能な要素」＋「名詞」

- 「動詞文として成立可能な要素」+「動詞文として成立可能な要素」

下でこの四つのパターンについて詳しく見ていくが、その前に注意しておきたい現象がある。それは、複合名詞を作るとき、後部要素が名詞でその名詞が音節 ʔə で始まる場合、ʔə は脱落することが多いということである。次のような例である。

(3) θéiɴpá ← θéiɴ + ʔəpá
木の板　木　板

(4) khòθá ← khò + ʔəθá
マンゴーの実　マンゴー　実

しかし、次のように、ʔə が脱落しない場合もある。

(5) kòɴθòʔəthái ← kòɴθò + ʔəthái
洗濯ばさみ　衣服　挟む物

ʔə が脱落するかどうかの条件は不明である。上の (3) と (4) のうち、(3) の ʔəpá は、pá という単語がないので、最初の音節 ʔə は接頭辞 ʔə- と見なすことはできない。一方、(4) の ʔəθá は、動詞 θá「実る」に接頭辞 ʔə- が付いてできた語である。したがって、ʔə が脱落するか否かは、ʔə- が接頭辞であるかどうかには関係がない。

6.1.1　「名詞」+「名詞」の構成を持つもの

「名詞」+「名詞」の構成を持つ複合名詞においては、どちらかの要素が優先的に、複合名詞全体の特徴を決定していると考えられる。なぜなら、次のような現象が観察されるからである。例えば、láitàʊ「郵便局」は、lái「手紙」と tàʊ「建物」からなる複合語である。「郵便局」を数えるとき、助数名詞には主に丸いものを数えるために使われる phlóʊɴ が現れる。

(6) láitàʊ　lə-　phlóʊɴ　「一つの郵便局」
郵便局　一　(丸いもの)

各要素を見てみると、前部要素 lái「手紙」に対応する助数名詞は平らなものを数えるための béiɴ であり (lái lə- béiɴ「手紙一通」)、後部要素 tàʊ「建物」に対応する助数名詞は丸いものを数えるときの phlóʊɴ である (tàʊ lə- phlóʊɴ「一つの建物」)。したがって、複合名詞 láitàʊ に対応する助数名詞は後部要素の tàʊ が決定していると考えられる。このような要素を、「名詞」+「名詞」の構成を持つ複合名詞における主要部と見なす。この助数名詞の対応は、意味的に見ると、複合語全体が表すものが主要部の表すものの下位概念であることを反映していると考えられる。すなわち、「郵便局」は「建物」の一種だからこそ、このような助数名詞の選択が行われるのだと考えられる。したがって、助数名詞による主要部の判別が困難な場合は、意味的にどちらの要素が複合語全体の上位概念を表すかを考えて主要部を判断する。例えば、「病院」は「郵便局」と同じように、丸いものを数えるときの phlóʊɴ で数える。

(7) θítàʊ　lə-　phlóʊɴ　　「一つの病院」
　　病院　一　(丸いもの)

θítàʊ を構成する要素である θí「薬」も tàʊ「建物」も、対応する助数名詞は phlóʊɴ である (ただし「薬」に phlóʊɴ が対応するのは丸薬の場合に限る)。このような場合、助数名詞によって主要部を判別することができない。しかし、意味的に考えると「病院」は「薬」の一種ではなく「建物」の一種であると考えられるので、tàʊ を主要部であると見なす。

このような視点で見ていくと、「名詞」+「名詞」の構成を持つ複合名詞には、後部要素が主要部になっているものと前部要素が主要部になっているものがある。ただし、どちらの要素が主要部なのかを判別することが難しいものもある。それについては後で述べる。

後部要素が主要部になっているもの

(8) kháɴmé　←　kháɴ　+　mé
　　くるぶし　　脚　　目

(9) méthî　←　mé　+　thî
　　涙　　目　　水

(10) nòphlè　←　nò　+　phlè
　　舌　　口　　舌

(11) châɪɴthóʊɴ　←　châɪɴ　+　thóʊɴ
　　ポケット　　シャツ　　袋

(12) cìthóʊɴ　←　cì　+　thóʊɴ
　　財布　　お金　　袋

(13) pənâɪɴtə̀ɴ　←　pənâɪɴ　+　tə̀ɴ
　　蝋燭立て　　蝋燭　　柱

(14) phɔ̂klò　←　phɔ̂　+　klò
　　花畑　　花　　畑

(15) bɯ́ɯphâɴ　←　bɯ́ɯ　+　phâɴ
　　米倉　　米　　倉

(16) θítàʊ　←　θí　+　tàʊ
　　病院　　薬　　建物

(17) cìtàʊ　←　cì　+　tàʊ
　　銀行　　お金　　建物

(18) chəbíθòkhɔ̂　←　chəbíθò　+　khɔ̂
　　ゴミ箱　　ゴミ　　容器

(19) thîkhɔ̂ ← thî + khɔ̂
バケツ　水　容器

(20) chànphɔ̂ ← chàn + phɔ̂
ユリ　霧　花

(21) θéinphɔ̂ ← θéin + phɔ̂
木に咲く花　木　花

(22) θàipəlân ← θài + pəlân
酒瓶　酒　瓶

(23) kəbànjùθənî ← kəbànjù + θənî
飛行場　飛行機　舟着き場

▷ 前部要素の kəbànjù は、名詞 kəbàn「船」と動詞 jù「飛ぶ」からなる複合名詞である。

(24) jáʔúthî ← jáʔú + thî
魚醤で作ったタレ　魚醤　水

▷ 前部要素の jáʔú は、名詞 já「魚」と動詞 ʔú「腐る」からなる複合名詞である。

(25) thîkhāndòundú ← thîkhān + dòundú
首都　国　大都市

▷ 後部要素の dòundú は、名詞 dòun「町」と動詞 dú「大きい」からなる複合名詞である。

(26) kòkəjànchədàuphàdú ← kòkəjàn + chədàuphàdú
世界大戦　世界　大戦

▷ 後部要素の chədàuphàdú は、名詞 chədàu「戦争」と動詞 phàdú「大変大きい」からなる複合名詞である。

(27) lìmɔ̀θáthîlɛ̀ ← lìmɔ̀θá + thîlɛ̀
みかんジュース　みかん　ジュース

▷ 前部要素の lìmɔ̀θá は、名詞 lìmɔ̀「みかん」と名詞 ʔəθá「実」からなる複合名詞である。一方、後部要素の thîlɛ̀ は、名詞 thî「水」と動詞 lɛ̀「混ぜる」からなる複合名詞である。

(28) láinθúθənî ← láinθú + θənî
自動車 (バス) 発着所　自動車　舟着き場

▷ 前部要素の láinθú は、名詞 láin「車」と名詞 θú「油」からなる複合名詞である。

(29) lânmíphlì ← lânmí + phlì
電線　電気　紐

▷ 前部要素の lânmí は、名詞 lân「雷」と名詞 mí「火」からなる複合名詞である。

(30) móʔíkhɔ̂ ← móʔí + khɔ̂
灰皿　煙草の灰　容器

▷ 前部要素の móʔí は、名詞 mó「煙草」と名詞 ʔí「大便」からなる複合名詞である。

以下は、後部要素が音節 ʔə で始まる例である。多くの場合、ʔə は脱落する。ただし、(31) のように ʔə が脱落しない場合もある。

(31) kòɴθòʔəthái ← kòɴθò + ʔəthái
洗濯ばさみ　衣服　挟む物

▷ 前部要素 kòɴθò は、kòɴ「穿く」と θò「着る」という動詞形態素二つからなる名詞である。

(32) láidòʊɴ ← lái + ʔədòʊɴ
封筒　手紙　袋

(33) khʊ́lòɴchàʊ ← khʊ́lòɴ + ʔəchàʊ
谷　山　間

(34) ɣáɴkhʊ́ɣàɴ ← ɣáɴkhʊ́ + ʔəɣàɴ
地図　土地　絵

(35) nòchóɴ ← nò + ʔəchóɴ
口ひげ　口　毛

(36) kháchóɴ ← khá + ʔəchóɴ
あごひげ　あご　毛

(37) méchóɴ ← mé + ʔəchóɴ
まつげ　目　毛

(38) chídòʊɴ ← chí + ʔədòʊɴ
膀胱　尿　袋

(39) θwíthóɴ ← θwí + ʔəthóɴ
血管　血　筋 (すじ)

(40) kháxwí ← khá + ʔəxwí
あご骨　あご　骨

(41) ʔəlìkhwâ ← ʔəlì + ʔəkhwâ
男の孫　孫　男

(42) nâphəɴ ← nâ + ʔəphəɴ
鼻孔　鼻　穴

(43) chənə̂ɴmʊ̄ ← chənə̂ɴ + ʔəmʊ̄
雌牛　牛　雌

▹ 前部要素が主要部と考えることができる可能性もある。次の例も同様。

(44) chənə̂ɴphâ ← chənə̂ɴ + ʔəphâ
雄牛　牛　雄

(45) θéɪnthàɪɴ ← θéɪɴ + ʔəthàɪɴ
木の枝　木　枝

(46) θéɪnphài ← θéɪɴ + ʔəphài
樹皮　木　皮

(47) θéɪnlá ← θéɪɴ + ʔəlá
木の葉　木　葉

(48) ʔəkhâɪnmī ← ʔəkhâɪɴ + ʔəmī
尻尾　尻　尾

(49) méphài ← mé + ʔəphài
まぶた　目　皮

(50) nòphài ← nò + ʔəphài
唇　口　皮

(51) kháɴphài ← kháɴ + ʔəphài
草履　足　皮

(52) phêɪɴkhláthài ← phêɪɴkhlá + ʔəthài
台所　灰　端

(53) lōʊɴpá ← lōʊɴ + ʔəpá
石板　石　板

(54) wɔ̀béɪɴjá ← wɔ̀béɪɴ + ʔəjá
牛肉　牛　肉

(55) phlɔ̀θá ← phlɔ̀ + ʔəθá
ココヤシの実　ココヤシ　実

(56) míkhɯ́ ← mí + ʔəkhɯ́
煙　火　煙状のもの

次の諸例における後部要素は、助数名詞に接頭辞 ʔə- が付いて普通名詞化したものである。ただし、これらは ʔə- の付加を経ずに直接的に複合に関わったと見ることのできる可能性もある。そのため、後部要素の最初の音節 ʔə は括弧でくくっておく。

(57) khóbòɴ ← khó + (ʔə)bòɴ
首　喉　細長いもの

(58) cɯ́bòɴ ← cɯ́ + (ʔə)bòɴ
指　手　細長いもの

(59) θàbòɴ ← θà + (ʔə)bòɴ
心臓　心　細長いもの

(60) pənôɴbòɴ ← pənôɴ + (ʔə)bòɴ
定規　規則　細長いもの

(61) pháiʔwàbòɴ ← pháiʔwà + (ʔə)bòɴ
白墨　白土　細長いもの

▷ 前部要素の pháiʔwà は、名詞 phái「泥」と動詞 ʔwà「白い」からなる複合名詞。

(62) θíkèbòɴ ← θíkè + (ʔə)bòɴ
ペン　インク　細長いもの

▷ 前部要素の θíkè は、名詞 θí「薬」と動詞 kè「書く」からなる複合名詞。

(63) ʔəjáphlóʊɴ ← ʔəjá + (ʔə)phlóʊɴ
筋肉　肉　丸いもの

(64) phàibéiɴ ← phài + (ʔə)béiɴ
衣服　皮　薄いもの

(65) láibéiɴ ← lái + (ʔə)béiɴ
冊子　紙　平たいもの

(66) tàthə́ɯɴ ← tà + (ʔə)thə́ɯɴ
サトウヤシの木　サトウヤシ　幹

(67) θéiɴthə́ɯɴ ← θéiɴ + (ʔə)thə́ɯɴ
立木　木　幹

(68) khâiɴbóɴ ← khâiɴ + (ʔə)bóɴ
臀部　尻　包み

(69) ɣɔ̀bìbóɴ ← ɣɔ̀bì + (ʔə)bóɴ
キャベツの実　キャベツ (種類としての)　包み

(70) láiblài ← lái + (ʔə)blài
用紙　紙　紙片

(71) ʔəphânkhʊ́thə̂n ← ʔəphânkhʊ́ + (ʔə)thə̂n
上階　上　層

(72) ʔəphânláthə̂n ← ʔəphânlá + (ʔə)thə̂n
一階　下　層

前部要素が主要部になっているもの

(73) láinθʊ́ ← láin + θʊ́
自動車　車　油

(74) thʊ́thà ← thʊ́ + thà
ガチョウ　鳥　ガチョウ

(75) châinphânkhʊ́ ← châin + ʔəphânkhʊ́
上着　シャツ　上

(76) phə̀nthà ← phə̀n + thà
鉄鍋　鍋　鉄

(77) càkhɔ̂hàidài ← càkhɔ̀ + hàidài
トイレットペーパー　紙　便所

(78) láinmí ← láin + mí
汽車　車　火

(79) phjâθí ← phjâ + θí
薬屋　市場　薬

(80) phjâphɔ̂ ← phjâ + phɔ̂
花屋　市場　花

(81) θíɣāin ← θí + ʔəɣāin
ビタミン　薬　力

(82) cìθàʊthəjā ← cì + θàʊthəjā
チップ (サービス料)　お金　誠意

(83) khrìkhrâθàθî ← khrìkhrâ + θàθî
証拠物品　物品　証拠

(84) θàʊthî ← θàʊ + thî
海軍　軍　水

(85) khlàimâchəmài ← khlài + mâchəmài
ウミガメ　亀　海

(86) khlîjā ← khlî + jā
帆掛け舟　舟　帆

(87) kʊ́mí ← kʊ́ + mí
ビスケット　菓子　火

(88) kʊ́cɛ̀lì ← kʊ́ + cɛ̀lì
ゼリー菓子　菓子　ゼリー

(89) kìtàlâɴmí ← kìtà + lâɴmí
エレキギター　ギター　電気

(90) mìbʊ́θâɴ ← mì + bʊ́θâɴ
新米を炊いたご飯　ご飯　新米

▷ 後部要素の bʊ́θâɴ は、名詞 bʊ́「米」と動詞 θâɴ「新しい」からなる複合名詞。

両要素とも主要部であると考えられるもの

前部要素と後部要素のうちどちらが主要部なのかを判別することが難しいものもある。例えば、次に挙げる mʊ̄phā がそうである。

(91) mʊ̄phā ← mʊ̄ + phā
両親　母　父

mʊ̄phā に対応する助数名詞は人間を数えるときに使われる ɣà であり、mʊ̄ も phā も同様に、対応する助数名詞は ɣà である。意味的には、複合語全体の意味が前部要素と後部要素を足し合わせた意味になっており、どちらかの要素が上位概念を表すわけではない。このようなものについては、どちらの要素が主要部になっているのかが決定しにくい。可能性としては、どちらも主要部である可能性と、どちらも主要部でない可能性があるが、この複合名詞が名詞であるという特徴は両方から受け継がれているわけだから、どちらも主要部であると考えたほうが良いだろう。下に挙げるのも同様の例である。

(92) cháixàʊ ← chái + xàʊ
田畑　田　畑

(93) ʔəlɔ̀ʔəkhlàiɴ ← ʔəlɔ̀ + ʔəkhlàiɴ
話し方　話し方　話し方

6.1.2　「名詞」+「動詞文として成立可能な要素」の構成を持つもの

このタイプは、「名詞」+「動詞文として成立可能な要素」の構成を持つことから、見かけの上では、第 23 章で扱う、関係節が名詞句を後から修飾している構造と同じである。したがって、関係節と同様、前部要素の名詞が後部要素にとって統語的に何の役割を担っているかという視点で分類が可能である。例えば、lōʊɴjî「翡翠」という複合語においては、lōʊɴ「石」は jî「緑の」の主語に相当すると考えることができる。このことは lōʊɴ jî「石が緑だ」という文を考えれば明白だろう。第 23 章での分類に従い、前部要素としての名詞が担う統語役割に「主語」「目的語」「斜格補語」「非節内要素」を設定する。

なお、このタイプでは、全体を名詞として特徴づけているのは前部要素としての名詞であるから、常に前部要素が主要部であると考えられる。

主語

(94) méɕā ← mé + ɕā
瞳　目　色の濃い

(95) thînə̀ɴmə̂ɴ ← thî + nə̀ɴmə̂ɴ
香水　水　香る

(96) báthīwɔ̀ ← báthī + wɔ̀
人参　大根　赤い

(97) ʔəkhʊ́krə̀ɴ ← ʔəkhʊ́ + krə̀ɴ
社長　指導者　統治する

(98) kəbàɴjʉ̀ ← kəbàɴ + jʉ̀
飛行機　船　飛ぶ

(99) ɕájʉ̀ ← ɕá + jʉ̀
流れ星　星　飛ぶ

(100) ɕáɣə̀ɯɴ ← ɕá + ɣə̀ɯɴ
北極星　星　堅固な

(101) thîkhʊ́lóɴ ← thî + khʊ́lóɴ
氷　水　氷る

(102) thîláchə̂ɴ ← thîlá + chə̂ɴ
砂糖　塩　甘い

(103) kəchâɴʔwà ← kəchâɴ + ʔwà
白象　象　白い

(104) ʔəlāɴthɔ̂ ← ʔəlāɴ + thɔ̂
舞台　場所　高い

(105) kʊ́xâiɴ ← kʊ́ + xâiɴ
干菓子　菓子　乾いた

(106) ɣáɴkhʊ́ɣâɴ ← ɣáɴkhʊ́ + ɣâɴ
岩塩　土　塩辛い

(107) lōʊɴjî ← lōʊɴ + jî
翡翠　石　緑色の

(108) lōʊɴwɔ̀ ← lōʊɴ + wɔ̀
ルビー　石　赤い

(109) lōʊɴlâ ← lōʊɴ + lâ
サファイア　石　青い

(110) thàθəwài ← thà + θəwài
磁石　鉄　吸う

(111) bʊ́ʊchʊ̂ ← bʊ́ʊ + chʊ̂
早稲　米　早い

(112) bʊ́ʊθâɴ ← bʊ́ʊ + θâɴ
新米　米　新しい

(113) míphíθətài ← mí + [phí + θətài]
信号機　火　与える　注意

(114) chərâcàθí ← chərâ + [cà + θí]
薬剤師　先生　混ぜる　薬

(115) kəbàɴjʊ̀ʊdàʊchə̀ ← kəbàɴjʊ̀ʊ + [dàʊ + chə̀]
戦闘機　飛行機　闘う　CHə

▷ kəbàɴjʊ̀ʊ は kəbàɴ「船」+jʊ̀ʊ「飛ぶ」。

(116) khəmlə̄ɴjʊ̄phə̀ɴchə̀ ← khəmlə̄ɴ + [jʊ̄phə̀ɴ + chə̀]
観衆　人々　観る　CHə

(117) lâɴlàɴʔɔ̀thî ← lâɴ + [làɴ + ʔɔ̀ + thî]
虹　雷　下りる　飲む　水

▷ 「虹」は雷神が水を飲みに地上におりた姿だとする伝説に基づく。làɴ ʔɔ̀ の部分は連結型動詞連続。

(118) mɯ́ʔáɴɣáhəmwì ← mɯ́ + [ʔáɴɣá + həmwì]
ウェートレス　女　歓迎する　客

(119) phlòʊɴθàɕā ← phlòʊɴ + [θà + ɕā]
老人　人　年齢　老いた

目的語

(120) châɴjáká ← châɴjá + ká
焼き鳥　鶏肉　焼く

(121) θíɣɯ́ ← θí + ɣɯ́
ペンキ　薬　塗る

(122) nàdìkwàlàɴ ← nàdì + [kwà + làɴ]
掛け時計　時計　掛ける　(下方)

(123) láiɴjāiɴ ← láiɴ + jāiɴ
自転車　車　踏む

▷ 日常会話ではビルマ語の sɛʔbéiɴ の借用 cébéiɴ を用いることが多い。

(124) phɔ̂thɯ̄ ← phɔ̂ + thɯ̄
花束　花　束ねる

(125) θə̂ɴʔɔ̀ ← θə̂ɴ + ʔɔ̀
スープ　おかず　飲む

(126) chəjácɔ̂ ← chəjá + cɔ̂
揚げ肉　肉　揚げる

▷ cɔ̂ はビルマ語 cɔ̀「揚げる、炒める」の借用。

(127) móthɯ̂ ← mó + thɯ̂
葉巻　煙草　巻く

(128) láithɯ̂ ← lái + thɯ̂
貝葉　書物　巻く

斜格補語

主要部が場所を表す名詞句に相当するもの。

(129) láiʔàʊkènáiɴ ← láiʔàʊ + kènáiɴ
帳面　本　書き留める

(130) kəmâjāthî ← kəmâ + [jā + thî]
プール　池　泳ぐ　水

(131) khàkèlái ← khà + [kè + lái]
書机　台　書く　文字

(132) phjâʔɔ̀θài ← phjâ + [ʔɔ̀ + θài]
飲み屋　店　飲む　酒

主要部が道具を表す名詞句に相当するもの。

(133) thàchà ← thà + chà
縫い針　針　縫う

(134) châiɴkáɴchəchə̀ɴ ← châiɴ + [káɴ + chəchə̀ɴ]
レインコート　シャツ　防ぐ　雨

(135) jwàdòmé ← jwà + [dò + mé]
眼鏡　ガラス　かける　目

(136) dàɴxwèchə̀ ← dàɴ + [xwè + chə̀]
買い物かご　かご　買う　CHə

(137) thàchèθí ← thà + [chè + θí]
注射器　針　刺す　薬

(138) cɛ́ɣáʊbɯ́ɯ ← cɛ́ + [ɣáʊ + bɯ́ɯ]
精米器　機械　精米する　米

非節内要素

(139) khójɯ̄ɯ ← khó + jɯ̄ɯ
喉　首　呑み込む

(140) jwàphlɔ́klà ← jwà + phlɔ́klà
拡大鏡　ガラス　鮮明な

(141) chəchâɣàʊlì ← chəchâ + [ɣàʊ + lì]
下痢　病気　腹　行く

▷ ɣàʊ lì は「腹をこわす」意の慣用句。

「名詞」＋「動詞文として成立可能な要素」の構成を持つものについての補足

上に見てきた「名詞」＋「動詞文として成立可能な要素」の構成を持つ複合語の例では、前部要素の名詞の表すものが、複合名詞全体の表すものの上位概念になっている。例えば、ɕá「星」は ɕájɯ̀「流れ星」の上位概念を表す。このことは、前部要素の名詞に対応する助数名詞と、複合名詞に対応する助数名詞が同一であることからも見てとれる。どちらも、丸いものを数える助数名詞 phlóʊɴ を用いる。ɕá lə- phlóʊɴ「星一つ」、ɕájɯ̀ lə- phlóʊɴ「流れ星一つ」。

ところが、下に見ていく例では、前部要素の名詞の表すものと複合名詞全体の表すものとの間に上のような関係が認められない。例えば (142) の khʊ́xwíʔáɪɴcàʊ では、「頭」は「頭痛」の上位概念ではない。このことは、khʊ́ を数える助数名詞と khʊ́xwíʔáɪɴcàʊ を数える助数名詞が異なることからも見てとれる。khʊ́ は、khʊ́ lə- phlóʊɴ のように phlóʊɴ を用いて数えるが、khʊ́xwíʔáɪɴcàʊ は、もし数えるとしたら khʊ́xwíʔáɪɴcàʊ lə- mèɪɴ「1 種の頭痛」あるいは khʊ́xwíʔáɪɴcàʊ lə- blàɴ「頭痛が 1 回」のように数える必要がある。少なくとも phlóʊɴ を用いて数えることはできない。このような、構成要素として名詞を含んでいながら、その名詞が複合名詞全体の上位概念を表さない複合名詞は、「名詞」＋「動詞文として成立可能な要素」の構成を持つタイプにのみ見つかっている。

まず、前部要素が後部要素の主語に相当する例を挙げる。

(142) khʊ́xwíʔáɪɴcàʊ ← khʊ́xwí ＋ ʔáɪɴcàʊ
頭痛　頭　痛い

(143) mūméthə́ɯɴ ← mūmé ＋ thə́ɯɴ
正午　太陽の光　南中する

(144) mūtháɴ ← mūɯ ＋ tháɴ
東　太陽　上る

(145) mūnáʊ ← mūɯ ＋ náʊ
西　太陽　入る

次に、前部要素が後部要素の目的語に相当する例を挙げる。

(146) chəkhlàɪɴpəkòʊɴ ← chəkhlàɪɴ ＋ pəkòʊɴ
辞書　言葉　集める

(147) míchwài ← mí ＋ chwài
マッチ　火　こする

(148) khʊ́phə́ɯɴ ← khʊ́ ＋ phə́ɯɴ
はちまき　頭　しばる

▷ 動詞 phə́ɯɴ は、しばる場所としばる道具のどちらをも目的語として取ることができる: phə́ɯɴ khʊ́「頭をしばる」、phə́ɯɴ khʊ́phə́ɯɴ「はちまきをしばる」。

(149) jānděinkhāin ← jānděin + khāin
ベルト　腰　巻く

(150) khǿthái ← khǿ + thái
髪留め　頭　挟む

(151) nādài ← nā + dài
イアリング　耳　(イアリングを) する

(152) khǿchè ← khǿ + chè
ヘアピン　頭　刺す

(153) méθákán ← méθá + kán
マスク　顔　隠す

次に、前部要素が後部要素の斜格補語に相当する例を挙げる。

(154) cɯ́phón ← cɯ́ + phón
ハンドル　手　つかむ

▷ 「手」は「つかむ」の道具に相当する。

前部要素が非節内要素に相当する例はまだ見つかっていない。

6.1.3　「動詞文として成立可能な要素」+「名詞」の構成を持つもの

このタイプの複合名詞は、「名詞」+「動詞文として成立可能な要素」の構成を持つものに比べると少ない。このタイプにおいては、全体を名詞として特徴づけているのは後部要素としての名詞であるから、常に後部要素が主要部であると考えられる。

やはりこのタイプも、前部要素の「名詞」が後部要素の「動詞文として成立可能な要素」にとって統語的に何の役割を持つかによって分類が可能である。今のところ、目的語に相当する例が見つかっていない。

主語

(155) cɔ̂chàchərâ ← [cɔ̂ + chà] + chərâ
調理師　炒める　CHə　先生

(156) nâŋkəbàŋjɯ̀ʔəkhǿ ← [nâŋ + kəbàŋjɯ̀] + ʔəkhǿ
パイロット　運転する　飛行機　指導者

(157) nâŋláiŋθǿchərâ ← [nâŋ + láiŋθǿ] + chərâ
バスの運転手　運転する　自動車　先生

斜格補語

主要部が場所や時間を表す名詞句に相当するもの。

(158) ʔɔ́phlɛ́mūnì ← ʔɔ́phlɛ́ + mūnì
誕生日　生まれる　日

(159) jūláitàʊ ← [jū + lái] + tàʊ
図書館　見る　本　建物

(160) màlʊ́láiphjā ← [màlʊ́ + lái] + phjā
学校　学ぶ　本　僧院

(161) láiɴθʊ́pətháʊlāɴ ← [láiɴθʊ́ + pətháʊ] + ʔəlāɴ
駐車場　自動車　止まる　場所

(162) nɛ́phlɔ́tàʊ ← [nɛ́ + phlɔ́] + tàʊ
博物館　見せる　明らかな　建物

▹ nɛ́ phlɔ́ は、二つの動詞 nɛ́「見せる」と phlɔ́「明らかな」からなる連結型動詞連続。

主要部が道具を表す名詞句に相当するもの。

(163) tháɴkəbàɴjʊ̀ʊ́láiblài ← [tháɴ + kəbàɴjʊ̀ʊ́] + láiblài
航空券　乗る　飛行機　紙片

(164) lòʊɴkháchóɴbòɴ ← [lòʊɴ + kháchóɴ] + ʔəbòɴ
ひげ剃り　剃る　ひげ　細長いもの

(165) ɣʊ́ʊ́θíbòɴ ← [ɣʊ́ʊ́ + θí] + ʔəbòɴ
刷毛　塗る　薬　細長いもの

(166) thàʊmɛ́ʔəbòɴ ← [thàʊ + mɛ́] + ʔəbòɴ
歯ブラシ　こする　歯　細長いもの

非節内要素

(167) phlôɴɣáʔənáiɴ ← phlôɴɣá + ʔənáiɴ
修了証書　合格する　印

(168) lìphûphlóʊɴ ← [lì + phû] + ʔəphlóʊɴ
風船　空気　膨らむ　丸いもの

6.1.4　「動詞文として成立可能な要素」+「動詞文として成立可能な要素」の構成を持つもの

「動詞文として成立可能な要素」+「動詞文として成立可能な要素」の構成を持つ複合名詞は非常に少ないが、存在する。今のところ次のような例が見つかっている。

(169) kòɴθò ← kòɴ + θò
衣服　穿く　着る

(170) bàɴʔwà ← bàɴ + ʔwà
カーテン　黄色い　白い

▷ なぜ「黄色い」を表す動詞と「白い」を表す動詞の組み合わせが「カーテン」を意味するのかは不明である。

(171) ʔɔ́thánʔɔ́làɴ ← ʔɔ́+thánɴ + ʔɔ́+làɴ
態度　いる (上方)　いる (下方)

(172) báɕàʊbáphlāɴ ← báɕàʊ + báphlāɴ
事故; トラブル　混乱する　慌てる

これらは、前部要素、後部要素ともに動詞的な性質を持っているのに、複合語全体は名詞である。つまり複合語全体は前部要素の性質も後部要素の性質も受け継いでいないので、このタイプの複合名詞は主要部が存在しないと考えたい。

6.2　複合動詞

次に複合動詞を見る。ポー・カレン語の複合動詞を構成する要素の組み合わせには次の三つのパターンがある。

- 「名詞」+「動詞」
- 「動詞」+「名詞」
- 「動詞」+「動詞」

複合動詞の数は複合名詞に比べるとはるかに少ない。また、複合名詞の場合と違って、一つの単語プラス一つの単語からなるものしか見つかっていない。ただし、第 17 章で述べる連結型動詞連続が複合動詞であるならば、「動詞」+「動詞」のパターンには無数の複合動詞が存在することになる。

6.2.1　「名詞」+「動詞」の構成を持つもの

このパターンの例として θàmɛ́「恐れる」がある。

(173) θàmɛ́　←　θà　+　mɛ́
　　恐れる　　心　　芽吹く

この複合動詞は、一見、次のような成句と同じ構造を持っているように見える。

(174) θà　xwî　「嬉しい」
　　心　軽い

しかし、この二つは統語上の振る舞いが明らかに異なる。否定辞 lə- を付ける場合、θàmɛ́ は、全体の前に lə- を付ける。

(175) jə-　lə-　θàmɛ́　bá　ʔəkhʊ́còɴ ...
　　私　(否)　恐い　(否')　(理由)
　　「私は恐くないので...」

一方、θà xwî の場合は、動詞要素の前に lə- を付ける。

(176) jə-　θà　lə-　xwî　bá　ʔəkhʊ́còɴ ...
　　私　心　(否)　軽い　(否')　(理由)
　　「私は嬉しくないので...」

つまり、θàmɛ́ は前部要素と後部要素の結びつきが強いのである。これと同様の複合動詞として、これまでに次に挙げるものが見つかっている。

(177) θàphlī　←　θà　+　phlī
　　嫌う　　心　　溶ける

(178) θàjɯ̄　←　θà　+　jɯ̄
　　懐かしむ　　心　　懐かしむ

▷ θàjɯ̄ と jɯ̄ の意味はあまり違わない。

(179) nāɣə̂ɴ　←　nā　+　ɣə̂ɴ
　　聞こえる　　耳　　聞こえる

▷ nāɣə̂ɴ と ɣə̂ɴ の意味はあまり違わない。

なお、このパターンでは全体を動詞たらしめているのは後部要素の動詞であることから、後部要素が主要部だと考えられる。

6.2.2　「動詞」+「名詞」の構成を持つもの

このパターンを持つ複合動詞としては、今のところ、次の kèpərə̂ɴ しか見つかっていない。

(180) kèpərə̂ɴ　←　kè　+　pərə̂ɴ
　　(手紙を) 書く　　書く　　消息

この動詞は、一見、次のような成句と構造が似ているように見える。

(181) máʊ　θà
快適な　心
「楽しい」

しかし、máʊ θà の場合は動詞助詞が前部要素の動詞に付くことができるのに対して、kèpərə̂ɴ の場合はそれができない。動詞助詞 bá を用いた例を示す。

(182) máʊ　bá　θà
快適な　(無意)　心
「(自然に) 楽しくなる」

(183) *kè　bá　pərə̂ɴ
書く　(無意)　消息

(183) にアステリスクを付けたのは、「手紙をつい書いてしまう」の意で用いた場合は不適格という意味である。この文は、「消息をつい書いてしまう」の意なら適格である。「手紙をつい書いてしまう」は次のようにしなければならない。

(184) jə-　kèpərə̂ɴ　bá　lái
美しい　書く　(無意)　手紙
「私はつい手紙を書いてしまった」

なお、この kèpərə̂ɴ 全体を動詞たらしめているのは前部要素の動詞であるから、kè が主要部だと考えられる。

6.2.3　「動詞」+「動詞」の構成を持つもの

「動詞」+「動詞」の構成を持つ複合動詞は、すべて、似た意味の動詞を二つ重ねた次に挙げるようなものである。

(185) xîɣì　←　xî　+　ɣì
優美な　美しい　良い

(186) chêiɴphlî　←　chêiɴ　+　phlî
ピカピカの　清潔な　滑らかな

(187) nə̂ɴʔɯ́ɯ　←　nə̂ɴ　+　ʔɯ́ɯ
腐臭がする　臭い　腐った

(188) ɕɯ́ɯmáʊ　←　ɕɯ́ɯ　+　máʊ
平和な　涼しい　快適な

(189) ɣòɴtháʊ　←　ɣòɴ　+　tháʊ
終了する　終わる　尽きる

(190) ɕʊ̀kəlôɴ ← ɕû + kəlôɴ
急ぐ　急ぐ　慌てる

このパターンの場合、どちらの動詞が複合動詞全体の性質を決定しているとも言えない。おそらく、前部要素と後部要素のどちらもが主要部であると考えるのが良いだろう。

6.3　その他の複合語

複合名詞と複合動詞以外に、副詞が複合したものや助詞が複合したものがある。複合副詞は、繰り返し (次の第 7 章を参照のこと) によって作られた副詞を複合することによって作られる。

(191) ɕɨ́ɕɨ́ɨmáʊmáʊ ← ɕɨ́ɕɨ́ɨ + máʊmáʊ
平和に　涼しく　快適に

(192) ɣìɣìbábá ← ɣìɣì + bábá
上手に　良く　正しく

詳細は第 7 章を見られたい。

また、ごく少数ながら、複合助詞もある。例えば、主題を表す一般助詞 nɔ́ʔò は、名詞修飾助詞 nɔ́「あの」と ʔò「あの (nɔ́よりさらに遠いものを指す)」の複合によって作られたものである。

第7章　繰り返し

繰り返し (畳語; reduplication) には、動詞の繰り返しと助数名詞の繰り返しがある。

7.1　動詞の繰り返し

状態を表す動詞を重ねることによって副詞を作る。この中には単音節の動詞を重ねる AA 型、二音節の動詞を重ねる ABAB 型、および、AA 型を複合によって組み合わせた AABB 型がある。

7.1.1　AA 型

単音節からなる動詞をそのまま繰り返す。

(1) ʔáʔá「たくさん」　←　ʔá「多い」

(2) phɛ́phɛ́「速く」　←　phɛ́「速い」

(3) xɛ̀xɛ̀「ゆっくり」　←　xɛ̀「遅い」

(4) tánɴtánɴ「厚く」　←　tánɴ「厚い」

(5) ɣìɣì「良く」　←　ɣì「良い」

(6) jáijái「久しく」　←　jái「久しい」

7.1.2　ABAB 型

二音節からなる動詞の最初の音節を A、二番目の音節を B で表すとすると、ABAB のように繰り返す。この方法が適用できる動詞は少ないようであり、今のところ次の例しか見つかっていない。

(7) bádàbádà「ほどほどに」　←　bádà「ほどほどの」

7.1.3　AABB 型

AA 型によって作られた二つの副詞を複合したものである。

(8) xûɪxûɪxànxàɴ「一致団結して」　←　xûɪxûɪ「平らに」+ xànxàɴ「平らに」

(9) ɣìɣìbábá「上手に」　←　ɣìɣì「良く」+ bábá「正しく」

(10) ɕúɕúmáʊmáʊ「平和に」　←　ɕúɕú「涼しく」+ máʊmáʊ「快適に」

(11) ɣəɯɴɣəɯɴkhə̂ɴkhə̂ɴ「強固に」　←　ɣəɯɴɣəɯɴ「固く」+ khə̂ɴkhə̂ɴ「固く」

(12) khōkhōlə̀ɴlə̀ɴ「熱く」　←　khōkhō「熱く」+ lə̀ɴlə̀ɴ「暖かく」

さて、(8) の xûɪxûɪxànxàɴ「一致団結して」については、これに意味的に対応する xûɪxàɴ「一致団結した」という動詞 xûɪxàɴ が存在する。同様に、(9) から (12) の副詞についても、ɣìbá「上手な」、ɕúmáʊ「平和な」、ɣəɯɴkhə̂ɴ「強固な」、khōlə̀ɴ「熱い」という動詞が存在する。これらはみな「動詞 + 動詞」からなる複合動詞である。だとすると、例えば xûɪxûɪxànxàɴ は、複合動詞 xûɪxàɴ の第一音節と第二音節をそれぞれ繰り返して作られたものだとは考えられないだろうか。結論から言うと、本論文ではそのような考え方を取らない。なぜなら、次のような例が存在するからである。

(13) ɕúɕúbàbà「平和に」

問題は、これに対応する *ɕúbà という動詞が存在しないということである。このような動詞が存在しないのだから、ɕúɕúbàbà が *ɕúbà という二音節動詞から直接作られたと考えることはできない。それでは ɕúɕúbàbà はどのようにして形成されたと考えるべきだろうか。問題を解く鍵は、次のような表現の存在である。

(14) ⊂ ʔɔ́　ɕúɪ⊃　⊂ ʔɔ́　bà⊃
　　いる　平和な　いる　?
　「暮らしが平和だ」(001.225)

これは、第 29 章で述べる類似要素反復の例である。bà は、意味を持たない形態素である。第 29 章で論じるように、本論文では、この意味を持たない形態素 bà を、成句的な類似要素反復でのみ使われる単語であると考える。だとすると、この ɕúɕúbàbà は、⊂ ... ɕúɪ ... ⊃ ⊂ ... bà ... ⊃ という成句的な類似要素反復の前部要素と後部要素をそれぞれ AA 型副詞にし、さらに複合したものと考えることができる (この表記法については第 29 章を見よ)。このとき問題になるのは、bàbà という実際には使われない形を派生の途中に仮定しなければならないということであるが、bà は、ɕúɪ と組み合わされた類似要素反復の中でしか使われないのだから、単独で使われる bàbà という副詞が存在しないのは当然である。また、*ɕúbà という存在しない動詞を派生の前提として仮定するよりも、派生の途中過程に存在しない形を仮定することのほうが、記述として妥当性が高いと思われる。

同様に、

(15) thîthîchàchà「確実に」

という副詞も、成句的な類似要素反復の ⊂ ... thî ... ⊃ ⊂ ... chà ... ⊃ から作られたと考える。この後部要素 chà も、単独では意味を持たない形態素である。下に、この類似要素反復の実例を挙げる。

(16) ⊂ jʊ̄　thîꝏ　⊂ jʊ̄　chàꝏ
　見る　確かな　見る　?
「確かめる」(001.1466)

thîthîchàchà が ɕʊ́ɕʊ́bàbà と異なるのは、thîchà「確実な」という動詞が存在するということだが、この動詞の存在は偶然であると考えられる。

7.2　助数名詞の繰り返し

7.2.1　lə- AA

数詞 lə-「一」の後に助数名詞 (A で表す。助数名詞については第 10 章を参照) を置いた助数名詞句「lə- A」の A を繰り返し、全体として一つの名詞を作る。このようにして作られた名詞は不定を表す。ləɣàɣà「誰か」(←ɣà「～人」)、ləmèɪnmèɪn「何か, 何種類か」(←mèɪn「～種類」)、ləcóɴcóɴ「どこか」(←cóɴ「～ヶ所」)、ləphlóʊɴphlóʊɴ「どれか」(←phlóʊɴ「～個 (丸いもの)」) など。lə- AA の統語的振る舞いは助数名詞句に準じる。すなわち、名詞であるが、そのまま副詞的に用いることができる。

(17) jə-　phʊ̂ʊ　nɔ́　ʔè　mwɛ̄　ʔáɴ　chà　ɣòɴ　**ləmèɪnmèɪn**　nɔ́tā |
　1sg　祖父　(題)　(条件)　(繋)　食べる　CHə　終わる　何か　(前提)

　ʔəwê　ɕòɕó　ʔə-　nò　phàɴ　dè　thî　ɣòɴ ...
　3se　ゆすぐ　3sg　口　中　(共)　水　(継起)
「私の祖父は何かを食べ終わると、口を水でゆすいで...」(II-08.12)

(18) kəchâɴ　ʔè　pàpjá　**ləɣàɣà** |
　象　(条件)　引かれる　誰か

　mwɛ̄　wê　ʔə-　nàɴ　lɔ̂
　(繋)　(強意)　3sg　勝つ　(断定)
「(象を両側から 2 人で引っぱって) 象がもしどちらかの側に引っぱられたら、彼 (= 引いた人) が勝ちだ」(III-03.14)

(19) là　**ləbéɪnbéɪn**　nɛ̂
　月　どれか　NE
「(お金を払うのは) 何ヶ月か後にするね」(V-03.23)

(20) phâθʊ́ɣɛ̀　lì　**ləcóɴcóɴ** |
　(人名)　行く　どこか

　máʊ　ʔə-　θà
　快適な　3sg　心
「パートゥーゲーはどこに行っても楽しかった」(V-04.56)

くだけた口語では、しばしば lə- が脱落する。

(21) nəθí　dá　lóθà　**phèɴphêɴ**　dài　jā
2pl　会う　(相互)　何度か　また　JA
「あなた方はその後何度か会ったでしょう?」(012.8)

▷ phêɴ は回数を数える助数名詞。

7.2.2　ʔə- AA

助数名詞に接頭辞 ʔə- を付けると、単独で発話可能な名詞になる (第 5 章および第 10 章参照)。さらに、このようにしてできた名詞の助数名詞の部分を繰り返すと、数の多さを表す名詞ができる。ʔəmèiɴmèiɴ「何種類も」(←mèiɴ「～ 種類」) など。ここでも、ʔə- AA の統語的振る舞いは助数名詞句に準じる。

(22) láijōkwè　láibéiɴ　láiʔàʊ　ʔɔ́　wê　**ʔəmèiɴmèiɴ**　lɔ̂
娯楽用の書籍　本　雑誌　ある　(強意)　何種類も　(断定)
「娯楽用の本や雑誌は何種類もある」(III-07.13)

(23) bê　mə-　ʔɔ́thɔ̄　thàiɴ　lànchòphʊ́lì　**ʔəchâɴchâɴ**　θò |
(目的)　(非現)　残る　(再度)　子々孫々　何段階も　(目的')

pə-　bá　kəjâɴ　kòɴθò　kō　ɣà　dè　lɔ̂
1pl　(当為)　着飾る　着る　(毎)　～ 人　(毎')　(断定)
「子々孫々何代も (カレンの民族衣装が) 残るように、私達は皆 (カレン服を) 着なければならない」(IV-01.65)

▷ châɴ は段階を数える助数名詞。

7.3　補足:動詞の繰り返しについて

譲歩を表すために動詞の繰り返しを用いる人がいる。次のような例である。

(24) chə-　khū　khū　chə-　chòɴ　chòɴ　jə-　mə-　lì
CHə　暑い　暑い　CHə　降る　降る　1sg　(非現)　行く
「暑くても雨が降っても私は行く」

(25) θí　θí　lə-　θí　θí　bá　ʔáɴcà
できる　できる　(否)　できる　できる　(当為)　尋ねる
「(ビルマ語が) できようができまいが、聞いてみなくてはならない」

問題はこれがカレン語の形態法 (統語法?) として認められるかということである。というのは、一部のポー・カレン語話者は、この繰り返しをビルマ語の直訳と考えているからである。したがって、本論文では譲歩を表す繰り返しの存在を指摘しておくにとどめておく。上の文の内容はどちらも従属節標識の ɣì を用いて、よりポー・カレン語らしく表現することができる。

(26) chə-　khū　ɣì　chə-　chòɴ　ɣì　jə-　mə-　lì
CHə　暑い　(任意)　CHə　降る　(任意)　1sg　(非現)　行く
「暑くても雨が降っても私は行く」

(27) θí　ɣì　lə-　θí　ɣì　bá　ʔáɴcà
できる　(任意)　(否)　できる　(任意)　(当為)　尋ねる
「(ビルマ語が) できようができまいが、聞いてみなくてはならない」

第III部

名詞に関連する諸問題

第8章　名詞句

名詞と同等の機能を持つ文中の要素を**名詞句**と呼ぶ。第3章で述べているように、名詞は、(i) 単独で文を形成することができる、(ii) 動詞助詞を付けることができない、(iii) 動詞の項になることができる、という特徴を持つ。この基準に従えば、下に挙げる音列は名詞句である。

(1) ʔəwê　xwè　já　phàdʊ́　lé　cəpwɛ̄　ʔəphâɴkhʊ́　lə-　béiɴ　nɔ́
3se　買う　魚　大きな　(場)　机　上　一　～枚　その
「机の上の、彼が買ったその大きな1匹の魚」

なぜならこの音列は、(2) の答えの文のように単独で文になることと、(3) のように動詞の項になることは可能であるが、(4) に見るように動詞助詞 (この例では非現実法を表す mə-) を付けることはできないからである。

(2) nə-　mə-　ʔáɴ　khɔ̀khɔ̂　béiɴ　lɛ̂
2sg　(非現)　食べる　どの　～枚　(疑)
「あなたはどれを食べますか?」

——— ʔəwê　xwè　já　phàdʊ́　lé　cəpwɛ̄　ʔəphâɴkhʊ́　lə-　béiɴ　nɔ́
3se　買う　魚　大きな　(場)　机　上　一　～枚　その
「机の上の、彼が買ったその大きな1匹の魚 (を食べます)」

(3) ʔəwê　xwè　já　phàdʊ́　lé　cəpwɛ̄　ʔəphâɴkhʊ́　lə-　béiɴ　nɔ́
3se　買う　魚　大きな　(場)　机　上　一　～枚　その

ʔʊ́pàʊ　jàʊ
腐る　(完)
「机の上の、彼が買ったその大きな1匹の魚は腐っている」

(4) ***mə-**　ʔəwê　xwè　já　phàdʊ́　lé　cəpwɛ̄　ʔəphâɴkhʊ́　lə-　béiɴ　nɔ́
(非現)　3se　買う　魚　大きな　(場)　机　上　一　～枚　その

さて、このような特徴を持つ要素を名詞句と定義すると、名詞句を構成する要素は次のように図式化できる。括弧でくくった要素は任意の要素である。関係節は名詞の前に置かれる場合と後に置かれる場合がある。

(5) **(関係節)——名詞——(関係節)——(側置助詞句)——(助数名詞句)——(名詞修飾助詞)**

実は (1) の名詞句は、ここに示したすべての要素がそろった名詞句である。

(6) ʔəwê xwè　já　phàdʊ́　lé cəpwē ʔəphânkhʊ́　lə-　béiɴ　nɔ́
関係節　名詞　関係節　側置助詞句　助数名詞句　名詞修飾助詞

この例は名詞句が複数の単語を含んでいる場合であるが、単独で文中に現れた名詞も、最も小さな名詞句だと考えることができる。なお、側置助詞句が「助詞 lé + 空間や時間を表す名詞句」の場合、lé は省かれることがある。

(7) phlòʊɴ　(lé)　pəjànkhāɴ
人　(場)　ビルマ
「ビルマの人」

(8) phlòʊɴmwì　(lé)　mʊ̀ɣá
客　(場)　昨日
「昨日の客」

また、名詞の後の関係節の位置に、動詞の繰り返しによって作られた副詞が現れることもある (第 19 章 19.1.3 を参照)。

(9) jáʔʊ́thî　ɣìɣì
魚醤　良く
「良い魚醤」

さて、名詞句は以下に述べる三つの方法によって拡張することができる。どの方法によった場合も理論上は名詞句を無限に拡張することが可能である。

一つ目は、(1) の「名詞」の位置に名詞句を代入する方法である。下の例を見ていただきたい。

(10) [$_{NP}$ [$_{NP}$ chəɣànmə̂ɴ　lé　[$_{R}$ ʔəwê　dʊ́]]　lé　[$_{R}$ jə-　jūphànɴ　bá]]
映画　(関)　3se　撮る　(関)　1sg　見る　(経験)
「私が見たことのある、彼が撮った映画」

ここでは、まず名詞 chəɣànmə̂ɴ の後に関係節が付くことによって一つの名詞句が作られ、さらに、この名詞句の後にもう一つの関係節が現れて、より大きな名詞句ができている。このようなことができるのは、(1) の「名詞」の位置に名詞句を代入することができるからである。

二つ目は、名詞句の前にその名詞句を修飾する別の名詞句を置くことである。次の例では、ɣàɴ「絵」の前にそれを修飾する klòɴ「パゴダ」という単語が置かれている。

(11) klòɴ　ɣàɴ
パゴダ　絵
「パゴダの絵 (=パゴダを描いた絵の意)」

ここでなぜ klòɴ が修飾語で ɣàɴ が被修飾語だと考えられるかというと、助数名詞を用いる場合、ɣàɴ に対応する助数名詞が現れるからである。「パゴダ」を数えるときの助数詞は phlóʊɴ だが、「絵」を数えるときの助数詞は béiɴ である。上の klòɴ ɣàɴ の場合、後部要素の ɣàɴ に対応する助数名詞が現れる。

(12) klòɴ　　ɣàɴ　lə-　béiɴ
パゴダ　絵　　一　～枚
「パゴダの絵 1 枚」

したがって、後部要素 ɣàɴ を主要部だと見なすことができる。第 6 章で述べているように、複合名詞には後部要素が主要部であるものと前部要素が主要部であるものとがある。しかし、名詞句と名詞句を配列する場合は、常に後部要素が主要部である。同じ名詞的要素の並べ方であっても、形態論レベルと統語論レベルでは要素の並べ方に違いがあることになる。すなわち、形態論における並べ方は不規則であるが、統語論における並べ方は規則的である。下に「名詞句 + 名詞句」の例をいくつか挙げる。

(13) θɛ̀thî　　phʊ̂ɕā
金持ち　老人
「金持ちであるところの老人」

(14) θíkèbòɴ　　khʊ́klà
ボールペン　蓋
「ボールペンのキャップ」

(15) θéiɴpâɴ　chəθíchəbá
科学　　知識
「科学的な知識」

(16) phlòʊɴthîkhāɴ　dòʊɴdʊ́
カレン州　　首都
「カレン州の州都」

ところで、所有者と被所有者も「名詞句 + 名詞句」という構造によって表される。前の名詞句が所有者を表し、後の名詞句が被所有者を表す。

(17) θɛ̀thî　　phʊ́mʊ́ɪ
金持ち　娘
「金持ちの娘 (注:「金持ちであるところの人物の娘」の意)」

(18) cɔ̀ʔɛ́phlòʊɴ　ɣéiɴ
(人名)　　家
「チョーエープロンの家」

所有者を表す名詞句が代名詞の場合、第一形または強勢形が用いられる。

(19) ʔə-　phʊ́mʊ́ɪ
3sg　娘
「彼の娘」

(20) ʔəwê　ɣéiɴ
3se　家
「彼の家」

所有者を表す名詞句が非代名詞のときに、所有物を表す名詞句の前には、三人称単数代名詞の第一形が置かれることがある。この三人称単数代名詞は、前後の名詞句が所有者と被所有者であるということを明示する働きを持っている。

(21) θɛ̀thî　ʔə-　phʊ́mʊ́ɪ
金持ち　3sg　娘
「金持ちの娘」

(22) θɛ̀thî　θɛ̀　ʔə-　ɣéiɴ
金持ち　(複)　3sg　家
「金持ち達の家」

(23) cɔ̀ʔɛ́phlòʊɴ　ʔə-　ɣéiɴ
(人名)　3sg　家
「チョーエープロンの家」

(24) thîlá　θí　ʔə-　chəkhōʊɴchətà
塩　pl　3sg　恩恵
「塩の効用」

この代名詞は音声的には後の名詞句に付属している。したがって、これは一種の主要部標示 (head-marking) と言ってもよいだろう (Nichols 1986 参照)。ポー・カレン語の文法において明らかに主要部標示と考えることのできる現象はこれのみである。

名詞句を拡張する方法の三つ目は、名詞句を列挙することである。名詞句の列挙には、(25) や (26) のように名詞句をそのまま列挙する方法と、(27) のように列挙を表す名詞修飾助詞 dè でつなぐ方法がある[1] 。

(25) cʊ́ɪ　xòʊɴlāɴ　kháɴ　xòʊɴlāɴ
手　傷　足　傷
「手の傷や足の傷」

(26) bʊ́ɪkhlî　phēiɴkhlî　θíləphá
米　ケシの実　(複)
「米やケシのみなど」

(27) tàləphɔ́　**dè**　jáʔʊ́ɪthî
雑炊　(列挙)　魚醤
「雑炊と魚醤」

[1]助詞を使わずそのまま列挙したものは、第 29 章で述べる類似形反復である可能性もある。

第9章　代名詞

ポー・カレン語の照応には、名詞照応 (noun anaphora)、代名詞照応 (pronoun anaphora)、ゼロ照応 (zero anaphora) の 3 種類がある。例えば、

(1) cɔ̀ʔɛ́phlòʊɴ　lì　ʁâ
(人名)　行く　(疑)
「チョーエープロンは行ったか?」

という問いに対して、次の三つの答え方が可能である。

[名詞照応]

(2) cɔ̀ʔɛ́phlòʊɴ　lì
(人名)　行く
「チョーエープロンは行った」

[代名詞照応]

(3) ʔəwê　lì
3se　行く
「彼は行った」

[ゼロ照応]

(4) lì
行く
「行った」

この章で論じる代名詞のうち、chə̀ (第二形を引用形として用いる) を除くすべての代名詞は、代名詞照応に用いることができる。

代名詞には**第一形**(form I)、**第二形**(form II)、**強勢形**(emphatic form) の三つの形がある。このうち少なくとも二つの形を持つ語を**代名詞**と定義する。代名詞には、一人称単数代名詞、一人称複数代名詞、二人称単数代名詞、二人称複数代名詞、三人称単数代名詞、三人称複数代名詞、および chə̀ がある。一人称代名詞および二人称代名詞はそれぞれ話し手 (書き手) および聞き手 (読み手) を指す。三人称代名詞はそれ以外を指す。三人称代名詞は生物も無生物も指すことができる。chə̀ の指示対象については後述する。すべての形を示したのが下の表である。

	第一形	第二形	強勢形
1sg	jə-	jə̀	jəwê, jəwêdá
1pl	hə- (pə-)	hə̀ (pə̀)	həwê (pəwê)
			həwêdá (pəwêdá)
2sg	nə-	nə̀	nəwê, nəwêdá
2pl	nəθí	nəθí	nəθíwê, nəθíwêdá
3sg	ʔə-	ʔə̀	ʔəwê, ʔəwêdá
3pl	ʔəθí	ʔəθí	ʔəθíwê, ʔəθíwêdá
	ʔəθíʔə-(名詞の前のみ)		
chə̀	chə-	chə̀	–

一人称複数代名詞には、h ではなく p で始まる変異形があり、これを括弧の中に示した。p で始まる形は、より格式張った場面で用いられることが多い[1] 。三人称複数代名詞の第一形には二つの形があり、うち ʔəθíʔə- は名詞の前でのみ使われる。強勢形にはそれぞれ二つの形がある。

第一形、第二形、強勢形の定義は、それぞれ次の通りである。

- 第一形: 主語の位置あるいは名詞の直前に現れる形のうち、音節 wê を含まない形。
- 第二形: 目的語の位置に現れる形のうち、音節 wê を含まない形。
- 強勢形: 音節 wê を含む形。

代名詞は名詞の下位範疇である。なぜなら、動詞の項になるし、動詞助詞を付けることができないからである。実は、名詞の定義におけるもう一つの条件である、単独で文を形成することができるという条件を、第一形は満たすことができない。よってこの点から見れば第一形のみを助詞に分類するという可能性も生じる。しかしながら、上の表に示したパラダイムをなすことを考えると、これのみが別の品詞に属すると考えるのは非常に不自然である。よって第一形を助詞に分類するということはしない。

以下にまず chə̀ を除く代名詞に関して、第一形・第二形・強勢形についての記述を行う。chə̀ を別個に扱うのは、これが意味的に特殊だからである。

9.1　第一形

第一形は、主語の位置あるいは名詞の直前に現れる形のうち、音節 wê を含まない形と定義する。第一形は次に述べるような環境に現れる。

9.1.1　主語として

第一形は次のように主語の位置に現れる。

[1] 他のカレン系言語との対応を見ると、歴史的には p で始まる形のほうが古いと考えられる。

(5) jə-　lì　　「私は行った」
　1sg　行く

(6) hə-　lì　　「私達は行った」
　1pl　行く

(7) nə-　lì　　「あなたは行った」
　2sg　行く

(8) nəθí　lì　　「あなた方は行った」
　2pl　行く

(9) ʔə-　lì　　「彼 (彼女) は行った」
　3sg　行く

(10) ʔəθí　lì　　「彼ら (彼女ら) は行った」
　3pl　行く

9.1.2　名詞の前

第一形は名詞 (句) の前にも現れる。名詞の前に置かれた第一形は、その名詞が表す指示物の所有者を表す。三人称複数代名詞の二つの第一形 ʔəθí と ʔəθíʔə- のうち ʔəθíʔə- は、この場合にのみ現れることができる[2] 。

(11) jə-　ɣéiɴ　　「私の家」
　1sg　家

(12) hə-　ɣéiɴ　　「私達の家」
　1pl　家

(13) nə-　ɣéiɴ　　「あなたの家」
　2sg　家

(14) nəθí　ɣéiɴ　　「あなた方の家」
　2pl　家

(15) ʔə-　ɣéiɴ　　「彼の家」
　3sg　家

(16) { ʔəθí / ʔəθíʔə- }　ɣéiɴ　　「彼らの家」
　3pl　3pl　家

[2] 3 人称単数の場合、“強勢形 ＋ 第一形 ＋ 名詞” という特殊な配列によって所有者を表すことがある。
(ex.)　ʔəwê　ʔə-　ɣéiɴ　　「彼の家」
　3se　3sg　家

9.2　第二形

第二形は、目的語の位置に現れる形のうち、音節 wê を含まない形と定義する。第二形は第一形が現れる環境以外のすべての環境に現れ得る。すなわち次のような環境である。

9.2.1　目的語として

第二形は動詞の目的語の位置に現れる。

(17) chərâ　jʊ̄　jə̀　「先生が私を見た」
先生　見る　1SG

(18) chərâ　jʊ̄　hə̀　「先生が私達を見た」
先生　見る　1PL

(19) chərâ　jʊ̄　nə̀　「先生があなたを見た」
先生　見る　2SG

(20) chərâ　jʊ̄　nəθí　「先生があなた方を見た」
先生　見る　2PL

(21) chərâ　jʊ̄　ʔə̀　「先生が彼を見た」
先生　見る　3SG

(22) chərâ　jʊ̄　ʔəθí　「先生が彼らを見た」
先生　見る　3PL

9.2.2　側置助詞と共に

第二形は側置助詞によって導かれる名詞句の位置に現れる。

(23) chərâ　lì　dè　jə̀　「先生が私と行った」
先生　行く　(共)　1SG

(24) chərâ　lì　dè　hə̀　「先生が私達と行った」
先生　行く　(共)　1PL

(25) chərâ　lì　dè　nə̀　「先生があなたと行った」
先生　行く　(共)　2SG

(26) chərâ　lì　dè　nəθí　「先生があなた方と行った」
先生　行く　(共)　2PL

(27) chərâ　lì　dè　ʔə̀　「先生が彼と行った」
先生　行く　(共)　3SG

(28) chərâ　lì　dè　ʔəθí　「先生が彼らと行った」
先生　行く　(共)　3PL

9.2.3　主題として

第二形は主題の位置に現れる。

(29) jə̀　nɔ́　lɪ̀　「私は行った」
1SG　(題)　行く

(30) hə̀　nɔ́　lɪ̀　「私達は行った」
1PL　(題)　行く

(31) nə̀　nɔ́　lɪ̀　「あなたは行った」
2SG　(題)　行く

(32) nəθí　nɔ́　lɪ̀　「あなた方は行った」
2PL　(題)　行く

(33) ʔə̀　nɔ́　lɪ̀　「彼は行った」
3SG　(題)　行く

(34) ʔəθí　nɔ́　lɪ̀　「彼らは行った」
3PL　(題)　行く

なお、主題を表す助詞は現れないこともある。その場合、代名詞の後には軽いポーズが置かれるか、音節末の母音が長めに発音される。

主題化された要素にのみ付く一般助詞の θí「～も」と共起した場合、三人称複数の ʔəθí の後には複数を表す名詞修飾助詞の θɛ̀ を置かなければならない。これはおそらく、θí という発音の連続を避けるためではないかと思われる。

(35) ʔəθí　θɛ̀　θí　lɪ̀　「彼らも行った」
3PL　(複)　(類似)　行く

9.2.4　助数名詞句の前

助数名詞句の前でも第二形が使われる。

(36) jə̀　lə-　ɣà　「私一人」
1SG　一　～人

(37) hə̀　nī　ɣà　「私達二人」
1PL　二　～人

(38) nə̀　lə-　ɣà　「あなた一人」
2SG　一　～人

(39) nəθí　nī　ɣà　「あなた方二人」
2PL　二　～人

(40) ʔà　　lə-　ɣà　　「彼一人」
　　1SG　一　～人

(41) ʔəθí　nī　ɣà　　「彼ら二人」
　　3PL　二　～人

9.2.5　その他

上述した以外に、第二形は次のような環境に現れ得る。まず、名詞述語として用いられるのは第二形である。

(42) ʔənɔ́　**ʔà**　lɔ̂　　「それは彼だ」
　　それ　3SG　(断定)

次のような代名詞一つだけからなる名詞述語だけの文も可能である。

(43) **ʔà**　「(それは) 彼だ」
　　3SG

次に、分裂文の焦点の位置で使われる。

(44) lì　nɔ́　**jə̀**　lɔ̂　　「行ったのは私だ」
　　行く　(題)　1SG　(断定)

また、倒置された主語の位置で使われる。

(45) ʔɔ́　θâ　△ **jə̀**　lɔ̂　　「もう私しか残っていない」
　　いる　(新局)　1SG　(断定)

9.3　強勢形

音節 wê を含む形を一律に強勢形と呼ぶ。強勢形には 2 種類ある。一つは jəwê のように第一形と wê を結合した形になっているものである。もう一つは、これに更に dá を付けた形になっているものである。なお、wê も dá もその語源は分からない。動詞助詞の wê や wêdá と語源的に関連している可能性はある。

強勢形の存在意義は、代名詞を音声的により目立たせるところにあると考えられる。代名詞は、二人称複数と三人称複数を除けば子音と中舌母音 ə だけからなり、音声的に弱い。音節 wê や dá は、代名詞を音声的に強める働きをしているのだろう。

強勢形は、第一形および第二形が現れるすべての環境に現れることができる。次に一人称単数代名詞の例を示す。

(46) jəwê(dá)　lì　　「私は行った」(主語)
　　1se　行く

(47) jəwê(dá)　ɣéiɴ　　「私の家」(名詞の前)
　　1se　家

(48) chərâ　jʊ̄　jəwê(dá)　「先生が私を見た」(目的語)
先生　見る　1se

(49) chərâ　lì　dè　jəwê(dá)　「先生が私と行った」(側置助詞の後)
先生　行く　(共)　1se

(50) jəwê(dá)　nɔ́　lì　「私は行った」(主題)
1se　(題)　行く

(51) lì　nɔ́　jəwê(dá)　lɔ̂　「行ったのは私だ」(分裂文の焦点)
行く　(題)　1se　(断定)

(52) jəwê(dá)　lə-　ɣà　「私という人間」(助数名詞句の前)
1se　一　～人

三人称単数代名詞の場合、主節の主語の位置には第一形ではなく強勢形が現れることのほうが一般的である。

(53) **ʔəwê**　lì　lʊ́ɪ　ʔàiθài　ʔɔ́
3se　行く　(場)　修験者　所
「彼は修験者のところに行った」(006.58)

(54) **ʔəwê**　chônmónɴ　bê　nɔ́　θò　ɣònɴ ...
3se　考える　(比定)　それ　(比定')　(継起)
「彼はそのように考えて... 」(II-02.27)

(55) **ʔəwê**　chînànɴ　lə-　ɣà　lɔ̂
3se　座る　一　～人　(断定)
「彼女は一人だけで座っていた」(IV-07.25)

ただし、従属節の主語には第一形が用いられることが少なくない。

(56) bònáinjò　nɔ́　mànɴcɔ̀thônɴdʊ́ɪ　lə-　ɣà　mwɛ̄　[$_C$ **ʔə-**　nánɴ　dài
現在　(題)　(人名)　一　～人　(繋)　3sg　覚えている　まだ
ʔə-　chəkhlàiɴ　dài]　ʁâ　nɔ́　θʊ́jâ　ʔé　kənɛ̂
3sg　言葉　まだ　(疑)　(題)　知る　(否)　KANE
「今、トンドゥーおじさんが自分の (言った) 言葉をまだ覚えているかどうか分からないわな」(V-03.66)

(57) dè　**ʔə-**　kəthái ...
(理由)　3sg　きつい
「(部屋が) 窮屈だから...」(II-02.20)

(58) jə-　ʔánmə̂ɴ　[$_C$ **ʔə-**　lì]
　　1sg　命じる　　3sg　行く
　　「私は彼に行くように命じた」

3 人称単数以外では、主節であれ従属節であれ、主語の位置には第一形が現れることが多い。3 人称単数の場合に強勢形が現れる頻度が高い理由は、第一形 ʔə- の頭子音が聞こえの弱い ʔ であることと無関係ではないだろう[3] 。

補足:　強勢形 (dá を含まないもの) と同じ形が、「(誰々の) もの」という意味を表すことができる。

(59) ʔəjò　mwɛ̄　**jəwê**
　　これ　(繋)　私のもの
　　「これは私のだ」

(60) ʔəjò　mwɛ̄　**həwê**
　　これ　(繋)　私達のもの
　　「これは私のだ」

(61) ʔəjò　mwɛ̄　**nəwê**
　　これ　(繋)　あなたのもの
　　「これはあなたのだ」

(62) ʔəjò　mwɛ̄　**nəθíwê**
　　これ　(繋)　あなた方のもの
　　「これはあなた方のだ」

(63) ʔəjò　mwɛ̄　**ʔəwê**
　　これ　(繋)　彼のもの
　　「これは彼のだ」

(64) ʔəjò　mwɛ̄　**ʔəθíwê**
　　これ　(繋)　彼らのもの
　　「これは彼らのだ」

9.4　代名詞化 (pronominalization) は存在するか?

第 4 章に述べているとおり、補語を主題化した場合、元の位置に主題化した要素と同一指示の代名詞が現れることがある。これをここでは便宜的に「主題化された要素の繰り返し」と呼んでおく。次の例を見ていただきたい。

[3]Phillips (p.c.) によると、タイ側のポー・カレン語では、主節の主語にも ʔə- が頻繁に現れるようである。

(65) jə̀　(nɔ́)　**jə-**　ʔáɴ　kʊ́
　1SG　(題)　1sg　食べる　菓子
　「私は菓子を食べた」

(66) ʔɛ̀ɪnmʊ́ʊʔwà　(nɔ́)　jə-　dá　**ʔə̀**　klə̀　lɔ̂
　(人名)　(題)　1sg　会う　3SG　いつも　(断定)
　「エインムーワーには私はいつも会っている」

上の例から主題を表す助詞を取り除くこともできる。nɔ́ を (　) でくくってそのことを示した。主題を表す助詞が現れない場合、あたかもこの言語に代名詞化 (pronominalization) が生じているかのようにも見える。代名詞化というのは、チベット・ビルマ諸語に広く見られる現象で、代名詞に起源を持つ接辞が動詞に付いて主語や目的語との一致を示す一種の主要部標示 (head-marking) である (Nishi 1995 などを参照されたい)。LaPolla (1994) は、スゴー・カレン語の代名詞の体系を代名詞化の萌芽と見なせる可能性を示唆している。LaPolla は、戴慶厦他 (1991:400) から引用しているが、ここでは筆者自身のスゴー・カレン語のデータから例文を提示しておく。

[Sgaw Karen]

(67) jā　jə-　lɛ̄
　1sg　1sg　行く
　「私は行った」

jā はポー・カレン語の第二形に機能的に対応する形、jə- は第一形に機能的に対応する形である。スゴー・カレン語の代名詞の体系を代名詞化と捉える場合、この jə- を動詞の人称接辞と見なすことになる。LaPolla は、代名詞化をチベット・ビルマ諸語に存在する駆流 (drift; Sapir が用いた術語) に沿う言語現象の一つとして位置づけている。もしそのような現象がポー・カレン語にも見られることが確認できたら、それはチベット・ビルマ言語学にとって興味深い発見になり得る。しかし、筆者は、上に挙げたスゴー・カレン語の事例はともかくとして、ポー・カレン語に代名詞化は存在しないと考える。その理由は以下にのべる 2 点である。

一つ目は、「主題化された要素の繰り返し」という現象が、主に対比を表す文脈でのみ用いられるということである。したがって、主題化した要素を代名詞で繰り返さない次の (68) や (69) のような文のほうが意味的により「普通の」言い方である。

(68) jə-　ʔáɴ　kʊ́
　1sg　食べる　菓子
　「私は菓子を食べた」

(69) jə̀　(nɔ́)　ʔáɴ　kʊ́
　1SG　(題)　食べる　菓子
　「私は菓子を食べた」

先に見た (65) は、「他の人は菓子を食べなかったが、私は食べた」あるいは「他の人はともかくとして、私は菓子を食べた」といったことを言いたい場合に用いられる。このよう

な意味を伴うのは、「主題化された要素の繰り返し」という現象が、そもそも主題化という現象に付随して現れるからである。一般的に主題化そのものが対比の意味を帯びやすい操作であり、なおかつ、その要素をもう一度元の位置で繰り返すのだから、対比の意味が生じるのは自然である。もし、動詞に付加された代名詞が一致を表すものだとしたら、(65) がこのような特殊なニュアンスを持つことはないだろう。

もう一つの理由は、次のような例の存在である。

(70) ʔà　(nɔ́)　jə-　lókwê　dè　**ʔà**　phléphlé
3SG　(題)　1sg　遊ぶ　(共)　3SG　一緒に
「彼女は、私が一緒に遊んだ」

ここでも主題化した要素は代名詞で繰り返されているが、この要素は側置助詞によって導入された要素であり、そのため動詞に付加されているとは考えられない。代名詞化現象は動詞に接辞が付加される現象であるから、この (70) のようなものを代名詞化と見なすことはできない。一方で、この (70) のようなものを、動詞に隣接する位置に代名詞が現れたもの (上の 65 や 66) とは別個に扱わなければならない理由はこの言語の中にはない。

筆者は、おそらくスゴー・カレン語の事例もポー・カレン語と同様の扱いをすることができる可能性が高いと考えている。少なくともポー・カレン語については、代名詞化は存在しないと考えたほうが良い。

9.5　chə̀

他の代名詞の基本的機能が照応であるのに対して chə̀ は照応には用いられない。chə̀ は、任意の生物や無生物、あるいは任意の事象を表す。言い換えると、日本語のモノ (物および者) とコト (事) の指示対象を包含する指示対象を持つ。つまり、chə̀ は独自の所記 (signifié) を持つのであり、文脈によらねば指示する対象が決定されない他の代名詞とはまったく異なる性質を持つ。これを「代名詞」として分類するのは、第一形として chə-、第二形として chə̀ という二つの形を持つからである。ポー・カレン語の話者も chə̀ を引用形 (citation form) として用いるので、本論文でもこれを引用形として用いる。

9.5.1　chə̀ の第一形と第二形

第一形 chə- が現れるのは次のような環境である。

主語として

(71) chə-　lì
CHə　行く
「人々が行く」

名詞修飾助詞 jò, nɔ́, ʔò の前

(72) chə- jò
CHə この
「このもの; この人」

(73) chə- nɔ́
CHə あの
「あのもの; あの人」

(74) chə- ʔò
CHə あの
「あのもの; あの人」

側置助詞句の前

(75) chə- bê ʔəjò
CHə (比定) これ
「このようなもの; このような人」

名詞 (助数名詞句を含む) の前

(76) chə- ʔəxàxòɴ
CHə 他
「他のもの」

(77) chə- lə- dɯ̀ɯ
CHə 一 ～個
「一つのもの; 一人の人」

関係節の前

(78) chə- [$_R$ làɴthé]
CHə 落ちる
「落ちたもの」

9.5.2 chə̀ の第二形

第二形 chə̀ が現れるのは次のような環境である。

目的語として

(79) ʔəwê kè chə̀
3se 書く CHə
「彼は (ものを) 書いている」

他の代名詞の後

(80) jə-　chə̀
1sg　CHə
「私のもの」

関係節の後

(81) [$_R$ jə-　kè]　chə̀
1sg　書く　CHə
「私が書いたもの」

9.5.3　chə̀ の表すもの

chə̀ の指示対象は人間であったり動物であったり事象であったりと様々である。下に色々な例を示す。

人間を含む生物を表す例

(82) chə-　lə-　ɣà　jò　khlàiɴ　phlɛ́　mā
CHə　一　～人　この　話す　速い　(非常)
「この人は話をするのが速い」(001.2952)

(83) chə-　[$_R$ bɯ́ɯ　làɴ　wə̀béiɴ　pənā]　θí
CHə　飼う　(下方)　牛　水牛　(複)
「牛や水牛を飼っている人」(001.830)

(84) chə-　[$_R$ mà　ɣàɣòɴ　chəthə́ɯɴchəbòɴ]
CHə　(使役)　壊れる　植物
「植物に害を与える鳥」(II-04.24)

無生物を表す例

(85) chə-　lə-　dɯ̀ɯ　jò　dè　chə-　lə-　dɯ̀ɯ　jò
CHə　一　～個　この　(列挙)　CHə　一　～個　この

kwâ　lóθà　bêθí　lɛ̂
異なる　(相互)　どのように　(疑)
「これとこれとはどのように違うのですか?」(001.2060)

(86) [$_R$ jə-　mə-　θôʊɴ　phí]　chə̀　θɛ̀
1sg　(非現)　送る　(裨益)　CHə　(複)
「私が送ってあげようとしているもの」(009.37)

生物を表しているのか無生物を表しているのか不明な例

(87) lé　cài　ʔəphâɴkhʊ́　chə-　[$_R$ dʊ́　dá]　ʔɔ́　lə̀ɴ　ʔé
(場)　仏　上　CHə　大きい　(比較)　ある　もはや　(否)
「仏よりも尊いものはない」(001.149)

事象を表す例

(88) chə-　[$_R$ tháɴthɔ̂　thánɴ　lé　ʔəɣì]
CHə　発展している　(変化)　(場)　良いこと
「良い方向へ発展すること」

9.5.4 修飾語を伴わない chə̀ の様々な用法

次の例における jə- のような修飾語が伴っていれば、chə̀ が何を指示しているかは聞き手にとっても明らかである。

(89) **jə-**　chə̀
1sg　CHə
「私のもの」

しかし、修飾語がなければ、chə̀ の指示対象は実に多様であり得るので、聞き手にとって chə̀ が何を指示しているかは特定困難になる。ところが、chə̀ はしばしば修飾語を伴わずに現れる。修飾語を伴わない chə̀ には、大別して、(1) 特定できない行為者や被動者などを表す用法、(2) 特定できる行為者や被動者などを表す用法、(3) 感情や生理現象の経験者を表す用法、(4) 自然現象を表す用法、の四つがある。以下ではこの四種類の用法について述べる。

9.5.4.1 特定できない行為者や被動者などを表す

話者にとって特定することのできない行為者や被動者などを表す。例えば次の例を見ていただきたい。

(90) **chə-**　thîɴ　wá　nə̀　dè　ʔəphlʊ̀ʊɴ　lɔ̂
CHə　思う　(無意)　2SG　(共)　カレン人　(断定)
「皆があなたをカレン人だと思ってしまっている」(003.613)

この文で、「思う」の行為者は不特定多数であるために、話者には特定できない。そのため chə̀ が使われている。また、次のような例でも chə̀ は使われる。

(91) **chə-**　ʔáɴɣʊ́ɯ　jə-　cɛ́béiɴ
CHə　盗む　1sg　自転車
「誰かが私の自転車を盗んだ」(001.907)

この例では、「盗む」の行為者は不特定多数ではないが、話者にはそれが誰であるかは分からない。そのため chə̀ が使われている。

このように話者が何らかの理由で特定できない指示対象を chə̀ は表す。では、話者にとって特定不可能であるなら、単に名詞を「ゼロ」にすれば良いのではないかという疑問が生じる。例えば (91) を次のようにすることはできないのか。

(92) ʔánɣɯ́ɪ　jə-　cɛ́béiɴ
盗む　1sg　自転車
「私の自転車を盗んだ」

この文はもちろん不適格ではない。ポー・カレン語は、主語や目的語の存在が必須ではない言語だからである。しかし、この文を使うと、聞き手はこの文をゼロ照応の使われた文だと考えてしまう可能性がある。すると聞き手は文脈の中にこの文の行為者の候補を探し始めるだろう。chə が使われていれば、その危険は回避できる。なぜなら、chə̀ が使われていれば、行為者の候補を探す必要がないということが話者に分かるからである。したがって、(91) で chə- を使うことには十分な理由がある。

下に、特定できない行為者や被動者を表す例をいくつか挙げておく。

(93) **chə-**　bá　chəcàʊchəchâ
CHə　当たる　病気
「人々は病気にかかってしまった」(021.85)

(94) pə-　lái　jò　lə-　ɣəɯɴkhâɴ |　**chə-**　nītòʊɴ　ʔáɴkɔ́　chə̀ɴ
私達の　文字　この　(否)　堅固な　CHə　笑う　批判する　(皆)

pə-　lái　jò
1pl　文字　この
「私達 (民族) の文字が堅固でなければ、(他の民族は) 皆、私達の文字をあざ笑い、批判するだろう」(IV-10.14)

(95) nəθí　phàɴ　nəθí　nòʊɴ　nɔ́
2pl　槍　2pl　角　(題)

chə-　bá　θàmɛ́　ʔəlāɴ　ʔɔ́　ʔé
CHə　(当為)　恐れる　必要　ある　(否)
「お前達の槍や角は、(皆にとって) 恐れるに足りない」(II-05.11)

(96) ʔè　thà　nī　châiɴ　bákə̀ɴ　nɔ́　dɔ̀ |
(条件)　織る　(努力)　上着　上等の　(題)　(別個)

təwâɴ　phə̀ɴ　nɔ́　**chə-**　θîthé　nī　bá　ʔé
村　中　(題)　CHə　不慮の死を遂げる　可能な　(不抗)　(否)
「上等の上着を織る場合には、村の中では誰かが不慮の死を遂げるということがあってはならない」(V-02.127)

▷ châiɴ bákə̀ɴ は、不思議な霊力を持つとされる上着。

(97) lé　ʔəwī　ʔò　lé　dòʊɴ　pəkō　ʔə-　chəpə̀ɴ　**chə-**　ʔáɴphôɴ
(場)　以前　(遠方)　(場)　町　(地名)　3sg　地方　CHə　作る

thîlá ʔá wê ʔəkhʊ́cònɴ | ʔə- mèiɴ phlɔ́ dʊ́ mā lɔ̂
塩 多い (強意) (理由) 3sg 名 目立つ 大きい (非常) (断定)
「昔、ペグー地方では、塩をたくさん作っていたので有名だった」(II-03.18)

(98) **chə-** dá pə̀ nàɴ ɣà ʔé
CHə 見える 1PL (少数) ～人 (否)
「誰にも私達のことは見えない」(III-15.13)

(99) khléiɴθàʊcà chônmóɴ **chə̀**
(人名) 考える CHə
「クレインタウチャーは考え事をしていた」(IV-04.51)

(100) lɔ̀thàiɴ **chə̀** dè xîphàɴ
話す CHə (共) (人名)
「(彼は) フイパウンとおしゃべりをした」(IV-04.307)

9.5.4.2 特定できる行為者や被動者などを表す

話者にとって特定可能であっても、その文の行為者や被動者などを聞き手に知らせる必要がない場合、chə̀ が使われる。例えば、次の文で「捕まえる」の行為者は警察か諜報機関である。そのことは話者にも容易に推測可能なので、聞き手に知らせる必要がない。

(101) nə- ʔē lì | **chə-** mə- phóɴ nə̀
2sg (条件) 行く CHə (非現) 捕まえる 2SG
「あなたは行ったら捕まるよ」(001.3020)

次の例では、やはり話者は「邪魔する」の行為者を知っている。しかし、それが誰であるかは聞き手にとって重要な情報ではない。そのため chə̀ を使っている。

(102) jə- mə- lì méchàʊ jò | **chə-** màthái thá jə̀
1sg (非現) 行く (地名) (前提) CHə 邪魔する (保持) 1SG
「私がメーソットに行こうとしたら、邪魔された」(001.2490)

次の例でも、「届ける」の行為者が誰であるかは聞き手にとって重要な情報ではない。そのため chə̀ が使われている。

(103) ʔánmə̂ɴ **chə-** θôʊɴ phílâɴ lé kòtərài ʔò lɔ̂
命じる CHə 届ける (裨益) (場) (地名) (遠方) (断定)
「(彼女は手紙を) コーカレイに届けるよう (知人に) 命じた」(IV-04.394)

次の例では、尋ねる内容は聞き手にとって重要な情報である。しかし、それはこの文の発話以降に知らされることであり、この文で知らせる必要はない。そのため chə̀ が使われている。

(104) jə- mə- ʔáɴcà nə̀ **chə-** nāɴ mèiɴ
1sg (非現) 尋ねる 2SG CHə (少数) ～種類
「私はあなたに聞きたいことがちょっとあります」(IV-04.281)

9.5.4.3 感情や生理現象の経験者を表す

次に挙げる例のように、感情や生理現象の経験者を表すことがある。

(105) jə-　pɔ̄　lái |　**chə-**　máʊ　θà
私　読む　本　CHə　楽しい　心
「私は本を読んで楽しかった」(003.897)

(106) **chə-**　pwài　θà　jàʊ
CHə　疲れる　心　(完)
「(私は; あなたは; 彼は) 疲れている」(001.3100)

これらの動詞の主語には、chə̀ を用いずに普通の代名詞を用いることもできる。

(107) jə-　máʊ　θà
1sg　楽しい　心
「私は楽しかった」

(108) ʔəwê　pwài　θà　jàʊ
3se　疲れる　心　(完)
「彼は疲れている」

chə̀ を用いると、感情や生理現象が経験者の意向とは無関係に自然発生的に生じたことが示されるらしい。その意味で、次に述べる自然現象を表す用法の一種と考えることができるかも知れない。

9.5.4.4 自然現象

動詞の主語の位置に現れて、動詞が表す事象が自然現象であるということを示す。

(109) **chə-**　khʊ̄
CHə　暑い
「暑い」(001.1229)

(110) **chə-**　chə̀ɴ
CHə　降る
「雨が降る」(001.1229)

(111) **chə-**　khléiɴ　châ
CHə　寒い　(非常)
「大変寒い」(003.657)

(112) **chə-**　khʉ́ɪ
CHə　煙が立つ
「ほこりっぽい」(001.1958)

(113) **chə-** phàɴ thánɴ
CHə 明るい (変化)
「夜が明けた」(IV-04.3210)

(114) **chə-** khài làɴ
CHə 暗い (変化)
「日が暮れる」(III-09.31)

(115) hə- phlòʊɴ thîkhāɴ ʔəkhâjò **chə-** khōʔwì châmà
1pl カレン 国 今 CHə 蒸し暑い (非常)
「私達のカレン州は今、大変蒸し暑いです」(016.14)

9.5.5 語彙化

動詞の前に chə̀ が付いて全体としては名詞句になっている次のような例は、動詞の部分を関係節と捉えることができる。第 23 章で述べる後置型の関係節である。

(116) chə- dʊ́
CHə 大きい
「大きいもの」

つまり、次のような構造をしていると考えられる。

(117) chə- $[_R$ verb $]$

chə̀ が表すものは様々であるから、論理的にはこのような構造が表す意味も様々であるはずである。例えば、動詞が khlàiɴ「話す」であれば、chə- khlàiɴ は、「話す人」「話す内容」「話すという行為そのもの」等々の様々な意味を表すことができるはずである。ところが、chəkhlàiɴ という音列は、普通、「言語」という意味で用いられることが多い。おそらくこれは、語彙化して意味が固定化してしまったためであろうと思われる。語彙化しているかどうかを判断することは実際には難しい作業である。ここでは、chə̀ の後に関係節が現れた構造が語彙化したと考えられる可能性のある例をいくつか挙げておく。

(118) chəkhlàiɴ「言葉」 ← chə- + khlàiɴ (話す)

(119) chəchâ「病気」 ← chə- + châ (痛い)

(120) chəmà「仕事」 ← chə- + mà (する)

(121) chəʔə́ɯɪɴ「雲」 ← chə- + ʔə́ɯɪɴ (曇る)

(122) chəʔɔ́kóɴ「会議」 ← chə- + ʔɔ́kóɴ (集まる)

(123) chəkòɴchəθò「衣服」 ← chə- + kòɴ (穿く) + chə- + θò (着る)

▷ この例では chəkòɴ と chəθò が複合している。

(124) chəxîchəlà「文化」 ← chə- + xî (美しい) + chə- + là (?)

▷ この例では「美しい」ことを表す類似要素反復 (第 29 章を参照されたい) ⊂ ... xî ... ⊃ ⊂ ... là ... ⊃ のそれぞれの要素に chə̀ が付いて名詞が作られ、さらにそれらが複合している。

第10章　数詞と助数名詞

次の X の位置に生じることのできる形式、すなわち、「一」を表す形態素 lə- の後に現れることができる形式を**助数名詞**(quantifying noun) と呼ぶことにする。

(1) lə-　X
　　一

逆に、助数名詞と共に現れることのできる形式をすべて**数詞**(numeral) と呼ぶ。

このように数詞を定義すると、数詞には 10.1 で述べる具体的な数を表す形式と、10.3 で述べる抽象的な数量概念を表す形式が含まれる。前者を**具体数詞**(concrete numeral) と呼び、後者を**抽象数詞**(abstract numeral) と呼ぶ。

10.1　具体数詞

具体数詞は名詞である。なぜなら、単独で文になれる、動詞の項になれる、動詞助詞が付かない、という特徴を持つからである。まず、1 から 9 までの具体数詞は以下のとおりである。

lə̂ɴ	1
nî	2
θə̂ɴ	3
lī	4
jɛ̄	5
xûɯ	6
nwê	7
xó	8
khwī	9

これら形態素は、10^n(n は正の整数) を表す形態素の前に置かれて、$m \times 10^n$ (m={1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9}) を表すことができる。ただし、lə̂ɴ は、10^n の位を表す形態素の前では lə と交替する。また、下降調を伴う nî, θə̂ɴ, xûɯ, nwê は、10^n を表す形態素の前では中平調で発音されて nī, θə̄ɴ, xūɯ, nwē となる。10^n の位を表す形態素には chî “10 の位”, jà “100 の位”, thôɴ “1,000 の位”, là “10,000 の位” がある。1 から 9 を表す形態素と 10^n を表す形態素との組み合わせを見てみよう。

ləchî	10	ləjà	100	ləthôɴ	1,000	ləlà	10,000
nīchî	20	nījà	200	nīthôɴ	2,000	nīlà	20,000
θəɴchî	30	θəɴjà	300	θəɴthôɴ	3,000	θəɴlà	30,000
līchî	40	lījà	400	līthôɴ	4,000	līlà	40,000
jɛ̄chî	50	jɛ̄jà	500	jɛ̄thôɴ	5,000	jɛ̄là	50,000
xūchî	60	xūjà	600	xūthôɴ	6,000	xūlà	60,000
nwēchî	70	nwējà	700	nwēthôɴ	7,000	nwēlà	70,000
xóchî	80	xójà	800	xóthôɴ	8,000	xólà	80,000
khwīchî	90	khwījà	900	khwīthôɴ	9,000	khwīlà	90,000

100,000 未満の整数はすべて上記要素の組み合わせによって表すことができる。

xūchîθə̂ɴ	63
ləjàxó	108
ləjànwēchîxû	176
jɛ̄jàkhwīchînî	592
līthôɴnījàxūchînwê	4,267
xūthôɴxójàθə̂ɴ	6,803
ləlàləthôɴləjàləchîlə̂ɴ	11,111
ləlànīthôɴθəɴjàlīchîjɛ̄	12,345
khwīlàxóthôɴnwējàxūchîjɛ̄	98,765

11 から 19 は、10 の位を表す ləchî- を chî- としてもよい。

ləchî	10
(lə)chîlə̂ɴ	11
(lə)chînî	12
(lə)chîθə̂ɴ	13
(lə)chîlī	14
(lə)chîjɛ̄	15
(lə)chîxû	16
(lə)chînwê	17
(lə)chîxó	18
(lə)chîkhwī	19

100,000 以上の 10^n を表す形態素にはビルマ語からの借用形式を用いるのが一般的である。100,000 の位を表すのは θēiɴ、1,000,000 の位を表すのは θāɴ である。例えば次のとおり。

nīθēiɴ	200,000
xūθāɴ	6,000,000

100 の位と 1,000 の位には、物の値段を示すときのみ、jà と thôɴ ではなく、phàɴ と mə̂ɴ が使われる。

ləphàɴ　　100 (Kyat, Baht, etc...)
ləmə̂ɴ　1,000 (Kyat, Baht, etc...)

10.2　助数名詞

最初の定義で述べたように、「一」を表す形態素 lə- の後に現れることができる形式が助数名詞である。具体数詞は助数名詞を後に従えると、1 の位が下に示すように発音される。これらは、10^n(n は正の整数) の位を表す形態素の前で 1~9 が取る形と同一である。人間を数えるときの助数名詞 ɣà とともに掲げる。

lə- ɣà	1 人
nī ɣà	2 人
θəɴ ɣà	3 人
lī ɣà	4 人
jɛ̄ ɣà	5 人
xɯ̄ ɣà	6 人
nwē ɣà	7 人
xó ɣà	8 人
khwī ɣà	9 人

数詞が 10 の倍数の場合、助数名詞に接頭辞 ʔə- を付け、その後に具体数詞を置く。例えば「10 人」は次のようになる。

(2) ʔəɣà　ləchî
　～人　10
　「10 人」

(3) *ləchî　ɣà　/　*chî　ɣà
　10　～人　　10　～人

下に他の例を示す。

ʔəɣà nīchî	20 人
ʔəɣà θəɴjà	300 人
ʔəɣà jɛ̄thô̰ɴ	5,000 人

助数名詞は、接頭辞 ʔə- が付かなければ、助数名詞句の先頭の位置に立つことができない。この ʔə- が付いた形を、便宜的に、助数名詞の「先頭位置形」と呼んでおく。先頭位置形の一部は、後述するとおり、単独の名詞として使用できる。

助数名詞の前には、数詞だけでなく、次のように状態動詞も現れることができる。

(4) ʔá　ɣà
　多い　～人
　「たくさんの人

実は、助数名詞は単独で文を形成することができない。ではなぜこれを名詞と見なすかというと、助数名詞を主要部とする構成素が名詞としての特徴を持つからである。助数名詞を用いた構成素は、次のように、副詞的要素の位置に現れることができる。

(5) ʔɔ́　**lī**　**néiɴ**
　いる　四　～年
　「(彼は)4 年いた」

これが副詞的要素の位置に現れているのは、助数名詞の働きに他ならない。なぜなら、lī はこれだけではこの位置に立つことができないからである。したがって、助数名詞はこのような構成素の主要部だということができる。さて、このような構成素は次の点で名詞的である。例えば、次の (6) の nī ɣà「二人」と (7) の ʔá ɣà「たくさんの人」はどちらも動詞の主語として機能しており、しかも、名詞に付く助詞である jò「この」や nɔ́「あの」が後置されている。つまり、動詞の項になったり、名詞に付く助詞が付いているということから、これらは名詞としての性質を持っていると言える。

(6) **nī**　**ɣà**　jò　lù　phjâ
　二　～人　この　行く　市場
　「この二人は市場に行った」

(7) jə-　kò　**ʔá**　**ɣà**　nɔ́
　1sg　呼ぶ　多い　～人　あの
　「私はあのたくさんの人たちを呼んだ」

もちろん、これらに動詞助詞を付けることはできない。また、副詞的要素の位置には、時間を表す名詞句も現れることができるのであり、副詞的要素の位置に現れることが他の名詞句と比べて特殊なわけでもない。よって、助数名詞は名詞の一種である。本論文では、助数名詞を主要部とする構成素を**助数名詞句**と呼ぶ。

10.2.1　主な助数名詞

下に主な助数名詞を挙げる。すべて先頭位置形で挙げておく。(ʔə)ɣà のように、ʔə を ( ) でくくってあるものは、先頭位置形を助数名詞句以外の場所で使うことはできない。一方、ʔəbéiɴ のように、ʔə を ( ) でくくっていないものは、先頭位置形が、単独で文を形成できる名詞として使えるものである。単独で発話を形成できる名詞の意味を、[ ] でくくってそれぞれの助数名詞の直後に示しておいた。

(ʔə)ɣà　人間を数える。

(ʔə)dʉ̀　(1) 人間以外の哺乳類を数える。(2) 適当な助数名詞が見つからない場合に、広くこの助数名詞を用いることができる。

(ʔə)khʉ́　乗り物を数える。

(ʔə)blàɴ　回数を数える (これと以下三つがそれぞれどう違うかはよく分からない)。

(ʔə)phə̂ɴ　回数を数える。

(ʔə)thí　回数を数える。

(ʔə)wâɴ　回数を数える。ɣâɴ とも。

(ʔə)cóɴ　場所を数える。

(ʔə)ʔàʊ　書物を数える。

(ʔə)pwē　食べ物の 1 皿分を数える。

ʔəbéiɴ [平らな物]　(1) 平らなものを数える。布、衣服、紙、手紙、平原。(2) 哺乳類以外の生物を数える。鳥・爬虫類 (蛇を除く)・両生類など。(3) 月数を数える

ʔəphlóʊɴ [丸い物]　(1) 丸いものを数える。(2) 家などの建物を数える。

ʔəbòɴ [細長い物]　細長いものを数える。紐、糸、髪の毛、綱、棒、川、虹など。蛇にはこの助数名詞を使う。

ʔəchâɴ [段階]　段階を数える。

ʔəthə̂ɴ [層]　層を数える。

ʔəθâɴ [日]　日数を数える。

ʔəmèiɴ [種類]　種類を数える。

ʔəthə́ɯɴ [木, 草]　植物を数える。

ʔəlóɴ [塊]　塊状のものを数える。

ʔədóɴ [グループ]　集団を数える。

ʔəkàʊ [部分]　物の部分を数える。

名詞によっては、名詞そのものを助数名詞として転用する場合がある。今までに見つかっているものを下に挙げておく。

nì　「昼間」

nà　「夜」

néiɴ　「年」

dòʊɴ　「町」

khāɴ　「国」

chì　「民族」

kò　「島」

nàdì または **nàrì**　「時間」

təɴ　「マイル」

kòʊɴlwɛ̄　「グループ、集団」

どのような名詞がそのまま助数名詞として転用できるのかは分かっていない。この問題は今後の課題としたい。

動詞起源の助数名詞も 1 例だが見つかっている。

(8) khlài　thá　　lə-　khlài
　　折る　(保持)　一　～折り
　　「1 回折っておく」

どのような動詞が助数名詞として転用できるのかという問題の解明も今後の課題としたい。

10.2.2　名詞句と助数名詞句の順序

助数名詞句は、次のように名詞句の後に置かれる。

(9) phlòʊɴ　lə-　ɣà
　　人　　一　～人
　　「一人の人間」

(10) phlòʊɴ　ʔəɣà　līchî
　　人　　～人　四十
　　「40 人の人間」

(11) ɣéiɴ　nī　phlóʊɴ
　　家　　二　～個
　　「2 軒の家」

(12) ɣéiɴ　ʔəphlóʊɴ　ləjà
　　家　　～個　　百
　　「100 軒の家」

具体数詞が 10 の倍数のときは、次のように、助数名詞を用いないこともある。

(13) phlòʊɴ　līchî
人　　四十
「40 人の人間」

(14) ɣéiɴ　ləjà
家　百
「100 軒の家」

名詞そのものを助数名詞として転用するものの場合、数詞が 10 の倍数のとき、助数名詞が決して現れない。

(15) a. kò　lə-　kò
島　一　島
「一つの島」

b. kò　xójà　　*kò　kò　xójà
島　八百
「800 の島」

10.2.3　補語に対応する助数名詞句——いわゆる数量詞遊離

助数名詞句は、数量を表したい名詞句の後に置かれるのだった。したがって、主語や目的語をはじめとする補語の指示対象の数量を表したいときは、その補語の後に助数名詞句を置けばよい。

(16) **cəpâɴ　nī　ɣà**　ɣɛ̂　thòɴ　lé　pəjàɴ　khāɴ
日本人　二　～人　来る　着く　(場)　ビルマ　国
「日本人が二人ビルマにやってきた」

(17) jə-　dá　**cəpâɴ　θəɴ　ɣà**　lé　dòʊɴ　thəʔàɴ
1sg　見える　日本人　三　～人　(場)　町　(地名)
「私はパアンで日本人を三人見かけた」

しかし、補語に対応する助数名詞句が、次のように副詞的要素の位置に現れることがある。対応する補語を斜字で示し、助数名詞句を太字で示しておく。

(18) *cəpâɴ*　ɣɛ̂　thòɴ　lé　pəjàɴ　khāɴ　**nī　ɣà**
日本人　来る　着く　(場)　ビルマ　国　二　～人
「日本人が二人ビルマにやってきた」

(19) jə-　dá　*cəpâɴ*　lé　dòʊɴ　thəʔàɴ　**θəɴ　ɣà**
1sg　見える　日本人　(場)　町　(地名)　三　～人
「私はパアンで日本人を三人見かけた」

これは、いわゆる数量詞遊離 (quantifier floating) と言われる現象に似ている。しかし数量詞遊離という言葉を用いるのは良くない。なぜなら、助数名詞句は、既に述べたように、副詞的要素の位置にそのままの形で現れることができるからである。つまり、助数名詞句が「遊離」したわけではない。助数名詞句の多くは、節中に対応する補語が存在しない。下に挙げる例は、そのような例である。

(20) jə-　thàiɴ　ʔɔ́　lɯ́　ʔò　**jɛ̄**　**θâɴ**
1sg　帰る　いる　(場)　あそこ　五　～日
「私はあちらに帰って五日間滞在した」(012.28)

(21) dá　lóθà　dè　ʔə̀　**nāɴ**　**blàɴ**　dài　ʔé
会う　(相互)　(共)　3se　(少数)　～回　まだ　(否)
「彼とはまだ一度も会っていません」(012.38)

(22) ʔɔ́　jàiɴ　wê　**jɛ̄**　**tə̀ɴ**　lɔ̂
ある　遠い　(強意)　五　マイル　(断定)
「(私達の村とパアンは)5 マイル離れています」(I-10.5)

(23) mà　nə̀　bá　**nàɴ**　**mèiɴ**　ʔé
いじめる　2SG　正しい　(少数)　～種類　(否)
「(彼は) あなたをいじめることがまったくできません (直訳:あなたを 1 種類もいじめられません)」(I-01.16)

結局、上の (18) や (19) で数量詞遊離が起きているように見えるのは、補語と助数名詞句がたまたま対応しているだけである[1] 。

以下に、補語と助数名詞句が対応している実例を挙げる。まず、主語に対応する場合である。

(24) *jə-*　lì　thánɴ　**lə-**　**ɣà**　lɔ̂
1sg　行く　(上方)　一　～人　(断定)
「私は一人で行った」(IV-04.25)

(25) lé　ʔəwī　dáʔò　*th*wí　*ɕ*ā　ʔɔ́　**lə-**　**dɯ̀**
(場)　以前　(過去)　犬　老いた　いる　一　～匹
「昔、老いた犬が 1 匹いた」(I-01.3)

(26) *phlòʊɴ*　ʔɛ́chə̂ɴ　nə̀　**kò**　**ɣà**　dè　lɔ̂
人　愛する　2SG　(毎)　～人　(毎')　(断定)
「皆があなたを愛しています」(017.14)

次は目的語に対応する例である。

[1] 日本語の数量詞に見られる同様の現象についても、「分離」と考えることが妥当でないことを湯川 (1999:180) が議論している。

(27) ʔəwêθí　dá　cò　thánN　*lânlàNʔɔ̀thîcóN*
3pl　見つける　(遠隔)　(上方)　虹

lé　màʊkhʊ́phòphânN　ʔò　**lə-**　**bòN**　nɔ́　lɔ̂
(場)　空　(遠方)　1　～本　(のだ)　(断定)
「彼らは空に虹を一つ見つけた」(II-10.2)

(28) ʔəwê　kò　nī　*chərâ*　**nàN**　**ɣà**　ʔé
3se　呼ぶ　(引寄)　教師　(少数)　～人　(否)
「彼は教師を一人も呼ばなかった」(I-08.6)

次は斜格補語に対応している例である。

(29) bádòNbáɣá　dè　*pə̀*　**nàN**　**ɣà**　ʔé
似ている　(共)　1PL　(少数)　～人　(否)
「(あなたは) 我々の誰とも似ていない (直訳:[あなたは] 私達と一人も似ていない)」(II-11.6)

次は、目的語名詞句の中の所有者を表す名詞に対応している例である。

(30) ʔəwêdá　mànī　ʔánN　*ʔəphlòʊN*　chəkhlàiN　**nàN**　**ɣà**　ləN　ʔé
3se　取る　食べる　他人　言葉　(少数)　～人　もはや　(否)
「彼はもはや誰の言葉にも従わなかった (直訳:彼はもはや他人の言葉に一人も従わなかった)」(I-08.20)

このように、助数名詞句は様々な補語との対応を示す。したがって、日本語の統語論的研究においてしばしば行われているような、主語や目的語の認定に数量詞遊離を利用するということは、ポー・カレン語ではできない。

なお、上の例の中には、否定文で抽象数詞 (後述) nāN (nàN) を用いた文がある。このような場合、補語と助数名詞句が表面上は隣接していても、離れて対応していると見なすことができる。なぜなら、nāN を用いた助数名詞句は、下に示すように、決して補語の名詞句の中には存在できないからである。

(31) *phlòʊN*　ʔɔ́　**nāN**　**ɣà**　ʔé
人　いる　(少数)　～人　(否)
「人が一人もいない」

(32) **phlòʊN*　**nāN**　**ɣà**　ʔɔ́　ʔé
人　(少数)　～人　いる　(否)

10.2.4　補足

序数は、n 番目の場合、「n–助数名詞–lə- –助数名詞」と表現する。n が 10 の倍数の場合には、「先頭位置形–n–lə- –助数名詞」となる。

(33) θə̄N　ɣà　lə-　ɣà
三　～人　一　～人
「3 人目」

(34) ʔədɯ̀ləchî lə- dɯ̀
～匹　十　一　～匹
「10 匹目」

10.3　抽象数詞

実は、抽象数詞は単独で文になることはない。したがってこの点だけを見れば助詞に分類すべきである。しかし、助数名詞と共に現れて助数名詞句を形成するという点で具体数詞と同じ特徴を持つ。この点を重視し、本論文ではこれらを名詞の一種だと考えることにする。

抽象数詞には、助数名詞の前に現れるものと、助数名詞を両側から挟み込むものがある。

10.3.1　nāɴ

助数名詞の前に付き、少ない数を漠然と表す。後に具体数詞が現れる場合と現れない場合とがある。nàɴ と発音されることもある。

後に具体数詞が現れない場合、この単語が意味論的に表す数は、1 から 3 くらいまでの数である。けれども、語用論的には、しばしば 1 を表すために使われる。

(35) mànɔ̀ɴcɔ̀ mə- lɔ̀thàiɴ nəθí pòʊɴ **nāɴ** pòʊɴ
おじさん　(非現)　語る　2PL　昔話　～篇
「おじさんが君たちに昔話を一つ話してあげよう」(006.4)

(36) kè phí thàiɴ lái **nāɴ** béiɴ ʁɔ̄
書く　(裨益)　(返答)　手紙　～枚　XO
「返事の手紙を書いてくださいね」(011.35)

(37) jə- mə- lɯ̀ lé xîphàɴ ʔɔ́ ʔò **nāɴ** thí
1sg　(非現)　行く　(場)　(人名)　ところ　(遠方)　～回
「一度、フイパウンのところに行ってみます」(IV-04.298)

(38) jə- mə- lɯ̀ chōɴ làɴ jʊ̄ **nāɴ** blàɴ
1sg　(非現)　行く　(鳥が木に) とまる　(下方)　(試行)　～回
「一度、(あそこに) 下りていってみよう」(III-12.12)

(39) ʔè mwɛ̄ pə- ʔè dàʊlàɴ dè já ʔəmə̂ɴ
(条件)　(繋)　1pl　(条件)　入れる　(共)　魚　生きているもの

nāɴ béiɴ tā | ləjáiləmɔ̄bá
～枚　(前提)　間もなく

já nɔ́ θî wêdá lɔ̂
魚　(題)　死ぬ　(強意)　(断定)
「もし (酸素のない水の中に) 生きた魚を 1 匹入れたなら、間もなく魚は死んでしまう」(II-09.5)

後に具体数詞が現れることもあり、その場合は、その具体数詞の表す数に近い数を漠然と表す。この場合、その具体数詞は 2 あるいは 3 である。

(40) jáʔɯ́ɪ　nɔ́　ʔɔ́kɪ́　là　**nāɴ**　θə̄ɴ　béɪɴ　ɣòɴ |
魚醤　(題)　置く　月　三　～枚　(継起)

ʔánwàɪɴ　ʔánɴ　kɛ́　wê　lɔ̂
煮る　食べる　可能な　(強意)　(断定)
「魚醤は、3ヶ月ほど置いておけば、火を通して食べることができるようになる」(III-13.22)

(41) mənī　ləphá　lə-　ʔánɴ　bá　cháiphʊ́chā　mì　bá
人間　(複)　(否)　食べる　(不抗)　農民　米　(否')

nāɴ　nī　nwê　càibò |　mə-　bá
二　～週　(条件)　(非現)　(当為)

ʔɔ́chónlāchài　lɨ̄kà　jò　thîchà　lɔ̂
別れを告げる　世界　この　確実な　(断定)
「人間は、農民が作った米を二週間ほど食べることができなければこの世に別れを告げなければならなくなる」(IV-09.29)

▷ ʔɔ́chónlāchài というのは別れるときなどに使う挨拶言葉であるが、ここでは「別れを告げる」という意味の動詞として臨時に使っている。

(42) ʔē　nī　nɔ́ |　jə-　mə-　báθà
(条件)　得る　(題)　1sg　(非現)　欲する

nāɴ　nī　θə̄ɴ　béɪɴ　chī　lɔ̂
二　三　～枚　(婉曲)　(断定)
「もしできれば、私は二、三枚欲しい」(V-02.42)

否定文で使われると、数がゼロであることを表す。「まったく～ない」「全然～ない」。

(43) pə-　təwânɴ　jò　mənī　kròɴ　ʔɔ́　**nāɴ**　ɣà　ʔé
1pl　村　この　人　邪悪な　いる　～人　(否)
「私達の村は、悪人がひとりもいない」(I-sen.47)

(44) bádònbáɣá　dè　pə̀　**nāɴ**　ɣà　ʔé
似ている　(共)　1PL　～人　(否)
「(あなたは) 我々の誰とも似ていない」(II-11.6)

(45) ʔəwê　kò　nī　chərâ　**nàɴ**　ɣà　ʔé
3se　呼ぶ　(引寄)　先生　～人　(否)
「彼は先生をひとりも呼ばなかった」(I-08.6)

(46) jə-　bá　ʔánxʉ̂ʉ　ʔán　jə-　chá
1sg　(場)　探す　食べる　1sg　餌
ʔɔ́　**nàn**　cón　lən　ʔé
ある　～箇所　もはや　(否)
「私はどこへたりとも餌を探しに行く必要はなくなった」(I-09.18)

(47) thî　ʔɔ́　**nàn**　cón　ʔé
水　ある　～箇所　(否)
「水はどこにもなかった」(III-06.32)

(48) dá　tònnón　wê　dè　chəphʉ́chəxā　**nān**　dʉ̀ʉ　ʔé
見える　出くわす　(強意)　(共)　動物　～匹　(否)
「(彼は) 動物に 1 匹たりとも遭遇しなかった」(III-06.21)

(49) mɛ́　phó　**nān**　béin　dài　ʔé
歯　欠ける　～枚　まだ　(否)
「(祖父は) 歯がまだ 1 本も欠けていない」(V-02.8)

くだけた口語体では、否定文で使われたとき nān はしばしば省かれる。

(50) jə-　dá　ɣà　ʔé
1sg　見える　～人　(否)
「ひとりも見えない」

(51) chə-　ʔɔ́　mèin　ʔé
CHə　ある　～種類　(否)
「何もない」

(52) thòn　wá　phə̂n　ʔé
着く　(経験)　～回　(否)
「一度も行ったことがない」

(53) lʉ̀　cón　ʔé
行く　～箇所　(否)
「どこにも行かない」

10.3.2　kò ...　dè

助数名詞を挟み込む。文の表す命題が、助数名詞句の指示する集合の要素すべてにとって真であることを表す。「すべての～」「毎～」。kò は kō と発音されることもある。また、kò のみが現れ、dè が現れないこともある。ただし dè のみということはない。

(54) chônná　**kò**　ɣà　**dè**　jɔ̄
聞く　～人　XO
「みんな聞いてください」(006.5)

(55) ʔəwê　búɩ́　làɴ　ʔə-　phʊ́　mâ　nɔ́
3se　養う　(下方)　3sg　子供　妻　(題)

kò　néiɴ　**dè**　lɔ̂　chī
～年　(断定)　(婉曲)
「彼がいつも (=直訳:毎年) 妻子を養っていたのだった」(006.12)

(56) chərâ　thálòʊɴ　dè　ʔə-　mâ　θɛ̀
先生　(人名)　(列挙)　3sg　妻　(複)

ʔɔ́　máʊ　chônkhlâiɴ　**kò**　ɣà　**dè**　chī　lɔ̂
いる　快適な　元気な　～人　(婉曲)　(断定)
「ターロン先生と奥さんは二人ともお元気です」(012.30)

(57) ʔəwêdá　ʔánmànī　ʔánɴ　chəθʊ́ɩ́chəθá　θíləphá　nɔ́
3se　取る　食べる　果物　(複)　(題)

kò　nì　ɣá　ɣɔ̀　**dè**　lɔ̂
～日　～夕　～朝　(断定)
「彼が果物をとって食べるのは毎日、毎夕、毎朝のことだ」(II-08.17)

(58) ʔánɴ　wê　ʔwí　**kō**　blàɴ　wê　lɔ̂
食べる　(強意)　美味な　～回　(強意)　(断定)
「(彼は何を食べても) 毎回、おいしく感じる」(II-14.12)

(59) nī　**kò**　mèiɴ　**dè**　lɔ̂
得る　～種類　(断定)
「何でもいいです」(001.2027)

(60) kəbàɴjʊ̀ɩ́　nɔ́　nâɴ　θí　**kò**　ɣà　**dè**　ʔé
飛行機　(題)　運転する　できる　～人　(否)
「飛行機は誰にでも運転できるわけではない」(001.2026)

10.3.3　kò ...　dèmèiɴká

助数名詞を挟み込む。文によって表された命題が、助数名詞句が指示する集合の要素の大部分にとって真であることを表す。「ほとんどの ～」。kò ...　mèiɴdèká となることもある。kò は kō と発音されることもある。

(61) **kò**　kòʊɴlwɛ̄　**dèmèiɴká**
～集団
「ほとんどのグループ」(V-03.50)

(62) phlòʊɴ　thàiɴ　**kō**　ɣà　**dèmèiɴká**
人　帰る　～人
「人々はほとんど帰った」(001.2552)

(63) ʔəθí　thàiɴ　mèiɴ　**kò**　phwɛ̂　**mèiɴdèká**
3pl　帰る　(自然)　～団
「ほとんどの集団が帰った」(001.2552)

10.3.4　thònɴ ...　θâ

助数名詞を挟み込む。ある期間や範囲すべてにわたって、文の表す命題が真であることを表す。「～中 (じゅう)」「～全体」。thònɴ は thənɴ と発音されることもある。また、θâ は jâ と発音されることもある。

(64) nəθí　**thònɴ**　néiɴ　**θâ**　bê　mə-　ʔɔ́chóɴʔɔ́khlâiɴ　θò　nɔ́ |
2pl　～年　(目的)　(非現)　元気な　(目的')　(題)

jə-　chûtōɴpàʊtà　jāthəɲā　phí　dá　kòmūnìkòmūnà　chī　lɔ̂
1sg　祈る　祈る　(裨益)　(保持)　毎昼毎晩　(婉曲)　(断定)
「あなた方が 1 年中元気でいられますようにと、毎日お祈りしています」(012.43)

(65) ʔwíkòɣà　**thònɴ**　phlóʊɴ　**θâ**
(店の名)　～個
「ウィーコーガー食堂の店中」(V-03.31)

(66) thərɛ̄　**thənɴ**　dɯ̀　**jâ**　chəxɔ̀　phâ　**thənɴ**　dɯ̀　**jâ**　θí
鹿　～匹　犀　オス　～匹　(類似)

jə-　phɯ́　nī　nī　dài
1sg　背負う　(努力)　可能な　まだ
「鹿まるまる 1 頭、オスの犀まるまる 1 頭でさえ、私は背負うことができるのである」(III-03.16)

(67) phəbàiɴ　**thənɴ**　béiɴ　**θâ**　ʔòɴ　dè　ʔəphɔ̂
毛布　～枚　刺繍する　(共)　花柄
「毛布の全部に花柄の刺繍がしてある」(V-02.88)

(68) dɯ̀lâ　ʔə-　mɔ̀ɕā　**thânɴ**　dɯ̀　**jâ**
蝿　3sg　身体　～匹
「蝿の体中」(II-12.3)

(69) ʔánɣá　làɴ　nɔ́　**thânɴ**　cá　**θâ**　lɔ̂
歓迎する　(内方)　(題)　～世　(断定)
「一生 (あなたを) 歓迎しますよ」(011.38)

10.3.5　xwē

助数名詞の前に置かれ、数を尋ねる文を作る。xwè とも発音される。第 27 章「疑問語」も参照のこと。

(70) ʔɔ́　**xwē**　ɣà　lɛ̂
いる　～人　(疑)
「(人間は) 何人いますか?」(001.3575)

(71) nə-　nī　**xwē**　θâɴ　jàʊ　lɛ̂
2sg　得る　～日　(完)　(疑)
「(こちらに来て) 何日になりますか?」(001.3575)

(72) nə-　jáʊ　ʔɔ́　**xwē**　néiɴ　jàʊ　lɛ̂
2sg　年齢　ある　～年　(完)　(疑)
「あなたは何歳になりますか?」(002.309)

(73) nə-　kèkūɪ　ɣòɴ　**xwē**　pàʊ　jàʊ　lɛ̀
2sg　書き写す　終わる　～篇　(完)　(疑)
「あなたは (詩を) いくつ写し終えたか?」(003.634)

10.3.6　khɔ̀khɔ̂

助数名詞の前に置かれ、何を選択するかを尋ねる疑問文を作る。「どちらの ～」「どの ～」。第 27 章「疑問語」も参照のこと。

(74) kā　ʔəjò　lə-　phlóʊɴ　dè　ʔəjò　lə-　phlóʊɴ
車　これ　一　～個　(列挙)　これ　一　～個

mə-　cáiɴ　láɴ　wī　**khɔ̀khɔ̂**　phlóʊɴ　lɛ̂
(非現)　出る　(外方)　(先行)　～個　(疑)
「この車とこの車では、どちらが先に出発しますか?」(001.1770)

(75) nə-　báθà　châ　**khɔ̀khɔ̂**　mèiɴ　lɛ̂
2sg　欲する　(非常)　～種類　(疑)
「あなたはどれが一番欲しいですか?」(001.1770)

第11章　側置助詞

主語と目的語、および、時間的な概念を表す名詞句と助数名詞句を除くと、名詞句がそのまま補語として機能することは不可能である。補語として機能するためには**側置助詞**(adpositional particle) の助けを得なければならない。すなわち、側置助詞は、名詞句を補語として文中に導入する働きを持つ。本論文では、側置助詞とそれによって導入された補語全体を指して**側置助詞句**(adpositional phrase) と呼ぶことがある。

11.1　lé (lə́, lə- , lɯ́ɯ)

空間あるいは時間を表す側置助詞である。この助詞には様々な発音がある。日常の会話で最も一般的な発音は lé である。しかし、かしこまった場での発話では、しばしば lə́ あるいは軽く lə- と発音される。対応するスゴー・カレン語の lə́ や西部ポー・カレン語の lə́ と比較すると、おそらく lé よりも lə́ あるいは lə- のほうが古い発音を忠実に残しているのではないかと思われる。また一方でこの助詞は lɯ́ɯ と発音されることもある。これは後続する名詞句の表す空間や時間が、発話の行われている空間や時間から遠い場合に、その遠さを強調するためにしばしば使われる自由変異である。この自由変異は、空間や時間が直示中心から近い場合にはほとんど使われないようである。したがって、下の (1) では lé, lə́, lə-, lɯ́ɯ のいずれも使うことができるのに対し、(2) で lɯ́ɯ を用いることはあまり適切ではない。

(1) ʔɔ́　{ lé / lə́ / lə- / lɯ́ɯ }　ʔò
　ある　　あそこ
　「あそこにある」

(2) ʔɔ́　{ lé / lə́ / lə- / ʔlɯ́ɯ }　jò
　ある　　ここ
　「ここにある」

この側置助詞の用法は、大きく、空間を表す場合と時間を表す場合の二つに分けることができる。

11.1.1　空間を表す場合

空間を表す場合、lé は場所 (locus) と起点 (source) と着点 (goal) の三つを表すことができる。場所とはある程度の面積を持ったひとまとまりの空間である。一方、A と B という二つの場所があって、何らかの物体が A から B へと移動するときの A が起点、B が着点

である。ポー・カレン語の lé は、場所、起点、着点のいずれをも表す。次の 3 例を見られたい。

(3) phūkhwâ　θɛ̀　ʔɔ́　**lé**　kòtərài　ʔò　[地点]
弟　(複)　いる　(地名)　(遠方)
「僕たちはコーカレイに住んでいます」(IV-04.102)

(4) nàɴnâɴ　θɛ̀　ɣɛ̂　thàiɴ　**lé**　θítàʊ　ʔò　[起点]
姉　(複)　来る　帰る　病院　(遠方)
「私達は病院から帰って来ました」(IV-04.96)

(5) nàɴnâɴ　mə-　thàiɴ　**lé**　thəʔàɴ　dòʊɴ　ʔò　[着点]
姉　(非現)　帰る　(地名)　町　(遠方)
「私達はパアンに帰ります」(IV-04.99)

地点や着点を表す名詞句にはときとして助詞が何も付かないことがある。次の例を見よ。

(6) nàɴnâɴ　mə-　thàiɴ　thəʔàɴ　dòʊɴ　ʔò
姉　(非現)　帰る　(地名)　町　(遠方)
「私達はパアンに帰ります」

lé を用いた場合と用いない場合がどのように異なるのかについて詳しいことはまだ分かっていない。ただ、確実に言えるのは、lé が現れることのほうが頻度が高いということである。この問題についての詳しい議論は、第 15 章 15.3 を参照されたい。

次に、場所・起点・着点のそれぞれを表す例を見ていく。まず場所を表す例を挙げる。

(7) pə-　təwâɴ　nɔ́　ʔɔ́　**lé**　dòʊɴ　thəʔàɴ　ʔəphâɴkhʊ́
1pl　村　(題)　ある　町　(地名)　上

lé　thîkhló　phàdʊ́　ʔənàiɴ　nɔ́　lɔ̂
川　大きい　傍　(のだ)　(断定)
「私達の村は、パアンの上 (=川上) の、大きな川のほとりにあります」(I-10.4)

▷ ここで lé dòʊɴ thəʔàɴ ʔəphâɴkhʊ́ と lé thîkhló phàdʊ́ ʔənàiɴ は同格の関係にあると考えられる。

(8) nə-　ʔè　dá　cò　**lé**　ʔəjàiɴ　θí ...
2sg　(条件)　見える　(遠隔)　遠く　(類似)
「遠くで見たとしても...」(IV-07.17)

(9) lâɴlàɴʔɔ̀thîcóɴ　**lé**　màʊkhʊ́phòphâɴ　nɔ́ ...
虹　空　(題)
「空の虹は...」(II-10.18)

▷ これは lé が導く側置助詞が名詞を修飾している例である。

次に起点を表す例を挙げる。

(10) lái　lə-　béiɴ　jò　ɣɛ̂　**lé**　láitàʊ　khɔ̂　ʔò
手紙　一　～枚　この　来る　郵便局　側　(遠方)
「この手紙は郵便局から来ました」(IV-04.364)

(11) təwâphjāphʊ́　θíləphá　cáiɴ　làɴ　wê　**lé**　cōɴ　nɔ́tā ...
学生　(複)　出る　(下方)　(強意)　学校　(前提)
「学生たちは学校 (の建物) から出てきて...」(II-10.2)

次に着点を表す例を挙げる。

(12) ɣɛ̂　**lé**　jə-　ʔɔ́　jò
来る　私の　ところ　(近傍)
「私のところに来てください」(001.2)

(13) θàʊcà　nɔ́　lì　**lé**　xîphàɴ　ɣéiɴ　ʔò
(人名)　(題)　行く　(人名)　家　(遠方)
「タウチャーはフイパウンの家に行った」(IV-04.307)

lé が場所・起点・着点のいずれを表しているかは、文脈や、文中に共起した様々な要素などを総合的に見て判断するしかない。ならば、日本語の「私は京都から奈良まで歩いた」のような、一つの節に起点と着点の両方が出て来るような文は、ポー・カレン語ではどのように訳されるのだろうか。実は、「私は京都から奈良まで歩いた」を、ポー・カレン語では一つの節で表現することができない。次のように、従属節標識を用いて、二つの節で表現するのである。

(14) jə-　tài　thánɴ　lé　dòʊɴ　phànɴ　**ɣònɴ** |
1sg　出る　(外方)　街　中　(継起)

jə-　ɣɛ̂　cáiɴ　lé　nə-　ʔɔ́　jò　lɔ̂
1sg　来る　歩く　2sg　ところ　(近傍)　(断定)
「私は街中を出て、あなたの所に歩いて来ました」(001.2085)

lé が 2 度現れた次の文は不適格である。

(15) *jə-　ɣɛ̂　cáiɴ　lé　dòʊɴ　phànɴ　lé　nə-　ʔɔ́　jò　lɔ̂
1sg　来る　歩く　街　中　2sg　ところ　(近傍)　(断定)
(私は街中からあなたの所に歩いて来ました)

11.1.2 時間を表す場合

時間の捉え方にも、空間と同じように、少なくとも 3 種類の捉え方があり得る。一つは時間軸の中のある 1 点であり、これを「時点」と呼ぶことにする。一方、二つの時点 A と B があって、ある事象が A で始まり、B で終わったとする。このときの A を「開始点」、B を「終了点」と呼ぶことにする。ポー・カレン語の lé は、このうち時点および開始点を表す。

まず、時点を表す例を挙げる。

(16) **lɯ́**　ʔəwī　dáʔò　nɛ̀　hələmjā　ʔɔ́　lə-　ɣà　dɯ̀
以前　(過去)　NE　猟師　いる　一　～人　DU
「昔ね、猟師が 1 人いた」(006.10)

(17) **lé**　chəchɔ̀ɴ　tháʊ　ʔəkhâ ...
雨　終わる　時
「雨がやんだ時...」(II-10.2

次に、開始点を表す例を挙げる。

(18) **lé**　mɯ̀ɣá　jàʊ　jə-　thòɴ　ɣéiɴ　phɔ̂ɴ　ʔé
昨日　ずっと　1sg　着く　家　～回　(否)
「私は昨日からずっと家に帰っていない」(001.2085)

(19) thɔ̂　wɛ̀　**lɯ́**　jə-　mʊ̄　ʔòɴ　ʔò　jàʊ
高い　(備え)　1sg　母　腹　(遠方)　ずっと
「(私の鼻は) 母の腹の中にいたときからずっと高いのだ」(006.28)

ポー・カレン語には終了点「～まで」を表す側置助詞はない。終了点は、従属節標識 thòɴ (thōɴ)「(～する) まで」(第 21 章を参照) を用いて次のように表現する。

(20) jə-　mə-　ʔɔ́khò　nə̀　**thōɴ**　ʔə-　thòɴ　lə-　nàdì
1sg　(非現)　待つ　2SG　(限界)　3sg　着く　一　～時
「私は 1 時になるまであなたを待つ」(001.353)

thòɴ の後の ʔə- は漠然と時間の流れか何かを指しているものと考えられる。文字通りには、「(時間が)1 時に到着するまで」ということである。

11.2　thòɴ

lé と同様に、空間あるいは時間を表す。動詞 thòɴ「到着する、着く」に由来する。thōɴ とも発音される。

11.2.1　空間を表す場合

名詞の表す地点の周辺をも含めた比較的広い範囲が場所として捉えられる。たとえば、次の例を見られたい。

(21) jə-　mə-　ʔɔ́　**lé**　jò
1sg　(非現)　いる　ここ
「私はここにいます」

(22) jə-　mə-　ʔɔ́　**thòɴ**　jò
1sg　(非現)　いる　ここ
「私はこのあたりにいます」

(21) で lé jò が表している場所は、発話時点において話者が存在している地点そのものであるが、(22) で thòɴ jò が表している場所は、話者が存在している地点の周辺をも含んでいる。

以下に場所を表す例を見ていく。

(23) jə- mə- ʔáɴkhwê **thòɴ** jò lɔ̂
1sg (非現) 釣る ここ (断定)
「私はこのあたりで釣りをします」(I-06.62)

(24) hələmjā nɔ́ mî wê **thòɴ** ʔàiθài phjā nɔ́ lə- nà ɣòɴ ...
猟師 (題) 寝る (強意) 修験者 道場 その 一 ～夜 (継起)
「猟師はその修験者の道場に 1 泊した後...」(III-04.10)

(25) làɴthé wê **thōɴ** thîkhló phàdʊ́ phòɴ nɔ́ lɔ̂
落ちる (強意) 川 大きい 中 (のだ) (断定)
「(ハゲワシは) 大きな川の中に落ちた」(III-12.31)

(26) thʊ́phʊ́ líphʊ́ θɛ̀ləphá nɔ́ dɔ̀ **thòɴ** θéiɴ phàdʊ́ ʔəkhî
小鳥 リス (複) (題) (別個) 木 大きな 先

ʔəthàiɴ lòɴ nɔ́ lḭ̀ lḭ̀ thàiɴ thàiɴ ...
枝 上 その 行く 行く 帰る 帰る
「小鳥やリスたちは大きな木の先あたりを行ったり来たりして...」(IV-05.9)

(27) **thòɴ** khāɴməɲā mə- tàʊ dòɴ khāɴməɲāmʊ́ nɔ́ jɔ̂ ʔé
外国 (非現) 競う (模倣) 外国の女性 (題) 易しい (否)
「外国で外国人女性を真似て競うのは易しいことではない」(IV-08.27)

(28) ʔə- chəkhlàiɴphlóʊɴ nɔ́ θí
3sg 言葉 (題) (類似)

kəthá mèiɴ wê **thōɴ** ʔə- khʊ́pì mā lɔ̂
ひっかかる (自然) (強意) 3sg 喉仏 (非常) (断定)
「彼女の (言おうとした) 言葉も、喉のあたりでひっかかってしまった」(V-04.136)

11.2.2 時間を表す場合

空間を表す場合と同様に、thòɴ は、名詞の表す時点の周辺をも含めた幅のある時間を指し示す。

(29) **thōɴ** [$_R$ khʊ̀làʔwà pòɴ pəjàɴkhāɴ] ləthôɴkhwījàləchîlī néiɴ khâ
イギリス 統治する ビルマ国 1914 年 時

dáʔò ...
(過去)
「イギリスがビルマを統治していた 1914 年の頃...」(III-11.10)

11.3　dè

道具・手段、随伴者・付帯物、相互的な状況の相手、様態を表す名詞句を導入する。dē とも発音される。なお、同じ発音の dè が名詞句の列挙に使われることがある。この dè は、名詞を補語として機能させる働きがないので、名詞修飾助詞 (第 14 章) に分類する。また、同音の助詞として、文頭に現れて順接を表す副詞の dè も参照せよ (第 19 章)。

11.3.1　道具・手段

道具・手段を表す例を挙げる。

(30) pə-　mə-　lì　**dè**　khlî
1pl　(非現)　行く　舟
「私達は舟で行きます」(I-06.15)

(31) pə-　bá　thàʊ　pə-　mɛ́　**dè**　thîlá　nɔ́　lɔ̂
1pl　(当為)　こする　1pl　歯　塩　(のだ)　(断定)
「私達は塩で歯を磨かなければならない」(I-07.5)

(32) ɣéiɴ　nɔ́　θí　θɔ́ɯɴ　thánɴ　nī　wê　**dè**　wá　nɔ́　lɔ̂
家　(題)　(類似)　建てる　(上方)　(努力)　(強意)　竹　(のだ)　(断定)
「家も竹で建てるのである」(III-16.13)

二つの目的語を取る動詞を用いた場合に、第二目的語が dè で標示されることがあるということは、第 4 章 4.2.2 で述べているとおりである。

(33) chàɴkhɯ́ʔwà　phílâɴ　θàʔwà　**dè**　khòθá
(人名)　与える　(人名)　マンゴー
「チャウンクーワーはターワーにマンゴーをやった」

この dè は、道具・手段を表す dè だと考えておく。同様に、第 15 章 15.3.1 で述べているとおり、‘locative alternation’(場所格交替) と呼べそうな現象でも dè が現れる。

(34) ʔəwê　khwái　thwí　**dè**　lōʊɴ
3se　投げる　犬　石
「彼は犬に石を投げつけた」

この dè もやはり、道具・手段を表す dè だと考えておくことにする。

11.3.2　随伴者・付帯物

次の (35) は随伴者を表す名詞句を導入している例である。

(35) jə-　mə-　lì　cáiɴkwè　**dè**　xîphàɴ
1sg　(非現)　行く　遊ぶ　(人名)
「私はフイパウンと遊びに行く」(IV-04.162)

次の (36) では付帯物を表す名詞句を導入している。

(36) dàʊpàiɴ **dè** ɲàɴpòɴɲà
満ちる 知識
「知識で満ちあふれている」(I-05.11)

所有表現 ʔɔ́ dè (be with)

ポー・カレン語には、所有者を表す名詞句を動詞 ʔɔ́「いる」の主語の位置に置き、所有物を表す名詞句を dè で導入する次のような所有表現がある (第 4 章 4.9 参照)。

(37) hə- ʔɔ́ **dè** ʔədì
1pl いる へそ
「私達にはへそがある」

この表現についての詳細な調査はまだ行っていないが、どうやら譲渡不可能な (inalienable) 所有物の場合にのみ、この表現が可能になるようである。この dè は、付帯物を導入する dè の用法の一種と考えておく。下に例を挙げる。

(38) ʔə- phā θí ʔɔ́ **dè** ʔəmèiɴ
3sg 父 (類似) いる 名
「彼の父にも名前があった」(023.20)

(39) pəwêdá ʔɔ́ **dè** pə- θɔ́ɯɴ pə- θà jàʊ
1pe いる 1pl 肝臓 1pl 心臓 (完)
「私達には肝臓や心臓がある」(I-04.11)

(40) pəwêdá pə- nòʊɴ ʔɔ́ **dè** ʔəkàɴ jàʊ
1pe 1pl 角 ある 毒 (完)
「私達の角には毒がある」(II-05.7)

(41) lé ʔə- khʊ́xwí lə- kàʊ nɔ́
(強調) 3sg 頭 一 部分 (題)

ʔɔ́ **dè** ʔə- mékhlî dè ʔə- mlòɴ
ある 3sg 目玉 (列挙) 3sg 触覚

nī bòɴ nɔ́ chī lɔ̂
二 ～本 (のだ) (婉曲) (断定)
「(蝿は) 頭の部分に、目玉と触覚が 2 本ある」(II-12.4)

(42) chìkhəmlə̄ɴ kòkəjàɴ khʊ́dà jò
民族集団 世界 表面 この

chì kō chì dè nɔ́ ʔɔ́ wê **dè**
民族 (毎) 民族 (毎') (題) いる (強意)

ʔəθí　kəjə̂ɴkòɴθò　nɔ́　thəmā　lɔ̌
3pl　民族衣装　(題)　一般的　(断定)
「この世界の民族集団はどの民族でも民族衣装があるのが普通である」(IV-01.64)

11.3.3　相互的な状況の相手

相互的な動作・作用・状態の相手も dè によって表される。これは随伴者を表す用法の一部と考えることもできるかもしれない。

(43) phʊ́θá　ʔəjò　máʊ　lóθà　**dè**　ʔəwê
子供　これ　快適な　(相互)　3se
「この子供は彼と仲が良い」(001.2358)

(44) jə-　dá　lóθà　**dè**　chərâ　thálòʊɴ　θɛ̀
1sg　会う　(相互)　先生　(人名)　(複)

chərâmʊ́ɪ　θéɪnpʊ̂ɪ　θɛ̀　ɣòɴ ...
女先生　(人名)　(複)　(継起)
「私はターロン先生やテインプ先生と会ってから...」(012.25)

(45) mə-　dákhòɴ　wê　**dè**　chənà　kò　blàɴ　dè　lɔ̌
(非現)　会う　(強意)　災難　(毎)　～回　(毎')　(断定)
「毎回、災難に出くわすであろう」(III-12.35)

(46) phàbàʊ　**dè**　lâɪɴ　khwɛ̄kəbàɴ　nɔ́　lɔ̌
近い　山　ゾエカビン山　(のだ)　(断定)
「(パアン市は) ゾエカビン山に近いのです」(III-17.21)

(47) ʔɔ́　jàɪɴ　**dè**　mʊ̄phā　lànâɴ　θí ...
いる　遠い　父母　(逆接)　(類似)
「父母から遠く離れて暮らしているのだが...」(IV-08.25)

(48) càθə̂ɴphʊ́　nɔ́　ʔə-　khʊ́xwí　nîɣòɴ　**dè**　jə-　ʔíkhʊ́lóɴ　lɔ̌
人間　(題)　3sg　頭　同等の　1sg　糞　(断定)
「人間は、頭 (の大きさ) が私の糞くらいしかない」(I-04.23)

(49) phlòʊɴmʊ́ɪ　ɕā　[$_R$ bádòɴ　**dè**　θwiwɔ̀θʊ́ɪ　mʊ̄]　lə-　ɣà
女性　老いた　似ている　(人名)　母　一　～人
「トゥイーウォートゥーの母に似た老いた女性」(V-04.122)

11.3.4　様態

動作の様態を表す。下に例を挙げる。

(50) thʉ́lêiɴʔwà lə- mèiɴ nɔ́ dɔ̀
(鳥の名) 一 ～種類 (題) (別個)

ʔɔ́ kòʊɴ wê **dè** ʔədóɴ nɔ́ lɔ̄
いる (皆) (強意) 群れ (のだ) (断定)
「白鷺は群れで暮らしている」(II-01.12)

(51) ɣɛ̂ thàiɴ wê **dè** ʔəpwàiθà khɔ̂
来る 帰る (強意) 疲労 (対比)
「(彼は) 疲れて帰ってきた」(II-02.16)

11.3.5 「目的語」に付く dè

dè は目的語として現れることのできる名詞句に付き、その名詞句を「道具・手段」を表すものとして提示することがある。

下の例で、名詞句 jā「帆」は dè がなくとも、目的語として出現可能であるが、dè が付くことによって、移動のための手段と捉えられている。

(52) ʔəθíwê dá cò làɴ [$_C$ khlî lə- phlóʊɴ
3pe 見える (遠隔) (下方) 舟 一 ～個

ɣɛ̂ thánɴ kánɴ thánɴ **dè** jā] nɔ́ lɔ̂
来る (上方) 張る (上方) 帆 (のだ) (断定)
「彼らは舟が一艘、帆を張ってやって来るのを見た」(I-04.5)

次の例でも、phòɴsò「霧吹き」は dè がなくとも、目的語として現れることができる。しかし、dè が付くことによって、「霧吹き」が、何らかの目的のために道具として (この場合は虹を作るため) 用いられるということが示されている。

(53) cɔ̀thʉ́dí nɔ́ ʔánmànī wê **dè** phòɴsò lə- bòɴ ɣòɴ |
(人名) (題) 取る (強意) 霧吹き 一 ～本 (継起)

ɕò thánɴ wê lé màʊkhʉ́phòphâɴ ...
吹く (上方) (強意) (場) 空
「チョートゥーディーは霧吹きを一本持ってきて、空に向かって吹き上げた」(II-10.16)

このように、dè は目的語として現れることのできる名詞句に付くことがある。つまり、これらの名詞句に dè が付く必要はない。しかし、dè が付くことによって、その名詞句の表すものが何らかの「道具・手段」であることを表すのである。

11.4 bê ... θò

類似物を表す。「～のように」「～のような」。最も一般的な形は bê ... θò の形であるが、bê に θò が付いて、bêθò ... θò となることもある。また、bê, bêθò, θò それぞれ単独で使われることもある。「目的」を表す従属節標識 bê ... θò「～になるように;～するように」も参照のこと (第 21 章)。

まず、bê ... θò の形で現れた例を挙げる。

(54) ʔəjôɴ　ʔɔ́　**bê**　míkhɯ́　**θò**　lɔ̂
色　ある　煙　(断定)
「色は煙のようである」(III-05.58)

(55) cɔ̀θéiɴlá　dè　nāɴphɔ̂ʔwà　nī　ɣà　chînàɴ　wê
(人名)　(列挙)　(人名)　二　～人　座る　(強意)

bê　[$_R$ hə-　chè　làɴ　thá]　lōʊɴtə̀ɴ　lə-　tàɴ　**θò**　lɔ̂
1pl　刺す　(下方)　(保持)　石柱　一　～柱　(断定)
「チョーテインラーとナウンポーワーの二人は、突き立てた石柱のように (動かずに) 座っていた」(V-01.3)

(56) ʔē　ʔɛ́kwì　phlòʊɴ　cɯ́lāɴ　**bê**　jə-　phɯ̂bɨ̀　**θò**　càibò ...
(条件)　愛する　カレン　工芸品　1sg　大叔父　(条件')
「カレンの工芸品を、私の大叔父のように愛するなら...」(V-02.157)

(57) ʔɔ́kí　jà　**bê**　ʔəθíwê　xōɴmɯ́　lə-　ɣà　**θò**
置く　1SG　3pl　女奴隷　一　～人
「(彼らは) 私を奴隷のように扱った」(V-04.191)

(58) [$_R$ ɛ́dɔ́　bá　tɛ̀]　həmɯ́　**bê**　ʔwàʔwà　**θò**
愛する　(無意)　(非常)　女性　(人名)

ʔɔ́　nāɴ　ɣà　ʔé
いる　(少数)　～人　(否)
「(私が) ワーワーのように愛した女性は一人もいない」(V-05.98)

次に、bêθò ... θò の形で現れた例を挙げる。

(59) jə-　θà　dè　nə-　θà　nɔ́　lə-　ɣà　dè　lə-　ɣà
1sg　心　(列挙)　2sg　心　(題)　一　～人　(列挙)　一　～人

bêθò　[$_R$ kàthə́ɯɪɴ　thá]　phlì　**θò**　ʔəkhɯ́còɴ ...
結ぶ　(保持)　紐　(理由)
「私の心とあなたの心は、互いに、結びつけた紐のようなので...」(011.23)

(60) θéiɴʔàɴljâɴ　nɔ́　khə̂ɴ　wê　**bêθò**　θéiɴxwâiɴ　**θò**　ʔé
(木の 1 種)　(題)　堅い　(強意)　(木の 1 種)　(否)
「アンリャウンの木はホワインの木ほど堅くない」(I-sen.82)

次に、bê のみが現れた例を挙げる。

(61) nə̀ lə- ɣà dákhòɴ bá
2SG 一 ～人 出会う (催促)

ʔəcá **bê** mʊ̄tôʊɴ jò ləxɩ̀
人生 母 この (禁止)
「お前はこの母のような人生を歩みませんように」(V-05.17)

次に、θò のみが現れた例を挙げる。

(62) chəʔɛ́ jò khʊ̄ wê mí **θò** nɔ́
愛 この 熱い (強意) 火 (題)

nāɴphɔ̂ʔwà lə- ɣà θíjâ wê jàʊ lɔ̂
(人名) 一 ～人 知る (強意) (完)
「この愛が火のように熱いことをナンポーワーは知った」(V-01.39)

最後に、bêθò のみが現れた例を挙げる。

(63) ʔəjôɴ ʔɔ́ wê **bêθò** míkhɯ́ nɔ́ lɔ̂
色 ある (強意) 煙 (のだ) (断定)
「色は煙のようである」(III-05.36)

この側置助詞が ʔəjò「これ」や ʔənɔ́「あれ」に付いたとき、しばしば 最初の音節 ʔə- が脱落する。

(64) lɔ̀ klàɴ chə̀ **bê** jò **θò** xɩ̀
語る (無根) CHə これ (禁止)
「このように言うなよ」(IV-04.167)

(65) lɔ̀ wê **bê** nɔ́ ɣòɴ...
語る (強意) それ (継起)
「そのように言ってから...」(III-01.38)

なお、次に挙げる例のように、bê が kəwê あるいは kəpê と発音される場合がある。おそらくは地域差によるものだと思われるが、詳しいことは分からない。

(66) **kəwê** phlòʊɴ θànánɴ θà phlòʊɴ ŋɔ̄ θɛ̀ **θò**
人 忘れる (再帰) 人 気を失う (複)
「気を失った人のように」(024.45)

この側置助詞は、以下に挙げる例のように、しばしば補文を取る。

(67) jə- pɔ̄ bá nə- lái lə- béiɴ nɔ́ |
1sg 読む (不抗) 2sg 手紙 一 ～枚 (前提)

bê [$_C$ phlòʊɴ　pwàiθà　khâ　ʔɔ̀　bá　thî　khléiɴ　lə-　khwà]　**θò**
人　疲れる　時　飲む　(不抗)　水　冷たい　一　～杯

khléiɴchó　khwái　lé　θà　phə̀ɴ
涼しい　(徹底)　(場)　心　中
「あなたの手紙を読んだところ、疲れた人が冷たい水を 1 杯飲んだかのように、心の中が涼しくなりました」(009.7)

(68) **bê** [$_C$ thʊ́kò　ʔənó　thɔ̂]　**θò**　nɔ́
サイチョウ　嘴　長い　(題)

thʊ́ɕá　jò　θí　ʔəmī　thɔ̂　chī　lɔ̂
クジャク　この　(類似)　尾　長い　(婉曲)　(断定)
「サイチョウが嘴が長いのと同じように、このクジャクも尾が長い」(II-02.35)

(69) **bêθò** [$_C$ nə-　ʔánʌtàiɴ　làɴ]　nɔ́
2sg　計画する　(下方)　(題)

mə-　tàiɴ　dá　phí　wê　lɔ̂
(非現)　作る　(保持)　(裨益)　(強意)　(断定)
「あなたが計画しているとおりに作っておいてあげましょう」(001.327)

(70) **bê** [$_C$ θà　ʔɔ́]　**θò**　mà　báθà |　mà
心　ある　する　(欲求)　する
「あなたの思っているとおりやりたければやりなさい」(IV-07.42)

11.5　nî

同じ程度の大きさであることを表す。「～ くらい」「～ くらいの」。nī とも発音される。おそらく、動詞の nîɣòɴ「同じ大きさの」と何らかの語源的つながりを持つ。bê ... θò と同様、ʔəjò「これ」や ʔənɔ́「あれ」に付くとき、しばしば ʔə- が脱落する。

(71) ʔɔ́　**nî**　jò　lɔ̂
ある　これ　(断定)
「(それは) このくらいの大きさだ」

(72) sàʊ　dá　lé　ʔə-　lé　**nī**　cʊ́ʊ́khʊ́　lə-　kàʊ　jò
こする　(保持)　(強調)　3sg　棒　腕　一　～部分　この
「(彼は) この腕 1 本分と同じくらいの大きさの棒をこすっていた」(020.34)

11.6　xwè

同じ程度の量であることを表す。「～ くらい」「～ くらいの」。xwē あるいは xwê とも発音される。動詞の xwè「満ちた」に由来する。bê ... θò や nî と同様、ʔəjò「これ」や ʔənɔ́「あれ」に付くとき、しばしば ʔə- が脱落する。

(73) ʔɔ́ thánɴ thàiɴ **xwē** jò lɔ̂
ある (変化) (追加) これ (断定)
「(借金が) これくらいになってしまった」(V-03.124)

(74) **xwē** nɔ́ lɔ̂. lɔ̀ ʔáʔá ʔé
それ (断定) 語る 沢山 (否)
「(語ったのは) それくらいだ。多くは語らなかった」(V-03.98)

11.7 báchâiɴ

「～に関して」「～について」の意を表す。動詞 báchâiɴ「関係する」に由来する。この動詞はビルマ語 /shàiɴ-/「関係する」の借用語である可能性がある。

(75) **báchâiɴ** dòʊɴláʊthōʊɴthɔ̄xómèiɴ nɔ́ hə- ʔè chôɴmóɴ thàiɴ càibò ...
八正道 (題) 1pl (条件) 考える (再度) (条件')
「八正道について再び考えるなら...」(014.21)

限定を表す動詞助詞 dá および強調を表す名詞修飾助詞の lé が付いて、báchâiɴ dá lé という形で使われることもある。dá が付くのは báchâiɴ が動詞だったときのなごりであると考えられる。あるいは、báchâiɴ がいまだに動詞性を保持しているという可能性も捨てきれない。

(76) jə- mə- lɔ̀pərə̂ɴ báθà nò **báchâiɴ** dá lé
1sg (非現) 知らせる (欲求) 2SG (限定) (強調)

jə- chəphàichəmà ʔəɣāiɴ θí chī lɔ̂
1sg 仕事 事情 (複) (婉曲) (断定)
「私はあなたに、私の仕事の状況についてお知らせしたい」(012.16)

(77) jə- lɔ̀thàiɴ ɕòɴ chəkhlàiɴ **báchâiɴ** dá lé
1sg 語る (皆) 言葉 (限定) (強調)

[$_R$ nəθí ɣê cáiɴkwè] ʔəcòɴ dài
2pl 来る 遊ぶ 事柄 まだ
「私は (友人達と) あなたが遊びに来たことについても語り合った」(012.25)

11.8 təkhɔ̂lé (khɔ̀khɔ̂lé)

ある時点まで継続して生じている事象の開始時点を表す。「～からずっと」「～以来」。この側置助詞が使われると、名詞の後に「ずっと」の意を表す名詞修飾助詞の jàʊ がしばしば現れる。lé の部分は lúɯ と発音されることがある。この発音が使われるのは、開始時点が基準となる時点よりもはるか以前であることを表す場合である (lé を参照)。

(78) **təkhɔ̂lé** ʔəjàʊ ləchînī néiɴ khâ ʔò jàʊ
年齢 十二 ～才 時 (遠方) ずっと

lɔ̀　bə́ɯɴ　θà　dɯ̀　ʔəkhɔ́cɔ̀ɴ ...
語る　勇気のある　心　勇敢な　(理由)
「12 才の頃から、(自分の意見を言う) 勇敢さを持っていたので...」(V-04.29)

以下の例では、この助詞が補文を従えている。

(79) **təkhɔ̂lé**　[$_C$ cáiɴ　làɴ　tɛ́kəθò]　ʔò　jàʊ　làɴphà
出る　(下方)　大学　(遠方)　ずっと　別れる
「大学を出てからずっと離ればなれだった」(V-03.37)

(80) **khɔ̀khɔ̂lɯ́**　[$_C$ dʊ́　ʁáɴ]　ʔò
大きい　(変化)　(遠方)

mà　wá　chəʔəɴchəθôɴ　θɛ̀　nɔ́　ʔɔ́　nàɴ　mèiɴ　ʔé
する　(無意)　悪行　(複)　(題)　ある　(少数)　～種類　(否)
「大きくなってから、悪行を働いたことはまったくない」(024.53)

11.9　phɔ̄

時間的概念を表す名詞を導入し、「名詞が表す期間以内に」ということを表す。「～の最中」「～以内に」。phɔ̀ とも発音される。

(81) **phɔ̄**　mɯ̄nàpî
昨晩
「晩のうちに」(001.2895)

(82) **phɔ̄**　[$_R$ nə-　lì　nī]　khâ　lì　wɛ̀
2sg　行く　可能な　時　行く　(備え)
「行ける間に行っておきなさいよ」(001.2892)

(83) **phɔ̄**　[$_R$ nə-　nī　ʔəkhâ]　khâjò　klɨ̀cɨ̀　lā　təɕà
2sg　得る　時　今　努力する　(願望)　きちんと
「時間の得られる今のうちに、きちんと努力せよ」(001.2893)

(84) mí　jò　**phɔ̄**　[$_R$ khɛ̀　tháɴ　lə-　dʊ́　dài　bá]　khâ
火　(題)　輝く　(変化)　(否)　大きい　まだ　(否')　時

pə-　bá　jʊ̄thwê　kətɔ̀　thá　wɛ̀　wê　lɔ̂
1pl　(当為)　見守る　心配する　(保持)　(備え)　(強意)　(断定)
「火というのは、まだ大きくならないうちに、注意しておかなければならないのである」(IV-08.21)

(85) **phɔ̄**　[$_R$ ʔəθíwê　tháɴ　tɛ́kəθò]　khâ
3pl　上る　大学　時

ʔəθíwê thìθò θɛ̀ náʊ làɴ chəmà
3se 友人 (複) 入る (内方) 仕事
「彼らが大学に通っている最中に、彼らの友人達は就職してしまった」(V-03.116)

第12章　側置名詞

本論文では、側置助詞に似た機能を持つ名詞を**側置名詞**(adpositional noun) と呼ぶ。

側置名詞には、ʔəɣāɴ と ʔəcòɴ と ʔəʔɔ́ の三つがある。これらは、名詞句の後に付いて、その名詞句を補語として文中に導入する機能を持つ。例えば下の例の ʔəɣāɴ がそのような役割を担っている。

(1) klɨ̀cɨ̀　mà　thîkhāɴ　**ʔəɣāɴ**
　努力する　行う　国　ため
　「国のために努力して行う」(I-sen.20)

ʔəɣāɴ を取り除いてしまったら、名詞 thîkhāɴ の文中における役割が分からなくなり、この文は不適格な文になる。このことから、この文における ʔəɣāɴ は、側置助詞とちょうど同じような機能を担っていると言える。

実は、側置助詞と同様、側置名詞は単独で文を形成することができない。単独で名詞句を形成することもできない。

(2) * ʔəɣāɴ
　ため
　「???」

次の (3) や (4) のように他の名詞の後に置かれることによって初めて文を形成することができる。

(3) chərâ　**ɣāɴ**
　先生　ため
　「先生のため」

(4) nə-　**ɣāɴ**
　2sg　ため
　「あなたのため」

したがって、この特徴に基づき、側置名詞を助詞として分類することも不可能ではない。

しかし、本論文では側置名詞を名詞の下位範疇と考える。というのは、これらが名詞としての特性を持ちあわせているからである。例えば、上の (4) のように、代名詞の第一形を前に置くことができる。このような性質は助詞にはない。

(5) *nə-　dè
　2sg　(共)
　「???」

また、(1) のように側置助詞に代わる働きをする場合もある一方で、次の (6) のように側置助詞が共起する場合もある。

(6) klɨ̀cɨ̀　mà　**dè**　thîkhāɴ　**ʔəɣāɴ**
努力する　行う　(共)　国　ため
「国のために努力して行う」

この例では、側置助詞 dè が名詞の前に現れている。二つの側置助詞が同時に一つの名詞句に付くことはない。このことは、側置名詞が側置助詞とは別の範疇に属することを示している。

以上述べたことを表にまとめておく。

	名詞を補語として働かせる機能	単独での文形成可能	代名詞第一形と共起可能	側置助詞と共起可能
一般の名詞	no	yes	yes	yes
側置名詞	yes	no	yes	yes
側置助詞	yes	no	no	no

このように、側置名詞は、側置助詞と共通する特徴を持っているのと同時に、一方で名詞としての特徴も兼ね備えているのである。

三つの側置助詞 ʔəɣāɴ, ʔəcòɴ, ʔəʔɔ́ はすべて音節 ʔə で始まる。この ʔə はしばしば脱落する。特に、(4) のように、代名詞第一形の後ではほぼ義務的に脱落する。

12.1　ʔəɣāɴ

ʔəɣāɴ は様々な意味を表す名詞句を導入する。現在までに分かっている限りでは、受益者、代替される対象、目的、判断の基準点、依拠する情報、感情の対象を表す。ʔəɣāɴ は側置助詞 dè と共起することがある。この場合の dè は様態を表す dè と考えておく。

最初に受益者を表す例を挙げる。「～ のために」。

(7) klɨ̀cɨ̀　mà　thîkhāɴ　**ʔəɣāɴ**　(=1)
努力する　行う　国
「国のために努力して行う」(I-sen.20)

(8) nə-　lɔ̀　pjà　phí　phlòʊɴ　chɨ̀　**ʔəɣāɴ**
2sg　話す　(提示)　(裨益)　カレン　民族
「あなたはカレン民族のために (彼に) 話してきかせてあげた」(016.30)

(9) cɔ̀cɔ̀θéiɴ　lə-　ɣà　təwâɴ　**ʔəɣāɴ**　chɨ̀phʊ́　**ʔəɣāɴ**　θɛ̀
(人名)　一　～人　村　民族　(複)

kō　mèiɴ　nɔ́　tətwɛ̀　wê　cʊ́ɪ　dè
(毎)　～種類　(題)　つなぐ　(強意)　手　(共)

təwânɴphʊ́ θàbánɴ θɛ̀ɣòɴ ...
村人 若い (継起)
「チョーチョーテインは、村や民族など色々なことのために、若い村人と協力して...」(V-05.36)

次に、代替される対象を表す例を挙げる。「～の代わりに」。

(10) [$_R$ həphlòʊɴ chɨ̀ **ʔəɣānɴ** phlòʊɴ dòʊɴləkōʊɴ θɛ̀ lì̤ tháɯɴlī tōʊɴ
カレン 民族 人 ヤンゴン (複) 行く 踊る ドン

lə- cìɴkəpʊ̀ɯ] bìdìʔòkhwè nɔ́
(場) シンガポール ビデオテープ その
「カレン人の代わりにヤンゴンの人たちがシンガポールに行ってドン [カレンの民族舞踊] を踊った (のを撮った) ビデオテープ」(016.34)

次に、目的を表す例を挙げる。「～のために」。

(11) pə- ɣɛ̂ ʔánxʊ̂ɯ̂ cì ʔəcá [$_R$ pətòɴ lé jâ] **ɣāɴ**
1pl 来る 探す 金 人生 築く (場) 将来
「私達は将来築く人生のために (ここに) やって来て金をためているのだ」(IV-03.11)

次に、判断の基準点を表す例を挙げる。「～にとって」。

(12) mə- nà nī təçā lé ʔəwê **ʔəɣānɴ** nɔ́ lɔ̂
(非現) 大変な (執拗) 本当に (強調) 3sg (のだ) (断定)
「彼にとっては本当に困難なことだろうよ」(001.2662)

(13) [$_R$ thələ̂ɴ khwái lé ʔəlānkhâiɴ] ʔəɣāiɴʔəcóɴ mwɛ̄ lànânɴ θí |
過ぎる (徹底) (場) 後 事柄 (繋) (逆接) (類似)

ʔwàʔwà lə- ɣà **ʔəɣānɴ** bê là ɣàɴ θò
(人名) 一 ～人 (比定) 月 姿 (比定')

pjáʊ ʔə- khâiɴ kō nì kō nà lɔ̂
付き従う 3sg 後 (毎) ～日 (毎) ～夜 (断定)
「過去に過ぎ去った事柄ではあるけれど、ワーワーにとっては、月のように、(過去のつらい出来事が）毎日毎晩、追いかけてくる（ことがつらいのだ)」(V-05.19)

(14) phlòʊɴmʊ́ɯ **ʔəɣānɴ** ʔə- dʊ́ tháʊ θənà nɔ́
女性 名詞化 大きい (最上) 敵 (題)

mwɛ̄ wê nɛ̀ʔánjɔ̂ chà lɔ̂
(繋) (強意) 信じやすい CHə (断定)
「女性にとって最大の敵は、信じやすいということである」(V-05.95)

次の例は、依拠する情報を表す例である。

(15) [$_R$ chərâmʉ́ʉ̀ lɔ̀]　chə̀　**ʔəɣānɴ**　nɔ́
　女先生　語る　CHə　(題)

phóɴ　nī　dá　wê　phlòʊɴ　lə-　ɣà　jàʊ
捕まえる　得る　(保持)　(強意)　人　一　～人　(完)
「先生の語ったところによると、人を 1 人逮捕してあるということだ」(015.18)

次の例は、感情を表す動詞と共に用いられ、感情の向かう対象を表す例である。感情を表す動詞は、心配や憐れみを表す動詞であることが多い。

(16) θàʊcà　kətɔ̀　bá　nə-　**ɣāɴ**　châ　mā　lɔ̂
(人名)　心配する　(無意)　2sg　(非常)　(非常)　(断定)
「僕 (=タウチャー) は君のことをすごく心配しているんだよ」(IV-04.31)

(17) ʔə-　mū　ʔə-　phā　θɛ̀　khɔ̂　kətɔ̀　bá
3sg　母　3sg　父　(複)　(対比)　心配する　(無意)

dè　ʔə-　phʉ́mʉ̄ʉ̀　**ʔəɣānɴ**　chī
(共)　3sg　娘　(婉曲)
「両親も娘のことを心配している」(IV-04.353)

(18) cɔ̂　bá　kətɔ̀　lé　xîphànɴ　**ʔəɣānɴ**　khɔ̂　ʔé
兄　(当為)　心配する　(強調)　(人名)　(対比)　(否)
「あなたは私 (=フイパウン) のことを心配する必要はないわ」(IV-04.268)

(19) càdìθə̂ɴ　nɔ́　ʔə-　θà　ɣàɣòɴ　wê
ライオン　(題)　3sg　心　壊れる　(強意)

dè　ʔə-　θʉ́　kəchânɴ　**ʔəɣānɴ**　nɔ́　chī　lɔ̂
(共)　3sg　友人　象　(のだ)　(婉曲)　(断定)
「ライオンは、友人の象を気の毒に思った」(I-04.29)

▷ θà ɣàɣòɴ は「がっかりする、落胆する」の意。

(20) nə-　θə́ɯɴ　thēiɴ　θà　thēiɴ　hə-　chɨ̀　**ʔəɣānɴ**
2sg　肝臓　親しい　心臓　親しい　1pl　民族
「あなたは私達の民族に親しみを感じてくれている」(016.38)

▷ θə́ɯɴ thēiɴ θà thēiɴ は「親しさを感じる」意のイディオム。

ʔəɣānɴ は目的を表す節を導入することもできる。統語的には、ʔəɣānɴ の前に置かれた従属節は、名詞 ʔəɣānɴ を修飾する関係節であると考えられる。

(21) [$_R$ jə-　mə-　màlʉ́　lái　phlòʊɴ]　**ʔəɣānɴ**　nɔ́
　1sg　(非現)　学ぶ　文字　カレン　(題)

jə-　ɣɛ̂　pəjànɴ　khānɴ　tālɔ̂
1sg　来る　ビルマ　国　(断定)
「カレン語を勉強するために、私はビルマに来たのです」

(22) [$_R$ mə- ʔáɴ] **ʔəɣāɴ** chəthə́ɯɴchəbòɴ dè
(非現) 食べる 植物 (列挙)

[$_R$ mə- kòɴθò] **ɣāɴ** chəthə́ɯɴchəbòɴ
(非現) 着る 植物
「食べるための植物と着るための植物」(II-04.16)

12.2 ʔəcòɴ

原因や理由を表す名詞句を導入する。「事柄、事情」という意味を表す一般名詞 ʔəcòɴ に由来する。「名詞句 +ʔəcòɴ」には様態を表す側置助詞 dè が前置されることが多い。ビルマ語 /ʔəcáuɴ/「事柄」と語源的に関連がありそうである。

(23) (dè) chôɣʊ́ **ʔəcòɴ** ʔəwê θî lɔ̂
(共) マラリア 3se 死ぬ (断定)
「マラリアが原因で彼は死んだ」(001.47)

(24) thəmjânɯ̄lɔ̂ dē nə- **ʔəcòɴ** nɔ́
まったくもって (共) 2sg (題)

jə- bá ɕáɴ bá já
1sg (当為) 貧しい (当為) 破れる
「まったくもってあなたのおかげで私は大変な苦労をした」(001.3269)

(25) ʔè bátè khlàiɴʔá lóθà dè lái **ʔəcòɴ** càibò |
(条件) 喧嘩する 口喧嘩する (相互) (共) 文字 (条件')

chɨ̀ xāxòɴ ləphá mə- nīdò bá pə̀ nɔ́ thîchà lɔ̂
民族 他 (複) (非現) 笑う (無意) 1PL (題) 確実な (断定)
「(カレン) 文字のことで (私達カレン人が) 喧嘩するようなことがあったなら、他の民族は私達のことを笑うことは確かだ」(IV-10.15)

(26) nāɴphɔ̂ʔwà lə- ɣà dè cɔ̀θéiɴlá **ʔəcòɴ** nɔ́
(人名) 一 ～人 (共) (人名) (題)

ʔɔ́ lə- máʊ nɯ̄ bá ...
いる (否) 快適な (執拗) (否')
「ナウンポーワーは、チョーテインラーのせいで病気になってしまい...」(V-01.72)

(27) lé chənɔ́ **ʔəcòɴ** xé nɔ́ bá thàiɴ θâ
(強調) それ 刀 (題) 当たる (元位) (新局)

wê lé thʊ́kò ʔə- nó nɔ́ lɔ̂
(強意) (場) サイチョウ 3sg 嘴 (のだ) (断定)
「それが原因で、刀は (はねかえって) サイチョウの嘴に当たった」(II-02.30)

12.3　ʔəʔɔ́

生物であるか無生物であるかを問わず、ある物体を、起点・地点・着点などの場所的な概念として捉えなければならないとき、ポー・カレン語では、名詞をそのまま使うことができない。そのままの形で場所的な概念を表す名詞として用いることができるのは、地名や建造物などを表す名詞に限られる。次の例を見られたい。これらは、地名や建造物なので、そのまま場所として捉えることができる。

(28) jə-　lì　lé　ləkōʊɴ
　1sg　行く　(場)　(地名)
　「私はヤンゴンに行った」

(29) jə-　lì　lé　cōɴ
　1sg　行く　(場)　学校
　「私は学校に行った」

(30) jə-　lì　lé　phjâ
　1sg　行く　(場)　市場
　「私は市場に行った」

一方、次の例は不適格である。

(31) *jə-　lì　lé　kā
　1sg　行く　(場)　自動車

(32) *jə-　lì　lé　tàpâ
　1sg　行く　(場)　お父さん

これは、kā「自動車」tàpâ「お父さん」のような名詞を、着点を表す名詞としてそのまま用いているからである。上の (32)(31) を適格な文にするためには、それぞれの名詞の後に ʔəʔɔ́ という側置名詞を置かなければならない。

(33) jə-　lì　lé　kā　**ʔɔ́**
　1sg　行く　(場)　自動車
　「私は自動車の (置いてある) ところに行った」

(34) jə-　lì　lé　tàpâ　**ʔɔ́**
　1sg　行く　(場)　お父さん
　「私はお父さんのところに行った」

このように、地名や建造物ではない物体を表す名詞を場所的な概念として捉えるのが側置名詞 ʔəʔɔ́ の機能である。ʔəʔɔ́ は、語源的には動詞 ʔɔ́「ある、いる」に名詞化接頭辞 ʔə- が付いて派生したと考えられる。以下に例を見ていく。

(35) thánɴ　phló　ʁánɴ　ʔə-　phʊ́　mèiɴ　θànkhâ　**ʔɔ́**
　あがる　名付ける　(上方)　3sg　子供　名前　僧侶
　「(父親は) 僧侶のところに子供の名前をつけに行った」(005.4)

(36) ʔəwê lì lɯ́ ʔàiθài **ʔɔ́**
3se 行く (場) 修験者
「彼は修験者のところに行った」(006.58)

(37) [$_R$ nə- kèpərə̂N phí jə̀] lái lə- béiN nɔ́
2sg 書く (裨益) 1SG 手紙 一 ～枚 (題)

thòN lé jə- **ʔɔ́** mūnì nīchîlə- θâN nɔ́ lɔ̂
着く (場) 1sg 日付 二十一 ～日 (のだ) (断定)
「あなたが書いた手紙は 21 日に私のところに着きました」(016.5)

(38) díθɯ́ dè khîchìphōN ɣɛ̂ thòN kəchâN **ʔɔ́** lə- blàN ...
(蛙の 1 種) (共) 虎 来る 着く 象 一 ～回
「蛙と虎は象のところに着くと...」(III-03.28)

(39) jə- mə- lì lé xîphàN **ʔɔ́** ʔò nāN thí
1sg (非現) 行く (場) (人名) (遠方) (少数) ～回
「ちょっとフイパウンのところに行ってくる」(IV-04.298)

(40) chəphɔ́xā lé mèiNlá klà θí nɔ́
動物 (場) 森 中 (複) (題)

lì wê lé ɣáNkhɔ́ ɣâN **ʔɔ́** ɣòN |
行く (強意) (場) 土 塩辛い (継起)

ʔánláiN wê ɣáNkhɔ́ ɣâN nɔ́ chī lɔ̂
舐める (強意) 土 塩辛い (のだ) (婉曲) (断定)
「森の中の動物たちは、岩塩の (ある) ところに行って、岩塩を舐めるのだ」(II-03.10)

以下に、ʔəʔɔ́ の統語論的に重要な用法を二つ挙げておく。

授受を表す文において受領者を表す名詞句に付く

第 4 章 4.2.2 に述べているとおり、授受を表す phílâN は、二つの目的語を取ることができる。

(41) jə- phílâN ʔəwê láiʔàʊ
1sg 与える 3sg 本
「私は彼に本を与えた」

この文における動詞の後に現れた二つ目の名詞句には、側置助詞 dè を付けることができるのだった。

(42) jə- phílâN ʔəwê dè láiʔàʊ
1sg 与える 3sg (共) 本
「私は彼に本を与えた」

phílâɴ を用いた文は、もう一つのパラフレーズが可能である。それは、次のように、受領者を表す名詞句を着点として捉えなおし、この名詞句に ʔəʔɔ́ を付けて斜格補語にする方法である。

(43) jə-　phílâɴ　láiʔàʊ　(lé)　ʔəwê　**ʔɔ́**
　　1sg　与える　本　(場)　3se
　　「私は彼に本を与えた」

(44) nə-　mə-　bá　phílâɴ　chəkəlò　lé　thʊ́θâɴwɔ̀　**ʔɔ́**　nɔ́　lɔ̂
　　2sg　(非現)　(当為)　与える　謝礼　(場)　梟　(のだ)　(断定)
　　「あなたは梟に謝金を渡さなければならない」(I-03.18)

所有者を表す名詞句に付く

第 4 章 4.9 に述べているとおり、ポー・カレン語に所有を表す文は 2 種類ある。そのうちの一つが、所有物を表す名詞句を動詞 ʔɔ́「ある」の主語の位置に置き、所有者を表す名詞句に側置名詞 ʔəʔɔ́ を付ける方法である。

(45) kā　ʔɔ́　(lé)　jə-　**ʔɔ́**
　　自動車　ある　(場)　1sg
　　「私は自動車を持っている (直訳:私のところに自動車がある)」

この表現で所有者は、所有物が存在する場所として捉えられている。

第13章　場所名詞

側置名詞以外にも、名詞句の後に付いて、その名詞句を補語として文中に導入する機能を持つ名詞がある。場所的な概念を表す一群の名詞である。例えば、次の文で、名詞句 thî klà には側置助詞がついていない。

(1) bá　θî　wê　thî　**klà**　nɔ́　mwɛ̄bò　lɔ̂
(当為)　死ぬ　(強意)　水　中　その　～というわけだ　(断定)
「(彼は) 水の中で死ぬことになってしまったというわけだ」(III-12.34)

側置助詞がついていないにもかかわらず名詞句 thî klà が補語として働くことができるのは、ʔəklà「中」という名詞が現れているからである。場所的な概念を表し、かつ、このような働きを持つ名詞を本論文では**場所名詞**(location noun) と呼ぶ。

場所名詞は、側置名詞と同様、下の (2) のように代名詞の第一形を前に置くことができるし、(3) のように側置助詞と共起することもできる。つまり側置名詞とよく似ている。

(2) nə-　**phâɴkhʊ́**
2sg　上
「あなたの上」

(3) lé　cəpwɛ̄　**ʔəphâɴkhʊ́**
(場)　机　上
「机の上に」

しかし、次の一点において場所名詞は側置名詞と異なっている。それは、場所名詞が単独で文を形成することができるという点である。

(4) ʔəphâɴkhʊ́
上
「上だ!」

単独で文を形成することができるのだから、当然のことながら次のように単独で名詞句を形成することもできる。

(5) ʔè　mwɛ̄　ʔè　jʊ̄　lé　**ʔəphâɴkhʊ́**　nɔ́ |
(条件)　(繋)　(条件)　見る　(場)　上　(題)

nə-　mə-　dá　bá　ʔədài　nī　khɔ̂　nɔ́　lɔ̂
2sg　(非現)　見える　(不抗)　羽　二　～面　(のだ)　(断定)
「(ゴキブリは) 上から見ると二つの羽が見える」(II-06.13)

側置名詞は単独で名詞句を形成することもできない。

上で述べた特徴を一般の名詞、側置名詞、側置助詞と対比して示しておく。

	名詞を補語として導入する機能	単独で文形成可能	代名詞第一形と共起可能	側置助詞と共起可能
一般の名詞	no	yes	yes	yes
場所名詞	yes	yes	yes	yes
側置名詞	yes	no	yes	yes
側置助詞	yes	no	no	no

場所名詞は側置名詞と同様に、音節 ʔə で始まり、前に名詞が付いたときにはこの ʔə がしばしば脱落する。特に、代名詞の第一形の後ではほぼ義務的に脱落する (上に挙げた例 (2) を見よ)。

以下に様々な場所名詞を見ていく。以下に挙げる例には、単独で名詞句を形成しているものは含まない。すべて、名詞句に後置されて側置助詞と同じような機能を担っていると考えられる例である。

13.1　ʔəphâɴkhʊ́

ある物体に対して地球の中心とは逆方向にある空間。すなわち「上」を表す。

(6) jwàdòmé　ʔɔ́　lé　láithʊ̂ʊ　**ʔəphâɴkhʊ́**
眼鏡　ある　(場)　貝葉
「眼鏡は貝葉の上にあります」(I-sen.15)

(7) chəʔə́ʊɴkàijɛ̀　nɔ́　ʔɔ́　wêdá　lé　ɣáɴkhʊ́　**ʔəphâɴkhʊ́**
綿雲　(題)　ある　(強意)　(場)　地面

ʔəphài　jɛ̄jà　nɔ́ |　thòɴ　cò　ʔətàɴ　ləchî　nɔ́　lɔ̂
(長さの単位)　五百　(前提)　到着する　(遠隔)　マイル　十　(のだ)　(断定)
「綿雲は、地面の上 500 パイ (1 パイ=約 30cm) から 10 マイルのところにある」(III-05.21)

「感情の向かう対象」を表す ʔəphâɴkhʊ́

ʔəphâɴkhʊ́ には、感情を表す動詞と共に現れて、感情の向かう対象を表す用法がある。この ʔəphâɴkhʊ́ は、既に「上」という意味を失っている。よって、単独で発話を形成することのできる「上」とは別物である可能性があり、もしそうであるならば、側置名詞に分類するべきである。本論文では便宜的に場所名詞を論じる中で扱うことにする。下に例を挙げる。

(8) jə-　θà　tɔ̀lòɴ　lé　ʔəwê　**ʔəphâɴkhʊ́**
1sg　心　まっすぐな　(場)　3sg
「私は彼に誠実な心で接している」

側置名詞の ʔəɣāɴ(前章 12.1) にも同様の用法があるが、ʔəɣāɴ と ʔəphâɴkhʊ́ は次の二つの点において異なる。

まず一つは、ʔəɣāɴ が心配や憐れみを表す動詞と共に用いられることが多いのに対し、ʔəphâɴkhʊ́ の場合にはそのような制限がないということである。

もう一つは、ʔəɣāɴ が目的語として現れ得る名詞句には付かないのに対し、ʔəphâɴkhʊ́ は目的語として現れ得る名詞句にも付くということである。例えば、ʔəphâɴkhʊ́ が用いられた次の例を見られたい。

(9) jə- ʔɛ́ phlòʊɴ chɨ̀chá **ʔəphâɴkhʊ́**
1sg 愛する カレン 民族
「私はカレン民族を愛している」

この例の ʔəphâɴkhʊ́ は、取り除いて下のようにすることもできる。

(10) jə- ʔɛ́ phlòʊɴ chɨ̀chá
1sg 愛する カレン 民族
「私はカレン民族を愛している」

ʔəɣāɴ の場合には、ʔəɣāɴ を取り除くことができない。

このように ʔəphâɴkhʊ́ は目的語として現れ得る名詞句にも付くので、これが付いた名詞句が目的語なのか斜格補語なのか区別がつかないという問題が生じる。例えば、(9) において、phlòʊɴ chɨ̀chá という名詞句が、(10) と同じようにあくまでも目的語としての地位を保っているのか、それとも ʔəphâɴkhʊ́ に導かれた斜格補語なのかの判断は難しい。今のところこの問題に対する結論は出すことができない。また、ʔəphâɴkhʊ́ が付いた場合と付いていない場合とで意味がどのように異なるのかは今のところよく分かっていない[1]。

下に例を見ていく。まず、感情の向かう対象を表す名詞句が目的語として現れることのできる場合の例を挙げる。

(11) həphlòʊɴ θíləphá təmjâɴ |
カレン (複) 驚く

pàdʊ́ jàʊjáɴ bá nə- **phâɴkhʊ́** θɛ̀ɣòɴ |
尊重する 尊敬する (無意) 2sg (継起)

ʔáɴʔàʊ bá nà châ mā
誉める (無意) 2SG (非常) (非常)
「カレンの人々は驚いて、あなたを尊敬し、讃えていますよ」(017.11)

(12) chɨ̀phʊ́ kō chɨ̀ dè nɔ́
民族 (毎) 民族 (毎') (題)

[1]他動性の低い二項述語のときに、名詞の格標示が典型的な他動詞の場合と異なるということが様々な言語に見られる (角田 1991 などを参照)。感情を表す動詞の目的語に ʔəphâɴkhʊ́ が付き得るという現象は、この通言語的な傾向と軌を一にするものかもしれない。日本語でも、「のこと」という形式が、感情を表す述語の場合に多く現れる。例えば「私は父のことを愛している」。なお、ビルマ語でも、感情の向かう対象を表す名詞句にしばしば /ʔəpɔ̀/「上」という名詞が付加される (澤田英夫 p.c.)。ポー・カレン語と似た現象であり、興味深い。

lé　ʔəθí　chɨ̀chá　**phâɴkhú**　nɔ́
(場)　3pl　民族　(題)

mə-　bá　ʔɛ́dʊ́　wê　thəmā　lɔ̂
(非現)　(当為)　愛する　(強意)　専ら　(断定)
「一般的に言って、どのような民族でも、自分達の民族のことは、愛するべきである」(IV-01.70)

次に、感情の向かう対象を表す名詞句が目的語として現れることのできない場合の例を挙げる。

(13) nə-　**phâɴkhú**　jə-　θə́ɯɴθà　ʔɔ́　pêθíθò　lɛ̂　nɔ́
2sg　1sg　心　ある　どのように　(疑)　(題)

nə-　θíjâ　thá　chə̀　lɔ̂　ʁā
2sg　知る　(保持)　CHə　(断定)　(疑)
「あなたに対して私がどのような感情を抱いているかをあなたは知っていますよね」(011.23)

(14) máʊchə̂ɴ　jə-　**phâɴkhú**　càibò |
親しい　1sg　(条件)

kèpərə̂ɴ　θôʊɴ　phí　lā　lái　nāɴ　béiɴ　chài
書く　送る　(裨益)　(願望)　手紙　(少数)　～枚　CHAI
「私に親しみを感じるなら、手紙を書いて送ってください」(017.31)

(15) lə-　ɣà　dè　lə-　ɣà　**ʔəphâɴkhú**　θə́ɯɴ　tɔ̀　θà　lòɴ
一　～人　(列挙)　一　～人　心　まっすぐな　心　まっすぐな

ʔè　lə-　ʔɔ́　bá　nɔ́ |　chɨ̀phʊ́　mɔ̂mɔ́　lànâɴ　θí |
(条件)　(否)　ある　(否')　(題)　民族　同じ　(逆接)　(類似)

nɛ̀ʔánɴ　lóθà　mə-　θí　mwɛ̄　ʔé　lɔ̂
信じる　(相互)　(非現)　できる　(繋)　(否)　(断定)
「ひとりひとりが互いに対して誠実な心を持たなければ、同じ民族であっても、信じることができるわけがない」(IV-01.85)

(16) lé　pə-　chɨ̀　**phâɴkhú**　θàʊcà　lə-　phlóʊɴ　nɔ́
(場)　1pl　民族　忠誠心　一　～個　(題)

dàʊ　ɣàɣòɴ　ʔé
(使役)　壊れる　(否)
「私達の民族に対して、(私達は) 忠誠心を失わない」(IV-01.100)

(17) lé　xîphàɴ　**phâɴkhú**　khɔ̂　θə́ɯɴθà　thēiɴ
(場)　(人名)　(対比)　心　親しい

ʔɔ́　mjâ　kō　nì　dè　lɔ̂
ある　(非常)　(毎)　～日　(毎')　(断定)
「フイパウンに対しては、親しみを毎日強く感じています」(IV-04.266)

(18) cɔ̂ ʔəthàibòɴ phlòʊɴ chɨ̀phʊ́ **phâɴkhʊ́** nɔ́
兄 血筋 カレン 民族 (題)

chəʔɛ́ làɴçà bá xì
愛情 減る (催促) (禁止)
「あなたの民族であるカレン人に対しては、愛情が減りませんように」(V-05.112)

13.2 ʔəphâɴlá

ある物体に対して地球の中心と同じ方向にある空間。すなわち「下」。

(19) lé kəmlɔ̂ɴ phə̀ɴ lé thîkhló phə̀ɴ lé ɣáɴkhʊ́ **phâɴlá**
(場) 井戸 中 (場) 川 中 (場) 地面

nɔ́ θí thî ʔɔ́ wê chī lɔ̂
(題) (類似) 水 ある (強意) (婉曲) (断定)
「井戸の中、川の中、地面の下にも水は存在する」(I-02.4)

(20) lé ʔədài ç̣ā **phâɴlá** nɔ́ ʔədài bə̀ɴ ʔɔ́ dài
(題) 羽 硬い (題) 羽 薄い ある まだ

lə- thə̀ɴ dài nɔ́ dá bá wê chī lɔ̂
一 ～層 まだ (題) 見える (不抗) (強意) (婉曲) (断定)
「硬い羽の下に薄い羽がもう一層あるのを見た」(II-06.11)

(21) nóɴ θài khwái lānâɴ | pəlàʊ làɴ θà lé pháipàpə̀ɴ
池 乾く (徹底) (逆接) 入れる (下方) (再帰) (場) 泥

phâɴlá nɔ́ | chə- dá pə̀ nàɴ ɣà ʔé
(前提) CHə 見える 3PL (少数) ～人 (否)
「池が乾いてしまっても、泥の下に隠れれば、誰にも私達のことは見えない」(III-15.13)

13.3 ʔəlá

これも ʔəphâɴlá と同じく「下」という意味である。ʔəlá のほうが使われる頻度が少ないということ以外、ʔəphâɴlá との違いは分からない。

(22) dáθáthʊ̂ lé ɣáɴkhʊ́ **lá** ʔò θí ʔɔ́ ʔá wê ʔəkhʊ́cə̀ɴ |
鉱物資源 (場) 地面 (遠方) (類似) ある 多い (強意) (理由)

dʊ́ç̣ā cìklà wêdá chī mwɛ̄bò lɔ̂
発展した 賑やかな (強意) (婉曲) ～というわけだ (断定)
「(ビルマは) 地下の鉱物資源も豊富なので、裕福である」(II-07.19)

13.4　ʔəphə̀ɴ

ある物体の内側の空間。すなわち「中」。名詞に後置され、さらに ʔə が脱落したとき、wə̀ɴ と発音されることがある。例えば、ɣéiɴ wə̀ɴ「家の中」。

(23) hə-　thîkhāɴ　**phə̀ɴ**　jò　ʔəkhâjò
1pl　国　(題)　現在

ʔánlɛ̀　thánɴ　kò　mèiɴ　dè　chī　lɔ̂
変える　(完成)　(毎)　～種類　(毎')　(婉曲)　(断定)
「私達の国では、現在、何もかもを変えてしまっている」(014.12)

(24) ʔɔ́　wê　lé　kò　phàdʊ́　lə-　kò　**phə̀ɴ**　nɔ́　lɔ̂
いる　(強意)　(場)　島　大きな　一　島　(のだ)　(断定)
「(彼らは) ある大きな島に住んでいた」(I-04.3)

(25) pə-　mə-　lì　ʔánkhwê　lé　thîkhló　**phə̀ɴ**　ʔò
1pl　(非現)　行く　釣る　(場)　川　(遠方)
「あちらの川で釣りをしましょう」(I-06.48)

▷ ここで thîkhló phə̀ɴ「川の中」が指しているのは川岸をも含んだ部分である。水の中に入って釣りをするわけではない。

(26) jálūɪ　jádòɴ　ləphá　cáiɴ　wéiɴwá　mòθɔ̂
鰻　鰻の一種　(複)　出る　動き回る　騒ぐ

nóɴ　**phə̀ɴ**　nɔ́　chài
池　あの　CHAI
「鰻たちは外に出て、池の中で動き回って騒ぎ立ててくれ」(III-15.20)

(27) mənī　lə-　ɣà　kətətɔ̄　thánɴ　dòʊɴláʊ　**phə̀ɴ**　nɔ́tā ...
人間　一　～人　生まれる　(外方)　世界　(前提)
「人間がこの世に生まれ出て...」(III-16.9)

(28) ɣéiɴ　**phə̀ɴ**　θí　ʔɔ́　wê　máʊ　ʔé
家　(類似)　いる　(強意)　快適な　(否)
「家の中でも、(彼女は) 楽しくなかった」(IV-04.349)

13.5　ʔəkhlôʊɴ

ある物体の外側の空間。すなわち「外」。

(29) thòɴnɔ́ɣòɴ　cáiɴ　thánɴ　wê　lé　châiɴ　**khlôʊɴ**　nɔ́　chī　lɔ̂
それから　出る　(外方)　(強意)　(場)　店　(のだ)　(婉曲)　(断定)
「それから、店の外に出たのです」(001.1936)

(30) jə-　méθá　**khlôʊɴ**　nə-　ʔɛ́bòʊɴ　jə̀
1sg　目　2sg　裏切る　1SG
「私の見えないところで、お前は私を裏切った」(004.159)

13.6 ʔəlòɴ

物体の表面。「表面」「上」。

(31) lé dʉ̀ʉlâ kháɴ **lòɴ** ʔəchóɴ klà nɔ́
(場) 蝿 足 毛 間 (題)

chəʔʉ́chəʔòɴ ləphá bàʊthá wêdá tā ...
ばい菌 (複) 付着する (強意) (前提)
「蝿の足の表面の毛の間にはばい菌がくっついていて...」(II-12.13)

(32) ɣɛ̂ thàiɴ ʔɔ́pwài wê lé
来る 帰る 休む (強意) (場)

θéiɴ kháɴthài θéiɴwī **lòɴ** nɔ́ lɔ̂
木 下 木の根 (のだ) (断定)
「(カエルは) やって来て、木の下の根っこの上で休んでいた」(III-03.6)

(33) chəchâ ʔɔ́ hə- **lòɴ** nɔ́ | hə- bá
病気 ある 1pl (前提) 1pl (当為)

ʔɔ́ jʊ̄ làɴ θà kō ɣà dè lɔ̂
いる 見る (帰的) (再帰) (毎) ～人 (毎') (断定)
「身体に病気があるなら、どの人も自愛しなければならない」(IV-04.132)

(34) lé ʔə- mʊ̄tôʊɴ cʉ́ʉ **lòɴ** [$_R$ xîlà chêiɴpràɴ tɛ̀]
(場) 3sg 母 手 美しい 清潔な (非常)

ʔə- mé nɔ́ jʊ̄ tháɴ thàiɴ ʔə- mʊ̄
3sg 目 (題) 見る (上方) (返答) 3sg 母
「母親の腕の中で、(赤ん坊の) とても美しい目は、母親を見上げ返した」(V-05.18)

13.7 ʔəméjâ

生物の顔のある側に隣接した空間。あるいは建物などの正面側の空間。すなわち「前」。

(35) phʊ́θá lókwè lé phjā **ʔəméjâ**
子供 遊ぶ (場) 寺
「子供が寺の前で遊んでいる」(I-sen.7)

(36) lé mɔ̀ləmjâiɴ phjâ phàdʊ́ kəbàɴ θənî **méjâ**
(場) (地名) 市場 大きな 船 埠頭

khəmlə̄ɴ θɛ̀ləphá ɣɛ̂ lòɴ tháʊ kəbàɴ ʔá mā chʉ̄ lɔ̂
民衆 (複) 来る 追う 乗る 船 多い (非常) (婉曲) (断定)
「モールメインの大市場の船着き場の前に、人々が船に乗るためにたくさんやって来ていた」(IV-04.18)

(37) càʊ　làɴ　pjà　wê　jə-　**méjâ**　nɔ́　lɔ̂
引く　(下方)　(提示)　(強意)　1sg　(のだ)　(断定)
「(大叔父は毛布を) 私の前に引きずり出してみせた」(V-02.82)

13.8　ʔəkhâiɴ

生物の顔のある側とは逆側の部分。あるいは建物などの裏側の部分。すなわち「後」「裏」。名詞 khâiɴ「尻」に由来する。

(38) lì　pjáʊ　lā　jə-　**khâiɴ**
行く　つき従う　(願望)　1sg
「私に付いてきてください」(006.69)

▷ pjáʊ「つ付き従う、ついていく」は「つき従われる人」を目的語として取る動詞である。ほとんどの場合、「つき従われる人」を表す名詞句に ʔəkhâiɴ を付ける。

(39) ɣê　thàiɴ　pjáʊ　ɣàmʉ́　**khâiɴ**　lé　xîphàɴ　ʔɔ́　ʔò
来る　帰る　つき従う　叔母　(場)　(人名)　(遠方)
「フイパウンの家まで私のあとについて来なさい」(IV-04.444)

13.9　ʔəlāɴkhâiɴ

生物の顔のある側とは逆側に隣接した空間。あるいは建物などの裏側の空間。すなわち「後」。ʔəlàɴkhâiɴ とも発音する。前節の ʔəkhâiɴ との違いは、ʔəlāɴkhâiɴ が後側の「空間」を表すのに対し、ʔəkhâiɴ が顔とは逆側の「部分」を表すということである。lāɴ は元々「場所」の意味。khâiɴ は「尻」に由来する。

(40) ʔɔ́thɔ̄　lʉ́　hə-　**lāɴkhâiɴ**　ʔò
残る　(場)　1pl　(遠方)
「(彼は) 私達のずっと後に取り残されている」(001.223)

(41) làɴphɨ́làɴchâɴ　lé　ʔəphlòʊɴ　**làɴkhâiɴ**
落ちぶれる　(場)　他人
「他人の後で落ちぶれている」(IV-03.59)

13.10　ʔəklà

物体と物体に挟まれた空間。すなわち「間」。

(42) làɴbə̀ɴ　thî　**klà**　|　θámá　θî　wê　lɔ̂
沈む　水　窒息する　死ぬ　(強意)　(断定)
「(猿は) 水の中に沈んで、窒息して死んでしまった」(III-12.32)

(43) chə- bá tōʊɴ chəchə̀ɴ **klà** nɔ́ mwɛ̄ jə̀
CHə (当為) 苦しむ 雨 (題) (繋) 1SG
「雨の中で苦しんでいるのは私だ」(IV-09.20)

(44) lé chəkəthái **klà** ...
(場) 窮屈さ
「困難の中で...」(IV-10.3)

13.11 ʔəkháɴthài

物体が地面と接しているあたりの部分。「足もと」。kháɴ は「足」、thài は次節に示す ʔəthài で、元々の意味は「足のそば」。

(45) klòɴ ləkōʊɴ **kháɴthài**
仏塔 (地名)

dà làɴ θà dè lōʊɴpá ʔwà lōʊɴpá θə̂ɴ ɣòɴ ...
敷く (下方) (再帰) (共) 石板 白い 石板 黒い (継起)
「ヤンゴン・パゴダ (=シュエダゴン・パゴダ) の (絵の) 基壇には白や黒の石がちりばめてある」(V-02.25)

(46) chəjɔ̀khâ làxwè lə- nà lé klàɴkláiɴ ɕā θáɯɪɴ
暑期 満月 一 ～夜 (場) インドカリン 老いた 木

kháɴthài nɔ́ ʔwàʔwà lə- ɣà
(題) (人名) 一 ～人

ʔɔ́khò jʊ̄ làɴ cɔ̀cɔ̀θéiɴ ʔəkhâ nɔ́ ...
待つ 見る (内方) (人名) 時 (題)
「暑期の満月のある夜、古いインドカリンの木の下でワーワーがチョーチョーテインを待っていたとき...」(V-05.50)

13.12 ʔəthài

物体に接している空間。「傍ら」「そば」「横」「隣」。

(47) cɔ̂ ɣɛ̂ thòɴ lé nə- ɣàɴ **thài** jàʊ
兄 来る 着く (場) 2sg 姿 (完)
「僕は君の隣に帰って来たよ」(IV-04.457)

(48) jə- chînàɴ phʊ̄ɯbɨ̰ ɣàɴ **thài** nɔ́ ...
1sg 座る 大叔父 姿 (前提)
「私は大叔父さんの横に座って...」(V-02.19)

(49) lé ʔə- ɣéiɴ **thài** ʔə- klò phàɴ nɔ́ ...
(場) 3sg 家 3sg 畑 中 (題)
「彼の家の横の畑の中には...」(II-08.16)

(50) méθá　**thài**　dá　bá　wê
目　見える　(不抗)　(強意)

[$_C$ phlòʊɴchɨ̀phʊ́　chə-　thɛ̀　chə-　thə̂ɴ]
カレン人　CHə　(足の甲で) 蹴る　CHə　(足の裏で) 蹴る
「(私は) 目の前で (1 人の) カレン人が蹴られているのを見ていた」(IV-07.3)

13.13　ʔəkhʊ́dà

物体の、地球の中心とは反対側の平らな面。「おもて」「表面」。名詞 khʊ́「頭」、動詞 dà「敷く」に由来する。

(51) wāplàɴ　phə̀ɴ　θéiɴthò　**khʊ́dà**
野原　中　切り株

chōɴ　làɴ　ʔɔ́pwài　bá　xì
とまる　(下方)　休む　(催促)　(禁止)
「野原の中の切り株の上にとまって休むな」(III-12.11)

(52) lé　ɣáɴkhʊ́khlôʊɴ　dòʊɴláʊ　**khʊ́dà**　jò ...
(場)　地球　世界　この
「この地球上で...」(II-03.2)

(53) chɨ̀　dʊ́　kòkəjàɴ　**khʊ́dà**　jò
民族　大きな　世界　(題)

ʔə-　chɨ̀　láilɛ̀　θɛ̀　pàdʊ́pàprè　wê　ʔəkhʊ́còɴ ...
3sg　民族　文学　(複)　敬う　(理由)
「世界中の大きな民族は、自分達の文学を敬っているので...」(IV-01.22)

(54) tháɴ　mànī　lāɴ　lé　ʔəlāɴthɔ̂　**khʊ́dà**　ɣòɴ ...
上がる　取る　場所　(場)　舞台　(継起)
「舞台の上の (適当な) 場所を取って...」(V-04.78)

13.14　ʔəkhʊ́thò

細長い物体の先端部分。「先」「先端」。khʊ́ は名詞「頭」、thò は動詞「突く」に由来する。

(55) jáphʊ́　jálì　ləphá　lì　ʔɔ́khò　wɛ̀
小魚　小魚　(複)　行く　待つ　(備え)

lé　lāiɴ　**khʊ́thò**　ʔò　ɣòɴ ...
(場)　あか汲み　(遠方)　(継起)
「小魚達は、あか汲み (=農業用具の一種) の先端に予め行って待っており...」(III-15.21)

(56) lé ʔə- nâ **khʉ́thò** nɔ́ dàʊ làɴchàɴ dè
(場) 3sg 鼻 (場) (使役) 垂れる (共)

ʔəθí nâthî nɔ́tā ...
3pl 鼻汁 (前提)
「(蝿は) 鼻の先から分泌液を垂らして...」(II-12.13)

(57) ʔəbòɴxwí ʔə- **khʉ́thò** ʔè bádòɴ lóθà chī càibò |
棒 3sg (条件) 同じ (相互) (婉曲) (条件')

θəwài lóθà lə̀ɴ ʔé
吸う (相互) もはや (否)
「(磁石) の棒の先端がもし互いに同じなら、もはや吸い寄せ合わない」(III-01.12)

13.15 ʔənàiɴ

物体から近い距離にある空間。ʔəthài よりも少し遠い場所を指す。「近く」「そば」。

(58) lé ɕʉ́khló **nàiɴ** lì cáiɴkwè wê
(場) 川 行く 遊ぶ (強意)
「川べりに遊びに行った」(IV-07.44)

(59) [$_R$ mídòʊɴ phàɴ θʉ̀rîθʉ̀rî] **ʔənàiɴ**
電球 明るい チラチラと

twà khənāɴ ↩ jə- phʉ́khwâ
計算する 数字 1sg 息子
「電球がチラチラと光る横で、算数の勉強をしていた。私の息子が」(V-03.98)

(60) jə- lì chînàɴ lé ʔə- **nàiɴ**
1sg 行く 座る (場) 3sg
「私は彼の近くに座った」(V-03.98)

13.16 ʔəxòɴnàiɴ

ʔənàiɴxòɴ とも言う。ある物体から近い距離にある空間。「近く」「そば」。ʔənàiɴ と類似しているが、意味の違いは明らかでない。

(61) xîphàɴ ɣɛ̂ thàiɴ ʔɔ́ bàʊ thánɴ
(人名) 来る 帰る いる 近い (変化)

lé khléiɴθàʊcà ʔɔ́ **xòɴnàiɴ** nɔ́tā ...
(場) (人名) ところ (前提)
「フイパウンはクレインタウチャーの近くに戻って来ていて...」(IV-04.209)

(62) kòkəjàɴ　khʊ́dà　jò　ʔē　mwɛ̄
世界　表面　この　(条件)　(繋)

θìtâ　ʔē　ʔɔ́　lé　wɛ̄cɔ̀　**xòɴnàiɴ**　càibò ...
(人名)　(条件)　いる　(場)　兄　(条件')
「この世界で、ティーダーが僕の近くにいてくれるなら...」(V-01.48)

(63) khāɴ　pəjàɴ　ʔə-　**nàiɴxòɴ**　lé　kháɴthàilá　lə-　khɔ̂　nɔ́
国　ビルマ　3sg　近く　(場)　北　一　～面　(題)

təràʊ　khāɴ　ʔɔ́　wêdá　lɔ̂
中国　国　ある　(強意)　(断定)
「ビルマの北側の隣には、中国がある」(II-07.3)

第14章　名詞修飾助詞

名詞修飾助詞(noun modifying particle) は名詞句に付く助詞であり、その点では側置助詞と共通する。しかし、側置助詞が文中に補語を導入する機能を持つのに対して、名詞修飾助詞にはそのような機能がない。つまり、名詞修飾助詞は名詞句を修飾する機能しか持っていないのだと考えられる。

名詞修飾助詞には名詞の前に置かれるものと後に置かれるものとがある。

14.1　chəlé

名詞句の前に付く。主題化された名詞句に付き、その名詞を目立たせる働きをする。

(1) **chəlé**　thî　θí　jò　ʔɔ́　wê　kò　cóɴ　dè　lɔ̂
水　(複)　(題)　ある　(強意)　(毎)　～箇所　(毎')　(断定)
「水というものは、どこにでも存在する」(I-02.3)

(2) **chəlé**　càθə̂ɴ　θí　jò
人間　(複)　(題)

ʔánmə̂ɴʔánɴ　chà　θí　kò　mèiɴ　dè　lɔ̂
使役する　CHə　できる　(毎)　～種類　(毎')　(断定)
「人間というのは、何にでも仕事をさせることができる」(I-04.9)

(3) **chəlé**　thîlá　θí　jò
塩　(複)　(題)

ʔɔ́　wê　ʔá　mèiɴ　nɔ́　chī　lɔ̂
ある　(強意)　多い　～種類　(のだ)　(婉曲)　(断定)
「塩というのは、沢山の種類がある」(II-03.11)

14.2　lé

名詞句の前に付く。主語や目的語に付いて、強調を表す。lə́ とも発音される。側置助詞の lé と同じ形であるが、名詞修飾助詞の lé は、補語を導入するという働きを持たない。

(4) ʔəwê　jū　thánɴ　**lé**　θéiɴ　khî　nɔ́ |
3se　見る　(上方)　木　先　(前提)

dá　cò　thánɴ　wê　**lé**　lái　θwî　lə-　θwî　nɔ́　lɔ̂
見える　(遠隔)　(上方)　(強意)　鳶　巣　一　巣　(のだ)　(断定)
「彼は、木の先を見上げると、鳶の巣を一つ発見した」(I-01.5)

(5) ʔəθíwê　lòɴ　blúɩ　ʔáɴ　khwái　wê　**lé**　chəphʊ́chəxā
3pe　追う　滑空する　食べる　(徹底)　(強意)　昆虫

[$_R$ mà　ɣàɣòɴ　búɩ　dè　chəthə́ɯɴchəbòɴ]　θí　nɔ́　ʔəkhʊ́còɴ ...
(使役)　壊れる　稲　(列挙)　植物　(複)　(のだ)　(理由)
「彼ら (鳥) は、稲や作物を害する昆虫を追って滑空し食べるので...」(II-01.19)

(6) [$_C$ mʊ̀ɯmé　ʔəljā　phàɴ　chèɕɔ̄　làɴ　bá　thî　ʔəkhʊ́ɩ　nɔ́　lə-　phâɴ |
太陽　光　光る　輝く　(下方)　当たる　水　煙　その　1　～回

kɛ́　thánɴ　wê　**lé**　lânlàɴʔɔ̀thîcóɴ]　nɔ́
成る　(完成)　(強意)　(場)　虹　(題)

ʔəwêθí　dá　bá　wê　kō　ɣà　dè　chī　lɔ̂
3se　見える　(不抗)　(強意)　(毎)　～人　(毎')　(婉曲)　(断定)
「太陽の光が光り輝いてその霧に当たったらその時、虹になったのを、彼らはみな見ることができた」(II-10.17)

(7) ʔánɴ　**lé**　ʔəʔwí　nɔ́
食べる　美味しい物　その
「美味しい物を食べなさい」(II-14.1)

(8) **lé**　ʔə-　wɛ̄khwâ　lə-　ɣà　nɔ́　chəkhlàiɴ
3sg　兄　一　～人　(題)　言葉

lé　[$_R$ ʔə-　phā　màláʊ　wɛ̀]　ʔəkhɔ̂pəjɔ̂　nɔ́
(関)　3sg　父　注文する　(備え)　意味　(題)

ʔəwêdá　θíjâ　wɛ̀　ɣìɣìbábá　nɔ́　lɔ̂
3se　知る　(備え)　良く　(のだ)　(断定)
「彼の兄はといえば、父が命じた言葉の意味を、良く理解していた」(II-14.9)

(9) **lé**　phjā　bàθàɴkhâ　lə-　ɣà　ʁɔ́　kəthʊ́ɩ　kɨ̄
もの　仏教徒　一　～人　(題)　愚かな　大変
「仏教徒のほうは大変愚かだった」(025.9)

14.3　chàmwɛ̄

名詞句の前に付く。文の表す命題が、当該名詞句が指示する集合の要素すべてにとって真であることを表す。「すべての ～」。chāmwɛ̄ とも発音される。

(10) kòkəjàɴ　phàɴ　**chàmwɛ̄**　mənīchɨ̀　dʊ́　ləphá
世界　中　民族　大きな　(複)

láipərâɴ　ʔɔ́　wê　thəmā　chī　lɔ̂
新聞　ある　(強意)　もっぱら　(婉曲)　(断定)
「世界の中の大きな民族は、新聞を有しているのがふつうである」(III-07.11)

(11) lɨ̰kà khʊ́ **chàmwɛ̄** chɨ̀bòɴ [$_R$ ʔɔ́] ləphá nɔ́ dɔ̀
世界 表面 民族 いる (複) (題) (別個)

ʔɔ́ wê dè chɨ̀bòɴ dʊ́ chɨ̀bòɴ pî dài chī lɔ̂
いる (強意) (共) 民族 大きい 民族 小さい まだ (婉曲) (断定)
「世界にいるすべての民族には、大民族と小民族とがいる」(IV-01.6)

(12) **chàmwɛ̄** [$_R$ jə- θíjâ] thə̂ɴ ləphá nɔ́
1sg 知る 洞穴 (複) (題)

jə- kè làɴ lɔ̂
1sg 書く (下方) (断定)
「私が知っている洞穴はすべて挙げておいた」(V-06.58)

(13) chəphʊ́chəxā **chàmwɛ̄** ʔəθí ləphá
動物 3pl (複)

ʔɔ́ wêdá xʊ̂ɪxʊ̂ɪxàɴxàɴ nɔ́ lɔ̂
いる (強意) 平等に (のだ) (断定)
「動物たちのすべては、平等に暮らしていた」(II-02.2)

▷ chàmwɛ̄ は ʔəθí に付いている。

ごくごくまれに、chàmwɛ̄ は名詞の後に置かれることがある。

(14) thʊ́ khəmlōʊɴ **chāmwɛ̄** [$_R$ ʔɔ́] nɔ́ bá ɣɛ̂ kóɴ
鳥 民衆 いる (題) (当為) 来る 集まる

bá tàiɴ phí nàɴ phàdʊ́ nɔ́ kò nì dè lɔ̂
(当為) 作る (裨益) 宮殿 大きな (題) (毎) ～日 (毎') (断定)
「存在するすべての鳥の民衆は、集まって大宮殿を毎日作らなければならなかった」(II-02.7)

14.4 kənī

名詞句の前に付く。文の表す命題が、当該名詞句が指示する集合の要素にとってのみ真であることを表す。すなわち、「限定」を表す。「～のみ」「～だけ」。主語に付いたとき、主語の倒置が生じる。

(15) ɣɛ̂ △ **kənī** ʔəkhwâ lɔ̂
来る 男 (断定)
「男だけが来た」(001.1607)

(16) ʔɔ́ △ **kənī** ʔəmʊ́ɪ lɔ̂
いる 女 (断定)
「女しかいない」(001.1607)

(17) θàʊ　△ **kənī**　pəθí　lɔ̀　kà　ʔé
うるさい　1PL　(断定)　限る　(否)
「うるさいのは私達だけではない」(V-03.50)

(18) ʔáɴ　kʊ́　△ **kənī**　həkhwâ　lɔ̀
食べる　菓子　男　(断定)
「男だけが菓子を食べた」(001.1607)

(19) hə̀　jò　ʔáɴ　**kənī**　kʊ́　lɔ̀
人　この　食べる　菓子　(断定)
「この人は菓子ばかり食べている」(001.1607)

(20) lɔ̀　**kənī**　phlòoɴ　chəkhlàiɴ　lɔ̀
語る　カレン　言葉　(断定)
「カレン語だけを話している」(001.1607)

kənī が前置された名詞句の後に、一般助詞の θí や má が置かれると、「～でさえ」という意味を強調する。

(21) **kənī**　θéiɴlá　θɛ̀　θí　ʔəjôɴ　jî　ɣòɴ |
木の葉　(複)　(類似)　色　緑色の　(継起)

ʔáɴlɛ̀　tháɴ　θà　lé　ʔəbàɴ　θí　wê　dài　lɔ̀
変える　(完成)　(自発)　(場)　黄色　できる　(強意)　まだ　(断定)
「木の葉でさえ、緑色だったのが黄色に変化することができるのだ」(V-01.36)

(22) **kənī**　jò　θí　má　ʔəwê　báθà　dài　ʔé
これ　(類似)　～さえ　3se　気に入る　まだ　(否)
「それにもかかわらず彼はまだ気に入らないようだ」(001.1608)

14.5　kəjɛ̄

名詞句の前に付く。kənī と同様、「限定」を表す。「～のみ」「～だけ」。やはり、主語に付いたとき、主語の倒置が生じる。kəjɛ̄ と kənī は、意味と統語的な振る舞いが似ている。どのような違いがあるのかは今のところ分からない。

(23) lé　chəʔə́ɯɪɴ　kàijài　làɴphɨ́　ʔəphɔ̀ɴ　nɔ́
(場)　雲　綿　低い　中　(題)

ʔɔ́　wêdá　△ **kəjɛ̄**　thîphlóʊɴphʊ́　nɔ́　lɔ̀
ある　(強意)　水滴　(のだ)　(断定)
「低い綿雲の中には、水滴しか存在しない」

(24) nī　ʔáɴ　θâ　wê　**kəjɛ̄**　khlài
取る　食べる　(新局)　(強意)　亀

dè　thèɪnthòʊɴ　θí　láʊkhlà　nɔ́　lɔ̂
(列挙)　鰻　(複)　全部　(のだ)　(断定)
「(人間達は) 亀と鰻だけを全部取って食べてしまった」(III-15.37)

(25) cháiphʊ́chā　θíləphá　mə-　θíjâ　làɴ　wê　**kəjɛ̄**　[$_R$ bá
農民　(複)　(非現)　知る　(内方)　(強意)　(当為)

θə́ɯɪɴ　ʔán　bʊ́ɪ]　ʔəɣāɪɴcóɴ　lɔ̂　θí　càibò ...
植える　食べる　稲　事柄　(断定)　(類似)　(条件)
「農民が、稲を植えて生活することしか知らなかったならば...」(IV-09.5)

kənī と同様、kənī が前置された名詞句の後に、一般助詞の θí や má が置かれると、「～でさえ」という意味を強調する。

(26) **kəjɛ̄**　chənə̂ɴ　pənā　θɛ̀　θí　má
牛　水牛　(複)　(類似)　～さえ

hə-　ʔánmə̂ɴ　hə-　dʊ́　pjáʊ　dài
1pl　使役する　1pl　叩く　(専念)　まだ
「(人間は) 牛や水牛でさえ使役したり叩いて働かせたりするのだ」(IV-04.80)

14.6　láʊdè

名詞句の前に付く。後に名詞句を列挙し、文の表す命題が、列挙された名詞句の指示対象すべてにとって真であることを表す。「～のうちのすべて」「～の全部」。láʊ は「尽きる」という意味の動詞 láʊ、dè は側置助詞の dè に由来する。

(27) **láʊdè**　thʊ́chànchî　thwɛ̄phóʊɴkhà　θí
(鳥の名)　(鳥の名)　(複)

bá　ɣɛ̂　wê　kò　ɣà　dè　chī　lɔ̂
(当為)　来る　(強意)　(毎)　～人　(毎')　(婉曲)　(断定)
「チャンチ鳥もトエポンカ鳥も、みな、来なければならなかった」(II-02.8)

▷ ここでは人間を数える助数名詞 ɣà が使われている。これは、物語の中で鳥が擬人化されているからである。本来、鳥を数える助数名詞は béɪɴ である。

(28) **láʊdè**　chəphʊ́chəxā　chəphʊ́chəbòɴ　θíləphá
動物　植物　(複)

bá　ʔánɴ　wê　thîlá　nɔ́　thəmā　lɔ̂
(当為)　食べる　(強意)　塩　(題)　もっぱら　(断定)
「(どの) 動物も植物も、塩を養分としなければならないことが普通である」(II-03.8)

14.7　dè

名詞句の前に付く。列挙を表す。dē とも発音される。道具や随伴者などを表す側置助詞の dè (第 11 章) や、理由や即時性を表す接続詞の dè (第 21 章) と同源である。

(29) thwíwūθâɴ　**dè**　kəchâɴ
狼　～と　象
「狼と象」(I-09.1)

(30) ʔəwêdá　**dè**　phʊ́　**dè**　mâ　θíləphá　màdòɴ　ʔáɴdòɴ　wê
3se　(列挙)　子　(列挙)　妻　(複)　真似て作る　真似て食べる　(強意)

ʔə-　wɛ̄khwâ　chəʔáɴchəʔɔ̀　nɔ́　ʔəkhʊ́còɴ ...
3sg　兄　食べ物　(のだ)　(理由)
「彼と子供と妻は、彼の兄の食べ物を真似て、作って食べたので...」(II-14.25)

14.8　指示の働きをする jò, nɔ́, ʔò

jò, nɔ́, ʔò の三つは指示の働きをする。すべて名詞句の後に付く。これらは意味的に関連があるのでここでまとめて論じる。これらの助詞には三つの用法がある。すなわち、現場指示 (deictic reference)、文脈指示 (anaphoric reference)、遠近表示 (distance representation) の三つの用法である。三つの助詞のうち ʔò には文脈指示の用法がない。次の表を参照せよ。yes はその用法が存在することを示し、no は存在しないことを示す。

	現場指示	文脈指示	遠近表示
jò	yes	yes	yes
nɔ́	yes	yes	yes
ʔò	yes	no	yes

現場指示の用法は、話し手が目に見えるものを直接指し示す用法である。次の例における jò, nɔ́, ʔò を見よ。

(31) phlòʊɴ　{ **jò** / **nɔ́** / **ʔò** }　thɔ̂　mā
人　高い　(非常)
「{ この/その (あの)/あの } 人は背が高い」

現場指示の用法においては、jò は指示対象が話し手の領域にあることを表す。一方、nɔ́ は指示対象が話し手の領域の外にあることを表す。最後の ʔò は、指示対象が話し手の領域の外にあることを表すという点で nɔ́ と共通しているのだが、指示対象が話し手から非常に遠い場所にある場合にのみ、遠さを強調するために用いられる。ʔò が示す範囲は nɔ́ に含まれているので、ʔò を nɔ́ に置き換えても意味的な齟齬は生じない。

文脈指示の用法は、談話の中に既に出てきた名詞を指し示す用法である。

(32) lʊ́ɪ　ʔəwī　dáʔò　ʔəkhwâ　ʔɔ́　lə-　ɣà
(場)　以前　(過去)　男　いる　一　～人
「昔男が 1 人いた」

phlòʊɴ　**jò** / **nɔ́**　thɔ̂　mā
人　高い　MA
「{ この/その } 人は背が高かった」

文脈指示の用法を持つのは、jò と nɔ́ の二つのみである。しかし、この二つの文脈指示の用法における差異は今のところ明らかでない。

現場指示の用法と文脈指示の用法におけるこれら助詞の役割は、名詞句が指示し得る対象物の集合の中からある部分集合を選び出すことである。ところが、これらの助詞がこの目的のために使われているのではない場合がある。

(33) ɣɛ̂　lé　cəpâɴ　**jò**
来る　(場)　日本
「日本に来てください」

(34) ɣɛ̂　lé　cəpâɴ　**ʔò**
来る　(場)　日本
「日本に来てください」

ここでの jò と ʔò の役割は、ある集合の中の部分を特定することではなく、「日本」が発話地点から近いところに存在するか遠いところに存在するかということを表すことにある。このような働きを遠近表示と呼ぶことにする。(33) では、話者は日本でこの文を発話しているが、(34) では、話者は日本とは別の場所で発話しているのである。遠近表示用法における三つの助詞の使い分けは、現場指示用法における使い分けと同じである。

以下に、jò、nɔ́、ʔò の順に様々な例を見ていく。

14.8.1　jò

まず、現場指示の例を挙げる。

(35) pə̀　ləphá　**jò**　mwɛ̄　pɔ̂　ʔəjáʊ　dɔ́　tháʊ　lɛ̂
人　(複)　(繋)　誰　年齢　大きい　(最上)　(疑)
「この人たち (の中で) は、誰が一番年上か」(III-10.9)

(36) chəmɯ́ɪ　lə-　ɣà　**jò**　jə-　jʊ̄
女　一　～人　1sg　見る

bádòɴ　phlòʊɴmɯ́ɪ　lɔ̂
似ている　カレンの女　(断定)
「この女性は見たところカレンの女性のようだ」(IV-04.48)

(37) lái　lə-　béiɴ　**jò**　ɣɛ̂　lé　láitàʊ　khɔ̂　ʔò
手紙　一　～枚　来る　(場)　郵便局　(対比)　(遠方)
「この手紙は郵便局から送られてきました」(IV-04.364)

次に文脈指示の例を挙げる。

(38) lənìnɔ́　báʔəthɔ̀　chəphàichəmà　làɴphōɴ　nɔ́tā |
先日　都合良く　仕事　開く　(前提)

lì　thánɴ　cáinkwè　mèinɴ　lé
行く　(上方)　遊ぶ　(自然)　(場)

təwânɴ　khʊ́thí　phʊ̂bɨ̀　ʔɔ́　ʔò　lɔ̂.
村　頂門　大叔父　ところ　(遠方)　(断定)

phʊ̂bɨ̀　**jò**　mwɛ̄　wê　lé　mʊ̄thài　khɔ̂ |　təphʊ̂wɛ̄　dè　phî |
大叔父　(繋)　(強意)　(強調)　母方　側　兄弟　(共)　祖父

ʔə-　pî　tháʊ　nɔ́　lɔ̂
(名詞化)　小さい　(最上)　(のだ)　(断定)
「先日、都合良い時間に仕事が終わり、村はずれにある大叔父のところに遊びに行った。この大叔父は、母方で、祖父の兄弟であり、末っ子である」(V-02.4)

次に遠近表示の例を挙げる。

(39) nə-　phlɛ̄　khlî　lé　ʔəméjâ　nɔ́.
2sg　漕ぐ　舟　(場)　前

jə-　mə-　phlɛ̄　lé　ʔəlāɴkhâiɴ　**jò**　lɔ̂
2sg　(非現)　漕ぐ　(場)　後　(断定)
「君は前で漕ぎなさい。私は後で漕ぐから」(I-06.23)

(40) ʔənâɴchā　mə-　ɣɔ̂ɴ　nə-　ɣà　**jò** |
彼女自身　(非現)　聞こえる　2sg　～人

dè　nə-　lʊ̄ɪ　θɔ̂
(理由)　2sg　声　音がする
「彼女が君の声を聞いてしまうよ、声が大きいのだから」(IV-04.74)

(41) ʔɔ́khò　thàiɴ　wɛ̄cɔ̀　lé　təwânɴ　**jò**
待つ　(返答)　兄　(場)　村
「私を村で待っていてくれ」(V-01.21)

▷ 恋人同士が別れる場面。男がヤンゴンに行ってしまう。「村」は、今、二人が住んでいる村である。この文から jò を取ってしまってもまったく問題がない。

14.8.2　nɔ́

次に nɔ́ に移る。まず、現場指示の例を挙げる。

(42) chəmʊ́ɪ　lə-　ɣà　**nɔ́**　nə-　jʊ̄　ɣì　chī　ʁâ
女　一　～人　2sg　見る　美しい　(婉曲)　(疑)
「あの女はお前が見て美しいと思うか?」(IV-04.53)

(43) tháɯɴ　lə-　phlóʊɴ　**nɔ́**　mwɛ̄　ʔəwê　chà　lɔ̀
袋　一　～個　(繋)　3sg　CHə　(断定)
「その袋は彼のものです」(001.942)

(44) phlòʊɴmúɯ　lə-　ɣà　**nɔ́**　chəkhlàiɴ　ʔá　mā
女性　一　～人　言葉　多い　(非常)
「あの女は口数が多い」(001.975)

(45) dài　phɔ̀　**nɔ́**
髪に飾る　花
「あの花を髪に飾りなさい」(001.1226)

(46) phlòʊɴ　**nɔ́**　nə-　pōɴ　xì
人　2sg　つきあう　(禁止)
「あの人とはつきあうな」(001.3085)

次に文脈指示の例を挙げる。

(47) ʔəkhâ　**nɔ́**　jə-　ʔánɴ　báθà　mì　ʔé
時　1sg　食べる　(欲求)　ご飯　(否)
「その時、私はご飯を食べたくなかった」

(48) kəjāɴ　chəkhlàiɴ　phjā　**nɔ́**　bá　lɔ̀　ʔé
思うに　言葉　もの　(当為)　語る　(否)
「思うに、そのようなことは言う必要がない」(002.756)

次に遠近表示の例を挙げる。

(49) nə-　phlɛ̄　khlî　lé　ʔəméjâ　**nɔ́** .
2sg　漕ぐ　舟　(場)　前

jə-　mə-　phlɛ̄　lé　ʔəlāɴkhâiɴ　jò　lɔ̀　(=39)
2sg　(非現)　漕ぐ　(場)　後　(断定)
「君は前で漕ぎなさい。私は後で漕ぐから」(I-06.23)

14.8.3　ʔò

次に ʔò に移る。まず、現場指示の例を挙げる。

(50) jə-　mî　lé　khàʊkhʊ́　**ʔò**
1sg　寝る　(場)　ベッド
「私はあのベッドの上で寝る」(001.1829)

次に遠近表示の例を挙げる。

(51) ʔəwê　thòɴ　wê　lʉ́ʉ　lâiɴ　kháɴthài　ʔàiθài　phjā　**ʔò**
3sg　着く　(強意)　(場)　山　ふもと　修験者　道場
「彼は山のふもとの修験者の道場に到着した」(006.15)

(52) mə-　θə́ɯɴ　thánɴ　thàiɴ　phjā　lé　chəlāɴ　θâɴ　**ʔò**
(非現)　建てる　(完成)　(再度)　僧院　(場)　場所　新しい
「新しい場所に僧院を建てます」(010.8)

(53) jə-　thàiɴ　kəcɔ́　klòɴ　thədàɴ
1sg　帰る　喜捨する　パゴダ　傘

lʉ́ʉ　jə-　təwâɴ　klàʊthâɴ　**ʔò**　chī　lɔ̂
(場)　1sg　村　(村の名)　(婉曲)　(断定)
「私は自分の村であるクラオトゥンに帰ってパゴダの傘を喜捨しました」(012.29)

(54) ʔəwêdá　lì　chōɴ　làɴ　lé　thwí　ɣànthài　**ʔò**
3se　行く　とまる　(下方)　(場)　犬　傍ら
「彼 (=鳥) は犬のかたわらに下りていってとまった」(I-01.23)

(55) ləjáiləmɔ̄　θwíwɔ̀　nɔ́　ɣɛ̂　thàiɴ　làɴ
間もなく　(人名)　(題)　来る　帰る　(下方)

lé　kəbàɴ　ʔəphâɴkhʉ́　lə-　thâɴ　**ʔò**
(場)　船　上　一　～階
「間もなくトゥイーウォーは客船の 1 階に下りてきた」(IV-04.21)

▷ これは短編小説の 1 文である。もしこの文の発話者が客船の 1 階にいたのならば、ʔò ではなく jò が使われるところである。ʔò が使われているのは、これが地の文であり、小説の書き手はその場にいないからである。

(56) lé　jə-　nāɴphlòɴ　ʔəkhâ　**ʔò**　nɛ̀
(場)　1sg　独身　時　NE
「私が独身のときにね」(004.346)

14.8.4　名詞化された形 ʔəjò, ʔənɔ́, ʔəʔò

jò, nɔ́, ʔò にはそれぞれ、接頭辞 ʔə- が付いて名詞化した ʔəjò, ʔənɔ́, ʔəʔò という、意味的に対応する名詞が存在する。これらは名詞なので、本来ならこの章で扱うべきではないが、jò, nɔ́, ʔò と共通の性質を持つのでここで述べておく。

名詞化された形は、次のように文中において名詞句として機能することができる。

(57) **ʔəjò**　chənɔ́　lɛ̂
これ　何　(疑)
「これは何ですか?」

このような名詞句は、他の名詞句 (下の例では phlòʊɴ) の後に置かれることがある。

(58) phlòʊɴ **ʔəjò** pɔ̀ lɛ̂
人 これ 誰 (疑)
「この人は誰ですか?」

名詞化された形が後置された phlòʊɴ ʔəjò と、名詞化されていない形が後置された phlòʊɴ jò とでは、意味的にあまり違いはないようである。

名詞化された形式には遠近表示の用法はない。表にまとめると次のとおり。

	現場指示	文脈指示	遠近表示
ʔəjò	yes	yes	no
ʔənɔ́	yes	yes	no
ʔəʔò	yes	no	no

まず、現場指示の例を挙げる。ʔəjò, ʔənɔ́, ʔəʔò の違いは jò, nɔ́, ʔò の違いと同様である。すなわち、ʔəjò は指示対象が話し手の領域にあることを表す。一方、ʔənɔ́ は指示対象が話し手の領域の外にあることを表す。ʔəʔò は、指示対象が話し手の領域の外にあり、かつ指示対象が話し手から非常に遠い場所にあることを表す。

(59) { **ʔəjò** / **ʔənɔ́** / **ʔəʔò** } chənɔ́ lɛ̂
何 (疑)
「{ これ/それ/あれ } は何ですか?」

次に文脈指示の例を挙げる。文脈指示の用法は ʔəjò と ʔənɔ́ にのみ見られる。

(60) A: cɛ́ ɣàɣòɴ khwái jàʊ
機械 壊れる (徹底) (完)
「機械が壊れてしまった」

B: { **ʔəjò** / **ʔənɔ́** } ká chī
難しい (婉曲)
「それは問題だ」

14.9 dáʔò

名詞句の後に付いて、過去を表す。時間についての概念を表す名詞は、基本的には側置助詞の lé によって導入されるか、何も伴わずに文中に置かれる。しかしそれだけでは、その時間と発話時点との相対的関係が分からない可能性がある。dáʔò には、発話時点より以前ということを明示する働きがある。

(61) lé thəlɤ̂ɴ khwái làmá láʊ **dáʔò**
(場) 過ぎる (徹底) 3 月 末

jə- cáiɴ lánɴ khwái chəmà jàʊ
1sg 出る (外方) (徹底) 仕事 (完)
「この前の 3 月に私は仕事を辞めました」(012.18)

(62) lʉ́ʉ　ʔəwī　**dáʔò**　nɛ̀　hələmjā　ʔɔ́　lə-　ɣà　dʉ̀ʉ
(場)　以前　NE　猟師　いる　一　～人　DU
「昔、猟師がひとりいたんですよ」(006.10)

(63) lə-　phɔ̂ɴ　**dáʔò**　lé　kò　phàdʉ́　[$_R$ ʔɔ́　lə-　kò]
一　～回　(場)　島　大きい　ある　一　島

ʔəphɔ̀ɴ　ʔò　kəchâɴ　phâthī　ʔɔ́　wêdá　lə-　dʉ̀ʉ　lɔ̂
中　(遠方)　象　オス　いる　(強意)　一　～匹　(断定)
「かつて、ある大きな島に、オスの象が 1 頭住んでいた」(I-09.3)

(64) ɣɛ̂　thàiɴ　thòɴ　dòʊɴ　ləkōʊɴ　lé
来る　帰る　着く　町　(地名)　(場)

ləchînī　θâɴ　lə-　nì　**dáʔò**　chī　lɔ̂
十二　日　一　～日　(婉曲)　(断定)
「12 日にヤンゴンに帰ってきました」(015.6)

14.10　jàʊ

名詞句の後に付く。何らかの事象が、過去のある時点から基準時点にわたって継続することを表す。「ずっと」。

(65) lé　mʉ̀ʉɣá　**jàʊ**　jə-　thòɴ　ɣéiɴ　phɔ̂ɴ　ʔé
(場)　昨日　1sg　着く　家　～回　(否)
「私は昨日からずっと家に帰っていない」(001.2085)

(66) thɔ̂　wɛ̀　lʉ́ʉ　jə-　mʊ̄　ʔòɴ　ʔò　**jàʊ**
高い　(備え)　(場)　1sg　母　腹　(遠方)
「(私の鼻は) 母の腹の中にいたときからずっと高いのだ」(006.28)

(67) ʔɔ̀　θài　θí　lé　ɣàɴ　pî　khâ　dáʔò　**jàʊ**
飲む　酒　できる　(場)　姿　小さい　時　(過去)
「(カレン人は) 小さい頃からずっと酒がのめるのだ」(V-03.5)

(68) təkhɔ̂lé　[$_C$ cáiɴ　làɴ　tɛ́kəθò]　ʔò　**jàʊ**　làɴphà
～から　出る　(下方)　大学　(遠方)　別れる
「大学を出てからずっと離ればなれだった」(V-03.37)

14.11　複数を表す ləphá, θí, θɛ̀

複数を表す助詞には、基本的には ləphá, θí, θɛ̀ の三つがある。すべて名詞句の後に付く。これらの使い分けの原理は、実は今のところよく分かっていない。しかし、名詞の複数性を表すときの方法として、次の 3 種類が確認できている。一つ目は次の例のようなもので、名詞句の指示対象と同類のものが複数あることを表す方法である。これを A(+A+A+...) で表す。

(69) phlòʊɴ　**θɛ̀**
カレン人
「カレン人たち」

二つ目は次のようなもので、別々の名詞句を列挙し、それらが全体として複数であることを表す方法である。これを A+B+C+... で表す。

(70) phlòʊɴchɨ̀　dè　pəjàɴchɨ̀　**θɛ̀**
カレン民族　(列挙)　ビルマ民族
「カレン民族とビルマ民族」

三つ目は次のようなもので、名詞句を一つだけ挙げ、それに複数を表す助詞をつけることによって、他の指示対象の存在を暗示する方法である。これを A(+B+C+...) で表す。

(71) cɔ̀ʔɛ́phlòʊɴ　**θɛ̀**
(人名)
「チョーエープロン達」

筆者が集めた資料の中では、三つ目の A(+B+C+...) は、θɛ̀ の場合にしか見つかっていない。他の助詞も A(+B+C+...) を表し得るのかはまだ分からない。

また、もう一つ分かっていることは、θí が比較的かしこまった場面で用いられることが多いのに対して、θɛ̀ が格式張らない話し言葉や親しい者同士の手紙のやりとりなどで用いられることが多いということである。ləphá はどちらの場合にも用いられる。

以下に具体的な用例を見ていく。

14.11.1　ləphá

まず、ləphá を見る。A(+A+A+...) の例を挙げる。

(72) phlòʊɴ　thîkhāɴkənâɴ　**ləphá**
人　カレン州
「カレン州の人たち」(008.11)

(73) nə-　thìθò　**ləphá**
2sg　友人
「あなたの友人たち」(016.33)

(74) [$_R$ ʔɔ́　xwà　kháɴthài]　ʔəmáphàdʊ́　**ləphá**
いる　王　下　大臣
「王に仕える大臣たち」(III-08.4)

次に A+B+C+... の例を挙げる。

(75) jʊ̀　cəxwà　dè　pəjàɴ　cəxwà　**ləphá**
モン　王　(列挙)　ビルマ　王
「モン王とビルマ王」(III-08.22)

(76) khlài　dè　　thèɪnthòʊɴ　**ləphá**
亀　　(列挙)　鰻
「亀と鰻」(III-15.11)

▷ この例で「亀」と「鰻」は、物語の登場人物を表す。つまり固有名詞的に使われている。

14.11.2　θí

次に θí に移る。まず、A(+A+A+...) の例を挙げる。

(77) phʊ́dìprí　**θí**
若者
「若者たち」(006.105)

(78) càθɔ̂ɴ　**θí**
人間
「人間たち」(I-04.9)

(79) thɛ̂　**θí**　khrā　**θí**
鋤　　鍬
「鋤 (すき) や鍬 (くわ)」(II-04.14)

(80) thî　**θí**
水
「水」(II-09.14)

▷ このように、「水」のような物質を表す名詞に複数を表す助詞がつくことがある。

次に A+B+C+... の例を挙げる。

(81) cɔ̀θàɕʊ́ʉ　dè　　cɔ̀phɔ̂ʔwà　**θí**
(人名)　(列挙)　(人名)
「チョーターシューとチョーポーワー」(II-06.2)

(82) klà　dè　　thʊ́ɣʉ́　**θí**
烏　(列挙)　梟
「烏と梟」(I-03.3)

▷ この例では、鳥の種類の名が、物語の中で固有名詞として使われている。

14.11.3　θɛ̀

最後に θɛ̀ を見る。まず、A(+A+A+...) の例を挙げる。

(83) nə-　chəphóchəlì　**θɛ̀**
2sg　荷物
「あなたの荷物」(015.7)

(84) həphlòʊɴphʊ́　**θɛ̀**
カレン人
「カレン人たち」(016.17)

(85) còɴθà　θɛ̀　jə-　phʊ̄ʊ̄khwâ　**θɛ̀**
学生　1sg　弟
「学生たちと私の弟たち」(017.25)

(86) chì　xāxòɴ　**θɛ̀**
民族　他のもの
「他の諸々の民族」(IV-01.12)

次に A+B+C+... の例を挙げる。

(87) nə-　phʊ́mʊ́ɪ　nə-　mâ　**θɛ̀**
2sg　娘　2sg　妻
「あなたの娘さんと奥さん」(012.5)

(88) chərâ　thálòʊɴ　dè　ʔə-　mâ　**θɛ̀**
先生　(人名)　(列挙)　3sg　妻
「ターロン先生とその奥様」(012.30)

(89) kòtəràikənâɴ　mìpətìkənâɴ　lâtəkɔ̀θənîkənâɴ　**θɛ̀**
(地名)　(地名)　(地名)
「コータライ地区、ミーパティー地区、ラータコータニ地区」(III-17.11)

次に A(+B+C+...) の例を挙げる。この用法が見つかっているのは θɛ̀ のみである

(90) cɔ̀láiθɛ̂iɴ　**θɛ̀**
(人名)
「チョーライテインたち」(008.14)

θɛ̀ の重要な用法に、概数を表す用法がある。この用法の場合、格式張った文体においても θɛ̀ は使われる。概数は、名詞句で明示された数値以外にも候補がいくつかあるという点で、複数性と関連している。したがって、本稿では、概数を表す θɛ̀ も、複数を表す θɛ̀ と同じ語と見なす。

(91) [$_R$ mʊ̄ʊ̄mé　xāiɴ　làɴ]　lə-　nādì　**θɛ̀**　nɔ́
太陽　傾く　(下方)　一　～時　(題)

kəbàɴ　cáiɴ　thánɴ　lɔ̂
船　出る　(外方)　(断定)
「午後の 1 時頃に船が出る」(IV-04.16)

(92) bàʊ　ʁáɴ　lə-　nàrì　**θɛ̀**　ʁɔ́ ...
近い　(変化)　一　～時間　pl　NO
「約 1 時間近く経ったころ...」(024.57)

14.11.4　その他の複数を表す助詞

複数を表す助詞としては、上に挙げた三つ以外にも、θíləphá, θɛ̀ləphá という助詞が使われる。前者は θí と ləphá を組み合わせたもの、後者は θɛ̀ と ləphá を組み合わせたものである。やはり、前者は格式張った場面、後者はくだけた場面で使われることが多いようである。どちらとも、A(+A+A+...) を表す用法と A+B+C+... を表す用法のみ見つかっている。

14.11.4.1 θíləphá

まず、A(+A+A+...) の例を挙げる。

(93) ʔəxā　**θíləphá**
ばい菌
「ばい菌」(II-13.15)

(94) kəbàɴjʉ̀ʉchā　**θíləphá**
パイロット
「パイロットたち」(III-05.54)

(95) thʉ́phʉ́　**θíləphá**
小鳥
「小鳥たち」(IV-05.18)

(96) cháiphʉ́chā　**θíləphá**
農民
「農民たち」(IV-09.5)

次に A+B+C+... の例を挙げる。

(97) thîlákhá　thîláʔʉ́ʉ　dè　thîláθéɪndɔ́　**θíləphá**
(塩の種類)　(塩の種類)　(列挙)　(塩の種類)
「苦塩 (?)、腐り塩 (?)、そしてテインドー塩」(II-03.2)

(98) bʊ́ɯ déiɴ bʊ́ɯkhɛ̂ bwɛ̀ɣáɴkhʊ́ bɛ̀bwɛ̀ rɔ̀bà pìlɔ̄ **θíləphá**
米 胡麻 玉蜀黍 シカクマメ 綿花 ゴム タピオカ
「米、胡麻、玉蜀黍、シカクマメ、綿花、ゴム、タピオカ」(II-07.11)

(99) ʔəljāwɔ̀lâɕā ʔəljājîlâ ʔəljāʔəjî ʔəljāʔəbàɴ
紫色 藍色 緑色 黄色

ʔəljābàɴɕā ʔəljāʔəwɔ̀ **θíləphá**
橙色 赤色
「紫色、藍色、緑色、黄色、橙色、赤色」(II-10.14)

(100) nʊ́thūɯ nʊ́wá nʊ́thái phàɴkhwâiɴkhwàɴ **θíləphá**
串 しゃもじ 竹鋏 柄杓
「串、しゃもじ、竹鋏、柄杓」(III-16.17)

14.11.4.2 θɛ̀ləphá

まず、A(+A+A+...) の例を挙げる。

(101) phlòʊɴchɨ̀phʊ́ thʊ̀ɯrûɯ bóʊɴ **θɛ̀ləphá**
カレン民族 伝統 祭り
「カレンの伝統の (いろいろな) 祭り」(011.12)

(102) ʔə- phʊ́ ʔə- lì **θɛ̀ləphá**
3sg 子供 3sg 孫
「彼の子孫たち」(IV-01.12)

次に A+B+C+... の例を挙げる。

(103) nəθí chəʔáɴchəʔɔ̀ dè pòʊɴ **θɛ̀ləphá**
2pl 食べ物 (列挙) 写真 pl
「あなた方の食べ物と写真」(011.17)

14.12 láʊ

「数詞＋助数名詞」すなわち助数名詞句の後に置かれ、その「数詞＋助数名詞」が指す物すべてということを表す。数詞は 2 以上の数を表す数詞である。動詞 láʊ「尽きる」に由来する。数詞のうち、1 の位が下降調を伴う nî「2」, θə̂ɴ「3」, xʊ̂ɯ「6」, nwê「7」 で終わる数詞は、これらの音節が助数名詞の前では中平調で発音され、nī, θə̄ɴ, xʊ̄ɯ, nwē となることは第 10 章に述べるとおりである。ところが、名詞修飾助詞 láʊ が後に現れると、これらは下降調のままで発音される。

(104) nî béiɴ **láʊ**
二 ～枚
「2 枚とも」

(105) θə̂ɴ　dɯ̀ɯ　**láʊ**
三　～匹
「3 匹とも」

(106) lī　bòɴ　**láʊ**
四　～本
「4 本とも」

(107) jɛ̄　khʊ́　**láʊ**
五　～台
「5 個とも」

(108) xɯ̂ɯ　ɣà　**láʊ**
六　～人
「6 人とも」

(109) nwê　blàɴ　**láʊ**
七　～回
「7 回とも」

(110) xó　néiɴ　**láʊ**
八　～年
「8 年間ずっと」

(111) khwī　phlóʊɴ　**láʊ**
九　～個
「9 個とも」

(112) θəɴchînî　ɣà　**láʊ**
三十二　～人
「32 人全員」

(113) həθɛ̀　nɔ́　ʔɛ́chə̂ɴ　ʔəθí　nî　ɣà　**láʊ**　lɔ̂
1pl　(題)　愛する　3PL　二　～人　(断定)
「私達は彼らを二人とも愛している」(009.34)

14.13　xāɴ

「lə-＋助数名詞」(lə- は数詞「1」) の後に置かれ、この助数名詞句が表す範囲の中で事象が生じることを表す。

(114) mə-　θíjâ　làɴ　lé　θà　phə̀ɴ　lə-　thí　**xāɴ**　lɔ̂
(非現)　知る　(内方)　(場)　心　中　一　～回　(断定)
「1 回で分かることであろう」(IV-09.3)

(115) ʔəwêdá jò cáiɴ làɴ cōɴ
3se (題) 出る (下方) 学校

dè hə̀ lə- néiɴ **xāɴ** lɔ̂
(共) 1PL 一 ～年 (断定)
「彼は、私達と同じ年に学校を卒業した」(V-03.48)

14.14 ɣì

名詞句の後に付く。任意性を表す。ɣìɣì あるいは ʔəɣì となることもある。「～であれ、～であれ」。必ず、二つの名詞を対にした形をとる。従属節標識の ɣì を参照のこと (第21章)。

(116) lənéiɴjò **ɣìɣì** nɔ̄néiɴdɔ̀ **ɣìɣì**
今年 来年

mwɛ̄ nə- ʔē khlàʊ | ʔwíθàchə̀ɴ ɣɛ̂ cáiɴkwè lāchài
(繋) 2sg (条件) 暇な どうか 来る 遊びにくる ～してください
「今年でも来年でも、あなたがもし暇なら、是非遊びに来てください」(015.21)

(117) láipərə̂ɴ lə- mèiɴ **ɣì** lə- mèiɴ **ɣì**
過ぎる 一 ～種類 一 ～種類

jʊ̄ là kò ɣà dè chài
有名な (願望) (毎) ～人 (毎') CHAI
「どの新聞であれ、みんなに読んでほしい」(III-07.21)

14.15 呼びかけを表す助詞

呼びかけとして使われた名詞 (すなわち文中の要素ではない) に付いて、その名詞が呼びかけであることを表すいくつかの助詞がある。これまでに見つかっているものを下に挙げておく。

ʁɛ̄ 呼びかけを表す助詞のうち最も普通に使われる。ʔē, ʁé, ʔé などとも発音される。

(118) phʊ́θá θí **ʁé**
子供 (複)
「子供達よ」(I-05.15)

(119) bê nɔ́ θò lɔ̂ nɛ̀ chərâ **ʔē**
(比定) それ (比定') (断定) NE 先生
「そういうことなんですよ、先生」(012.42)

ʁà　相手を非難するような意味合いがある。

(120) hə̰　lɔ̰̀　lóθà　chàchā　khlàʊ　lɔ̰̂　θʊ́　**ʁà**
1pl　語る　(相互)　ゆっくり　暇な　(断定)　友
「(そのようなことについては後で) ゆっくり話す暇があるよ、友よ」(001.1072)

chài　あらたまって重々しい口調で呼びかけるときに用いられる。

(121) phlòʊɴ　chɨ̀phʊ́　θí　kō　ɣà　dè　**chài**
カレン　民族　(複)　(毎)　～人　(毎')
「すべてのカレン民族よ」(IV-01.121)

第IV部

動詞に関連する諸問題

第15章　動詞の分類

本論文では、動詞を三つの観点から分類する。うち二つは意味的な観点からの分類であり、もう一つは統語的な観点からの分類である。意味的な観点による分類の第一は、意志動詞であるか無意志動詞であるかという意志性 (volitionality) による分類である。第二は、動態動詞であるか状態動詞であるかという語彙的アスペクト (lexical aspect) による分類である。統語的な観点からは、目的語を取り得るかどうかという点で動詞を分類する。このような三つの観点で分類する理由は、これらの分類法がポー・カレン語文法の記述において極めて有効だと考えるからである。特に、動詞連続など、動詞に関連する文法現象を記述する際に、これらの分類が重要な役割を果たす。

15.1　「意志動詞 (volitional verb)」対「無意志動詞 (unvolitional verb)」

東南アジアの言語には、動詞の表す事象が意志的に制御可能であるか制御不可能であるかということ、すなわち意志性 (volitionality) が、語彙のレベルで指定されている言語が多い。ポー・カレン語もそのような言語の一つである。意志的な制御を伴う事象を表す動詞を**意志動詞**、意志的な制御を伴わない事象を表す動詞を**無意志動詞**と呼ぶ[1]。意志動詞は、主語の指示対象の意志によって生起した事象を表す。逆に、無意志動詞は、主語の指示対象の意志によらずに生起した事象を表す。例えば、次の例の ʔánɴ は意志動詞なので、「食べる」という動作は「私」が意志的に行ったと解釈される。言い換えると、この文は「うっかり食べた」というような意味を表さない。

(1) jə-　ʔánɴ
　　1sg　食べる
　　「私は食べた」

もし「うっかり食べた」ということが言いたければ、無意志を表す動詞助詞 bá を動詞の後に付けなければならない。

(2) jə-　ʔánɴ　bá
　　1sg　食べる　(無意)
　　「私はうっかり食べた」

[1] Van Valin and LaPolla (1997) は、‘agency (動作主性)’ を動詞の logical structure (論理構造) の中に表記することを提案している。彼らの言う ‘verbs which lexicalize agency (動作主性を語彙化した動詞)’(p.119) は、本論文の意志動詞のような動詞を指していると思われる。彼らの表記法によるとこれらは、DO(x,[do’(x,[... と表記される。

一方、次の例の làɴthîphā は無意志動詞なので、「転ぶ」という事象は「私」の意志で生起したとは解釈されない。具体的には、「わざと転んだ」というような意味を表すことができない。

(3) jə-　làɴthîphā
　　1sg　転ぶ
　　「私は転んだ」

「わざと転んだ」ということが言いたければ、使役を表す助詞を用いて次のようにする必要がある。

(4) jə-　mà　làɴthîphā　làɴ　θà
　　1sg　(使役)　転ぶ　(帰的)　(再帰)
　　「私は故意に転んだ」

▷ làɴ および θà は「再帰」を表す動詞助詞。

例えば日本語で「私は転んだ」と言ったら、「わざと転んだ」のか「うっかり転んだ」のか聞き手には分からないが、ポー・カレン語の (3) の文は、「うっかり転んだ」という意味に一義的に決まってしまうのである。

本論文では、任意の動詞が意志動詞であるか無意志動詞であるかを見るためのテストとして、次の二つを考える。

一つ目は、その動詞が他の形式の助けなしに命令文になり得るかどうかのテストである。命令文になる場合は意志動詞、命令文にならない場合は無意志動詞であると判断できる。例えば、chînàɴ「座る」は次のように命令文になり得る。したがって chînàɴ は意志動詞である。

(5) chînàɴ
　　座る
　　「座れ」

一方、θî「死ぬ」は命令文にならない。したがって θî は無意志動詞である。

(6) *θî
　　死ぬ
　　(死ね)

このとき、「他の形式の助けなしに」という点に注意していただきたい。一部の動詞助詞には、無意志動詞を命令文として機能させる働きがある。例えば「願望」を表す動詞助詞 lā「～であれ」にはそのような働きがあり、この動詞助詞を θî に付けると、その全体は命令文になり得る。

(7) θî　lā
　　死ぬ　(願望)
　　「死ね」

したがって、このテストを用いるときには、そのままの形で命令文になるかどうかを見なければならない。本論文では動詞句などの構造体が意志動詞的であるか無意志動詞的であるかを考えることがある。このような場合も、その構造体そのままの形で命令文になるかどうかを考えて意志性を判断する。

二つ目は、使役を表す動詞助詞の mà を付けることができるかどうかのテストである。動詞助詞 mà を付けることができなければ意志動詞、付けることができれば無意志動詞である。例えば、上で見た chînàɴ は、mà を付けることができないので、意志動詞である。

(8) *mà chînàɴ
(使役) 座る

一方、θî は、mà を付けることができるので、無意志動詞である。

(9) mà θî
(使役) 死ぬ
「殺す」

使役を表す動詞助詞 mà の振る舞いについては、第 18 章および第 28 章を参照していただきたい。

さて、動詞の意志性を見るテストとして上記二つを設定した場合、次のような問題が生じる。それは、この二つのテストが食い違いを示すことがあるということである。食い違いは、第一のテストでは意志動詞、第二のテストでは無意志動詞という結果がでるという形で現れる。

例えば、動詞 nī「笑う」は、命令文になり得るので、このテストによれば意志動詞である。

(10) nī
笑う
「笑え」

ところが、動詞助詞 mà を付けることもできるので、このテストによれば無意志動詞ということになる。

(11) mà nī
(使役) 笑う
「笑わせる」

この問題はどのように解決するべきだろうか。本論文では、この nī のような場合、意志動詞としても無意志動詞としても使えるのだと解釈する。実際、次の文を見ただけでは、「私」が「笑おうとして笑った」のか「つい笑ってしまった」のかは分からない。

(12) jə- nī
1sg 笑う
「私は笑った」

しかし、このような意志動詞としても無意志動詞としても使える動詞は、全体から見ると少数であり、lì「行く」や chîthə́ɯɪɴ「立つ」のような移動や体勢を表す動詞と、上述の nī のような生理現象を表す動詞に限られる。

15.2　「動態動詞 (active verb)」対「状態動詞 (stative verb)」

動作や、状態の変化などを表す動詞を**動態動詞**、状態を表す動詞を**状態動詞**と呼ぶ。

動態動詞と状態動詞は、副詞の phléphlɛ́「速く (fast); 早く (early)」または xɛ̀xɛ̀「ゆっくり (slowly); 遅れて (late)」で修飾できるかどうかによって区別することができる。phléphlɛ́「速く」あるいは xɛ̀xɛ̀「ゆっくり」で修飾することができれば動態動詞、修飾することができなければ状態動詞である。

例えば、ɣàɣòɴ「壊れる」は、どちらの副詞によっても修飾することができる。したがって動態動詞である。

(13) ɣàɣòɴ　phléphlɛ́ / xɛ̀xɛ̀
　　壊れる　速く / ゆっくり
　　「速く (早く) 壊れる/ゆっくり (遅れて) 壊れる」

逆に、khō「暑い」は、どちらの副詞によっても修飾することができない。したがって状態動詞である。

(14) *khō　phléphlɛ́ / xɛ̀xɛ̀
　　暑い　速く / ゆっくり

phléphlɛ́ も xɛ̀xɛ̀ も、動作や変化の速度が速いか遅いかということ、および、基準となる時点から事象が生起するまでの時間が長いか短いかということの両方を表すことができる。すなわち、それぞれ、英語で表せば fast と early が表す意味の両方、slowly と late が表す意味の両方を表すことができる。上の (13) は、このどちらの意味にも解釈することができる。しかし、動詞の表す事象によっては、fast や slowly の意味に取れず、early や late の意味にしか取れないものがある。例えば、動態動詞 ʔɔ́xáʊ「結婚する」が表す事象は、「結婚した状態」に入ることを表す。「結婚した状態」は、何らかの社会的手続きを取ることによって瞬時に始まるわけだから、この状態の変化を内側から見て速度を論じることはできない。そのため、ʔɔ́xáʊ phléphlɛ́ は、early の意味にしか取ることができないし、ʔɔ́xáʊ xɛ̀xɛ̀ も late の意味にしか取ることができない。いずれの意味に取るにせよ、状態動詞の場合にこの二つの副詞を用いることはできないから、テストとしては問題がない。

動態動詞を ‘fast’ や ‘slowly’ のような意味を表す副詞で修飾することができるのは、動態動詞の表す事象が、その内側に、速度によって捉えることのできる特徴、言い換えれば何らかの動きを含んでいるからにほかならない。状態動詞の表す事象は、何の変化も含まないから、これらの副詞で修飾することができないのである。上の ʔɔ́xáʊ のような、‘early’ や ‘late’ の意味でのみ解釈可能なケースの場合は、動態動詞の表す事象は開始の時間が明確だからこそ、これらの副詞で修飾することができるのだろう。逆に、状態動詞が表す事象の場合には開始の時間が明確ではないとポー・カレン語では捉えられるため、early や late の意味でさえ解釈が不可能なのだろう。なお、状態動詞が表す事象を動的に捉えたい場合には、状態の変化を表す動詞助詞の thánɴ あるいは làɴ を状態動詞の後に付ければ良い。

(15) máʊ　thánɴ　phléphlɛ́
　　快適な　(変化)　速く
　　「速く快適になる」

tháɴ を付けるか làɴ を付けるかは、動詞によって決まっている。この二つの動詞助詞については、第 18 章を参照していただきたい。

ところで、動詞の中には、動態動詞としても状態動詞としても用いることができると考えられるものがある。それは存在を表す ʔɔ́「いる、ある」である。意志性の観点から見ると、ʔɔ́ は命令文としても使えるし、使役の助詞 mà を付けることもできるから、意志動詞としても無意志動詞としても用いられる動詞である。

(16) ʔɔ́
いる
「いよ」

(17) mà　　ʔɔ́
(使役)　ある
「出現させる」

これらに副詞 xɛ̀xɛ̀ を付けてみると、後者の場合のみ容認されない文ができる。

(18) ʔɔ́　　xɛ̀xɛ̀
いる　ゆっくり
「ゆっくりしていなさい」

(19) *mà　　ʔɔ́　　xɛ̀xɛ̀
(使役)　ある　ゆっくり

▷ xɛ̀xɛ̀ が ʔɔ́ を修飾する読みの場合に不可。xɛ̀xɛ̀ が mà ʔɔ́ 全体を修飾する読み、すなわち「存在する状態にゆっくりとする」という読みなら可。

xɛ̀xɛ̀ が共起できる場合と共起できない場合があることから、ʔɔ́ は、動態動詞と状態動詞の二つの特徴を持ち合わせていることになる。この事実は、次のように解釈できるだろう。xɛ̀xɛ̀ が命令文では共起できることから、ʔɔ́ は意志動詞のときは動態動詞である。一方、mà を用いた文には使われないことから、ʔɔ́ は無意志動詞のときは状態動詞である。

なお、ポー・カレン語の動態動詞は、他の形式の助けなしに、動詞が表す事象を二つのやり方で捉えることができる。一つは、動詞が表す事象を、時間的な幅の有無に関わらず凝縮していわば点的に捉えるやり方である。もう一つは、動詞が表す事象を時間的な幅を持ったものとして、すなわち線的に捉えるやり方である。次の文を見ていただきたい。

(20) ʔəkhâjò　ʔəwê　pɔ̄　　láiʔàʊ
今　　3se　　読む　本
「今、彼は本を読んだ / 今、彼は本を読んでいる」

この文において、「読む」という行為と「今」という時との関わりは少なくとも 2 種類に解釈することができる。ひとつは、「読む」という行為がたった今終わったという解釈であり、もうひとつは、「読む」という行為が「今」まさに継続しているという解釈である。前者の解釈は、「読む」という行為を点として捉えた場合に生じる。この場合、「読む」という行為を点として捉えているため、発話時点である「今」をまたぐことができず、そのため、事象の生起が発話時点の直前であると解釈されるのである。一方、後者の解釈は、「読む」という行為を線として捉えた場合であり、そのため、「読む」という行為が「今」という時点をまたいで継続しているという解釈が可能になるのである。

15.3　「自動詞 (intransitive verb)」対「他動詞 (transitive verb)」

最後の動詞分類は、統語的な観点によるものである。本論文では、目的語を取ることのできない動詞を自動詞、目的語を取ることのできる動詞を他動詞と呼ぶ。

例えば、動詞 ʔɔ́pwài「休む」は、決して目的語を取ることがない。したがって、自動詞である。

(21) jə-　ʔɔ́pwài
　　1sg　休む
　　「私は休んだ」

一方、次に挙げる dʊ́「殴る」と phʊ́lânɴ「与える」は、目的語を取ることができるので他動詞である。

(22) ʔəwê　dʊ́　jə̀
　　3se　殴る　1SG
　　「彼は私を殴った」

(23) ʔəwê　phʊ́lânɴ　jə̀　láiʔàʊ
　　3se　与える　1SG　本
　　「彼は私に本をくれた」

動詞が二つの目的語を取ったとき、最初の目的語を第一目的語、次の目的語を第二目的語と呼ぶことは第 4 章 4.2.2 で述べたとおりである。

自動詞であるか他動詞であるかを認定するときに問題となるのが、lì「行く」や ɣɛ̂「来る」などの移動を表す動詞である。移動を表す動詞が用いられたとき、到着点を表す名詞句は、場所を表す側置助詞 lé によって導かれる場合と、目的語として現れる場合とがある。下の (　) でくくった lé は、あってもなくてもよい。

(24) jə-　lì　(lé)　ʔə-　ɣéiɴ
　　1sg　行く　(場)　3se　家
　　「私は彼の家に行った」

(25) ʔəwê　ɣɛ̂　(lé)　jə-　ɣéiɴ
　　3se　来る　(場)　1sg　家
　　「彼は私の家に来た」

このような問題が生じる動詞は、lì「行く」と ɣɛ̂「来る」以外に、thàiɴ「帰る」、thòɴ「到着する」、thánɴ「上がる」、lànɴ「下がる」がある。

本論文では、このような移動動詞を自動詞に分類する。その理由は次の通りである。

一つは、lé が使われるという事実そのものである。普通、他動詞の目的語には助詞が付かない。まれに、次のような lé と同形の助詞が付く。

(26) ʔánɴ　**lé**　ʔəʔwí　nɔ́
　　食べる　(強調)　美味しい物　その
　　「美味しい物を食べなさい」(II-14.1)

しかし、このような lé は、目的語を特に強調するためのみに使われる。したがって本論文では、このような lé を、側置助詞ではなく名詞修飾助詞であると考える (第 14 章を参照のこと)。移動の到着点を表す名詞句に lé が付いても、強調の意味は伴わない。ちなみに、手持ちの資料[2] の中で動詞 ʔánɴ が被動者名詞句を取った例が 98 例あったが、そのうち lé が付いた例は 6 例 (6.1%) だった。しかもこの 6 例は、上の (26) の文が同一テキストの中で繰り返し出現したものであった。

二つ目は、lé が使われる頻度である。同じ資料をデータとして用い、移動の到着点を表す名詞句がどのような標示を受けているかを調べた。具体的には、lì, ɣɛ̂, thàiɴ, thòɴ の四つの動詞について、到着点を表す名詞句が現れた場合の、lé が付いているものと付いていないものの度数を数えた。移動動詞には他に thánɴ と làɴ があるが、この二つは頻繁に使われる同形の動詞助詞があり、それが移動動詞なのか動詞助詞なのかを見極めるのが難しいことがあるため、今回の調査からは省いた。調査結果は次の通りである。「lé が付いている」としたのが、到着点を表す名詞句に側置助詞 lé が付いていた度数、「lé が付いていない」としたのが、到着点を表す名詞句がそのまま動詞の後に置かれていた度数である。

	lì	ɣɛ̂	thàiɴ	thòɴ	計
lé が付いている	18	2	11	43	74 (66.7%)
lé が付いていない	8	2	4	23	37 (33.3%)
計	26	4	15	66	111 (100.0%)

全部で 111 個の到着点を表す名詞句が現れていたが、このうち lé が現れていたのは、74 個 (66.7%) で、lé が現れていない場合よりも多かった (binomial test, p=0.00057)。このように、到着点を表す名詞句には lé が付いていることのほうが多いのである。

三つ目は、連結型動詞連続における振る舞いである。第 17 章で述べるように、連結型動詞連続では、「他動詞 + 自動詞」という組み合わせがあった場合、二つの動詞の論理的主語が同一であることはなく、他動詞の論理的目的語と自動詞の論理的主語が同一になる。次に示すのがその一例である。

(27) jə- dʊ́ θî thwí
1sg 殴る 死ぬ 犬
「私は犬を殴り殺した」

ところが、「移動動詞 + 自動詞」という組み合わせでは、常に二つの動詞の論理的主語は同一である。

(28) jə- lì klí
1sg 行く 走る
「私は走りに行った」

これは、他の「自動詞 + 自動詞」という組み合わせで二つの動詞の論理的主語が同一になるのと同様である。

[2]本章の調査では、第 30 章に掲げた資料のうち、005 から 017、I-01 から I-10、II-01 から II-14、III-01 から III-17、IV-01 から IV-10、V-01 から V-06 を用いた。

(29) jə-　chînàɴ　kòɕà
　　1sg　座る　叫ぶ
　　「私は座って叫んだ」

したがって、動詞連続における移動動詞の振る舞いも自動詞的である。

以上に述べた三つの理由により、本論文では、移動を表す動詞を自動詞であると考える。第 4 章で、動詞の直後に現れた名詞句を目的語と呼ぶこと、および、他動詞の目的語は被動者という意味役割を担っていると見なすということを述べた。この定義に従うと、移動動詞は自動詞であるから、到着点を表す名詞句が側置助詞を介さずに現れていた場合、その名詞句は、目的語ではあるが被動者という意味役割は担っていないと考えることになる。

15.3.1　動詞の自他に関する補足

(1) 自他の対応

チベット・ビルマ諸語では、意味的に対応する自動詞と他動詞が音声的にも対応することがよくある。例えばビルマ語では、無声無気音で始まる自動詞と無声有気音で始まる他動詞が意味的に対をなすことが少なくない。次の pyɛʔ-「壊れる」と phyɛʔ-「壊す」はそのような対の一つである。

[Burmese]

(30) a. sɛʔbéiɴ　pyɛʔ　tɛ̀
　　自転車　壊れる　(現実法)
　　「自転車が壊れた」

　　b. ŋà　sɛʔbéiɴ　phyɛʔ　tɛ̀
　　私　自転車　壊す　(現実法)
　　「私は自転車を壊した」

ビルマ語の場合、チベット・ビルマ祖語の使役を表す *s- が現代ビルマ語の無声有気音に反映していると考えられている (西田 2003:284-5 など参照)。ポー・カレン語にはこのような自動詞と他動詞の対はない。ビルマ語でこのような対をなす場合の他動詞は、phyɛʔ-「壊す」、châ-「落とす」、chó-「折る」、kháuʔ-「曲げる」など、対象に変化をもたらすような動作を表す他動性の高い動詞である場合が多いが、ポー・カレン語にはこのような他動性の高い他動詞があまりなく、ビルマ語のこれらの他動詞が表すような事象は、使役を表す動詞助詞を用いて表す場合が多い。例えば、(30) の (a)(b) の文をポー・カレン語に訳すと次のようになる。

(31) a. cɛ́béiɴ　ɣàɣòɴ
　　自転車　壊れる
　　「自転車が壊れた」

　　b. jə-　**mà**　ɣàɣòɴ　cɛ́béiɴ
　　1sg　(使役)　壊れる　自転車
　　「私は自転車を壊した」

しかし、少数ながら、他動性の高い他動詞のみがあって、対応する自動詞が存在しないという場合がある。例えば、pàʊ「開ける」や ʔò「剥く」に対応する自動詞は存在しない。このような場合、「自然に開 (あ) く」という事象は、自発を表す動詞助詞 θà を用いた動詞複合体によって表すことができる (第 18 章 18.60 参照)。

(32) a. ʔəwê pàʊ thánɴ pàitərâɴ
3se 開ける (完成) 窓
「彼は窓を開けた」

b. pàitərâɴ pàʊ thánɴ **θà**
窓 開ける (完成) (自発)
「窓が開いた」

(2) いわゆる 'locative alternation' を起こす動詞

英語にはいわゆる 'locative alternation'(場所格交替) という現象がある。(a) He sprayed the paint on the wall. と (b) He sprayed the wall with paint. のような、場所を表す名詞句と道具を表す名詞句の両方が目的語として現れることができるという現象である。これと似た現象を引き起こす動詞がポー・カレン語にもある。現在のところ確認の取れているのは、chʉ̂ʉ「入れる」と xwí「(粉末などを) かける」と khwái「投げる」の三つである。

(33) a. ʔəwê chʉ̂ʉ làɴ thîlá lé **mì** **phàɴ**
3se 入れる (下方) 塩 (場) ご飯 中
「彼は塩をご飯の中に入れた」

b. ʔəwê chʉ̂ʉ làɴ **mì** **phàɴ** dè thîlá
3se 入れる (下方) ご飯 中 (共) 塩
「彼は塩をご飯の中に入れた」

(34) a. jə- xwí làɴ thîlá lé **mì** **phàɴ**
1sg かける (下方) 塩 (場) ご飯 中
「私は塩をご飯にかけた」

b. jə- xwí làɴ **mì** **phàɴ** dè thîlá
1sg かける (下方) ご飯 中 (共) 塩
「私は塩をご飯にかけた」

(35) a. ʔəwê khwái lōʊɴ lé **thwí** ʔɔ́
3se 投げる 石 (場) 犬 ところ
「彼は犬に石を投げつけた」

b. ʔəwê khwái **thwí** dè lōʊɴ
3se 投げる 犬 (共) 石
「彼は犬に石を投げつけた」

上の各 (a) では、場所を表す名詞句が lé に導かれて斜格補語として現れている。しかし、(b) では、場所を表す名詞句が目的語として現れ、(a) で目的語として現れていた名詞句が道具を表す dè に導かれて現れている。

(33) と (34) の (a) は、ご飯に何を入れたりかけたりしたかということに話者が関心を持っているときに使われ、(b) は、何に塩を入れたりかけたりしたかということに話者が関心を持っているときに使われる。同様に、(35) の (a) は、犬に何を投げたかということに話者が関心を持っているときに使われ、(b) は、何に石を投げたかということに話者が関心を持っているときに使われる。この現象が英語の場所格交替や他の言語の類似の現象とどのような共通性あるいは差異を持っているかについては、今後の調査を待たねばならない[3]。

15.4　動詞の実例

次に動詞の実例を見てみよう。服部四郎編 (1957)『基礎語彙調査票』の必須語彙に該当するポー・カレン語語彙の中から、代表的な動詞を選び出した。下に表にして示す。下の表は自動詞と他動詞に分けてある。「意志性」の欄の「意志」は意志動詞を表し、「無意志」は無意志動詞を表す。「意志/無意志」は、意志動詞として用いられる場合も無意志動詞として用いられる場合もあることを示す。「語彙アスペクト」の欄の「動態」は動態動詞を表し、「状態」は状態動詞を表す。

自動詞の例

	意志性	語彙アスペクト
chíchâ　小便をする (to urinate)	意志	動態
ʔíchâ　大便をする (to void excrement)	意志	動態
chînàɴ　座る (to sit)	意志	動態
cáiɴ　歩く (to walk)	意志	動態
ʔɔ́xáʊ　結婚する (to marry)	意志	動態
ʔɔ́pwài　休む (to rest)	意志	動態
klí　走る (to run)	意志	動態
khwɛ̀　這う (to creep)	意志	動態
lókwè　遊ぶ (to play)	意志	動態
kwɛ́　ほどける (to be unfastened)	無意志	動態
nɔ́ (náɴ)　目覚める (to awake)	無意志	動態
cà　負ける (to be defeated)	無意志	動態
ɣàɣòɴ　壊れる (to be broken)	無意志	動態
já　裂ける (to tear[Vi])	無意志	動態
thé　切れる (to be cut)	無意志	動態
làɴthé　落ちる (to fall)	無意志	動態

[3] まだ確認は取れていないが、例文に現れた側置助詞の現れ方などから、このような交替の可能性があると予測できる動詞には、dàʊlàɴ「A に B を入れる」、ɣʊ́ɪ「A に B(塗料, バターなど) を塗る」、kà「A に B(蓋など) をかぶせる」などがある。

ɕàʊ 驚く (to be amazed)	無意志	動態
khʊ́lónɴ 氷る (to freeze)	無意志	動態
phlī 溶ける (to melt)	無意志	動態
làɴbə̀ɴ 沈む (to sink)	無意志	動態
làɴjwà 流れる (to flow)	無意志	動態
làɴjí 枯れる (to wither)	無意志	動態
làɴthîphā 転ぶ (to tumble, to fall down)	無意志	動態
pwài θà 疲れる (to be tired)	無意志	動態
khɛ̀ 禿げた (to be bald)	無意志	状態
mêiɴ 熟した (to be ripe)	無意志	状態
ʔwí おいしい (to be delicious)	無意志	状態
chə̂ɴ 甘い (to be sweet)	無意志	状態
ɣâɴ 塩辛い (to be salty)	無意志	状態
cháiɴ 酸っぱい (to be sour)	無意志	状態
ʔʊ́ɪpàʊ 腐った (to be rotten)	無意志	状態
dʊ́ 大きい (to be big)	無意志	状態
mə̂ɴ 生きた (to be alive)	無意志	状態
bónɴ 太った (to be bold)	無意志	状態
càʊchâ 病気だ (to be sick)	無意志	状態
châ 痛い (to ache)	無意志	状態
ɕā 老いた (to be old)	無意志	状態
cɔ́ 濡れた (to be wet)	無意志	状態
xâiɴ 乾いた (to be dry)	無意志	状態
phàɴ 明るい (to be light, to be bright)	無意志	状態
khài 暗い (to be dark)	無意志	状態
khū 熱い (to be hot)	無意志	状態
khléiɴ 冷たい (to be cold)	無意志	状態
lə̀ɴ 暖かい (to be warm)	無意志	状態
ʔáiɴ 鋭い (to be sharp)	無意志	状態
thɔ̂ 長い, 高い (to be long, high)	無意志	状態
phɨ́ 短い, 低い (to be short, low)	無意志	状態
cîcá 汚い (to be dirty)	無意志	状態
phlî 滑らかな (to be smooth)	無意志	状態
lɛ̄ 広い (to be wide)	無意志	状態
ʔá 多い (to be many)	無意志	状態
ɕà 少ない (to be few	無意志	状態
lì 行く (to go)	意志/無意志	動態
ɣɛ̂ 来る (to come)	意志/無意志	動態
náʊ 入る (to enter)	意志/無意志	動態
thánɴ 上がる, のぼる (to ascend)	意志/無意志	動態
làɴ 下がる, おりる (to descend)	意志/無意志	動態

chîthə́ɯɴ 立つ (to stand)	意志/無意志	動態
kəchí くしゃみする (to sneeze)	意志/無意志	動態
nī 笑う (to laugh)	意志/無意志	動態
ɣán 泣く (to weep)	意志/無意志	動態
pjò 吐く (to vomit)	意志/無意志	動態
ʔɔ́ いる, ある (to exit, to be)	意志/無意志	動態 (意志のとき), 状態 (無意志のとき)

他動詞の例

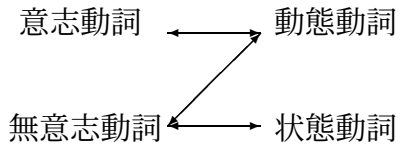
	意志性	語彙アスペクト
chôɴná 聞く (to listen)	意志	動態
θò 着る (to wear)	意志	動態
kwɛ́ 脱ぐ (to take off)	意志	動態
chà 縫う (to sew)	意志	動態
ʔánphôɴ 炊く, 煮る (to cook)	意志	動態
ʔán 食べる (to eat)	意志	動態
θə́ɯɴ 建てる (to build)	意志	動態
lòɴ 追う (to pursue)	意志	動態
ʔánɣɯ́ 盗む (to steal)	意志	動態
ʔáncà 尋ねる (to ask)	意志	動態
pɔ̄ 読む (to read)	意志	動態
kò 呼ぶ (to call)	意志	動態
phílâɴ (phlâɴ) 与える (to give)	意志	動態
ʔánchâ 売る (to sell)	意志	動態
ʔɔ́khò 待つ (to wait)	意志	動態
màchə̀ɴ 手伝う (to help)	意志	動態
plɛ̀tɔ̀ 許す (to allow)	意志	動態
thàʊ 拭く (to wipe)	意志	動態
phɯ́ 背負う (to carry on one's back)	意志	動態
kòkí 置く (to put)	意志	動態
dànɛ́ 見せる (to show)	意志	動態
ɕâɴ 裂く (to tear)	意志	動態
ʔánθîjà 洗う (to wash)	意志	動態
chè 刺す (to stab)	意志	動態
chôɴmóɴ 考える (to consider)	意志	動態
màlʊ́ 教わる (to study), 教える (to teach)	意志	動態
nɛ̀ʔáɴ 信じる (to believe)	意志	動態
jā 泳ぐ (to swim)	意志	動態
ʔáiɴ 咬む (to bite)	意志	動態
nə̀ɴ 勝つ (to win)	無意志	動態

θànánɴ 忘れる (to forget)	無意志	動態
θà thánɴ 怒る (to get angry)	無意志	動態
náθí 分かる (to understand)	無意志	動態
dá 見える (to see)	無意志	動態
nāɣə̂ɴ 聞こえる (to hear)	無意志	動態
θàmɛ́ 恐れる (to fear)	無意志	状態
θàxwî 嬉しい (to be glad)	無意志	状態
θíjâ 知っている (to know)	無意志	状態
mwɛ̄ ～である (to be)	無意志	状態

15.5　三つの動詞分類の関係

ポー・カレン語の動詞を見ていくと、自動詞には意志動詞も無意志動詞も多いが、他動詞には意志動詞が多いようである。おそらく、非対格動詞 (unaccusative verb)/非能格動詞 (unergative verb) という概念を用いる生成文法理論等の一部の言語理論の枠組みで捉えた場合 (影山 1993 などを参照)、ポー・カレン語の自動詞の意志動詞は非能格動詞、自動詞の無意志動詞は非対格動詞に分類されるだろう。しかし、非対格動詞/非能格動詞の概念とここで述べた意志動詞/無意志動詞の概念は、まったく別物である。なぜなら、非対格動詞/非能格動詞という捉え方では、自動詞にだけ二種の動詞類を認めるが、意志動詞/無意志動詞の分類は、自動詞にも他動詞にも適用されるものだからである。確かに他動詞には意志動詞が多いが、無意志の他動詞も存在する。他動詞に意志動詞が多いのは、他動詞が表す事象の性質に原因を求めることができると思う。ポー・カレン語の他動詞が表す事象は、行為者が被動者に何らかの働きかけを行う事象である場合が多い。他の物体に何らかの働きかけを行うとき、行為者は意志を持っていることが多いと考えられる。そのため、他動詞には意志動詞が多いのだろう。

意志動詞/無意志動詞および動態動詞/状態動詞の対応関係は、次に図示するようになっているようである。



ここから言えることは、任意の動詞が意志動詞であればその動詞は動態動詞であるということと、任意の動詞が状態動詞であればその動詞は無意志動詞であるということである。つまり、ポー・カレン語においては、動きと意志とは関係があり、状態と意志とは無関係であるという捉え方の傾向があると言える。この傾向は人間一般の世界の捉え方に関係している可能性があるが、ここで深く論じられる問題ではないので、これ以上は立ち入らない。

第16章　動詞句

本論文では、次のような構成をなす要素を**動詞句**と呼ぶ。

(1) $\underbrace{\textbf{(動詞助詞)} - \textbf{動詞} - \textbf{(動詞助詞)}}_{\textbf{動詞複合体}} - \textbf{(目的語名詞句)} - \textbf{(副詞的要素)}$

下に注意事項を述べる。

- ( ) でくくった要素は任意の要素である。
- 動詞助詞には動詞の前に現れるものと動詞の後に現れるもの (第 18 章を参照) がある。それぞれ複数個現れることができる。
- 動詞の位置には**連結型動詞連続**(第 17 章を参照) が現れる場合もある。
- **(動詞助詞)**– **動詞**–**(動詞助詞)** の部分を**「動詞複合体」**(verb complex) と呼ぶ。この部分に名前を付けるのは、この部分がひとまとまりになって一個の動詞のように振る舞うからである。
- 目的語名詞句は二つまで現れることがある (第 4 章 4.2.2 を参照)。
- **副詞的要素**として立つことのできる要素には、副詞 (第 19 章を参照)、副助詞 (第 24 章を参照)、助数名詞句 (第 10 章を参照)、時を表す名詞 (第 19 章を参照) が含まれ、それぞれ複数個現れることができる。

さて、動詞句という統語的単位を設定するのには二つの理由がある。それは、上に図示した要素が、分離型動詞連続を形成する単位になるということと、一部の動詞の目的語になり得るということである。この二つの事実をもって動詞句という範疇を設定する根拠としたい。詳細を以下に述べる。

16.1　分離型動詞連続の単位になる

第 17 章で述べるように、動詞連続には、連結型動詞連続と分離型動詞連続という二つのタイプがある。このうち分離型動詞連続は、最小の場合、次のような構造を持つ (以降、VP は動詞句を表す)。

VP VP

次に挙げるのは分離型動詞連続の一例である。

(2) ʔəwê [$_{VP}$ ʔáɴ mì dè cɯ́] [$_{VP}$ mə- ɣì dá jə̀]
3se 食べる ご飯 (共) 手 (非現) 良い (比較) 1SG
「彼は、手でご飯を食べるのが私より上手だろう」

動詞句は、このような動詞連続を構成するときの単位である。動詞連続についての詳細は、第 17 章を参照されたい。

16.2　一部の動詞の目的語になる

動詞句は、一部の動詞の目的語として現れることができる。現在までに、動詞句を目的語として取る動詞としては、ʔáɴkèɪɴ, θànáɴ, báθà, thōʊɴ の四つが見つかっている。以下に、目的語として現れた動詞句に共通する特徴を列挙しておく。

- 目的語として現れた要素はあくまでも動詞句であるから、当然のことながら、この動詞句が独自に取る主語は現れない。また、この位置に分離型動詞連続が現れることもない。
- 目的語として現れた動詞句の論理的主語は、主動詞 (動詞句を取る側の動詞をこう呼んでおく) の主語と常に同一である。
- 目的語として現れた動詞句には決して非現実 (irrealis) を表す動詞助詞 mə- や否定を表す動詞助詞 lə- が付くことはない。

16.2.1　動詞句を目的語として取ることのできる動詞

動詞句を目的語として取ることのできる動詞で、現在までに見つかっているものは次に挙げる四つである。以下、これらの動詞の意味を見、また、それぞれの動詞が動詞句を目的語として取った例を挙げる。

ʔáɴkèɪɴ　「(物を) 欲しいと頼む」の意を表す。動詞句を従えると、動詞句の表す動作を行う許可を願い出ることを表す。

(3) ɣɛ̂ ʔáɴkèɪɴ [$_{VP}$ ʔáɴ láiθêɪɴ phʊ́] nɔ́ kò nì dè lɔ̂
来る 頼む 食べる 鳶 子供 (題) (毎) ～日 (毎') (断定)
「(彼が) 鳶の子供を食べたいと言いに来るのは毎日のことだった」(I-01.12)

(4) ʔəwêdá ʔáɴkèɪɴ [$_{VP}$ mî wê lé thʊ́chàɴchî ʔə- θwî phə̀ɴ]
3se 頼む 寝る (強意) (場) (鳥の名) 3sg 巣 中
nɔ́ lɔ̂
(のだ) (断定)
「彼はチャンチ鳥の巣の中で寝たいと申し出た」(II-02.19)

(5) θàʊpərái　lə-　ɣà　nɔ́　ʔəwê　ʔáɴkèiɴ　[$_{VP}$ jʊ̄　jə-　lɛ́má]
警官　一　～人　(題)　3se　頼む　見る　1sg　切符
「警官が私の切符を見せろと言ってきた」(IV-04.26)

名詞句を目的語として取った例を下に挙げておく。

(6) ʔáɴkèiɴ　láimʊ̀ʊ̀
頼む　原稿
「原稿を依頼した」(IV-02.7)

θànáɴ　「(物を; 出来事を) 忘れる」の意を表す。動詞句を従えると、動詞句の表す動作を行うことを忘れることを表す。

(7) jə-　θànáɴ　[$_{VP}$ ɣɛ̂　chó　láiʔàʊ]
1sg　忘れる　来る　運ぶ　本
「私は本を持ってくるのを忘れた」(001.550)

名詞句を目的語として取った例を挙げておく。

(8) θànáɴ　thóʊɴ　lə-　phlóʊɴ
忘れる　袋　一　～個
「袋を一つ忘れてきた」(001.548)

báθà　「(物を) 欲する」の意を表す。動詞句を従えると、動詞句の表す動作を行うことを欲することを表す。

(9) nə-　báθà　[$_{VP}$ tháɴ　khɔ̀khɔ̂　mèiɴ]　lɛ̂
2sg　欲する　上る　どの　～種類　(疑)
「あなたはどれに乗りたいですか?」(001.693)

(10) ʔəwê　báθà　[$_{VP}$ ʔɔ̀　thî]　nɔ́ ...
3se　欲する　飲む　水　(前提)
「彼は水が飲みたくて...」(IV-05.21)

(11) báθà　[$_{VP}$ nī]　mjâ |　nī　wê　bə́ɯɴ　ʔé
欲する　笑う　(非常)　笑う　(強意)　勇気のある　(否)
「(彼は) 非常に笑いたかったが、笑う勇気はなかった」(IV-04.185)

名詞句を目的語として取った例を挙げておく。

(12) jə-　báθà　kháɴphài　nāɴ　côʊɴ
1sg　欲する　草履　(少数)　～足
「私は草履が一足ほしい」(001.1156)

thōʊɴ　「(苦難等を) 受け入れる, 我慢する」の意を表す。動詞句を従えると、動詞句の表す状態や状態変化を被るだろうことを受け入れることを表す。

(13) cɔ̀thʊ́dí　lə-　ɣà　thōʊɴ　[$_{VP}$ cà　ʔə-　ɣòpháɴ]
(人名)　一　～人　受け入れる　負ける　3sg　友人

lə-　kɛ́　bá　ʔəkhʊ́cɔ̀ɴ ...
(否)　可能な　(否')　(理由)
「チョートゥーディーは友人に負けたくなかったので...」(II-10.15)

(14) báchâiɴ　dè　chɨ̀chá　ʔəɣāɴ　nɔ́ |
関する　(共)　民族　ため　(前提)

thōʊɴ　[$_{VP}$ θî]　θà　bá　bə́ɯɴ　kō　ɣà　dè
受け入れる　死ぬ　(再帰)　(当為)　勇気のある　(毎)　～人　(毎')
「民族のためには、死を受け入れる勇気がなければならない」(IV-01.96)

名詞句を目的語として取った例を挙げておく。

(15) bá　thōʊɴ　tətáʊ
(当為)　受け入れる　災難
「災難に耐えなければならない」

16.2.2　動詞句が目的語として現れた文の統語的および意味的特徴

今議論している動詞句が目的語としての役割を持つと考えるのは、これらの動詞句を、文脈指示機能を持つ名詞 ʔənɔ́「それ」で置き換えることができるという事実があるからである。ʔáɴkèiɴ を例に取ると、下の (a) の問いに対して、(b) のように答えることができる。

(16) a. ʔəwê　ʔáɴkèiɴ　[$_{VP}$ xwè　já]　ʁâ
3se　頼む　買う　魚　(疑)
「彼は魚を買いたいと乞うたか?」

b. ʔəwê　ʔáɴkèiɴ　*ʔənɔ́*　lɔ̂
3se　頼む　それ　(断定)
「(はい、) 彼はそれを乞うた」

これが、これらの動詞句が目的語になっていると考える理由である。

次に、動詞句が目的語として現れた構造には、意味的に共通する特徴がある。それは、動詞句が表す事象は、主動詞が表す事象が生起した時点では常に未実現であるということである。ʔáɴkèiɴ の場合は、「頼む」という行為を行ったとき、行為者がしたいと思っている行為はまだ実現していない。θànáɴ の場合は、「忘れる」という変化が生じたとき、行為者が本来はするべきだった行為はまだ実現していない。báθà の場合は、「欲する」という心理状態が生じたとき、行為者が行うことを欲している行為はまだ実現していない。

thōʊɴ の場合は、「受け入れる」という心理的態度が生じたとき、行為者が被るだろう状態はまだ実現していない。

本論文では、このような意味的特徴を、ポー・カレン語において動詞句を目的語として取るという構文そのものに与えられた特徴であると見なしたい。それは次に述べるような事実があるからである。四つの動詞のうち θànánɴ は、第 22 章で述べるとおり、目的語として補文を取ることもできる。次はこの動詞が補文を取った例である。

(17) jə-　θànánɴ　[$_C$ jə-　ɣɛ̂　chó　láiʔàʊ]
　　1sg　忘れる　　1sg　来る　運ぶ　本
　　「私は本を持ってきたことを忘れた」

この (17) と、動詞句が目的語になった次の文では、文の表す意味がまったく異なる。

(18) jə-　θànánɴ　[$_{VP}$ ɣɛ̂　chó　láiʔàʊ]　(=7)
　　1sg　忘れる　　来る　運ぶ　本
　　「私は本を持ってくるのを忘れた」(001.550)

(17) が意味するのは、「私が本を持ってきた」という既に実現済みの事象を「忘れた」ということである。その点で、「私が本を持ってくる」というまだ実現していない事象を「忘れた」ことを意味する (18) とはまったく異なるのである。(17) では、補文中の主語を取り除くことができ、その場合は見かけ上 (18) と同じ音列になる。しかし、もしその音列が「私は本を持ってきたことを忘れた」ということを意味するなら、その文は、補文を取った文であると解釈することができる。

動詞句が目的語として現れた構造における「動詞句が表す事象は主動詞が表す事象が生起した時点では常に未実現」という特徴が、このような構造そのものに与えられた意味であると解釈するならば、(17) と (18) の二つの文の意味的差異は、その原因を文の構造の差異に帰すことができる。また、このような意味的な差異が生じるということも、動詞句という範疇を認める根拠になるだろう。

16.2.3　動詞句が主語として現れる可能性

さて、動詞句が目的語として現れることがあるなら、動詞句が主語として現れることもあるのだろうか。どうやらその可能性は薄い。例えば、次の文の [ ] で括った部分は、一見、動詞句に見える。

(19) [khlàiɴ　phlòʊɴ]　ká
　　話す　カレン　難しい
　　「カレン語を話すことは難しい」

しかし、この動詞句には、次のように主語を補うことができる。

(20) [hə-　khlàiɴ　phlòʊɴ]　ká
　　1pl　話す　カレン　難しい
　　「私達がカレン語を話すことは難しい」

したがって、(19) の [ ] で括った部分は動詞句ではなく、第 22 章で論じる補文である。現在までに、主語の部分に動詞句らしき要素が現れた文で、動詞句の主語を補ったときに、前節で述べた θànáɴ のような違いを生じる事例は見つかっていない。したがって、動詞句のようなものが主語の位置に現れていても、それは単に補文の主語が現れていないということに過ぎない。結論として、動詞句そのものが主語として現れるということはないと言えそうである。

第17章　動詞連続

動詞連続 (verb serialization; serial verbs; serial verb construction) というのは、複数の動詞が同一の節や文の中で動詞間の関係を示す標識を伴わずに現れる現象で、様々な地域や系統の言語に見られる (Sebba 1987, Lefebvre 1991 などを参照)。一般的に動詞連続は、継起的に連なる複数の事象を表すことが多い。東アジアから東南アジアにかけての諸言語には広くこの現象が見られ、地域特徴の一つとして挙げられることも少なくない。例えば Goral (1986) は、東南アジア諸言語の動詞連続をこうした視点から観察している。この地域の言語の多くにおいては、あたかも形態論の乏しさを補うかのように動詞連続が発達しており、動詞連続はそれぞれの言語の文法の中で極めて重要な役割を担っている。ポー・カレン語に隣接する諸言語の動詞連続を扱った最近の研究としては、ビルマ語についての澤田 (1989)、タイ語についての Thepkanjana (1986)、Muansuwan (2002)、スゴー・カレン語についての加藤 (1993) などがある。

17.1　ポー・カレン語の動詞連続の規定

ポー・カレン語も他の東南アジア諸語の例にもれず、動詞連続を豊富に持っている。本論文では、ポー・カレン語の動詞連続を次のように規定する。

動詞連続: 同一節中に、動詞間の関係を示す標識を伴わずに複数の動詞が現れる現象。ただし、その節の中に埋め込まれた従属節の中の動詞や、補語の中の動詞は、動詞連続を構成する動詞と考えない。

ポー・カレン語には動詞連続と紛らわしい構造がある。これについては 17.5 で議論する。下に動詞連続の例を挙げる。

(1) ʔəwê　**ɣɛ̂**　**cáiɴkwè**
3se　来る　遊ぶ
「彼が遊びに来た」

(2) jə-　phūkhwâ　**lì**　**màlʊ́**　láipəjàɴ
1sg　弟　行く　学ぶ　ビルマ語
「私の弟はビルマ語を勉強しに行った」

(3) jūɪ　**ʔáiɴ**　**chó**　kʊ̌
ねずみ　くわえる　運ぶ　菓子
「ねずみが菓子をくわえて持って行った」

(4) jə-　**ʔánɴ**　mì　**ʔwí**　mā
1sg　食べる　ご飯　美味な　(非常)
「ご飯を食べたら大変おいしかった」

ここに挙げた例もそうであるように、ポー・カレン語の動詞連続は二つの動詞で構成されるものが最も多い。三つ以上の動詞からなる動詞連続も、すべて二つの動詞からなる動詞連続の関係に還元して考えることができる。以降、動詞連続を構成する二つの動詞のうち、最初に現れた動詞を V1、2 番目に現れた動詞を V2 と表すことにする。

17.2　動詞連続の分類

上で規定したポー・カレン語の動詞連続は、これらが従属節で否定された場合に否定辞 lə- の付く位置に基づき、**連結型**と**分離型**の二つのタイプに分類することができる。

i) 連結型
否定辞をつけたときに lə- V1 V2 となるもの。V1 と V2 の間に補語や副詞などをはじめとする他の要素は決して介在できない。

(5) jə-　lə-　**lì**　**xwè**　bá　ʔəkhʊ́còɴ ...
1sg　(否)　行く　買う　(否')　(理由)
「私は買いに行かなかったので...」

ii) 分離型
否定辞をつけたときに V1 lə- V2 となるもの。V1 と V2 の間には補語や副詞などの要素が入り得る。

(6) jə-　**khlàiɴ**　phlòʊɴ　lə-　**θí**　bá　ʔəkhʊ́còɴ ...
1sg　話す　カレン　(否)　できる　(否')　(理由)
「私はカレン語が話せなかったので...」

以下では、「連結型」「分離型」の順に、それぞれのタイプの動詞連続が持つ性質について考察を進める。

17.3　連結型

連結型動詞連続は、V1 と V2 の間に他の要素が割って入ることはなく、V1+V2 全体で一つの動詞複合体を形成する。上で述べたとおり、連結型動詞連続は、否定辞 lə- が V1 の前に付く動詞連続であると定義できる。

(7) jə-　lə-　**lì**　**xwè**　bá　ʔəkhʊ́còɴ |　ʔəwê　lì　xwè
1sg　(否)　行く　買う　(否')　(理由)　3se　行く　買う
「私が買いに行かなかったので、彼が買いに行った」

(8) ʔəwê　lə-　**ʔánphôɴ**　**ʔánɴ**　mì　bá　nɔ́
3se　(否)　炊く　食べる　ご飯　(否')　(前提)　|

xwè　ʔáɴ　dālɔ̂
買う　食べる　(断定)
「彼はご飯を作って食べないときは、（外で）買って食べる」

否定辞 lə-が V1 と V2 の間に割って入ることはない[1] 。

(9) *jə-　**lì**　lə-　**xwè**　bá　ʔəkhʊ́cònɴ ...
1sg　行く　(否)　買う　(否')　(理由)　3se　行く　買う

(10) *ʔəwê　**ʔánphôɴ**　lə-　**ʔánɴ**　mì　bá　nɔ́ ...
3se　炊く　(否)　食べる　ご飯　(否')　(前提)

連結型動詞連続の V1 と V2 のそれぞれは、単独の動詞である場合だけでなく、動詞に動詞助詞のついたものである場合もある。したがって、実際には連結型動詞連続の V1 と V2 は単独の動詞というよりも動詞複合体であると考えたほうがよい。

(11) pàʊ　thánɴ　pɔ̄　lànɴ　lái
開ける　(完成)　読む　(下方)　手紙
「手紙を開けて読んだ」

ここでは、pàʊ「開ける」に動詞助詞の thánɴ（この場合は「完成」を表す）が付いて全体として V1 となり、pɔ̄「読む」にやはり動詞助詞の lànɴ（この場合は「下方向への動作」を表す）が付いて全体として V2 となっている。このように、動詞に助詞の付いたものが連結型動詞連続の V1 あるいは V2 になる場合もある。

17.3.1　連結型動詞連続が表す事象間の関係

連結型の V1 と V2 はそれぞれの表す事象が開始した順序に従って並べられるのが原則である。つまり、時間的には、V1 の表す事象の開始は V2 の表す事象の開始に先行する。次の二つの例を比べてみよう。

(12) jʉ̄ɪ　**ʔáiɴ**　**chó**　kʊ́
ねずみ　くわえる　運ぶ　菓子
「ねずみが菓子をくわえて運んだ」

[1] ちなみに、ポー・カレン語に隣接するビルマ語では、(7) や (8) に相当する動詞連続では否定辞 mə- が動詞と動詞の間に置かれるのが普通である。次のビルマ語の例を見よ。

(a)　θwá　mə-　wɛ̀　bú
行く　(否)　買う　動詞文標識
「買いに行かなかった」

(b)　chɛʔ　mə-　sá　bú
炊く　(否)　食べる　動詞文標識
「（ご飯を）作って食べるということはしなかった」

(13) jɯ̄ɯ　**chó**　**ʔáiɴ**　kʊ́
ねずみ　運ぶ　くわえる　菓子
「ねずみが菓子を運んでくわえた」

この二つの動詞連続は明らかに意味が異なる。動詞の並んでいる順番どおり、ʔáiɴ chóの場合は、「くわえる」という動作の後、「運んだ」のである。逆に、chó ʔáiɴの場合は、何らかの方法によって「運んだ」後、「くわえた」のである。すなわち、動詞の並べ方は、動詞が表す事象が開始した時間的順序にそのまま従っている。この性質は、連結型動詞連続に見られる一般的傾向である。ただし、動詞の配列が時系列に従わないケースもあり、このことについては 17.3.4 で述べる。

次に、連結型における V1 と V2 がそれぞれ表す事象の間には、いくつかの密接な関係が観察される。「原因－結果」「手段－目的」「様態－動作」などの関係である。例えば、次の動詞連続を見ていただきたい。

(14) ʔəwê　làɴthé　θî
3se　落ちる　死ぬ
「彼は（高所から）落ちて死んだ」

(15) ʔəwê　xwè　ʔáɴ　kʊ́
3se　買う　食べる　菓子
「彼は菓子を買って食べた」

(16) ʔəθí　ɕûkəlôɴ　phòʊɴwôʊɴ　lóθà
3pl　素速く行う　抱く　(相互)
「彼らはすぐに抱き合った」

まず、(14) の例では、「落ちる」という事象が原因になって「死ぬ」という事象が生じたことが表されており、V1 が表す事象と V2 が表す事象の間には、「原因－結果」の関係がある。また、(15) では、V1 が表す「買う」という動作は V2 が表す「食べる」という目的を遂行するための手段となっている。逆に「食べる」という動作は「買う」という動作の目的になっている。つまり、V1 が表す事象と V2 が表す事象の間に、「手段－目的」の関係がある。また、(16) では、V1 は「素速く行う、急ぐ」という意味を表す動詞で、これは V2 が表す「抱く」という動作が「速い」ということを表している。つまり、「様態－動作」とでも呼べるような関係が見出される。また、下の例は、「手段－目的」とも「様態－動作」とも考えられる例である。

(17) ʔəwê　chînàɴ　pɔ̄　láiʔàʊ
3se　座る　読む　本
「彼は座って本を読んだ」

V1 が表す「座る」という動作は、「本を読む」という動作を行うための手段とも考えられるし、単に「本を読む」という動作を行ったときの様態であるとも考えられる。また、次の例は、後で述べる主語非同一型の動詞連続であるが、このような場合、V1 が表す事象と V2 の表す事象の間には、「原因－結果」あるいは「手段－目的」とも呼ぶべき関係が見出される。

(18) jə-　dʊ́　θî　thwí
　　1sg　殴る　死ぬ　犬
　　「私は犬を殴り殺した」

ここで V2 が表す「死ぬ」という事象は、「殴る」という動作によってもたらされたものである。その意味で、V1 が表す事象と V2 が表す事象は「原因－結果」の関係にある。一方で、後で述べるように、ここでの「死ぬ」という結果は、「殴る」という動作の結果として「期待された」事象である。そのような意味では、V1 と V2 がそれぞれ表す事象には「手段－目的」と呼べるような関係がある。

V1 が表す事象と V2 が表す事象の間には、このように、「原因－結果」「手段－目的」「様態－動作」などの緊密な関係が見出される。ここに挙げた三つの関係のいずれの関係にあるとも解釈できないような二つの事象は、連結型動詞連続によって表現することはできない。例えば、次の文が表す二つの事象を、連結型動詞連続を用いて表現することはできない。

(19) jə-　thɛ̀　ʔə　ɣòɴ |　dʊ́　ʔə
　　1sg　蹴る　3SG　(継起)　殴る　3SG
　　「私は彼を蹴って殴った」

これを、次のように動詞連続を用いて表現することはできない。

(20) *jə-　thɛ̀　dʊ́　ʔə
　　1sg　蹴る　殴る　3SG

「蹴る」という事象と「殴る」という事象の連続を動詞連続で表現できないのは、「蹴る」ことと「殴る」ことが独立した事象であることに原因がある。この場合、「蹴る」のは「殴る」ためではない。また、「蹴りながら殴る」という状況も考えにくい。「殴る」という動作が「蹴る」という動作の結果であるというのも考えにくい。したがって、ここでの「蹴る」という事象と「殴る」という事象は、「手段－目的」「様態－動作」「原因－結果」といった関係にはない、互いに独立した事象である。このことが、この二つの事象を動詞連続で表すことのできない理由である。

このように、連結型動詞連続で表された二つの事象は、「手段－目的」「様態－動作」「原因－結果」などの緊密な関係にある。逆に、このような関係のいずれとも考えられないような場合には、連結型動詞連続を用いて二つの事象を表現することはできない。事象間の意味関係として、この三つのみを設定すればよいのか、あるいは、より多くの意味関係を設定すべきなのか、逆に減らすべきなのかは、今後も引き続き検討しなければならない課題である。ともかく、互いに緊密な関係にない独立した事象を、連結型動詞連続を用いて表現することはできないということは確実である。

17.3.2　連結型における自動詞・他動詞の組み合わせ

V1 と V2 の自動詞・他動詞による組み合わせを考えると、連結型の動詞連続には当然のことながら「自動詞＋自動詞」「自動詞＋他動詞」「他動詞＋他動詞」「他動詞＋自動詞」の四つのパターンが存在する。これら四つのパターンの動詞連続全体が目的語を取るか取

らないか、すなわち、全体が自動詞としての振る舞いを示すか他動詞としての振る舞いを示すかということに着目すると、「自動詞＋自動詞」は自動詞、「自動詞＋他動詞」は他動詞、「他動詞＋他動詞」は他動詞、「他動詞＋自動詞」は他動詞として振る舞う。

(i)　自動詞 + 自動詞　→　自動詞
(ii)　自動詞 + 他動詞　→　他動詞
(iii)　他動詞 + 他動詞　→　他動詞
(iv)　他動詞 + 自動詞　→　他動詞

具体例を見てみよう。まず最初に、「自動詞＋自動詞」の例である。

(21) ʔəwê　làɴthîphā　θî
3se　転ぶ　死ぬ
「彼は転んで死んだ」

見ての通り、làɴthîphā θî 全体では、目的語を取らない。つまり、動詞連結全体は自動詞と同様の振る舞いを示す。次は、「自動詞＋他動詞」の例である。

(22) jə-　lì　xwè　já　phàdʊ́
1sg　行く　買う　魚　巨大な
「私は大きな魚を買いに行った」

ここで、lì xwè の後には名詞句が現れている。つまり、動詞連続全体は他動詞と同様の振る舞いを示している。次は、「他動詞＋他動詞」の例である。

(23) jə-　xwè　ʔáɴ　kʊ́
1sg　買う　食べる　菓子
「私は菓子を買って食べた」

xwè ʔáɴ の後には名詞句が現れている。つまり、動詞連続全体は他動詞と同様の振る舞いを示している。最後に、「他動詞＋自動詞」の例である。

(24) jə-　ɕâɴ　já　càkhɔ̂
1sg　引く　裂ける　紙
「私は紙を引き裂いた」

ここでも、ɕâɴ já の後には名詞句が現れている。つまり、動詞連続全体は他動詞と同様の振る舞いを示している。

これら 4 パターンのうち、(i) から (iii) のパターンすなわち「自動詞＋自動詞」「自動詞＋他動詞」「他動詞＋他動詞」のパターンと、(iv) のパターンすなわち「他動詞＋自動詞」のパターンの間には決定的な違いがある。それは、V1 と V2 の論理的主語の同一指示性である。(i) から (iii) のパターンでは、論理的主語は同一指示であり、一方、(iv) のパターンでは、論理的主語は同一指示ではない。最初に、(i) から (iii) のパターンを見てみよう。これらのパターンにおいて論理的主語が同一指示であることは、動詞連続が表す二つの事象を、真理条件的意味を変えずにそれぞれの動詞を用いて別々の文で表したときに主語になる名詞句を見れば分かる。例えば、(21) の文を、次のように「分解」する。

(25) a. ʔəwê　lànthîphā
　　3se　転ぶ
　　「彼は転んだ」

　　b. ʔəwê　θî
　　3se　死ぬ
　　「彼は死んだ」

すると、(a)(b) どちらの文においても、ʔəwê「彼」が主語になっている。したがって、(21) の動詞連続における V1 と V2 の論理的主語は同一指示であると見なすことができる。同様に、(22) と (23) も次に示す通り、論理的主語が同一指示である。

(26) a. jə-　lì
　　1sg　行く
　　「私は行った」

　　b. jə-　xwè　já　phàdʉ́
　　1sg　買う　魚　巨大な
　　「私は大きな魚を買った」

(27) a. jə-　xwè　kʉ́
　　1sg　買う　菓子
　　「私は菓子を買った」

　　b. jə-　ʔánɴ　kʉ́
　　1sg　食べる　菓子
　　「私は菓子を食べた」

(26) では主語が (a)(b) とも jə- で同一指示であり、(27) ではやはり (a)(b) とも主語が jə- で同一指示である。まとめると、自動詞と他動詞の組み合わせのうち、「自動詞＋自動詞」「自動詞＋他動詞」「他動詞＋他動詞」の三つのパターンは、V1 と V2 の論理的主語が同一指示であるという点で共通している。そこで、以降、これら三つのパターンを、**主語同一型**と呼ぶことにする。

一方、「他動詞＋自動詞」の場合には事情が異なる。(24) の例に同様のテストをほどこしてみる。

(28) a. jə-　ɕânɴ　càkhɔ̂
　　1sg　引く　紙
　　「私は紙を引いた」

　　b. càkhɔ̂　já
　　紙　裂ける
　　「紙が裂けた」

これまでの場合とは違って、ここではそれぞれの文の主語が異なっている。(a) の主語は jə-「私」であるが、(b) の主語は càkhɔ̂「紙」である。すなわち、V1 と V2 の論理的主語は、このパターンでは同一指示ではない。そこで以降、「他動詞＋自動詞」のパターンを**主語非同一型**と呼ぶことにする。

17.3.3　連結型における主動詞

連結型の動詞連続における V1 と V2 は対等な立場にはないと考えられる。なぜならば、動詞連続全体の性質は、どちらか一方の動詞が優先的に決定していると考えられるからである。具体的には、動詞連続の「項の取り方」と「意志性」が、一方の動詞によって決定される。このような、動詞連続全体の性質を決定する上で優先権を持つ側の動詞を、以後、**主動詞**(head verb) と呼ぶことにする。

連結型動詞連続において V1 と V2 のどちらが主動詞になるかは、主語同一型と主語非同一型で異なるので、以下では主語同一型と主語非同一型に分けてこの問題について論じる。

17.3.3.1 主語同一型の主動詞

まず、主語同一型の例を下に挙げておく。

(29) ʔəwê　làɴthîphā　θî（自動詞＋自動詞）
　　3se　転ぶ　死ぬ
　　「彼は転んで死んだ」

(30) jə-　chînàɴ　kòçà（自動詞＋自動詞）
　　1sg　座る　叫ぶ
　　「私は座って叫んだ」

(31) jə-　chînàɴ　ʔáɴkhò　ʔəwê（自動詞＋他動詞）
　　1sg　座る　待つ　3se
　　「私は座って彼を待った」

(32) jə-　ʔáɴphôɴ　ʔáɴ　mì（他動詞＋他動詞）
　　1sg　炊く　食べる　ご飯
　　「私はご飯を炊いて食べた」

最初に、項の取り方を見てみよう。(31) のような「自動詞＋他動詞」の組み合わせの場合、項の取り方については、動詞連続全体は V2 の特徴を受け継いでいる。このことは、動詞連続が取っている項をそのままにし、V1 と V2 を一方ずつ取り除くテストを施してみれば明らかである。次の (33) は、(31) にこのようなテストを施した結果である。

(33) a. *jə-　chînàɴ　ʔəwê
　　1sg　座る　3se

　　b. jə-　ʔáɴkhò　ʔəwê
　　1sg　待つ　3se

別の例を挙げる。

(34) phà　tháɴ　kɛ́　tháɴ　dʉ̀ʉlâ
　　生まれる　(完成)　成る　(完成)　ハエ
　　「(ウジが) 発生してハエになる」

これに先のテストを施す。

(35) a. *phà　　thánɴ　dʉ̀ʉlâ
　　生まれる　(完成)　ハエ

　　b. kɛ́　　thánɴ　dʉ̀ʉlâ
　　成る　(完成)　ハエ

(33) と (35) を見れば明らかなように、V2 を取り除いたときにのみ不適格になる。したがって、「自動詞＋他動詞」の場合、動詞連続全体は V2 の項の取り方を受け継いでいると考えることができる。

一方、「自動詞＋自動詞」の場合と「他動詞＋他動詞」の場合、問題はこれほど簡単ではない。なぜなら、これらの場合、項の取り方が V1 と V2 で共通であることが多いからである。例えば、(30)（自動詞＋自動詞の例）や (32)（他動詞＋他動詞の例）では、項をそのままにし、V2 を取り除いて V1 だけを残しても、逆に V1 だけを取り除いて V2 だけを残しても、適格な文が成立する。

(36) a. jə-　chînàɴ
　　1sg　座る

　　b. jə-　kòɕà
　　1sg　叫ぶ

(37) a. jə-　ʔánphôɴ　mì
　　1sg　炊く　　ご飯

　　b. jə-　ʔánɴ　mì
　　1sg　食べる　ご飯

これだけを見ると、「自動詞＋自動詞」あるいは「他動詞＋他動詞」の場合、動詞連続全体が V1 と V2 のどちらの項の取り方を受け継いでいるのかは分からない。しかしながら、次に挙げる点から、これらの組み合わせにおいても、項の取り方は V2 が決定していると考えられる。

まず、「自動詞＋自動詞」の組み合わせにおいては、V1 が移動を表す自動詞である場合に、V1 の到着点に相当する場所を表す名詞句が常に側置助詞を伴わなければならないということが挙げられる。次の例を見てみよう。ここでは、場所を表す側置助詞 lé が現れていないと不適格になる。

(38) jə-　thàiɴ　mî　*(lé)　ɣéiɴ
　　1sg　帰る　寝る　(場)　家
　　「私は家に帰って寝た」

(39) jə-　lì　ʔɔ́pwài　*(lé)　thəʔàɴ
　　1sg　行く　休む　(場)　(地名)
　　「私はパアンに行って休養を取った」

移動を表す動詞が動詞連続を構成する動詞としてではなく単独で現れた場合、到着点を表す名詞句は、側置助詞句を介さずに動詞の直後に置くことができる。例えば下の文では、lé は現れても現れなくてもよい。

(40) jə-　thàiɴ　(lé)　ɣéiɴ
　　1sg　帰る　(場)　家
　　「私は家に帰った」

(41) jə-　lì　(lé)　thəʔàɴ
　　1sg　行く　(場)　(地名)
　　「私はパアンに行った」

一方、(38) や (39) の動詞連続が場所を表す側置助詞を伴わなければならないのと同じように、それぞれの V2 は、場所を表す名詞句を側置助詞なしに従えることはない。

(42) jə-　mî　*(lé)　ɣéiɴ
　　1sg　寝る　(場)　家
　　「私は家で寝た」

(43) jə-　ʔɔ́pwài　*(lé)　thəʔàɴ
　　1sg　休む　(場)　(地名)
　　「私はパアンで休んだ」

すなわち、(38) や (39) の動詞連続は、場所を表す名詞句の取り方において、V1 の特性ではなく V2 の特性を引き継いでいる。

次に、「他動詞＋他動詞」の場合、下に挙げる文のように、動詞連続の目的語が V1 の項としては解釈できないことがある。

(44) jə-　pàʊ　thánɴ　jū　chəkhlôʊɴ
　　1sg　開ける　(完成)　見る　外
　　「私は（戸を）開けて外を見た」

この例では、動詞連続の目的語が指示するのは V2 の動作の被動者であって、V1 の動作の被動者ではない。この動詞連続に先ほどからのテストを施せば、このことは明らかである

(45) a. *jə-　pàʊ　thánɴ　chəkhlôʊɴ
　　1sg　開ける　(完成)　外
　　（私は外を開けた）

　　b. jə-　jū　chəkhlôʊɴ
　　1sg　見る　外
　　「私は外を見た」

また、V1 の被動者を表す名詞句を動詞連続の目的語の位置に置くと、不適格になる。

(46) *jə-　pàʊ　thánɴ　jū　pàitərâɴ
　　1sg　開ける　(完成)　見る　戸
　　「私は戸を開けて（外を）見た」

同様の例を下に示す。

(47) jə-　xwí　làɴ　ʔáɴ　mì　dē　thîlá
1sg　かける　(下方)　食べる　ご飯　(共)　塩
「私はご飯に塩をふりかけて食べた」

ここで、動詞連続の後に現れている名詞句は、V2 の動作の被動者を表す。V1 の動作の被動者である thîlá「塩」を動詞連続の後に置いた次の文は、塩を何かにふりかけてその塩そのものを食べたということしか意味しない。つまり「塩」は、V2 が表す動作の被動者としてしか解釈されない。

(48) jə-　xwí　làɴ　ʔáɴ　thîlá
1sg　かける　(下方)　食べる　塩
「私は塩をふりかけて（塩を）食べた」

上の観察から分かることは、「他動詞＋他動詞」の組み合わせにおいて V1 と V2 が被動者を共有しない場合、動詞連続の目的語として現れることができるのは、V2 の動作の被動者のみだということである。

以上の議論から、主語同一型の連結型動詞連続では、V2 が主導権を握って項の取り方を決定していると見なすことができる。

次に、動詞の意志性を見てみよう。主語同一型の場合、V1 と V2 の意志性が異なることは少ない。加藤 (1998) では、「意志性から見ると、このパターンでは、V1 と V2 は両方とも意志動詞であるか無意志動詞であるかのどちらかである。V1 と V2 が意志動詞の場合には、動詞連続全体も意志動詞の特徴を帯び、V1 と V2 が無意志動詞の場合には、動詞連続全体も無意志動詞の特徴を帯びる」と述べた。確かに、今まで見てきた例を含め、主語同一型の場合、V1 と V2 が自動詞であれ他動詞であれ、「無意志＋無意志」あるいは「意志＋意志」の組み合わせが多い。

(49) ʔəwê　làɴthîphā　θî（無意志 [自] ＋無意志 [自]）(=29)
3se　転ぶ　死ぬ
「彼は転んで死んだ」

(50) jə-　chînàɴ　kòçà（意志 [自] ＋意志 [自]）(=30)
3sg　座る　叫ぶ
「私は座って叫んだ」

(51) phà　tháɴ　kɛ́　tháɴ　dʉ̀ʉlâ（無意志 [自] ＋無意志 [他]）(=34)
生まれる　(完成)　成る　(完成)　ハエ
「（ウジが）発生してハエになる」

(52) jə-　chînàɴ　ʔáɴkhò　ʔəwê（意志 [自] ＋意志 [他]）(=31)
1sg　座る　待つ　3se
「私は座って彼を待った」

(53) ʔəθí　θíjâ　náθí　ʔəɣāiɴʔəcóɴ（無意志 [他] ＋無意志 [他]）
3pl　知る　理解する　事情
「彼らは事情を知って理解している」

(54) jə-　ʔánphôɴ　ʔánɴ　mì（意志 [他] ＋意志 [他]）(=32)
1sg　炊く　食べる　ご飯
「私はご飯を炊いて食べた」

「無意志＋無意志」の場合に動詞連続全体も無意志動詞の振る舞いを示し、「意志＋意志」の場合に動詞連続全体も意志動詞の振る舞いを示すことは、命令文になるかどうかを見れば明らかである。

(55) *làɴthîphā　θî（無意志 [自] ＋無意志 [自]）
転ぶ　死ぬ
（転んで死ね）

(56) chînàɴ　kòɕà（意志 [自] ＋意志 [自]）
座る　叫ぶ
「坐って叫べ」

(57) *phà　thánɴ　kɛ́　thánɴ　dɯ̀lâ（無意志 [自] ＋無意志 [他]）
生まれる　(完成)　成る　(完成)　ハエ
（発生してハエになれ）

(58) chînàɴ　ʔánkhò　ʔəwê（意志 [自] ＋意志 [他]）
座る　待つ　3sg
「座って彼を待て」

(59) *θíjâ　náθí　ʔəɣāiɴʔəcóɴ（無意志 [他] ＋無意志 [他]）
知る　理解する　事情
（事情を知って理解しろ）

(60) ʔánphôɴ　ʔánɴ　mì（意志 [他] ＋意志 [他]）
炊く　食べる　ご飯
「ご飯を炊いて食べろ」

これらを見る限りでは、主語同一型において、V1 と V2 の意志性が異なることはなさそうに見える。しかし、実際には、次のように V1 と V2 の意志性が異なる例が存在することが分かった。

(61) khîchìphōɴ　jō　làɴ　dá　làɴ　wê　díθɯ́
虎　見る　(下方)　見つける　(下方)　(強意)　カエル
「虎が下を見るとカエルがいた」(III-03.41)

この動詞連続は命令文になることができない。したがって全体として無意志動詞としての特徴を持つ。

(62) *jū　　làɴ　　dá　　làɴ　　díθúɪ
　見る　(下方)　見つける　(下方)　カエル
　(下を見てカエルを見つけよ)

この動詞連続における V1 の jū làɴ は、次のように命令文になれるので意志動詞である。

(63) jū　　làɴ　　díθúɪ
　見る　(下方)　カエル
　「カエルを見下ろせ」

一方、V2 の dá làɴ は、次のように、命令文になることができない。

(64) *dá　　làɴ　　díθúɪ
　見える　(下方)　カエル
　「カエルを見つけろ」

つまり、(61) の動詞連続は「意志動詞＋無意志動詞」という組み合わせになっており、全体としては無意志動詞の特徴を帯びている。この事実は、意志性の側面から見ても、主語同一型の連結型動詞連続が V2 の特徴を受け継ぐことを意味する。つまり、主語同一型の連結型動詞連続は、項の取り方においても意志性においても、動詞連続全体としては V2 の特徴を受け継ぐということになる。なお、「無意志動詞＋意志動詞」という組み合わせは現時点で見つかっていない。

以上見てきたように、主語同一型の連結型動詞連続においては、V2 が動詞連続全体の特徴を決定する主導権を握っている。

17.3.3.2 主語非同一型の主動詞

次に、主語非同一型について考察する。このタイプの動詞連続は、一般的に、V1 が何らかの動作を表し、V2 はそれによって被動者に生じる状態や状態変化を表す。

例を下に挙げる。

(65) jə-　　dʊ́　　θî　　thwí
　1sg　殴る　死ぬ　犬
　「私は犬を殴り殺した」

(66) jə-　　kwà　　làɴchɛ̀　　châiɴ
　1sg　掛ける　ぶら下がる　シャツ
　「私は服を（掛けて）ぶら下げた」

(67) ʔəwê　　thàʊ　　chêiɴ　　ʔə-　　mɛ́
　3se　　こする　清潔な　3sg　歯
　「彼は（自分の）歯をみがいてきれいにした」

まず、項の取り方を見てみよう。(65)〜(67) の V1 と V2 を一方ずつ取り除いてみる。以下、(a) が V2 を取り除いたもの、(b) が V1 を取り除いたものである。

(68) a. jə-　dʊ́　thwí
　　1sg　殴る　犬
　　「私は犬を殴った」

　　b. *jə-　θî　thwí
　　1sg　死ぬ　犬

(69) a. jə-　kwà　châiɴ
　　1sg　掛ける　シャツ
　　「私はシャツを掛けた」

　　b. *jə-　làɴchɛ̀　châiɴ
　　1sg　ぶら下がる　シャツ

(70) a. ʔəwê　thàʊ　ʔə-　mɛ́
　　3se　こする　3sg　歯
　　「彼は歯をみがいた」

　　b. *ʔəwê　chêiɴ　ʔə-　mɛ́
　　3se　清潔な　3sg　歯

V1 を取り除いたものはすべて不適格になる。このことから、主語非同一型では、V1 が動詞連続全体の項の取り方を決定していると考えることができる。

一方、意志性を見てみると、主語非同一型は、動詞連続全体が意志動詞としての特性を帯びる。それは、次に示すように、これらの動詞連続がそのままの形で命令文になることから明らかである。

(71) dʊ́　θî　thwí
　　殴る　死ぬ　犬
　　「犬を殴り殺せ」

(72) kwà　làɴchɛ̀　châiɴ
　　掛ける　ぶら下がる　シャツ
　　「服を（掛けて）ぶら下げろ」

(73) thàʊ　chêiɴ　nə-　mɛ́
　　こする　清潔な　2sg　歯
　　「歯をみがいてきれいにしろ」

個々の動詞は、常に V1 が意志動詞、V2 が無意志動詞である。主語非同一型で、V1 と V2 の組み合わせが「意志動詞＋意志動詞」「無意志動詞＋無意志動詞」「無意志動詞＋意志動詞」となるような例は見つかっていない。例えば、次は、「意志動詞＋無意志動詞」の組み合わせ以外で主語非同一型として解釈できそうな文を無理に作ってみたものである。

(74) *jə-　dʊ́　chînàɴ　thwí
　1sg　殴る　座る　犬
　（私は犬を殴って座らせた）

(75) *jə-　bá　ɣàɣòɴ　pàitərâɴ
　1sg　ぶつかる　壊れる　戸
　（私は戸にぶつかって戸を壊してしまった）

(76) *jə-　bá　chînàɴ　thwí
　1sg　ぶつかる　座る　犬
　（私は犬にぶつかって犬を座らせた）

(74) は「意志動詞＋意志動詞」、(75) は「無意志動詞＋無意志動詞」、(76) は「無意志動詞＋意志動詞」の例である。いずれも不適格な文になっている。まとめると、主語非同一型は全体として常に意志動詞としての特徴を持ち、また常に、V1 は意志動詞、V2 は無意志動詞である。すなわち、動詞連続全体の意志性は V1 が決定していると言える。

上で見てきたことから、主語非同一型においては、項の取り方についても意志性についても、動詞連続全体が V1 の特徴を受け継いでいると考えることができそうである。ところが、この一般化に反するかのように見える次のような例がある。

(77) jə-　khə́ɯɴ　làɴbə̀ɴ　phlòʊɴcʊ́
　1sg　掘る　埋まる　死体
　「私は死体を埋めた」

ここで動詞連続の目的語になっている phlòʊɴcʊ́「死体」は、V1 の khə́ɯɴ「掘る」の被動者ではない。「掘る」という動作の被動者は「死体」ではなくて「土」である。したがって、この文の V2 を削除して V1 だけを残すと、次のような容認できない文ができる。

(78) *jə-　khə́ɯɴ　phlòʊɴcʊ́
　1sg　掘る　死体

動詞連続の目的語である phlòʊɴcʊ́「死体」は、V1 が表す動作とは何の関係もなく、V2 の làɴbə̀ɴ が表す事象の被動者としてしか解釈できない。つまり、この例においては、動詞連続全体の特徴すべてを V1 のみが決定していると言ってしまうことはできないのである。しかしこの場合でも、全体として見れば、動詞連続の特徴の決定は V1 に優先権があるように思われる。その理由は次のとおりである。

- 動詞連続全体は他動詞として働く。これは V1 の特徴である。V2 の自動詞としての特徴は動詞連続には受け継がれていない。
- 動詞連続全体は意志動詞として働く。すなわち、命令文 khə́ɯɴ làɴbə̀ɴ phlòʊɴcʊ́「死体を埋めろ」が可能である。一方、V1 の khə́ɯɴ「掘る」は意志動詞で、V2 の làɴbə̀ɴ「埋まる」は無意志動詞である。よって動詞連続の意志性は V1 と同一である。

すなわち、動詞連続全体のありとあらゆる特徴を V1 が決定するわけではないが、V1 に決定の優先権が与えられていると考えてよいのではないだろうか。

結論として、主語非同一型の連結型動詞連続においては、V1 が動詞連続の性質を決定する主導権を握っていると言ってよいと思われる。

17.3.3.3 連結型における主動詞のまとめ

上で見たように、連結型動詞連続の主動詞は、主語同一型と主語非同一型とで異なる。主語同一型では V2 が主動詞であると考えられ、主語非同一型では V1 が主動詞であると考えられる。上で述べたことを表にまとめておく。

	論理的主語	主動詞
自動詞＋自動詞 自動詞＋他動詞 他動詞＋他動詞	同一指示	V2
他動詞＋自動詞	非同一指示	V1

17.3.4　連結型における動詞の配列規則

連結型の動詞連続における動詞の配列は、17.3.1 に述べたとおり、事象開始の時間的順序に従うのだった。今一度次の文を見ていただきたい。

(79) jūɪ　**ʔáiɴ**　**chó**　kʊ́　(=12)
　ねずみ　くわえる　運ぶ　菓子
　「ねずみが菓子をくわえて運んだ」

(80) jūɪ　**chó**　**ʔáiɴ**　kʊ́　(=13)
　ねずみ　運ぶ　くわえる　菓子
　「ねずみが菓子を運んでくわえた」

(79) と (80) の動詞連続は、V1 と V2 の位置が逆になっているだけである。V1 と V2 は事象の開始した順に並べられるので、「くわえる」という事象と「運ぶ」という事象の開始した順序は、(79) の場合には、「くわえる」が先で「運ぶ」が後、(80) の場合には、「運ぶ」が先で「くわえる」が後ということになる。そこで、

(81) ＜配列規則 1 ＞動詞は事象開始の時間的順序に沿って並べられる。

という連結型動詞連続における動詞の配列規則を設定することにする。

連結型動詞連続には、この規則以外に、動詞の配列についての規則が二つある。一つは、自動詞と他動詞の組み合わせにおける配列の規則であり、もう一つは、移動動詞を含む場合の配列の規則である。

最初に、自動詞と他動詞の組み合わせに関する配列規則を見てみよう。17.3.3 で見たように、連結型における自動詞および他動詞の組み合わせには、「自動詞＋自動詞」、「自動詞＋他動詞」、「他動詞＋他動詞」、「他動詞＋自動詞」という四つの組み合わせがあり得、このうち前者三つは主語同一型、最後の一つは主語非同一型と規定できるのだった。ここで生じる疑問は、最後の「他動詞＋自動詞」の組み合わせの場合に、論理的主語が同一指示になることはないのかということである。

実は、そのようなケースは現段階で一つも見つかっていない。おそらくは、「他動詞＋自動詞」という組み合わせで、論理的主語が同一指示になることは不可能である。というのは、次のような動詞連続は不適格だからである。

(82) *ʔɔ̀　　ʔɔ́pwài
　　飲む　休む
　　「（酒などを）飲んで休む」

(83) *phóɴ　　chîthə́ɯɴ thánɴ
　　つかむ　立ち上がる
　　「（綱などを）つかんで立ち上がる」

「酒を飲んで休む」「綱をつかんで立ち上がる」という内容を表現したければ、例えば、次のように二つの節に分解して表現する必要がある。

(84) jə-　ʔɔ̀　　θài　ɣòɴ |　jə-　ʔɔ́pwài
　　1sg　飲む　酒　　(継起)　1sg　休む
　　「私は酒を飲んで休んだ」

(85) jə-　phóɴ　　phlì　ɣòɴ |　jə-　chîthə́ɯɴ thánɴ
　　1sg　つかむ　綱　　(継起)　1sg　立ち上がる
　　「私は綱をつかんで立ち上がった」

そこで、本論文では、連結型動詞連続の配列規則に、次のような規則があるのだと考える。

(86) ＜配列規則 2 ＞ V1 と V2 の論理的主語が同一指示であるような「他動詞＋自動詞」という配列の連結型動詞連続は許されない。

実は、この規則を守るために、＜配列規則 1 ＞を破ったと思われる動詞連続の例がある。

(87) jə-　mî　　kòɴ　　thədòɴ
　　1sg　眠る　穿く　腰布
　　「私は眠りながらサロン（腰布）を穿いた／私はサロンを穿いて眠った」

この動詞連続は、二つの解釈が可能である。一つは、「眠りながらサロンを穿いた」といういささか不自然な解釈、もう一つは、「サロンを穿いて寝た」という解釈である。前者の場合、「眠る」という事象が開始した後で、「穿く」という事象が開始している。一方、後者の場合はその逆で、「穿く」という事象が開始してから「眠る」という事象が開始している。この文に接したポー・カレン語話者は、普通、後者の解釈をする。ところが、「サロンを穿いて寝た」という解釈の場合、この文の動詞連続は、配列が時系列に従っていないことになる。もし、時系列に従って動詞を配列するとすれば、kòɴ mî(はく＋眠る) となるはずである。ところが、このような動詞の配列は許されない。

(88) *jə-　kòɴ　　mî
　　1sg　はく　眠る

(87) の動詞連続は、論理的主語が同一指示であるところの「他動詞＋自動詞」という組み合わせを避けるため、あえて、＜配列規則 1 ＞を破ったのではないか。しかし、このことをもって、＜配列規則 2 ＞を、「V1 と V2 の論理的主語が同一指示である場合、『他動詞＋自動詞』という配列の連結型動詞連続は、V1 と V2 を入れ換えなければならない」と変え

ることはしない。なぜなら、これは極めてまれなケースだと考えられるからである。実は (87) は、著者のデータにおいて、下で述べる移動動詞を含む場合を除くと、時系列に従わない唯一の例である。これが特殊なケースであることの証拠に、先ほどの (82) と (83) は、V1 と V2 を入れ換えると、言いたいことが言い表せない。

(89) ʔɔ́pwài　ʔɔ̀
休む　飲む

(90) chîthə́ɯɪɴ thánɴ　phónɴ
立ち上がる　つかむ

これらは、「休みながら（酒などを）飲む」「立ち上がって（綱などを）つかむ」という意味は表せても、「（酒などを）飲んで休む」「（綱などを）つかんで立ち上がる」という意味は表すことはできないのである。つまり、V1 と V2 を入れ換えると、表したい意味は得られない。(87) が可能になるのがいかなる理由によるのかは分からない。ひょっとすると、ここでは「はく」行為と「眠る」行為が同時的と捉えられており、＜配列規則 1 ＞を破っているのではないのかもしれない。いずれにせよ、論理的主語が同一指示の「他動詞＋自動詞」という組み合わせは、ただ単に「自動詞＋他動詞」という組み合わせに変えれば適格になるというわけではないことは明らかである。

次に、移動を表す動詞が現れた場合の配列規則を見ていく。まず、次の例を見ていただきたい。V2 の kò は、元来、「(名前などを) 呼ぶ」という意味であるが、「誘う」という意味も表す。

(91) jə-　ɣɛ̂　kò　ʔəwê
1sg　来る　誘う　3se
「私は彼を誘いに来た／私は彼を誘って連れて来た」

この動詞連続 ɣɛ̂ kò は、「誘いに来た」あるいは「誘って連れて来た」という二つの状況を表すことができる。前者の状況は、「私」がどこかに移動して、その後、「彼」を「誘う」という状況である。後者の状況は、「彼」を誘い、その後、「私と彼」が一緒に移動するという状況である。前者の場合、「来る」という事象が生起した後に「誘う」という事象が生起するのであるから、動詞は時系列に従って並んでいる。一方、後者の状況では、「誘う」という事象が生起した後に、「来る」という移動が生じるのだから、この動詞の配列は時系列に沿っていない[2] 。

次の動詞連続も同様である。

(92) jə-　ɣɛ̂　klí
1sg　来る　走る
「私は来て走った（走るために来た）／私は走って来た」

この例の動詞連続 ɣɛ̂ klí は、「走りに来た（走るために来た)」、すなわち「来る」という移動の後で「走る」という動作を行うという状況と、「走って来た（走りながら来た)」、すなわち、「走る」という動作を行うことによって「来る」という移動を行うという状況の

[2]ちなみにカレン語に隣接するビルマ語の動詞連続では、「誘いに来る」は là khɔ̀ dɛ̀(来る-誘う-現実法)、「誘って来る」は khɔ̀ là dɛ̀(誘う-来る-現実法) となる。

両方を表すことができる。後者の場合、「走る」という事象と「来る」という事象は、ほぼ同時的に生じてはいるが、「走る」という動作を行うことによって初めて「来る」という移動が生じるはずであるから、やはり、動詞の配列が時系列に沿っていないと考えることができる。

このように、時系列に沿わない配列になるのは、V1 が lì「行く」や ɣɛ̂「来る」などの移動を表す動詞であり、かつ、(i) V2 の表す動作の被動者が動作主とともに移動するような場合 (上の (91))、あるいは、(ii) V2 の表す事象が移動を必然的に伴う動作である場合 (上の (92)) である。次の (93) は (i) に該当する例、(94) は (ii) に該当する例である。

(93) jə-　lì　chó　nʊ́wé
　1sg　行く　持ち上げる　箒
　「私は箒を持って行った」

(94) jə-　lì　cáiɴ
　1sg　行く　歩く
　「私は歩いて行った」

(i)(ii) の条件に合わない例を見てみよう。次の動詞連続は、V2 の表す動作の被動者が、動作主とともに移動しないので、(i) の条件には合わず、時系列に沿った解釈のみが可能である。

(95) jə-　ɣɛ̂　jʊ̄phə̀ɴ　chəɣàɴmə̂ɴ
　1sg　来る　見る　映画
　「私は映画を見に来た／*私は映画を見てきた」

「映画を見てきた」ということを言うためには、例えば次のようにする必要がある。

(96) jə-　jʊ̄phə̀ɴ　chəɣàɴmə̂ɴ　ɣòɴ |　ɣɛ̂　jò
　1sg　見る　映画　(継起)　来る　ここ
　「私は映画を見てからここに来た」

次の動詞連続は、話者によって、時系列に沿わないほうの解釈「ご飯を食べて来た」を良くないとする場合がある。

(97) jə-　ɣɛ̂　ʔáɴ　mì
　1sg　来る　食べる　ご飯
　「私はご飯を食べに来た／ (?) 私はご飯を食べて来た」

この動詞連続に対する適否判断は、おそらく、食べ物が体内に残っていてそれが動作主とともに移動したと考えるか、食べ物は食べた時点でなくなっているのであって動作主とともに移動することはないと考えるかによって、分かれるのではないかと思われる。次に (ii) の条件に合わない例を見てみる。(98) に示す動詞連続は、V2 の表す事象が移動を含むものではないので、時系列に沿った解釈のみが可能である。

(98) jə-　ɣɛ̂　ʔɔ́pwài
　1sg　来る　休む
　「私は休みに来た／*私は休んで来た」

「休んで来た」すなわち、「休んでからやって来た」ということを言い表すためには、例えば次のようにする必要がある。

(99) jə-　ʔɔ́pwài　ɣòɴ |　ɣɛ̂　jò
　　1sg　休む　(継起)　来る　ここ
　　「私は休んでからここに来た」

ところで、上に挙げたような、V1 として移動動詞を持ち、時系列に沿わない動詞連続の V1 と V2 を入れ換えることはできるのだろうか。もしこれらが＜配列規則 1 ＞に従うのであれば、入れ換えは可能なはずである。そこで、lì と ɣɛ̂ が使われた動詞連続を例に取り、V1 と V2 を入れ換えてみよう。下に示すように、V1 と V2 を入れ換えて V2 の位置に移動動詞を持ってくると、ことごとく不適格となる。

(100) lì「行く」の例

lì klí　（行く＋走る intr.）「走って行く」

*klí lì

lì cáiɴ　（行く＋歩く intr.）「歩いて行く」

*cáiɴ lì

lì kò　（行く＋誘う tr.）「誘って行く」

*kò lì

lì chó　（来る＋持ち上げる tr.）「持って行く」

*chó lì

(101) ɣɛ̂「来る」の例

ɣɛ̂ klí　（来る＋走る intr.）「走って来る」

*klí ɣɛ̂

ɣɛ̂ cáiɴ　（来る＋歩く intr.）「歩いて来る」

*cáiɴ ɣɛ̂

ɣɛ̂ kò　（来る＋誘う tr.）「誘って来る」

*kò ɣɛ̂

ɣɛ̂ chó　（来る＋持ち上げる tr.）「持って来る」

*chó ɣɛ̂

このように、lì と ɣɛ̂ の場合、時系列に沿うように V1 と V2 を入れ換えると、容認不可能となる。そこで、ポー・カレン語の連結型動詞連続の配列の規則に、やはり＜配列規則 1 ＞よりも強力な、次の規則があるのだと考える。

(102) ＜配列規則 3 ＞移動動詞は、時間的順序に関わらず、常に非移動動詞よりも先に現れなければならない。

lì と ɣɛ̂ 以外でこの「移動動詞」に含まれる動詞は、thàiɴ「帰る」、thánɴ「のぼる、あがる」、làɴ「おりる、さがる」の三つである。これらの動詞を V1 として取った動詞連続は、次に示すように、時系列に沿わない解釈を許す。これまで見てきた lì や ɣɛ̂ と同様である。

(103) jə-　thàiɴ　klí
　　1sg　帰る　走る
　　「私は走って帰った」

(104) jə-　thánɴ　klí
　　1sg　上る　走る
　　「私は走って上がった」

(105) jə-　làɴ　klí
　　1sg　下りる　走る
　　「私は走って下りた」

また、これらが V2 として現れることもない[3]。したがって、(102) で「移動動詞」と呼んだ動詞には、lì, ɣɛ̂, thàiɴ, thánɴ, làɴ という五つの動詞が含まれることになる。

ところで、移動動詞は同一の連結型動詞連続の中で複数個現れることができる。また、移動動詞だけで連結型動詞連続を形成することもできる。移動動詞が複数個現れる場合、移動動詞の配列は常に、次に図示する順序に従う。この表は、同一スロットに属するもの、つまり lì と ɣɛ̂ あるいは thánɴ と làɴ が連結型動詞連続の中では決して共起しないということ、また、左側のスロットにあるものが、常に右側のスロットにあるものよりも常に優先的に左側に現れるということを表している。

(106)

lì「行く」 ɣɛ̂「来る」	thàiɴ「帰る」	thánɴ「のぼる」 làɴ「おりる」

以下に例を示す。下に挙げる例は、いずれも、移動動詞のみからなる連結型動詞連続である。これらの V1 と V2 の順を逆にすることはできない。

(107) ʔəwê　ɣɛ̂　thàiɴ　lé　ləkōʊɴ
　　3se　来る　帰る　(場)　ヤンゴン
　　「彼はヤンゴンから帰って来た」

(108) ʔəwê　lì　thánɴ　lé　nʊ̄　phàɴ
　　3se　行く　上る　(場)　宮殿　中
　　「彼は宮殿の中へとあがって行った」

[3] klí **thàiɴ**, klí **thánɴ**, klí **làɴ** という形じたいは存在する。それぞれ、「再び走る」「上に向かって走る」「下に向かって走る」という意味を表す。この thàiɴ, thánɴ, làɴ は動詞助詞である。つまり、これらは動詞連続ではない。なぜなら、klí dàiɴ, klí ʁánɴ, klí ʁàɴ という発音が可能だからである (第 18 章参照)。

(109) ʔəwê　thàiɴ　làɴ　　ɣéiɴ
　　3se　　帰る　　下りる　家
　　「彼は (山を) 下りて (山のふもとの) 家に帰った」

下に挙げた例は、上に示したすべてのスロットに移動動詞が現れた動詞連続である。

(110) ʔəwê　lì　　thàiɴ　làɴ　　chái　phɔ̀ɴ
　　3se　　行く　帰る　　下りる　田　　中
　　「彼は帰って行って田んぼに下りた」

この三つの動詞の順序を変えることはできない。

以上見てきたように、連結型動詞連続における動詞の配列には三つの配列規則がある。下に三つをまとめて挙げておく。

＜配列規則 1 ＞動詞は事象開始の時間的順序に沿って並べられる。

＜配列規則 2 ＞ V1 と V2 の論理的主語が同一指示であるような「他動詞＋自動詞」という配列の連結型動詞連続は許されない。

＜配列規則 3 ＞移動動詞は、時間的順序に関わらず、常に非移動動詞よりも先に現れなければならない。

＜配列規則 2 ＞と＜配列規則 3 ＞は、どちらも、＜配列規則 1 ＞より強力である。したがって、動詞が事象開始の時間的順序に従って並べられていたとしても、論理的主語が同一指示で「他動詞＋自動詞」という配列になっていれば、その動詞連続は＜配列規則 2 ＞によって排除される。また、動詞が事象開始の時間的順序に従って並べられていたとしても、移動動詞が非移動動詞の後ろに現れた動詞連続は＜配列規則 3 ＞によって排除される。＜配列規則 2 ＞と＜配列規則 3 ＞は、互いに無関係な規則である。

まとめると、連結型動詞連続における動詞の配列は、時間的順序に従って並べるということを基本的原則としながらも、自動詞・他動詞の組み合わせや、移動動詞の存在をにらみあわせながら決められていくということが言える。

17.3.5　V2 事象の実現が含意されない動詞連続

連結型動詞連続の中には、V2 が表す事象の実現が含意されない動詞連続がある。次の二つの場合である。

- 主語非同一型の動詞連続
- V1 として移動動詞を持つ動詞連続

これらの動詞連続では、たとえ過去に生じた事象に言及した動詞連続であっても、V2 が表す事象が実現したことは意味論的に含意されない (語用論的には含意される可能性もある)。したがって、V2 の実現を否定するような表現を後ろに置いても矛盾をきたさないという現象が見られる。

まず、主語非同一型の動詞連続について見てみる。

(111) jə-　dʊ́　θî　thwí　(=65)
1sg　殴る　死ぬ　犬
「私は犬を殴り殺した」

(112) jə-　kwà　làɴchɛ̀　châiɴ　(=66)
1sg　掛ける　ぶら下がる　シャツ
「私は服を（掛けて）ぶら下げた」

(113) ʔəwê　thàʊ　chêiɴ　ʔə-　mɛ́　(=67)
3se　こする　清潔な　3sg　歯
「彼は（自分の）歯をみがいてきれいにした」

これらの動詞連続においては、V2 が表す事象の実現は含意されない。そのため、次のように、V2 が表す事象の実現を否定する表現を動詞連続の後ろに置いても、矛盾をきたさない。

(114) jə-　dʊ́　θî　thwí.　lānânɴ θí　θî　ʔé
1sg　殴る　死ぬ　犬　しかし　死ぬ　(否)
「私は犬を殴り殺した。しかし、死ななかった」

(115) jə-　kwà　làɴchɛ̀　châiɴ.　lānânɴ θí　làɴchɛ̀　ʔé
1sg　掛ける　ぶら下がる　シャツ　しかし　ぶら下がる　(否)
「私は服をぶら下げた。しかし、かからなかった」

(116) ʔəwê　thàʊ　chêiɴ　ʔə-　mɛ́.　lānânɴ θí　chêiɴ　ʔé
3sg　こする　清潔な　3sg　歯　しかし　清潔な　(否)
「彼は歯をみがいてきれいにした。しかし、きれいにならなかった」

おそらく、主語非同一型の動詞連続において V2 の表す事象は、行為者が「実現を期待した」事象なのだと思われる。このように考えれば、V2 の表す事象は行為者の頭の中に思い描かれたものに過ぎないことになり、V2 の表す事象の実現が含意されないことが説明できる。

次に、もう一つの、移動動詞を含む場合を見てみよう。主語同一型の動詞連続であっても、移動動詞を含む動詞連続は、V2 の表す事象の実現が含意されない。したがって、V2 が表す事象の実現を否定する表現を後ろに置いた、次のような例は矛盾をきたさない。

(117) jə-　lʉ̀　xwè　já.　lānânɴ θí　xwè　ʔé
1sg　行く　買う　魚　しかし　買う　(否)
「私は魚を買いに行った。しかし、買わなかった」

(118) ʔəwê　ɣɛ̂　jʊ̄phònɴ　chəɣànmônɴ.　lānânɴ θí　jʊ̄phònɴ　ʔé
1sg　来る　買う　映画　しかし　見る　(否)
「彼は映画を見に来た。しかし、見なかった」

(119) jə-　thàiɴ　mî.　lānâɴ θí　mî　ʔé
1sg　帰る　寝る　しかし　寝る　(否)
「私は寝に帰った。しかし、寝なかった」

しかし、移動動詞を含む場合であっても、時系列に従わない配列の動詞連続では、V2 の表す事象の実現が含意されるということに注意しなければならない。したがって、このような動詞連続では、V2 の表す事象の実現を否定する表現を後ろに置くと、矛盾を生じてしまう。

(120) *ʔəwê　lì　tháʊ　kā.　lānâɴ θí　tháʊ　kā　ʔé
1sg　行く　乗る　自動車　しかし　乗る　自動車　(否)
(彼は自動車に乗って行った。しかし自動車に乗らなかった)

(121) *jə-　ɣɛ̂　xwè　já.　lānâɴ θí　xwè　ʔé
1sg　行く　買う　魚　しかし　買う　(否)
(私は魚を買ってきた。しかし買わなかった)

移動を表す動詞を含み、動詞の配列が時系列に沿う場合、V2 が表す事象は、行為者が「計画した」事象と捉えることができるだろう。このように考えれば、ここでも V2 の表す事象は行為者の頭の中に思い描かれたものに過ぎないことになり、V2 の表す事象の実現が含意されないということが説明できる。

以上のように、主語非同一型の動詞連続と、V1 として移動動詞を持つ動詞連続（時間順に沿った配列の場合）では、たとえ過去の事象についての言及であっても、V2 の事象の実現は含意されない。これ以外の場合、V2 が表す事象の実現は常に含意される。したがって、次のように、V2 が表す事象の実現を否定する表現を後ろに置くと、矛盾をきたしてしまう。

(122) *jə-　chînàɴ　pɔ̄　láiʔàʊ.　lānâɴ θí　pɔ̄　ʔé
1sg　座る　読む　本　しかし　読む　(否)
(私は座って本を読んだ。しかし、読まなかった)

(123) *jə-　ʔánphôɴ　ʔáɴ　mì.　lānâɴ θí　ʔáɴ　ʔé
1sg　炊く　食べる　ご飯　しかし　食べる　(否)
(私はご飯を炊いて食べた。しかし、食べなかった)

ポー・カレン語の動詞連続において、V1 あるいは V2 が表す事象の実現が含意されないものとしては、ここで述べたもの以外に、分離型動詞連続の可能タイプにおいて V1 が表す事象の実現が含意されないという事実がある。しかし、V2 が表す事象の実現が含意されないのは、ポー・カレン語の動詞連続すべてを通じて、ここで述べた二つのケースのみである。なお、実現が含意されないというのはあくまでも意味論的にであって、語用論的には実現したと解釈するほうが自然な場合も多々あることに注意されたい。

17.3.6　3 個以上の動詞からなる連結型動詞連続

連結型動詞連続は、2 個の動詞からなるものが多い。しかし、3 個以上の動詞からなる連結型動詞連続もある。例えば次のようなものである。

(124) kəlôɴ　ɣɛ̂　thàiɴ　phóɴ　jʊ̄　xîphàɴ　kháɴ　tā ...
急ぐ　来る　帰る　つかむ　見る　(人名)　足　(前提)
「急いで帰ってきてフイパウンの足を見ると...」(IV-04.390)

この文の動詞連続は、kəlôɴ「急ぐ」, ɣɛ̂「来る」, thàiɴ「帰る」, phóɴ「つかむ」, jʊ̄「見る」という 5 個の動詞からなっている。このような動詞連続も、「V1+V2」という 2 個づつの動詞の組み合わせに還元して考えることができる。この動詞連続を見てみると、意味的に緊密な部分が何ヶ所かあるのが分かる。5 個の動詞のうち、ɣɛ̂「来る」と thàiɴ「帰る」は、ともに移動動詞であり、この 2 個で、直示中心への移動を表す。この 2 動詞はともに自動詞なので、全体としては自動詞として働く。次に、phóɴ「つかむ」と jʊ̄「見る」も、「つかんで見る」という一続きの動作と考えることができる。この 2 動詞はともに他動詞なので、全体としては他動詞として働く。さらに、ɣɛ̂ thàiɴ「帰ってくる」と phóɴ jʊ̄「つかんで見る」は、全体で「帰ってきて、つかんで見る」という一続きの動作と考えることができるだろう。ɣɛ̂ thàiɴ は自動詞、phóɴ jʊ̄ は他動詞の特徴を持つので、ɣɛ̂ thàiɴ phóɴ jʊ̄ 全体は他動詞の特徴を持つ。最後に、kəlôɴ「急ぐ」は、ɣɛ̂ thàiɴ phóɴ jʊ̄ 全体の様態を表していると考えられる。kəlôɴ は自動詞であり、ɣɛ̂ thàiɴ phóɴ jʊ̄ は他動詞の特徴を持つので、kəlôɴ ɣɛ̂ thàiɴ phóɴ jʊ̄ は、全体としては他動詞として機能する。つまり、各動詞がこのような小さなまとまりを形成し、それぞれが V1 や V2 として大きなまとまりになっていくと考えることができる。これを図示すると次のようになる。同じ大きさの括弧は、同レベルにおける V1 と V2 を表す。

(125)

$$\left[_{V1}\ \text{kəlôɴ}\right]\quad\left[_{V2}\ \left[_{V1}\ [_{V1}\ \text{ɣɛ̂}\ ]\quad[_{V2}\ \text{thàiɴ}\ ]\right]\quad\left[_{V2}\ [_{V1}\ \text{phóɴ}\ ]\quad[_{V2}\ \text{jʊ̄}\ ]\right]\right]$$

主動詞について考えてみると、kəlôɴ は自動詞であり、ɣɛ̂ thàiɴ phóɴ jʊ̄ は他動詞としての振る舞いを示すから主語同一型であり、よって ɣɛ̂ thàiɴ phóɴ jʊ̄ がこのレベルの主動詞と考えられる。また、ɣɛ̂ thàiɴ は自動詞としての振る舞いを示し、phóɴ jʊ̄ は他動詞としての振る舞いを示すから主語同一型であり、よって phóɴ jʊ̄ がこのレベルの主動詞であると考えられる。そして、phóɴ も jʊ̄ も他動詞であるから主語同一型であり、jʊ̄ がこのレベルの他動詞であると考えられる。kəlôɴ ɣɛ̂ thàiɴ phóɴ jʊ̄ 全体の主動詞も、やはりこの jʊ̄ であると見なすことができるだろう。

上では、動詞と動詞のまとまり方 (切れ方) が自明であるかのような説明をしたが、実際には一義的には決まらないと考えるべきである。この動詞連続においては、最初の動詞の kəlôɴ「急ぐ」 は、意味的に、ɣɛ̂ thàiɴ phóɴ jʊ̄ 全体にかかっているのではなく、もしかすると、ɣɛ̂ thàiɴ だけにかかっているのかもしれない。もしそうだとすれば、この動詞連続の構成は次のようになっているのかもしれない。

(126)

$$\left[_{V1}\ \left[_{V1}\ \text{kəlôɴ}\right]\quad \left[_{V2}\ [_{V1}\ \text{ɣɛ̂}\ ]\quad [_{V2}\ \text{thàiɴ}\ ]\right]\right]\quad \left[_{V2}\ [_{V1}\ \text{phóɴ}\ ]\quad [_{V2}\ \text{jʊ̄}\ ]\right]$$

このように一つの動詞連続に対して、複数の解釈があてはまる場合も十分にあり得る。しかし、複数の解釈があてはまる場合があるにせよ、三つ以上の動詞からなる連結型動詞連続は、上で述べたように、動詞二つからなる動詞連続が複数個合わさったものと見ることができる。

別の例を見てみよう。まず、次の文の動詞連続は、「歩いて探す」と「水を飲む」に切るのが自然だと思われる。

(127) cáiɴ　ʔánxʊ̂ʊ̀　ʔɔ̀　thî
　　歩く　探す　飲む　水
　　「歩いて水を探しあてて飲む」(III-06.20)

そこで、この動詞連続の構成は次のように図示できる。

(128)

$$\left[_{V1}\ [_{V1}\ \text{cáiɴ}\ ]\quad [_{V2}\ \text{ʔánxʊ̂ʊ}\ ]\right]\quad \left[_{V2}\ \text{ʔɔ̀}\ \right]$$

この動詞連続は、cáiɴ ʔánxʊ̂ʊ いうまとまりが「自動詞＋他動詞」なので、他動詞として機能し、このまとまりに対応する同レベルの動詞 ʔɔ̀ はやはり他動詞なので、全体としてこの動詞連続は主語同一型の組み合わせ「他動詞＋他動詞」となる。そこで、動詞連続全体の主動詞は ʔɔ̀ であると考えられる。

次の動詞連続は、「置く」と「腐って乾く」に切るのが自然であろう。

(129) ʔɔ́kí　ʔʊ́ʊ　thánɴ　θài
　　置く　腐る　(変化)　乾く
　　「発酵して乾くように、(魚醤を) 置いておく」(III-13.14)

そこで、この動詞連続の構成は次のように図示することができる。

(130)

$$\left[_{V1}\ \text{ʔɔ́kí}\ \right]\quad \left[_{V2}\ [_{V1}\ \text{ʔʊ́ʊ thánɴ}\ ]\quad [_{V2}\ \text{θài}\ ]\ \right]$$

後半の ʔʊ́ʊ thánɴ θài は「自動詞＋自動詞」なので、自動詞として機能する。最初の動詞 ʔɔ́kí は他動詞なので、動詞連続全体としては「他動詞＋自動詞」となる。そこで、動詞連続全体の主動詞は ʔɔ́kí であると考えることができる。この動詞連続は、全体として、主語非同一型の動詞連続になっているのである。

このように、3 個以上の動詞からなる連結型動詞連続は、2 個の動詞からなる連結型動詞連続に還元して理解することができる。一つの連結型動詞連続にいったい最高いくつまでの動詞が含まれ得るのかは、今のところ分からない。無限な数の動詞を並べることができるということはあり得なさそうに見える。長くなりすぎると意味的な齟齬も出てくるだろうし、記憶の負担も大きくなるだろうからである。筆者のデータの中では、(124) に示した kəlôɴ ɣɛ̂ thàiɴ phóɴ jʊ̄ が最も動詞の数の多い連結型動詞連続 (5 個) である。

17.3.7　連結型動詞連続の形態統語論上の位置づけ

連結型動詞連続が形態論レベルの現象なのか、それとも統語論レベルの現象なのかは、ポー・カレン語文法の記述における非常に大きな問題の一つである。実は、現在に至るまで、この問いに対する答えを筆者は得られていない。というのも、連結型動詞連続は、ある一面では形態論的であり、また別の面では統語論的だからである。

まず、形態論的な特徴を述べる。次の文を見ていただきたい。

(131) jə-　pàʊ　thánɴ　jʊ̄　chəkhlôʊɴ　(=44)
1sg　開ける　(完成)　見る　外
「私は（戸を）開けて外を見た」

上で論じたとおり、この動詞連続における V1 は被動者名詞句を取ることができないのだった。ポー・カレン語の統語的現象の中で、動詞の取る名詞句が現れない (すなわちゼロとなる) 現象には次の二つがある。以下の議論では、あくまでも便宜的に「現れない名詞句」を ∅ で示しておく。

一つは、次の (132) に対して (133) のように答える場合に典型的に見られる任意のゼロ照応である。

(132) ʔəwê　lì　ʁâ
3se　行く　(疑)
「彼は行ったか?」

(133) ∅　lì
行く
「(彼は) 行った」

このような場合、統語論的には名詞句を顕在化することはまったく問題がない。したがって、答えの文を次のようにしてもまったくかまわない。

(134) ʔəwê　lì
3se　行く
「彼は行った」

任意のゼロ照応は、副詞節と主節の間でも生じる。

(135) ʔəwê　lì　phjâ　θɛɣòɴ |　∅　xwè　kʊ́
3se　行く　市場　(継起)　買う　菓子
「彼は市場に行って菓子を買った」

この文の主節の主語を顕在化しても、くどい表現にはなるが、統語論的にはまったく問題がない。

(136) ʔəwê　lì　phjâ　θɛɣòɴ |　ʔəwê　xwè　kʊ́
3se　行く　市場　(継起)　3se　買う　菓子
「彼は市場に行って菓子を買った」

ポー・カレン語の副詞節では、名詞句が統語論的に義務的に削除されることはない。以上のようなゼロ照応は、任意に生じるものであり、名詞句を顕在化してもまったく問題がない。

名詞句が現れない現象のもう一つは、名詞句が生じないことが義務的なゼロ照応で、この現象は、動詞句が目的語として現れた (137) のような場合と、次節で論じる (138) のような分離型動詞連続に見られる。

(137) jə-　θànánɴ　∅　ʔánɴ　mì
　　1sg　忘れる　食べる　ご飯
　　「私はご飯を食べるのを忘れた」

(138) jə-　ʔánɴ　mì　∅　blɛ̀
　　1sg　食べる　ご飯　腹一杯の
　　「私はご飯を食べて腹一杯になった」

これらの∅は、決して顕在化することがない。しかし、∅が指示するものは文中に探し求めることができる。(137) のような動詞句が目的語として現れた構造では、目的語位置に現れた動詞句の主語は、常に動詞主要部の主語と同一である。また、(138) のような分離型動詞連続では、V2 の論理的主語は、動詞連続全体の前に現れた名詞句 (すなわち主語) を指示するか、V1 の目的語を指示するか、V1 が表す事象の様態を指示するかのいずれかである。すなわち、動詞句が目的語として現れた構造では∅の指示するものが一義的に決まり、分離型動詞連続では∅の指示するものは一義的には決まらないものの、同一文中に探し求めることができる。

ひるがえって、(131) の「開ける」の被動者を表す名詞句は、任意のゼロ照応の場合のように顕在化できないし、分離型動詞連続の場合のように同一文中に探し求めることもできない。つまり、「開ける」の被動者を表す名詞句は、完全に抑圧されてしまっているのである。名詞句を顕在化できないという点は、(139) のような複合語において、(140) のように被動者を表す名詞句を顕在化できないのに似ている。

(139) chəʔánɴ　←　chə-　+　ʔánɴ
　　食べ物　CHə　食べる

(140) *chəʔánɴkʉ́mí　←　chə-　+　ʔánɴ　+　kʉ́mí
　　?　CHə　食べる　ビスケット

この複合語は、この語だけでも文として機能できる。そのような場合、当然のことながら同一文中に行為者を表す名詞句を探し求めることもできない。すなわち、(131) の「開ける」の被動者が現れないという現象は、多分に形態論的なのである。

ところが、一方で、連結型動詞連続は、統語論的な特性をも持っている。それは、V1 や V2 を統語論的にどんどん拡張できるということである。

(141) jə-　lì　jʊ̄　ʔənɔ́
　　1sg　行く　見る　それ
　　「私はそれを見に行った」

V2 の jʊ̄ には様々な動詞助詞を付けることができる。例えば、下方向への動作を表す làɴ を付けることができる。次の例を見ていただきたい。意味的に考えて、làɴ は jʊ̄ に付いているものと考えられる。

(142) jə-　lì　jʊ̄　làɴ　ʔənɔ́
　　1sg　行く　見る　(下方)　それ
　　「私はそれを見下ろしに行った」

動詞助詞は語である。語であるからこそ、次のように動詞助詞の語順を相互に入れ換えることが可能である。cò は「遠方から行う動作」を表す動詞助詞である。

(143) jʊ̄　cò　làɴ
　　見る　(遠隔)　(下方)
　　「(遠くのものを) 見下ろす」

(144) jʊ̄　làɴ　cò
　　見る　(下方)　(遠隔)
　　「(遠くのものを) 見下ろす」

もちろんのこと、これ全体を連結型動詞連続を構成する動詞として機能させることもできる。下の例ではこれ全体を V2 の位置に置いている。

(145) jə-　lì　jʊ̄　cò　làɴ
　　1sg　行く　見る　(遠隔)　(下方)
　　「(遠くのものを) 見下ろしに行った」

さらに、上の動詞連続の V1 に動詞助詞を付けることもできる。

(146) jə-　lì　thánɴ　jʊ̄　cò　làɴ
　　1sg　行く　(上方)　見る　(遠隔)　(下方)
　　「(遠くのものを) 見下ろしに上って行った」

すなわち、連結型動詞連続を構成する動詞は、動詞以外の語 (この場合は動詞助詞) を付けることによってどんどん拡張することができるのである。語を様々に組み合わせることができるというのは統語論的な特徴にほかならない。

このように、連結型動詞連続は、一面では形態論に似た特徴を示し、別の面では統語論に似た特徴を示す。したがって、連結型動詞連続は、形態論と統語論の中間に位置するものである可能性もある。この問題は結論を出すのがかなり困難な問題である。結論は今後の研究の進展を待って出したいと思う。

17.3.8　連結型動詞連続のまとめ

上で考察してきた連結型動詞連続の特徴を、箇条書きにしてまとめておく。

- 否定辞 lə- が V1 の前に付く動詞連続である。

- V1 が表す事象と V2 が表す事象の間に緊密な意味的関係が観察できる。
- V1 と V2 が自動詞であるか他動詞であるかが重要な意味を持つ。自動詞・他動詞の組み合わせを条件として主動詞が決まる。
- 動詞は基本的に、事象の開始順に並べられる。ただし、移動動詞を含む場合はその限りでない。
- 論理的主語が同一指示である場合、「他動詞＋自動詞」という組み合わせはあり得ない。
- 三つ以上の動詞からなるものは、二つの動詞からなる連続を組み合わせたものと考えることができる。
- 形態論的な特徴と統語論的な特徴を持ち合わせている。

17.4　分離型

次に、分離型動詞連続の考察に移る。最小の分離型動詞連続は、次のように図示することができる。

$$\underbrace{\textbf{VP}\quad\textbf{VP}}_{\textbf{分離型動詞連続}}$$

したがって、正確に言えば、分離型動詞連続は動詞の連続というより動詞句の連続である。もちろん、動詞句は動詞一つだけからなる場合もある。

分離型動詞連続は、否定辞 lə- が V2 の前に付く。否定辞をつけた例を次に示す。

(147) jə-　**ʔánɴ**　mì　lə-　**blɛ̀**　bá　ʔəkhʊ́còɴ ...
1sg　食べる　ご飯　(否)　腹一杯の　(否')　(理由)
「私はご飯を食べて満腹にならなかったので...」

(148) jə-　**khlàiɴ**　phlòʊɴ　lə-　**θí**　bá　ʔəkhʊ́còɴ ...
1sg　話す　カレン　(否)　できる　(否')　(理由)
「私はカレン語が話せなかったので...」

分離型動詞連続は、大きく、**描写タイプ**(depictive type) と**可能タイプ**(potential type) の 2 種類に分けることができる。まず、描写タイプの例を下に挙げる。このタイプの動詞連続の V2 は、V1 が表す事象の参加者に生じる結果や状態を表したり、V1 が表す事象の「生じ方」を表したりする。詳細は後述する。

(149) jə-　**ʔánɴ**　mì　**blɛ̀**
1sg　食べる　ご飯　腹一杯の
「ご飯を食べて腹一杯になった」

(150) jə-　**ʔɔ̀**　θài　**mə̀ɴ**
1sg　飲む　酒　酔っている
「酒を飲んで酔ってしまった」

(151) jə-　**dú**　táɪɴtɔ̀θá　**théphà**
1sg　殴る　スイカ　割れる
「私がスイカを叩いたら割れてしまった」

(152) lənìjò　ʔəwê　**khlàɪɴ**　chə̀　**thɔ̂**　mā
今日　3se　話す　CHə　長い　非常に
「今日、彼が話をしたところ、（話が）長くなった」

(153) jə-　phʊ̂　**ɕòɕó**　ʔə-　nòphə̀ɴ　**chêɪɴpràɴ**
1sg　祖父　うがいする　3sg　口の中　清潔な
「祖父は口の中をうがいして、清潔になった」

(154) jə-　**ʔáɴ**　khòθá　**ʔwí**　mā
1sg　食べる　マンゴー　美味な　(非常)
「マンゴーを食べたらおいしかった」

(155) ʔəwê　**khà**　phlā　**tɔ̀**
3se　撃つ　矢　まっすぐな
「彼が鉄砲を放ったところ、（矢が）まっすぐ飛んだ」

(156) jə-　mì　nɔ́　**mêɪɴ**　**ɣì**
1sg　ご飯　(題)　炊けた　良い
「私のご飯はよく炊けている」

(157) ʔəwê　**klí**　**phlɛ́**
3se　走る　速い
「彼の走り方は速い」

(158) ʔəwê　**chôɴmóɴ**　**thîchà**
3se　考える　正確な
「彼の考え方は正確だ」

次に、可能タイプの例を挙げる。このタイプの動詞連続の V2 は、V1 が表す事象の生起の可能性を表す。詳細は後述する。

(159) ʔəwê　**kè**　láipəjàɴ　**θí**
3se　書く　ビルマ文字　できる
「彼はビルマ文字を書くことができる」

(160) jə-　**lì**　ʔə-　ʔɔ́　**khlàʊ**
1sg　行く　3sg　ところ　暇な
「私は彼のところに行く暇がある」

(161) jə-　**lɔ̀**　ʔəwê　**bə́ɯɴ**　ʔé
1sg　話す　3se　勇気のある　(否)
「私は彼に話す勇気がない」

描写タイプと可能タイプとの違いは、描写タイプが、意味論的に、V1 が表す事象の実現を含意するのに対し、可能タイプは、V1 が表す事象の実現を含意しないということである。このことは、次に示すように、文の後ろに V1 の事象の実現を否定する表現を置いてみることによって検証できる。描写タイプでは、V1 が表す事象の実現を含意するから、V1 の事象の実現を否定する表現を置くと、矛盾をきたす。

(162) *lənìjò　ʔəwê　klí　phlɛ́.　lānâɴ θí　klí　ʔé
今日　3se　走る　速い　しかし　走る　(否)
「今日、彼は走り方が速かった。しかし走らなかった」

しかし、可能タイプでは矛盾をきたさない。

(163) lənìjò　ʔəwê　lì　khlàʊ.　lānâɴ θí　lì　ʔé
今日　3se　行く　暇な　しかし　行く　(否)
「今日、彼は行く暇があった。しかし行かなかった」

描写タイプと可能タイプへの分類は、この、V1 が表す事象の実現を含意するかどうかという基準に基づいている。

ところで、第 4 章 4.2.1 で、分離型動詞連続の前に現れた名詞句がその節の主語であることを示した。このことを今一度ここで確認しておこう。根拠の一つは、「自分」という意味の名詞 nâɴkəchā がこの名詞句のみを指示するということだった。

(164) **ʔəwê**$_i$　dákhòɴ　ʔəwê　máʊ　lé　**nâɴkəchā**$_i$　ɣéiɴ　phàɴ
3se　会う　3se　楽しい　(場)　自分　家　中
「彼は自分の家で彼女に会えて楽しかった」

(165) **ʔəwê**$_i$　jʊ̄　ʔəwê　ɣì　lé　**nâɴkəchā**$_i$　təwâɴ　phàɴ
3se　見る　3se　美しい　(場)　自分　村　中
「彼は自分の村で彼女を見たら美しかった」

(166) **ʔəwê**$_i$　jʊ̄khwā　ʔə-　phʊ́　ɣì　lé　**nâɴkəchā**$_i$　ɣéiɴ　phàɴ
3se　面倒をみる　3sg　子供　良い　(場)　自分　家　中
「彼は自分の家では子供の面倒のみかたがよい」

(167) **ʔəwê**$_i$　jʊ̄khwā　ʔə-　phʊ́　khlàʊ　lé　**nâɴkəchā**$_i$　təwâɴ　phàɴ
3se　面倒をみる　3sg　子供　暇な　(場)　自分　村　中
「彼は自分の村では自分の子供の面倒をみる暇がある」

もう一つは、通常の主語と同時に後置型の関係節で関係節化できるということだった。

(168) **phlòʊɴ**　[$_R$ ʔɔ̀　θài　mə̀ɴ　ɣòɴ |　thánɴ　rʊ̄ʊɴ]
人　飲む　酒　酔った　(継起)　のぼる　事務所
「酒を飲んで酔い、事務所に行った人」

(169) **phlòʊɴ**　[$_R$ ʔánphôɴ　mì　khʊ̄ɣʊ́　ɕàʊ　ɣòɴ |　xwè　bá　mì]
人　炊く　ご飯　焦げる　(驚愕)　(継起)　買う　(不抗)　ご飯
「ご飯を炊いて焦がしてしまい、ご飯を買わねばならかった人」

(170) **phlòʊɴ**　[$_R$ mà　kəlôʊɴ　phlɛ́　mā　ɣòɴ |　nī　chəkəljʊ̄]
人　する　仕事　速い　大変　(継起)　可能な　贈り物
「仕事をするのが非常に速く、賞をもらった人」

(171) **phlòʊɴ**　[$_R$ pʊ̄　láiʔàʊ　khlàʊ　lānânɴ |　lə-　pʊ̄　bá]
人　読む　本　暇な　(逆接)　(否')　読む　(否')
「本を読む暇があるのに読まない人」

以上の理由により、この名詞句を、分離型動詞連続の現れた節における主語と見なす。
以下に、描写タイプと可能タイプの分離型動詞連続の性質を順に見ていくことにする。

17.4.1　描写タイプ

17.4.1.1 V1 が表す事象の実現の含意

既に述べたように、描写タイプでは、V1 が表す事象の実現が含意される。したがって、次に示すように、文の後に V1 の事象の実現を否定する表現を置くと、論理的に矛盾する文ができあがる。

(172) *ʔəwê　klí　phlɛ́.　lānânɴ θí　klí　ʔé
3se　走る　速い　しかし　走る　(否)
「彼の走り方は速かった。しかし、走らなかった」

ただし、このような文が論理的矛盾をきたすのは、V1 が表す事象と否定される事象とが同一の解釈の場合である。同一でない場合、例えば、「彼の走り方は（いつも）速いが、今日は走らなかった」というように、V1 が習慣的な事象を表し、否定される事象が一回限りの事象である場合、このような論理的矛盾は起こらない。V1 が表す事象と否定される事象が同一であれば、描写タイプは、V1 が表す事象の実現を否定する表現を後に置くと論理的に矛盾をきたす。他の例を見てみよう。下のすべての例において、V1 が表す事象と否定される事象は同一であると考える。

(173) *ʔəwê　chônmónɴ　thîchà.　lānânɴ θí　chônmónɴ　ʔé
3sg　考える　正確な　しかし　考える　(否)
「彼の考え方は正確だった。しかし、考えなかった」

(174) *jə-　ʔánɴ　mì　blɛ̀.　lānânɴ θí　ʔánɴ　ʔé
1sg　食べる　ご飯　腹一杯の　しかし　食べる　(否)
「ご飯を食べて腹一杯になった。しかし、食べなかった」

(175) *jə-　phû　ɕòɕó　ʔə-　nòphònɴ　chêinpràɴ.　lānânɴ θí　ɕòɕó　ʔé
1sg　祖父　うがいする　3sg　口の中　清潔な　しかし　うがいする　(否)
「祖父は口の中をうがいして清潔になった。しかし、うがいをしなかった」

(176) *jə-　mì　nɔ́　mêiɴ　ɣì.　lānâɴ θí　mêiɴ　ʔé
1sg　ご飯　(題)　炊けた　良い　しかし　炊けた　(否)
「私のご飯はよく炊けている。しかし、炊けていない」

この、V1 が表す事象の実現が含意されるという事実は、描写タイプを可能タイプから分け隔てる重要な特徴である。

17.4.1.2 描写タイプの V2 の特徴

次に、描写タイプの動詞連続の V2 の特徴について見てみよう。描写タイプの動詞連続の V2 は、無意志動詞である。V1 には動詞の種類の制限はない。先に挙げた (149)〜(158) の文でも、V2 として使われているのはすべて無意志動詞である。V2 が意志動詞だと、V1 と V2 の間に名詞句や前置詞句の介在を許す動詞連続の許容度は低くなってしまう。そのことを見るために、まず次の分離型動詞連続を見ていただきたい。

(177) ʔəwê　ʔáɴ　mì　blɛ̀
3se　食べる　ご飯　腹一杯の
「彼はご飯を食べて腹一杯になった」

この文は適格な文であるが、この文の V2 を意志動詞に換えると、その文はとたんに落ち着きが悪くなる。次を見られたい。

(178) ??əwê　ʔáɴ　mì　mînàɴ
3se　食べる　ご飯　寝転がる
「彼はご飯を食べて寝転がった」

意志動詞が分離型動詞連続の V2 になれないということは重要である。というのは、このことがポー・カレン語の動詞連続を特徴づける重要な要素になっているからである。東南アジアの SVO 型の諸言語には、V1 と V2 の間に補語などを介在させることのできる動詞連続が豊富に存在することが知られている。例えば、ポー・カレン語に隣接する言語であるタイ語には、次のような動詞連続が存在する。

hŭŋ　khâaw　kin
炊く　ご飯　食べる
「ご飯を炊いて食べる」
kin　khâaw　maa
食べる　ご飯　来る
「ご飯を食べて、来る」

ところが、ポー・カレン語ではこれに類する、意志動詞の間に補語が介在する動詞連続は許されない。

(179) *ʔəwê　ʔáɴphôɴ　mì　ʔáɴ
3se　炊く　ご飯　食べる
（彼はご飯を炊いて食べた）

(180) *ʔəwê　ʔánᴺ　mì　ɣɛ̂
3se　食べる　ご飯　来る
（彼はご飯を食べて、来た）

(181) *ʔəwê　kòᴺ　thədòᴺ　ʔánᴺlūː　thî
3se　穿く　腰巻　浴びる　水
（彼は腰巻を穿いて水を浴びた）

これらを適格な文にするためには、次のように、従属節助詞を用いて二つの動詞を分離する必要がある。

(182) ʔəwê　ʔánᴺphôᴺ　mì　ɣòᴺ |　ʔánᴺ
3se　炊く　ご飯　(継起)　食べる
「彼はご飯を炊いて食べた」

(183) ʔəwê　ʔánᴺ　mì　ɣòᴺ |　ɣɛ̂
3se　食べる　ご飯　(継起)　来る
「彼はご飯を食べて、来た」

(184) ʔəwê　kòᴺ　thədòᴺ　ɣòᴺ |　ʔánᴺlūː　thî
3sg　穿く　腰巻　(継起)　浴びる　水
「彼は腰巻を穿いて水を浴びた」

また、可能な場合には、連結型動詞連続を用いて同じ状況を表すことも考えられる。上に挙げたもののうち (182) と (183) は、次のように連結型動詞連続を用いて同じ事象を表すことができる (ただし、17.3.4 で述べたとおり、(186) は良くないとする話者もいる)。(184) は、各動詞が別々の目的語をとっているため、連結型動詞連続を用いて言い換えることはできない。

(185) ʔəwê　ʔánᴺphôᴺ　ʔánᴺ　mì
3se　炊く　食べる　ご飯
「彼はご飯を炊いて食べた」

(186) ʔəwê　ɣɛ̂　ʔánᴺ　mì
3se　来る　食べる　ご飯
「彼はご飯を食べて、来た」

ポー・カレン語の分離型動詞連続はこのような特徴を持つため、動詞連続を持つ言語によく見られる、道具や随伴者や場所などを表す名詞句を動詞連続におけるいずれかの動詞の目的語として動詞連続の中に取り込むという現象が見られない。例えば次のタイ語の例では、「ナイフ」という道具を表す名詞句が、動詞連続の最初の動詞 ʔaw「取る」の目的語として現れている。

kháw　ʔaw　mîit　pay　tàt　yâa
彼　取る　ナイフ　行く　切る　草
「彼はナイフで草を切った」(Foley and Van Valin 1984:207)

ポー・カレン語にはこのような動詞連続は存在しない。

(187) *ʔəwê　mànī　xé　phé　nɔ́
3se　取る　ナイフ　切る　草

「ナイフで草を切る」をポー・カレン語で表現する最も普通の方法は、次のように「ナイフ」を表す名詞を側置助詞で導入することである。

(188) ʔəwê　phé　nɔ́　dē　xé　「彼はナイフで草を切った」
3sg　切る　草　～で　ナイフ

以上に述べたように、描写タイプの V2 は無意志動詞である。したがって、V2 は自動詞であることが多いが、次のように他動詞が現れた例も見つかっている。

(189) jə-　ʔánxʉ̂ʉ　kháɴphài　dá　jàʊ
1sg　探す　草履　見つける　(完)
「私は草履を探して見つけた」

ところで、分離型動詞連続における V2 が状態動詞の場合、V2 が V1 を副詞的に修飾しているように見えるかもしれない。しかし、実際はそうではない。このことは、分離型動詞連続をそのまま命令文として使うことができないことから明らかである。

(190) klí　phlɛ́
走る　速い
「走り方が速い／*速く走れ」

(191) ʔáɴ　mì　blɛ̀
食べる　ご飯　腹一杯の
「ご飯を食べて腹一杯になった／*腹一杯食べろ」

(192) chôɴmóɴ　thîchà
考える　正確な
「考え方が正確だ／*正確に考えよ」

これらを命令文として用いるためには、V2 を副詞化する必要がある。副詞化は、次の各 (a) のように接辞 ʔè を用いるか (第 5 章参照)、あるいは (b) のように繰り返し (reduplication) を用いることによって行う (第 7 章参照)。

(193) a. klí　ʔèphlɛ́
走る　速く
「速く走れ」

b. klí　phlɛ́phlɛ́
走る　速く
「速く走れ」

(194) a. ʔánˬ　　mì　　ʔèblɛ̀
　　食べる　ご飯　腹一杯に
　　「腹一杯食べろ」

　　b. ʔánˬ　　mì　　blɛ̀blɛ̀
　　食べる　ご飯　腹一杯に
　　「腹一杯食べろ」

(195) a. chônmónˬ　ʔèthîchà
　　考える　　正確に
　　「正確に考えよ」

　　b. chônmónˬ　thîthîchàchà
　　考える　　正確に
　　「正確に考えよ」

もし、V2 が単に V1 を副詞的に修飾しているのだとしたら、分離型動詞連続をそのまま命令文として用いることができるはずである。これができないことから、V2 は V1 を副詞的に修飾しているのではないことが見てとれる。

17.4.1.3 V2 の論理的主語が指示するもの

次に、V1 と V2 がそれぞれ取る項の同一指示性について考えてみる。V1 の論理的主語は、常に節の主語と同一指示である。問題は、V2 の論理的主語が何を指示するかである。これには、「節の主語と同一指示の場合」「V1 の目的語と同一指示の場合」「V1 が表す事象の様態を指示する場合」の三つの場合がある。以下にこの三つの場合について述べていく。

• 節の主語と同一指示の場合　最初に、V2 の論理的主語が節の主語と同一指示になっている例を次の各 (a) に挙げる。これらの例の V2 の論理的主語が節の主語と同一指示であることは、(b) と (c) を見れば明らかである。(b) は、(a) の V2 を単独で用いた文の主語位置に (a) の主語を置いた文、(c) は、(a) の V2 を単独で用いた文の主語位置に (a) の V1 の目的語を置いた文である。ただし V1 が自動詞の場合には (c) に相当する文が存在しない。V2 の論理的主語が節の主語と同一指示の場合、(b) が適格、(c) が不適格になる。

(196) a. jə-　chînàˬ　máʊ
　　1sg　座る　　快適な
　　「座り心地が良い」

　　b. jə-　máʊ
　　1sg　快適な
　　「私は快適だ」

(197) a. jə-　jʊ̄phònˬ　chəɣànmə̂nˬ　máʊ
　　1sg　見る　　映画　　快適な
　　「私は映画を見て楽しかった」

b. jə-　máʊ
1sg　快適な
「私は楽しかった」

c. *chəɣànmə̂ɴ　máʊ
映画　快適な
(映画は楽しかった)

(198) a. jə-　ʔáɴ　mì　blɛ̀　jàʊ　(=149)
1sg　食べる　ご飯　腹一杯の　(完)
「私はご飯を食べて腹一杯になった」

b. jə-　blɛ̀　jàʊ
1sg　腹一杯の　(完)
「私は腹一杯になった」

c. *mì　blɛ̀　jàʊ
ご飯　腹一杯の　(完)
(ご飯は腹一杯になった)

(199) a. jə-　ʔɔ̀　θài　mə̀ɴ　(=150)
1sg　飲む　酒　酔っている
「私は酒を飲んで酔ってしまった」

b. jə-　mə̀ɴ
1sg　酔っている
「私は酔ってしまった」

c. *θài　mə̀ɴ
酒　酔っている
(酒は酔ってしまった)

V2 の論理的主語が節の主語と同一指示の場合、V2 は、V1 が表す事象の生起と同時的に節の主語の指示対象に生じる状態や、V1 が表す事象の生起によって節の主語の指示対象に生じた結果を表す。

• **V1 の目的語と同一指示の場合**　次に、V2 の論理的主語が V1 の目的語と同一指示になっている例を各 (a) に挙げる。V2 の論理的主語が V1 の目的語になっている場合、先ほどとは逆に、(b) が不適格、(c) が適格となる。

(200) a. jə-　ʔáɴ　khòθá　ʔwí　mā　(=154)
1sg　食べる　マンゴー　美味な　(非常)
「マンゴーを非常においしく食べた」

b. *jə-　ʔwí　mā
　1sg　美味な　(非常)
　(私は非常においしかった)

c. khòθá　ʔwí　mā
　マンゴー　美味な　(非常)
　「マンゴーは非常においしかった」

(201) a. jə-　dʊ́　táɪntɔ̀θá　théphà　(=151)
　1sg　殴る　スイカ　割れる
　「私がスイカを叩いたら割れた」

b. *jə-　théphà
　1sg　割れる
　(私は割れた)

c. táɪntɔ̀θá　théphà
　スイカ　割れる
　「スイカが割れた」

(202) a. jə-　phʉ̂ʉ　ɕòɕó　ʔə-　nòphə̀ɴ　chêɪnpràɴ　(=153)
　1sg　祖父　うがいする　3sg　口の中　清潔な
　「祖父は口の中をうがいして、清潔になった」

b. *jə-　phʉ̂ʉ　chêɪnpràɴ
　1sg　祖父　清潔な
　(祖父は清潔だ)

c. ʔə-　nòphə̀ɴ　chêɪnpràɴ
　3sg　口の中　清潔な
　「口の中が清潔だ」

V2 の論理的主語が V1 の目的語と同一指示になっている場合、V2 は、V1 が表す事象の生起と同時的に V1 の目的語の指示対象に生じる状態や、V1 が表す事象の生起によって V1 の目的語の指示対象に生じた結果を表す。なお、(202b) は適格な文ではあるが、(a) が意味するのは「祖父が清潔だ」ということではなく、「口の中が清潔だ」ということであり、(a) によってこのような意味は含意されないので*をつけてある。

V2 の論理的主語が V1 の目的語と同一指示であり、なおかつ V2 が V1 の目的語の指示対象に生じた結果を表す場合、文は使役的な状況を表す。この点において、分離型動詞連続は、主語非同一型の連結型動詞連続と類似する。下の (203) が分離型動詞連続、(204) が主語非同一型の連結型動詞連続である。

(203) jə-　dʊ́　táɪntɔ̀θá　théphà　(=151)　「私がスイカを叩いたら割れてしまった」
　1sg　殴る　スイカ　割れる

(204) jə-　dʊ́　théphà　táɪntɔ̀θá
　　1sg　殴る　割れる　スイカ
　　「私はスイカを叩き割った」

しかし、分離型と連結型の表す意味には大きな違いがある。それは、分離型の場合、V2 が表す事象の実現が含意されるが、連結型では含意されないということである。したがって、動詞連続の後に V2 が表す事象の実現を否定する表現を置くと、分離型の場合は下の (205) のように意味的に矛盾してしまうが、連結型の場合には (206) のように意味的に矛盾をきたさない。

(205) *jə-　dʊ́　táɪntɔ̀θá　théphà.　lànâɴ θí　théphà　ʔé
　　1sg　殴る　スイカ　割れる　しかし　割れる　(否)
　　「私がスイカを叩いたら割れてしまった。しかし、割れなかった」

(206) jə-　dʊ́　théphà　táɪntɔ̀θá.　lànâɴ θí　théphà　ʔé
　　1sg　殴る　割れる　スイカ　しかし　割れる　(否)
　　「私がスイカを叩き割ろうとした。しかし、割れなかった」

この違いは、連結型の V2 が表す事象は行為者が実現を期待したものに過ぎないのに対し、分離型の V2 の場合は、行為者が期待したかどうかに関わらず、実際に生起した事象を表すということに起因しているのだと考えられる。

• V1 が表す事象の様態を指示する場合　最後に、V2 の論理的主語が、V1 が表す事象の様態を指示していると考えられる場合を見る。次に例として挙げるようなものである。

(207) a. ʔəwê　phóɴ　θéɪnthàɪɴ　khə̂ɴ
　　3se　つかむ　枝　安定した
　　「彼の枝のつかみ方はしっかりしていた」

　b. *ʔəwê　khə̂ɴ
　　1sg　安定した
　　(彼は安定している)

　c. *θéɪnthàɪɴ　khə̂ɴ
　　枝　安定した
　　(枝は安定している)

この例では、V2 の論理的主語と同一指示の名詞句が、文中に見つからない。意味的に考えると、V2 の論理的主語は、文の中に現れた具体的な名詞ではなく、V1 の「つかむ」という行為の「行い方」を指示しているように思われる。同様の例を下に挙げる。

(208) a. ʔəwê　phʊ̂ɪ　thɔ̂
　　3sg　跳ぶ　高い
　　「彼の跳び方は高かった」

b. *ʔəwê　thɔ̂
　1sg　高い
(彼は高い)

(209) a. nəθí　ʔánɣá làɴ　jə̀　dàʊpàiɴ
　2pl　歓待する　1sg　満ち足りた
「あなた方の私に対する歓待ぶりは十分なものだった」

b. *nəθí　dàʊpàiɴ
　2pl　満ち足りた
(あなた方は満ち足りている)

c. *jə-　dàʊpàiɴ
　1sg　満ち足りている
(私は満ち足りている)

(210) a. ʔəwê　ʔánɴ　mì　cîcá
　3sg　食べる　ご飯　汚い
「彼のご飯の食べ方は汚い」

b. *ʔəwê　cîcá
　1sg　汚い
(彼は汚い)

c. *mì　cîcá
　ご飯　汚い
(ご飯が汚い)

このケースでは、V2 は状態動詞であり、動態動詞であることはない。ここで注意しなければならないのは、あくまでも V2 の論理的主語は、V1 が表す事象そのものを指示しているのではなく、V1 が表す事象の「行われ方」や「生じ方」、すなわち様態を指示するということである。V2 の論理的主語が、V1 の表す事象そのものを指示する場合、その文はもはや分離型動詞連続ではなく、V1 を述語とする節が、主語に相当する補文になっていると考えられる。次のような文である。

(211) [$_C$ hə-　khlàiɴ　phlòʊɴ]　ká
　1pl　話す　カレン　難しい
「カレン語を話すのは難しい」

この問題については、17.5 を参照していただきたい。

以上、V2 の論理的主語の指示するものについて、「節の主語と同一指示の場合」「V1 の目的語と同一指示の場合」「V1 が表す事象の様態を指示する場合」の三つの場合を見てきた。しかし、しばしば、V2 の論理的主語が何であるのか、判断が難しい場合がある

(212) ʔəwê　klí　phlɛ́　(=157)
3se　走る　速い
「彼の走り方は速い」

では、V2 の論理的主語が ʔəwê「彼」なのか、「彼の走り方」なのか、判断することは難しい。おそらくは、V2 の論理的主語は、「彼の走り方」である可能性が高いと思われるが、ポー・カレン語では ʔəwê　phlɛ́「彼は速い」という言い方も可能なので、論理的主語が ʔəwê である可能性も否定はできない。

ところで、V2 の論理的主語の指示対象が決定される仕組みはどうなっているのだろうか。次の三つの文を見られたい。

(213) jə-　ʔáɴ　mì　máʊ
1sg　食べる　ご飯　楽しい
「私はご飯を食べるのが楽しかった」

(214) jə-　ʔáɴ　mì　ʔwí
1sg　食べる　ご飯　美味な
「ご飯を食べたらおいしかった」

(215) jə-　ʔáɴ　mì　cîcá
1sg　食べる　ご飯　汚い
「私のご飯の食べ方は汚い」

V2 の論理的主語は、(213) では節の主語と同一指示である。(214) では V1 の目的語と同一指示である。(215) では V1 が表す事象の様態を指示している。この三つの文における動詞連続は、V2 の動詞のみが異なっている。逆に、次の二つの文は、V2 が同一であるにもかかわらず、(216) では、V2 の論理的主語は節の主語と同一指示であり、(217) では、V2 の論理的主語は V1 の目的語と同一指示になっている。

(216) ʔəwê　ʔáɴlɯ̄　thî　chêɪnpràɴ
3se　浴びる　水　清潔な
「彼は水を浴びてきれいになった」

(217) ʔəwê　thàʊ　khôʊɴ　chêɪnpràɴ
3se　こする　腰掛け　清潔な
「彼は腰掛けをきれいに磨いた」

このように、V1 が同一であるにもかかわらず、あるいは、V2 が同一であるにもかかわらず、V2 の論理的主語が指示するものは場合によって異なる。このことから、おそらく、V2 の論理的主語が指示する対象は V1 や V2 の種類によって一義的に決まるのではなく、複数ある候補の中から、意味的あるいは語用論的に最も自然なものが選ばれるのではないかと推測される。

実は、これまで見てきたのは、V2 が目的語を取らない動詞の例ばかりである。そこで最後に、V2 が目的語を取り得る動詞の場合、目的語は V1 の項とどのような関係を持つの

かについて見てみよう。V2 として現れることのできる動詞は無意志動詞なので、目的語を取り得る動詞が V2 として現れることは少ない。しかし、このようなケースは皆無ではなく、次のような例が見つかっている。

(218) jə-　ʔánxûɯ　kháɴphài　dá　jàʊ　(=189)
　　1sg　探す　草履　見つける　(完)
　　「私は草履を探して見つけた」

V1 の目的語と V2 の目的語は同一の名詞句でなければならない。このことは次の文の許容度が低いことから例証される。

(219) ʔjə-　ʔánxûɯ　kháɴphài　dá　thədòɴ　jàʊ
　　1sg　探す　草履　見つける　腰布　(完)
　　「私は草履を探していて、腰布を見つけた」

このように、V1 と V2 の目的語は同一の名詞句でなければならず、かつ、V2 の目的語は表面に現れてはならない。ただし、これは V1 と V2 の目的語が同じ意味役割を持つ場合に限った話である。(219) の「草履」と「腰布」は、V1 および V2 が表す動作の対象に相当する。しかし、V2 の目的語が V1 の目的語と意味役割が異なれば、次のように、別の名詞句を取ることができる。

(220) ʔəwê　θáɯɴ　ɣéiɴ　bàʊ　rōʊɴ
　　3se　建てる　家　近い　オフィス
　　「私は仕事場に近いところに家を建てた」

この (220) においては、V1 の目的語 ɣéiɴ「家」が V1 の動作の対象に相当するのに対して、V2 の目的語 rōʊɴ「オフィス」は、「近さ」を判断する基準点を表す。また、V2 が動詞助詞 dá によって比較の対象物を表す名詞句を目的語として取った次の例でも、V1 の目的語 θí 「薬」が動作の対象であるのに対して、V2 の目的語は「比較の対象」を表すので、文は不適格にならない。

(221) jə-　ɣúɯ　θí　xî　dá　ʔə̀
　　1sg　塗る　薬　美しい　(比較)　3sg
　　「私は彼よりきれいにペンキを塗った」

V1 が目的語を取らない動詞であれば、次のように、V2 の目的語は問題なく現れることができる。

(222) thʊ́xwài　nɔ́　jùɯ　thánɴ　dá　chəphʊ́　lə-　béiɴ
　　スズメ　(題)　飛ぶ　(上方)　見つける　虫　一　～匹
　　「スズメは飛び上がって虫を一匹見つけた」

17.4.2　可能タイプ

次に可能タイプの考察に移る。

17.4.2.1 V2 の種類と意味的特徴

描写タイプの分離型動詞連続の V2 が、無意志動詞であればどのような動詞でもかまわないのに対し、可能タイプの V2 に現れることのできる動詞は限られている。それは次の 4 個であり、描写タイプに現れる V2 と同じくすべて無意志動詞である。

- θí 「できる」
- bá 「正しい」
- khlàʊ 「暇な」
- báɯɴ 「勇気がある」

以下、これらの表す意味的特徴について述べる。最初の θí は、「〜することができる」という意味の他動詞である。

(223) ʔəwê　θí　phlòʊɴ　chəkhlàiɴ
3se　できる　カレン　言語
「彼はカレン語ができる」

この θí が可能タイプの V2 として使われると、V1 が表す行為を行うことが能力的に可能であることを表す。

(224) jə-　nâɴ　kā　θí
1sg　運転する　自動車　できる
「私は車を運転することができる」

(225) hə-　kè　láiphlòʊɴ　θí　ʔé
1pl　書く　カレン文字　できる　(否)
「私たちはカレン文字を書くことができない」

(226) nə-　ʔàʊ　thánɴ　chà　θí　mā
2sg　ほめる　(上方)　CHə　できる　(非常)
「あなたは人をほめるのがたいへんうまい」

次の bá は、「正しい」という意味の自動詞である。

(227) lái　jò　bá
文字　この　正しい
「この文字は正しい」

この bá が可能タイプの V2 として使われると、V1 が表す行為を規範等に照らし合わせて正しく行うことが能力的に可能であることを表す。

(228) nə-　mə-　ɣɛ̂　bá　ʁâ
2sg　(非現)　来る　正しい　(疑)
「あなたは来ることができるか？」

(229) jə-　nânɴ　kā　bá
1sg　運転する　自動車　正しい
「私は車を運転することができる」

(230) hə-　kè　láiphlòʊɴ　bá　ʔé
1pl　書く　カレン文字　正しい　(否)
「私たちはカレン文字を書くことができない」

bá は θí と同様に能力可能を表す。θí との違いは、bá の場合、正しくできるかどうかに重点が置かれるということである。θí の場合は正しくできるかどうかは問題にならない。例えば、(228) では、道を間違えずに、あるいは乗り物を間違えずに来ることができるかどうかということに重点が置かれている。同様に、(229) では交通法規に則った運転ができるかどうかに、(230) では綴りを間違えずに書けるかどうかに、重点が置かれている。しかし、能力可能であることには違いがなく、多くの場合、bá を θí で言い換えても齟齬はきたさない。

次の khlàʊ は、「暇な」という意味の自動詞である。

(231) ləɣɔ̀jò　nə-　mə-　khlàʊ　nāɴmlái　ʁâ
今朝　2sg　(非現)　暇な　少しの時間　(疑)
「今朝あなたはちょっと暇ですか?」

この khlàʊ が可能タイプの V2 として使われると、V1 が表す行為を行う時間があることを示す。

(232) hə-　lɔ̀　lóθà　chàchā　khlàʊ　lɔ̂
1pl　語る　(相互)　ゆっくり　暇な　(断定)
「ゆっくり話す暇くらいあるよ」

(233) nə-　ɣɛ̂　lé　jò　mə-　khlàʊ　ʁâ
2sg　来る　(場)　ここ　(非現)　暇な　(疑)
「あなたはここに来る暇がありますか?」

(234) jə-　ʔánɴ　mì　θí　khlàʊ　ʔé
1sg　食べる　ご飯　(類似)　暇な　(否)
「私はご飯を食べる暇もない」

最後の bə́ɯɪɴ は、「勇気がある、勇敢な」という意味の自動詞である。

(235) jə-　bə́ɯɪɴ　ʔé
1sg　勇気がある　(否)
「私には勇気がない」

この bə́ɯɪɴ が可能タイプの V2 として使われると、V1 が表す行為を行う勇気があることを表す。

(236) jə-　náʊ　ɣʊ́ʊ́　bə́ɯɪɴ
1sg　入る　こっそり　勇気がある
「私は潜入する勇気がある」

(237) dē　kā　nɔ́　jə-　tháʊ　bə́ɯɪɴ　ʔé
(共)　車　(題)　1sg　乗る　勇気がある　(否)
「(道が危険なので) 車では行く勇気がない」

(238) ɣɛ̂　ʔè　bə́ɯɪɴ |　ɣɛ̂
来る　(条件)　勇気がある　来る
「来る勇気があるのなら来なさい」

以上の動詞が V2 として現れた分離型動詞連続を、描写タイプと別扱いする根拠は、これらが V2 として使われると、V1 が表す事象の実現が含意されないということである。17.4.1.1 で見たように、描写タイプでは、V1 が表す事象の実現は必ず含意されるのだった。ところが、可能タイプでは、V1 が表す事象の実現は意味論的には含意されない。したがって、可能タイプの動詞連続を用いた文は、V1 が表す事象の実現を否定するような表現を後に置いても、意味的な矛盾をきたさない。

(239) ʔəkhâ　nɔ́　jə-　lì　θí.　lānâɴ θí　lì　ʔé
時　その　1sg　行く　できる　しかし　行く　(否)
「その時私は (道を知っていて) 行くことができた。しかし行かなかった」

(240) ʔəkhâ　nɔ́　jə-　lì　bá.　lānâɴ θí　lì　ʔé
時　その　1sg　行く　正しい　しかし　行く　(否)
「その時私は (道を間違えずに) 行くことができた。しかし行かなかった」

(241) təɣáʔò　nə-　ɣɛ̂　khlàʊ.　lānâɴ θí　ɣɛ̂　ʔé
一昨日　2sg　来る　暇な　しかし　来る　(否)
「おととい、あなたはここに来る暇があった。しかし来なかった」

(242) ʔəkhâ　nɔ́　jə-　ʔɔ̀　θài　bə́ɯɪɴ.　lānâɴ θí　ʔɔ̀　ʔé
時　その　1sg　飲む　酒　勇気がある　しかし　飲む　(否)
「その時私は酒を飲む勇気があった。しかし飲まなかった」

この、V1 が表す事象の実現が含意されないという特徴は、ポー・カレン語のすべての動詞連続を通じて、このタイプにしか見られない。

なお、一見、可能タイプの分離型動詞連続に見える次の例は、補文が主語の位置に現れた構造だと考えられる。17.5 を参照していただきたい。

(243) [$_C$ nə-　ʔɔ̀　thî]　nī
2sg　飲む　水　可能な
「あなたは水を飲んでもよい」

▷ nī は「得る」という意味の他動詞に由来する。

(244) [$_C$ jə-　chó　lōʊɴ]　kɛ́
　　1sg　運ぶ　石　　可能な
「私は石を運ぶことができる」

▹ kɛ́ は「～に成る」という意味の他動詞に由来する。nī と同様に「可能な」という意味を表すが、nī に比べると、実現困難な事象の可能性について述べるときに使われることが多い。

17.4.2.2 V2 の論理的主語が指示するもの

次に、可能タイプの分離型動詞連続における、V1 と V2 の項の同一指示性について見ていきたい。V1 の論理的主語は常に節の主語と同一指示である。V2 を見てみると、可能タイプの V2 になり得る 4 個の動詞のうち θí のみは他動詞である。しかし、V2 として現れたとき、これは目的語を取ることがない。したがって、いずれの動詞の場合も、V2 の論理的主語が何を指示するかを考えればよい。

最初の θí の論理的主語は、常に節の主語と同一指示である。

(245) jə-　nâɴ　kā　θí　(=224)
　　1sg　運転する　自動車　できる
「私は車を運転することができる」

(245')　jə-　θí
　　1sg　できる
「私はできる」
(245")　*kā　θí
　　自動車　できる
(自動車はできる)

θíは、次のように、「身につけた能力」を表す名詞句を目的語として取ることができる。

(246) jə-　θí　láiphlòʊɴ
　　1sg　できる　カレン文字
「私はカレン文字ができる」

しかし、可能タイプの V2 として現れた場合、「身につけた能力」を表す名詞句が θíの目的語として現れることはない。

(247) jə-　kè　láiphlòʊɴ　θí
　　1sg　書く　カレン文字　できる
「私はカレン文字を書くことができる」

(248) *jə-　kè　θí　láiphlòʊɴ
　　1sg　書く　できる　カレン文字

次の bá の論理的主語は、V1 が表す事象の様態を指示すると考えたほうがよい。

(249) jə-　mə-　ɣɛ̂　bá
1sg　(非現)　来る　正しい
「私は来ることができる」

(250) jə-　nâɴ　kā　bá
1sg　運転する　自動車　正しい
「私は車を運転することができる」

なぜなら、(249) で「正しい」のは「私」ではないし、(250) で「正しい」のはやはり「私」でも「自動車」でもないからである。したがって、可能タイプの bá については、V2 の論理的主語は、V1 が表す事象の様態を指示すると考える。

次の khlàʊ の論理的主語は、常に節の主語と同一指示である。

(251) jə-　pɔ̄　láiʔàʊ　khlàʊ　ʔé
1sg　読む　本　暇な　(否)
「私は本を読む暇がない」

(251')　jə-　khlàʊ　ʔé
1sg　暇な　(否)
「私は暇がない」
(251")　*láiʔàʊ　khlàʊ　ʔé
本　暇な　(否)
(本は暇がない)

次の bə́ɯɴ の論理的主語も、常に節の主語と同一指示である。

(252) jə-　ʔáɴ　ʔəjò　bə́ɯɴ　ʔé
1sg　食べる　これ　勇気がある　(否)
「私はこれを食べる勇気がない」

(252')　jə-　bə́ɯɴ　ʔé
1sg　勇気がある　(否)
「私は勇気がない」
(252")　*ʔəjò　bə́ɯɴ　ʔé
これ　勇気がある　(否)
(これは勇気がない)

17.4.3　分離型動詞連続における主動詞について

連結型動詞連続においては、どちらか一方の動詞が動詞連続全体の特徴を優先的に決定しているということを述べ、優先的に全体の特徴を決定する側の動詞を主動詞と呼んだ (17.3.3)。連結型動詞連続の場合、動詞連続全体の項の取り方と意志性を、主動詞が優先的に決定していたのだった。ここでは、分離型動詞連続の場合に V1 と V2 のどちらの動詞が主動詞と考えられるかを見てみたい。

まず、項の取り方についてみてみよう。

(253) jə-　ʔáɴ　mì　blɛ̀　(=149)
1sg　食べる　ご飯　腹一杯の
「ご飯を食べて腹一杯になった」

のような例を見ると、項の取り方は、V1 が決定しているかのように見えるかもしれない。なぜなら、連結型について行ったのと同じく、V1 と V2 をそれぞれ取り除くテストをほどこしてみると、次を見れば分かるとおり、V1 を残したときにのみ文は適格になるからである。

(254) a. ʔəwê　ʔáɴ　mì
3se　食べる　ご飯
「彼はご飯を食べた」

b. *ʔəwê　mì　blɛ̀
3se　ご飯　腹一杯の

確かに、分離型ではこのような場合が多い。ところが、実際には、V1 と V2 のどちらの特徴が全体の特徴を決定しているとも断言できない。なぜなら、次のように、V2 が目的語を取る場合には、V1 と V2 のどちらを取り除いても、不適格な文ができあがるからである。

(255) ʔəwê　θáɯɴ　ɣéiɴ　bàʊ　rōʊɴ　(=220)
3se　建てる　家　近い　オフィス
「私は仕事場に近いところに家を建てた」

(256) a. *ʔəwê　θáɯɴ　ɣéiɴ　rōʊɴ
3se　建てる　家　オフィス

b. *ʔəwê　ɣéiɴ　bàʊ　rōʊɴ
3se　家　近い　オフィス

V2 は目的語を取らない動詞であることが多いため、このような例は少ない。しかし、「比較の対象」を表す名詞句を目的語として動詞に取らせる働きのある動詞助詞 dá を V2 の後に置くと、V2 は比較的自由に目的語を取れるようになる。下に示すのは描写タイプの例である。

(257) jə-　ʔɔ́　pəjàɴkhāɴ　máʊ　dá　cəpâɴ
1sg　住む　ビルマ国　快適な　(比較)　日本
「私は日本に住んでいるのよりビルマに住んでいるほうが楽しい」

(258) jə-　ʔáɴ　mì　ʔwí　dá　khənôɴ
1sg　食べる　ご飯　美味な　(比較)　麺
「私は麺よりもご飯のほうが好きだ」

(259) ʔəwê　klí　phlɛ́　dá　jə̀
3se　走る　速い　(比較)　1sg
「彼は私より走るのが速い」

下は可能タイプの例である。

(260) ʔəwê　khlàiɴ　pəjàɴ　θí　dá　jə̀
3se　話す　ビルマ　できる　(比較)　1SG
「彼は私よりビルマ語が話せる」

したがって、項の取り方は V1 と V2 のどちらが決定しているとも言いがたい。V1 の論理的主語は常に節の主語と同一指示なので、V1 が V2 よりも項の取り方において有利に働いている可能性はあるが、V1 は動詞連続全体の項の取り方を決定するほどの力は持っていない。

一方、意志性はどうなっているだろうか。既に見たように、分離型動詞連続における V2 は、描写タイプであれ、可能タイプであれ、無意志動詞であった。V1 は、意志動詞でも無意志動詞でもよい。重要なのは、分離型動詞連続が常に無意志動詞としての特徴を持つということである。つまり、分離型動詞連続は、意志性において V2 と同じ特徴を持っている。このことは、分離型動詞連続がそのままでは命令文として働くことができないという事実によって実証される (描写タイプの動詞連続が命令文として機能しないことは、既に 17.4.1.2 でも述べた)。以下の文を見ていただきたい。これらの文に*をつけたのは、命令文として機能しないという意味においてである。

(261) *ʔáɴ　mʉ̀　blɛ̀
食べる　ご飯　腹一杯の
(ご飯を腹一杯に食べよ)

(262) *dʊ́　táiɴtɔ̀θá　théphà
殴る　スイカ　割れる
(スイカを叩いて割れ)

(263) *klí　phlɛ́
走る　速い
(速く走れ)

(264) *chôɴmóɴ　thîchà
考える　正確な
(正確に考えろ)

(265) *kè　láipəjàɴ　θí
書く　ビルマ文字　できる
(ビルマ文字を書けるようにしろ)

(266) *lɔ̀　ʔəwê　bə́ɯɪɴ
話す　3sg　勇気のある
(彼に話す勇気を出せ)

ここで挙げた例の V1 はすべて、意志動詞である。もし分離型動詞連続が V1 の特徴を受け継いでいるのであれば、これらは命令文として働くことができるはずである。ところが、

これらは命令文になることはできない。このことは、これらの動詞連続が意志性において V2 の特徴を受け継いでいるということを意味する。

まとめると、分離型動詞連続は、項の取り方においてはどちらの動詞の特徴を受け継いでいるとも言えない。一方で、意志性においては V2 の特徴を受け継いでいる。この事実から、分離型動詞連続の主動詞は V2 であると結論づけたい。

17.4.4　3 個以上の動詞からなる分離型動詞連続

分離型動詞連続の場合も、まれではあるが、2 個より多い動詞からなる動詞連続が現れる。ただし、今まで、4 個以上の動詞からなる分離型動詞連続は見つかっていない。3 個の動詞からなる分離型動詞連続は、次のようなものである。

(267) ʔəwê　ʔánphôɴ　θə̂ɴ　θí　ɣì
　　3se　料理する　おかず　できる　良い
　　「彼は上手におかずを料理することができる」
　　（彼は料理をすることができる。そしてその料理ができる程度は高い）

この例では、既に分離型動詞連続である ʔánphôɴ　θə̂ɴ　θí (彼は料理をすることができる) にさらに動詞 ɣì 「良い」が後続している。ɣì の論理的主語が指示するのは、「料理をすることができる」という事象の様態である。

17.4.5　分離型動詞連続のまとめ

上で考察してきた分離型動詞連続の特徴を、箇条書きにしてまとめておく。

- 否定辞 lə- が V2 の前に付く動詞連続である。
- 描写タイプと可能タイプの二つに分けることができる。
- V2 の論理的主語は、節の主語と同一指示であるか、V1 の目的語と同一指示であるか、V1 が表す事象の様態を指示するかのいずれかである。
- V2 が主動詞であると考えられる。

17.5　動詞連続と外見が類似する構造

本論文では、ポー・カレン語の動詞連続を、「同一節中に、動詞間の関係を示す標識を伴わずに複数の動詞が現れる現象。ただし、**その節の中に埋め込まれた従属節の中の動詞や、名詞句の中の動詞は、動詞連続を構成する動詞と考えない**」と定義した。問題は、「従属節や補語の中の動詞」が文中に存在するとき、外見上、それらが動詞連続を構成する動詞の一つに見えてしまうことがあるということである。「従属節や補語の中の動詞」が動詞間の関係を示す標識なしに存在しているために、動詞連続に見えてしまうのは、具体的には次のような場合である。

- 動詞句が目的語として現れた場合

- 補文を表す標識を伴わない補文が現れた場合
- 従属節助詞を伴わない副詞節が現れた場合
- 関係節を導く標識を伴わない関係節が現れた場合

以下では、このようなものをどのようにして動詞連続と区別するかについて述べる。動詞連続と外見が似た構造は、しかるべきテストによって動詞連続と区別することができる。

17.5.1　動詞句が目的語として現れた場合

このケースは、二つの動詞が隣接して現れる点と、否定辞の lə- が前側の動詞に前置されるという点で、連結型動詞連続と似ている。例えば次のようなものである。

(268) jə-　θànánɴ　ʔánɴ　mì
1sg　忘れる　食べる　ご飯
「私はご飯を食べるのを忘れた」

否定辞 lə- は V1 の前に現れる。

(269) bê　lə-　θànánɴ　ʔánɴ　mì　bá　θò ...
(目的)　(否)　忘れる　食べる　ご飯　(否')　(目的')
「ご飯を食べるのを忘れないように...」

動詞句が目的語として現れた構造が連結型動詞連続と異なるのは次のような点である。まず第一に、動詞句が目的語として現れた文では、次のように、後側の動詞を主要部とする動詞句を主題化することができる。

(270) ʔánɴ　mì　nɔ́　jə-　θànánɴ　jābò
食べる　ご飯　(題)　1sg　忘れる　JABO
「ご飯を食べることは、私は忘れてしまったのですよ」

しかし、連結型動詞連続ではこのようなことは不可能である。次の (a) の V2 およびそれに続く目的語を主題化し、(b) のようにすることはできない。

(271) a. jə-　ʔánɴphôɴ　ʔánɴ　mì
1sg　炊く　食べる　ご飯
「私はご飯を炊いて食べた」

b. *ʔánɴ　mì　nɔ́　jə-　ʔánɴphôɴ　jābò
食べる　ご飯　(題)　1sg　炊く　JABO

第二に、目的語として現れた動詞句は、文脈指示機能を持つ名詞 ʔənɔ́「それ」で置き換えることができる。したがって、次の問いに対する答えの文において、動詞句を ʔənɔ́ で受けることができる。

(272) nə-　θànánɴ　ʔánɴ　mì　ʁâ
2sg　忘れる　食べる　ご飯　(疑)
「あなたはご飯を炊くのを忘れたのですか?」

—— jə-　θànánɴ　ʔənɔ́
1sg　忘れる　それ
「私はそれを忘れた」

これに対して、連結型動詞連続では、V2 とそれに続く名詞句等を ʔənɔ́ で置き換えることができない。

(273) nə-　ʔánɴphôɴ　ʔánɴ　mì　ʁâ
2sg　炊く　食べる　ご飯　(疑)
「あなたはご飯を炊いて食べたのですか?」

—— *jə-　ʔánɴphôɴ　ʔənɔ́
1sg　炊く　それ

このように、目的語として動詞句が現れた構造と連結型動詞連続は明らかに異なっている。なお、第 16 章で述べたとおり、動詞句が主語の位置に現れることはない。動詞句の定義等については第 16 章を参照していただきたい。

17.5.2　補文を表す助詞を伴わない補文が現れた場合

補文を含む文では、主文の動詞と補文の動詞の間に名詞句などが現れるので、一見、分離型動詞連続に似ている。まず、目的語位置に補文が現れた文の場合は、分離型動詞連続との区別は簡単である。

(274) jə-　jʊ́　[$_C$ ʔəwê　klí]
1sg　見る　3se　走る
「私は彼が走るのを見た」

目的語位置に現れた補文の場合、補文の前に、補文を表す助詞 lé が現れることができる。次のとおり。

(275) jə-　jʊ̄　lé　ʔəwê　klí
1sg　見る　(補)　3se　走る
「私は彼が走るのを見た」

分離型動詞連続の場合、このように助詞 lé が間に入ることはない。

(276) a. jə-　jʊ̄　ʔəwê　ɣì
1sg　見る　3se　美しい
「私は彼女を美しいと思う」

b. * jə-　jʊ̄　lé　ʔəwê　ɣì
1sg　見る　(補)　3se　美しい

一方、補文が主語の位置に現れた次のような構造では、補文の前に lé が現れるということがないので、問題はこれほど容易ではない。

(277) [$_C$ hə-　ʔánɴ　chədòchəlá]　ɣì
　　1pl　食べる　野菜　　良い
　「私達が野菜を食べることは良いことだ」

(278) [$_C$ hə-　khlàiɴ　phlòʊɴ]　ká
　　1pl　話す　カレン　難しい
　「私達がカレン語を話すことは難しい」

(279) [$_C$ nə-　ʔɔ̀　thî]　nī
　　2sg　飲む　水　可能な
　「あなたは水を飲んでもよい」

(280) [$_C$ jə-　chó　lōʊɴ]　kɛ́
　　1sg　運ぶ　石　可能な
　「私は石を運ぶことができる」

しかし、このような構造と分離型動詞連続との間には、次のような違いがある。第一に、補文の場合は、補文を文脈指示機能を持つ名詞 ʔənɔ́「それ」で置き換えることができる。したがって、次の各例における問いに対する答えの文において、補文を ʔənɔ́ で受けることができる。

(281) hə-　ʔánɴ　chədòchəlá　ɣì　ʁâ
　1pl　食べる　野菜　良い　(疑)
　「野菜を食べることは良いことか？」

　—— ʔənɔ́　ɣì
　　それ　良い
　　「それは良いことだ」

(282) hə-　khlàiɴ　phlòʊɴ　ká　ʁâ
　1pl　話す　カレン　難しい　(疑)
　「カレン語を話すことは難しいか？」

　—— ʔənɔ́　ká
　　それ　難しい
　　「それは難しい」

(283) jə-　ʔɔ̀　thî　nī　ʁâ
　1sg　飲む　水　可能な　(疑)
　「水を飲んでもいいですか？」

　—— ʔənɔ́　nī
　　それ　可能な
　　「それはよい」

(284) nə-　chó　lōʊɴ　kɛ́　ʁâ
2sg　運ぶ　石　可能な　(疑)
「あなたは石を運ぶことができるか？」

—— ʔənɔ́　kɛ́
それ　可能な
「それは可能だ」

一方、分離型動詞連続の場合はそれができない。

(285) ʔəwê　klí　phlɛ́　ʁâ
3sg　走る　速い　(疑)
「彼は走り方が速いか？」

—— *ʔənɔ́　phlɛ́
それ　速い

(286) nə-　khlàiɴ　phlòʊɴ　θí　ʁâ
2sg　話す　カレン　できる　(疑)
「あなたはカレン語を話すことができるか？」

—— *ʔənɔ́　θí
それ　できる

第二に、補文の場合は、分裂文化によって補文を後置することができる。

(287) ɣì　nɔ́　hə-　ʔáɴ　chədòchəlá　nɔ́　lɔ̂
良い　(題)　1pl　食べる　野菜　その　(断定)
「良いのは私達が野菜を食べることである」

(288) ká　nɔ́　hə-　khlàiɴ　phlòʊɴ　nɔ́　lɔ̂
難しい　(題)　1pl　話す　カレン　その　(断定)
「難しいのは私達がカレン語を話すことである」

(289) nī　nɔ́　nə-　ʔɔ̀　thî　nɔ́　lɔ̂
可能な　(題)　2sg　飲む　水　その　(断定)
「してもよいのはあなたが水を飲むことである」

(290) kɛ́　nɔ́　jə-　chó　lōʊɴ　nɔ́　lɔ̂
可能な　(題)　1sg　運ぶ　石　その　(断定)
「できるのは私が石を運ぶことである」

一方、分離型動詞連続の場合は、対応する部分を後置することはできない。

(291) *phlɛ́　nɔ́　ʔəwê　klí　nɔ́　lɔ̂
速い　(題)　3se　走る　その　(断定)

(292) *θí　nɔ́　nə-　khlàiɴ　phlòʊɴ　nɔ́　lɔ̂
できる　(題)　2sg　話す　カレン　その　(断定)

第三に、補文の場合には補文の中の動詞を否定辞 lə- で否定することができる。

(293) hə-　lə-　ʔáɴ　chədòchəlá　bá　ɣì
1pl　(否)　食べる　野菜　(否')　良い
「私達が野菜を食べないことは良いことだ」

(294) hə-　lə-　khlàiɴ　phlòʊɴ　bá　ká
1pl　(否)　話す　カレン　(否')　難しい
「私達がカレン語を話さないことは難しい」

(295) nə-　lə-　ʔɔ̀　thî　bá　nī
2sg　(否)　飲む　水　(否')　可能な
「あなたは水を飲まなくてもよい」

(296) jə-　lə-　chó　lōʊɴ　bá　kɛ́
1sg　(否)　運ぶ　石　(否')　可能な
「私は石を運ばなくてもよい」

一方、分離型動詞連続の場合には、V1 を否定することができない。

(297) *ʔəwê　lə-　klí　bá　phlɛ́
3se　(否)　走る　(否')　速い

(298) *nə-　lə-　khlàiɴ　phlòʊɴ　bá　θí
2sg　(否)　話す　カレン　(否')　できる

以上のような点で、補文を主語として取った構文と分離型動詞連続は異なるのであり、それゆえ、これらは別の構文と見なさなければならない。補文については第 22 章を参照していただきたい。

17.5.3　従属節助詞を伴わない副詞節が現れた場合

次に、やはり分離型動詞連続と似たケースとして、従属節標識を伴わない副詞節が現れた場合を見る。例えば次のようなものである。

(299) ʔəθí　bóɴ　nī　chəbáiɴchəbóɴ |　cáiɴɣà　wê　lɔ̂　jābò
3pl　包む　(努力)　荷物　逃げる　(強意)　(断定)　JABO
「彼らは荷物をまとめて、逃げ出したのだった」(021.89)

(300) ʔəwê　ʔáɴchâ　láiʔàʊ |　xwè　khʊ́mó
3se　売る　本　買う　傘
「彼は本を売って傘を買った」

これらは次の 4 点において分離型動詞連続と異なる。第一に、従属節標識を伴わない副詞節の場合は、通常、節と節の間にポーズが置かれるか、あるいは前の節の最後の音節を少し長めに発音する。このことを節と節の間に ♯ を置いて表す。

(301) ʔəθí　bóɴ　nī　chəbáɪnchəbóɴ　♯　cáɪnɣà　wê　lɔ̂　jābò
3pl　包む　(努力)　荷物　逃げる　(強意)　(断定)　JABO

(302) ʔəwê　ʔánchâ　láiʔàʊ　♯　xwè　khʊ́mó
3se　売る　本　買う　傘

一方、分離型動詞連続の場合には一気に発音される。したがって、次のように最初の動詞句と次の動詞句の間にポーズを入れると不自然である。

(303) ??ʔəwê　ʔáɴ　mì　♯　blɛ̀
3se　売る　本　腹一杯の

第二に、従属節標識を伴わない副詞節の場合は、副詞節の動詞と主節の動詞の両方に主語名詞句を置くことができる。

(304) ʔəθí$_i$　bóɴ　nī　chəbáɪnchəbóɴ |　ʔəθí$_i$　cáɪnɣà　wê　lɔ̂　jābò
3pl　包む　(努力)　荷物　3pl　逃げる　(強意)　(断定)　JABO

(305) ʔəwê$_i$　ʔánchâ　láiʔàʊ |　ʔəwê$_i$　xwè　khʊ́mó
3se　売る　本　3se　買う　傘

一方、分離型動詞連続の場合にはそれができない。

(306) *ʔəwê$_i$　ʔáɴ　mì　ʔəwê$_i$　blɛ̀
3se　食べる　ご飯　3se　腹一杯の

第三に、従属節標識を伴わない副詞節の場合は、最初の動詞を否定辞 lə- で否定することができる。

(307) ʔəθí　lə-　bóɴ　nī　chəbáɪnchəbóɴ　bá |　cáɪnɣà　wê　lɔ̂　jābò
3pl　(否)　包む　(努力)　荷物　(否')　逃げる　(強意)　(断定)　JABO
「彼らは荷物をまとめずに、逃げ出した」

(308) ʔəwê　lə-　ʔánchâ　láiʔàʊ　bá |　xwè　khʊ́mó
3se　(否)　売る　本　(否')　買う　傘
「彼は本を売らず、傘を買った」

分離型動詞連続の場合はこれができない。

(309) *ʔəwê　lə-　klí　bá　phlɛ́
3se　(否)　走る　(否')　速い

(310) *nə-　lə-　khlàɪɴ　phlòʊɴ　bá　θí
2sg　(否)　話す　カレン　(否')　できる

第四に、従属節標識を伴わない副詞節の場合は、時間を表す語句や場所を表す語句などの周辺的な補語を、二つの動詞が別個に取ることができるのに対して、分離型動詞連続の場合には、このような語句を別個に取ることができないということである。例えば、(299) と (300) では、次のように、個々の動詞を別々の周辺的な補語で修飾することができる。

(311) ʔəθí　bóɴ　nī　chəbáiɴchəbóɴ　mūɣá | cáiɴɣà　wê　lənìjò　lɔ̂　jābò
3pl　包む　(努力)　荷物　昨日　逃げる　(強意)　今日　(断定)　JABO
「彼らは昨日荷物をまとめて、今日逃げ出したのだった」

(312) ʔəwê　ʔáɴchâ　láiʔàʊ　lə-　thəʔàɴ | xwè　khʊ́mó　lə-　ləkōʊɴ
3se　売る　本　(場)　(地名)　買う　傘　(場)　(地名)
「彼はパアンで本を売ってヤンゴンで傘を買った」

ところが、分離型動詞連続の場合には、描写タイプものであれ、可能タイプであれ、それぞれの動詞が別個の周辺的補語を取ることはできない。

(313) *ʔəwê　klí　mūɣá　phlɛ́　lənìjò
3se　走る　昨日　速い　今日

(314) *jə-　ʔáɴ　mì　mūɣá　blɛ̀　lənìjò
1sg　食べる　ご飯　昨日　腹一杯の　今日

(315) *ʔəwê　khlàiɴ　phlòʊɴ　məɣī　θí　lənéiɴjò
3se　話す　去年　カレン　できる　今年

周辺的補語は、普通、次のように一つしか現れることができない。

(316) ʔəwê　klí　phlɛ́　lənìjò
3se　走る　速い　今日
「今日、彼は走るのが速かった」

(317) jə-　ʔáɴ　mì　blɛ̀　lənījò
1sg　食べる　ご飯　腹一杯の　今日
「今日私はご飯を食べて腹いっぱいになった」

(318) ʔəwê　khlàiɴ　phlòʊɴ　θí　lənéiɴjò
3se　話す　カレン　できる　今年
「彼は今年はカレン語を話すことができる」

以上のような理由により、従属節標識を伴わない副詞節が現れた文は、分離型動詞連続とは異なるのである。従属節標識を伴わない副詞節については、第 21 章 21.26 でも議論するので、参照していただきたい。

17.5.4　関係節を導く助詞を伴わない関係節が現れた場合

ポー・カレン語の関係節には、後置型、前置型、標識介在型がある。ここで問題になるのは、関係節を導く助詞を伴わない後置型、前置型の場合である。(319) が後置型の例、(320) が前置型の例である。

(319) ʔəwê　ʔáɴ　　já　[$_R$ phàdʊ́]
3se　食べる　魚　大きな
「彼は大きな魚を食べた」

(320) [$_R$ ʔəwê　ʔáɴ]　　já　phàdʊ́
3se　食べる　魚　大きな
「彼が食べた魚は大きかった」

これらは、外見上、次のような分離型動詞連続と似ている。

(321) ʔəwê　ʔáɴ　　já　ʔwí
3se　食べる　魚　おいしい
「彼は魚を食べたらおいしかった」

しかし、次のようなテストをすればこれらが分離型動詞連続ではないことが分かる。関係節の場合には、関係節を含む名詞句部分を文脈指示機能を持つ名詞 ʔənɔ́「それ」で置き換えることが可能である。

(322) ʔəwê　ʔáɴ　　já　[$_R$ phàdʊ́]　ʁâ
3se　食べる　魚　大きな　(疑)
「彼は大きな魚を食べたか?」

—— ʔəwê　ʔáɴ　　ʔənɔ́
3se　食べる　それ
「彼はそれを食べた」

(323) [$_R$ ʔəwê　ʔáɴ]　　já　phàdʊ́　ʁâ
3se　食べる　魚　大きな　(疑)
「彼が食べた魚は大きかったか?」

—— ʔənɔ́　phàdʊ́
それ　大きい
「それは大きかった」

しかし、動詞連続の場合、対応する部分を ʔənɔ́ で置き換えることはできない。

(324) ʔəwê　ʔáɴ　　já　ʔwí　　ʁâ
3se　食べる　魚　おいしい　(疑)
「彼は魚を食べたらおいしかったか」

—— *ʔəwê　ʔáɴ　　ʔənɔ́
3se　食べる　それ

(325) ʔəwê　ʔáɴ　já　ʔwí　ʁâ
3se　食べる　魚　おいしい　(疑)
「彼は魚を食べたらおいしかったか」

—— *ʔənɔ́　ʔwí
それ　おいしい

17.6　動詞連続と文法化

本論文で動詞助詞 (第 18 章) と呼んでいる助詞のうち、動詞に起源を持つもののいくつかは、連結型動詞連続の V1 あるいは V2 が文法化 (grammaticalize) したものと考えられる。例えば、次の例の試行を表す jʊ̄ は、V2 位置に現れた動詞 jʊ̄「見る」が文法化したものであろう。

(326) ʔəwê　ʔáɴ　**jʊ̄**
3se　食べる　(試行)
「彼は食べてみた」

動詞助詞が動詞起源か否かについては第 18 章の各助詞の記述を見ていただきたい。

それでは、分離型動詞連続の V1 あるいは V2 のいずれかが文法化した例というのはないのだろうか。今のところ、完全に文法化したと考えられる例は見つかっていないけれども、一部の V2 については文法化の途上にあると考えてもよいかもしれない。その可能性のあるのが、láʊ「尽きる」と θí「できる」である。

まず、láʊ は「尽きる」という意味の動詞であるけれども、次のように、主語の指示対象の全部が何かを行うという意味で使われることがある。

(327) ʔəθí　kòʊɴ　láʊ　jàʊ
3pl　集まる　すべて　(完)
「彼らは全員集まった」

この láʊ は、単独で使われたときに「すべて」という意味を表すことはできないから、おそらく副助詞に近づいているのではないかと思われる。しかし、(327) を否定した場合に、否定を表す動詞助詞 lə- は láʊ の前に付く。したがって、まだ動詞としての特徴を失っていないと考えられ、そのために本論文ではこれを副助詞には入れていない。

(328) ʔəθí　kòʊɴ　lə-　láʊ　bá　ʔəkhʊ́còɴ | jə-　bá　lì　chōɴ
3pl　集まる　(否)　すべて　(否')　(理由)　1sg　(当為)　行く　迎える
「彼らは全員は集まらなかった (注:部分否定) ので、私が迎えに行かなければならなかった」

「尽きる」という元の意味で使われた例を下に挙げておく。

(329) ʔəwê　ʔáɴ　mì　láʊ　jàʊ
3se　食べる　ご飯　尽きる　(完)
「彼はご飯を食べ尽くした」

次に、θí「できる」は可能タイプの分離型動詞連続に使われる動詞であるが、これが習慣を表すことがある。

(330) hə̀　jò　　lɔ̀kwè　　klàɴ　　chə̀　θí
人　この　冗談を言う　(傾向)　CHə　(習慣)
「こいつはやたら冗談を言うくせがある」(001.2009)

この θí も、単独で使われたときに「習慣がある」という意味を表すことはできないから、おそらく副助詞に近づいているのではないかと思われる。しかし、やはりこの θí にも、否定を表す動詞助詞 lə- が付くことができるので、本論文ではこれを副助詞には入れていない。

(331) lɔ̀kwè　　klàɴ　chə̀　lə-　θí　　bá　　lànâɴ |　chəkhlàiɴ　ʔá
冗談を言う　(傾向)　CHə　(否)　(習慣)　(否')　(逆接)　言葉　　多い
「冗談を言うくせはないが、口数が多い」

ビルマ語でも能力を表す動詞に由来する形態素 /taʔ-/ が習慣を表すので、θí が習慣を表す用法はこの影響によって生じた可能性もある。

この二つの動詞は、動詞としての特徴を完全には失っていないとはいえ、元の意味を失っており、また、「全部」「習慣」を表す意味では単独では使われないのだから、ある程度の文法化が生じていると考えられる。今後これらが完全に助詞化するかどうかは興味深い問題である。

17.7　動詞連続の実例

以上の議論で用いた文例は、作例あるいは実例に改変を加えたものが多かった。この欠点を補うため、以下に、様々なテキストに現れた動詞連続の実例を挙げておくことにする。[ ](v1±) は連結型動詞連続を構成する最初の動詞複合体を表し、[ ](v2±) は連結型動詞連続を構成する二番目の動詞複合体を表す。また、[ ](V1±) は分離型動詞連続を構成する最初の動詞複合体を表し、[ ](V2±) は分離型動詞連続を構成する二番目の動詞複合体を表す。'+' は、それぞれの動詞複合体が意志動詞としての特徴を持つことを表す。一方、'−' は、それぞれの動詞複合体が無意志動詞としての特徴を持つことを表す。

● 連結型、「自動詞＋自動詞」の例

(332) chəʔàʊ　khɔ̂　　θàmɛ́　　mə-　　[**làɴthé**](v1−)　[**θî**](v2−)　ʔəkhʊ́cɔ̀ɴ,
猿　　(対比)　恐れる　(非現)　落ちる　　死ぬ　　(理由)

ʔəwê　phóɴ　　thá　　lâɴkəthá　　kháɴ　　cháicháí　　nɔ́　　chī　　lɔ́
3se　つかむ　(保持)　ハゲワシ　足　　しっかり　(のだ)　(婉曲)　(断定)
「猿は落下して死ぬのがいやだったので、ハゲワシの足をしっかりつかんでいた」(III-12.30)

(333) kɛ́　　tháɴ　　lānâɴ　　ʔəkhwâ　　lə-　　ɣà　　θí |
なる　(完成)　(逆接)　男　　一　　～人　(類似)

méthî　[**ʔə́ɯɴ　thánɴ**](v1−)　[**xwè**](v2−)　ʔəkhwàɴ　phàɴ
涙　たまる　(完成)　満ちる　眼窩　中
「男ではあるけれども、涙が出てきて目にたまった」(V-01.78)

(334) nādèiɴ　phlì　nɔ́　θí　thâɴ　thánɴ　wê　dè　phlìthōɴ
竪琴　糸　(題)　(類似)　付ける　(完成)　(強意)　(共)　銅線

θí　nɔ́　ʔəkhʊ́còɴ |　ʔəlʊ̄　θɔ̂　châ |
(複)　(のだ)　(理由)　音　鳴る　(非常)

ʔəlʊ̄　[**θɔ̂**](v1−)　[**phlò**](v2−)　jàiɴ　wê　chī　lɔ̂
音　鳴る　伝わる　遠い　(強意)　(婉曲)　(断定)
「竪琴の糸も、銅線を取り付けるのでよく鳴り、音が遠くまで鳴り響くのである」(III-09.22)

▹ v2 の後の jàiɴは、分離型動詞連続の描写タイプの 2 番目の動詞として機能している。つまり、v1 と v2 全体で、分離型動詞連続の V1 として機能している。

(335) ləchòtàdánà　nɔ́　lə-　θéiɴthò　ʔɔ́　wāplàɴ　ʔò
一生　(題)　(場)　切り株　ある　原っぱ　(遠方)

[**chōɴ　làɴ**](v1+)　[**ʔɔ́pwài**](v2+)　bá　ləxì
止まる　(下方)　休む　(催促)　(禁止)
「(鳥の父親が息子に) 一生、切り株のある原っぱには、降りていって休んだりするなよ」(III-12.4)

(336) [**káʊ**](v1+)　[**ɣɛ̀**](v2+)　dá　wɛ̀　làɴ　dè　khʊ̄θwê
努力する　活動する　(保持)　(備え)　(下方)　(共)　汗

láʊ　khwái　ʔəkhâ　θɛ̀ləphá　nɔ́
尽きる　(徹底)　時　(複)　(題)

kɛ́　thánɴ　ʔəkhōʊɴʔətà　ʔɔ́　nāɴ　mèiɴ　ʔé　chī　lɔ̂
成る　(完成)　利益　ある　(少数)　～種類　(否)　(婉曲)　(断定)
「汗水たらして努力して得たものが失われたら、働いて得たものが何もなかったということになる」(IV-03.40)

(337) jʊ̄　thàiɴ　thʊ́lêiɴʔwà　phʊ́
見る　(再度)　白サギ　子供

[**ɣê　thàiɴ**](v1+)　[**jʊ̀ɯ**](v2+)　nī　béiɴ
来る　帰る　飛ぶ　二　～羽
「白サギの子が 2 羽飛んで帰ってきたのを再び見た」(IV-04.216)

(338) xîphàɴ　ʔə-　mʊ̄tôʊɴ　nɔ́　[**chînàɴ**](v1+)　[**ʔɔ́**](v2−)　lé　ɣéiɴ
フイパウン　3sg　母　(題)　座る　いる　(場)　家

méjâ　nɔ́tā |　ləjáiləmɔ̄　θôʊɴláichā　ʔáɴcà　thánɴ　wê...
前　(前提)　間もなく　郵便配達　尋ねる　(完成)　(強意)
「フイパウンの母は家の前に座っていたが、郵便配達はすぐに (彼女に次のように) 尋ねた」(IV-04.359)

● 連結型、「自動詞＋他動詞」の例

(339) ʔəlêiɴ　phʊ́　ʔəɴkhài　lə-　béiɴ　lə-　nánɴ　wê　lə̀ɴ
九官鳥　子供　愚かな　一　～羽　(否)　思い出す　(強意)　もはや

ʔə-　mū　chəkhlàiɴ |　[**phʊ̂ʊ̀　làɴ**](v1+)　[**ʔánlʊ̄ʊ́**](v2+)　wê　thî
3sg　母　言葉　跳ぶ　(下方)　浴びる　(強意)　水

lə-　thîkhló　phə̀ɴ　ʔò　chū　lɔ̂
(場)　川　中　(遠方)　(婉曲)　(断定)
「愚かな九官鳥の子供は、母の言葉をもはや思い出さず、(川岸に) 跳ねて降りて、川の中で水浴びを始めたのだった」(IV-07.40)

(340) jə-　[**chînàɴ**](v1+)　[**ʔáiɴ　thé**](v2+)　nī　ʔəjó
1sg　座る　かじる　切れる　(努力)　芽

nɔ́　jə-　nánɴ　dài　thîchà　dài　lɔ̂
(題)　1sg　覚えている　まだ　確かな　まだ　(断定)
「私は、座って木の芽をかみ切ったことを確かに覚えている」(III-10.15)

(注)v2 は、それ自体が「他動詞 (v1+) ＋自動詞 (v2−)」の連結型動詞連続である。jə- [nánɴ](V1−) dài [thîchà](V2−) dài は、描写タイプの連結型動詞連続である。

(341) dè　ʔə-　cʊ́ʊ　lākhɔ̂　[**ɕû**](v1+)　[**phóɴ　thá**](v2+)　wê
(共)　3sg　手　両方　急ぐ　つかむ　(保持)　(強意)

lâɴkəthá　ʔə-　kháɴ　nɔ́　chū　lɔ̂
ハゲワシ　3sg　足　(のだ)　(婉曲)　(断定)
「両方の手で、急いでハゲワシの足をつかんだのだった」(III-12.22)

(342) khəmlə̄ɴ　θí　θíjâ　wê　təwànphʊ́　chè　làɴ　lāɪɴtə̀ɴ |
民衆　(類似)　知る　(強意)　村人　突き刺す　(下方)　くみ出し機

mə-　θà　θài　nóɴ　nɔ́　lə-　blàɴ　tā |
(非現)　干拓する　乾く　池　その　一　回　(前提)

θà　kətɔ̀ |　[**ʔɔ́kóɴ**](v1+)　[**lɔ̀thàiɴ　lóθà**](v2+)　lɔ̂
心　心配する　集まる　話す　(相互)　(断定)
「(魚の) 民衆も、村人が水の汲み出し機を設置して池を干拓しようとしていることを知り、心配になって、集まって話し合った」(III-15.7)

▷ [θà](v1+) [θài](v2−) 「干拓して乾かす」の部分は、「他動詞＋自動詞」の連結型動詞連続。

(343) θâɴwɔ̀phʊ́　ʔè　[**ɣê**](v1+)　[**dí　làɴ**](v2+)　lé　klà　θwî　phə̀ɴ |
カッコウ　(条件)　来る　生む　(下方)　(場)　カラス　巣　中

klà　lə-　θíjâ　làɴ　θà　nāɴ　chò　bá　càibò ...
カラス　(否)　知る　(帰的)　(再帰)　(少数)　瞬間　(否')　(条件)
「カッコウがもしカラスの巣の中に (卵を) 生みに来て、カラスのほうは全然そのことに気づかなかったとしたら...」(IV-09.52)

● 連結型、「他動詞＋他動詞」の例

(344) jə-　[**pjá**　**làɴ**](v1+)　[**jū**](v2+)　châiɴphlōɴ　nɔ́ ...
1sg　広げる　(下方)　見る　上着　(前提)
「私が上着を広げて観察したところ...」(V-02.98)

(345) já　phjā　jò　[**phóɴ**](v1+)　[**nī**](v2−)　lúɯ　dəɴ　phàɴ　ʔò
魚　もの　この　獲る　得る　(場)　湖　中　(遠方)
「この魚は、あの湖からとってきました」(002.647)

(346) phûɯbɨ̀　mâ　mànī　thàiɴ　ʔə-　châiɴbákàɴ　ɣòɴ |
大叔父　妻　取る　(再度)　3sg　高級上着　(継起)

[**dɔ́**　**thánɴ**](v1+)　[**plàʊ**　**làɴ**　**thàiɴ**](v2+)　pàʊtà　phàɴ
畳む　(完成)　入れる　(下方)　(再度)　行李　中
「大叔父さんの妻は、高級な民族衣装を再び手に取り、畳んで行李の中に入れた」(V-02.148)

(347) ʔè　lə-　[**lì**　**phɯ́**](v1+)　[**θôʊɴ**](v2+)　jə̀　bá |
(条件)　(否)　行く　背負う　送る　1SG　(否')

jə-　cáiɴ　kɛ́　ʔé
1sg　歩く　可能な　(否)
「もし私を背負って送ってくれないのだったら、私は行くことができない」(III-04.23)

▹ v1 は、これ自体が「自動詞 (移動動詞)(v1+) ＋自動詞 (v2−)」の連結型動詞連続であり、「背負って行く」という意味である。

(348) chɨ̀　phîphûɯ　ləwī　khlòthɔ̄　làɴ　thá　cɯ́lāɴ　ɣì　ləphá
民族　祖先　以前　残す　(下方)　(保持)　技術　良い　(複)

bê　lə-　làɴmā　bá　θò |　hə-　bá
(目的)　(否)　消える　(否')　(目的')　1pl　(当為)

[**ɣáθá**](v1+)　[**jū**　**ɣì**](v2)　wê　dàlɔ̌
保存する　見る　良い　(強意)　(断定)
「昔の先祖たちが残してくれた良い技術が消えないように、私たちは保存して、良いものになるよう見守らなければならない」(IV-01.118)

▹ v2 は、これ自体が「他動詞 (v1+) ＋自動詞 (v2−)」の連結型動詞連続であり、「見守って良くする」という意味である。

(349) [**lɔ̀**](v1+)　[**màláʊ**](v2+)　wê　ɣòɴ |　θî　wê　lɔ̌
語る　注文する　(強意)　(継起)　死ぬ　(強意)　(断定)
「そう言い残して（ことづけて）亡くなった」(III-12.5)

(350) θàʊcà　nɔ́　[**phóɴ**](v1+)　[**phəɣôʊɴ**](v2+)　nī　thàiɴ　xîphàɴ　tā |
(人名)　(題)　つかまえる　抱く　(引寄)　(元位)　(人名)　(前提)

xîphàɴ　nɔ́　ʔánjàɣáʊ　làɴ　θà
(人名)　(題)　動かす　(帰的)　(再帰)
「タウチャーがフイパウンを再びつかまえて抱くと、フイパウンはもがいた」(IV-04.234)

(351) xîphàɴ　[**ʔánɴphôɴ**](v1+)　[**dàʊ**　**ʔánɴ**](v2+)　khwái　θàʊcà　mì　ɣòɴ |
(人名)　炊く　(使役)　食べる　(徹底)　(人名)　ご飯　(継起)

ɣê　thàiɴ　θôʊɴ　wê　lə-　ɣàmʊ́ɪ　ɣéiɴ　ʔò
来る　帰る　送る　(強意)　(場)　叔母　家　(遠方)
「フイパウンはご飯を炊いてタウチャーに食べさせて、(タウチャーを) 叔母の家まで送ってきた」(IV-04.321)

▷ v2 は「使役を表す動詞前接辞＋動詞」という構成になっている。

(352) xîphàɴ　[**kè**](v1+)　[**lɔ̀**　**ɣɔ̂ɴ**](v2+)　bá　dè　lái　jò　chī　lɔ̂
(人名)　書く　(使役)　聞こえる　(不抗)　(共)　手紙　この　(婉曲)　(断定)
「私 (フイパウン) はこの手紙を書いて (あなたに) 知らせます」(IV-04.403)

(353) ʔwí　bá　ʔəθí　nò　nɔ́ |
美味な　(基準)　3pl　口　(前提)

[**tàiɴ**](v1+)　[**ʔɔ̀**](v2+)　wê　klɔ̀klə̀　chī　lɔ̂
作る　飲む　(強意)　いつも　(婉曲)　(断定)
「彼らの口に合ったので、彼らはいつも作って飲んでいる」

(354) phlòʊɴ　chəxîlà　jə-　bá　[**rɛ̄θɛ̂**](v1+)　[**mànī**](v2−)
カレン　文化　1sg　(当為)　尊敬する　取る
「私はカレンの文化を敬ってかつ身につけねばならない」(IV-06.25)

(355) cɔ̀θéiɴlá　khɔ̂　dɔ̀　mà　wê　lə-　bá　làɴ　nāɴ　mèiɴ |
(人名)　(対比)　(別個)　する　(強意)　(否)　正しい　もはや　(少数)　～種類

[**ʔáɴjâ**](v1+)　[**lɔ̀**](v2+)　wê　plɛ̀tɔ̀　lā　jə̀
謝罪する　言う　(強意)　許す　(願望)　1SG
「チョーテインラーはというと、もはや何も言えなくなって、『私を許してくれ』と謝って言った」(V-01.87)

● 連結型、「他動詞＋自動詞」の例

(356) chəlâ　θâɴwɔ̀　nɔ́　dɔ̀　ʔè　mwɛ̄　ʔəwê　ʔè　dá　klà　nɔ́ |
先生　カッコウ　(題)　(別個)　(条件)　(繋)　3se　(条件)　会う　カラス　(題)

ʔáɴkèiɴ　θíxwè　lə-　ʔəwê　[**bjàɴ**](v1+)　[**blá**](v2−)　thʊ́pəɣʊ́ɪ
頼む　薬の代金　(関)　3se　治す　治る　フクロウ

nɔ́　klə̀　lɔ̂
(のだ)　いつも　(断定)
「医者のカッコウは、もしカラスに会うと、フクロウを治してやった薬代を請求するのが常だった」(I-03.34)

(357) ʔəwêdá　bá　[**ɣúɨ**](v1+)　[**phà**](v2−)　phí　wê　θâɴwɔ̀　ʔədí　nɔ́
3se　(当為)　暖める　生まれる　(裨益)　(強意)　カッコウ　卵　(題)

khōɴbònáiɴjò　dài　chī　lɔ̂
現在まで　まだ　(婉曲)　(断定)
「彼 (カラス) はカッコウの卵を、現在にいたるまで、かえしてやらねばならないのだ」(I-03.40)

(358) mwɛ̄　ʔədìchə̂ɴ　[**khə́ɯɴ**](v1+)　[**bə̀ɴ**](v2−)　θà　ʔəlāɴklɛ̀
(繋)　へそ　掘る　埋まる　(再帰)　場所

nɔ́　ʁâ　θɨ́jâ　ʔé
(のだ)　(疑)　知る　(否)
「へそが埋まる場所なのかもしれない（「へそが埋まる場所」はイディオムで、「一生住む場所」の意）」(V-04.50)

▷ 動詞連続 khə́ɯɴ bə̀ɴ は、全体として他動詞としての機能を果たすが、動詞助詞 θà の働きで、この動詞連続は自動詞化 (かつ無意志動詞化) している。

(359) [**θàʊ**](v1+)　[**bàʊ**　**tháɴ**](v2−)　thàiɴ　mókhɔ̂　təmjâɴ　lə-　khɔ̂
動かす　近い　(変化)　(元位)　タバコ入れ　驚くべき　一　～個

nɔ́　lɔ̂
(のだ)　(断定)
「その見事な出来映えのタバコ入れを近くに引き寄せた」(V-02.56)

(360) báchâiɴ　dè　chɨ̀bòɴ　ʔəpî　θɛ̀ləphá　nɔ́ |　ʔəkhâjò
関する　(共)　民族　小さい物　(複)　(前提)　現在

lə-　chɨ̀bòɴ　ʔədʊ́　θɛ̀ləphá　nɔ́ʔò　[**ʔáɴjūɨ**](v1+)　[**làɴbài**](v2−)
(場)　民族　大きい物　(複)　(題)　飲み込む　つぶれる

khwái　wê　chɨ̀bòɴ　ʔəpî　θɛ̀ləphá　nɔ́　ʔá　wê　jàʊ　chī
(徹底)　(強意)　民族　小さい物　(複)　(題)　多い　(強意)　(完)　(婉曲)
「小さな民族に関しては、現在、大きな民族が小さな民族を飲み込んでしまうということが多くなっている」(IV-01.7)

(361) bá　[**ʔáɴlûɨ**](v1+)　[**xâiɴ**](v2−)　thàiɴ　nī　θə̂ɴ　θâɴ　dɔ̀　lɔ̂
(当為)　干す　乾く　(再度)　二　三　日　(別個)　(断定)
「(魚醤を) ふたたび 2〜3 日干して乾かさなければならない」(III-13.15)

(362) thōɴ　ʔə-　[**lɔ̀**](v1+)　[**ʔá**](v2−)　chəkhlàiɴ　nāɴ　mèiɴ　ʔé
～さえ　3sg　語る　多い　言葉　(少数)　～種類　(否)
「彼は言葉を多く語ることさえしなかった」(IV-04.28)

(363) dè　ʔəθí　pòŋɲâ　nɔ́　[**khláʊ**](v1+)　[**bài**](v2−)　wê
(共)　3pl　知恵　(題)　覆う　ふさがる　(強意)

pəcháiphʊ́chā　ʔə-　khʊ́náʊ　jò　lɔ̌
農民　3sg　脳　この　(断定)
「(知識人達は) 彼らの知恵で、農民の脳みそを覆い隠してしまおうとしているのだ」(IV-09.15)

• 分離型、描写タイプの例

(364) [**ʔɔ́**　**θʊ́ʊ́**　**wê**](V1+)　[**xè**](V2−)　chī　lɔ̌
いる　(内密)　(強意)　静かな　(婉曲)　(断定)
「静かに隠れていた」(V-04.196)

(365) mʊ́ʊ́θwíwɔ̀　dè　cɔ̀ʔʊ́ʊ́thʊ̂ʊ́　nī　ɣà　[**chîthɔ́ɯɴ**](V1+)　[**thɔ̂ɣòɴ**](V2−)
(人名)　(列挙)　(人名)　二　～人　立つ　平坦な
「ムートゥイーウォーとチョーウートゥの 2 人は、並んで立った」(V-04.246)

(366) pə-　təwâɴ　nɔ́　[**ʔɔ́**](V1−)　[**jàiɴ**](V2−)　mā　chī　lɔ̌
1pl　村　(題)　ある　遠い　(非常)　(婉曲)　(断定)
「私たちの村は大変遠くにある」(I-sen.78)

(367) thàθəwài　nī　khlóʊɴ　nɔ́　[**θəwài**　**lóθà**](V1+)
磁石　二　～本　(題)　吸う　(相互)

[**bàʊthá**　**khwái**　**wêdá**](V2−)　chī　lɔ́
近い　(徹底)　(強意)　(婉曲)　(断定)
「2 本の磁石は引き寄せあって近づいた」(III-01.42)

(368) xîphàɴ　[**ʔɔ́**](V1+)　ɣéiɴ　[**máʊ**](V2−)　lə̀ɴ　ʔé
(人名)　いる　家　快適な　もはや　(否)
「私 (=フイパウン) は家にいても楽しくありません」(IV-04.314)

(369) θài　nɔ́　bònáiɴjò　[**tàiɴ**　**wê**](V1+)
酒　(題)　現在　作る　(強意)

[**ʔánlɛ̀**　**tháɴ**　**thàiɴ**　**θà**](V2−)
変える　(完成)　(再度)　(再帰)
「酒の作り方は現在また変わってしまった」(IV-05.52)

▷ ʔánlɛ̀「変える」は他動詞かつ意志動詞であるが、動詞助詞 θà によって自動詞化かつ無意志動詞化されている。

(370) jáijái　lə-　blàɴ　phlòʊɴ　chəkhlàiɴ　nɔ́
そのうち　一　～回　カレン　言葉　(題)

[**khlàiɴ　wê**](V1+)　[**lòɴ**](V2−)　lə̀ɴ　ʔé　lɔ̂
話す　(強意)　まっすぐな　もはや　(否)　(断定)
「そのうちカレン語も、きちんと話すことができなくなるだろう」(IV-06.18)

(371) mí　[**khè　thánɴ**](V1−)　[**dú**](V2−)　mā
火　点く　(完成)　大きい　(非常)
「火がたいへん大きく燃えている」(IV-08.22)

(372) mwɛ̄　ɣê　pəjànkhāɴ |　hə-　[**ʔáɴɣá　làɴ**](V1+)
(繋)　来る　ビルマ国　1pl　迎える　(内方)

lə-　[**dàʊpàiɴ**](V2−)　ʔəcóɴ　nɔ́　ʁâ
(否)　十分な　理由　(のだ)　(疑)
「(彼が) ビルマに来たときに、歓迎の仕方が十分じゃなかったせいですか?」(009.32)

(373) mʉ́phʉ́wê　ʔəcá　θí　phɔ̄　[**kháɴkhâ**](V1+)　lə-　[**thəlɔ̂ɴ**](V2−)
少女　人生　(類似)　～の間に　踏み出す　(否)　過ぎる

dài　bá |　ʔəcá　mí　tətáʊ　lə-　khè　thánɴ　dài　bá　khâ
まだ　(否')　人生　火　厄災　(否)　点く　(完成)　まだ　(否')　時

mə-　bá　ʔɔ́　dè　θəθài　lɔ̂
(非現)　(当為)　いる　(共)　注意　(断定)
「少女の物である人生も、踏み出し方が度を過ぎないうちに、そして業火が燃えさからないうちに、気をつけねばならないのだ」(IV-08.23)

● 分離型、可能タイプの例

(374) báchâiɴdè　chɨ̀chá　ʔəɣānɴ　nɔ́
～に関して　民族　ため　(題)

[**thōʊɴ　θî　θà**](V1+)　[**bá　bəʉɴ**](V2−)　kō　ɣà　dè
受ける　死ぬ　(再帰)　(当為)　勇気のある　(毎)　～人　(毎')
「民族のためには、甘んじて死ぬ勇気がなければならない」(IV-01.96)

(375) thʉ́　bá　làɴ　lé　khôʊɴ　phàɴ　nɔ́　ʔánɴ　báθà　ʔəchá
鳥　(当為)　降りる　(場)　腰掛け　中　(題)　食べる　(欲求)　えさ

cwá　ʔəkhʉ́còɴ |　[**chônmóɴ　wê**](V1+)　ʔəɣʉ̂ɣà　lə-　[**bá**](V2−)　làɴ |
(非常)　(理由)　考える　(強意)　他のこと　(否)　正しい　もはや

chōɴ　làɴ　ʔánɴ　wê　nɔ́ |　[**jʉ̀　thánɴ**](V1+)
とまる　(下方)　食べる　(強意)　(前提)　飛ぶ　(上方)

lə-　[**θí**](V2−)　làɴ　bá ...
(否)　できる　もはや　(否')
「腰掛けの上に降りた鳥が、非常にえさを食べたくて、他のことを正しく考えることができず、とまって食べていたところ、飛び上がることができなくなってしまい...」(V-01.56)

(376) nə̀　nɔ́　nə-　[**lɛ̀**](V1+)　nə-　mâ　[**θí**](V2−)　bádòɴ
2SG　(題)　2sg　あやす　2sg　妻　できる　～のようだ
「あなたは、奥さんをなだめるのが上手なようだ」(009.47)

第18章　動詞助詞

動詞の直前や直後に付く助詞を**動詞助詞**(verb particle) と呼ぶ。動詞助詞には実に様々なものがあり、これまでに 60 個以上が見つかっている。第 16 章で述べたとおり、動詞と動詞助詞からなる部分を動詞複合体と呼ぶ。

動詞助詞はポー・カレン語の助詞の中でも特に重要である。なぜなら動詞助詞は、節の中核部分とも言える動詞複合体の性質を、動詞と一緒になって決定するからである。例えば、一部の動詞助詞には、動詞複合体が取ることのできる項の数を増やしたり減らしたりする機能がある。このように重要な助詞であるので、以下の記述では助詞が使われた実例をなるべく多くしてある。以下、18.1 から 18.11 までが動詞の前に置かれるもの、18.12 から 18.61 までが動詞の後に置かれるものである。

なお、動詞助詞の中には動詞に起源を持つものがかなりある。それらは元の動詞とは多かれ少なかれ意味が異なっている。また、元の動詞とは異なる発音で発音できるものも少なくない。

I. 動詞の前に置かれるもの

まず、動詞の前に置かれる動詞助詞を見ていく。

18.1　mə-　＜非現実＞

非現実法 (irrealis modality) を表す助詞である。常に動詞複合体の先頭に置かれる。mə̄ あるいは mʊ̄ と発音されることもある。歴史的に古い発音を残しているのは mʊ̄ である。というのは、この助詞は西部ポー・カレン語の mô やスゴー・カレン語の mò と同源だと考えられるからである。また、19 世紀半ばに出版されたポー・カレン語の聖書 (キリスト教ポー・カレン文字による) では、この形式が現在の発音で mʊ̄ と読まれる綴りで書かれているからである。西部ポー・カレン語の mô とスゴー・カレン語の mò は、どちらの形式も「～したい」という意味を表す。このことから、東部ポー・カレン語の mʊ̄ も元来は「～したい」という意味を表していたと考えられる。

ポー・カレン語は、ある事象が現実のものかどうかという判断に関して敏感に反応する。それを mə- の有無で表す。下の (a) と (b) を見ていただきたい。

(1) a. mʊ̀ɪɣá　ʔəwê　thə́ɯɴlī
　　昨日　3se　踊る
　　「昨日、彼は踊った」

b. mʉ̀ɤ́　ʔəwê　mə-　thə́ɯɴlī
昨日　3se　踊る
「昨日、彼は踊っただろう」

mə- のない (a) は、話者が「昨日、彼が踊った」ということについて確信を持っているときに使われる文である。一方、動詞助詞 mə- を伴った (b) は、「昨日、彼が踊った」ということについて確信を持っていないときに使われる文である。このように、ポー・カレン語は、事象が現実のものであると話者が判断できるかできないかを、動詞の前に置かれる動詞助詞 mə- の有無で表す。mə- があるかないかはまさに認識的法 (epistemic modality) に関わっている。そこで、mə- の現れない動詞複合体は**現実法**(realis modality) を表し、mə- の現れた動詞複合体は**非現実法**(irrealis modality) を表すと考える。

主節において mə- が使われないとき、その節が言及できる事象は次のとおりである。

- 発話時点より前 (すなわち過去) に生じたすべての事象。
- 発話時点において存在している事象。具体的には、発話時点においてまさに継続中の動作や状態と、発話時点にまたがって習慣的・反復的に生起する動作や状態変化。

つまり mə- の現れていない主節は、発話時点より後 (未来) の事象に言及することができない。したがって、次の (d) は不適格である。

(2) a. mʉ̀ɤ́　ʔəwê　thə́ɯɴlī
昨日　3se　踊る
「昨日、彼は踊った」

b. ʔəkhâjò　ʔəwê　thə́ɯɴlī
今　3se　踊る
「今、彼は踊っている」

c. ʔəwê　thə́ɯɴlī　kò　nì　dè
3se　踊る　(毎)　～日　(毎')
「彼は毎日踊っている」

d. *kèkhó　ʔəwê　thə́ɯɴlī
明日　3se　踊る
(明日、彼は踊る)

一方、mə- の現れた主節は、過去・現在・未来すべての時点の事象に言及することができる。

(3) a. mʉ̀ɤ́　ʔəwê　mə-　thə́ɯɴlī
昨日　3se　踊る
「昨日、彼は踊っただろう」

b. ʔəkhâjò　ʔəwê　mə-　thə́ɯɴlī
今　3se　踊る
「今、彼は踊っているだろう」

c. ʔəwê mə- thə́ɯɴlī kò nì dè
3se 踊る (毎) ～日 (毎')
「彼は毎日踊っているだろう」

d. kèkhó ʔəwê mə- thə́ɯɴlī
明日 3se 踊る
「明日、彼は踊るだろう」

以上を図示すると次の通りである。

mə- の有無による主節が表すことのできる事象の違い

	発話時点より前	発話時点	発話時点より後
mə- のない主節 (realis)	yes	yes	no
mə- のある主節 (irrealis)	yes	yes	yes

ただし、発話時点が基準として関わるのは、主節の場合のみである。従属節の場合、mə- が付くかどうかは、主節の事象が生起する時点を基準として決定される。次の例を見られたい。

(4) pê jáʊ **mə-** thɔ̂ θò |
(目的) 年齢 長い (目的')

ʔəwê màbóʊɴ
3se お布施する
「長生きするよう、彼はお布施した」

この文の従属節に mə- が現れているのは、「長生きする」という事象が発話時点以降に生じるからではなく、これが主節が表す事象よりも後で生じるからである。「彼」は発話時点で既に死んでしまっていると仮定しよう。その場合、従属節が表す事象は、発話時点以降に生じる可能性がゼロである。したがって、ここで従属節の動詞に mə- が付いているのは、発話時点以降に生じる事象だからではなく、主節の動詞が表す事象よりも後に生じる事象だからである。従属節における mə- の選択は、このように、主節との時間的相対関係によって決まる。従属節の事象が主節の事象より後に生じるものであれば、必ず mə- を従属節の動詞の前に付けなければならない。次に挙げる例も同様であり、従属節が表す事象は主節の事象より後に生じる事象なので、たとえ発話時点より前に生じた事象であったとしても、従属節の動詞には mə- を付けなければならない。

(5) jə- thəjà [$_C$ ʔəwê **mə-** ɣɛ̂ θə̄ɴ nàrì]
1sg 予測する 3se 来る 三 ～時
「私は、彼が 3 時に来ると予測した」(002.909)

(6) jə- chôɴmóɴ [$_C$ nə- **mə-** ɣɛ̂ cáiɴ dài]
1sg 考える 2sg 来る 遊ぶ また
「私は、あなたがまた遊びに来るものと思っていた」(008.9)

(7) lé　[**mə-**　ʔánˬ]　ʔəɣānˬ　chəthə́ɯnˬchəbòˬ
(強調)　食べる　ため　植物

dè　[**mə-**　kòˬθò]　ʔəɣānˬ　chəthə́ɯnˬchəbòˬ　θí　nɔ́
(列挙)　着る　ため　植物　(複)　(題)

ʔəθíwê　θə́ɯˬ　ʔá　thánˬ
3se　植える　多い　(変化)

θə́ɯˬ　lɛ̄　thánˬ　wê　dài　chī　lɔ̂
植える　広い　(変化)　(強意)　まだ　(婉曲)　(断定)
「食べるための植物や衣料を作るための植物を、彼らは植えては増やしていったのである」(II-04.16)

ところで、mə- が決して現れない環境がある。それは、(1) 否定を表す助詞 ʔé, lə- が使われた節、(2) 使役構文における補文、(3) 条件や仮定を表す助詞 ʔè に導かれた節、である。これらの環境では現実法しか現れない。つまり、mə- が現れない。以下に例を見る。まず、否定を表す助詞が現れた節を見てみよう[1]。(8) と (9) は、それぞれ、否定の助詞 ʔé および lə- が現れた例である。なお、ʔé については第 24 章、lə- については次節を参照されたい。

(8) kèkhó　jə-　lì　**ʔé**
明日　1sg　行く　(否)
「私は明日行かない」

(9) kèkhó　jə-　**lə-**　lì　bá　ʔəkhʊ́còˬ |
明日　1sg　(否)　行く　(否')　(理由)

lì　khè　phí　jə̀　xɔ̄
行く　(代行)　(裨益)　1SG　XO
「明日、私は行かないので、代わりに行ってくれ」

これらの文は、mə- を用いると次のように不適格になる。

[1]隣接する言語であるビルマ語にも、これと類似の現象が観察される。肯定文においては現実法 (realis mood) と非現実法 (irrealis mood) の対立が見られるが、否定文においてはこの対立が中和してしまう。次の例文で、dɛ̀ は現実法を表す助詞、mɛ̀ は非現実法を表す助詞である。

(a)　ŋà　mənêgâ　θwá　dɛ̀
1sg　昨日　行く　(現実法)
「俺は昨日行った」

(b)　ŋà　mənɛʔphàˬ　θwá　mɛ̀
1sg　明日　行く　(非現実法)
「俺は明日行く」

(c)　ŋà　mənêgâ　mǎ　θwá　bú
1sg　昨日　(否)　行く　(否')
「俺は昨日行かなかった」

(d)　ŋà　mənɛʔphàˬ　mǎ　θwá　bú
1sg　明日　(否)　行く　(否')
「俺は明日行かない」

Honda (1996) によれば、否定文における動詞にまつわる文法的範疇の対立は、通言語的に、対応する肯定文より少ない傾向があるという。

(10) *kèkhó jə- **mə-** lì **ʔé**
明日 1sg 行く (否)

(11) *kèkhó jə- **mə-** **lə-** lì bá ʔəkhʊ́còɴ |
明日 1sg (否) 行く (否') (理由)

lì khè phí jə̀ xɔ̄
行く (代行) (裨益) 1SG XO

▷ もちろんこの文は mə- と lə- の位置を替えて lə- mə- lì bá としても不適格である。

次に、補文を取る使役構文である (第 28 章で TYPE 2 と呼んでいるもの)。下の例を見られたい。なお、補文を取る使役構文の詳細については、第 22 章および第 28 章を参照せよ。

(12) jə- ʔánmə̂ɴ [$_C$ ʔəwê lì kèkhó]
1sg 命じる 3se 行く 明日
「私は彼に明日行くよう命じた」

この文の補文の動詞には、mə- を付けることができない。

(13) *jə- ʔánmə̂ɴ ʔəwê **mə-** lì kèkhó
1sg 命じる 3sg 行く 明日

最後に、条件や仮定を表す従属節助詞 ʔè が導く節の例である。この助詞については、第 21 章を参照されたい。

(14) jə- ʔè ɣɛ̂ | nə- **mə-** ʔɔ́ ʁâ
1sg (条件) 来る 2sg (非現) いる (疑)
「私が行ったら、あなたはいますか?」(002.93)

ここでも同様に、ʔè が導く節の中で mə- を用いることはできない[2] 。

(15) *jə- ʔè **mə-** ɣɛ̂ | nə- mə- ʔɔ́ ʁâ
1sg (条件) 来る 2sg いる (疑)

18.2 lə- ＜否定 (従属節)＞

否定を表す。lə- も mə- と同様、常に動詞複合体の先頭に置かれる。主節の否定は、副助詞 ʔé(第 24 章) を述部に置くことによって行われるが、従属節の場合は lə- を動詞の前に置く。lə- が現れると、次の (16) のように動詞の直後、あるいは (17) のように動詞句末に、lə- を補助する形式 bá が置かれることが多い。bá は wá と発音されることもある。この bá 自体には否定を明示するための機能しかない。

(16) nə- ʔè **lə-** lì **bá** cəpâɴ nɔ́ | jə- mə- lì
2sg (条件) 行く 日本 (題) 1sg (非現) 行く
「あなたが日本に行かないのなら、私が行く」(003.296)

[2] これは英語の条件節で助動詞 will が現れない現象と似ている。

(17) nə-　ʔè　**lə-**　lì　cəpâɴ　**bá**　nɔ́ |　jə-　mə-　lì
2sg　(条件)　行く　日本　(題)　1sg　(非現)　行く
「あなたが日本に行かないのなら、私が行く」(003.297)

この bá は (18) のように動詞の直後と述語末の両方に現れることもある。また、(19) のようにまったく現れないこともある。

(18) nə-　ʔè　**lə-**　lì　**bá**　cəpâɴ　**bá**　nɔ́ |　jə-　mə-　lì
2sg　(条件)　行く　日本　(題)　1sg　(非現)　行く
「あなたが日本に行かないのなら、私が行く」(003.298)

(19) nə-　ʔè　**lə-**　lì　cəpâɴ　nɔ́ |　jə-　mə-　lì
2sg　(条件)　行く　日本　(題)　1sg　(非現)　行く
「あなたが日本に行かないのなら、私が行く」

以下に、様々な従属節に現れた lə- の例を示す。まず、副詞節の中に現れた例を挙げる。

(20) jə-　ʔɔ́　**lə-**　chóɴ　**bá**　ʔəkhʊ́còɴ |
1sg　いる　元気な　(理由)

jə-　lì　cōɴ　kɛ́　lə̀ɴ　ʔé
1sg　行く　学校　可能な　もはや　(否)
「私は元気ではないので学校には行けない」(001.84)

(21) ʔè　**lə-**　khlàʊ　**bá** |　thàiɴ
(条件)　暇な　帰る
「暇ではないのなら帰りなさい」(001.351)

(22) bê　chəkhléiɴ　**lə-**　bá　nə̀　**wá**　θò |　θətài
(目的)　寒さ　ぶつかる　2SG　(目的)　注意する
「風邪をひかないように気を付けて」(001.444)

(23) **lə-**　ʔáɴ　báθà　lānâɴ　θí |　bá　ʔáɴ
食べる　(欲求)　(逆接)　(類似)　(当為)　食べる
「食べたくなくても、食べなければならない」(001.2082)

(24) kəlà　**lə-**　ʔáɴ　mì　dài　**bá** |
とき　食べる　ご飯　まだ

θîjà　khwái　wī　nə-　cʊ́ʊ　nɔ́
洗う　(徹底)　(先行)　2sg　手　その
「ご飯を食べる前に手を洗いなさい」(001.3519)

(25) ʔɔ́ |　bê　**lə-**　θíjâ　**bá**　θò |　xì
いる　(目的)　知る　(目的')　(禁止)
「知らないふりをするな」(003.539)

次に、補文に lə- が現れた例を挙げる。

(26) [$_C$ **lə-** dá **bá**] jái mā jàʊ
会う 久しい (非常) (完)
「ずいぶん久しぶりです」(002.24)

(27) [$_C$ **lə-** lɔ̀ **bá**] nɔ́ ɣì tháʊ lɔ̂
語る (題) 良い (最上) (断定)
「言わないのが一番良い」(003.474)

(28) klà nɔ́ θíjâ bá wê
烏 (題) 知る (不抗) (強意)

[$_C$ thʊ́pəɣʊ́ ʔə- chəkhlàiɴ **lə-** tɔ̀lòɴ **bá**] nɔ́
梟 3sg 言葉 まっすぐな (のだ)
「烏は、梟の言葉が正直でないことを知った」(I-03.35)

(29) jə- dá bá [$_C$ nə- cʊ́ʊ nə- kháɴ
1sg 見える (不抗) 2sg 手 2sg 足

lə- ʔɔ́ **bá**] jò | jə- kətɔ̀ khè bá nə̀ dè
ある (前提) 1sg 心配する (代行) (不抗) 2SG そして

jə- jâɴθà bá nə̀ dʊ́mā lɔ̂
1sg 哀れむ (不抗) 2SG 大変 (断定)
「私はこのようにお前 (=蛇) の手足がないのを見て、お前に代わって心配だし、大変かわいそうに思う」(II-11.9)

(30) mwɛ̄ [$_C$ hə- **lə-** dá thàiɴ **bá**] dàlɔ̂ dʊ̀ʊ
(繋) 1pl 会う (再度) (断定) DU
「たまたま会わなかっただけなんだよ」(001.3726)

最後に、関係節に lə- が現れている例を挙げる。

(31) láiʔàʊ [$_R$ **lə-** ká **bá**]
本 難しい
「難しくない本」(002.561)

(32) phlòʊɴ [$_R$ **lə-** lì **bá**] nɔ́
人 行く その
「行かなかった人」(003.286)

(33) chəkhlàiɴ [$_R$ ʔəθʊ́ʔəjàiɴ **lə-** dàʊpàiɴ **bá**]
言葉 味わい 満ち足りた
「味わいのない言葉」(001.19)

(34) lé　[$_R$ mí　**lə-**　ʔáɴ　dài　**bá**]　ʔəkhâ　jò
(場)　火　食べる　まだ　時　この

cáiɴ　wɛ̀　lā　ʔèjàiɴ　chài
出る　(備え)　(願望)　遠くに　CHAI
「火事が起きない今のうちに遠くへと逃げておきなさい」(II-11.10)

否定の仕方の点から見ると、分裂文の前提部は従属節と同じ扱いを受ける。例えば次の例を見ていただきたい。

(35) ʔəwê　ʔáɴ　ʔé
3se　食べる　(否)
「彼は食べなかった」

この文を分裂文化して主語名詞句を焦点位置に持っていくと、次のようになる。

(36) **lə-**　ʔáɴ　**bá**　nɔ́　ʔəwê　lɔ̂
食べる　(題)　3se　(断定)
「食べなかったのは彼だ」

分裂文の前提部に lə- が現れている例を下に挙げる。

(37) **lə-**　ɣì　**bá**　nə-　phʊ́　nə-　lì　lɔ̂
良い　2sg　子　2sg　孫　(断定)
「良くないのはお前の子や孫たちだ」(001.3761)

(38) nə-　**lə-**　ɣɛ̂　**bá**　nɔ́　mwɛ̄　báchənɔ́　lɛ̂
2sg　来る　(題)　(繋)　なぜ　(疑)
「お前が来なかったのはどうしてか」(002.116)

実は、lə- が主節に現れたように見える文がある。次の (39) に例を示すようなものである。

(39) **lə-**　kòɴjā　**bá**
治る
「(病気が) 治らないのです」(003.705)

このような文を聞くと、後に何か言い残したことがあるように感じるという。おそらくこのような文を発した話者の頭の中には例えば次のような文が想定されているのだろう。

(40) **lə-**　kòɴjā　**bá** |　(jə-　θà　ɕáɴ)
治る　1sg　心　貧しい
「(病気が) 治らないので、気が滅入っているのだ」

(　) でくくった主節の部分は話者の想像にまかせ、そのことによって表現に慎み深さ (modesty) を持たせているのではないか。同様の例を下に挙げる。

(41) **lə-**　ɣɛ̂　dài　**bá**　nɔ́
　　来る　まだ　(のだ)
「(私の友人は) まだ来ていないんですよ」(001.2088)

(42) **lə-**　làɴthé　**bá**　kəmlə̂ɴ　phə̀ɴ　**bá**　mɨ̂
　　落ちる　井戸　中　～ですよ
「(運良く) 井戸に落ちなかったんですよ」(002.740)

(43) **lə-**　klə̀　lóθà　**bá**
　　理解する　(相互)
「互いに理解していなかったのだよ」(003.466)

18.3　bá < 当為 >

当為を表す。「～しなければならない」。否定文で用いられると、不必要すなわち「～しなくてもよい」「～する必要はない」を表す場合と、禁止すなわち「～してはならない」を表す場合とがある。動詞 bá 「当たる; 正しい」に由来する。

(44) nə-　**bá**　lì　phɯ́ɯ　jə̀
　2sg　行く　背負う　1SG
「お前は私を背負って行かなければならない」(006.75)

(45) kò　ɣà　dè　**bá**　káʊ　təɕā　lɔ̂
　(毎)　～人　(毎')　努力する　本当に　(断定)
「皆、きちんと努力しなければならない」(014.7)

(46) nə-　mə-　**bá**　phílâɴ　chəkəlò　lé　thʊ́θâɴwɔ̀　ʔɔ́　nɔ́　lɔ̂
　2sg　(非現)　与える　謝礼　(場)　カッコウ　ところ　(のだ)　(断定)
「あなたはカッコウに謝礼を払わなければならない」(I-03.17)

(47) ʔəwêdá　**bá**　θî　khái　mèiɴ　wê
　3se　死ぬ　(徹底)　(自然)　(強意)

　lé　ʔə-　kʊ̀ɯ　phə̀ɴ　nɔ́　chī　lɔ̂
　(場)　3sg　殻　中　(のだ)　(婉曲)　(断定)
「彼 (=亀) は、殻の中で死ななければならなかった」(II-11.18)

(48) mí　nɔ́　pə-　**bá**　pàθətài
　火　(題)　1pl　注意する
「火には気を付けなければならない」(I-sen.12)

(49) mūphā　khɔ̀　θí　θà　**bá**　ɕánɴ |
父母　(対比)　(類似)　心　貧しい

mʉ́ʉphʉ́　khɔ̀　θí　**bá**　ɣánɴ
娘　(対比)　(類似)　泣く
「両親もみじめな思いをせねばならず、娘も泣かねばならないことになる」(IV-08.19)

(50) plɛ̀tɔ̀　lóθà　**bá**　kɛ́　wê　klə̀　lɔ̀　jābò
許す　(相互)　可能な　(強意)　いつも　(断定)　JABO
「いつも互いに許せるようでなければならない」(V-04.233)

(51) nə-　**bá**　kətɔ̀　ʔé
2sg　心配する　(否)
「お前は心配する必要はない」(IV-04.152)

(52) nə-　**bá**　lɔ̀nə̀ɴ　thàiɴ　jə̀　bê　nɔ́　θò　ʔé
2sg　言い勝つ　(返答)　1SG　(比定)　それ　(比定')　(否)
「そうやって悪口を言い返すべきじゃないわ」(001.3356)

(53) [$_R$ **bá**　kətɔ̀]　ʔəlāɴ　ʔɔ́　ʔé
心配する　場所　ある　(否)
「(私達は) 心配する必要がない」(III-15.12)

▷ bá V ʔəlāɴ ʔɔ́ ʔé は、文字通りには「～する必要がある場所がない」という意味であるが、「～する必要がない」ということを表すときによく使われる慣用句である。

bá は次のように、「～するはずだ」という意味を表すこともある。

(54) phlòʊɴ　**bá**　θíjâ　jə̀　nāɴ　ɣà　lɛ̂
人　知る　1SG　(少数)　～人　(疑)
「他人が私のことを知っているはずがあろうか」(V-03.31)

英語の助動詞 must のように、様々な言語で、義務的法 (deontic modality) を表す形式が認識的法 (epistemic modality) を表す用法を持つ。カレン語の bá のこの用法もその一例である。

18.4　dà ＜使役＞

「間接的な」使役を表す。dàʊ, dài とも発音される。この助詞の振る舞いの詳細については、第 28 章を見ていただきたい。ここでは例文だけを示すことにする。

(55) xîphàɴ　ʔánphôɴ　**dàʊ**　ʔáɴ　khwái　θàʊcà　mì　ɣòɴ ...
(人名)　炊く　食べる　(徹底)　(人名)　ご飯　(継起)
「フイパウンは、タウチャーにご飯を炊いて食べさせた後...」(IV-04.3210)

(56) ləphə̂ɴjò màɴcɔ̀θàbjɔ̀ ʔē ɣɛ̂ | **dàʊ** ʔɔ̀ θài ləxì
今度 (人名) (条件) 来る 飲む 酒 (禁止)
「今度タービョーおじさんが来たら、酒を飲ませるな」(V-03.23)

(57) jə- mâ **dàʊ** ʔáɴ bá nə̀ θə̂ɴ ɣìɣìbábá
1sg 妻 食べる (不抗) 2SG おかず 上等のもの
「私の妻が上等なおかずをあなたに食べさせてあげることができた」(011.21)

(58) chə- [$_R$ bʊ́ʊ̀ làɴ] wɔ̀béiɴ pənā θí nɔ́
CHə 飼う (下方) 牛 水牛 (複) (題)

bá **dàʊ** ʔáɴ wê dè thîlá nɔ́ klə̀ lɔ̂
(当為) 食べる (強意) (共) 塩 (題) いつも (断定)
「牛や水牛を飼っている人はいつも (家畜に) 塩を食べさせなければならない」(II-03.9)

(59) **dàʊ** jʊ̄ wê cɔ̀phɔ̂ʔwà lé phlɔ̀θánā ʔə- khâiɴthò nɔ́ lɔ̂
見る (強意) (人名) (強調) ゴキブリ 3sg しっぽ (のだ) (断定)
「(彼は) チョーポーワーにゴキブリのしっぽを見させた」(II-06.16)

(60) jə- phî **dàʊ** ʔɔ̀ ʔə- lì dè bínʊ̄ʊthî
1sg 祖母 飲む 3sg 孫 (共) ヤギの乳
「私の祖母は孫にヤギの乳を飲ませている」(I-sen.6)

(61) lé pə- chɨ̀ phâɴkhʊ́
(場) 1pl 民族 上

θàʊcà lə- phlóʊɴ nɔ́ **dàʊ** ɣàɣòɴ ʔé
忠誠 一 ～個 (題) 壊れる (禁止)
「私達の民族に対して、忠誠を尽くさぬ (直訳=壊す) などということはない」(IV-01.100)

18.5 mà < 使役 >

「直接的な」使役を表す。この助詞の振る舞いの詳細については、第 28 章を見ていただきたい。ここでは例文だけを示すことにする。

(62) jə- **mà** thé phlì
1sg 切れる 糸
「私は糸を切った」(001.2491)

(63) jə- **mà** làɴjwà láiʔàʊ
1sg 流れる 本
「私は本を (川に) 流した」(003.867)

(64) bēiɴ　**mà**　ɣì　pə̀　θí　nàɴ　mèiɴ　ʔé
麻薬　良い　1PL　～する習慣の　(少数)　～種類　(否)
「麻薬は私達を良くする性質をまったく持たない」(I-sen.94)

(65) hə-　bá　**mà**　pʰàɴ　chêiɴphlî　khwái　wêdá　nɔ́　lɔ̂
1pl　(当為)　きれいな　清潔な　(徹底)　(強意)　(のだ)　(断定)
「私達はきれいに掃除をしなければならない」(II-12.16)

(66) **mà**　θî　phɔ̂ʔwà　jò　mwɛ̄　jə̀　lɔ̂
死ぬ　(人名)　(題)　(繋)　1SG　(断定)
「このポーワーを殺したのは私なのだ」(V-01.96)

(67) ʔè　mwɛ̄　pə-　**mà**　khū　tʰáɴ
(条件)　(繋)　1pl　熱い　(変化)

dè　mí　bjàbjà　nɔ́　càibò ...
(共)　火　穏やかな　(のだ)　(条件')
「(水を) 穏やかな火で暖めると...」(II-09.2)

(68) cò　ʔáɴ　khwái　wê　búɪ́　xā　lé
つつく　食べる　(徹底)　(強意)　米　虫　(関)

[$_R$ **mà**　ɣàɣòɴ　búɪ́]　θíləphá　nɔ́　lɔ̂
壊れる　米　(複)　(のだ)　(断定)
「(鳥は) 米をだめにする害虫をつついて食べてしまう」(II-01.15)

(69) mí　khɛ̀　tʰáɴ　dʊ́　má |
火　点く　(完成)　大きい　～してはじめて

mə-　**mà**　làɴpʰái　tʰàiɴ　nɔ́　jɔ̂　lə̀ɴ　ʔé　lɔ̂
(非現)　消える　(再度)　(題)　易しい　もはや　(否)　(断定)
「火が点いてしまってから消すのは容易ではない」(IV-08.22)

18.6　phílâɴ ＜使役＞

裨益的な使役を表す。phlâɴ とも発音される。動詞 phílâɴ「与える」に由来する。この助詞の振る舞いの詳細については、第 28 章を見ていただきたい。ここでは例文だけを示すことにする。

(70) jə-　mə-　**phílâɴ**　θíjâ　nə̀
1sg　(非現)　知る　2SG
「あなたに知らせてあげます」(003.458)

(71) **phílâɴ**　lì　jə̀　bálɛ̂
行く　1SG　なぜ
「私を行かせてくれませんか」(004.3)

18.7 kò ＜使役＞

呼び寄せあるいは呼びかけによる使役を表す。動詞 kò「呼ぶ、連れていく」に由来する。この助詞の振る舞いの詳細については、第 28 章を見ていただきたい。ここでは例文だけを示すことにする。

(72) cəxwà ʔənírò̞ʊndá nɔ́ thàiɴ **kò** pjá wê θâɴkhəmî θə̄ɴthôɴ
王 (人名) (題) 帰る 付き従う (強意) 僧侶 三千

dè dò̞ʊnphʊ́ khəmlə̄ɴ cʊ́ʊ́θíkháɴmà ʔəɣà θə̄ɴlà nɔ́ lɔ̂
(列挙) 市民 民衆 技術 ～人 三万 (のだ) (断定)
「アノーヤター王は、僧侶三千人と、技術者三万人を付き添わせて帰ったのだった」(III-08.14)

18.8 lɔ̀ ＜使役＞

この助詞も使役を表す。話しかけた相手に何らかの状況を引き起こすことを表す。動詞 lɔ̀「語る」に由来する。この助詞の振る舞いの詳細については、第 28 章を見ていただきたい。ここでは例文だけを示すことにする。

(73) ʔàiθài **lɔ̀** ɣə̂ɴ cəxwà
修験者 聞こえる 王
「修験者は王に語って聞かせた」(III-04.23)

18.9 ɣɛ̂ ＜漸次的変化＞

状態動詞に付き、変化が漸次的に起きることを表す。動詞 ɣɛ̂「来る」に由来する。下に挙げる例では、すべて、動詞助詞 tháɴ (動詞の後に置かれて変化を表す) が共起している。変化だけを表すのなら、この tháɴ だけで十分である。ɣɛ̂ は、その変化がゆっくりと生じることを表している。

(74) jà θí ʔəkhâjò lə- nì dè lə- nì
1SG (類似) 今 一 ～日 (列挙) 一 ～日

ɣɛ̂ máiɴ tháɴ | nī pàʊ lə- phlóʊɴ jàʊ
太る (変化) 得る 米籠 1 ～個 (完)
「私も、最近日に日に太ってきて、米籠一つ分腹が出てしまった」(016.14)

(75) thîlá jò chəʔáɴchəʔɔ̀ ʔəljɔ̄
塩 この 食べ物 味

ɣɛ̂ ʔɔ́ tháɴ θí kà dài ʔé
ある (変化) (類似) 限る まだ (否)
「塩 (の効用) は、食べ物の味が出てくるということだけではない」(II-03.5)

(76) θə́ɯɪɴ　ʔáɴ　θə́ɯɪɴ　ʔɔ̀　chə̀
植える　食べる　植える　飲む　CHə

ɣê　kɛ́　thánɴ　lé　ʔəkháɴthài　ʔəɣāiɴ
成る　(完成)　(場)　始まり　事柄
「食用植物の栽培が確立していったことについて」(II-04.1)

(77) **ɣê**　mɛ́　thánɴ　θá　thánɴ　thàiɴ　wêdá　lɔ̂
芽生える　(完成)　実る　(完成)　(追加)　(強意)　(断定)
「(育てた植物が) 芽生えて実をつけるようになってきた」(II-04.6)

(78) chəθíchəbá　θí　**ɣê**　ʔá　thánɴ　ɣòɴ |
知識　(類似)　多い　(変化)　(継起)

mənī　chəxîchəlà　θí　**ɣê**　dúçā　thánɴ　wêdá　chī　lɔ̂
人間　文化　(類似)　豊かな　(変化)　(強意)　(婉曲)　(断定)
「知識も増えてきて、人間の文化も豊かになっていった」(II-04.20)

18.10　lòɴ ＜無分別＞

動作動詞に付き、分別なく動作を行うことを表す。「やたらと〜する」「むやみに〜する」。動詞 lòɴ「追う」に由来する。

(79) ʔə-　mâ　θí　ʔəwê　**lòɴ**　lɔ̀　pjáʊ　dáiɴ
3sg　妻　(類似)　3se　語る　(専念)　(追加)

thōɴ　ʔə-　ɣéiɴthàixânthài　dèklè　chī　lɔ̂
(場)　3sg　近所　全部　(婉曲)　(断定)
「彼の妻ときたら、(その噂を) 近所中に話してまわった」(006.45)

(80) ʔəwê　**lòɴ**　ʔáɴcà　nɔ́tā ...
3sg　尋ねる　(前提)
「彼はやたらと聞きまくって...」(006.49)

18.11　ʔáɴɣúɯ ＜違法、反道徳＞

動詞の表す動作が法や道徳的規範に反していることを表す。動詞 ʔáɴɣúɯ「盗む」に由来する。18.21 で見る動詞助詞の ɣúɯ と意味が類似する。

(81) nə-　mwɛ̄　phlòʊɴ　pəjàɴ　khāɴ
2sg　(繋)　人　ビルマ　国

[$_R$ **ʔáɴɣúɯ**　náʊ　làɴ　θâiɴ　khāɴ　phə̀ɴ]　lə-　ɣà
入る　(内方)　タイ　国　中　一　〜人
「お前はタイに不法に入ってきたビルマ人だ」(IV-07.10)

この ʔánɣúɯ は、ビルマ語の khó-「盗む」を用いた動詞連続を思い出させる。例えば、/khó sá dɛ̀/(盗む-食べる-現実法)「こっそり食べる」。ひょっとすると、ビルマ語の影響で、最近になって生じてきたのかもしれない。後述する ɣúɯ と意味があまり違わないこと、そして ʔánɣúɯ を「違法」の意味で使うことに違和感を感じる話者がいるということがその根拠である。

II. 動詞の後に置かれるもの

これより以降は動詞に後置される動詞助詞である。

18.12 thánɴ

動詞 thánɴ 「のぼる」「あがる」に由来する。lánɴ あるいは ʁánɴ とも発音される。動詞助詞 thánɴ の用法は、その表す意味により、次のように分類することができる。

18.12.1 thánɴ(1) ＜上方＞

動作や移動が上方向に向かうことを示す。

(82) thwí ɕā nɔ́ lɔ̀ cò **thánɴ** wê lái
犬 老いた (題) 語る (遠隔) (強意) とんび
「老いた犬はとんびに向かって語った」(I-01.6)

▹ 「とんび」は木の枝にとまっていて、犬はそれを見上げて話している。

(83) ʔəwê thʊ́ wà **thánɴ** ʔə- nākùɯ nɔ́ lɔ̀
3se 揺らす 揺れる 3sg 耳 (のだ) (断定)
「彼 (犬) は耳を揺らした」(I-01.25)

▹ 耳を上に向かって揺らしたということ。

(84) khà **thánɴ** wê dè khlíchānphlôʊɴ nɔ́ lɔ̀
撃つ (強意) (共) 弓 (のだ) (断定)
「弓で (矢を) 上に向かって放った」(I-03.4)

(85) ʔɔ́mūūlənì ʔəθíwê thânθʊ́ nī dùɯ
ある日 3pl 友人同士 二 ～匹

lì **thánɴ** wê lé khʊ́lòɴ dàɴdí ʔò ɣòɴ...
行く (強意) (場) 山 頂上 (遠方) (継起)
「ある日彼ら二人の友達は山の頂上に登って...」(I-04.4)

(86) təphʉ̂ʉwɛ̄　nī　ɣà　tháʊ　**thánɴ**　khlî　ɣòɴ ...
兄弟　二　～人　乗る　舟　(継起)
「姉と弟の二人は舟に乗って...」(I-06.25)

(87) chərâ　phóɴ　**thánɴ**　wê　thàθəwàikhlóʊɴ　nɔ́　ɣòɴ ...
先生　つかむ　(強意)　磁石　(のだ)　(継起)
「先生は磁石をつかみあげると...」(III-01.23)

(88) lì　**thánɴ**　wê　lé　ɣéiɴ　phənɴ　nɔ́　lɔ̂
行く　(強意)　(場)　家　中　(のだ)　(断定)
「家の中へ上がっていった」(V-01.76)

(89) ʔəchá　lə-　blè　bá　ʔəkhʉ́còɴ |
食べ物　(否)　砕ける　(否')　(理由)

mə-　khəʔə̀　**thánɴ** ...
(非現)　げっぷする
「食べ物が消化できないのでげっぷが出てくる」(II-08.24)

(90) phóɴ　nī　jʊ̀　cəxwà　mákʉ́tá　ɣòɴ |
捕える　得る　モン人　王　(人名)　(継起)

thàiɴ　nī　**thánɴ**　wê　lé　dòʊɴ　pəkàɴ　ʔò　lɔ̂
帰る　(引寄)　(強意)　(場)　町　(地名)　(遠方)　(断定)
「(アノーヤター王は) モン人の王マヌーハーを捕まえて、パガンへと連れて帰った」(III-08.12)

▹ この例では、かつてモン族の王朝のあったタトンからビルマ族の王朝のあったパガンへの北向きの移動を上昇と捉えている。これは、北部の標高が南部よりも高いことと関係があると思われる。この 700km から 800km におよぶ行程は比較的平坦であるが、北の標高が相対的に高いことは、イラワジ川等の川が北から南へと流れていることなどから実感できる。

18.12.2　thánɴ(2)　＜状態の変化＞

状態動詞に付いて、その動詞が表す状態の程度が甚だしくなることを表す。この場合の thánɴ には、状態動詞を動態動詞に変換する働きがある。

状態の変化を表す動詞助詞にはもう一つ、18.13.2 に述べる làɴ がある。状態の変化を表すときに thánɴ と làɴ のどちらが付くかは状態動詞によって決まっている。現在、分かっているものを見ておく。まず、thánɴ が付く状態動詞を挙げる:

mə̀ɴ「酔った」、mêiɴ「熟した」、ʔwí「おいしい」、chə̂ɴ「甘い」、ɣâɴ「塩辛い」、ɣɛ́「辛い」、khá「苦い」、cháiɴ「酸っぱい」、ʔʉ́ʉ「腐った」、bóɴ「太った」、châ「痛い」、θà「かゆい」、kwí「くすぐったい」、ɕā「老いた」、phlɛ́「速い」、phàɴ「明るい」、khū「暑い、熱い」、khwàɴ「丸い」、cʉ̀ʉ「尖った」、dʊ́「大きい」、thɔ̂「長い、高い」、ɣì「良い」、ɣɔ̀「赤い」、lâ「青い」、ʔwà「白い」、θə̂ɴ「黒い」、nòɴ「固い」、bàʊ「近い」、jàiɴ「遠い」、lɛ̄「広い」、ʔá「多い」、dʊ́ɕā「豊かな」

次に、làɴ が付く状態動詞を挙げる:

> xwɛ̄「痩せた」、báɴ「若い」、ʔwì「のろい」、khài「暗い」、khléiɴ「寒い、冷たい」、pî「小さい」、phɨ́「低い、短い」、ʔònɴ「悪い」、pháʊ「柔らかい」、ʔéiɴ「狭い」、ɕà「少ない」、pwài「疲れた」、ɕánɴ「貧しい」

ʔá「多い」には thánɴ が付き、ɕà「少ない」には làɴ が付くことにも現れているとおり、何かが増加する場合には thánɴ が付き、何かが減少する場合には làɴ が付くという傾向があるようである。しかし、thánɴ が bàʊ「近い」と jàiɴ「遠い」のどちらにも付くことからも分かるように、これによってすべてを説明することはできない。この問題については今後の課題としたい[3]。

下に、状態の変化を表す thánɴ の実例を挙げる。

(91) bê　chəthə́ɯɴchəbòɴ　dè　chəθɯ́chəθá
(目的)　木　(列挙)　果物

mə-　ɣì　**thánɴ**　mə-　ʔá　**thánɴ**　θò ...
(非現)　良い　(非現)　多い　(目的')
「(栽培している) 木や果物が良くなるように、そして多くなるように...」(II-04.23)

(92) kəlôʊɴkəmà　ʔá　**thánɴ**　chī　ʁá
仕事　多い　(婉曲)　(疑)
「仕事が増えてきたのですか？」(011.8)

(93) ʔəkhâjò　phlòʊɴ　thîkhāɴ　mɯ̄nì　līchîlī　blàɴ　θí
今　カレン　国　日　四十四　～回　(類似)

bàʊ　**thánɴ**　jàʊ
近い　(完)
「そろそろ第 44 回カレン州記念日も近づいてきました」(011.10

(94) mànɴmɯ́nànɴ　θí　lə-　néiɴ　dè　lə-　néiɴ
姪　(類似)　一　年　(列挙)　一　年

dʊ́　**thánɴ**　chī　bádòɴ
大きい　(婉曲)　たぶん
「お嬢さんも、年ごとに大きくなっているのでしょう」(011.25)

(95) pə-　ʔè　dòɴ　khū　**thánɴ**　thî　nɔ́ |
1pl　(条件)　沸かす　熱い　水　(前提)

mə-　kɛ́　thánɴ　wê　ʔəkhɯ́ʔəʔwì　lɔ̂
(非現)　成る　(完成)　(強意)　水蒸気　(断定)
「水を沸かすと水蒸気になるだろう」(I-02.9)

[3]スゴー・カレン語の対応する「助動詞」thɔ̂ と lɔ̄ がどのような動詞に付くかについては、加藤 (1993) に簡単な記述がある。

▷ 2 番目の thánɴ は「完成」を表す。

(96) ʔəwêdá　ʔə-　phʊ́　θíləphá　θàwī　**thánɴ**　ʔəchá　nɔ́　ʔəkhʊ́cònɴ ...
3se　3sg　子供　(複)　食べたい　餌　(のだ)　(理由)
「彼女 (鳥) の子供達も餌が食べたくなってきたので...」(II-02.17)

(97) pə-　thîkhānɴ　bê　mə-　dʊ́ɕā　**thánɴ**　ləjâ　θò |
1pl　国　(目的)　(非現)　発展した　将来　(目的')

klɨ̀cɨ̀　tàiɴ　ɣì　jū　ɣì　lā　kò　ɣà　dè　chài
努力する　作る　良い　見る　良い　(願望)　(毎)　～人　(毎')　CHAI
「私達の国が将来発展するように努力して良くしていってください」(II-07.21)

(98) ʔəwêdá　ʔə-　θà　ɕā　**thánɴ**
3se　3sg　年齢　老いた
「彼は年老いた。そして...」(II-14.2)

(99) lānânɴθí　lé　chə-　phàɴ　**thánɴ**　lə-　khɔ̂ ...
しかし　(場)　CHə　明るい　一　～面
「しかし、(明け方) 明るくなってきたときに」(II-02.15)

18.12.3　thánɴ(3)　＜外方向への移動＞

移動する物体が囲まれた空間の中から外へ移動することを表す。

(100) thàiɴ　náʊ　làɴ　dàʊ　phàɴ |
帰る　入る　(内方)　部屋　中

ɣɛ̂　**thánɴ**　dàʊnɛ́　wê　ʔə-　châiɴbákàɴ　nɔ́　lɔ̂
来る　見せる　(強意)　3sg　最良のカレン服　(のだ)　(断定)
「(祖母は) 部屋の中に戻ってゆき、(再び) 出てきて最良のカレン服を見せてくれた」(V-02.116)

▷　この例は làɴ との対比が面白い。部屋の中への移動は次節で述べる làɴ(下がる) で示され、部屋の外への移動は thánɴ で示されている。

(101) thwímèiɴlá　nɔ́　cáiɴ　**thánɴ**　tài　**thánɴ**　wê
山犬　(題)　歩く　出る　(強意)

ləkhôɴ　jò　θí　làɴ　ʔé
外　(近傍)　できる　もはや　(否)
「山犬は (象の死体の中から) 外へ出ることができなくなってしまった」(I-09.23)

(102) mənái　θíləphá　tài　**thánɴ**　ʔá　wêdá　chī　lɔ̂
宝石　(複)　出る　多い　(強意)　(婉曲)　(断定)
「宝石がたくさん出るのである」(II-07.15)

(103) ʔəwê cáiɴ **thánɴ** lé chəkhlôʊɴ jàʊ
3sg 歩く (場) 外 (完)
「彼は外に歩いて出ていってしまった」(001.977)

(104) pə- thòɴ **thánɴ** lé khānməɲā jàʊ
1pl 着く (場) 外国 (完)
「私達は外国に出て来ている」(IV-03.4)

下の例は抽象的である。誹謗中傷を受ける立場や親に守られる立場を「囲まれた空間」として捉えている。

(105) bê cháiphʊ́chā jò mə- phònphlè **thánɴ** lé
(目的) 農民 この (非現) 開放される (場)

chəkhlàiɴ càiθərî làɴphɨ́ lə- phlóʊɴ nɔ́ θò ...
言葉 品位 低い 一 ～個 (のだ) (目的)
「農民が自分たちへの誹謗中傷からのがれるためには...」(IV-09.7)

(106) cáiɴɕá **thánɴ** dè mʊ̄phā wîlá |
離れる (共) 父母 庇護

cáiɴkhlâ **thánɴ** dè mʊ̄ dè phā làɕʊ́ɪ
歩む (共) 母 (列挙) 父 影
「父母の庇護から離れ、母や父の影から歩み出す」(IV-03.3)

この用法に含めてよいと考えられるものに、「音」が外に向けて発散することを表す次のような例がある。

(107) ʔəwêdá ɣánkò **thánɴ** ʔàʔàʔà ɣòɴ ...
3se 泣く (擬音語) (継起)
「彼 (赤ちゃん) はワンワン泣いて...」(I-01.28)

(108) ʔè mwɛ̄ cəxwà thʊ́kò dʊ́ **thánɴ** mòɴ phàdʊ́ nɔ́tā ...
(条件) (繋) 王 サイチョウ 打つ 鉦 大きな (前提)
「もし王であるサイチョウが鉦を打ち鳴らすと...」(II-02.15)

(109) ʔè dèiɴ **thánɴ** nɔ́ |
(条件) 弾く (前提)

hə- chônná máʊ wê kò ɣà dè lɔ̂
1pl 聞く 心地よい (強意) (毎) ～人 (毎') (断定)
「(カレンの竪琴を) 弾くと、誰もが聞いて心地よい」(III-09.2)

(110) θwíwɔ̀ nɔ́ nī **thánɴ** wê háhàhá
(人名) (題) 笑う (強意) (擬音語)
「トゥイーウォーはハハハと笑った」(IV-04.300)

(111) ʔəwê　ʔáɴcà　**thán**　chəchâ　ʔəɣāɪɴʔəcóɴ
3se　尋ねる　病気　事柄
「彼は病気のことについて (思い切って) 尋ねた」(I-03.23)

18.12.4　thánɴ(4)　＜完成＞

事象の末端への到達を表す。

(112) mə-　kɛ́　**thánɴ**　wê　ʔəkhɯ́ʔəwì　lɔ̂
(非現)　成る　(強意)　水蒸気　(断定)
「(湯を沸かすと、水が) 水蒸気になるだろう」(I-02.9)

(113) hə-　thîkhāɴ　phànɴ　jò　ʔəkhâjò
1pl　国　中　この　今

ʔánlɛ̀　**thánɴ**　θà　kò　mèɪɴ　dè　chī　lɔ̂
変える　(再帰)　(毎)　～種類　(毎')　(婉曲)　(断定)
私達の国では今、何もかもが変わりきってしまっています」(014.12)

(114) thîláɣânɴ　nɔ́　phlī　**thánɴ**　khwái　ɣònɴ ...
塩　(題)　溶ける　(徹底)　(継起)
「塩は水に溶けきって...」(I-02.11)

(115) klàɪɴ　**thánɴ**　wê　ʔə-　xé　ʔáɪɴʔáɪɴlé　nɔ́　lɔ̂
研ぐ　(強意)　3sg　刀　鋭く　(のだ)　(断定)
「(彼は) 自分の刀を鋭く研ぎあげた」(II-02.27)

(116) tàɪɴ　**thánɴ**　chànɴ　wè　thîkəmlɔ̂ɴ　θí　dè　cɛ́　nɔ́　ɣònɴ ...
作る　(皆)　(強意)　井戸　(複)　(共)　機械　(のだ)　(継起)
「皆で機会を使って井戸を作り上げて...」(II-04.26)

(117) ʔəchɔ̂ɴʔəthɔ̄　pàɪɴ　**thánɴ**　θə̄ɴ　néɪɴ　nɔ́　ɣònɴ ...
時間　満ちる　三　年　(のだ)　(継起)
「(そうしているうち)3 年の時間が経って...」(II-14.8)

(118) thàθəwàɪkhlōʊɴ　ʔəθàklà　nɔ́　cànɴ　**thánɴ**　wê
磁石　真ん中　(題)　縛る　(強意)

dè　phlì　lə-　bònɴ　nɔ́　lɔ̂
(共)　紐　一　～本　(のだ)　(断定)
「磁石の真ん中を紐で縛りあげた」(III-01.21)

(119) lé　màʊkhʊ́　nɔ́　thîkhʊ́lɔ́ɴ　pəkòʊɴ　**thánɴ**　θà　ʔèʔá　tā ...
(場)　空　(題)　氷　集める　(再帰)　たくさん　(前提)
「空に氷の粒がたくさん集まると...」(III-05.4)

(120) bʊ́ʊ́θâɴ nɔ́ ʔánphôɴ **thánɴ** wê mì ɣòɴ ...
新米 (題) 炊く (強意) ご飯 (継起) ...
「新米は、炊きあげたのち...」(III-14.13)

(121) ɣòɴ **thánɴ** phàdʊ́ jàʊ ʁâ
終わる 大きい (完) (疑)
「かなり仕上がりましたか」(001.3363)

(122) lənéiɴjò mə- pàʊ **thánɴ** thàiɴ
今年 (非現) 開く (再度)

phlòʊɴ láilɛ̄ dē chəxîchəlà θəphjāɴ
カレン 文学 (列挙) 文化 祭典
「今年もまたカレン文学と文化の祭典を首尾良く開く予定だ」(013.7)

18.13 làɴ

動詞 làɴ「くだる」「さがる」に由来する。ʁàɴ とも発音される。làɴ の用法は、その表す意味により、次のように分類することができる。

18.13.1 làɴ(1) ＜下方＞

動作や移動が下方向に向かうことを示す。

(123) wāplàɴ phàɴ nɔ́ lì **làɴ** chînàɴ ʔɔ́pwài bá xì
原っぱ 中 (題) 行く 座る 休む (催促) (禁止)
「原っぱの中に下りて行って座って休んだりするな」(III-12.8)

(124) khwái **làɴ** phí nə- phʊ́ nàɴ béiɴ ʔèphlɛ́
投げる (裨益) 2sg 子供 (少数) ～羽 はやく
「お前の子供を何羽かはやく投げおろせ」(I-01.7)

(125) klà nɔ́ dá **làɴ** wê thwí θî nɔ́tā ...
カラス (題) 見える (強意) 犬 死ぬ (前提)
「カラスは (空の上から) 下に死んだ犬を見つけたので...」(I-01.21)

(126) ʔəwê lì dí **làɴ** lé klà ʔə- θwî phàɴ nɔ́ lɔ̂
3se 行く 卵を生む (場) カラス 3sg 巣 中 (のだ) (断定)
「彼 (カッコウ) はカラスの巣の中に卵を生みに行った」(I-03.39)

(127) ʔəθí cáiɴ jʊ̀ʊ **làɴ** lé chái phàɴ ...
3pl 出る 飛ぶ (場) 田 中
「彼ら (鳥) は (巣から) 出て田んぼの中に飛び降りてゆき...」(II-01.14)

(128) chə-　dò　**làɴ**　thá　dè　phôʊɴ　nɔ́tā ...
CHə　仕掛ける　(保持)　(共)　網　(前提)
「(魚をとる) 網がしかけてあったので...」(II-05.13)

(129) pə-　bláiɴ　**làɴ**　khwái　chəkòɴchəθò　nɔ́ ...
1pl　脱ぐ　(徹底)　衣服　(前提)
「衣服を脱いでから...」(II-13.7)

(130) ʔə-　wɛ̄khwâ　bàʊ　**làɴ**　mì
3sg　兄　よそう　飯
「彼のお兄さんはご飯をよそった」(II-14.22)

(131) ʔədà　nɔ́　nə-　mə-　dà　**làɴ**　bèθí　lɛ̂
ゆか　(題)　2sg　(非現)　敷く　どのように　(疑)
「(宮殿の) 床はどのように敷くのですか？」(II-02.37)

(132) chə-　chə̀ɴ　**làɴ**　θâɴ
CHə　降る　～したばかり
「雨が降ったばかりだ」(II-05.13)

(133) lé　càkhɔ̂　phə̀ɴ　nɔ́　xwí　**làɴ**　wê　dè　thàmáʊ　ɣòɴ ...
(場)　紙　中　(題)　撒く　(強意)　(共)　鉄粉　(継起)
「紙の上に鉄粉を撒いて...」(III-01.24)

(134) θéiɴ　ɣàkhɨ̄　**làɴ**　phɔ̄
木　傾く　(臨場)
「木が傾いた」(III-03.50)

(135) mʊ̀ɪmé　xāiɴ　**làɴ**　wêdá　lɔ̂
太陽　傾く　(強意)　(断定)
「日が傾いてきた」(I-06.64)

(136) xîphàɴ　nɔ́　pɔ̄　**làɴ**　bá　khléiɴθàʊcà　lái　ɣòɴ ...
(人名)　(題)　読む　(不抗)　(人名)　手紙　(継起)
「フイパウンはクレインタウチャーの手紙を読んで...」(IV-04.390)

(137) cáiɴ　**làɴ**　lé　mɔ̄khó
歩く　(場)　さっき
「さっき (家の外に) 下りていった」(V-02.17)

▷ 高床式の家のため、外に出るには階段を下りる。下りることよりも外に出ることに重点を置く場合は、cáiɴ tháɴ を使う。(103) を参照のこと。

18.13.2 làɴ(2) ＜状態の変化＞

状態動詞に付いて、その動詞が表す状態の程度が甚だしくなることを表す。18.12.2 で述べたように、何かが減少するような場合に多く làɴ が付くようである。以下に例を挙げる。

(138) chə- mə- khài **làɴ** lɔ̂
CHə (非現) 暗い (断定)
「暗くなるよ」(I-06.81)

(139) jáijái θə́ɯɴθà pwài **làɴ** θà ləcɛ̀ləcɛ̀ chī
やがて 心 疲れた 心 少し (婉曲)
「やがて心が疲れてきた」(014.15)

▷ pwài θà は「疲れている」の意の成句。

(140) ʔè mwɛ̄ pə- ʔè ʔɔ́kí khléiɴ **làɴ** thî nɔ́tā ...
(条件) (繋) 1pl (条件) 置く 冷たい 水 (前提)
「もし水を置いておいて冷たくすると...」(I-02.10)

(141) ɕáɴ **làɴ** khwái wê chī lɔ̂
貧しい (徹底) (強意) (婉曲) (断定)
「貧しくなってしまった」(II-14.8)

(142) bê pə- təwâɴ phàɴ chəchàʊchəchâ mə- ɕà **làɴ** θò ...
(目的) 1pl 村 中 病気 (非現) 少ない (目的)
「私達の村の中に病気が少なくなるように...」(V-01.110)

18.13.3 làɴ(3) ＜内方向への移動＞

移動する物体が囲まれた空間の外から中へ移動することを表す。

(143) khlíθá nɔ́ lì bá náʊ **làɴ**
弾丸 (題) 行く 当たる 入る

lé thʊ́pəɣʊ́ɯ ʔə- khâiɴ phàɴ nɔ́ ʔəkhʊ́còɴ ...
(場) フクロウ 3sg 尻 中 (のだ) (理由)
「弾丸がフクロウの尻に当たって入ってしまったので...」(I-03.5)

(144) ʔəwêdá lì náʊ **làɴ** lé phôʊɴ phàɴ
3se 行く 入る (場) 網 中
「彼は網の中に入って行った」(II-05.14)

(145) ɣɛ̂théɯɴ thánɴ thàiɴ | náʊ **làɴ** thàiɴ lé ɣéiɴ dwɛ̀
立つ (上方) (再度) 入る (再度) (場) 家 中
「(大叔父は) また立ち上がって、家の中に入っていった」(V-02.7)

(146) thàiɴ　náʊ　**làɴ**　dàʊ　phàɴ
帰る　入る　部屋　中
「(彼女は) また部屋の中に入っていった」(V-02.116)

次のような làɴ も、ここに含まれると考える。これらの例に見える làɴ は、移動する物体が誰かの領域の中に入ることを表している。

(147) thàiɴ　thòɴ　ɣéiɴ |　phʊ́mʊ́ɪ　ʔəpî　mʊ́mʊ́ɪʔwà　dè
帰る　着く　家　娘　小さいもの　(人名)　(列挙)

phʊ́khwâ　ʔɛ́θwíwɔ̀　ʔánɣá　**làɴ**　jə̀
息子　(人名)　出迎える　1SG
「家に着くと、末娘のムームーワーと息子のエートゥイーウォーが私を出迎えてくれた」(V-03.84)

(148) ʔəwê　ʔə-　ɣɛ̂　**làɴ**　ʔò |
3se　(条件)　来る　(条件')

lɔ̀　bá　jə-　lì　phʊ̂ɪnɛ̀ɕàmá　ʔə-　ɣéiɴ　ʔò　xɔ̄ ...
行く　(再度)　1sg　行く　(人名)　3sg　家　(遠方)　XO
「彼が来たら、私はプーネーシャーマーの家に行ったと伝えて下さい」(001.652)

(149) mə-　kè　θôʊɴ　**làɴ**　dáwê　lái
(非現)　書く　送る　(願望)　手紙
「(あなたにこの) 手紙を書いて送ります」(IV-04.332)

(150) ʔɔ́khò　**làɴ**　wɛ̀　khîɕhìphōɴ　nɔ́　chài
待つ　(備え)　虎　その　CHAI
「虎を待ち受けなさい」(III-03.51)

18.13.4　làɴ(5)　＜再帰的な動作＞

動作や心理作用の影響が主語の指示対象そのもの (あるいは指示対象そのものを含む集合) に及ぶことを示す。多くの場合、後述する θà (18.60.1) と共に使われる。

(151) kətɔ̀　**làɴ**　lā　nə-　θà　nɔ́　chài
心配する　(願望)　2sg　(再帰)　(のだ)　CHAI
「(他人のことでなく) 自分のことを心配せよ」(II-11.11)

(152) cʊ́ɪ　**làɴ**　θà　lé　thî　klà
浸す　(再帰)　(場)　水　間
「水の中に浸りなさい」(IV-07.42)

(153) bênɔ́θò　ʔəwêdá　ʔàʊ　xî　**làɴ**　ʔə-　θà　nɔ́　lɔ̂
そのように　3se　ほめる　美しい　3sg　(再帰)　(のだ)　(断定)
「そのように、彼は自画自賛した」(II-05.12)

(154) khlài pàdʊ́ **làɴ** ʔə- θà lānâɴ θí ...
カメ 過大評価する 3sg (再帰) (逆接) (類似)
「カメは自分自身を課題評価していたけれども...」(II-11.20)

(155) ʔəphlòʊɴphʊ́ θɛ̀ jò ʔè dʊ́ɕā thánthɔ̂ thánɴ nāɴcɛ̀ |
人 (複) (題) (条件) 栄えた 発展した (変化) 少し
θànánɴ **làɴ** θà lɔ̂
忘れる (再帰) (断定)
「人間というものは少し偉くなると、(昔の自分を) 忘れてしまう」(V-03.64)

(156) ʔɛ́ **làɴ** pə- chɨ̀phʊ́ mwɛ̄ ʔé lɔ̂
愛する 1pl 民族 (繋) (否) (断定)
「(このような人は) 自分たちの民族を愛しているとは言えない」(IV-01.91)

(157) ʔəwê chônmónɴ **làɴ** ʔə- θà ...
3sg 考える 3sg (再帰)
「彼は自分自身のことを考えた」(I-03.29)

(158) ʔəwêdá cɔ́ **làɴ** jʊ̄ ʔə- θà ...
3sg 熟考する (試行) 3sg (再帰)
「彼はよく反省してみた」(I-08.11)

18.14 thàiɴ

動詞 thàiɴ 「帰る」に由来する。dàiɴ または nàiɴ と発音されることもある。

動詞助詞 thàiɴ の用法は、その表す意味により、下の thàiɴ(1) から thàiɴ(4) のように分類することができる。

18.14.1 thàiɴ(1) ＜元の位置への移動＞

移動する物体が元の位置に移動することを表す。

(159) jə- chəmà thònɴ **thàiɴ** lé thəʔànɴ
1sg 仕事 着く (場) (地名)
「またパアンに赴任になったのだ」(V-03.40)

(160) jwà ʔəljā ɣê thánɴ kəljânɴ **thàiɴ** lé thî klà ...
鏡 光 来る (上方) 帰る (場) 水 中
「鏡の光は水の中で反射し...」(II-10.8)

(161) ʔɔ́kí **thàiɴ** pəlânɴ | bê ná jà lə- θí bá θò
置く 瓶 (比定) 聞く 1SG (否) できる (否') (比定')
「私の (声が) 聞こえないかのように、瓶を (元の場所に) 戻した」(V-03.17)

(162) jə-　θwî　ʔè　ɣàɣòɴ　nɔ́ |
1sg　巣　(条件)　壊れる　(題)

nə-　mə-　bá　lò　**thàiɴ**　jə-　θwî　nɔ́　lɔ̂
2sg　(非現)　(当為)　返す　1sg　巣　(のだ)　(断定)
「もし私の巣が壊れたら、あなたは私の巣を (直して) 返さなければならない」(II-02.20)

18.14.2　thàiɴ(2)　＜繰り返し＞

同じ事象あるいは同種類の事象が繰り返すことを表す。「また〜する」「再び〜する」「何度も〜する」。

(163) jə-　bá　ʔɔ́　**thàiɴ**　nāɴ　néiɴ　dài
1sg　(当為)　いる　(少数)　年　また
「また１年ほど居続けなければならない」(001.3354)

(164) jə-　bá　màlʊ́　**thàiɴ**　lái　nāɴ　néiɴ　dài
1sg　(当為)　学ぶ　文字　(少数)　年　また
「あと１年くらいまた勉強しなければならない」(001.3354)

(165) nà　ʔəkhâjò　mə-　nī　**thàiɴ**　phʊ́　lə-　ɣà　lɔ̂　chī　nɛ̂
2SG　今　(非現)　得る　子供　一　〜人　(断定)　(婉曲)　NE
「あなたは今度また子供が生まれるんですよね？」(009.19)

(166) mə-　θʊ́ɯɴ　thánɴ　**thàiɴ**　phjā　lé　chəlàɴ　θânɴ　ʔò
(非現)　建てる　(完成)　僧院　(場)　場所　新しい　(遠方)
「新しい場所にまた僧院を建てる予定です」(010.8)

(167) nánɴ　thánɴ　**thàiɴ**　nà　ʔáʔálé　lɔ̂
覚えている　(完成)　2sg　たくさん　(断定)
「あなたのことを何度も思い出します」(011.12)

18.14.3　thàiɴ(3)　＜事象の追加＞

既に話題にのぼった事象とは別の事象が累加的に生起することを表す。「次は〜をする」「今度は〜をする」「そして〜をする」。

(168) ʔəkhânɔ́　jə-　phʊ́　ʔɔ́　lə-　ɣà　ɣòɴ |
その時　1sg　子供　いる　一　〜人　(継起)

jə-　dəɴ　nī　**thàiɴ**　ʔəpî　lə-　ɣà　jò
1sg　妊娠する　得る　末子　一　〜人　この
「その時私は子供が一人いて、今度はこの末っ子を妊娠していました」(V-04.186)

(169) jə- lóɴ cò phí jə- cʉ́ʉ |
1sg 差し出す (遠隔) (裨益) 1sg 手

pàθíjâ thòɴnáiɴ lóθà |
紹介する 覚える (相互)

ʔèɣòɴ bòɴ làɴ θài lə- khwɛ́ ɣòɴ lə- khwɛ́ |
そして 注ぐ (下方) 酒 一 ～杯 終わる 一 ～杯

lɔ̀thàiɴ **thàiɴ** ʔəɣāiɴʔəcòɴ lāɴlì |
喋る 物事 古い

nī **thàiɴ** tàxɔ́tàxɔ́
笑う (擬音語)
「私 (と彼) は握手をし、互いに自己紹介をし、酒を何杯も注ぎ、古いことを喋り、そして呵々大笑した」(V-03.50)

(170) khāɴpəjàɴ phòɴ lé thîkhî lə- khɔ̂ nɔ́
ビルマ 中 (場) 北 一 ～面 (題)

pəc̣ā bánànnàɴ lè̀ làɴ nī wê ɣáɴkhʉ́ɣâɴ dè
人 一部 混ぜる (下方) (努力) (強意) 岩塩 (共)

thî nɔ́ ɣòɴ | ʔáɴlʉ́ʉ làɴ **thàiɴ** wê chəkhū klà nɔ́ |
水 (のだ) (継起) 干す (下方) (強意) 暑さ 間 (前提)

ləkhâiɴjò kɛ́ thán **thàiɴ** thîlá θí chī lɔ̂
最後 成る (完成) 塩 できる (婉曲) (断定)
「ビルマの北のほうでは一部の人たちは岩塩と水を混ぜ、今度は日に干して、最後にはそれが塩になる」(II-03.17)

(171) màʔán xàʊ nɔ́ dɔ̀
作る 焼き畑 (題) (別個)

phé làɴ kháʊ làɴ θéiɴ lé làthâiɴkháʊphʉ́ phòɴ nɔ́ ɣòɴ |
切る (下方) 切る (下方) 木 (場) タインカオプー月 中 (のだ) (継起)

bá ʔáɴlʉ̄ʉ xâiɴ **thàiɴ** là lə- béiɴ blɛ́ |
(当為) 干す 乾く 月 一 ～枚 半

dè thòɴ **thàiɴ** làθɔ̂ɴlàtà phòɴ nɔ́ |
そして 着く トゥンラーター月 中 (前提)

xʉ̄ʉ thá xàʊ nɔ́ lɔ̂
燃やす (保持) 焼き畑 (のだ) (断定)
「焼き畑のやり方は、まずタインカオプー月に木を切り、次は1ヶ月半ほど乾かし、今度はトゥンラーター月になったら、燃やすのである」(III-02.23)

18.14.4　thàiɴ(4)　＜返答、応酬＞

相手の行動に対する反応を表す。「〜しかえす」。

(172) còɴtàɲí　ʔè　khlàʊ　càibò |
(人名)　(条件)　暇な　(条件')

ʔánmə̂ɴ　[$_C$ kè　phí　**thàiɴ**　lái　nāɴ　béiɴ]　ʁɔ̄
命じる　書く　(裨益)　手紙　(少数)　〜枚　XO
「チョンタニ君に、もし暇なら返事を書くよう言ってください」(016.31)

(173) nə-　bá　lɔ̀nə̀ɴ　**thàiɴ**　jə̀　bê　nɔ́　θò　ʔé
2sg　(当為)　言い勝つ　1SG　(比定)　それ　(比定')　(否)
「そうやって悪口を言い返すべきじゃないわ」(001.3356)

(174) ʔəwê　jāiɴ　bá　wūθâɴ　nɔ́　ɣòɴ |
3se　踏む　(無意)　コブラ　その　(継起)

dè　wūθâɴ　phlà　**thàiɴ**　ʔə-　kháɴ　nɔ́　chī　lɔ̂
そして　コブラ　咬む　3sg　足　(のだ)　(婉曲)　(断定)
「彼 (象) はコブラを踏んでしまい、コブラは彼の足を咬みかえした」(I-09.11)

(175) xîphàɴ　jō　**thàiɴ**　khléiɴθàʊcà　mʊ̀làimʊ̀lài
(人名)　見る　(人名)　にやにやと
「(見つめられたので) フイパウンはクレイタウチャーをにやっとしながら見つめかえした」(IV-04.198)

(176) nāɴθwíwɔ̀θʊ́ɪ́　jàʊjáɴ　**thàiɴ**　phlòʊɴkhəmlə́ɴ　θɛ̀ɣòɴ ...
(人名)　敬礼する　群衆　(継起)
「ナウン・トゥイーウォートゥーは (喝采を受けて) 群衆に敬礼し...」(V-04.86)

18.15　kədà ＜逆向き＞

名詞 kədà「裏側」に由来する。動作の向きが別の何らかの動作の向きと逆であることを表す

(177) ʔánmə̂ɴ　[$_C$ ʔàiθài　thàiɴ　**kədà**　θâ　lé　ʔə-　lāɴdà　ʔò]　lɔ̂
命ずる　修験者　帰る　(新局)　(場)　3sg　場所　(遠方)　(断定)
「(王は) 修験者に自分の家に戻るよう命じた」(III-04.22)

(178) xîphàɴ　wâiɴ　**kədà**　ʔə-　khʊ́
(人名)　ひねる　3sg　頭
「フイパウンは後ろを振り返った」(IV-04.344)

(179) ʔəwê　cá　**kədà**　thàiɴ　θà
3sg　方向変換する　(元位)　(再帰)
「彼は向きなおった」(III-03.33)

(180) ʔə- mâ chó ɣòɴ nɔ́ |
3sg 妻 持ち上げる 終わる (前提)

ʔəwê chó **kədà**
3se 持ち上げる
「妻が (子供を) 抱き、今度は彼 (夫) が (取り返して) 抱いた」(021.96)

▹ 「妻」が「夫」から子供を受け取って抱いたときとは逆に、今度は「夫」から「妻」へということを表している。

(181) thòɴnɔ́ xîphàɴ ʔáɴcà **kədà** thàiɴ khléiɴθàʊcà nɔ́ ...
そして (人名) 尋ねる (返答) (人名) (前提)
「そしてフイパウンがクレイタウチャーに聞き返したところ...」(IV-04.254)

▹ クレイタウチャーがフイパウンに尋ね、それを受けてフイパウンが逆に尋ね返したということを表している。

(182) lái pídəkáθə̄ɴpòʊɴ nɔ́ θí
書 大蔵経 (題) (類似)

khlê **kədà** chʊ̂kè thàiɴ wê lé phlòʊɴ khɔ̂
翻す 書く (元位) (強意) (場) カレン 側

ɣòɴ wê láʊchêiɴ chū lɔ̂
終わる (強意) 全部 (婉曲) (断定)
「大蔵経もカレン語に翻訳するという作業がすべて終わったのである」(III-08.8)

▹ 「翻訳する」は khlê kədà である。翻訳の作業には実際には逆向きの変化は生じないので、比喩的な表現であると考えられる。なお、東部ポー・カレンには、ビルマのパガン王朝時代 (11-14c) に、タトン (Thaton) でモン人の王に仕えていたプーダイコー /phʊ̂dàikɔ̀/ というカレン人が、大蔵経をカレン語に訳したという伝説がある。

18.16 lʊ́ ＜学習＞

(1) 動詞が表す動作自体のやり方を学ぶ (教える) こと、あるいは、(2) 動詞が表す動作によって何かを学ぶ (教える) ことを表す。

まず (1) に当てはまる例を挙げる。

(183) kè **lʊ́** lái
書く 文字
「字を書くことを学ぶ」

(184) khlàiɴ **lʊ́** pjáʊ mèiɴ phlòʊɴ chəkhlàiɴ ləcɛ̀
話す (専念) (自然) カレン 言葉 少し
「ここのところちょっとカレン語の会話を勉強しているんですよ」(001.2546)

(185) ʔədài　lə-　ɕā　dài　bá　ʔəkhâ　nɔ́ |
翼　(否)　老いた　まだ　(否')　時　(題)

ʔánmə̂ɴ　[$_C$ jùɯ　**lú**　wê　lé　θéɪɴthàɪɴ　phɨ́phɨ́　nɔ́　lɔ̂]
命ずる　飛ぶ　(強意)　(場)　木の枝　低い物　(のだ)　(断定)
「翼がまだ堅くなっていないときに、(母鳥は子供に) 低いところの木の枝で飛ぶことを学ぶように命ずる」(IV-07.29)

(186) mà　**lú**　lái
する　字
「字 (の読み書き) を学ぶ；字 (の読み書き) を教える」

次に (2) に当てはまる例を挙げる。

(187) ʔəθíwê　dá　bá　chə̀　bênɔ́　ʔá　blàɴ　ʔəkhúcòɴ |
3pe　見える　(不抗)　CHə　そのような　多い　～回　(理由)

dá　**lú**　wêdá　tā ...
見える　(強意)　(前提)
「彼らはそのようなことを何度も経験したので、(植物の栽培の仕方を) 見て学んだのである」(II-04.7)

(188) pəɕā　[$_R$ lāɪɴlòɴ　lé　phə̀ɴθà　nàɪɴ]　ləphá
人　往来する　(場)　道　傍ら　(複)

ɣê　lə-　ɣà　lɔ̀　**lú**　phí　lə-　mèɪɴ |
来る　一　～人　語る　(裨益)　一　～種類

ɣê　lə-　ɣà　lɔ̀　**lú**　phí　lə-　mèɪɴ　chī　lɔ̂
来る　一　～人　語る　(裨益)　一　～種類　(婉曲)　(断定)
「道を行く人たちが、(舟の作り方を)1 人来ては語って教え、1 人来ては語って教えした」(I-08.8)

18.17　dòɴ ＜模倣＞

動詞の表す動作が他者の動作の模倣であることを表す。

(189) kè　**dòɴ**　lái
書く　文字
「文字を真似て書く」

(190) ɣê　thàɪɴ　tàɪɴ　**dòɴ**　wê　chī　lɔ̂
来る　帰る　作る　(強意)　(婉曲)　(断定)
「帰ってきてから真似て作ってみた」(IV-05.43)

(191) jə- wà lɔ̀ **dòɴ**
1sg 夫 語る
「私の夫が語ってくれました」(023.20)

▹ 「夫」がある人から聞いた話を (その人が話したとおりに) 話してくれた、ということ。

18.18 kràɴ

klàɴ とも発音される。次に挙げる 3 種類の用法がある。

18.18.1 kràɴ(1) ＜根拠のなさ＞

動作を表す動詞に付き、さしたる理由もなくその動作を行うことを表す。「意味もなく ～ する」「むやみに ～ する」。

(192) nəθí lì jā **kràɴ** bá thî
2pl 行く 泳ぐ (催促) 水

lé thîkhló phə̀ɴ ʔò ləxì bɔ́
(場) 川 中 (遠方) (禁止) ～しなさいよ
「お前たち、川の中ではむやみに泳ぐなよ」(I-06.42)

(193) hə̀ jò lɔ̀ kwè **klàɴ** chə̀ θí
人 この 語る (遊び) CHə 習慣がある
「こいつはやたらと冗談を言うクセがある」

(194) jə- jʊ̄ **klàɴ** dàlɔ̀
1sg 見る (断定)
「漫然と見ていただけだよ」(IV-04.60)

(195) mə- ʔán **klàɴ** báθà θə̂ɴ ʔwí nāɴ pəcá
(非現) 食べる (欲求) おかず おいしい (少数) ～食
「無性においしい料理が食べたくなってきたなあ」(V-03.140)

(196) cáiɴ **klàɴ** wê lé mèiɴlá phə̀ɴ nɔ́ ...
歩く (強意) (場) ジャングル 中 (前提)
「ジャングルの中をあてもなく歩いていたところ...」(III-04.5)

(197) lɔ̀ **klàɴ** chə̀ bê jò θò xì
語る CHə (比定) これ (比定') (禁止)
「そんなことをやたらと言わないで」(IV-04.167)

(198) θàʊpərái mə- chôɴmóɴ **klàɴ** nə̀ lé chəphlʊ̄ɪ mɨ̂
警官 (非現) 思う 2SG (強調) 狂人 ～ですよ
「警官は君を気違いだと思いこんだかもしれない」(IV-04.txt32)

18.18.2　kràɴ(2)　＜傾向＞

動詞が表す事象が生起する頻度の高さを表す。「〜しがちな」「〜する習慣がある」。

(199) kɛ́　**klàɴ**　θí
成る　習慣がある
「よくあることだ」

(200) mə-　làɴthîphā　**klàɴ**
(非現)　転ぶ
「(そんなことをしていると) ころぶよ」(002.55)

(201) nə-　ʔè　lì |　nə-　mə-　côɴkàiɴ　**klàɴ**　θí
2sg　(条件)　行く　2sg　(非現)　病気の　習慣がある
「(そのような都会に) 行くと、あなた病気になるよ」

(202) ʔɔ́　**klàɴ**　pəθài　ʔé　lɔ̂
ある　あまり　(否)　(断定)
「あまり存在しないことが多い」(IV-09.11)

(203) mə-　ʔáɴlá　**klàɴ**　chə̀　ʁâ
(非現)　叱る　CHə　(疑)
「(奥さんに) 叱られることが多いのか？」(V-03.71)

18.18.3　kràɴ(3)　＜意外性＞

動詞が表す事象の生起が意外であることを表す。「意外にも 〜する」「どういうわけか 〜だ」。

(204) nəθí　khāɴ　nɔ́　mə-　thòɴ　**klàɴ**　chī　bádòɴ
2sg　国　(題)　(非現)　着く　(婉曲)　たぶん
「あなたの国にひょっとしたら行けるかもしれない」(011.32)

(205) bêθíθò　lɛ̂↩　nə-　ɣá　**klàɴ**　lé　thəʔàɴ　jò
どのように　(疑)　2sg　移る　(場)　(地名)　(近傍)
「いったいどうしてまたパアンに移ってきたのかね？」(V-03.39)

(206) mə-　cə́ɯɴ　**kràɴ**　ʁâ　θíjâ　ʔé
(非現)　退屈な　(疑)　知る　(否)
「(彼女は) ひょっとして退屈してしまっているかも知れない」(001.835)

18.19　θâɴ ＜最前、最近＞

動詞 θâɴ「新しい」に由来する。動詞の表す事象が生起してあまり時間が経っていないことを表す。「〜したばかり」。

(207) jə- thòɴ **θâɴ** cəpâɴ khâ dáʔò ...
1sg 着く 日本 時 (過去)
「私が日本に来たばかりのころは...」

(208) chə- chəɴ làɴ **θâɴ**
CHə 雨が降る (下方)
「雨が降ったばかりだ」(II-05.13)

(209) [$_R$ dʊ́ thánɴ **θâɴ**] phūɪcɔ̀pài θɛ̀
大きい (変化) 若者 (複)
「世に出たばかりの若者たち」(IV-03.27)

(210) lé kò tɔ̄ thánɴ **θâɴ** ʔəkhâ dáʔò ...
(場) 世界 できる (完成) 時 (過去)
「天地開闢して間もないころ」(II-04.2)

(211) ʔəwê bá wī **θâɴ** θɛ̀ɣòɴ | bá dài jə̀
3se 当たる (先行) (継起) 当たる また 1SG
「彼が先に (病気に) なって間もなく、私にもうつった」(002.834)

18.20 θúɪ < 内密 >

動詞の表す事象が他者に知られないことを表す。「こっそり ～する」「ひそかに ～する」「静かに ～する」。

(212) kòkí **θúɪ**
置く
「隠す」(001.2042)

(213) lɔ̀thàiɴ kàɴkà **θúɪ** wê chə̀
喋る 噂する (強意) CHə
「(彼らは) 隠れて相談した」(II-02.14)

(214) kài **θúɪ** méthî ʔəblàɴblàɴ
拭く 涙 何度も
「(彼女は) 陰で (泣いて) 涙を何度も拭った」(V-04.36)

(215) lì thánɴ ʔɔ́kí **θúɪ** θà
行く (上方) 置く (再帰)
「(彼は木のてっぺんに) 登って身を隠した」(III-03.32)

(216) lì ɣê ʔúɪ **θúɪ** làɴ wê
風 来る 吹く (下方) (強意)
「風が静かに吹き下ろしてきた」(V-05.8)

(217) mwɛ̄　náʊ　cà　làɴ　**θúɯ**　θà　mɔ̂mɔ́　lɔ̂　ʔəkhʊ́cɔ̀ɴ |
(繋)　入る　混ぜる　(帰的)　(再帰)　同じ　(断定)　(理由)

ʔəwê　bá　jʊ̄thɔ̂　θâ　wê　lé　ʔəjàiɴ　nɔ́　lɔ̂
3se　(当為)　眺める　(新局)　(強意)　(場)　遠く　(のだ)　(断定)
「(タイに) 密入国してまぎれこんでいるということは同じなので、(同じカレン人がタイ人の警官に暴力を受けているのを) 遠くから手をこまねいて見ているしかなかった」(IV-07.17)

18.21　ɣúɯ ＜違法、反道徳＞

動詞 ʔánɣúɯ「盗む」に由来する。動作が法や道徳的規範に反していることを表す。

(218) tháʊ　**ɣúɯ**　láiɴmí
乗る　汽車
「こっそり (切符を買わずに) 汽車に乗る」(004.486)

(219) mə-　bá　thàiɴ　**ɣúɯ**　ʁá
(非現)　(当為)　帰る　(疑)
「こっそり (許可を取らずに) 帰るべきだろうか」(V-04.17)

(220) lì　jʊ̄　**ɣúɯ**　mànɕɔ̀θàjɔ̂　phʊ́múɯ　nɔ́　lɔ̀　bə́ɯɴ　lə-　jā
行く　見る　(人名)　娘　(題)　語る　勇敢な　もはや　JA
「(恋人を裏切って) ターヨーおじさんの娘をこっそり見に行ったってこと、言えないんでしょ？」(V-05.53)

18.22　cò ＜遠隔＞

行為者と被動者 (または何らかの影響を受けるもの) が距離的・時間的に離れていることを表す。

(221) jə-　dá　**cò**　wɛ̀
1sg　見える　(備え)
「私は将来を見据えているのだ」

(222) jə-　lóɴ　**cò**　phí　jə-　cúɯ
1sg　差し出す　(裨益)　1sg　手
「私は (握手をするために) 手を差し出した」(V-03.50)

(223) thwí　ɕā　nɔ́　lɔ̀　**cò**　tháɴ　wê　lái
犬　老いた　(題)　語る　(上方)　(強意)　トンビ
「老いた犬は (木の上の) トンビに向かって話しかけた」(I-01.6)

(224) lái nɔ́ ɣə̂ɴ **cò** [$_C$ thwí ɕā
トンビ (題) 聞こえる 犬 老いた

lɔ̀ chə̀ bê nɔ́ θò] ɣòɴ ...
語る CHə (比定) それ (比定') (継起)
「トンビは老いた犬がそのように言うのを聞いて...」(I-01.10)

(225) hə- jū **cò** lé ʔəjàiɴ xîlà wê cwámā lɔ̀
1pl 見る (場) 遠く 美しい (強意) 大変 (断定)
「(その山は) 遠くから見ると大変美しい」(V-06.21)

(226) ʔəθíwê phā kò **cò** ʔəθí lɔ̀
3pe 父 呼ぶ 3PL (断定)
「彼らの父は、彼らに呼びかけた」(I-06.77)

(227) cɔ̀ kè **cò** lái jò xūɪ béiɴ tháɴbà jàʊ
兄さん 書く 手紙 (題) 六 ～枚 達する (完)
「私が手紙を書くのは 6 枚目だ」(V-04.4)

(228) cɔ̂ ʔɔ́ lānânɴ lé ʔəjàiɴ θí |
兄さん いる (逆接) (場) 遠く (類似)

nánɴ **cò** bá ʔwàʔwà kō nì dè lɔ̀
思い出す (無意) (人名) (毎) ～日 (毎') (断定)
「私は遠くに住んでいるが、ワーワーのことは毎日思い出している」(V-05.99)

18.23 lì < 慣れ >

動詞が表す動作をし慣れていることを表す。「～し慣れている」「いつも ～しつけている」。

(229) jə- dʊ́ **lì** wɛ̀ tápôʊɴ
1sg 撮る (備え) 写真
「私は写真は前から撮り慣れている」(001.2346)

(230) jə- lù **lì** ʔə- ɣéiɴ
1sg 行く 3sg 家
「私は彼の家に行きつけている」(001.2345)

(231) [$_R$ jə- ʔáɴ **lì**] kʊ́
1sg 食べる 菓子
「私がいつも食べている菓子」(001.2345)

(232) lə-　dá　**lì**　bá　nɔ́ |
(否)　見える　(否')　(前提)

mə-　təmjâɴ　kənɛ̂
(非現)　奇妙な　KANE
「見慣れていないと奇妙 (に感じる) かもしれないですね」(V-03.7)

18.24　jʊ̄ ＜試行＞

動詞 jʊ「見る」に由来する。動詞の表す動作を試行することを表す。

(233) mə-　ʔáɴ　**jʊ̄**
(非現)　食べる
「食べてみます」(002.61)

(234) lì　**jʊ̄**　bálɛ̂
行く　なぜ
「行ってみたらどうですか？」(004.218)

(235) nə-　lì　khlàɪndə́ɯɪɴ　**jʊ̄**　bá　nāɴ　thí　ʁɔ̄
2sg　行く　話す　(催促)　(少数)　～回　XO
「行って話してみてごらんよ」(IV-04.83)

(236) nə-　mə-　còɴ　**jʊ̄**　báθà　dè　jə̀　càibò ...
2sg　(非現)　試す　(欲求)　(共)　1SG　(条件)
「あなたが私と (力を) 競ってみたいのなら...」(III-03.13)

(237) ʔáɴcà　**jʊ̄**　mèɪɴ　wê　ʔə̀　lə-　thí　dɔ̀
尋ねる　(自然)　(強意)　3SG　一　～回　(別個)
「(彼は) 彼女にもう一度尋ねてみた」(V-04.161)

(238) phâθʊ́ɣɛ̀　thʊ́xòɴ　**jʊ̄**　dè　khāɴməɲā
(人名)　比べる　(共)　外国

lé　[$_R$ ʔəwê　thòɴ　bá]　θɛ̀　nɔ́　chī　lɔ̂
(関)　3se　着く　(経験)　(複)　(のだ)　(婉曲)　(断定)
「パートゥーゲーは (カレン州を) 自分の行ったことのある諸外国と比べてみた」(V-04.49)

(239) jə-　mə-　ʔáɴmə̂ɴ　[$_C$ təwâɴphʊ́chā　tàɪɴ　dòɴ　**jʊ̄**
1sg　(非現)　命ずる　村人　作る　(模倣)

bê　jə-　ʔɔ̀　bá　chəthî　nɔ́　θò]　nàɴ　thí
(比定)　1sg　飲む　(不抗)　液体　あの　(比定')　(少数)　～回
「私が飲んだ液体のようなものを作ってみるよう、村人に頼もう」(IV-05.39)

18.25 khwái ＜徹底＞

動詞 khwái「投げる」に由来する。wái とも発音する。動作の仕方や状態の変化が徹底していることを表す。また、そこから取り返しがつかないというニュアンスを伴うことがある。「～してしまう」「きちんと～する」「徹底的に～する」「完全に～する」。

まず、意志動詞に付いた例を挙げる。

(240) pàʊ làɴ **khwái** jə- châiɴ nāɴ thí
掛ける (下方) 1sg シャツ (少数) ～回
「俺のシャツをきちんと掛けておいてくれ」

(241) nə- ʔɔ̀ ʔwí nɔ́ màláʊ **khwái** | ɣōɴ lɔ̌
2sg 飲む おいしい (題) 注文する 終わる (断定)
「あなたが好きなのを注文してしまえば、それでいい」

(242) jə- cáiɴ láɴ **khwái** chəmà jàʊ
1sg 出る (外方) 仕事 (完)
「私は仕事をやめてしまいました」(012.18)

(243) nəwêdá nə- ʔè θàmɛ́ ʔò |
2se 2sg (条件) 恐れる (条件')

lì ɣà ʔɔ́ **khwái** wê lé ʔəjàiɴ ʔò bɔ́
行く 移る いる (強意) (場) 遠く (遠方) ～しなさいよ
「お前は (人間が) 恐いのなら、遠くに移り住んでしまえ」(I-04.24)

(244) nə̀ɴmə̂ɴ **khwái** ʔəθí nòpà ɣàthíɣàthí
接吻する 3pl 頬 一回ずつ
「彼らのほっぺたに一回ずつキスをしてやった」(V-03.89)

(245) pətháʊ **khwái** nə- chəkhlàiɴ nɔ́ jāɴ
止める 2sg 言葉 その ～しなさい
「もう話すのをやめなさい」(V-03.119)

(246) nə- mə- ʔɔ̀ báθà θài phɔ̀phɔ̂nɔ́θò |
2sg (非現) 飲む (欲求) 酒 そんなに

ʔɔ̀ **khwái** thàiɴ ʔēláʊ bálɛ̂ bò
飲む (再度) 全部 なぜ BO
「そんなに酒が飲みたいのだったら、全部飲んでしまいなさいよ」(V-03.127)

(247) chə- klò nī **khwái** ráʊcài
CHə 剥がす (引寄) 仏像
「仏像は剥がされてしまった」(V-06.61)

(248) tápôʊɴ　lé　jə-　dʊ́　dá　lʊ́ɪ　ɣéiɴ　ʔò　nɔ́
写真　(関)　1sg　撮る　(保持)　(場)　家　(遠方)　(題)

jə-　phílâɴ　**khwái**　ʔəwê　jàʊ
1sg　与える　3se　(完)
「あの家で撮った写真は彼にやってしまった」(003.913)

(249) nə-　thə̂ɴxá　ɣàɣòɴ　**khwái**　jə-　θwî
2sg　蹴る　壊れる　1sg　巣
「あなたは私の巣を完全に蹴り壊してしまった」(II-02.24)

(250) pə-　ʔáɴxʊ́　làɴmáʊ　**khwái**　ʔè　ɣòɴ ...
1pl　焙る　粉々になる　(条件)　終わる
「(植物を) 粉々の灰になるまで (火で) あぶり終えたら...」(II-03.14)

(251) thàʊ　chêiɴ　**khwái**　ʔə-　mɛ́　ʔə-　θwâ
磨く　清潔な　3sg　歯　3sg　歯

ʔè　lə-　ɣòɴ　bá |　mî　wê　nàɴ　blàɴ　ʔé
(条件)　(否)　終わる　(否')　寝る　(強意)　(少数)　～回　(否')
「歯をきれいに磨かないうちは、決して寝ない」(II-08.13)

(252) ʔè　chôɴkàiɴ　nɔ́ |　pə-　bá　ʔɔ́pwài　**khwái**　xɛ̀xɛ̀　lɔ̂
(条件)　病気の　(題)　1pl　(当為)　休む　ゆっくり　(断定)
「もし病気になったら、ゆっくり休まなければならない」(II-13.16)

(253) nə-　chəlɔ̀　ʔè　ʔɔ́ |　lɔ̀　**khwái**　ʔèphlɛ́
2sg　言葉　(条件)　ある　語る　早く
「言いたいことがあるなら早く言ってしまいなさい」(IV-04.224)

(254) kəlôɴ　kè　**khwái**　lái　lə-　blài
急ぐ　書く　手紙　一　～枚
「急いで手紙を 1 枚書いた」(IV-04.393)

次に、無意志動詞に付いた例を挙げる。

(255) thîláɣâɴ　nɔ́　phlī　thánɴ　**khwái**　ɣòɴ ...
塩　(題)　溶ける　(完成)　(継起)
「塩は完全に溶け去って...」(I-02.11)

(256) pəθí　chəklàiɴ　làɴphái　**khwái**　ləmlái
1pl　言葉　消える　一瞬
「私達の会話は一瞬途絶えてしまった」(V-03.57)

(257) ʔə- mèɴphlɛ̄ nɔ́ θí ɣàɣòɴ **khwái** wê chī lɔ̂
3sg 櫂 (題) (類似) 壊れる (強意) (婉曲) (断定)
「彼の舟の櫂も完全に壊れてしまった」(I-08.16)

(258) [$_R$ ɣòɴ **khwái**] là lə- béiɴ ʔò
終わる 月 一 ～枚 (遠方)
「先月」

(259) ʔəlɯ̄ bàiθwá **khwái** láʊ jàʊ
声 詰まる 完全に (完)
「声が完全に詰まってしまった」(V-05.6)

(260) ʔwàʔwà θə́ɯɴθà théphà **khwái** láʊ jàʊ
(人名) 内臓 割れる 完全に (完)
「ワーワーはひどく気落ちしていた」(V-05.87)

(261) θî **khwái** nɔ́ ɕɯ́ɯ tháʊ lɔ̂
死ぬ (題) 平和な (最上) (断定)
「死んでしまうのが一番楽だ」(V-05.89)

(262) jə- làɴcàɴ **khwái** bóʊɴpwèmè jàʊ
1sg 遅れる ボクシングの試合 (完)
「私はボクシングの試合に間に合わなかった」(004.351)

(263) jə- phʊ́ làɴthé θî **khwái** láʊ jàʊ
1sg 子供 落ちる 死ぬ 全部 (完)
「私の子供は全員、(木から) 落ちて死んでしまった」(II-02.24)

(264) təcwī **khwái** ʔəkhʊ́còɴ | θôʊɴ phí khlàʊ ləɴ ʔé
遅い (理由) 送る (裨益) 暇な もはや (否)
「遅くなってしまったので、(品物を) 送るための時間がなくなってしまった」(009.37)

(265) ʔəwêdá phòɴphlè **khwái** lé
3se 逃れる (場)

mí [$_R$ ʔáɴlé chə̀] nɔ́ chī lɔ̂
火 食う CHə (のだ) (婉曲) (断定)
「彼は火の災禍から逃れることができたのだ」(II-11.16)

18.26 lā ＜願望＞

文の表す事象が生じることを話し手が望んでいることを表す。「～してもらいたい」「～してほしい」。この助詞が用いられた文では、否定の助詞として常に ləxì (xì) を用いる。このことから、この助詞が使われた文は命令文の一種であると考えられる。lā を用いた命令文は、通常の lā を用いない命令文とは異なる特徴を持つ。通常の命令文は、主語が二人称である。次の例を見ていただきたい。

(266) ʔáɴ
　　食べる
　　「食べよ」

この文の主語が二人称であることは、次のように主語を顕在化させれば分かる。次の (b)(c) のように、一人称や三人称の主語の場合、この文は命令文として成り立たない[4] 。

(267) a. nə-　ʔáɴ
　　2sg　食べる
　　「お前が食べよ」

b. *jə-　ʔáɴ
　　1sg　食べる

c. *ʔəwê　ʔáɴ
　　3se　食べる

一方、lā を用いた文は、主語がいかなる人称であってもよい。

(268) a. jə-　ʔáɴ　**lā**
　　1sg　食べる
　　「私に食べさせてほしい」

b. nə-　ʔáɴ　**lā**
　　2sg　食べる
　　「お前に食べてほしい」

c. ʔəwê　ʔáɴ　**lā**
　　3se　食べる
　　「彼に食べてほしい」

上述したとおり、これらの否定は次のように xì を用いて表す。

(269) a. jə-　ʔáɴ　**lā**　xì
　　1sg　食べる　(禁止)
　　「私に食べさせないでほしい」

b. nə-　ʔáɴ　**lā**　xì
　　2sg　食べる　(禁止)
　　「お前には食べないでほしい」

c. ʔəwê　ʔáɴ　**lā**　xì
　　3se　食べる　(禁止)
　　「彼には食べないでほしい」

[4] もちろん、(b) と (c) の文は「私が食べた」「彼が食べた」という意味では適格である。

(270) a. *jə- ʔánN **lā** ʔé
1sg 食べる (否)

b. *nə- ʔánN **lā** ʔé
2sg 食べる (否)

c. *ʔəwê ʔánN **lā** ʔé
3se 食べる (否)

通常の命令文とのもう一つの違いは、通常の命令文では次のように意志動詞しか用いることができないのに対し、

(271) a. nə- ʔánN
2sg 食べる
「お前が食べろ」

b. *nə- xîlà
2sg 美しい

lā を用いた命令文では、無意志動詞も用いることができるという点である。

(272) a. nə- ʔánN **lā**
2sg 食べる
「お前が食べろ」

b. nə- xîlà **lā**
2sg 美しい
「お前に美しくなってほしい」

なお、以上述べた lā の特性は、次節で述べる dáwê と共通する。

以下に lā が用いられた様々な例を人称別に見ていく。ただし、主語が顕在していない場合、人称が何であるかの判別が難しいことがある。まず一人称主語と考えられる例を挙げる。

(273) ɣə̂N bá **lā** chài
聞こえる (催促) CHAI
「聞かせてほしい」(001.1340)

(274) pə- mə- lì bá **lā** chài
1pl (非現) 行く (催促) CHAI
「私達に行かせてくれ」(001.2221)

(275) jə- mə- lɔ̀ **lā** nàN thí
1sg (非現) 語る (少数) ～回
「私にちょっと話させてください」

(276) nəθí　lɔ̀　wɛ̀　ʔàiθài　ʔə-　nâ　thɔ̂　nɔ̂　nɛ̂
2pl　語る　(備え)　修験者　3sg　鼻　高い　(題)　NE

jə-　mə-　dá　**lā**　nāɴ　thí　xɔ̄
1sg　(非現)　見える　(少数)　～回　XO
「お前たちが言っている鼻の高い修験者に、一度会わせてくれ」(006.53)

(277) jə-　ɣə̂ɴ　bá　**lā**　xì
1sg　聞こえる　(催促)　(禁止)
「どうか聞かせないでほしい」

次は二人称主語と考えられる例である。

(278) nə-　mî　**lā**　thōɴ　jò
2sg　寝る　(場)　ここ
「ここで寝なさいよ」

(279) lɔ̀　phí　**lā**　jə̀　chài
語る　(裨益)　1SG　CHAI
「私に話してください」(II-06.15)

(280) ʔɔ́　chóɴ　**lā**　chài
いる　元気な　CHAI
「(あなたが) 元気でありますように」

▷ ʔɔ́ chóɴ lā chài は、出会ったときの挨拶あるいは別れの挨拶としてよく使われる表現である。chóɴ は chôɴ と発音することもある。「元気な」の意の chóɴ が chôɴ と発音されることは通常ない。このことは、この表現が定型句化していることの一つの証拠となり得る。

(281) ʔəmátəphlá　ʔē　ʔɔ́ |
間違え　(条件)　ある

plɛ̀tɔ̀　**lā**　jə̀　nāɴ　thí　chài
許す　1SG　(少数)　～回　CHAI
「もし間違えがあれば許してください」(V-04.79)

(282) lé　mí　lə-　ʔáɴ　dài　bá　ʔəkhâ　jò
(場)　火　(否)　食べる　まだ　(否')　時　この

cáiɴ　wɛ̀　**lā**　ʔèjàiɴ　chài
逃げる　(備え)　遠くに　CHAI
「火事の起きていない今のうちに、遠くに逃げてください」(II-11.10)

(283) màbò　phí　wī　**lā**　jə-　chəmà　nāɴ　thí　ʁɔ̄
手伝う　(裨益)　(先行)　1sg　仕事　(少数)　～回　XO
「私の仕事を手伝ってください」(IV-04.424)

(284) lɔ̀ θíjâ bá **lā**
(使役) 知る (催促)
「僕に教えてくれないか」(V-01.9)

(285) mə- xwè phí **lā** ʔəθâN nāN béiN ʁâ
(非現) 買う (褌益) 新品 (少数) ～枚 (疑)
「(シャツの) 新しいのを一着買ってくれませんか？」(V-03.127)

▷ この例のように疑問を表す ʁâ と共起することもある。

次は三人称主語と考えられる例である。

(286) ʔəwê lì **lā** chài
3se 行く CHAI
「彼に行ってほしい」

(287) thî θíləphá ɣɛ̂ thánN **lā** lé khʊ́lòN khʊ́ jò chài
水 (複) 来る (上方) (場) 山 頂上 (近傍) CHAI
「水がこの山の頂きに沸いてきますように」(III-06.24)

(288) chəkhlàiN tɔ̀lòN θà tɔ̀lòN ʔɔ́ **lā** kō ɣà dè
言葉 正直な 心 正直な ある (毎) ～人 (毎')
「正直な言葉や正直な心がどんな人にもあってほしい」(IV-01.82)

(289) ʔəwê lì **lā** xì
3se 行く (禁止)
「彼には行ってほしくない」

次に挙げる例の主語は二人称であるか三人称であるか判然としない。

(290) dɔ́ thánN **lā** thədòN châiNsânN ʔèɣì
畳む (完成) 腰巻き シャツ 良く
「腰巻きやシャツをきちんと畳んでほしい」(I-sen.73)

(291) ɕòɕó **lā** nò phònN ʔèchêiNpràN kò mūnì dè chài
うがいする 口 中 清潔に (毎) ～日 (毎') CHAI
「うがいして口の中を毎日清潔にされたし」(II-08.27)

(292) lé pə- chɨ̀phʊ́ phânNkhʊ́ nɔ́
(場) 1pl 民族 上 (題)

ʔɔ́kí **lā** chəθɔ́ɯNtɔ̀θàòN kō ɣà dè chài
置く 忠誠心 (毎) ～人 (毎) CHAI
「自分達の (カレン) 民族に (あなた方は) みな忠誠心を持ってほしい」(IV-01.86)

(293) θətài　làɴ　**lā**　θà　kō　ɣà　dè　chài
注意する　(帰的)　(再帰)　(毎)　～人　(毎')　CHAI
「みな注意してください」(IV-08.28)

(294) lòɴ　thʊ́xòɴ　lòɴ　màpjáʊ　**lā**　xì　phʊ́　ʁé
従う　真似する　従う　追いかける　(禁止)　子供　～よ
「子供たちよ、(快楽の誘惑には) 付き従うな」(IV-07.52)

(295) ɣɛ̂　thánɴ　prə̂ɴxò　**lā**　lé
来る　(上方)　披露する　(場)

lāɴthɔ̂　jò　nāɴ　thí　chài
舞台　(近傍)　(少数)　～回　CHAI
「(次の出場者は) 舞台に上がって演技してください」(V-04.72)

(296) mà　ɣàɣòɴ　**lā**　ləxì
(使役)　壊れる　(禁止)
「壊さないでくれ」(V-06.63)

18.27　dáwê ＜願望＞

lā と同じく、様々な動詞に付き、文の表す事象が生じることを話し手が望んでいることを表す。lā と同じく、この助詞が用いられた文は、否定の助詞として ləxì (xì) を用いることから、この助詞が使われた文はやはり命令文の一種だと考えられる。主語がいかなる人称であってもよいことも、lā と同じである。

(297) a. jə-　ʔánɴ　**dáwê**
1sg　食べる
「私に食べさせてほしい」

b. nə-　ʔánɴ　**dáwê**
2sg　食べる
「あなたに食べてほしい」

c. ʔəwê　ʔánɴ　**dáwê**
3se　食べる
「彼女に食べてほしい」

上の文の否定は次の通りである。

(298) a. jə-　ʔánɴ　**dáwê**　xì
1sg　食べる　(禁止)
「私に食べさせないでほしい」

b. nə-　ʔánɴ　**dáwê**　xì
2sg　食べる　(禁止)
「あなたには食べないでほしい」

c. ʔəwê xîlà **dáwê** xì
3se 食べる (禁止)
「彼女には食べないでほしい」

lā の場合と同様、動詞は意志動詞であっても無意志動詞であってもよい。

(299) a. nə- ʔánɴ **dáwê**
2sg 食べる
「お前が食べろ」

b. nə- xîlà **dáwê**
2sg 美しい
「お前に美しくなってほしい」

このように、dáwê は統語的あるいは意味的特徴において lā と似ている。二つの違いは、lā のほうが丁寧に願望を表明する場合に使われる傾向があるということ、dáwê は、事象が成立することに満足せず、なかばあきらめを感じているときにしばしば使われること、などである。しかし、次のように lā と dáwê が共起することがある。

(300) nə- kɛ́ cəxwà kɛ́ **lā** **dáwê**
2sg 成る 王 可能な
「あなたが王様になれますように」(004.267)

したがって、二つの助詞が完全に相反する意味を表すとは考えにくい。
以下に dáwê を用いた例を見ていく。まず一人称主語の例を挙げる。

(301) jə- mə- lì chōɴ phí **dáwê**
1sg (非現) 行く 迎える (裨益)
「私に迎えに行かせてください」(I-03.17)

(302) ʔè θî dè nə̀ | θî **dáwê**
(条件) 死ぬ (共) 2SG 死ぬ
「あなたと死ぬのなら死んでもいい」(001.1228)

(303) jə- mə- dànɛ́ **dáwê** lɔ̂
1sg (非現) 見せる (断定)
「私がお見せしましょう」(III-01.36)

(304) ʔè mwɛ̄ nə- lì phɯ́ɪ jə̀ nɔ́ |
(条件) (繋) 2sg 行く 背負う 1SG (題)
mə- lì **dáwê**
(非現) 行く
「もしあなたが私を背負ってくれるのなら、行きましょう」(III-04.18)

(305) mə- kè θôʊɴ làɴ **dáwê** lái
(非現) 書く 送る (内方) 手紙
「(あなたにこの) 手紙を書いて送ります」(IV-04.332)

(306) nə-　chəmà　nɔ́　jə-　mə-　bò　phí　**dáwê**　thòN　ʔə-　ɣòN
2sg　仕事　(題)　1sg　(非現)　助ける　(裨益)　(限界)　3sg　終わる
「あなたの仕事は私が最後までお手伝いしましょう」(IV-04.426)

(307) jə-　ʔáNjâ　**dáwê**　lɔ̂
1sg　謝る　(断定)
「私に謝らせてください」(V-01.102)

(308) mànmʉ́mànN　mə-　ɣɛ̂　**dáwê**
姪　(非現)　来る
「私 (=話し相手の姪) は必ず来ますからね」(IV-04.148)

次は二人称主語の例である。

(309) nə-　θî　**dáwê**
2sg　死ぬ
「死んでしまえ」

(310) nə-　mə-　ʔɔ́　chóN　**dáwê**
2sg　(非現)　いる　健康な
「あなたが健康でありますよう」

次は三人称主語の例である。

(311) ʔəwê　lì　**dáwê**
3se　行く
「彼に行かせてくれ」

(312) ʔə-　nākʉ̀　wà　**dáwê**　lɔ̂
3sg　耳　動く　(断定)
「耳が動きますように」(I-01.24)

(313) chə-　khō　**dáwê**　|　chə-　chàN　**dáwê**　|
CHə　暑い　CHə　降る

jə-　mə-　lì
1sg　(非現)　行く
「暑くてもいい、雨が降ってもいい、俺は行く」(001.1229)

(314) xîphàN　ʔəcá　xîlà　**dáwê**　kō　blàN　dè　chài
(人名)　人生　美しい　(毎)　～回　(毎')　CHAI
「フイパウンの人生が常に美しくありますように」(IV-04.381)

(315) bê　phūmʉ́nàɴ　θà　ʔɔ́　θò
(比定)　妹　心　ある　(比定')

mə-　bá　kɛ́　thánɴ　**dáwê**　kō　mèiɴ　dè　nɛ̂
(非現)　(当為)　成る　(完成)　(毎)　～種類　(毎')　NE
「君の思うとおりに、すべてがなりますように」(V-01.51)

(316) chônmónɴ　**dáwê**
考える
「(思いたければ) 思わせておけばいいさ」(IV-04.32)

(317) thònɴ　kòkəjànɴ　lànʔʉ́　lə-　chânɴ |
(限界)　世界　朽ちる　一　段階

ʔɔ́　**dáwê**　nānɴ　ɣà　xì
いる　(少数)　～人　(禁止)
「この世が終わるまで、(あいつのような男が) 現れませんように」(V-05.121)

18.28　mèiɴ < 自然な成り行き >

外的環境の大きな変化がなければ、自然な成り行きとして動詞の表す事象が生じることを表す。「(～などの事情で)～することになった」「そのまま～することになった」「知らず知らずのうちに～になった」。

(318) pətháʊ　lʉ́ʔò　pətháʊ　léjò |　jái　**mèiɴ**　ləpî　ʁɔ̄
止まる　あちら　止まる　こちら　久しい　少し　XO
「(バスが) あっちに止まったりこっちに止まったりして、少し遅くなってしまったんですよ」(001.401)

(319) khlàiɴ　lʉ́　pjáʊ　**mèiɴ**　phlòʊɴ　chəkhlàiɴ　ləcɛ̀
話す　(学習)　(専念)　カレン　言葉　少し
「(そういうわけで) ここのところちょっとカレン語の会話を勉強しているんですよ」(001.2546)

(320) mə-　théphà　**mèiɴ**　dài　ʁâ
(非現)　割れる　また　(疑)
「(こんなことをしていると皿が) 割れてしまいますでしょうかねえ？」(001.2550)

(321) jə-　mə-　ɣɛ̂　**mèiɴ**　lɔ̂
1sg　(非現)　来る　(断定)
「(成り行き上しかたがないから) これからうかがいます」(001.2550)

(322) mə-　pàʊ　thánɴ　**mèiɴ**　phlòʊɴ　láilɛ̄　θəphjānɴ　chī　lɔ̂
(非現)　開く　(完成)　カレン　文学　祭り　(婉曲)　(断定)
「(例年のごとく) 今年もまたカレン文学の祭りを開くことになりました」(013.9)

(323) ləjáiləmɔ̄　xîphàɴ　ʔə-　θàbòɴ　láʊ　**mèiɴ**　chī　lɔ̂
間もなく　(人名)　3sg　命　尽きる　(婉曲)　(断定)
「間もなくフイパウンは息をひきとった」(IV-04.452)

(324) jə-　θóɴ　ʔà　məkhó　thələ̂ɴ　**mèiɴ**　ləcɛ̀
1sg　諭す　3SG　さっき　過ぎる　少し
「私がさっき彼を教え諭したやり方は、(知らず知らずのうち) 少し度が過ぎてしまった」(V-03.112)

(325) θwíwɔ̀θʉ́ʉ　nɔ́　mwɛ̄　**mèiɴ**　mʉ́ʉmʉ́ʉ　ʔə-　phʊ́mʉ́ʉ　ʁâ　θʉ́jâ　ʔé
(人名)　(題)　(繋)　(人名)　3sg　娘　(疑)　知る　(否)
「トゥイーウォートゥーはムームーの娘かも知れない」(V-04.169)

▹ この例では、「トゥイーウォートゥーがムームーの娘だ」ということが状況から判断した最も自然な推論であることが mèiɴ によって表されている。

(326) lāɴkhâiɴ　nàɴ　blàɴ　càibò |　chəxwà　θʉ́jâ　**mèiɴ**　dʉ̀ʉ
最後　(少数)　～回　(条件)　王　知る　DU
「(人々がその噂を知ってゆき、) 最後には、王の知るところとなった」(006.47)

(327) lʉ̀　θôʊɴɣɔ̀ɴ　**mèiɴ**　nə-　phʉ̄khwâ　khléiɴθàʊcà　dè　ʔɛ́θwíwɔ̀
行く　送る　2sg　弟　(人名)　(列挙)　(人名)

nī　ɣà　jò　lé　klòɴ　phàdʊ́　ɕwèjìɴmjò　ʔò
二　～人　この　(場)　仏塔　大きな　(固有名詞)　(遠方)

nāɴ　thí　ʁɔ̄
(少数)　～回　XO
「このままクレイタウチャーとエートゥイーウォーのふたりをシュエインミョー・パゴダにちょっと送っていってください」(IV-04.176)

(328) θàʊcà　nɔ́　lʉ̀　lé　xîphàɴ　ɣéiɴ　ʔò |
(人名)　(題)　行く　(場)　(人名)　家　(遠方)

lɔ̀thàiɴ　chə̀　dè　xîphàɴ |
しゃべる　CHə　(共)　(人名)

mî　**mèiɴ**　lé　xîphàɴ　ɣéiɴ　ʔò　nɔ́　lɔ̂
寝る　(場)　(人名)　家　(遠方)　(のだ)　(断定)
「タウチャーはフイパウンの家に行って彼女と話をし、そのまま彼女の家に泊まった」(IV-04.307)

(329) phâθʉ́ɣɛ̀　nī　ɣāiɴ |
(人名)　得る　力

chóɴkí　thánɴ　**mèiɴ**　mā　chī
鳥肌　上がる　(非常)　(婉曲)
「パートゥーゲーは元気づけられて、(知らず知らず) 鳥肌が立った (=感動した)」(V-04.92)

18.29　θâ < 新局面 >

文の表す事象がそれまでとは異なる新しい局面を形成することを表す。「(以前とはうってかわって) もう ～だ」。ビルマ語に訳すと、助詞 /-tɔ̂/ に対応することが多い。

(330) ʔəwêdá　bá　ʔɔ́　θʊ́ɪ　thàiɴ　**θâ**　wê　xɛ̀xɛ̀　lɔ̂
3se　(当為)　いる　(内密)　(追加)　(強意)　静かに　(断定)
「彼は今度は静かにだまっているしかなかった」(II-05.10)

(331) pái　wái　**θâ**　rèdìjò
消す　(徹底)　ラジオ
「もうラジオを消しなさい」(002.113)

▷ pái はビルマ語 /peiʔ/ の借用。

(332) thàiɴ　**θâ**　bálɛ̂　bò
帰る　なぜ　BO
「もう帰ったらどうだ」(002.430)

(333) ʔɔ́　**θâ**　θɔ̂ɴ　nwê　lɔ̂
ある　三　～週間　(断定)
「もうあと三週間しかない」(003.999)

(334) khlàiɴ　**θâ**　xɛ̀xɛ̀
話す　ゆっくり
「(今からは) ゆっくり話してくれ」(IV-04.75)

(335) khlàiɴ　thánɴ　**θâ**　nāɴ　ɣà　lɔ̀ɴ　ʔé
話す　(外方)　(少数)　～人　もはや　(否)
「もはや誰も声を出さなかった」(V-01.103)

(336) chəkhlàiɴ　ʔɔ́ |　lɔ̀　**θâ**　ləkhâiɴ
話し　ある　語る　後で
「話があるなら後で話しなさい」(V-03.42)

(337) ʔəkhɔ̂pəjɔ̂　lì　**θâ**　lə-　mèiɴ　chī
意味　行く　一　～種類　(婉曲)
「(言ったことが) 別の意味になってしまった」(V-04.167)

(338) [$_C$ nāɴxwàkhlóʊɴ　jò　mwɛ̄　ʔəjáʊ　dʊ́　tháʊ]
(鳥の１種)　(題)　(繋)　年齢　大きい　(最上)

kəchâɴ　dè　chəʔàʊ　θíjâ　**θâ**　wê　lɔ̂
象　(列挙)　猿　知る　(強意)　(断定)
「ナンホワクロン鳥が一番年を取っているということを、象と猿はついに知ったのだった」(III-10.19)

(339) cɔ̂khléiɴ　mə-　thàiɴ　kèɣɔ̀khó　lɔ̂　càibò |
(人名)　(非現)　帰る　明日　(断定)　(条件)

xîphàɴ　mə-　ʔɔ́　**θâ**　dè　phlòʊɴ　lɛ́
(人名)　(非現)　いる　(共)　誰　(疑)
「あなたが明日帰るのなら、私は (今後は) 誰と一緒にいればよいのだろう」(IV-04.312)

(340) hənâɴkəchā　kɛ́　tháɴ　thàiɴ　mūphā　má |
自分達　成る　(完成)　(追加)　父母　～してはじめて

[$_C$ lé　hə-　ɣàɴ　pî　khâ　hə-　phā　θɛ̀
(場)　1pl　姿　小さい　時　1pl　父　(複)

ʔɛ́　hə̀　phəbàʊ　lɛ̂]　θíjâ　**θâ**
愛する　1PL　どれほど　(疑)　知る
「自分達が親になって初めて、自分が小さいころ父たちが自分をどれほど愛していたか知るのだ」(V-03.93)

主語の指示対象が新しい局面を作り出す原因であるとき、しばしば主語の倒置が生じる。次の例を見られたい。

(341) ʔɔ́　**θâ**　△ ʔəxí　dè　ʔəphài
ある　骨　(列挙)　皮
「骨と皮しか残っていなかった」(V-01.78)

(342) ʔɔ́thɔ̄　**θâ**　△ ʔəthàiɴ　xâiɴ　θɛ̀　thəmā　lɔ̂
残る　枝　乾いた　(複)　専ら　(断定)
「(木々は葉が落ちて) みな乾いた枝だけになってしまっていた」(V-05.5)

18.30　plɔ̀

plàɴ または pràɴ とも発音する。おそらく動詞 pràɴ「清潔な」に由来する。次のような用法がある。

18.30.1　plɔ̀(1)　＜無価値＞

動詞の表す事象が生起することに何らかの価値観から見た価値がないことを表す。「無意味にも ～する」「ただ ～する」。

(343) mə-　láʊ　**plɔ̀**　cì
(非現)　失う　金
「お金を無駄に失うことになる」(004.412)

(344) nə-　mə-　khōɣʊ́　**plɔ̀**　thəmâthəmā　nɔ́　chī　lɔ̂
2sg　(非現)　焦げる　必ず　(のだ)　(婉曲)　(断定)
「(山火事が起きたら) あなたはきっと (何もできずに) 丸焦げになるだけさ」(II-11.10)

(345) pə- ʔəcá mə- xôʊɴ **plɔ̀** klàɴ bá khó
1pl 人生 (非現) 崩れる (傾向) (不抗) (未来)
「私達の人生は台無しになってしまうだろう」(IV-03.35)

(346) bê lə- làɴʔʊ́ làɴklá **plɔ̀** bá θò
(目的) (否) 枯れる 朽ちる (否') (目的')

nə̀ nə̀ jə̀ jə̀ làɴ bá ʔətà kō ɣà dè lɔ̂
2SG 2SG 1SG 1SG 下りる (不抗) 義務 (毎) ～人 (毎') (断定)
「(カレン民族が) 意味もなく消滅してしまわないように、あなた達と私達には (それを防ぐ) 義務がある」(IV-09.58)

18.30.2 plɔ̀(2) ＜無料＞

無料で何かを得ることを表す。「ただで～する」。

(347) ʔè nī **plɔ̀** | ʔáɴ láʊchêiɴ
(条件) 得る 食べる すべて
「(金を払わずに) ただでもらえるのなら全部食べる」(004.100)

(348) mànī **plɔ̀** nī ʁā
取る 可能な (疑)
「ただでもらっていいですか？」(002.998)

18.31 ɕàʊ

動詞 ɕàʊ「驚く、はっとする」に由来する。次のような用法がある。

18.31.1 ɕàʊ(1) ＜驚愕＞

動詞の表す事象の生起を話し手が予想していなかったことを表す。「驚いたことに～だ」。

(349) thái khʊ́ nɔ́ | phɨ́ **ɕàʊ**
切る 頭 (前提) 短い
「髪の毛を切ったら短くなってしまった」

(350) ʔánphôɴ mì khōɣʊ́ **ɕàʊ**
炊く ご飯 焦げる
「ご飯を炊いたら焦げてしまった」

(351) thòɴ **ɕàʊ** phlòʊɴ thîkhāɴ lə- blàɴ ...
着く カレン 国 一 ～回
「思いがけずカレン州に到着して...」(V-04.49)

(352) ʔə-　phʊ́　dʊ́　**ɕàʊ**　pàʊpàʊpàʊ
3sg　子供　叩く　(擬音語)
「なんと、子が (父親を) パシッパシッパシッと叩いた」(020.79)

(353) phlòʊɴmʊ́ɕā　bádòɴ　dè　θwíwɔ̀θʊ́ɪ　mʊ̄　lə-　ɣà
中年女性　似ている　(共)　(人名)　母　一　～人

phâθʊ́ɪɣè　dá　bá　**ɕàʊ**　wê　chī　lɔ̂
(人名)　見える　(不抗)　(強意)　(婉曲)　(断定)
「トゥイーウォートゥーの母らしき中年女性を、パートゥーゲーは思いがけず目撃した」(V-04.122)

18.31.2　ɕàʊ(2)　＜信念のなさ＞

確たる信念もなく動作を行うことを表す。「何となく～する」。

(354) ɣɛ̂　**ɕàʊ**　lə-　thí　jò |　thòɴ　mèiɴ
来る　一　～回　(前提)　着く　(自然)
「今回、何とはなしに来てみたら、着いてしまった」(003.948)

(355) mwɛ̄　ʔè　tàiɴ　**ɕàʊ**　thóɴ　ní |
(繋)　(条件)　作る　コマ　一度

mʊ̄　ɣáɴphʊ̄ɪ　ɣáɣè
(非現)　鳴る　よく
「もしコマでも作ってみたりしたら、よく鳴るだろうなあ」(018.12)

18.32　ɕòɴ ＜共同＞

動作を表す動詞に付き、その動作を少数の複数人数で行うことを表す。主語は単数の場合と複数の場合とがある。

(356) lì　**ɕòɴ**　klòɴ　dòʊɴjāɴ
行く　仏塔　(地名)
「ドンインのパゴダに一緒に行く」(004.419)

(357) lə-　nìmʊ̄ɪ　ʔəθí　nɔ́　lɔ̀thàiɴ　**ɕòɴ**　lóθà ...
一　日　3pl　(題)　喋る　(相互)
「ある日彼らは相談して...」(III-10.4)

(358) jə-　lɔ̀thàiɴ　**ɕòɴ**　chəkhlàiɴ　báchâiɴdálé
1sg　喋る　話し　～について

nəθí　ɣɛ̂　cáiɴkwè　ʔəcòɴ　dài
2pl　来る　訪問する　事柄　まだ
「私はあなた方が遊びに来たことについて (彼らと) まだ話しているのですよ」(012.25)

(359) mə- thàiɴ ʔɔ́ **ɕòɴ** dè nə̀ thōɴʔəthòɴ dài xɔ̄
(非現) 帰る いる (共) 2SG 必ず また XO
「帰ってきてから必ずあなたをおもてなししますからね」(V-04.19)

▷ ʔɔ́ ɕòɴ は文字通りの意味は「いっしょにいる」だが、「もてなす」という意味の慣用句としても使われる。

18.33 kòʊɴ ＜共同＞

動作を大勢で行うことを表す。ɕòɴ と違い、主語は常に複数である。動詞 kòʊɴ「集まる」に由来する。

(360) ʔəθí ɣɛ̀ **kòʊɴ**
3pl 動く
「彼らはみんなで活動している」

(361) pəphlòʊɴphʊ́ θɛ̀ dá **kòʊɴ** lóθà khâ ...
カレン民族 (複) 会う (相互) 時
「カレン人が大勢集まったときには...」(V-03.5)

(362) θéiɴ phàdʊ́ lə- tháɯɴ ʔəkhî jò thʊ́phʊ́líphʊ́ chōɴ làɴ **kòʊɴ** ...
木 大きな 一 ～本 先 (題) 小鳥 とまる (下方)
「大きな１本の木の先に小鳥たちがとまっていて...」(IV-05.12)

(363) thʊ́lêiɴʔwà lə- mèiɴ nɔ́ dɔ̀
鷺 一 ～種類 (題) (別個)

ʔɔ́ **kòʊɴ** wê dè ʔədóɴ nɔ́ lɔ̂
いる (強意) (共) 群れ (のだ) (断定)
「鷺だけは群れをなして集まっていた」(II-01.12)

(364) thʊ́ʔərêinphʊ́ θí làɴ **kòʊɴ**
(鳥の一種) (類似) 下りる

cò ʔánɴ khwái wê chəphʊ́xā θí nɔ́ ʔəkhʊ́còɴ ...
つつく 食べる (徹底) (強意) 虫 (複) (のだ) (理由)
「アレインプー鳥も、皆で (地面に) 下りて害虫をつついて食べてしまうので...」(II-01.27)

(365) phlòʊɴ chɨ̀phʊ́ néiɴtháɴθâɴ nɔ́ bònáiɴjò
カレン 民族 新年 (題) 現在

phlòʊɴ chɨ̀phʊ́ θí mà **kòʊɴ** wê ʔá thánɴ jàʊ
カレン 民族 (複) する (強意) 多い (変化) (完)
「カレン人の新年祭は、最近 (大勢で) 集まってすることが多くなってきた」(III-11.21)

18.34　kóɴ ＜共同＞

kòʊɴ と同様に、動作を表す動詞に付き、その動作を大勢の複数人数で行うことを表す。kòʊɴ との違いは明らかではない。

(366) thʊ́　khəmlōʊɴ　chāmwɛ̄　ʔɔ́　nɔ́　bá　ɣɛ̂　**kóɴ**
鳥　群衆　すべての　いる　(題)　(当為)　来る
「すべての鳥の民衆たちは、毎日、来なければならなかった」(II-02.7)

(367) ʔəθíwê　bá　lì　**kóɴ**　wê　dài　chī　lɔ̂
3pe　(当為)　行く　(強意)　また　(婉曲)　(断定)
「彼らは皆、また出かけていかなければならないのだった」(II-02.15)

(368) ɣɛ̂　ʔɔ̀　**kóɴ**　wê　ʔáʔálé　chī　lɔ̂
来る　飲む　(強意)　たくさん　(婉曲)　(断定)
「(彼らは) やってきて (酒を) たくさん飲んだ」(IV-05.19)

18.35　xáʊ ＜共同＞

動作を少数で行うことを表すという点では、先に述べた ɕòɴ と同様である。ɕòɴ との違いは、xáʊ が「親密さ」を表すということである。主語は単数の場合と複数の場合とがある。

(369) lókwè　**xáʊ**
遊ぶ
「(私は幼いころ彼女と) 一緒に遊んだ」(V-04.34)

(370) mànphɔ̀klò　phʊ́khwâ　cɔ̀pìcì　ʔɔ́　**xáʊ**　phjā　dè　hə̀　phlé　lɔ̂
(人名)　息子　(人名)　いる　僧院　(共)　1PL　一緒に　(断定)
「マウンポークローの息子のチョーピーチーは私達と一緒に僧院に入った」(V-02.71)

(371) cɔ̀cɔ̀θéiɴ　lə-　ɣà　dè　θàʊkhʊ́　phʊ́mʊ́　tìɴtìɴkhàiɴ　ʔɔ́　**xáʊ**　ɣòɴ ...
(人名)　一　～人　(列挙)　軍人　娘　(人名)　いる　(継起)
「チョーチョーテインと軍人の娘のティンティンカインは一緒になって (=結婚して)...」(V-05.85)

18.36　chə̀ɴ

次の二つの用法がある。

18.36.1　chə̀ɴ(1)　＜協力＞

動作を協力して行うことを表す。主語は複数である。「(誰かを; 何かを) 手伝う」という意味を持つ動詞 màchə̀ɴの後部音節はほぼ確実にこの助詞と共通の起源を持つ。この màchə̀ɴ

を、動詞 mà「する」に助詞 chə̀ɴ が付いたものと解釈することはできない。理由は次の通りである。動詞助詞 chə̀ɴ は動詞の項の取り方を変更しない。従って、もし màchə̀ɴ を mà「する」に助詞 chə̀ɴ が付いたものだとすると、 màchə̀ɴ jə̀「私を助ける」から chə̀ɴ を取り除いても適格な形式が得られるはずだが、実際には mà jə̀ とは言わない (「私をいじめる」という意味では使えるが)。したがって、màchə̀ɴ は一つの独立した動詞だと考えたほうがよい。

(372) tàiɴ thánɴ **chə̀ɴ** wè thîkəmlə̂ɴ θí dè cɛ́ nɔ́ ɣòɴ ...
作る (完成) (強意) 井戸 (複) (共) 機械 (のだ) (継起)
「(彼らは) 協力して機械で井戸を作り...」(II-04.26)

(373) wé prànɴ **chə̀ɴ** təwâɴ phə̀ɴθà
掃く きれいな 村 道
「村の道を皆できれいに掃いてください」(I-sen.22)

(374) təwânphʊ́ θí khə́ɯɴ **chə̀ɴ** məlōɴcóɴ ɣòɴ jàʊ
村人 (複) 掘る 水路 終わる (完)
「村人たちは水路を掘り終わった」(I-sen.35)

(375) bá klɨ̀cɨ **chə̀ɴ** wê lɔ̂
(当為) 努力する (強意) (断定)
「(その民族の構成員すべてが) 努力しなければならないのである」(III-07.21)

(376) hə- bá pətòɴ **chə̀ɴ** kō ɣà dè lɔ̂
1pl (当為) 創造する (毎) ～人 (毎') (断定)
「私達は (子孫のためになることを) 皆が協力して作り出さなければならないのである」(IV-01.113)

(377) pə- mə- bá jʊ̄ ɣì **chə̀ɴ** kō ɣà dè lɔ̂
1pl (非現) (当為) 見る 良い (毎) ～人 (毎') (断定)
「私達は (カレンの文字を) 見守って良くしていなかければならないのである」(IV-10.16)

18.36.2 chə̀ɴ(2) ＜一斉＞

同一時間に大勢が同じ動作をする、あるいは、同じ状態を呈することを表す。

(378) thʊ́ khəmlōʊɴ θí ⊂ θàthó **chə̀ɴ** ⊃
鳥 民衆 (複) 喜ぶ

⊂ ʔɛ́dò **chə̀ɴ** ⊃ wê bênɔ́θò ʔəkhʊ́còɴ ...
愛する (強意) そのように (理由)
「鳥たちはそのように皆喜んだので...」(II-02.45)

(379) təmjâɴ **chɔ̀ɴ** bá ʔəθíʔə- θà kò ɣà dè nɔ́ lɔ̂
奇妙な (無意) 3pl 心 (毎) ～人 (毎') (のだ) (断定)
「みな一斉に驚いたのだった」(II-10.10)

▷ təmjâɴ θà は「驚く」という意味の慣用句。

(380) mūdʊ́màɴthɔ̂ ləphá lɔ̀ làɴ ʔáɴθɔ́ɴ chəkhlàiɴ
目上の人 (複) 語る (下方) 諭す 言葉

chôɴná **chɔ̀ɴ** kò ɣà dè lɔ̂
聞く (毎) ～人 (毎') (断定)
「(新年の祭りで村の偉い人たちが) 話す言葉を (村人達が) 一斉に聞くのである」(III-11.15)

(381) pə- lái jò ʔè lə- ɣəɯɴkhə̂ɴ |
1pl 文字 この (条件) (否) 堅固な

chə- mə- nītòʊɴ ʔáɴkɔ́ **chɔ̀ɴ** pə- lái jò
CHə (非現) 笑う 非難する 1pl 文字 この
「私達の文字がもし堅固なものでなければ、(他の民族が) 私達の文字を嘲り笑うだろう」(IV-10.14)

18.37　thàʊ ＜続行＞

動詞の表す動作を続行することを表す。「～し続ける」。

(382) bá klìcì **thàʊ**
(当為) 努力する
「引き続き努力しなければならない」

(383) ʔáɴ **thàʊ** θí nāɴ wâɴ dɔ̀
食べる 薬 (少数) ～回 (別個)
「もう 1 回続けて薬を飲みなさい」

(384) lɔ̀ **thàʊ** jāɴ phʊ́khwâ
語る ～しなさい 息子
「続けて話しなさい、息子よ」(V-03.115)

18.38　thâɴ ＜常時＞

動詞の表す事象が常時あるいはある期間ずっと生起することを表す。

(385) nâʔí làɴ **thâɴ**
鼻汁 下りる
「鼻汁がいつも垂れている」

(386) bá pàθətài **thâɴ**
(当為) 気を付ける
「いつも気を付けていなければならない」(004.506)

(387) ɣɛ̂ **thâɴ** klə̀ lɔ̂
来る いつも (断定)
「(彼は) いつも来てばかりいる」(003.941)

(388) jə̀ lə- ɣà mə- bá kè **thâɴ** lái
1SG 一 ～人 (非現) (当為) 書く 手紙

lé nə- ʔɔ́ klə̀ lɔ̂ jābò
(場) 2sg 所 いつも (断定) JABO
「私はあなたのところへいつも手紙を書かなければならないのですよ」(V-04.6)

(389) ʔɔ̀ **thâɴ** wê ʔəwê mó
飲む (強意) 3se 煙草

[$_R$ ʔɔ́ ʔə- cʊ́ʊ nī bòɴ chàʊ] nɔ́ chī lɔ̂
ある 3sg 手 二 ～本 間 (のだ) (婉曲) (断定)
「(彼は)2 本の指の間にはさんだ煙草をずっと吸っていた」(V-04.199)

18.39 pjáʊ ＜専念＞

ある期間に間断なく動作を行うことを表す。pjá とも発音する。動詞 pjáʊ「付いていく」に由来する。

(390) θàʊcà kò **pjáʊ** xîphàɴ
(人名) 呼ぶ (人名)
「タウチャーはフイパウンに呼びかけ続けた」(IV-04.448)

(391) jʊ̄ **pjáʊ** wê ʔə- phʊ́mʊ́ʊ nɔ́ kō nì dè lɔ̂
見る (強意) 3sg 娘 その (毎) ～日 (毎') (断定)
「(彼らは) 娘の世話を毎日ずっとしている」(IV-04.354)

(392) nīdò **pjáʊ** khléiɴθàʊcà dè ʔɛ́θwíwɔ̀ lɔ̀ chəkhlàiɴ nɔ́ ...
微笑みかける (人名) そして (人名) 語る 言葉 (題)
「(彼女は) クレイタウチャーにずっと微笑みかけた。そこでエートゥイーウォーの言った言葉は...」(IV-04.39)

(393) ʔəθíwêʔə- mʊ̄ khɔ̂
3pl 母 (対比)

chà **pjá** ʔə- phʊ́ châiɴ kàiɴ khɔ̀khɔ̂ |
縫う 3sg 子供 シャツ 布 一方では

thʊ́　wà　**pjá**　cháʊ　khɔ̀khɔ̂
揺らす　揺れる　揺りかご　一方では
「彼らの母は、子供のシャツを縫いながら、一方では揺りかごを揺らしいていた」(V-03.95)

(394) xîphàɴ　jʊ̄thwê　**pjáʊ**　thàiɴ　kā　nɔ́ |
(人名)　見つめる　(再度)　自動車　その

thʊ̄ɴ　ʔə-　làɴmā　lə-　chân
(限界)　3sg　消える　一　～段階
「見えなくなるまで、フイパウンはずっとその車を見つていた」(IV-04.343)

18.40　wê ＜強意＞

強意を表す。

(395) θàʊ　θà　**wê**　(=θàʊ　**wê**　θà)
移動する　(再帰)
「(彼は別の場所へ) 移動した」(001.3501)

(396) kəphjā　jò　kò　**wê**　lé　phlòʊɴ　khɔ̂　píθò　lɛ̀
もの　この　呼ぶ　(場)　カレン　側面　どのように　(疑)
「これはカレン語で何と呼びますか？」(002.260)

(397) lɔ̀　thá　wɛ̀　**wê**　ʔəwê　mə-　ɣɛ̂
語る　(保持)　(備え)　(強意)　3se　(非現)　来る
「彼は (私に) 来ると言っていた」(004.220)

(398) lé　ʔəwī　dáʔò　díθʊ́ɪ́　lə-　béiɴ
(場)　以前　(過去)　カエル　一　～枚

ʔɔ́　**wê**　lé　mèiɴlá　klà　nɔ́　lɔ̂
いる　(場)　森　間　(のだ)　(断定)
「昔、カエルが 1 匹、森の中に住んでいた」(III-03.3)

(399) mʊ́ɪmʊ́ɪ　pətháʊ　mèiɴ　**wê**　ʔə-　chəkhlàiɴ
(人名)　とめる　(自然)　(強意)　3sg　言葉
「ムームーは話すのをやめてしまった」(V-04.142)

wê は、しばしば、可能を表す分離型動詞連続の V1 に付いて、「他の場合はともかくとして V1 が表す事象については可能である」ということを表す。

(400) ná　**wê**　θí
聞く　できる
「(外国語を) 聞いて分かることは分かる (=読んだら分からないかもしれないが、聞いた場合には分かる)」(001.3503)

(401) ʔánˢ **wê** θí mà lɛ̂
食べる できる (非常) (疑)
「ずいぶん食べられるものだね (=食べること以外はともかくとして、食べる能力は高いんだね)」(004.248)

(402) ʔánkèiˢ ɣɛ̂ thàiˢ **wê** bə́ɯˢ ʔé chī
頼む 来る 帰る 勇敢な (否) (婉曲)
「帰る許可をもらう勇気がなくなってしまった (=帰る許可をもらうということに関しては、勇気がなくなった)」(V-04.31)

18.41 wêdá ＜強意＞

様々な動詞に付き、強意を表す。wê に似ているが、wêdá は格式張った文体で出てくることが多い。口調を整えるための (euphonic) 働きもあるかと思われる。

(403) thî lé mâchəmài phònˢ nɔ́ ʔəljɔ̄ ɣânˢ **wêdá** lɔ̂
水 (場) 海 中 (題) 味 塩辛い (断定)
「海の中の水は味が塩辛い」(I-02.8)

(404) təphɯ̂wɛ̄ nī ɣà lì **wêdá** lé ʔə- phā càˢ ʔò lɔ̂
きょうだい 二 ～人 行く (場) 3sg 父 小屋 (遠方) (断定)
「姉と弟の二人は父の小屋へと向かった」(I-06.35)

(405) pə- təwânˢ nɔ́ mwɛ̄ **wêdá**
1pl 村 (題) (繋)

pəmàcháiphɔ́ dè pəmàklòphɔ́ θí ʔə- təwânˢ lɔ̂
稲作民 (列挙) 沖積地稲作民 (複) 3sg 村 (断定)
「私達の村は農民の村です」(I-10.13)

18.42 tɛ̀ ＜甚だしさ＞

程度の甚だしさを表す。tɛ̀tɛ̀ あるいは tətɛ̀ とも言う。タイ語 /thɛ́/「本当の」と語源的に関係がある可能性がある。

(406) mə- bá pàdɔ́ jàʊjánˢ **tɛ̀** lɔ̂
(非現) (当為) 尊敬する 敬う (断定)
「(目上の人は) 敬わなければならない」(III-10.6)

(407) mwɛ̄ **tɛ̀** lɔ̂
(繋) (断定)
「まさにその通りだった」(III-12.22)

(408) thɔ́ ʔəlɛ̂iˢ ká **tɛ̀** ʔə- θà ...
鳥 コマドリ 難しい 3sg 心
「コマドリは大変恥ずかしい思いをして...」(IV-07.51)

(409) mwē　phlòʊɴ　chɨ̀phʊ́　cʊ́ʊ́lāɴ　ɣìʔwà
(繋)　カレン　民族　作品　素晴らしい

hə-　lɔ̀　kɛ́　**tɛ̀**　təɕā　lɔ̂
1pl　語る　可能な　確かに　(断定)
「カレン民族の一級の民芸品だと、確かに言うことができる」(V-02.146)

(410) ʔɛ́dʊ́　**tɛ̀**　cɔ̂　ʔəkhʊ́còɴ ...
愛する　兄　(理由)
「あなたのことをとても愛しているから...」(V-05.70)

(411) ⊂ máʊ　mjâ⊃　⊂ máʊ　**tətɛ̀** ⊃
快適な　非常に　快適な
「非常に楽しい」(V-04.53)

18.43　mātɛ̀ ＜甚だしさ＞

様々な動詞に付き、程度の甚だしさを表す。

(412) ʔɔ́　**mātɛ̀**　jūɲjèiɴ
いる　静かな
「大変静かだった」(003.807)

▹ この文で mātɛ̀ は ʔɔ́ の後に付いているが、意味的には jūɲjèiɴ を修飾している。

(413) ʔɔ́　**mātɛ̀**　wê　xwîɕàʊxwîɕàʊ
いる　(強意)　すがすがしく
「とてもすがすがしい気分だった」(V-04.58)

(414) nə-　màbò　màchèɴ　jə̀　ʔá　**mātɛ̀**　ʔəkhʊ́còɴ |
2sg　助ける　助ける　1SG　多い　(理由)

chə-　khōʊɴ　chə-　tà　dʊ́　**mātɛ̀**　chī　lɔ̂
CHə　感謝する　CHə　感謝する　大きい　(婉曲)　(断定)
「大いに手伝ってくれて大変ありがとうございます」(012.31)

(415) ʔəθí　ɣéiɴ　kɛ́　**mātɛ̀**　hòtɛ̀　lɔ̂
3pl　家　成る　ホテル　(断定)
「彼らの家はまるでホテルのようだ」

▹ kɛ́ mātɛ̀　～ は「まるで ～ のようだ」という意味を表すイディオム。

18.44　dáchəθà ＜詠嘆＞

様々な動詞に付き、詠嘆を表す。dáθà とも発音される。あるいは dáchə̀ とも言う。

(416) bádòɴ nɔ́ ʔəwê ʔɔ́ máʊ **dáchəθà** lɔ̂
似ている (題) 3se いる 快適な (断定)
「彼は健康そうです」(012.39)

(417) bádòɴ mʊ̄ nī thàiɴ θí **dáchəθà** lɔ̂
似ている (非現) 得る (再度) できる (断定)
「(盗まれた物は) また帰ってくることでしょう」(015.11)

(418) ʔè lə- mwɛ̄ bá | lé ɣàmʊ́ʊ́ mənmʊ́ʊ́nàɴ xîphàɴ ɣéiɴ ʔò
(条件) (否) (繋) (否') (場) おばさん 姪 (人名) 家 (遠方)
θí mənkhwâ thàiɴ mî θí **dáθà** lɔ̂
(類似) 甥 帰る 寝る できる (断定)
「そうでなければ、私の姪のフイパウンの家に、あなたが泊まってもいいんですよ」(IV-04.139)

(419) cɔ̂khléiɴ θí ʔɔ́ máʊ chônkhlâiɴ **dáθà** ɣìɣìbábá lɔ̂
(人名) (類似) いる 快適な 健康な 良く (断定)
「チョークレインもたいへん元気です」(IV-04.373)

(420) bênɔ́θò cɔ̂khléiɴ θíjâ **dáθà** lɔ̂
そのように (人名) 知る (断定)
「そのように僕は理解している」(IV-04.463)

(421) nəθí mə- ʔɔ́tháʊ báθà jə- ɣéiɴ θí | nī **dáchə̀** lɔ̂
2pl (非現) 泊まる (欲求) 1sg 家 (類似) 可能な (断定)
「あなた方が私の家に泊まりたければ、それも大丈夫ですよ」(017.22)

(422) jə- chɨ̀ jə- chá ʔəphânkhʊ́ [$_R$ làɴ bá jə̀] mjàɴcēiɴʔətà
1sg 民族 1sg 民族 上 下りる (不抗) 1SG 責務
ləphá ɣònthaʊ **dáchə̀** lɔ̂
(複) 終わる (断定)
「私の民族に対しての、私に課せられた責任は果たしたのです」(V-04.214)

(423) mìphɔ̂ lɔ̀ jə̀ θí lɔ̀tháʊ **dáchə̀** lɔ̂
(人名) 語る 1SG (類似) 的を射る (断定)
「ミーポーの言っていることも、的を射ている」(V-05.48)

18.45 chóɴ < 強制 >

動作を無理に行うことを表す。動詞 chóɴ「強い」に由来する。「無理やり ~ する」。

(424) kò **chóɴ** ʔəwê
呼ぶ 3se
「彼を無理に連れていった」

(425) phâθúɣɛ̀　phí　**chóɴ**　ʔəkhʊ́còɴ |
(人名)　与える　(理由)

bá　mànī　mèiɴ　wê
(当為)　受け取る　(自然)　(強意)
「パートゥーゲーが無理やり与えたので (彼女は) 受け取った」(V-04.114)

18.46　báθà ＜欲求＞

欲求を表す。「～ したい」。wáθà とも発音される。動詞 báθà「欲する」に由来する。この助詞が使われたとき、動詞の表す事象がいかなる時点のものであれ、しばしば動詞の前に非現実法を表す動詞助詞 mə- が置かれる。

(426) mə-　chíchâ　**báθà**　chī　ʁà
(非現)　排尿する　(婉曲)　(疑)
「おしっこしたいか？」(004.80)

(427) nə-　ʔè　mî　**wáθà** |　mî
2sg　(条件)　寝る　寝る
「寝たければ寝なさい」(002.583)

(428) mə-　ʔɔ́　**báθà**　bê　ʔəθí　ʔɔ́　θò　nāɴmlái　nà
(非現)　いる　(比定)　3pl　いる　(比定')　瞬時　～だなあ
「少しだけでも彼らのようになりたいものだな」(V-03.64)

(429) nə-　mə-　ʔánlɔ̂　**báθà**　jà　dài　ʁá
2sg　(非現)　嘘をつく　1SG　また　(疑)
「君はまた私に嘘をつきたいのか？」(V-05.40)

(430) jə-　θà　ɕáiɕáʊ |　lì　**báθà**　ʔé
1sg　心　混乱した　行く　(否)
「いやになった。行きたくない」(003.155)

(431) dà　ʔáɴlūū　**báθà**　ʔà　thî　ʔé
(使役)　浴びる　3SG　水　(否)
「(私は彼が風邪をひいているので) 彼に水浴びをさせたくない」

(432) ʔɔ́lənìmūū　chəʔàʊ　mə-　θʉ́jâ　**báθà**　phā　chəkhlàiɴ
ある日　猿　(非現)　知る　父　言葉
「ある日、その猿は父の言葉 (の意味を) 知りたくなった」(III-12.18)

(433) phlòʊɴ　chɨ̀phʊ́　θí　ʔè　dʊ́ɕā　**báθà**　nɔ́ |
カレン　民族　(類似)　(条件)　発展する　(題)

bá　klɨ̀cɨ　jʊ̄　láipərâɴ　nɔ́　lɔ̂
(当為)　努力する　見る　新聞　(のだ)　(断定)
「カレン人も、もし発展したいのなら、努力して新聞を読まねばならない」(III-07.25)

18.47 thá ＜保持＞

動詞が表す事象の生起によって生じた何らかの結果を保持することを表す。「～ しておく」「～ してある」。dá とも発音されるので、後述する動詞助詞 dá と区別が難しいことがある。ビルマ語の動詞 /thá-/「置く」の借用か？ポー・カレン語には thá という音形の動詞はない。

(434) jə- chônmóɴ **thá** jə- mə- lì khāɴ pəjàɴ
1sg 考える 1sg (非現) 行く 国 ビルマ
「私はビルマに行こうと考えている」

(435) nə- láiʔàʊ nɔ́ mànáiɴ **thá** wɛ̀
2sg 本 (題) メモする (備え)
「ノートにメモしておきなさい」

(436) jʉ̂jā **thá** wɛ̀ jàʊ
慣れている (備え) (完)
「もう慣れている」

(437) chəʔàʊ phóɴ **thá** lâɴkəthá ʔə- kháɴ nɔ́ xáixái chī lɔ̂
猿 持つ ハゲワシ 3sg 足 その しっかりと (婉曲) (断定)
「猿はハゲワシの足をしっかりと持っておいた」(III-12.26)

(438) kəlɨ̀ hə- bá θí **thá** chɨ̀ lái nɔ́ lɔ̂
～するべき 1pl (当為) できる 民族 文字 (のだ) (断定)
「私たちは (カレン) 民族の文字を習得しておくべきである」(IV-09.37)

(439) ʔáɴphôɴ **thá** θə̂ɴ nɔ́ lɛ̂
料理する おかず 何 (疑)
「何のおかずが作ってあるのか？」(V-03.136)

(440) chāmwɛ̄ chəʔáɴchəʔɔ̀ ʔɔ́ nɔ́
すべて 食べ物 ある (題)

bá kà bài **thá** dè ʔəkhʉ́khláʊ θí nɔ́ lɔ̂
(当為) かぶせる ふさがる (共) 蓋 (複) (のだ) (断定)
「すべての食べ物は蓋で覆いをしておかなければならない」(II-12.17)

(441) kèɣɔ̀khó jə- ʔè càʊ nə̀ nɔ́ | pəxá **thá** ʔèkhə̂ɴ
明日 1sg (条件) 引く 2SG (題) ふんばる しっかり
「明日おれがおまえを引っぱったら、しっかりふんばっておいてくれ」(III-03.26)

(442) [$_R$ chɨ̀ phîphʉ̂ləwī khlòthɔ̄ làɴ **thá**] cʉ́ʉ́lāɴ ɣì
民族 祖先 以前 残す (下方) 技術 良い
「(カレンの) 祖先が残しておいてくれた良い技術」(IV-01.118)

thá は他動詞に付くことが多いが、次のように自動詞に付くこともある。

(443) kòkəjàɴ　khʊ́dà　jò　mənī　chɨ̀phʊ́　θí　kō　chɨ̀　dè　nɔ́
地球　表面　この　人間　民族　(複)　(毎)　民族　(毎')　(題)

ʔəθí　láilɛ̄　dè　chəkhlàiɴ　nɔ́　ʔɔ́　**dá**　wɛ̀　cháʊcháʊ　lɔ̂
3pl　文学　(列挙)　言葉　(題)　ある　(備え)　代々　(断定)
「この世界においてはどの民族も文学と言葉は代々受け継がれているものである」(IV-06.3)

18.48　wɛ̀ ＜備え＞

きたるべき何らかの事態に対する備えとして、動詞が表す事象の生起によって生じた結果を持続させることを表す。thá と似ているが、thá には何かに備えるという意味合いはない。thá と共起することもある。「前もって ～する」「あらかじめ ～する」。

(444) lɔ̀pərə̂ɴ　thá　**wɛ̀**　xɔ̄
知らせる　(保持)　XO
「あらかじめ知らせておいてください」

(445) kəlôɴ　mî　**wɛ̀**
急ぐ　寝る
「急いで寝ておきなさい」

(446) mə-　ʔáɴphôɴʔáɴ　**wɛ̀**　mì
(非現)　炊く　ご飯
「(帰ってすぐ食べられるように) ご飯を作っておきましょう」(002.63)

(447) cāɴbò　jə-　lɔ̀　**wɛ̀**　nə̀　jā
だから　1sg　語る　2SG　JA
「だから言っておいたでしょう？」(V-03.128)

(448) jʊ̄　**wɛ̀**　ʔēthî　phʊ́lì　ʁé
見る　正確に　若者　～よ
「若者たちよ、しかと見ておきなさい」(V-02.96)

(449) jə-　mə-　lì　**wɛ̀**　xɔ̄
1sg　(非現)　行く　XO
「私、先に行っておくね」(003.778)

(450) chəchâ　ʔè　ʔɔ́ |　pə-　bá　bjàɴ　**wɛ̀**　lɔ̂
病気　(条件)　ある　1pl　(当為)　治す　(断定)
「病気があれば、治しておかなければならない」(I-sen.91)

(451) pəphlòʊɴ chɨ̀phʊ́ jò lái ʔɔ́ **wɛ̀** jàʊ lànâɴ θí ...
カレン 民族 (題) 文字 ある (完) (逆接) (類似)
「カレン民族には前から文字はあるのだけれども...」(IV-10.4)

(452) [$_R$ pə- θí thá **wɛ̀**] pə- lái lə- cóɴ nɔ́
1pl できる (保持) 1pl 文字 一 ～箇所 (題)

θí mə- kɛ́ thánɴ wê chəplɔ̀plè lɔ̂
(類似) (非現) 成る (完成) (強意) 無駄 (断定)
「習得しておいた文字も、無駄になってしまうだろう」(IV-01.43)

18.49 wī < 先行 >

wì とも発音される。動詞が表す事象の生起が他の何らかの事象の生起よりも早いことを表す。「先に ～する」。下に例を挙げる。

(453) kəlà lə- ʔánɴ mì dài bá |
時 (否) 食べる ご飯 まだ (否')

θîjà khwái **wī** nə- cʊ́ɪ nɔ́
洗う (徹底) 2sg 手 その
「ご飯を食べる前に、あなたのその手を洗いなさい」(001.3519)

(454) kā ʔəjò lə- phlóʊɴ dè ʔəjò lə- phlóʊɴ
自動車 これ 一 ～個 (列挙) これ 一 ～個

mə- cáiɴ lánɴ **wī** khɔ̀khɔ̂ phlóʊɴ lɛ̂
(非現) 出る (外方) どちら ～個 (疑)
「こちらの車とこちらの車、どちらが先に出ますか？」(001.1770)

(455) pə- mə- dá bá **wī** lé [$_C$ thîlápjàʊphʊ́
1pl (非現) 見える (無意) (補) 泡

θí ɣɛ̂ kɛ́ thánɴ] nɔ́ chī lɔ̂
(複) 来る 成る (完成) (のだ) (婉曲) (断定)
「(湯を沸かすと) まず泡ができるのが見える」(II-09.2)

(456) nâɴ mə- kò pjà làɴ **wī** ɣàmʊ́ɪ mèiɴ ʁɔ̄
姉 (非現) 呼ぶ (提示) (下方) おばさん 名前 XO
「まず、おばさんの名前を言いますね」(IV-04.117)

(457) mə- bá lì **wī** lé xîphâɴ ʔɔ́ nāɴ thí
(非現) (当為) 行く (場) (人名) ところ (少数) ～回
「まずちょっとフイパウンのところに行かなければならない」(IV-04.422)

(458) chəlé　khì　θí　jò　hə-　tài　**wī**　ʔəméjâ　θí　ɣì　ʔé
(強調)　時代　(複)　この　1pl　出る　前　(類似)　良い　(否)
「今の時代は、(流行を追って) 先頭に立つのも良くない」(V-05.59)

もし、誰か (何か) より早いということが言いたければ、比較の対象を表す名詞句を、比較を表す動詞助詞 dá を用いて導入する必要がある。次の例を見よ。

(459) jə-　ɣɛ̂　wī　**dá**　ʔəwê　dài
1sg　来る　(比較)　3se　まだ
「私は彼より早く来た」(001.3515)

wī は、命令を表す文において、使われることがよくある。「他のことをするよりもまずはこのことをせよ」ということを表すのだと思われる。しかし、実際には、丁寧な命令を表しているようにも見える。下に例を示す。これらの wī が元来の意味を保っているのか、それとも失ってしまっているのかは不明である。

(460) ʔɔ́pwài　**wī**
休む
「どうぞ休んでください (注:来客に対して言う決まり文句)」

(461) ʔɔ́khò　**wī**　nānmlái
待つ　一瞬
「ちょっと待ってください」

(462) plɛ̀tɔ̀　**wī**　cɔ̂khléiɴ
許す　(人名)
「僕 (=チョークレイン) を許してくれ」(IV-04.335)

18.50　kwè ＜遊び＞

動詞が表す動作を冗談や遊び心ですることを表す。「～して遊ぶ」「冗談で～する」。語源的には動詞 lókwè「遊ぶ」と関係がある。lókwè そのものが、今では意味を失ってしまった形態素 ló に kwè が付いたものである可能性がある。

(463) mwɛ̄　lɔ̀　**kwè**　dālɔ̂
(繋)　語る　(断定)
「からかったんだよ」(002.995)

(464) ʔɔ́lənìmūɪ　khlài　nɔ́　lì　xáiɴ　**kwè**
ある日　亀　(題)　行く　めぐる

lé　kò　phàdʊ́　phəɴ　nɔ́tā ...
(場)　森　大きな　中　(前提)
「ある日、亀が大きな森の中を散歩していると...」(II-11.4)

(465) chə- xáiɴ wèiɴwàɴ **kwè** wāɴkəpɔ̀ ʔɔ́ wê nɔ́tā ...
CHə めぐる ぶらつく 境内 いる (強意) (前提)
「(その仏塔は) 境内を散策する人が多く、...」(V-06.41)

(466) ʔáɴ khwái mì θɛ̀ɣòɴláʊ lɔ̀thàiɴ **kwè** chə̀
食べる (徹底) ご飯 (継起) しゃべる CHə
「ご飯を食べてから、おしゃべりを楽しんだ」(IV-04.149)

(467) mə̀ɴkhwâ θɛ̀ ləɣájò thàiɴ mî **kwè**
甥 (複) 今晩 帰る 寝る

lé ɣàmʊ́ʊ ɣéiɴ ʔò kō ɣà dè bá jā
(場) おばさん 家 (遠方) (毎) ～人 (毎') 正しい JA
「あなた達みな、今夜はおばさんの家に遊びにきて泊まれますか?」(IV-04.138)

18.51 mábá ＜過誤＞

máwá, məwá とも発音される。また、má とも言う。動作を不注意や過ちで行ったことを表す。意志動詞に付いた場合には無意志化する。「あやまって ～ する」。

(468) jə- ʔáɴ **máwá** nə- kʊ́
1sg 食べる 2sg 菓子
「あなたの菓子を間違って食べてしまった」

(469) ʔəwê ʔáɴ **məwá** châɴdí
3sg 食べる 鶏卵
「彼は卵を間違って食べた (=「卵にあたった」の意)」

(470) mɔ̄khó lì xwè ʔáɴ **má** θìθá
さっき 行く 買う 食べる キンマ
「さっき不注意にもキンマを買って食べてしまった」(IV-04.183)

18.52 bá

動詞 bá「当たる、ぶつかる」に由来する。wá とも発音される。下に挙げるような五つの用法がある。

18.52.1 bá(1) ＜無意志＞

多く意志動詞に付き、動詞の表す動作を無意志的に行うことを表す。「うっかり ～ する」「つい ～ する」「思わず ～ する」。

(471) cɔ̀ʔɛ́θà nɔ́ kàɴkà **bá** nə- mèiɴ chī
(人名) (題) 噂する 2sg 名前 (婉曲)
「チョーエーター氏もついついあなたの名前を口にします」(016.18)

(472) pàdʊ́　jàʊjáɴ　**bá**　nə-　phâɴkhʊ́　θɛ̀ɣòɴ |
尊ぶ　敬う　2sg　上　(継起)

ʔáɴʔàʊ　**bá**　nə̀　châ　mā
ほめる　(非常)　(非常)
「あなたを思わず尊敬してしまうし、ついほめてしまいます」(017.11)

(473) phlòʊɴ　mə-　chônmóɴ　**bá**　nə̀　phlòʊɴ　chɨ̀phʊ́　lə-　ɣà　lɔ̂
人　(非現)　考える　2SG　カレン　民族　一　～人　(断定)
「人はあなたをカレン民族だと考えてしまうでしょう」(017.13)

(474) jāiɴ　**bá**　wê　díθʊ́ɪ　nɔ́　lɔ̂
踏む　(強意)　蛙　(のだ)　(断定)
「(虎は) うっかり蛙を踏んでしまった」(III-03.7)

(475) jə-　klɨ́　jʊ̄　**bá**　xāxòɴ　lə-　thí
1sg　横目で見る　見る　周囲　一　～回
「私は思わず周囲を横目で見た」(V-03.31)

(476) thə̂ɴxá　**bá**　wê　lé　thʊ́chànchîphʊ́　ʔə-　θwî　nɔ́ |
蹴る　(強意)　(強調)　(鳥の名)　3sg　巣　(前提)

lànxōɴlànçâɴ　khwái　wê　ɣòɴ ...
崩れる　(徹底)　(強意)　(継起)
「彼はチャンチー鳥の巣をうっかり蹴飛ばしてしまったので、(巣は) 崩れてしまい...」(II-02.23)

(477) ʔē　mwē　nə-　thàʊ　nàiɴ　**bá**　nə-　nâ　chī　càibò
(条件)　(繋)　2sg　拭く　(再度)　2sg　鼻　(婉曲)　(条件')

ʔəxā　θíləphá　mə-　báɣá　nī　nə̀　chī　lɔ̂
菌　(複)　(非現)　伝染する　(執拗)　2SG　(婉曲)　(断定)
「(他人が鼻を拭いたハンカチで) つい鼻を拭くと、菌が伝染するのである」(II-13.15)

＜無意志＞を表す bá は無意志動詞に付くこともある。この場合の無意志動詞は、心理や感情を表す動詞であり、その心理や感情が理性では抑えられないことを表す。

(478) kətɔ̀　**bá**　chī
心配する　(婉曲)
「心配される」(009.33)

(479) θàjʊ̄ɪ　tháɴ　**bá**　ʔə-　θʊ́　kəchâɴ　nɔ̂　lɔ̂
懐かしむ　(変化)　3sg　友　象　(のだ)　(断定)
「(ライオンは) 友人の象のことが懐かしくなってきた」(I-04.27)

(480) cɔ̀láɪnθêɪn θɛ̀ chərâ θànkhâ lâɪnphʊ́ θɛ̀ nɔ́
(人名) (複) 先生 僧侶 (地名) (複) (題)

nɔ́ thánɴ **bá** nə̀ kò ɣà dè lɔ̂
思い出す (変化) 2SG (毎) ～人 (毎') (断定)
「チョーライテインやラインプーの僧院長たちはあなたのことが思い出されるそうです」(008.14)

18.52.2 bá(2) ＜不可抗力＞

様々な動詞に付き、動詞の表す事象の生起が不可抗力的であることを表す。「～することになってしまう」。例えば、ʔánɴ bá (食べる-bá) は、食べたいか食べたくないかに関わらず、食べるという動作を行う状況が生じることを示す。この bá は、一見、「義務」あるいは「機会」といった意味を表しているようにも見えることが多い。実際、日本語に訳した場合、「～しなければならない」と訳せる場合があり、これは「義務」を表しているように見え、一方「～することができる」と訳せる場合は「機会」を表しているように見える。しかし、これは日本語から見るとそのように見えるだけなのであって、あくまでも bá は不可抗力的ということを表しているのである。

(481) jə- dá **bá** nə̀ | jə- θà xwî
1sg 会う 2SG 1sg 心 軽い
「あなたにお会いできて嬉しいです」

(482) mə- thàɪn làɴ **bá** ʔəkhâ bêθí lɛ̂
(非現) 帰る (下方) 時 どのような (疑)
「いつ帰らなければならないのか」(IV-04.15)

(483) hə- mə- lò thàɪn **bá** ʔə- chəkhōʊɴchətà dè nɔ́ lɛ̂
1pl (非現) 返す (返答) 3sg 恩 (共) 何 (疑)
「私たちは彼女の恩をどうやって返すべきだろうか」(IV-04.151)

(484) cɔ̀phâθʊ́ɣɛ̀ lə- ɣà ʔɔ́ **bá** khāɴ jàɪn lānânɴ ...
(人名) 一 ～人 いる 国 遠い (逆接)
「チョーパートゥーゲーは遠い国に住んでいなければならないのだけれども...」(V-04.34)

(485) lé təwânɴ phɔ̀ɴ nɔ́ təwânphʊ́ θíləphá dòɴ **bá** wê θài ʔé
(場) 村 中 (題) 村人 (複) 作る (強意) 酒 (否)
「村の中で村人は酒造を行ってはならない」(I-10.11)

(486) pə- chɨ̀phʊ́ ʔè thòɴ **bá** chənà ləɣàɣà
1pl 民族 (条件) 着く 災難 誰か

ʔánkhônthəbà chə̀ɴ lóθà kō ɣà dè
協力する (皆) (相互) (毎) ～人 (毎')
「我々の民族が誰か災難に遭っていたら、みな協力してほしい」(IV-01.89)

(487) chəchâ　ʔè　jái　nɔ́ |　pə-　bjàɴ　**bá**　ká　wê　lɔ̂
病気　(条件)　久しい　(題)　1pl　治す　難しい　(強意)　(断定)
「病気が慢性化すると、治すことは難しい」(I-sen.92)

(488) lái　nɔ́　ɣə̂ɴ　**bá**　wê　klà　lɔ̀　chə̀　bênɔ́θò　ɣòɴ ...
トビ　(題)　聞こえる　(強意)　烏　語る　CHə　そのように　(継起)
「トビには烏がそのように言ったのが聞こえて...」(I-01.14)

(489) jə-　ʔè　thàiɴ　**bá**　dòʊɴ　thəʔàɴ |
1sg　(条件)　帰る　町　(地名)

ʔəθí　ʔáɴcà　nə-　pərə̂ɴʔəcóɴ　kò　blàɴ　dè　chī　lɔ̂
3pl　尋ねる　2sg　消息　(毎)　～回　(毎')　(婉曲)　(断定)
「私がパアンに帰る機会があると、皆にあなたの消息を尋ねられます」(008.12)

(490) jə-　mə-　ʔáɴ　**bá**　jə-　chá　blɛ̀blɔ́　lɔ̂
1sg　(非現)　食べる　1sg　餌　腹一杯の　(断定)
「私は餌を腹一杯食べることができるだろう」(I-09.17)

(491) bê　mə-　nī　**bá**　thî　lə̂ɴlə̂ɴxwèxwè　θò ...
(目的)　(非現)　得る　水　十分に　(目的')
「水が十分に得られるように...」(II-06.13)

(492) lì　**bá**　wê　ɕúɕúmáʊmáʊ　kò　blàɴ　dè　chī　lɔ̂
行く　(強意)　平和に　(毎)　～回　(毎')　(婉曲)　(断定)
「毎回、平和に旅ができています」(III-06.16)

18.52.3　bá(3)　＜経験＞

経験を表す。

(493) nəθí　cáiɴ　**bá**　xèiɴxêiɴlé　jàʊ
2pl　歩く　広く　(完)
「あなた方は既に色々なところに行ったことがある」(009.13)

(494) nə-　thòɴ　**bá**　wɛ̀　jàʊ　mwɛ̄　jā
2sg　着く　(備え)　(完)　(繋)　JA
「あなたはもう前に行ったことがありますよね？」(001.649)

(495) chəlé　phlɔ̀θánā　nɔ́　mwɛ̄　nəθí
(強調)　ゴキブリ　(題)　(繋)　2pl

jʊ̄　**bá**　thìthîchàchà　blàɴblàɴ　jàʊ　chī　ʁá
見る　正確に　何度か　(完)　(婉曲)　(疑)
「ゴキブリについてですが、あなた方はじっくりと見たことが何度かありますか？」(II-06.3)

(496) dá **bá** nàN phə̂N ʔé
見える (少数) ～回 (否)
「1 度も見たことがない」(002.436)

(497) kəbàN θə̂N thə̂N θí hə- lə- tháʊ **bá** nàN phə̂N dài
船 三 ～階 (類似) 1pl (否) 乗る (少数) ～回 まだ
「3 階建ての船なんて 1 度も乗ったことがないのだから」(IV-04.13)

18.52.4 bá(4) ＜判断の基準点の導入＞

状態動詞に付き、直後の名詞句の指示対象が、判断の基準点 (すなわち「～にとって」) であることを表す。判断の基準点を表す名詞句を目的語として導入する働きを持つ。例えば、ɣì bá ʔə̀ (良い-bá-3SG)「彼にとっては良い」とあれば、「良い」と判断するための基準点は ʔə̀「彼」である。「～にとっては... だ」。

(498) máʊ **bá** ʔə̀ lə- blàN
心地よい 3SG 一 ～回
「一度、彼にとっては楽しかった」(V-04.31)

(499) [$_R$ mə- ʔwí **bá** ʔə- nò] θə̂N ɣì θə̂N bá
(非現) 美味な 3sg 口 おかず 良い おかず 正しい
「彼の口に合いそうな良いおかず」(II-14.7)

(500) lé [$_R$ mə- máʊ **bá** ʔəθí θà] ∅ nɔ́
(強調) (非現) 心地よい 3pl 心 (題)

lòN pjáʊ wêdá lɔ̂
追う 従う (強意) (断定)
「彼らの心に楽しく思えること (ばかり) 追いかけてしまうのだ」(IV-03.27)

(501) phɔ̂ʔwà ʔɔ́ bá dè wɛ̄cɔ̀ nɔ́ |
(人名) いる (不抗) (共) 兄 (前提)

máʊ **bá** phɔ̂ʔwà θà cwá mā lɔ̂
心地よい (人名) 心 (非常) (非常) (断定)
「ポーワー (=私) はあなたと一緒にいることができると、とっても楽しい (=そのことがポーワーの心には大変心地よい」(V-01.10)

(502) làláʊ mūnì bá ʔáN dè jáʔʊ́thî jò
月末 日 (当為) 食べる (共) 魚醤 (題)

təmjâN **bá** nə̀ ʁâ
奇妙な 2SG (疑)
「月末 (の給料日) に魚醤 (だけ) で (ご飯を) 食べることが、あなたにとってはそんなに奇妙なのですか？」(V-03.141)

18.52.5　bá(5)　＜催促＞

命令や勧誘を表す文に用いて、催促を表す。

(503) nə-　jū　**bá**　chəmʉ́ʉ　lə-　ɣà　nɔ́
2sg　見る　女　一　～人　あの
「お前、あの女を見てみろ」(IV-04.42)

(504) lɔ̀　θʉ́jâ　**bá**　lā　wɛ̄cɔ̀
語る　知る　(願望)　兄
「僕に話して教えてくれ」(V-01.9)

(505) θànánɴ　**bá**　phɔ̂ʔwà　xì　wɛ̄cɔ̀
忘れる　(人名)　(禁止)　兄
「私 (=ポーワー) のことを忘れないで、お兄さん」(V-01.12)

(506) pàpî　**bá**　jə̀　ləxì
見下す　1SG　(禁止)
「私を見下さないでくれ」(III-03.12)

(507) θà　ɣɛ̂　thánɴ　**bá**　nânɴ　xì　ʁɔ̄
心　来る　上がる　姉　(禁止)　XO
「私に立腹しないで」(IV-04.205)

▷ θà ɣɛ̂ thánɴ は「怒る」という意味の慣用句。

(508) ʔè　mwɛ̄　bònɔ́ |　lì　lɔ̀　**bá**　wɛ̀　kəchânɴ　bònáinjò　lɔ̂
(条件)　(繋)　そのような　行く　語る　(備え)　象　今　(断定)
「そういうことなら、これから象に話しに行こうじゃないか」(III-03.18)

(509) nə-　ʔē　dá　chī　dʉ̀ʉ |　lɔ̀pərə̂ɴ　**bá**　ʔəwêθí
2sg　(条件)　会う　(婉曲)　(条件')　知らせる　3PL
[$_C$ jə-　nɔ́　thánɴ　bá　ʔəθí　kò　nì　dè]
1sg　覚えている　(変化)　3PL　(毎)　～日　(毎')
「もし彼らに会ったら、私が彼らを毎日思い出していると伝えてください」(012.9)

18.53　nī

動詞 nī「得る」に由来する。下に挙げるような 4 種類の用法がある。

18.53.1　nī(1)　＜努力＞

主に動作動詞に付き、努力を伴ってその動作を行うことを表す。「努力して～する」「わざわざ～する」「一所懸命～する」「わざわざ～する」。

(510) dá　lʊ́　**nɪ̄**　wêdá　tā ...
見える　(学習)　(強意)　(前提)
「(努力して) 見て学び...」(II-04.7)

(511) pə-　bá　klìcì　ʔánxʊ̂ɪ　⊂ màlʊ́⊃　⊂ màdòɴ⊃　**nɪ̄**　wêdá　lɔ̂
1pl　(当為)　努力する　探す　学ぶ　真似る　(強意)　(断定)
「私たちは努力して学ばなければならない」(I-05.4)

(512) chônmóɴ　wê　mə-　tàiɴ　**nɪ̄**
考える　(強意)　(非現)　作る

khlî　nàɴ　phlóʊɴ　nɔ́　chī　lɔ̂
舟　(少数)　～個　(のだ)　(婉曲)　(断定)
「舟を 1 艘作ってやろうと考えた」(I-08.5)

(513) chəʔánphônthîláchā　θíləphá　khə́ɯɪɴ　làɴʔə́ɯɪɴ　**nɪ̄**　lé
塩づくり職人　(複)　掘る　へこむ　(場)

mâchəmàinàiɴ　ʔò　ɣòɴ ...
海岸　(遠方)　(継起)
「塩づくり職人は、海岸に (穴を) 一生懸命掘り...」(II-03.16)

(514) ʔəθí　ʔɔ́khò　**nɪ̄**　wê
3pl　待つ　(強意)

chəchòɴ　thî　xwɛ̄　thî　θíləphá　nɔ́　lɔ̂
雨　水　雨　水　(複)　(のだ)　(断定)
「彼らは雨水をじっと待った」(II-04.12)

18.53.2　nɪ̄(2)　＜引き寄せ＞

行為者の領域に人や物を引き寄せることを表す。自動詞に付いた場合、引き寄せる対象を表す名詞句を目的語として導入する。使われる自動詞は、移動を表す動詞であることが多い。一方、他動詞に付いた場合、目的語の指示対象を引き寄せることを表す。使われる他動詞は、移動する物を被動者として取るような動詞である。

まず自動詞に付いた例を挙げる。「～を連れて... する」。

(515) ʔəwê　ɣɛ̂　**nɪ̄**　ʔə-　mâ　jàʊ
3se　来る　3sg　妻　(完)
「彼は妻を連れて来た」

(516) lâɴkəthá　jʊ̀ɪ　**nɪ̄**　chəʔàʊ　phɔ̄
ハゲタカ　飛ぶ　猿　(臨場)
「ハゲタカは猿を連れて飛び立った」(III-12.28)

(517) phóɴ　nī　jʊ̀　cəxwà　mákʉ́ʉ́tá　ɣòɴ |
捕える　得る　モン人　王　(人名)　(継起)

thàiɴ　**nī**　thánɴ　wê　lé　dòʊɴ　pəkàɴ　ʔò　lɔ̂
帰る　(上方)　(強意)　(場)　町　(地名)　(遠方)　(断定)
「(アノーヤター王は) モン人の王マヌーハーを捕まえて、パガンへと連れて帰った」(III-08.12)

(518) cáiɴ　khàʔánɴ　wê　chəphʊ́chəxā　ɣòɴ |
歩く　撃つ　(強意)　動物　(継起)

ɣê　thàiɴ　**nī**　bʉ́ʉ́　làɴ　wê
来る　帰る　養う　(下方)　(強意)

phʊ́mâ　kò　néiɴ　kò　là　dè　lɔ̂
妻子　(毎)　年　(毎)　月　(毎')　(断定)
「出かけて行って動物を撃ち、いつも (それを) 持って帰って来て妻子を養っていた」(III-04.3)

次に他動詞に付いた例を挙げる。

(519) θàʊcà　kò　**nī**　thàiɴ　θwíwɔ̀
(人名)　呼ぶ　(元位)　(人名)
「タウチャーはトゥイーウォーを再び呼び寄せた」(IV-04.63)

(520) ʔəwê　lʉ̀　ləmōɴ　**nī**　ʔàiθài
3se　行く　招く　修験者
「彼は修験者を招くために行った」(006.58)

(521) lʉ̀　chōɴ　**nī**　chəlâ　θʊ́θâɴwɔ̀　nɔ́　lɔ̂
行く　出迎える　先生　カッコウ　(のだ)　(断定)
「(烏は医者である) カッコウを出迎えに行った」(I-03.21)

(522) chərâ　thàʊ　thánɴ　**nī**　thàθəwài
先生　出す　(外方)　磁石
「先生は磁石を取り出した」(III-01.19)

(523) θàʊcà　nɔ́　phóɴ　phəɣôʊɴ　**nī**　thàiɴ　xîphàɴ　tā ...
(人名)　(題)　つかむ　抱く　(元位)　(人名)　(前提)
「タウチャーはフイパウンを抱き寄せて...」(IV-04.234)

(524) khîchìphōɴ　nɔ́　phóɴ　**nī**　kəchâɴ　mī |
虎　(題)　つかむ　象　尾

càʊ　wê　chī　lɔ̂
引く　(強意)　(婉曲)　(断定)
「虎は象のしっぽをつかみとって、引いた」(III-03.29)

18.53.3 nī(3) ＜執拗＞

無意志動詞に付き、動詞の表す事象が執拗に生じることを表す。病気の症状や性癖を表す動詞に付くことが多い。

(525) chəchâ mə- báɣá **nī** pə̀ jɔ̂ wêdá lɔ̂
病気 (非現) 伝染する 1PL 容易な (強意) (断定)
「病気が我々に容易に伝染するだろう」(II-13.14)

(526) thʊ́pəɣʊ́ɩ nɔ́ chôɴkàiɴ **nī** wê tā |
梟 (題) 虚弱な (強意) (前提)

ʔíchâ θí lə̀ɴ ʔé lɔ̂
大便をする できる もはや (否) (断定)
「梟は身体が弱ってしまい、大便をすることができなくなってしまった」(I-03.5)

(527) ʔə- khʊ́xwí mə- jòʊɴ |
3sg 頭 (非現) 痛む

ʔə- nâthî ɕò **nī** wê chī lɔ̂
3sg 鼻水 分泌する (強意) (婉曲) (断定)
「(風邪を引くと) 頭が痛んで、鼻水が出るのである」(II-13.10)

(528) ʔè mwɛ̄ pə- ʔáɴ ʔè ʔá nɔ́ |
(条件) (繋) 1pl 食べる (条件) 多い (題)

pə- mɛ́ pə- θwâ châ **nī** mə- jɔ̂ wê nɔ́ chī lɔ̂
1pl 歯 1pl 歯 痛い (非現) 容易な (強意) (のだ) (婉曲) (断定)
「(甘い物を) たくさん食べると、歯が痛くなるということが容易に起こる」(II-08.20)

(529) ləkhâiɴnɔ́ thwí ɕā jʊ́ŋjā **nī** wê tā |
その後 犬 老いた 慣れる (強意) (前提)

ɣɛ̂ ʔáɴkèiɴ ʔáɴ láiθêiɴ phʊ́ nɔ́ kò nì dè lɔ̂
来る 頼む 食べる 鳶 子 (題) (毎) 日 (毎') (断定)
「その後、老いた犬はクセになってしまって、毎日、鳶の子を食べたいとせがみに来るようになった」(I-01.12)

18.53.4 nī(4) ＜判断の基準点の導入＞

状態動詞に付き、次に来る名詞句の指示対象が、判断の基準点であることを表す。判断の基準点を表す名詞句を目的語として導入することができる。bá(4) と類似の働きをする。bá(4) との違いは明らかではない。

(530) mə- ɣì **nī** pə̀ kō ɣà dè chī lɔ̂
(非現) 良い 3SG (毎) ～人 (毎') (婉曲) (断定)
「(そのことは) 私たちすべてにとって良いのである」(II-13.18)

(531) mə-　ɣì　**nī**　pə-　ʔəcá　kō　blàɴ　dè　chī　lɔ̂
(非現)　良い　1pl　人生　(毎)　～回　(毎')　(婉曲)　(断定)
「(上に述べたことを実践すれば) 私たちの人生にとって常に良いのである」(IV-03.25)

(532) jáijái　chə-　mə-　khài　**nī**　hə̀　khó
やがて　CHə　(非現)　暗い　1PL　(未来)
「やがて (日が暮れて) 暗くなるよ」(IV-04.179)

(533) ʔə-　chɨ̀　phlòʊɴ　nɔ́　làɴmā　**nī**　ʔə̀　jàʊ　lɔ̂
3sg　民族　カレン　(題)　消える　3SG　(完)　(断定)
「カレン民族は (カレンの文化を大切にしない人にとっては) 消えてしまった (も同然だ)」(IV-06.8)

(534) jáʔɯ́thî　lə-　pà　bá |　làɴcháilàɴmêiɴ　**nī**　hə̀　ʔɔ́　ʔé
魚醤　(否)　含まれる　(否')　満足させるような　1PL　ある　(否)
「(料理に) 魚醤が入っていなければ、我々にとって満足できるようなものにはならない」(III-13.10)

18.54　khè ＜代行＞

主語の指示対象が他者に代わって何かを行う (あるいは何らかの状態を帯びる) ことを表す。「代わりに ～する」。この助詞が付くと、動詞の項の取り方に変化が生じる。自動詞に付いた場合、「代行の相手」を表す名詞句が、動詞複合体の目的語として現れることができる。次の例を見よ。

(535) ʔəwê　lì　khè　**jə̀**
3se　行く　1SG
「彼は私の代わりに行った」

他動詞に付いた場合、「代行の相手」を表す名詞句が、第一目的語として現れることができる。動作の被動者を表す名詞句は第二目的語として現れる。次の例を見よ。

(536) ʔəwê　màlɔ́　khè　**jə̀**　**lái**
3se　教える　1SG　文字
「彼は私の代わりに文字を教えた」

下に様々な例を挙げる。

(537) ʔəwê　ɣɛ̂　mà　**khè**　jə̀
3se　来る　する　1SG
「彼は僕の代わりに来てやってくれた」(001.1872)

(538) jə-　kətɔ̀　**khè**　bá　nə̀
1sg　心配な　(無意)　2SG
「私はあなたに代わって心配している」(001.1506)

(539) [$_C$ jə- ɣáɴ **khè** nà] nə- θíjâ ʔé
1sg 泣く 2SG 2sg 知る (否)
「お前の代わりに俺が泣きを見たのをお前は知らない」(001.1872)

(540) nə- pɔ̄ **khè** phí jà lái xɔ̄
2sg 読む (裨益) 1SG 手紙 XO
「私の代わりに手紙を読んでくれ」

(541) klà nɔ́ bá lò **khè** phí thúpəɣúɯ ʔədíʔəmā
烏 (題) (当為) 返す (裨益) 梟 借金
「烏は梟の借金を代わりに返さなければならなかった」(I-03.40)

(542) nə- bá kətɔ̀ **khè** jə- ɣāɴ ʔɔ́ nāɴ mèiɴ ʔé
2sg (当為) 心配な 1sg ～のため ある (少数) ～種類 (否)
「あなたが私のために代わって心配する必要はないのだ」(II-11.11)

(543) ɣə̂ɴ [$_C$ phlòʊɴ khlàiɴ] θí | ká **khè** θà wê
聞こえる カレン 話す (類似) 難しい 心 (強意)
「カレン人 (同士) が話しているのを聞いても、(話している人に代わって) 恥ずかしがる」(IV-06.19)

▹ ká θà は「恥ずかしい」という意味の慣用句。

18.55 phílâɴ < 裨益 >

wílâɴ とも発音する。また、phí あるいは wí とも言う。動詞の表す事象の生起が誰かの利益となることを表す。「～してやる」「～してあげる」。動詞 phílâɴ「与える」に由来する。この助詞は動詞の項の取り方に変化を与える。自動詞に付いた場合、次のように、受益者を表す名詞句は動詞複合体の目的語として現れる。

(544) jə- lì phílâɴ **ʔə̀**
1sg 行く 3SG
「私は彼のために行ってあげた」

他動詞に付いた場合、次のように、受益者を表す名詞句は動詞複合体の第一目的語として現れる。他動詞の被動者を表す名詞句は第二目的語として現れる。

(545) ʔəwê pɔ̄ phílâɴ **jà** **lái**
3se 読む 1SG 本
「彼は私に本を読んでくれた」

二つの目的語を取る動詞の場合、その受領者と受益者は同一である。

(546) ʔəwê lɔ̀ phílâɴ **jà** pòʊɴ
3se 語る 1SG 昔話
「彼は私に昔話を話してくれた」

動詞の被動者を表す名詞句を側置助詞 dè で示すことも可能である。これは二つの目的語を取る動詞の第二目的語を dè で示せるのと同じである。

(547) ʔəwê　pɔ̄　phílâɴ　jà　**dè**　lái
3se　読む　1SG　(共)　本
「彼は私に本を読んでくれた」

受益者を表す名詞句には、側置名詞 ʔəɣāɴ「～のため」が付くことがある。

(548) jə-　lì　phílâɴ　ʔə-　**ɣāɴ**
1sg　行く　3sg　ため
「私は彼のために行ってあげた」

(549) ʔəwê　pɔ̄　**phílâɴ**　jə-　ɣāɴ　lái
3se　読む　1sg　ため　本
「彼は私に本を読んでくれた」

受益者は、植物を含む生物でなければならない。次の例では、植物が受益者になっている。

(550) lé　ʔə-　ɣéiɴ　thài　nɔ́
(場)　3sg　家　横　(題)

θə́ɯɴ　làɴ　wê　chəthə́ɯɴchəbòɴ　ɣòɴ |
植える　(下方)　(強意)　植物

khə́ɯɴ　wê　nə́ɴ |　chɯ̂　**phí**　wê　thî |　dè
掘る　(強意)　草　入れる　(強意)　水　そして

bwɛ́　làɴ　**phí**　wê　ɣə́ɴkhɔ́chá　θí　nɔ́　chī　lɔ̂
盛る　(下方)　(強意)　肥料　(複)　(のだ)　(婉曲)　(断定)
「(彼は) 家の横に植木を植え、雑草を除去し、水をかけてやったり肥料を盛ってやったりしている」(II-08.6)

本動詞の phílâɴ も植物の受益者を目的語として取ることができる: phílâɴ chəthə́ɯɴchəbòɴ thî (与える-植物-水)「植物に水をやる」。しかし、無生物の受益者を目的語として取ることはできない: *phílâɴ phàɴθà thî (与える-道路-水)。同様に、動詞助詞 phílâɴ も、無生物の受益者を目的語として取ることはできない: *chɯ̂ phílâɴ phàɴθà thî (入れる-phílâɴ-道路-水)。したがって、無生物の受益者を表す目的語を取ることができないという点で、本動詞の phílâɴ と動詞助詞の phílâɴ は同じ特徴を持つ。

以下に様々な例を挙げる。

(551) jə-　mə-　lɔ̂　**phí**　nà　nāɴ　mèiɴ　xɔ̄
1sg　(非現)　語る　2sg　(少数)　～種類　XO
「あなたに (アイディアを) 一つ話してあげましょう」(006.30)

(552) màbò　**phí**　wī　lā　jə-　chəmà　nāɴ　thí　ʁɔ̄
手伝う　(先行)　(願望)　1sg　仕事　(少数)　～回　XO
「私の仕事をちょっと手伝ってくださいな」(IV-04.424)

(553) [$_R$ ʔɔ́thɔ̄ làɴkhâiɴ] cɔ̂wê
残る 後 兄

chûtɔ̄ɴ jāthəɲā **phí** bá xîphàɴ ʔəɣāɴ nɔ́ chī lɔ̂
祈る 祈る (不抗) (人名) ため (のだ) (婉曲) (断定)
「生き残った僕は、フイパウンのために祈らなければならない」(IV-04.469)

(554) chə- náθí **phí** pə- ɣāɴ nāɴ ɣà ʔé
CHə 理解する 1pl ため (少数) ～人 (否)
「人々は私たちのことを誰も理解してくれない」(IV-09.22)

(555) mɯ̄phā mə- θôʊɴ **phí** lé ʔəɣì khɔ̂ dɯ̀
母と父 (非現) 送る (場) 良さ 側面 DU
「お父さんとお母さんはお前を良いほうへと向かわせてあげようとしているのだ」(V-03.106)

(556) lɔ̀ **phlâɴ** jə̀ nāɴ wâɴ dɔ̀
語る 1SG (少数) ～回 (別個)
「私にもう一度言ってください」(001.3498)

(557) nə- kóʊɴbò **phí** jə̀ bá nàɴ mèiɴ ʔé ʁâ
2sg 案ずる 1SG 正しい (少数) ～種類 (否) (疑)
「私のために一計を案じてくれることはできないか」(I-03.7)

(558) pə- ʔəcá jò mwɛ̄ mə-
1pl 人生 (題) (繋) (非現)

ɣê ʔáɴtàiɴ nī **phlâɴ** pə̀ mwɛ̄ ʔé
来る 準備する (努力) 1PL (繋) (否)
「私たちの人生は、私たちのために (勝手に) 準備をしてくれたりしないのである」(IV-03.8)

(559) lɯ̀ khlàiɴdə́ɯɴ **phí** jə̀ nāɴ thí bálɛ́
行く 会話する 1SG (少数) ～回 なぜ
「私のためにちょっと (彼女と) 話しに行ってくれないか」(IV-04.69)

(560) làɴ thàiɴ ʔə- phɔ́ θɛ̀ khɔ̂ |
下りる (追加) 3sg 子供 (複) (対比)

mə- khlàiɴ lɔ́ **phí** phlòʊɴ mwɛ̄ lə̀ɴ ʔé lɔ̂
(非現) 話す (学習) カレン (繋) もはや (否) (断定)
「(彼らの) 子供には、カレン語で話して教えてあげるということもなくなってしまうのだ」(IV-06.10)

(561) lɯ̀ lɔ̀ bá ʔə̀ nɔ́ |
行く 語る (不抗) 3SG (前提)

thâiɴ　**phí**　nə̀　dè　nə-　mèiɴ　θɛ̀
編む　2SG　(共)　2sg　名前　(複)
「彼に言いに行けば、(工芸品に) お前の名前を編み込んでくれるよ」(V-02.38)

(562) cɔ̀khûmèiɴlá　tàiɴ　**phí**　jə̀
(人名)　作る　1SG
「チョーキーメインラーが私に作ってくれた」(V-02.52)

(563) təkàphʉ̂ɕā　màbò　màchə̀ɴ　**phí**　lā　nɛ̀　cì |
檀家　助ける　助ける　(願望)　僧侶　金

mə-　θə́ɯɴ　phjā　ʔəɣāɴ
(非現)　建てる　僧院　ため
「檀家の皆さん、僧院を建てるため、私 (=僧侶) のために金を工面してください」(010.9)

上に挙げたすべての例では、主語が裨益者 (benefactor) を表している。しかし、次の例の主語は裨益者を表していない。この文の主語は文脈から考えて phlòʊɴ　chəxîchəlà「カレン文化」である。一方、裨益者は、後世にカレン文化を残そうとしている現代人である。このように主語と裨益者にずれが生じることがどの程度一般的なのかは今のところ不明である。

(564) bê　mə-　ʔɔ́thɔ̄　**phlâɴ**　thàiɴ
(目的)　(非現)　残る　(再度)

phʊ́lì　ʔəɣāɴ　mə-　θí　θò |
子孫　ため　(非現)　できる　(目的')

hə-　bá　pətòɴ　chə̀ɴ　kō　ɣà　dè　lɔ̀
1pl　(当為)　創る　(皆)　(毎)　～人　(毎')　(断定)
「(カレン文化が) 子孫のために残ることができるよう、私たちはみな協力して創りあげていかなければならないのだ」(IV-01.113)

18.56　pjà ＜提示＞

動作を誰かに提示すること、あるいはその動作によって誰かに何らかの事柄を深く理解させようとすることを表す。「～ してみせる」。おそらくビルマ語の補助動詞 /pyâ-/ の借用であり、話者の中にはこの助詞が「ポー・カレン語らしくない」という意識を持つ者もいる。しかし、実例が少なからず出てきているので、参考のために以下に示しておく。動詞の項の取り方を変更する特性があるかなど、詳しいことは現段階では分からない。

(565) nə-　lɔ̀　**pjà**　phí　phlòʊɴ　chɨ̀　ʔəɣāɴ
2sg　語る　(裨益)　カレン　民族　ため
「あなたはカレン民族のために語ってみせてくれた」(016.30)

(566) nə- dàʊnɛ́ **pjà** lā chài chərâ
2sg 見せる (願望) CHAI 先生
「見せてください、先生」(III-01.17)

18.57 dá

ʁá とも発音する。次のような二つの用法がある。

18.57.1 dá(1) ＜限定＞

動詞の表す事象が生起する範囲を何らかの尺度に基づいて限定する。「... のみ ～ する」。限定の範囲を表す名詞句が動詞複合体の目的語として現れることができる。下は自動詞に付いた例である。

(567) ʔəθí ɣɛ̂ **dá** ʔəkhwâ lɔ̂
3pl 来る 男 (断定)
「彼らは (男と女がいるうちの) 男しか来なかった」

次は他動詞に付いた例である。

(568) ʔəθí ʔánɴ **dá** kʊ́ lɔ̂
3pl 食べる 菓子 (断定)
「彼らは菓子しか食べなかった」

次の (569) のように、限定の範囲を表す名詞句が目的語とは異なる名詞句である場合、元々の目的語はもはや現れることができない。(570) を見られたい。

(569) ʔəθí ʔánɴ **dá** ʔəkhwâ lɔ̂
3pl 食べる 男 (断定)
「彼らは (男と女がいるうちの) 男しか食べなかった」

(570) *ʔəθí ʔánɴ **dá** ʔəkhwâ kʊ́ lɔ̂
3pl 食べる 男 菓子 (断定)
「彼らは (男と女がいるうちの) 男しか菓子を食べなかった」

下に dá が使われた文の例を挙げる。

(571) phî jò ⊂ bà **dá** càiɔ̄ ⊂ bà **dá** thɔ̄⊃
おばあさん この 拝む 仏 拝む 法
「このおばあさんは仏や仏教の教えしか信仰していない」(024.54)

(572) ʔɔ́ **dá** θə̂ɴ ɣà lɔ̂
いる 三 ～人 (断定)
「3 人しかいない」(001.0214)

(573) kətɔ̀　　làɴ　　**dá**　nə-　θà　　nɔ́　　chài
心配する　(帰的)　　2sg　(再帰)　その　CHAI
「自分のことだけを心配しなさい」(II-11.14)

(574) jə-　pɔ̄　　máʊ　　**dá**　ʔə-　láiʔàʊ　lɔ̌
1sg　読む　快適な　　3sg　本　　(断定)
「私は彼の (書いた) 本しか読んでいて楽しくない」(001.0218)

動詞複合体の目的語として、主語と同一指示の名詞が現れた場合、「自分で～する」ということを表す。

(575) tàiɴ　**dá**　ʔəwê　lə-　ɣà　　nɔ́　　lɔ̌
作る　　3se　一　～人　(のだ)　(断定)
「(彼は) 自分 1 人で作った」(I-08.21)

(576) nəθí　ʔè　　kətɔ̀　　làɴ　　θà　　nɔ́ |
2pl　(条件)　心配な　(帰的)　(再帰)　(題)

kóʊɴ　　**dá**　nəθíwê　chài
案じる　　2pe　　CHAI
「お前達は (そんなに) 心配なら、自分たち自身で考えなさい」(III-15.14)

(577) mwɛ̄　pəkəchā　　dè　　pə-　ʔəcá
(繋)　私たち自身　(列挙)　1pl　人生

bá　　ʔáɴtàiɴ　làɴ　　**dá**　pəθàdápə̀　　lɔ̌
(当為)　創る　　(内方)　　私たち自身　(断定)
「私たち自身および私たちの人生は、自分で築き上げなければならない」(IV-03.9)

あるいは、「ひとりでに～する」ということを表す。

(578) ʔwà　**dá**　ʔəwê　θí　　ʔé
白い　　3se　できる　(否)
「(米粒は) ひとりでには白くならない」(I-05.5)

18.57.2　dá(2)　＜比較＞

多く状態動詞に付き、比較の対象よりもその動詞が表す状態の程度が甚だしいことを表す。この dá が用いられた動詞複合体は、比較の対象を表す名詞句を目的語として取ることができる。

(579) ʔəjò　ɣì　　**dá**　ʔəʔò
これ　良い　　あれ
「これはあれより良い」

(580) ʔəjò ɣì **dá**
これ 良い
「こちらのほうが良い」

(581) həmənī θə́ɯɴθà nɔ́ nə- θíjâ **dá** hə̀ dài lɔ̂ nɛ̂
人類 心 (題) 2sg 知っている 1PL まだ (断定) NE
「人間の心については、あなたのほうが私たちより (よく) 知っていますよね」(009.13)

(582) cɔ̂khléiɴ wê kɛ́ phlòʊɴkhwâ nɔ́ |
(人名) 3se 成る 男 (前提)

kháɴkhâ cà **dá** xîphàɴ θɛ̀ dài
踏み出す 広い (人名) (複) まだ
「チョークレインは男性だから、フイパウン達よりも歩幅が広い」(IV-04.259)

18.58 náiɴ ＜比較＞

dá(2) と同じく、状態動詞に付いて、比較の対象よりもその状態の程度が甚だしいことを表す。やはり dá と同じく、náiɴ が用いられた動詞複合体は、比較の対象を表す名詞句を目的語として取ることができる。dá との違いは、náiɴ が古風かつ格式張っているということである。したがって、民話の中や書かれた文章の中では使われることがあるものの、日常の会話では náiɴ が使われることはあまりない。ポー・カレン語西部方言では、比較表現において、この náiɴ と同一起源と思われる nàiɴ が用いられる。

(583) nò thɔ̂ **náiɴ** nâ
口 高い 鼻
「口が鼻より高い」(III-04.1)

▷ 口が軽いことを表す諺。

(584) bêθò mə- dàʊpàiɴ **náiɴ** ʔəphlòʊɴ θò ...
(目的) (非現) 満たされた 人 (目的')
「他人より満たされた状態になるように...」(IV-03.16)

(585) nə- klòɴ **náiɴ** nə- wɛ̄ θɛ̀ xì
2sg 悪い 2sg 兄 (複) (禁止)
「お前は、お前の兄達より愚かにはなるな」(IV-07.38)

(586) [$_R$ chəʔɛ́ lə- ʔɔ́ ləɴ bá] mūɯ lə- nì nɔ́
愛 (否) ある もはや (否') 日 一 ～日 (題)

khá **náiɴ** ʔəlêiɴ lá dài
苦い (植物の１種) 葉 まだ
「愛がなくなった日には、(恋人の態度が) アレインの葉よりも苦くなっているのだ」(V-05.102)

18.59　tháʊ ＜最上＞

状態を表す動詞に付き、その状態が何らかの集合の中で最も甚だしいことを表す。動詞 tháʊ 「尽きる」に由来する。「最も ～な」。動詞 tháʊ「尽きる」に由来する。

(587) jə-　ʔɛ́　**tháʊ**　nà　lɔ̂
1sg　愛する　2SG　(断定)
「私はあなたを最も愛している」

(588) ʔə-　mèiɴ　dʊ́　**tháʊ**
3sg　名　大きい
「彼は一番有名だ」(V-06.30)

(589) [$_C$ lə-　lɔ̀　bá]　nɔ́　ɣì　**tháʊ**　lɔ̂
(否)　語る　(否')　(題)　良い　(断定)
「言わないのが一番良い」(003.474)

(590) pə̀　ləphá　jò　mwɛ̄　pɔ̂　ʔəjáʊ　dʊ́　**tháʊ**　lɛ̂
1pl　(複)　(題)　(繋)　誰　年齢　大きい　(疑)
「私達の中で誰が一番年上なのか」(III-10.9)

(591) cɔ̀cɔ̀θéiɴ　ʔè　ɣɛ̂　thàiɴ |
(人名)　(条件)　来る　帰る

θɔ́ɯɴθà　máʊ　**tháʊ**　nɔ́　mwɛ̄　wê　ʔwàʔwà　lə-　ɣà　lɔ̂
肝臓と心臓　快適な　(題)　(繋)　(強意)　(人名)　一　～人　(断定)
「チョーチョーテインが帰って来ると、一番嬉しがっているのはワーワーなのだ」(V-05.38)

(592) chəlé　dɯ̀lâ　jò　mwɛ̄　[$_R$ hə-
(強調)　蝿　(題)　(繋)　1pl

bá　θàmɛ́　**tháʊ**]　phʊ́xā　lə-　mèiɴ　nɔ́　lɔ̂
(当為)　恐れる　昆虫　一　～種類　(のだ)　(断定)
「蝿というのは最も恐れるべき昆虫である」(II-12.2)

この助詞 tháʊ が使われると、動詞の前に接頭辞 ʔə- がついて、動詞複合体全体が名詞化することがよくある。以下に例を示す。

(593) mwɛ̄　[$_{NP}$ ʔə-　ʔɛ́　**tháʊ**]　thìθò　nī　ɣà
(繋)　(名詞化)　愛する　友人　二　～人
「(私達)2 人は、最も親しい友人である」(V-03.37)

(594) [$_{NP}$ ʔə-　ɣì　**tháʊ**]　nɔ́　chənɔ́　lɛ̂
(名詞化)　良い　(題)　何　(疑)
「一番良いものは何か」(003.739)

18.60 θà

名詞 θà 「心臓、心」に由来する。次のような用法がある。

18.60.1 θà(1) ＜再帰＞

他動詞に付き、被動者が行為者そのものであることすなわち「再帰」を表す。他動詞は意志動詞か無意志動詞かを問わない。

ポー・カレン語では、限定を表す動詞助詞 dá (18.57.1 参照) が現れた場合を除いて、主語と同一指示の目的語が現れた次のような文は非文法的である。

(595) *ʔəwê$_i$ chè làN ʔəwê$_i$
3se 刺す (再帰) 3se

この文を文法的な文にするには、動詞助詞 θà を用いて次のようにする必要がある。

(596) ʔəwê chè làN **θà**
3se 刺す (帰的)
「彼は自分を突き刺した」

再帰を表す θà が付くと目的語は決して現れない。なお、再帰を表す θà は、再帰的動作を表す làN (18.13.4 参照) と共起することが多い。

θà には次のように主語と同一指示の第一形代名詞が付くことがある。

(597) ʔəwê chè làN ʔə- **θà**
3sg 刺す (帰的) 3sg
「彼は自分を突き刺した」

(598) jə- chè làN jə- **θà**
1sg 刺す (帰的) 1sg
「私は自分を突き刺した」

ʔə- θà は元来は「彼の心」、jə- θà は元来は「私の心」という意味である。代名詞が付くことから、動詞助詞の θà は名詞であったときの特性を一部分残しているということができる。

以下に様々な例を挙げる。

(599) cɯ́ làN **θà** lé thî klà ʔò
ひたす (帰的) (場) 水 間 (遠方)
「水の中にからだをひたす」(I-03.24)

(600) ʔəwê ʔɔ́kí θɯ́ khwái **θà** nɔ́ lɔ̂
3se 置く (内密) (徹底) (のだ) (断定)
「彼は身を隠した」(I-03.33)

(601) ʔəwêdá　cóɴ　　thánɴ　thàiɴ　ʔə-　**θà**　nɔ́tā ...
3se　伸ばす　(完成)　(追加)　3sg　(前提)
「彼が身体を伸ばすと...」(II-02.23)

(602) ʔəwêdá　ʔàʊ　xî　làɴ　ʔə-　**θà**　nɔ́　lɔ̂
3se　褒める　美しい　(帰的)　3sg　(のだ)　(断定)
「彼は自慢したのだった」(II-05.12)

(603) kətɔ̀　làɴ　lā　nə-　**θà**　nɔ́　chài
心配する　(帰的)　(願望)　2sg　(のだ)　CHAI
「自分のことを心配しなさい」(II-11.11)

(604) khlài　pàdʊ́　làɴ　ʔə-　**θà**　lānâɴ　θí ...
亀　敬う　(帰的)　3sg　(逆接)　(類似)
「亀は自分のことを過大評価していたのだが...」(II-11.20)

(605) lɨ̀　thánɴ　ʔɨ̀ɨkhlēiɴ　làɴ　**θà**
行く　(上方)　転がす　(下方)
「(丘の上まで) 登って行って、転がり下りなさい」(III-03.40)

(606) khlʊ́　θí　dí　θí　jò　chəjɔ̀khâ　thî　θài　khâ
貝　(複)　蛙　(複)　(題)　夏　水　乾く　時

bə̀ɴ　làɴ　**θà**　lé　phái　lá
沈める　(帰的)　(場)　泥　下
「貝や蛙たちは、夏に水が乾くと泥の下にもぐるのだ」(III-14.17)

(607) thʊ́ʔəlêiɴ　ʔə̀ɴ　lə-　θʊ́jâ　làɴ　**θà**
鳥の 1 種　愚かな　(否)　知る　(帰的)
「愚かなアレイン鳥は身の程を知らなかった」(IV-07.49)

(608) lənàɴ　nɔ́　dɔ̀　thə̂ɴphɨ̄ɨwɛ̄　lə-　càʊ　pəkòʊɴ　thánɴ　**θà**
一部　(題)　(別個)　兄弟　一　～群　集める　(完成)
「一部の人たちは、兄弟同士で集まる」(III-14.20)

これまでに θà が自動詞に付いた例が二つ見つかっている。以下に挙げた文である

(609) cáiɴ　wèiɴwâɴ　**θà**　lə-　ɣà
歩く　ぶらぶらする　一　～人
「1 人でぶらぶら歩いていた」(IV-07.3)

(610) ʔəwêdá　mî　dòʊɴkòʊɴ　wê　ʔə-　**θà**　θàɴnàkhlòɴ
3se　寝る　ちぢこまる　(強意)　3sg　一晩中
「彼は一晩中ちぢこまって寝ていた」(II-02.23)

▷ この例で ʔə- θà が dòʊɴkòʊɴ に付いているのか、mî dòʊɴkòʊɴ 全体に付いているのかを判別するのは難しい。後者であったとしても、この動詞連続は自動詞としての特徴を持つので、ここでの議論に支障はない。

これらの例では、θà を取り除いてしまっても、文の意味にさほど大きな違いは生じない。したがってなぜここで θà が使われているのかは難しい問題であるが、どちらの例とも身体の動きを表す動詞であってしかも意志動詞であるところに問題を解く鍵があるかもしれない。自分の意志で身体を動かすことが、自分の身体に影響を及ぼす他動的動作と捉えられたために θà が用いられている可能性がある。

18.60.2 θà(2) ＜自発＞

他動詞に付き、その動詞によって引き起こされる結果が自然発生的に生じることを表す[5]。使われる他動詞は意志動詞であり、θà が付くと無意志動詞化する。θà(1) と同じく、前に代名詞の第一形が現れることがある。

この θà が使われると元の目的語が主語の位置に立ち、動詞複合体は自動詞としての特徴を持つようになる。まず例を見ていただきたい。

(611) ʔəwê pàʊ thánɴ pàitərâɴ
3se 開ける (完成) 窓
「彼は窓を開けた」

(612) pàitərâɴ pàʊ thánɴ **θà**
窓 開ける (完成)
「窓が開いた」

(611) の文の目的語と同一の名詞句が (612) の文では主語として現れている。かつ、(612) では目的語の位置に名詞句は現れることができない。θà(1) でも目的語が現れない、すなわち自動詞化する現象が見られたが、θà(2) では自動詞化だけではなく、主語の転換までもが生じるのである。主語の転換が生じるという点で、この現象を広い意味での態 (voice) の現象と捉えることも不可能ではない。しかし、第 4 章で述べたとおり、本論文ではポー・カレン語に態という文法範疇を認めない。

なお、第 15 章 15.3.1 に述べたとおり、θà が用いられた動詞複合体は、自然発生的な事象を表す自動詞が存在しない場合の、すき間を埋めるような役割を担うことがある。

以下に自発を表す θà の例を挙げる。

(613) ɣéiɴ châɴlé làɴ **θà** lé thîkhló ʔənàiɴ
家 並べる (帰的) (場) 川 岸
「川岸に家が並んでいる」(I-10.7)

(614) ʔə- cʊ́ʊthái nɔ́ wái khwái ʔə- **θà**
3sg ハサミ (題) ねじる (徹底) 3sg
「彼 (=蟹) のハサミはねじれてしまった」(II-05.16)

[5]再帰を表す形式が自発を表すようになるという現象は、通言語的に観察される (Shibatani 1985, 柴谷 1997 を参照)。したがって、θà の自発を表す用法は、再帰を表す用法より後に生じた可能性が高い。

(615) θéiɴ　wī　ʔò　thánɴ　**θà**
木　根　剥く　(完成)
「木の根がむきだしになった」(III-03.46)

(616) ʔəjôɴ　θíləphá　ʔánlɛ̀　thánɴ　**θà**　mwɛ̄bò　lɔ̂
色　(複)　変える　(完成)　～というわけだ　(断定)
「(そのような理由で雲の) 色が変わるというわけである」(III-05.9)

(617) chəʔə́ɯɴ　jò　mwɛ̄　wêdá
雲　(題)　(繋)　(強意)

[$_R$ thîkhʊ́lɔ́ɴ　ʔəphlɔ́ʊɴphʊ́　pəkɔ̀ʊɴ　**θà**]　lə-　mɛ̀iɴ　lɔ̂
氷　粒　集める　一　～種類　(断定)
「雲というのは、氷の粒が集まったものである」(III-05.3)

(618) chəʔə́ɯɴ　bɛ̀blài　ʔə-　khʊ́thò　nɔ́
雲　綿　3sg　先端　(題)

thûɯ　tərài　**θà**　bêθò　bɛ̀blài　θò
巻く　回る　(比定)　綿　(比定')
「綿雲の先端は、綿のようにねじれている」(III-05.46)

(619) chə-　mà　ʔə-　**θà**　bêjò　nɔ́ ...
CHə　する　3sg　このように　(前提)
「このようなわけで...(直訳:このようになって)」(II-02.26)

(620) kəchânɴ　θî　klʊ́　nɔ́　ʔɯ́pàʊ　thánɴ　wê　tā |
象　死ぬ　死体　(題)　腐る　(完成)　(強意)　(前提)

ʔəkhâiɴ　nɔ́　bàithái　**θà**　láʊkhlà　chī　lɔ̂
尻　(題)　塞ぐ　全部　(婉曲)　(断定)
「死んだ象の死体は腐ってしまって、尻 (の穴が) ふさがった」(I-09.22)

18.61　lóθà ＜相互行為＞

主語の指示対象が相互的な事象の参加者であることを表す。wóθà, ʁóθà とも発音される。「互いに～する」「～しあう」。θà という音節を含んでいることから、前節の再帰や自発を表す θà(元の意味は「心」) と語源的に関連する可能性があるが、ló の語源が不明であるので、現段階で結論を出すことはできない[6] 。

この助詞を用いた文では、相互行為の参加者を表す名詞句の導入方法に二通りある。まず、相互行為の参加者のうちの一方を主語名詞で指示し、残りの参加者を側置助詞 dè に導かれた斜格補語で指示する方法である。

[6]様々な言語において、再帰を表す形式と相互行為を表す形式との間に関連性が認められる。ポー・カレン語でも、θà と lóθà の間に語源的関連が認められても不思議ではない。

(621) **jə-** máʊ lóθà dè **ʔəwê** [自動詞]
1sg 快適な (共) 3se
「私は彼と仲が良い (直訳=私は彼と互いに快適である)」

(622) **jə-** dʊ́ lóθà dè **ʔəwê** [他動詞]
1sg 殴る (共) 3se
「私は彼と殴りあった」

もう一つは、相互行為の参加者すべてを主語名詞で指示する方法である。

(623) **hə-** máʊ lóθà [自動詞]
1pl 快適な
「私達は仲が良い (直訳=私達は互いに快適である)」

(624) **hə-** dʊ́ lóθà [他動詞]
1pl 殴る
「私達は殴りあった」

他動詞の場合、lóθà は動詞の項の取り方を変更することがある。すなわち、被動者が相互行為の参加者そのものであるなら、被動者を表す名詞句は目的語として現れることができない。下の例を見ていただきたい

(625) a. jə- dʊ́ lóθà dè **ʔəwê**
1sg 殴る (共) 3se
「私は彼と殴りあった」

b. *jə- dʊ́ lóθà **ʔəwê**
1sg 殴る 3se

(626) a. hə- dʊ́ lóθà
1pl 殴る
「私達は殴りあった」

b. *hə- dʊ́ lóθà **hə̀**
1pl 殴る 1PL

各 (b) は、相互行為の相手を指示する名詞句を目的語位置に置いたものであり、非文法的である[7]。しかし、被動者が相互行為の参加者でないならば、被動者を表す名詞句は目的語として現れることができる。次のとおり。

(627) jə- phóɴ **lóθà** cʊ́ɪ dè ʔəwê
1sg つかむ 手 (共) 3se
「私は彼と手を取りあった」

[7](626b) は、主語と同一指示の目的語が現れているという点でも非文法的である。再帰を表す θà の項 (18.60.1) を参照されたい。

(628) hə-　phóɴ　**lóθà**　cɯ́
1pl　つかむ　手
「私達は手を取りあった」

以下に lóθà が使われた例を見ていく。まず、自動詞に付いた例を挙げる。

(629) ləkhâiɴjò　ʔəθíwê　ʔɔ́　kòʊɴ　ʔɔ́　dèiɴ　**lóθà**　tā ...
その後　3pe　いる　(皆)　いる　混じる　(前提)
「その後、彼らは一緒に暮らして...」(II-04.17)

(630) phɯ́θá　ʔəjò　máʊ　**lóθà**　dè　ʔəwê
子供　これ　快適な　(共)　3se
「この子供は彼と親しい (直訳:この子供は彼と互いに快適だ)」(001.2358)

(631) nī　thánɴ　**lóθà**
笑う　(外方)
「(彼らは 2 人で) 笑いあった」(001.2361)

下に挙げる例の動詞は自動詞ではあるが、主語の指示対象との関係を表す名詞句を意味的に要求する動詞である。

(632) thɯ́lêiɴʔwàphɯ́　jò　báchâiɴ　**lóθà**　dè　xîphànɴ　nɔ́　lɛ̂
(鳥の 1 種)　(題)　関係がある　(共)　(人名)　何　(疑)
「レインワー鳥が私 (=フイパウン) と何の関係があるというの?」(IV-04.222)

(633) ʔəjò　mɔ̂mɔ́　**lóθà**　dè　ʔəjò　ʔé
これ　同じ　(共)　これ　(否)
「これはこれと同じではない」(001.2436)

次に他動詞を見ていく。最初に挙げるのは、被動者が相互行為の参加者そのものであるため、被動者を表す名詞句が目的語として現れることができない例である。

(634) ʔáiɴ　**lóθà**
かむ
「かみつきあう」(「喧嘩する」という意味の慣用句としても用いられる)

(635) châɴ　xwì　**lóθà**
鶏　闘う
「鶏が闘う」(xwì は闘鶏で鶏が闘うことを表す動詞)

(636) nəθí　dá　**lóθà**　phənphânɴ　dài　jā
2pl　会う　何度か　また　JA
「あなた方はその後何度か会いましたか」(012.8)

(637) hə- bá θà thánɴ **lóθà** bá ʁá nɛ̂
1pl (当為) 怒る 正しい (疑) NE
「俺達は互いに腹を立てあっていていいもんかね?」(001.687)

▷ θà thánɴ (θà 「心」+ thánɴ 「上がる」) は怒りの対象を表す名詞句を目的語として取ることができる。θàthánɴ ʔəwê「彼に腹を立てている」。

(638) ʔəwê dē ʔəwê ɣàɴ bádòɴ **lóθà** lɔ̂
3se (列挙) 3se 姿 似ている (断定)
「彼と彼は姿形が似ている」(001.706)

(639) phlòʊɴ dē náwátá dákhòɴ **lóθà**
カレン (列挙) SLORC 出会う
「カレンと SLORC(国家法秩序回復委員会; ビルマの軍事政権) が会談をした」(001.1231)

(640) ʔəθí ʔəthìʔəθò lə- ɣà dè lə- ɣà nɔ́ ʔɛ́kwì **lóθà**
3pl 友人 一 ～人 (列挙) 一 ～人 (題) 愛する
「彼ら友人同士は互いに愛し合った」(001.2119)

(641) bá ɲāɕàʊ **lóθà** lô ʁá nɛ̂ həɣà
(当為) 遠慮する 必要な (疑) NE おい
「互いに遠慮する必要などあるかね (いやない)」(001.2355)

(642) lə- klə̀khlâɴ **lóθà** bá
(否) 理解する (否')
「相互の理解がうまく行ってなかったからだ」(003.760)

(643) lə- təwâɴ dè lə- təwâɴ bádòɴ **lóθà** ʔé
一 村 (列挙) 一 村 似ている (否)
「村によって異なっている」(III-14.5)

(644) pə- chɨ̀phʊ́ ləphá nɛ̀ʔánɴ **lóθà** bê mə- θí θò
1pl 民族 (複) 信じる (目的) (非現) できる (目的')
「私達の民族 (に属する人のこと) は互いにできるかぎり信じなさい」(IV-01.81)

(645) pə- ɕûkəlôɴ phòʊɴwôʊɴ **lóθà**
1pl 急ぐ 抱く
「私達は (会った) とたんに抱き合った」(V-03.37)

(646) thònnáiɴ **lóθà** jā nɛ̂
覚える JA NE
「互いに (互いを) 覚えておきましょうよ」(V-03.49)

(647) plɛ̀tɔ̀　**lóθà**　bá　kɛ́　wê　klə̀　lɔ̂　jābò
許す　(当為)　可能な　(強意)　いつも　(断定)　JABO
「いつも互いを許すことができなければならないんですよ」(V-04.233)

次に挙げるのは、被動者が相互行為の参加者ではないため、被動者を表す名詞句が目的語として現れることができる例である。ただし、これらの実例において目的語が現れているとは限らない。

(648) bê　lə-　θíjâ　**lóθà**　bá　cònɴ　θò ...
(比定)　(否)　知る　(否')　事情　(比定)
「まるで互いに事情を知らないかのように...」(001.755)

(649) lɔ̀　**lóθà**　bánā
語る　なごやかな
「おしゃべりがなごやかだった」(001.719)

(650) phónɴ　**lóθà**　bá　dáchəθà　lɔ̂　ʁâ
つかむ　正しい　(詠嘆)　(断定)　(疑)
「互いに収穫はあったか (直訳:互いに [互いから何かを] つかむことができたか)?」(004.494)

(651) ʔè　dá　**lóθà**　lə-　ɣà　mé
(条件)　見える　一　～人　顔

lə-　ɣà　mé　nɔ́ |　ʔáɪɴ　lóθà　lɔ̂
一　～人　顔　(題)　かむ　(断定)
「互いの顔を見ると喧嘩している」(009.49)

▹ 二つめの lóθà は、被動者が相互行為の参加者そのものになっている例。

(652) ⊂ màbò⊃　⊂ mə̀chə̀ɴ⊃　**lóθà**　chəphàichəmà　θí　thánɴ　wêdá　lɔ̂
助ける　助ける　仕事　できる　(変化)　(強意)　(断定)
「互いに仕事を助けることができるようになったのだ」(II-04.17)

(653) ʔəθíwê　ʔánnànɴphà　khwái　**lóθà**　cì
3pl　分ける　(徹底)　金銭
「彼らはお金を互いに分けた」(II-14.5)

(654) kèɣɔ̀khó　jə̀　dè　khîchìphōɴ　ʔánɴthà　**lóθà**
明日　1SG　(列挙)　虎　賭ける
「明日、俺と虎が (金などを) 賭けるのだ」(III-03.20)

最後に特殊な例を挙げておく。lóθà を使った場合、ふつうは主語が相互行為の双方または一方を指示する。ところが、下の例では主語の指示対象が相互行為の参加者になっておらず、相互行為の参加者を非主語 (lə- ɣà dè lə- ɣà「一人と一人」) が表している。実は、この文から lóθà を取り去ってもかまわない。おそらく、主語の有生性よりも非主語の有生性が高いために非主語への注意度が高まり、その結果 lóθà が使われたのではないか。

(655) chəchâ　jò　báɣá　**lóθà**
病気　この　伝染する

lə-　ɣà　dè　lə-　ɣà　jɔ̂　mā　lɔ̂
一　～人　(列挙)　一　～人　易しい　(非常)　(断定)
「この病気はひとりからひとりに伝染しやすいのである」(II-13.4)

18.62　動詞助詞全体のまとめ

動詞助詞の特徴を表にしてまとめておく。それぞれの動詞助詞が付いたときに動詞複合体に何らかの変化が生じるかを三つの観点に関して比較できるようにしてある。三つの観点とは、(1) 項を変更するか、(2) 無意志動詞の意志動詞化あるいは意志動詞の無意志動詞化が生じるか、(3) 動態動詞の状態動詞化あるいは状態動詞の動態動詞化が生じるか、である。'-' は、その観点に関与的でないことを示す。「項の変更」の欄に '+' とあるのは、動詞複合体に項の変更が何らかの形で生じるという意味である。「意志性」の欄に「意志」とあれば、無意志動詞の特徴を持つ動詞複合体が意志動詞の特徴を帯びること、「無意志」とあれば、意志動詞の特徴を持つ動詞複合体が無意志動詞の特徴を帯びることを表す。「動態/状態」の欄に「動態」とあれば、状態動詞としての特徴を持つ動詞複合体が動態動詞の特徴を帯びること、「状態」とあれば、動態動詞の特徴を持つ動詞複合体が状態動詞としての特徴を帯びることを表す (実際には状態動詞化を引き起こすものはないようである)。

意志動詞化しているのか無意志動詞化しているのかは、動詞複合体を命令文として使えるかどうかを基準としている。例えば次の動詞複合体が命令文として使われることはない。

(656) ʔáɴ　báθà　mì
食べる　(欲求)　ご飯
「ご飯が食べたい」

したがって、báθà は無意志化を引き起こすと言える。ただし、願望を表す lā と dáwê については、これそのものが無意志動詞を命令文として機能させる働きを持っているので、命令文になれるかどうかを論じても意味がない。そこで表の中では「関与なし」とした。

動態動詞化しているか状態動詞化しているかは、副詞 phlɛ́phlɛ́「速く」あるいは xɛ̀xɛ̀「ゆっくり」を共起させられるかを基準としている。例えば動詞 ɣì「良い」は、これだけでは phlɛ́phlɛ́ を共起させることができないが、状態の変化を表す tháɴ を付けると、共起させることができるようになる。

(657) ɣì　tháɴ　phlɛ́phlɛ́
良い　(変化)　速く
「速く良くなった」

この基準に基づくと、状態動詞化を引き起こす動詞助詞は一つも見つからなかった。

(1) 動詞の前に付くもの

	項の変更	意志性	動態/状態
mə- ＜非現実＞	-	-	-
lə- ＜否定＞	-	-	-
bá ＜当為＞	-	無意志	-
dàʊ ＜使役＞	＋	意志	動態
mà ＜使役＞	＋	意志	動態
phílâɴ ＜使役＞	＋	意志	動態
kò ＜使役＞	＋	意志	動態
lɔ̀ ＜使役＞	＋	意志	動態
ɣɛ̂ ＜漸次的変化＞	-	-	動態
lòɴ ＜無分別＞	-	-	-
ʔáɴɣɯ́ ＜違法、反道徳＞	-	-	-

(2) 動詞の後に付くもの

	項の変更	意志性	動態/状態
tháɴ(1) ＜上方＞	-	-	-
tháɴ(2) ＜状態の変化＞	-	-	動態
tháɴ(3) ＜外方向への移動＞	-	-	-
tháɴ(4) ＜完成＞	-	-	-
làɴ(1) ＜下方＞	-	-	-
làɴ(2) ＜状態の変化＞	-	-	動態
làɴ(3) ＜内方向への移動＞	-	-	-
làɴ(4) ＜直示の中心への移動＞	-	-	-
làɴ(5) ＜再帰的な動作＞	-	-	-
thàiɴ(1) ＜元の位置への移動＞	-	-	-
thàiɴ(2) ＜繰り返し＞	-	-	-
thàiɴ(3) ＜事象の追加＞	-	-	-
thàiɴ(4) ＜返答、応酬＞	-	-	-
kədà ＜逆向き＞	-	-	-
lɯ́ ＜学習＞	-	-	-
dòɴ ＜模倣＞	-	-	-
kràɴ(1) ＜根拠のなさ＞	-	無意志	-
kràɴ(2) ＜傾向＞	-	無意志	-
kràɴ(3) ＜意外性＞	-	無意志	-
θâɴ ＜最前、最近＞	-	無意志	-
θɯ́ ＜内密＞	-	-	-
ɣɯ́ ＜違法、反道徳＞	-	-	-
cò ＜遠隔＞	-	-	-
lì ＜慣れ＞	-	無意志	-

jʊ̄ < 試行 >	-	-	-
khwái < 徹底 >	-	-	-
lā < 願望 >	-	-	-
dáwê < 願望 >	-	-	-
mèiɴ < 自然な成り行き >	-	-	-
θâ < 新局面 >	-	-	-
plɔ̀(1) < 無価値 >	-	-	-
plɔ̀(2) < 無料 >	-	-	-
ɕàʊ(1) < 驚愕 >	-	無意志	-
ɕàʊ(2) < 信念のなさ >	-	無意志	-
ɕòɴ < 共同 >	-	-	-
kòʊɴ < 共同 >	-	-	-
kóɴ < 共同 >	-	-	-
xáʊ < 共同 >	-	-	-
chònɴ(1) < 協力 >	-	-	-
chònɴ(2) < 一斉 >	-	-	-
thàʊ < 続行 >	-	-	-
thânɴ < 常時 >	-	-	-
pjáʊ < 専念 >	-	-	-
wê < 強意 >	-	-	-
wêdá < 強意 >	-	-	-
tɛ̀ < 甚だしさ >	-	-	-
mātɛ̀ < 甚だしさ >	-	-	-
dáchəθà < 詠嘆 >	-	無意志	-
chóɴ < 強制 >	-	-	-
báθà < 欲求 >	-	無意志	-
thá < 保持 >	-	-	-
wɛ̀ < 備え >	-	-	-
wī < 先行 >	-	-	-
kwè < 遊び >	-	-	-
mábá < 過誤 >	-	無意志	-
bá(1) < 無意志 >	-	無意志	-
bá(2) < 不可抗力 >	-	無意志	-
bá(3) < 経験 >	-	無意志	-
bá(4) < 判断の基準点の導入 >	+	-	-
bá(5) < 催促 >	-	-	-
nʊ̄(1) < 努力 >	-	-	-
nʊ̄(2) < 引き寄せ >	-	-	-
nʊ̄(3) < 執拗 >	-	-	-
nʊ̄(4) < 判断の基準点の導入 >	+	-	-
khè < 代行 >	+	-	-

phílâɴ < 裨益 >	+	-	-
pjà < 提示 >	?	-	-
dá(1) < 限定 >	+	-	-
dá(2) < 比較 >	+	-	-
náiɴ < 比較 >	+	-	-
tháʊ < 最上 >	-	-	-
θà(1) < 再帰 >	+	-	-
θà(2) < 自発 >	+	無意志	-
lóθà < 相互行為 >	+	-	-

ところで、動詞助詞は次のように、一つの動詞複合体の中にいくつも現れることができる。

(658) **mə-** **bá** **mà** khléiɴ **khwái** **thá** **wɛ̀** **wê** thî
(非現) (当為) (使役) 冷たい (徹底) (保持) (備え) (強意) 水
「水をあらかじめ冷たくしておかなければならないだろう」

複数の動詞助詞が現れたとき、どのような順序で並べられるかについてはまだ分かっていないことが多い。非現実法を表す mə- と否定を表す lə- が一番最初に現れるということは決まっている (mə- と lə- は共起しない)。また、上の bá(当為) と mà(使役) の語順、あるいは、wɛ̀(備え) と wê(強意) の語順にも見えるように、意味的に動詞が表す事象そのものに関連の強いものは動詞の近くに置かれ、話者の主観的判断に関わるようなものは動詞から遠い位置に置かれる傾向があるようである[8] 。しかし、次の (a)(b) のように、順序を替えることのできるものもある。

(659) a. jʊ̄ **cò** **làɴ** thîkhló
見る (遠隔) (下方) 川
「遠くの川を見下ろす」

b. jʊ̄ **làɴ** **cò** thîkhló
見る (下方) (遠隔) 川
「遠くの川を見下ろす」

したがって、動詞助詞の少なくとも一部のものは、順序の入れ替えが可能なことが確実である。だとすると、数十個もある動詞助詞の並べ方は膨大な数にのぼる可能性がある。この問題は本論文で扱える範囲を越えていると思われるため、今後の課題としたい。

[8]英語の助動詞の配列においてもこれと似た原則が観察される (Foley and Van Valin 1984:pp.225-234 など参照)。

第Ⅴ部

副詞と感嘆詞

第19章　副詞

副詞は、単独で文を形成することができるが、動詞助詞を付けることができず、動詞の項になることもできない語である。副詞には、(1) 動詞句の中に現れるもの、(2) 文頭に現れるもの、の二つがある。

19.1　動詞句の中に現れるもの

この位置に現れる副詞は元々数が多く、現在の時点で把握できているものは、全体の中のごく一部であると考えられる。加えて、生産的な派生手続きによって動詞から副詞を作ることもできるので、非常に数が多い。動詞からは接頭辞 ʔè によって、あるいは繰り返しによって作ることができる。接頭辞 ʔè による派生は第 5 章を、繰り返しによる派生は第 7 章を参照していただきたい。

以下に、副詞が使われた例を文ごと挙げていく。もちろん、ここに挙げる例は副詞の中のごく一部に過ぎない。

19.1.1　動詞からの派生による副詞

動詞からの派生による副詞の使われた例を挙げる。

(1) chəphàichəjá　θí　ʔánɴ　wê　**ʔáʔá**　ʔé
肉　(類似)　食べる　(強意)　多く　(否)
「肉もたくさんは食べない」(II-08.14)

▷ ʔáʔá は ʔá 「多い」からの繰り返しによる派生。

(2) ʔɔ́　wê　**xɛ̀xɛ̀**　θí　nàɴ　blàɴ　ʔé
いる　(強意)　静かに　習慣がある　(少数)　～回　(否)
「(私の祖父は) 決してじっとしていない」(II-08.4)

▷ xɛ̀xɛ̀ は xɛ̀ 「静かな」からの繰り返しによる派生。

(3) θài　làɴ　thá　thîlá　**tánɴtánɴ**　ɣòɴ ...
注ぐ　(下方)　(保持)　塩　厚く　(継起)
「塩を厚くまぶして...」(III-13.19)

▷ tánɴtánɴ は tánɴ 「厚い」からの繰り返しによる派生。

(4) dɔ́　thánɴ　lā　thədòɴ　châiɴ　**ʔèɣì**
畳む　(完成)　(願望)　腰巻き　シャツ　良く
「腰巻きやシャツを上手に畳みなさい」(I-sen.73)

▷ ʔèɣì < ʔè + ɣì(良い)。

(5) ʔɔ́kí　nò　phònɴ　**ʔèchêiɴpràɴ**
置く　口　中　清潔に
「口の中を清潔に保て」(II-08.1)

▷ ʔèchêipràɴ < ʔè + chêipràɴ(清潔な)。

19.1.2　動詞からの派生によらない副詞

以下の例における副詞は、派生によって作られたものではない。

(6) chə-　khléiɴ　**châ**
CHə　寒い　非常に
「とても寒い」(003.657)

(7) jə-　kàʊ　**châ**　mā
1sg　咳をする　非常に　(非常)
「ひどく咳が出る」(001.1660)

(8) jə-　ɲāɕàʊ　bá　nə̀　**châ**　mà　nâ
1sg　遠慮する　(無意)　2SG　非常に　(非常)　～だなあ
「あなたに大変申しわけないなあ」(001.2777)

(9) θà jɯ̄　làɴ　bá　xîphàɴ　**mjâ**
恋しい　(内方)　(無意)　(人名)　非常に
「フイパウンのことがとても恋しい」(IV-04.375)

(10) tòʊɴtôʊɴ　ʔɔ́khò　nə̀　**mjâ**
お母さん　待つ　2SG　非常に
「お母さんはあなたをすごく待ったのよ」(V-04.120)

(11) phɔ̂ʔwà　khʊ̄làʊ　θà　**cwá**　mā　lɔ̂
(人名)　心配な　心　非常に　(非常)　(断定)
「私はとても心配です」(V-01.13)

(12) jáphʊ́　θədáɴphʊ́　θíləphá　bá　θàmɛ́
小魚　小海老　(複)　(当為)　恐れる

ʔəwê　nɔ́　**cwá**　mā　lɔ̂
3se　(題)　非常に　(非常)　(断定)
「小魚や小海老達が彼を恐れること、甚だしかった」(II-05.4)

(13) jə-　θóɴ　ʔà　məkhó　thələ̂ɴ　mèiɴ　**ləcɛ̀**
1sg　諭す　3SG　さっき　過ぎる　(自然)　少し
「さっき俺が彼を叱ったやり方は少し度が過ぎた」(V-03.112)

(14) nə-　còɴ　nɔ́　phlòʊɴ　kàɴkà　**klə̀**　lɔ̂　chī
2sg　事　(題)　人　噂する　いつも　(断定)　(婉曲)
「あなたの事は、人々がいつも噂しています」(009.16)

(15) jə-　lə-　lɔ̀　bá　**láʊchêiɴ**　θí ...
1sg　(否)　語る　(否')　全部　(逆接)
「私が全部は言わなくても (分かるよね)」(011.23)

(16) ʔəwê　θà　mə-　máʊ　ɕʊ́khléiɴ　**lɛ́kôʊɴ**
3se　心　(非現)　快適な　平和な　とても
「たぶん彼はとても喜ぶでしょう」(012.40)

▷ lɛ́kôʊɴ はおそらくビルマ語 /lɛʔkòʊɴ/「最大限に」の借用。

(17) pə-　bá　dàʊlàɴ　ʔáɴ　dè　thîlá　nɔ́　**thəmā**　lɔ̂
1pl　(当為)　入れる　食べる　(共)　塩　(題)　一般的に　(断定)
「(食べ物に) 塩を入れなければならないのは一般的である」(II-03.3)

(18) cáiɴ　wɛ̀　lā　**tātā**　khlài　ʁé
逃げる　(備え)　(願望)　急いで　亀　よ
「急いで逃げておきなさい、亀よ」(II-11.14)

(19) ʔə-　méθá　xî　**təɕā**
彼女の　顔　美しい　かなり
「彼女の顔はかなり美しい」(IV-04.49)

(20) ʔəkhâjò　chə-　khū　**təɕā**　lə̀ɴ　ʔé　chī　lɔ̂
今　CHə　暑い　かなり　もはや　(否)　(婉曲)　(断定)
「今はもうあまり暑くありません」(012.13)

(21) màɴphɔ̂klò　phʊ́khwâ　cɔ̀pìcì　ʔɔ́　xáʊ　phjā　dè　hə̀　**phlé**　lɔ̂
(人名)　息子　(人名)　いる　共に　僧院　(共)　1PL　一緒に　(断定)
「マウンポークローの息子のチョーピーチーは私達と一緒に僧院に入った」(V-02.71)

▷ phléphlé とも言う。

(22) phlòʊɴ　phàdʊ́　**pìpì**　mɨ̂
人　大きい　もっぱら　～だなあ
「偉い人ばかりだなあ」(V-03.59)

(23) cɔ̂　lì　lé　màɴcɔ̀　θàjɔ̂　ɣéiɴ　tā |
お兄さん　行く　(場)　おじさん　(人名)　家　(継起)

ɣɛ̂　thàiɴ　phlài　**ləpî**　chī
来る　帰る　遅い　少し　(婉曲)
「僕はターヨーおじさんの家に行って、帰って来るのが遅くなったんだよ」(V-05.52)

▹ lə-「一」と pî(小さい) の複合。

(24) jə-　dá　**mūkhó**
1sg　見える　さっき
「俺はさっき見たよ」(IV-04.58)

(25) chə-　chɔ̀ɴ　**θēiɴnīkhlòɴ**
CHə　降る　一日中
「雨が毎日降っています」(012.14)

▹ nì は「日」。θēiɴ と khlòɴ の語源は分からない。

(26) ʔəwêdá　mî　dòʊɴkòʊɴ　wê　ʔə-　θà　**θàɴnàkhlòɴ**　nɔ́　ʔəkhʊ́cɔ̀ɴ ...
3se　寝る　縮こまる　(強意)　3sg　(再帰)　一晩中　(のだ)　(理由)
「彼は、一晩中縮こまって寝ていたので...」(II-02.23)

▹ nà は「夜」。θàɴ と khlòɴ の語源は分からない。

(27) θà　təɕā　**θèiɴθêiɴnì**　**θàɴθâɴnā**　lə-　blàɴ ...
干拓する　確かに　毎日　毎晩　一　～回
「毎日毎晩きちんと干拓したところ...」(III-15.32)

以下は擬音語・擬態語のたぐいである。

(28) ʔəwê　nò　nɔ́　mə-　lɔ̀　wáθà　**cwàcwàcwàcwà**　lɔ̂
3se　口　(題)　(非現)　語る　(欲求)　ペチャクチャ　(断定)
「彼の口はペチャクチャしゃべりたがっていた」(006.35)

(29) nī　thàiɴ　**tàxɔ́tàxɔ́** ...
笑う　(再度)　ワハハ
「ワハハとまた笑った」(V-03.50)

(30) mídòʊɴ　phàɴ　**θʊ̀rîθʊ̀rî**
ランプ　光る　チラチラと
「ランプがチラチラと光る」(V-03.98)

(31) khlàiɕàɴ　ʔʊ̀ɪ　khlēiɴ　làɴ　θà　θɔ̂　**khlʊ̀ɪkhlàkhlʊ̀ɪkhlà**　ɣòɴ ...
亀の一　回す　回る　(帰的)　(再帰)　音がする　カラカラ　(継起)
「亀は、カラカラと音を立てて回り...」(III-03.48)

(32) nī　　thánɴ　　**mùlàimùlài**
笑う　(上方)　ニヤニヤ
「(彼は) ニヤニヤ笑った」(IV-04.43)

19.1.3　名詞を修飾する場合

動詞句の中に現れるタイプの副詞のうち、動詞の繰り返しによって派生されたものは、名詞の後に置かれて名詞を修飾することもある。これらは名詞句の中の、名詞に後置される関係節と同じ位置に現れる (第 8 章を参照)。

(33) mí　**bjàbjà**
火　弱く
「弱い火」

(34) jáʔɯ́thî　**ɣìɣì**
魚醤　　良く
「良い魚醤」

(35) ɣàʊphôʊɴ　**kàkà**
腹　　腹一杯に
「満腹の腹」

(36) thî　**chêiɴchêiplàɴplàɴ**
水　清潔に
「清潔な水」

19.2　文頭に現れるもの

副詞の中には、文頭に現れるものがある。これらは決して動詞句の中には現れない。また、これらが従属節の中に現れることはない。大別して、「文と文の文脈的な関係を表すもの」と「話者の心情を表すもの」の二種類がある。

19.2.1　文と文の文脈的な関係を表すもの

dè　順接を表す。「そして」。dē とも発音される。側置助詞の dè および名詞修飾助詞の dè と同源であろう。

(37) dè　　jə-　ʔánlɯ̄ɯ　thî
そして　1sg　浴びる　水
「そして私は水浴びをした」

lānâɴ　逆接を表す。「しかし」「けれども」「しかるに」。lānâɴbò という形もある。一般助詞の θí がしばしば後に付く。lā の部分は là と発音されることもある。従属節助詞の lānâɴ とは、明らかに同源である。

(38) **lānâɴ**　θí　lé　khʊ́lòɴ　ʔədàɴdí　nɔ́
しかし　(類似)　(場)　山　頂上　(題)

thî　mə-　ʔɔ́　wêdá　thòɴkhɔ̂　lɛ̂
水　(非現)　ある　(強意)　どこ　(疑)
「しかし、山の頂上の、どこに水があるというのか?」(III-06.30)

(39) **lānâɴbò**　phâθʊ́ɣɛ̀　θà　máʊ　mjâ　máʊ　tɛ̀
しかし　(人名)　心　快適な　大変　快適な　大変
「しかし、パートゥーゲーは大変嬉しかった」(V-04.51)

(40) **lānâɴbò**　θí　bádòɴ　kɛ́　lánɴ　lə̀ɴ　ʔé
しかし　(類似)　～のようだ　可能な　(変化)　もはや　(否)
「しかし、もう無理のようだ」(008.10)

cāɴbò　理由を表す。「だから」「ゆえに」。càɴbò と発音されることもある。

(41) **cāɴbò**　ʔəkhâjò　chə-　khʊ̄　təɕā　lə̀ɴ　ʔé　chʊ̄　lɔ̂
だから　今　CHə　暑い　かなり　もはや　(否)　(婉曲)　(断定)
「だから、今はもうあまり暑くありません」(012.13)

(42) **càɴbò**　phlòʊɴ　ʔɛ́chə̂ɴ　nə̀　kò　ɣà　dè　lɔ̂
だから　人　愛する　2SG　(毎)　～人　(毎')　(断定)
「だから皆があなたを愛しています」(017.14)

ʔəkhʊ́còɴ　理由を表す。「だから」「ゆえに」。従属節助詞の ʔəkhʊ́còɴ と明らかに同源である。

(43) **ʔəkhʊ́còɴ**　kəbàɴjʊ̀ɯchā　θíləphá　bá
だから　パイロット　(複)　(当為)

ɣàxè　wê　chəʔə́ɯɴbɛ̀blài　nɔ́　klə̀　lɔ̂
避ける　(強意)　積乱雲　(題)　いつも　(断定)
「だからパイロットが積乱雲を避けなければならないのはいつものことなのだ」(III-05.54)

(44) **ʔəkhʊ́còɴ**　nɔ́　pəphlòʊɴ　chɨ̀phʊ́　θɛ̀ləphá
だから　(題)　カレン　民族　(複)

bá　kɛ́　thánɴ　thàiɴ　wê　chɨ̀　xāxòɴ　nɔ́
(当為)　成る　(完成)　(追加)　(強意)　民族　他　(題)

ʔɔ́　wê　ʔáʔálé　chī　lɔ̂
いる　(強意)　たくさん　(婉曲)　(断定)
「だから、カレン人が他の民族になってしまうというケースも多いのである」(IV-01.13)

ʔèɣòɴ　話題の転換を表す。「それから」「次に」。ʔēɣòɴ とも発音される。ʔè は仮定を表す従属節助詞 ʔè に由来する。ɣòɴ は動詞 ɣòɴ「終わる」に由来する。従って、元々は「終わったなら」「終われば」という意味である。

(45) **ʔèɣòɴ**　thâɴphūɪwɛ̄　nī　ɣà
それから　兄弟　二　～人

thàiɴ　wêdá　lé　ʔə-　ɣéiɴ　ʔò　lɔ̂
帰る　(強意)　(場)　3pl　家　(遠方)　(断定)
「それから兄弟 2 人は、家に帰った」(II-14.21)

(46) **ʔēɣòɴ**　ʔəpî　lə-　ɣà　nɔ́　dɔ̀
それから　末子　一　～人　(題)　(別個)

châiɴ　ʔəɣì　ʔɔ́　nāɴ　béiɴ　lòɴ　ʔé
シャツ　良い物　ある　(少数)　～枚　もはや　(否)
「ところで、下の子はいいシャツが 1 枚もなくなってしまったのよ」(V-03.127)

thòɴnɔ́　順接を表す。「そして」「それから」。後に一般助詞の tā や má が現れることがある。thòɴ は 動詞 thòɴ「着く」に由来する。nɔ́ は指示代名詞の nɔ́ に由来する。つまり元々の意味は「そこに至って」。thòɴnɔ́ɣòɴ(ɣòɴ は動詞 ɣòɴ「終わる」に由来)、thòɴnɔ́θò(θò は側置助詞 bê...θò に由来?) という形もある。

(47) **thòɴnɔ́**　ʔəwê　lì　thòɴ　bá　wê　lé
そして　3se　行く　着く　(不抗)　(強意)　(場)

θéiɴ　phàdʊ́　ʔə-　kháɴthài　nɔ́ ...
木　大きな　3sg　足下　(継起)
「そして彼は大きな木の根もとに行き着いて...」(IV-05.7)

19.2.2　話者の心情を表すもの

現在までに見つかっている副詞のうちこのような性質を持つものは、以下に挙げる四つのみである。

kəbá　懸念を表す。「運が悪いと (～だ)」「ややもすると (～だ)」。

(48) **kəbá**　mə-　jāiɴ　bá　ʔí
下手すると　(非現)　踏む　(無意)　糞
「下手をすると糞を踏んでしまうよ」(003.64)

(49) **kəbá**　hə̀　jò　mə-　mwɛ̄　thəmlá　θí
ひょっとして　人　この　(非現)　(繋)　強盗　(類似)

ʔə-　θí　θí　mə-　θí　chī
(条件)　可能な　(類似)　(非現)　可能な　(婉曲)
「ひょっとするとこいつは強盗かもしれない」(001.3270)

▷ ʔə- θí θí mə- θí chī は、「～かもしれない」ということを表す慣用句。動詞句内に現れる副詞と同様の機能を持つ。字義通りには「可能であるなら可能だろう」の意。

kəlɨ̀　義務・当為を表す。「すべからく (～すべきだ)」「ぜひとも (～すべきだ)」。動詞の kəlɨ「似合っている」に由来する。

(50) **kəlɨ̀**　hə-　bá　θí　thá　chɨ̀　lái　nɔ́　lɔ̂
ぜひ　1pl　(当為)　できる　(保持)　民族　文字　(のだ)　(断定)
「ぜひとも私達は (カレン) 民族の文字をできるようにしておかねばならない」(IV-09.37)

(51) **kəlɨ̀**　cháiphʊ́chā　mə-　bá　ʔánʌ̀tàiɴ　thánɴ　thàiɴ　θà
必ず　農民　(非現)　(当為)　作る　(完成)　(追加)　(再帰)

ʔəθâɴ　lɔ̂
新しく　(断定)
「必ずや、農民は、自分達を新しく作りかえなければならない」(IV-09.7)

スゴー・カレン語および西部ポー・カレン語においては、これと同源の語が、動詞の直前に現れて当為を表す「助動詞」的な要素になっている。

(52) nə-　**krə́ʔ**　lɛ̄　[Sgaw Karen]
2sg　(当為)　行く
「あなたは行くべきだ」

(53) nə-　**krəʔ**　lé　[Western Pwo Karen]
2sg　(当為)　行く
「あなたは行くべきだ」

thəmjânūɯ　非難の気持ちを表すときに用いる。

(54) **thəmjânūɯ**　lɔ̂　dè　nə-　ʔəcòɴ　nɔ́
(断定)　(共)　2sg　原因　(題)

jə-　bá　ɕánɴ　bá　já
1sg　(当為)　貧しい　(当為)　破れる
「あなたのせいで私は苦労をした」(001.683)

▷ bá ɕánɴ bá já は、「苦労をする」ということを表す慣用句。

kəjāɴ　希望を表す。「できれば (～ したい)」「できるなら (～ したい)」。

(55) **kəjāɴ**　jə-　ʔáɴchâ　wáθà　ʔé
できれば　1sg　売る　(欲求)　(否)
「できるなら売りたくありません」(020.53)

19.3　副詞的に使うことのできる名詞

名詞句の中には、文中で副詞と同様の機能を持つことのできるものがある。それは、lənìjò「今日」、mūɣá「昨日」、kèkhó「明日」、təɣá「一昨日」、kètɔ̀khó「明後日」、məɣī「去年」、təɣī「一昨年」などの時を表す名詞、および、助数名詞句である。

(56) jə-　ɣɛ̂　thàiɴ　thòɴ　**mūɣá**
1sg　来る　帰る　着く　昨日
「私は昨日帰ってきた」

(57) phlòʊɴmwì　ɣɛ̂　**θəɴ**　**ɣà**
客　来る　三　～人
「客が 3 人来た」

第20章　感嘆詞

他の様々な言語と同様、ポー・カレン語には非常に多くの感嘆詞がある。以下に代表的な感嘆詞を挙げておく。

ʔà —　驚いたとき、何かに気付いたとき、感動を感じたときなど、新たな感情が去来したときに使う。ʔá あるいは ʔā とも発音される。これと同様の働きを持つものに ʔò や ʔɔ̀ がある。「ああ」「おや」「あら」「あっ」。

(1) **ʔà**　mwɛ̄　nà
　　(繋)　～だなあ
「あっ、そうだ」

pápà —　ひどく驚いたときに使う。2 音節目の pà の数は任意で、pápàpà, pápàpàpà, pápàpàpàpà, pápàpàpàpàpà ... などとなることもある。「おや」「おやおや」「おやまあ」。

(2) **pápàpà**　pə-　lə-　dá　bá　jái　jàʊ　nɛ̂
　　1pl　(否)　会う　(否')　久しい　(完)　NE
「おやまあ久しぶりですね」

kɛ́ —　決意を表明するとき、あるいは他人を誘うときに用いる。「さあ」。

(3) **kɛ́**　jə-　mə-　thàiɴ　lɔ̀
　　1sg　(非現)　帰る　(断定)
「さあ僕は帰ることにしよう」

(4) **kɛ́**　hə-　lì　lɔ̀
　　1pl　行く　(断定)
「さあ行こう」

ʔɨ́nɛ̂ —　ʔɨ̄nɛ̂ とも発音される。納得したときに用いる。「ああ」「うん」。

(5) mwɛ̄　jā
　(繋)　JA
「そうだろう?」

—— **ʔɨ́nɛ̂**
「うん」

ʁé —　ʁê とも発音される。また、wé や wê とも発音される。遠くにいる人に呼びかけるときに用いる。「おーい」「おい」。

(6) **ʁé**　phā
　　お父さん
「おおい、お父さん」(I-06.38)

(7) **wê**　khléiɴ　**wê**　khléiɴ
　　(人名)　　(人名)
「おおいクレイン、おおいクレイン」(IV-04.397)

hé —　hē あるいは hè とも発音される。とがめるときに用いる。「おい」「こら」。

(8) **hè**　nɔ́　lɛ̂
　　何　(疑)
「おい、何だと？」(V-03.103)

tánà —　昔話を語る前に発する決まり文句。「さて」。

(9) **tánà**　lé　ʔəwī　dáʔò　khwâ　ʔɔ́　lə-　ɣà
　　(場)　以前　(過去)　男　　いる　一　～人
「さて、昔、男が 1 人いた」

ʁɔ̀ɴʁɔ́ɴ — 何らかの意見を否定するときに用いる。ʁɯ̀ʁɯ́ とも発音される。「いや」「いいえ」。

(10) ʁɔ̀ɴʁɔ́ɴ　təmjâɴ　nāɴ　cóɴ　ʔé
　　奇妙な　(少数)　～箇所　(否)
「いや、まったく奇妙ではない」(V-03.5)

həɣà — 相手の意見に賛成できないときに用いる。「おい」「おいおい」「おやおや」。

(11) **həɣà**　mwɛ̄　chôɴmóɴ　nɔ́　lɛ̂　nɛ̂
　　(繋)　考える　何　(疑)　NE
「おい、何を考えているんだ」(V-03.68)

(12) bá　lɔ̀　châ　lóθà　bá　ʁá　nɛ̂　**həɣà**
　(当為)　語る　痛い　(相互)　正しい　(疑)　NE
「互いに悪口を言い合うべきときかね、おい」(001.2191)

第VI部

従属節に関連する諸問題

第21章　従属節助詞

従属節には、**副詞節**、**補文**、**関係節**の 3 種類がある。このうち補文 (第 22 章参照) は補語の役割を担う節であり、関係節 (第 23 章参照) は名詞を修飾する節である。関係節と補文以外の従属節を副詞節と定義する。

従属節助詞(subordinate clause particle) は、これら従属節を文中に導入する働きを持つ。ただし、補文を表す lé と dè だけは、補文を導入するのではなく、補文を表すだけの機能しか持たないと考える。

以下に従属節助詞を挙げてその機能を記述する。なお、21.1 から 21.21 までが副詞節を導入する助詞である。21.22 は関係節を導入する助詞、21.23 は補文を表す助詞、21.24 は補文を導入する助詞である。

21.1　ʔè

条件を表す副詞節を導入する。ʔē あるいは ʔə- とも発音される。「もし～なら」「～すると」。従属節の動詞句の直前に現れる。

ʔè が使われた節には、非現実法を表す mə- が決して現れない。次の例に現れている動詞助詞 báθà は mə- とともに使われることが多い。しかし、この例で mə- を使うことはできない。

(1) nə-　**ʔè**　(*mə-)　mî　báθà |　thàiɴ
　2sg　(非現)　寝る　(欲求)　帰る
　「寝たければ帰りなさい」

ʔè の用いられた例を下に挙げる。

(2) hə̀　θí　**ʔè**　khlàʊ |　kàɴkà　nə-　ʔəɣāiɴcóɴ　klə̀　lɔ̂
　1pl　(類似)　暇な　噂する　2sg　事柄　いつも　(断定)
　「私達も、暇があるとあなたの噂をしています」(011.19)

(3) ʔəwêdá　nɔ́　**ʔè**　lə-　θàwīθà　mì　bá |
　3se　(題)　(否)　腹が空く　ご飯　(否')

　ʔáɴ　nāɴ　blàɴ　ʔé
　食べる　(少数)　～回　(否')
　「彼は腹が減っていなければ決して食べなかった」(II-14.10)

(4) **ʔè**　dá　lóθà　lə-　ɣà　mé　lə-　ɣà　mé　nɔ́ |
見える　(相互)　一　～人　顔　一　～人　顔　(題)

ʔáiɴ　lóθà　lɔ̂
咬む　(相互)　(断定)
「(私達は) 互いの顔を見ると喧嘩してしまう」(009.49)

(5) wɛ̄cɔ̀　θí　**ʔə-**　dá　bá　phɔ̂ʔwà　ɣánɴ　nɔ́ |
兄　(類似)　見える　(不抗)　(人名)　泣く　(題)

θà　máʊ　ʔé
心　快適な　(否)
「僕も、ポーワーが泣いているのを見ると、つらいよ」(V-01.20)

(6) chə-　**ʔə-**　chɔ̀ɴ　ʔò |
CHə　降る　(題)

ʔánláʊ　khwái　jə-　châiɴ　nāɴ　thí
取り込む　(徹底)　1sg　シャツ　(少数)　～回
「もし雨が降ってきたら、私の服を取り込んでください」(001.301)

しばしば ʔè は、(7) のように、コピュラ動詞 mwɛ̄ の前で用いられ、mwɛ̄ の補文が条件の内容を表す。この場合、補文の中に ʔè がもう一度現れることがある。補文の中の ʔè は論理的には必要のないものである。そのため、これは省いてもかまわない。

(7) **ʔè**　mwɛ̄　[$_C$ chəʔə́ɯɴkàijɛ̀　(**ʔè**)　tánɴ]　tā |
(繋)　綿雲　厚い　(題)

mūmé　dè　là　nɔ́　pə-　dá　bá　kɛ́　ʔé
太陽　(列挙)　月　(題)　1pl　見える　(不抗)　可能な　(否)
「綿雲が厚いと、太陽や月は見ることができない」(III-05.32)

ʔè が使われた従属節の後には、dɯ̀ や bò という音節が置かれることがある。dɯ̀ と bò は取り除いてもかまわない。これらは文助詞の dɯ̀ および bò と形は同じであるが、文助詞が持つ、話し手の態度を表す働きはない。したがって、起源は同じかもしれないが、文助詞とは別の形式と考えるべきであろう。本論文では、dɯ̀ と bò を、ʔè を補助する特別な形式だと考えておく。

(8) **ʔè**　ʔɔ́　**dɯ̀** |　dàʊ　ʔánɴ
ある　(使役)　食べる
「もしあるのなら、食べさせてください」(003.1015)

(9) nə-　**ʔè**　lɨ̀　**bò** |　jə̀　θí　mə-　lì
2sg　行く　1SG　(類似)　(非現)　行く
「あなたが行くなら私も行く」

また、ʔè は、次節に述べる càibò との組み合わせで条件を表すことがある。下の例を見よ。

(10) xîphàɴ **ʔè** lə- kò cɔ̂ bá **càibò** |
(人名) (否) 呼ぶ 兄 (否')

phəjā kɛ́ ʔé
放す 可能な (否)
「フイパウンがお兄さんと呼んでくれないのなら、放してあげない」(IV-04.236)

(11) **ʔè** cə́ɯɴθà **càibò** | jūphàɴ khwái
退屈な 見る (徹底)

nə- ʔəɣàɴ lé bìdìʔòkhwè phàɴ
2sg 姿 (場) ビデオテープ 中
「退屈だと、ビデオテープの中のあなたの姿を見るようにしてるんですよ」(011.15)

(12) pənâɴchā **ʔè** chóɴkhlâiɴ **càibò** | pə- θə́ɯɴ pə- θà θí
身体 健康な 1pl 肝臓 1pl 心臓 (類似)

mə- xwî wê chī nɔ́ mwɛ̄ nəθí θíjâ chī ʁâ
(非現) 軽い (強意) (婉曲) (題) (繋) 2pl 知る (婉曲) (疑)
「からだが健康だと、心が楽しくなることをあなた方は知っていますか?」(I-07.13)

▷ θə́ɯɴ θà xwî「肝臓と心臓が軽い」は、「楽しい」の意の慣用句。

ʔè は、逆接を表す従属節助詞の lānâɴ(後述) と同時に現れて「譲歩」を表すことがある。

(13) jə- mī **ʔè** thɔ̂ **lānâɴ** θí |
1sg 尾 長い (逆接) (類似)

jə- kí ʔá ʔé
1sg 垢 多い (否)
「確かに私の尾は長いかもしれないが、垢は多くない (=好みはうるさくない)」

▷ kí ʔá は「好みがうるさい」の意の慣用句。

(14) jəwêdá jə- cúɯ jə- khán **ʔè** lə- ʔɔ́ bá **lānâɴ** θí |
1se 1sg 手 1sg 脚 (否) ある (否') (逆接) (類似)

nə- bá kətɔ̀ khè jə- ɣāɴ ʔɔ́ nāɴ mèiɴ ʔé
2sg (当為) 心配する (代行) 1sg ため ある (少数) ～種類 (否)
「確かに、私は手も足もないけれども、お前は私のことを心配する必要はない」(II-11.11)

21.2 càibò

ʔè と同じく、条件を表す副詞節を導入する。節の末尾に置かれる。cài は動詞 cài「言う」に由来する。bò は、文助詞の bò と共通の語源を持つ可能性がある。上で述べたよう

に、ʔè に導かれた従属節の後には bò が付くことがある。この bò とも何らかの関係があるだろう。西部方言では、条件を表す従属節助詞として、ɓó がある。西部方言の ɓó は、次のように節の末尾に現れる。

[**West Pwo Karen**]

(15) nə-　lé　ɓó |　jə-　kə-　lé
2sg　行く　もし　1sg　(非現)　行く
「あなたが行けば私も行きます」

東部方言の bò は西部方言の ɓó と間違いなく同源であろう。しかし、東部方言の bò には、西部方言の ɓó のように単独で節を導入する働きはない。もし、bò にこのような働きがあるなら、càibò を、動詞 cài に bò が付いていると分析することが可能である[1]。

下に例を挙げる。

(16) khlàiɴ　ʔèphlɛ́　**càibò** |　jə-　náθí　ʔé
話す　速く　1sg　理解する　NEG
「速く話すと分かりません」(002.129)

(17) nə-　lə-　lì　wá　**càibò** |
2sg　(否)　行く　(否')

kəchāklòɴ　mə-　mà　θî　jə̀
王　(非現)　(使役)　死ぬ　1SG
「あなたが行かなければ王は私を殺すだろう」(006.68)

càibò が他の従属節助詞と異なる点は、主節の否定辞 ʔé を用いることができるということである。(17) は、次のように言い換えることもできる。

(18) nə-　lì　ʔé　**càibò** |
2sg　行く　(否)

kəchāklòɴ　mə-　mà　θî　jə̀
王　(非現)　(使役)　死ぬ　1SG
「あなたが行かなければ王は私を殺すだろう」

これは cài の部分が動詞に由来することと関係があるだろう。動詞 cài は次のように引用文を導くことができる。

(19) "lə-　mwɛ̄　phlòʊɴ　θî |　bá　làɴmā"
(否)　(繋)　人　死ぬ　(当為)　消える

hə-　**cài**　kɛ́　wê　lɔ̂
1pl　言う　可能な　(強意)　(断定)
「「死人ではないが消え去る運命だ」と言ってもよいだろう」(IV-06.14)

あらゆる発話は引用文になり得る。当然、否定辞として ʔé が用いられた文も引用文になることができる。càibò が導く副詞節は、cài が動詞の性質を完全には失っていないため、否定辞として ʔé を用いることができるのかもしれない。

[1] ビルマ語の shò yìɴ (言う+～ なら) を参照のこと。

21.3 ʔəkhʉ́còɴ

理由を表す副詞節を導入する。「～だから」「～なので」。節の末尾に置かれる。下に例を示す。

(20) ʔəkhâjò phlòʊɴmwì ɕà **ʔəkhʉ́còɴ** |
今 客 少ない

ʔɔ́pwài ʔá ləcɛ̀phʉ́ dài
休む 多い 少し まだ
「今は客が少ないので、休むことがまだちょっと多い」(012.22)

(21) lòɴ chəpàmáʊ cwá wê **ʔəkhʉ́còɴ** |
追う 快楽 大変 (強意)

lái làɴthé khwái wê lə- néiɴ nɔ́ lɔ̂
学業 落ちる (徹底) (強意) 一 ～年 (のだ) (断定)
「快楽にばかり耽っていたので、落第してしまった」(V-01.59)

(22) chɨ̀ dʉ́ kòkəjàɴ khʉ́dà jò
民族 大きい 地球 表面 この

ʔə- chɨ̀ láilɛ̀ θɛ̀ pàdʉ́ pàprè wê **ʔəkhʉ́còɴ** |
3sg 民族 文学 (複) 尊敬する 広める (強意)

ʔəθí chɨ̀phʉ́ θɛ̀ dʉ́ɕā wê lɔ̂
3pl 民族 (複) 栄える (強意) (断定)
「世界の大きな民族は、自分達の文学を尊重し広めているので、彼らの民族は繁栄しているのである」(IV-01.22)

(23) ʔəwê ʔɔ́ lə- kɛ́ làɴ bá **ʔəkhʉ́còɴ** |
3se いる (否) 可能な もはや (否)

ʔəwê pətêiɴ tháɴ wê ʔàiθài
3se 申す (外方) (強意) 修験者
「彼は居ても立ってもいられなくなって、修験者に申し上げた」(006.17)

(24) jə- lə- ɣì bá **ʔəkhʉ́còɴ** | jə- ʔɛ́ tháʊ phɔ̂ʔwà
1sg (否) 良い (否') 1sg 愛する (最上) (人名)

lə- ɣà mə- bá θî lɔ̂
一 ～人 (非現) (当為) 死ぬ (断定)
「私が良くなかったために、愛するポーワーは死ななければならないのだ」(V-01.95)

21.4 ɣòɴ

wòɴ と発音されることもある。副詞節を導入し、従属節が表す事象と主節が表す事象が、継起的にあるいは同時的に生起することを表す。「～して」。節の末尾に置かれる。起

源的には動詞 ɣòɴ「終わる」に由来する。まず継起を表す例を示す。この場合、ɣòɴ の付いた節が先行する事象を表す。

(25) lə̀khâiɴ　lə-　nì　thwí　ɕā　nɔ́　lì　làɴ　ʔɔ́　wê
後　一　～日　犬　老いた　(題)　行く　(下方)　いる　(強意)

lé　thîkhlónàiɴ　nɔ́　**ɣòɴ** |
(場)　川岸　その

chɛ́θî　ʔə-　θà　nɔ́　lɔ̂
死んだふりをする　3sg　(再帰)　(のだ)　(断定)
「あくる日、老いた犬は川岸に行って、死んだふりをした」(I-01.20)

(26) ʔəwêdá　lì　chōɴ　làɴ　lé　thwí　ɣànthài　ʔò　**ɣòɴ** |
3se　行く　とまる　(下方)　(場)　犬　傍　(遠方)

mə-　cò　ʔáɴ　wê　thwí　θî　ʔə-　mékhlî　nɔ́...
(非現)　つつく　食べる　(強意)　犬　死ぬ　3sg　目玉　(前提)
「彼 (=鳥) は犬のそばにとまり、死んだ犬の目をつついて食べようとしたところ...」(I-01.23)

(27) təphûwɛ̄　nī　ɣà　tháʊ　tháɴ　khlî　**ɣòɴ** |
兄弟　二　～人　乗る　(上方)　舟

lì　wê　lé　ʔə-　phā　càɴ　ʔò　lɔ̂
行く　(強意)　(場)　3sg　父　小屋　(遠方)　(断定)
「兄弟 2 人は舟に乗り、父親の小屋へ行った」(I-06.25)

(28) pàʊ　tháɴ　pàitəlâɴ　**ɣòɴ** |
開ける　(完成)　窓

chəphʊ́xā　náʊ　làɴ　wê　ləpòʊɴ　mā　lɔ̂
虫　入る　(内方)　(強意)　たくさん　(非常)　(断定)
「窓を開けると、虫がたくさん入ってきた」(001.1020)

(29) chəkhléiɴ　khlàʊ　nī　**ɣòɴ** |
寒さ　捕らえる　(執拗)

ʔè　chôɴkàiɴ　nɔ́ |
(条件)　ひどい　(題)

pə-　bá　ʔɔ́pwài　khwái　xɛ̀xɛ̀　lɔ̂
1pl　(当為)　休む　(徹底)　ゆっくり　(断定)
「風邪をひいてひどくなったら、ゆっくり休まなければならない」(II-13.16)

ɣòɴ は、次のように、同時的な事象を表すこともできる。下の例の「グラグラしやすい」という状態と「折れやすい」という状態は、同時的に存在する状態である。

(30) pə- mɛ́ pə- θwâ lɛ̀ló jɔ̌ wê **ɣòɴ** |
1pl 歯 1pl 歯 ぐらつく 容易な (強意)

phó khwái θí mə- jɔ̌ wêdá chī lɔ̌
折れる (徹底) (類似) (非現) 容易な (強意) (婉曲) (断定)
「(固い物を食べ過ぎると) 私達の歯はグラグラしやすく、また折れやすくもなる」(II-08.21)

21.5 θɛ̀ɣòɴ

ɣòɴ と同様の機能を持つ。節の末尾に置かれる。「～して」。θɛ̀wòɴ とも発音される。ɣòɴ の部分はおそらく動詞 ɣòɴ「終わる」に由来する。θɛ̀ は複数を表す助詞 θɛ̀ と同じ発音であるが、同源かどうかは分からない。下に例を示す。

(31) jə- cáiɴ tháɴ kəlôʊɴ **θɛ̀ɣòɴ** |
1sg 出る (外方) 仕事

dá lóθà dè kòtìɴkhàiɴ nɔ̄ blàɴ dài ʔé
会う (相互) (共) (人名) (少数) ～回 まだ (否)
「私は仕事をやめてから、コーティンカインにまだ一度も会っていません」(012.38)

(32) jə- tháɴ nɛ̄ **θɛ̀ɣòɴ** | ɣɛ̂ thàiɴ thòɴ
1sg 上る 僧侶 来る 帰る 着く

ləkōʊɴ lé chînī θâɴ lə- nì dáʔò chī lɔ̌
(地名) (場) 十二 ～日 一 ～日 (過去) (婉曲) (断定)
「私は出家をして、ヤンゴンに 12 日に帰ってきました」(015.6)

(33) ʔəwê nɔ́ lɔ̀nàiɴ ʔə- mâ **θɛ̀ɣòɴ** |
3se (題) 語る 3sg 妻

ʔə- mâ nɔ́ ʔɔ́ xɛ̀ θí ʔé chī
3sg 妻 (題) いる 静かな できる (否) (婉曲)
「彼は (見てきたことを) 妻に語り、妻は (それを聞いて) 居ても立ってもいられなくなった」(006.43)

θɛ̀ɣòɴ は ɣòɴ と同様に、同時的な事象を表すこともできる。下の例の「尊敬する」と「賞賛する」という事象は同時的に発生する事象である。

(34) pàdʊ́jàʊjáɴ bá nə- phâɴkhʊ́ **θɛ̀ɣòɴ** |
尊敬する (無意) 2sg 上

ʔáɴʔàʊ bá nə̀ châ mā
賞賛する (無意) 2sg (非常) (非常)
「あなたを尊敬しているし、賞賛したい」(017.11)

21.6　lānânɴ

副詞節を導入し、逆接を表す。「～なのだが」「～だけれども」。lànânɴ とも発音される。また、くだけた会話では nânɴ とだけ発音されることもある。この助詞が使われると、節の後に一般助詞の θí が置かれることが多い。この助詞は、普通は節の末尾に現れる。しかし、(39)～(41) のように動詞の直後に置かれることもある。

(35) jə-　ʔɔ̀　θài　**lānânɴ** |　jə-　mə̀ɴ　mwɛ̄　ʔé
1sg　飲む　酒　1sg　酔っている　(繋)　(否)
「俺は酒を飲んだが、酔ってはいない」(V-03.109)

(36) jə-　nâ　thɔ̂　**lānânɴ**　θí |
1sg　鼻　長い　(類似)

dē　nə̀　báchâiɴ　nāɴ　mèiɴ　ʔé
(共)　2SG　関係ある　(少数)　～種類　(否)
「私は鼻が長いが、お前とは何の関係もない」(006.29)

(37) jə-　phʉ̂　nɔ́　ʔəjáʊ　tháɴbà　wê　xóchî　jàʊ　**lānânɴ**　θí |
1sg　祖父　(題)　年齢　なる　(強意)　八十　(完)　(類似)

ʔɔ́chóɴ　ʔɔ́khlâiɴ　wê　ɣìɣìbábá　dài　lɔ̂
健康な　健康な　(強意)　優れて　まだ　(断定)
「私の祖父は年齢が 80 になったが、まだ大変健康である」(II-08.2)

(38) péiɴchâɴ　lə-　pà　bá　**lānânɴ**　θí |
金　(否)　含まれる　(否')　(類似)

jə-　lì　lɔ̂
1sg　行く　(断定)
「お金はなかったが、私は行った」(001.2088)

(39) dá　**lānânɴ**　chəkáchəɣɛ̀　θí |
遭う　困難　(類似)

wɛ̄cɔ̀　θàmɛ́　nāɴ　mèiɴ　ʔé　lɔ̂
兄　恐れる　(少数)　～種類　(否)　(断定)
「困難に遭っても、僕はまったく恐れない」(V-01.48)

(40) həmənī　bênɔ́θò　mwɛ̄　**lānânɴ**　phlòʊɴ　θí |
人間　そのような　(繋)　カレン　(類似)

hə-　dàʊlàɴ　lé　phlòʊɴ　cərânɴ　phə̀ɴ　tháʊjâ　ʔé　lɔ̂
1pl　入れる　(場)　カレン　統計　中　相応しい　(否)　(断定)
「そのような人は、カレン人であっても、カレン人の中に入れる価値がない」(IV-06.22)

(41) láiʔàʊ ʔɔ́ **lānâɴ** ləpòʊɴ θí |
本 ある 沢山 (類似)

jə- pɔ̄ máʊ ʔé
1sg 読む 快適な (否)
「本はたくさんあるが、好きな本がない」(001.2226)

21.7 bê ... θò

「目的」を表す副詞節を導入する。「～するように」「～になるように」。bêθò ... θò という形もある。bê や bêθò が節の初頭に置かれ、θò が節の末尾に置かれる。ときとして、節の最初と最後に置かれる形式のうち一方のみが現れることもある。「類似」を表す側置助詞の bê ... θò「～のように」を参照せよ。

bê ... θò が表すことのできる「目的」は、主節の主語の指示対象が意志によってはコントロールできない事象である。従って、主節と従属節の主語が同一指示の場合、(42) のように、従属節の動詞は無意志動詞である。主語が同一指示でない場合には、(43) のように、意志動詞であってもかまわない。

(42) **bê** jə- mə- θí **θò** | jə- klɨ̀cɨ̀
1sg (非現) できる 1sg 努力する
「私は、できるようになるよう、努力した」

(43) **bê** ʔəwê mə- mà lái **θò** | jə- ʔáɴláʊ ʔə̀
3se (非現) する 文字 1sg 叱る 3SG
「彼が勉強するよう、私は彼を叱った」

主節と従属節の主語が同一指示で、かつ従属節に意志動詞を用いたいときには、bê ... θò を使うことができない。このような場合は、側置名詞 ʔəɣāɴ を修飾する節によって「目的」を表現する必要がある。

(44) ***bê** jə- mə- xwè já **θò** | jə- lì phjâ
1sg (非現) 買う 魚 1sg 行く 市場

(45) jə- mə- xwè já **ʔəɣāɴ** | jə- lì phjâ
1sg (非現) 買う 魚 ため 1sg 行く 市場
「私は魚を買うために市場に行った」

下に使用例を挙げる。

(46) **bê** mə- chêɪnphlî **θò** |
(非現) 清潔な

pə- bá thàʊ pə- mɛ́ dè thîlá nɔ́ lɔ̂
1pl (場) こする 1pl 歯 (共) 塩 (のだ) (断定)
「(歯が) きれいになるように、私達は歯を塩で磨かなければならない」(I-07.5)

(47) thədòɴ　châiɴ　ɕâɴ　chəkòɴchəθò　nɔ́　θí
腰巻き　シャツ　腰巻き　着物　(題)　(類似)

bêθò　ʔəkí　lə-　ʔɔ́　bá　**θò** |
垢　(否)　ある　(否')

pə-　bá　ʔánchûʉjwà　kòɴθò　wêdá　lɔ̂
1pl　(当為)　洗う　身に付ける　(強意)　(断定)
「腰巻きやシャツなどの着物も、垢がないように、洗って身に付けなければならない」(I-07.8)

(48) **bê**　mə-　θíjâ　bá　thîchà　**θò** |
(非現)　知る　(不抗)　確かな

jə-　mə-　lɩ̀　ʔɔ́pwài　jʊ̄　nāɴ　blàɴ
1sg　(非現)　行く　休む　(試行)　(少数)　～回
「確かめるために、一度、(そこに行って) 休息してみよう」(III-12.15)

(49) **bê**　təwâɴ　mə-　dʊ́ɕāthánthɔ̂　**θò** |
村　(非現)　発展する

phɔ̂ʔwà　káʊ　mà　lā
(人名)　努力する　する　(願望)
「村が発展するよう、ポーワーに努力してほしい」(V-01.21)

(50) **bê**　nə̀　lə-　ɣà　mə-　klə̀ɴkhlâɴ　**θò** |
2sg　一　～人　(非現)　理解する

jə-　mə-　lɔ̀　phí　thàiɴ　jābò
1sg　(非現)　語る　(裨益)　(再度)　JABO
「あなたが理解できるように、私は話してあげましょう」(V-04.162)

(51) mà　wī　ʔə̀ |　nə-　xóthɔ̀　mə-　phlôɴ　**θò**
する　(先行)　3SG　2sg　八年生　(非現)　合格する
「8 年生試験に合格するよう、それ (=勉強) を優先してしなさい」(V-03.119)

21.8　dè

dē とも発音される。「理由」「即時性」「同時性」を表す副詞節を導入する。節の初頭に置かれる。

21.8.1　dè(1)　＜理由＞

理由を表す。「～だから」「～ので」。

(52) **dè**　jə-　phʊ́　jə-　lì　ʔá |
1sg　子供　1sg　孫　多い

dè ʔə- kəthái | **dè** nə- cʉ́ nə- khánɴ thɔ̂ nɔ́ |
3sg きつい 2sg 手 2sg 脚 長い (題)

mwɛ̄ nə- mî lé θwî phònɴ jò mə- θí ʁá
(繋) 2sg 寝る (場) 巣 中 この (非現) できる (疑)
「私の子供は多いし、狭いし、あなたの手足は長いのだから、この巣の中で寝ることなどできるだろうか」(II-02.20)

(53) ʔənâɴchā mə- ɣə̂ɴ nə- ɣà jò |
彼女自身 (非現) 聞こえる 2sg ～人 この

dè nə- lʉ̄ʉ θɔ̌
2sg 声 うるさい
「彼女にお前の声が聞こえるよ、お前の声は大きいから」(IV-04.74)

21.8.2 dè(2) ＜即時性＞

従属節が表す事象が生起した直後に、主節の表す事象が生起することを表す。「～するやいなや」「～したらすぐに」。

(54) **dè** kəbàɴ ʔɔ́tháʊ ɣòɴ |
船 止まる 終わる

ɣàmʉ́ʉ khlàiɴ thánɴ
おばさん 話す (外方)
「船が止まるとすぐに、おばさんは話し出した」(IV-04.144)

(55) **dè** náʊ làɴ phjâ phònɴ |
入る (内方) 店 中

phlòʊɴ ləwāiɴ ləphá klíphá thánɴ jə̀ lə- thí
人 周辺 (複) 横目で見る (上方) 1SG 一 ～回
「(私が) 店に入ったとたん、周りの人々が私をちらっと横目で見た」(V-03.11)

(56) **dè** cáiɴ làɴ cōɴ | mà mâ lɔ̌ dʉ̀ʉ
出る (下方) 学校 取る 妻 (断定) DU
「(私は) 学校を出てすぐに結婚したのだから」(V-03.76)

(57) **dè** ʔəθíwê cáiɴ làɴ | ʔə- thìθò θɛ̀
3pe 出る (下方) 3sg 友人 (複)

kɛ́ thánɴ phlòʊɴ phàdʉ́ʉ láʊ jàʊ
成る (完成) 人 偉大な 尽きる (完)
「彼らが卒業したときには、彼らの友人は既に偉くなっていた」(V-03.116)

21.8.3　dè(3)　< 同時性 >

主節が表す事象と同時に、従属節が表す事象が生起することを表す。「～しながら」「～するのと同時に」。従属節には、lə- khɔ̂「一方では」あるいは khɔ̀khɔ̂「一方では」という表現が現れることが多い。

(58) xîphàɴ　nɔ́　lɔ̀　chà |　**dè**　ɣáɴ　khɔ̀khɔ̂
(人名)　(題)　語る　CHə　泣く　一方で
「フイパウンは、泣きながら語った」(IV-04.315)

(59) **dè**　ʔə-　θàɣɛ̂tháɴ　wê　chà　lə-　khɔ̂ |
3sg　怒る　(強意)　CHə　一　～方

lì　tháɴ　wê　lé　thʊ́kò　ʔə-　nàɴ　ʔò　lɔ̂
行く　(上方)　(強意)　(場)　サイチョウ　3sg　宮殿　(遠方)　(断定)
「彼は怒りながら、サイチョウの宮殿へ向かった」(II-02.28)

21.9　thòɴ

事象が存続する限界となる時点 (これを第 11 章では終了点と呼んだ) を表す副詞節を導入する。「～するまで」。thōɴ とも発音される。節の初頭に置かれる。副詞節は一般的に主節の前に置かれることが多い。しかし、thòɴ によって形成された副詞節は、主節の後に置かれることのほうが多い。この助詞は、動詞 thòɴ「着く」に由来する。

(60) jə-　wài　phí　nə-　lʊ́ɪ |
1sg　紡ぐ　(裨益)　2sg　糸

thòɴ　jə-　jáʊ　ʔàʊ
1sg　年齢　尽きる
「私は、死ぬまであなたの糸を紡ぐことで、弁償します」(II-02.21)

(61) bɛ̀　θʊ̂ɪ　tháɴ |　**thōɴ**　ʔəthî　θài　ɣòɴ ...
干す　乾く　(完成)　液体　乾く　(継起)
「(魚肉を) 水分が蒸発するまで干して...」(III-13.14)

(62) ʔɔ̀　wêdá |　**thōɴ**　ʔə-　blɛ̀　bá　ʔə-　θà　nɔ́ ...
飲む　(強意)　3sg　満足する　(基準)　3sg　(再帰)　(前提)
「(酒を) 満足するまで飲んで...」(IV-05.23)

(63) nāɴphɔ̂ʔwà　jʊ̄thwê　thàiɴ　cɔ̀θéiɴlá |
(人名)　見る　(再度)　(人名)

thōɴ　lə-　dá　làɴ　bá　ɣòɴ ...
(否)　見える　もはや　(否')　(継起)
「ポーワーは、見えなくなるまでチョーテインラーを見守って...」(V-01.28)

(64) mə- ʔɔ́khò | **thōɴ** ʔəwê ɣɛ̂ thàiɴ khó
(非現) 待つ 3se 来る 帰る (未来)
「彼が来るまで待つよ」(004.34)

(65) ʔəwêθí cò ʔáɴ khwái
3pe つつく 食べる (徹底)

chəphʊ́chəxā θí **thòɴ** ʔə- láʊ nɔ́ lɔ̂
昆虫 (複) 3sg 尽きる (のだ) (断定)
「彼ら (=鳥) は、昆虫を尽きるまで食べてしまう」(II-01.13)

(66) nə- chəmà nɔ́ jə- mə- bò
2sg 仕事 (題) 1sg (非現) 助ける

phí dáwê **thòɴ** ʔə- ɣòɴ
(裨益) (願望) 3sg 終わる
「あなたの仕事は、終わるまで手伝ってあげましょう」(IV-04.426)

(67) ʔəwê klɨ̀cɨ̀ mà **thōɴ** ʔə- phlôɴ ɣòɴ ...
3se 努力する 行う 3sg 成功する (継起)
「彼は、成功するまで努力して...」(V-01.67)

(68) jə- mə- ʔɔ́khò nà **thōɴ** ʔə- thòɴ lə- nàdì
1sg (非現) 待つ 2SG 3sg 着く 一 ～時
「私は 1 時になるまであなたを待つ」(001.353)

▷ thòɴ の後の ʔə- は時間を指しているものと考えられる。

21.10 xwè

範囲の限定を表す副詞節を導入する。節の初頭に置かれる。「～する限りでは」。xwē とも発音される。動詞 xwè「(水などが) 満ちる」に由来する。

(69) **xwē** pə- dá bá nɔ́ | kɛ́ thánɴ thàiɴ
1pl 見える (不抗) (題) 成る (完成) (追加)

chɨ̀ xāxòɴ nɔ́ ʔá mā jàʊ chī lɔ̂
民族 別の (題) 多い (非常) (完) (婉曲) (断定)
「観察できる限りでは、(カレン人が) 別の民族になってしまったということは既に非常に多い」(IV-01.10)

(70) **xwē** jə- ɣāiɴ jə- bjà ʔɔ́ nɔ́ |
1sg 力 1sg 力 ある (題)

jə- tōʊɴpàiɴ làɴ θà
1sg 認める (帰的) (再帰)
「私の力のある限り、(お手伝いすることを) 誓います」(V-01.111)

(71) **xwē**　khlàʊ　nɔ́ |　màbò　màchəɴ　kō　néiɴ
　　暇な　(題)　手伝う　手伝う　(毎)　～年
「毎年、暇な限りは手伝った」

21.11　dèiɴ

この助詞は節の初頭に付いて副詞節を導入するが、他の副詞節を導入する助詞とは異なって、主節の初頭にも現れる。どちらか一方を省くことはできない。「～するほど... する」「～であればあるほど... である」という意味を表す。発音は、dèiɴ 以外にも、dè, dē, dì, dī などがある。

この助詞は、主節と従属節の両方に付くため、どちらが主節でどちらが副詞節なのかを判断するのが難しい。おそらくは、後に現れる節が主節なのだと考えられる。その理由は、次の (72) のように、非現実法を表す mə- が、後の節のみに現れるということである。

(72) phlòʊɴ　chɨ̀phɔ́　néiɴtháɴθâɴ　jò　cūɲjâkèkhâiɴ　khó |
　　カレン　民族　新年　(題)　今後　(未来)

　　dèiɴ　jáí　**dèiɴ**　mə-　dɔ́ɕā　tháɴthɔ̂　wê　dài　lɔ̂
　　久しい　(非現)　発展した　(変化)　(強意)　まだ　(断定)
「カレン新年 (の祭り) は、今後もまだどんどん発展していくだろう」(III-11.23)

(73) **dèiɴ**　jái　**dèiɴ**　làɴbəɴ　khwái　lɔ̂
　　久しい　埋没する　(徹底)　(断定)
「(民族は伝統技術がなければ) 時間が経つにつれて衰退してしまう」(V-02.143)

(74) **dē**　chɔ̌　**dē**　ɣì
　　早い　良い
「早ければ早いほど良い」(001.1283)

21.12　ɣì

副詞節を導入し、任意性を表す。節の末尾に現れる。動詞 ɣì「良い」に由来する。ɣìɣì あるいは ʔəɣì となることもある。「～であれ、～であれ」。必ず、二つの副詞節を対にした形、すなわち A ɣì B ɣì という形をとる (A と B は節を表す)。名詞修飾助詞の ɣì を参照のこと。

(75) cōɴθā　ɣɛ̂　**ɣì** |　lə-　ɣɛ̂　**ɣì** |
　　学生　来る　(否)　来る

　　thàiɴ　cáiɴ　nī　ʔé
　　帰る　遊ぶ　可能な　(否)
「学生が来ようが来るまいが、(家に) 遊びに帰ることはできない」(001.1356)

(76) chəlé lâiɴ θí jò | dʊ́ **ɣì** pî **ɣì** |
(強調) 岩山 (複) (題) 大きい 小さい

thə̂ɴ ʔɔ́ ʔá chəthəmā lɔ̂
洞穴 ある 多い 専ら (断定)
「岩山は、大きいものでも小さいものでも、洞穴があることが多い」(V-06.23)

(77) θéiɴθáthî lé [$_R$ ʔə- ɣì] nɔ́ mwɛ̄ **ʔəɣì** |
果物ジュース (関) 3sg 良い (題) (繋)

thî lé [$_R$ ʔə- phàɴchêiɴxí] nɔ́ θí mwɛ̄ **ʔəɣì** |
水 (関) 3sg 清潔な (題) (類似) (繋)

pə- bá ʔɔ̀ wê klə̀ lɔ̂
1pl (当為) 飲む (強意) いつも (断定)
「美味しい果物ジュースであれ、清潔な水であれ、我々はいつも飲まなければならない」(II-13.17)

21.13 xì

ɣì と同様、副詞節を導入し、任意性を表す。禁止を表す副助詞 ləxì(xì) に由来する (第24章を参照のこと)。ɣì と同様に二つの節を対にした形を取る。ただし、A ∅ B xì という形になる。

(78) ʔəwê ɣɛ̂ thàiɴ | ɣɛ̂ thàiɴ **xì** |
3se 来る 帰る 来る 帰る

mwɛ̄ jə- chəʔəkhū ʁâ
(繋) 1sg 憂い (疑)
「彼が帰って来ようが、帰って来るまいが、私の心配事だろうか (いや、心配事ではない)」(V-05.30)

21.14 kəlā

副詞節を導入し、「～する前に」「～しないうちに」という意味を表す。節の初頭に置かれる。常に否定辞 lə- および副助詞 dài「まだ」が節内に現れる。発音は、kəlà あるいは kàlà あるいは kàlā などとなることもある。l が d で発音されることもある。パーリ語 kāla「時」の借用語である可能性が高い。

(79) **kəlā** lə- ʔánɴ mì dài bá |
(否) 食べる ご飯 まだ (否')

θîjà khwái wī nə- cʊ́ɪ nɔ́
洗う (徹底) (先行) 2sg 手 その
「ご飯を食べる前に、手を洗いなさい」(001.3519)

(80) **kəlā**　chərâ　lə-　ɣɛ̂　dài　bá |
先生　(否)　来る　まだ　(否')

jʊ̄　wī　nə-　lái　nɔ́
見る　(先行)　2sg　本　その
「先生が来る前に、本を見ておきなさい」(001.1569)

21.15　khə̄

副詞節を導入し、「～ している最中に」という意味を表す。節の初頭に現れる。

(81) **khə̄**　jə-　mî |　ʔəwê　ɣɛ̂
1sg　寝る　3se　来る
「私が寝ているときに彼が来た」

下の (82) や (83) のように、主節なしで「X は ～ している最中だ」ということを表す場合もある。

(82) **khə̄**　jə-　ʔánɴ　mì　dài
1sg　食べる　ご飯　まだ
「ご飯を食べている最中だ」(003.367)

(83) mànɴcɔ̀　thônɴdɯ́ɯ　θɛ̀　ʔəkòʊɴlwɛ̄　**khə̄**　lɔ̀thàiɴ
おじさん　(人名)　(複)　グループ　話す

thîɣāiɴkhāɴɣāiɴ　ʔəcòɴ　chəʔɔ́kóɴ　ʔəcòɴ　θɛ̀　dài
政治　こと　集会　こと　(複)　まだ
「トンドゥーおじさん達のグループは、まだ政治のことや集会のことを話している最中だ」(V-03.82)

21.16　chànɴchânɴ

副詞節を導入し、「～ する代わりに」「～ せずに」という意味を表す。節の初頭に現れる。

(84) **chànɴchânɴ**　mə-　lɔ̀　phlòʊɴ　xāiɴxòɴ |
(非現)　語る　人　周り

jʊ̄　làɴ　wī　θà　thòɴ　ʔə-　ɣòɴ
見る　(帰的)　(先行)　(再帰)　(限界)　3sg　終わる
「他人のことを言う前に、自分を完全に観察しなさい」(001.1004)

(85) **chànɴchânɴ**　jə-　ʔánɴ　kʊ́　nɔ́ |
1sg　食べる　菓子　(題)

jə-　ʔánɴ　mì　θâ
1sg　食べる　ご飯　(新局)
「私は菓子を食べずに、ご飯を食べることにした」(001.1004)

21.17 nɔ́

副詞節を導入する。従属節の末尾に現れ、主節が表す事象 (=後件) の生起が、従属節が表す事象 (=前件) の生起を前提としていることを表す。したがって、前件は常に後件に時間的に先行する。前件は後件の原因であることも、条件であることもあり得る。したがって、日本語には、「～したところ」「～なので」「～すると」など、様々な訳し方が可能である。語源的には、名詞修飾助詞の nɔ́「あの」、および、そこから派生した一般助詞の nɔ́(主題) と関係がある。

(86) lì　thòɴ　wê　lé　ʔàiθài　phjā　**nɔ́** |
行く　着く　(強意)　(場)　修験者　道場

ʔàiθài　θʉ̃jâ　wêdá　ʔəcòɴ ...
修験者　知る　(強意)　事情
「(彼が) 修験者の道場に行ったところ、修験者は事情を察知して...」(III-04.16)

(87) ʔə-　méθá　kədà　**nɔ́** |
3sg　顔　裏返る

ʔəwê　thàiɴ　bá　lə̀ɴ　ʔé
3se　帰る　正しい　もはや　(否)
「彼は道に迷ってしまったので、帰ることができなくなってしまった」(006.14)

(88) ʔə-　phā　chôɴná　lə-　máʊ　bá　**nɔ́**
3sg　父　聞く　(否)　快適な　(否')

ʔə-　phā　lɔ̀
3sg　父　語る
「彼のお父さんは、聞き心地が悪かったので、言った」(005.8)

(89) thàiɴ　khâ　lé　phə̀ɴθà　nə-　chəphóchəlì　θɛ̀　làɴmā　**nɔ́** |
帰る　時　(場)　道　2sg　荷物　(複)　消える

jə-　θà　máʊ　nɔ̄cɛ̀　ʔé　chī　lɔ̂
1sg　心　快適な　少しも　(否)　(婉曲)　(断定)
「(あなたが) 帰るときに、荷物がなくなってしまったので、私は気の毒でなりません」(015.7)

(90) pə-　mîɣɛ̂thə́ɯɪɴ　thánɴ　lé　kèɣɔ̀khâ　**nɔ́** |
1pl　起きる　(上方)　(場)　朝

pə-　bá　phlà　pə-　mé　ʔèchêiɴ　lɔ̂
1pl　(当為)　洗う　1pl　顔　清潔に　(断定)
「朝起きたら、顔を清潔に洗わなければならない」(I-07.4)

21.18　tā

副詞節を導入する。従属節の末尾に現れる。nɔ́ と同じく、主節が表す事象 (=後件) の生起が、従属節が表す事象 (=前件) の生起を前提としていることを表す。語源的に、主題を表す一般助詞の tā と関係がある。tà という発音もある。

(91) θàʊcà　nɔ́　wâiɴ　kədà　θà　jū　thàiɴ　wê　**tā** |
(人名)　(題)　振り返る　(逆)　(再帰)　見る　(返答)　(強意)

nāɴʔɛ́xîphàɴ　nɔ́　káθà　chī
(人名)　(題)　恥ずかしい　(婉曲)
「タウチャーが振り返って見ると、フイパウンは恥ずかしがっていた」(IV-04.45)

21.19　nɔ́tā

副詞節を導入する。節の末尾に現れる。nɔ́ や tā と同じく、主節が表す事象 (=後件) の生起が、従属節が表す事象 (=前件) の生起を前提としていることを表す。語源的に、主題を表す一般助詞の nɔ́tā と関係がある。nɔ́tà とも発音される。

(92) ʔəwêdá　lòɴ　ʔáɴxûɯ　ʔáɴ　ʔəchá　**nɔ́tā** |
3sg　追う　探す　食べる　餌

lì　thòɴ　wê　lé　θéiɴ　lə-　tháɯɴ　ʔəkháɴthài　nɔ́　lɔ̂
行く　着く　(強意)　(場)　木　一　～本　根元　(のだ)　(断定)
「彼は、餌を探して食べているうち、1 本の木の根元に行き着いた」(I-01.3)

21.20　jò

副詞節を導入する。節の末尾に現れる。nɔ́, tā, nɔ́tā と同じく、主節が表す事象 (=後件) の生起が、従属節が表す事象 (=前件) の生起を前提としていることを表す。語源的には、名詞修飾助詞の jò「あの」、および、そこから派生した一般助詞の jò(主題) と関係がある。

(93) ɣɛ̂　ɕàʊ　lə-　thí　**jò** |　thòɴ　mèiɴ
来る　(無信)　一　～回　着く　(自然)
「今回、何とはなしに来てみたら、着いてしまった」(003.948)

21.21　θí

副詞節を導入する。逆接や譲歩を表す。「～ しても」。節の末尾に現れる。一般助詞の θí「～ も」に由来する。

(94) cáiɴ　làɴ　ʔáɴxûɯ　jū　wê　lé　kəbàɴ　ʔəphâɴlá　lə-　thə̂ɴ　**θí** |
歩く　(下方)　探す　(試行)　(強意)　(場)　船　下　一　～階

dá wê θwíwɔ̀ ʔé
見つける (強意) (人名) (否)
「(2 階建ての) 船の 1 階に下りて探してみても、トゥイーウォーは見つからなかった」(IV-04.20)

(95) wɛ̀cɔ̀ thòɴ tɛ́kəθòphjācòɴmòɴ **θí** |
お兄さん 着く 大学

wɛ̄cɔ̀ θànánɴ phɔ̂ʔwà nāɴ phɔ̂ɴ ʔé nɛ̂
お兄さん 忘れる (人名) (少数) ～回 (否) NE
「僕は大学に行っても、ポーワーのことを決して忘れないからね」(V-01.17)

21.22 lé

関係節を導入する。lə́ あるいは lə- とも発音される。この助詞についての詳細は、第 23 章を見られたい。

(96) θéiɴθá thî [$_R$ **lé** ʔə- ɣì] nɔ́
果物 水 (関) 3sg 良い その
「良い果物ジュース」(II-13.17)

21.23 lé と dè

補文を表す。目的語相当の補文にのみ付く。lé は lə́ あるいは lə- とも発音される。下に例を示す。この助詞は省略可能であり、それゆえ、補文を「導入する」あるいは「作る」機能ではなく、補文を「表す」機能しか持っていないと考えられる。

(97) jə- kətɔ̀ (**lé** / **dè**) [$_C$ ʔəwê mə- lì]
1sg 心配な 3se (非現) 行く
「私は彼が行くのではないかと心配している」

この助詞についての詳細は、第 22 章 22.2 を見られたい。

21.24 ʁâ と lɛ̂

補文を導入する。ʁâ の場合は命題の真偽が問題になっているということを表す。lɛ̂ の場合は不定の内容が問題になっているということを表す。

(98) [$_C$ ʔəjò ɣì] **ʁâ** θíjâ ʔé
これ 良い 知る (否)
「これは良いかどうか知らない」

(99) [$_C$ chənɔ́ ʔɔ́] **lɛ̂** θíjâ ʔé
何 ある 知る (否)
「何があるのか知らない」

この助詞についての詳細は、第 22 章 22.4 を参照されたい。

21.25　従属節助詞に似た働きをする名詞

名詞の中には、一見、従属節助詞に見えるものがある。以下では、名詞 ʔəkhâ と ʔəɣāɴ を取り上げ、これらが従属節助詞ではないことを確認しておきたい。

21.25.1　ʔəkhâ

ʔəkhâ は「時」という意味の名詞である。ʔə は落ちて khâ となることもよくある。この名詞にはしばしば節が前置され、「～するとき」という意味を表す。

(100) cəpâɴ　θɛ̀　ɣɛ̂　làɴ　mànə̀ɴ　hə-　thîkhâɴ　**khâ**
日本人　(複)　来る　(内方)　征服する　1pl　国　時

cɔ̀phâθʉ́ɣɛ̀　lə-　ɣà　bá　kɛ́　wê　pɔ̀tàchā
(人名)　一　～人　(当為)　なる　(強意)　運搬人
「日本人がやって来て我々の国を征服したとき、チョーパートゥーゲーは、運搬人をやらされた」(V-04.25)

この ʔəkhâ を従属節助詞と見なすことはできない。なぜなら、次の例に見られるように、「節 +ʔəkhâ」には側置助詞が付くことができるからである。

(101) **lʉ́**　nə-　ɣɛ̂　cáiɴ　hə-　thîkhāɴ　**khâ**
(場)　2sg　来る　遊ぶ　1pl　国　時

nə-　ʔáɴcà　jà　pəjàɴ　chəkhlàiɴ　chɛ́chíɴ　nɔ́ ...
2sg　尋ねる　1SG　ビルマ　言葉　(ビルマ語)　(題)
「あなたが私達の国に遊びに来たときに、私にビルマ語の「すぐに」を (カレン語で何と言うか) 尋ねましたが...」(012.34)

側置助詞が付くので ʔəkhâ は名詞だと考えられる。ʔəkhâ の前に現れた節は、ʔəkhâ を修飾する関係節である。(100) のように、側置助詞が現れないことがあるのは、ʔəkhâ を主要部とする名詞句が時間的概念を表す名詞句だからである。例えば、下の例の側置助詞 lé は省くことができる。これは時間的概念を表す名詞句によく見られる現象である (第 19 章を参照)。

(102) (lé)　mʉ̄ɪnà　ʔò　jə-　lʉ̀　khlôʊɴ
(場)　夜　(遠方)　1sg　行く　外
「昨晩、私は外出した」

次の (103) の mʉ̄ɪnì「日」や (104) の ləkhâiɴ「後 (あと)」も、一見、従属節を導いているように見えるが、これらの名詞に前置された節は関係節である。これらも時間的概念を表す名詞句であるために、側置助詞が現れる必要がないのだと考えられる。

(103) [$_R$ jə-　lʉ̀　ləkōʊɴ]　**mʉ̄ɪnì**　nɔ́　chə-　chə̀ɴ　châ
1sg　行く　(地名)　日　(題)　CHə　降る　(非常)
「私がラングーンに行った日、雨がすごく降った」(002.720)

(104) [$_R$ phʉ̂dàikɔ̀　lə-　ʔɔ́　lə̀ɴ　bá]　**lə̀khâiɴ**　jò
　　(人名)　(否)　いる　もはや　(否')　後　(近傍)

phlòʊɴ　láilɛ̄　θí　chə-　màlʊ́　ɕà　làɴ　thàiɴ　wê
カレン　文字　(類似)　CHə　学ぶ　少ない　(変化)　(追加)　(強意)

ʔətʰɔ̀tʰɔ̀　nɔ́　lɔ̂
徐々に　(のだ)　(断定)
「プーダイコーが亡くなった後、カレン文字は、学ぶ人が徐々に少なくなっていった」(III-08.20)

21.25.2　ʔəɣāɴ

側置名詞の ʔəɣāɴ(第 12 章参照) も、一見したところ従属節助詞に見えることがある。次のような例では、ʔəɣāɴ が従属節を形成しているかのように見える。

(105) jə-　mə-　màlʊ　lái　phlòʊɴ　**ʔəɣāɴ**　nɔ́
　　1sg　(非現)　学ぶ　文字　カレン　(題)

jə-　ɣɛ̂　pəjàɴ　khāɴ　tālɔ̂
1sg　来る　ビルマ　国　(断定)
「カレン語を勉強するために、私はビルマに来たのです」

しかし実際にはそうではない。上の例で「節 +ʔəɣāɴ」の前には、様態を表す側置助詞 dè を付けることができる。下を見ていただきたい。側置助詞を付けることができるので、ʔəɣāɴ は名詞と考えるべきである。従属節助詞だとしたら、ʔəɣāɴ は側置助詞と共起することはできない。ここでも、ʔəɣāɴ の前に置かれた節は、ʔəɣāɴ を修飾する関係節だと考えることができる。

(106) **dè**　[$_R$ jə-　mə-　màlʊ　lái　phlòʊɴ]　**ʔəɣāɴ**　nɔ́
　　(共)　1sg　(非現)　学ぶ　文字　カレン　(題)

jə-　ɣɛ̂　pəjàɴ　khāɴ　tālɔ̂
1sg　来る　ビルマ　国　(断定)

21.26　従属節助詞を伴わない副詞節

次に示すような音連続は、一見、二つの文からなるように見える。

(107) ʔəθí　bóɴ　nī　chəbáiɴchəbóɴ |　cáiɴɣà　wê　lɔ̂　jābò
　　3sg　包む　(努力)　荷物　逃げる　(強意)　(断定)　JABO
「彼らは荷物をまとめて、逃げ出したのだった」(021.89)

しかし、この音連続の前半部分は副詞節だと考えられる。このように考えるのは、この前半部分を否定する場合、次のように否定辞 lə- を用いることができるからである。

(108) ʔəθí　**lə-**　bóɴ　nī　chəbáiɴchəbóɴ　bá |　cáiɴɣà　wê　lɔ̂　jābò
　　3sg　(否)　包む　(努力)　荷物　(否')　逃げる　(強意)　(断定)　JABO
「彼らは荷物をまとめずに、逃げ出したのだった」

したがって、ポー・カレン語には従属節助詞を伴わない副詞節が存在すると考えざるを得ない。lə- は従属節に現れる助詞だからである。

ところが、一方で、この音連続の前半部分を否定辞 ʔé で否定することもできなくはない。だとしたらこの音連続は二つの文からなると考えなければならない。ʔé は主節で使われる形式だからである。

(109) ʔəθí　bóɴ　nī　chəbáinchəbóɴ　**ʔé** .　cáinɣà　wê　lɔ̂　jābò
3sg　包む　(努力)　荷物　(否)　逃げる　(強意)　(断定)　JABO
「彼らは荷物をまとめなかった。(しかし) 逃げ出したのだった」

この事実をどのようにどのように解釈するべきだろうか。おそらく、ポー・カレン語では、(110) のように図示できるような二つの文の連続と、(111) のように図示できるような、従属節が主節を修飾する構造との間にはっきりとした境界線がなく、連続的につながっているのではないか。

(110) [SENTENCE]　[SENTENCE]

(111) [SUBORDINATE CLAUSE]　[MAIN CLAUSE]

こう考えることによって、(107) の前半部分を否定する方法に二つの方法があることが最も自然に説明できると思われる。

従属節助詞を伴わない副詞節を含む文は、同一文中に関係を明示する標識なしに複数の動詞が現れるという点で動詞連続と似ている。しかし、従属節助詞を伴わない副詞節を含む構造と動詞連続とは別物だと考えなければならない。動詞連続との違いについては第 17 章 17.5 の議論を見ていただきたい。

ところで、従属節助詞を伴わない副詞節は、主節に対して様々な意味を担い得る。例えば、次の例を考えてみよう。

(112) ʔəwê　ʔáɴchâ　khlɔ́ |　xwè　ɣʉ̃chá
3se　売る　ござ　買う　米

この文は実に様々な意味を表しうる。例えば、「彼はござを売って、米を買った」[単なる継起]、「彼はござは売ったが、米は買った」[逆接]、「彼はござを売ったので、米を買った」[理由]、「彼はござを売ると、(習慣的に) 米を買う」[条件] などなどである。すなわち、「ござを売る」という事象と「米を買う」という事象の意味的関係は、この文ではまったく限定されていないのである。これは、副詞節を否定しても同じことである。

(113) ʔəwê　lə-　ʔáɴchâ　khlɔ́　bá |　xwè　ɣʉ̃chá
3se　(否)　売る　ござ　(否')　買う　米

この文は、「彼はござを売らずに、米を買った」[単なる継起]、「彼はござを売らなかったのだが、米を買った」[逆接]、「彼はござを売らなかったので、米を買った」[理由]、「彼はござを売らないとき、(習慣的に) 米を買う」[条件] などなどである。

以下に、従属節助詞を伴わない副詞節と考え得る例を挙げておく。もちろん、これらは文の連続である可能性も十分にある。

(114) jə-　θà　ɕáiɕáʊ |　lì　báθà　ʔé
1sg　心　乱れた　行く　(欲求)　(否)
「いやになったから行きたくない」(003.155)

(115) nə-　mà　chəmà |　nə-　θà　làɴchái　ʁà
2sg　する　仕事　2sg　心　満足な　(疑)
「あなたは仕事をしていて満足か?」(004.241)

(116) jə-　jò　thî　ləɣájò |
1sg　運ぶ　水　今夕

thəljāɴ　khā　lə-　béiɴ　lɔ̂
天秤棒　折れる　一　～本　(断定)
「私が今日の夕方水を運んでいたとき、天秤棒が折れてしまった」(I-sen.98)

(117) pɔ̀mèiɴmʉ́ɪ　ɣɛ̂ |
尼僧　来る

lōɴ　ɣʉ̂ɪchá　páichâɴ
喜捨する　米　お金
「(私は) 尼僧が来ると、米やお金を喜捨する」(024.69)

(118) lɔ̀thàiɴ　chà　dè　xîphàɴ |
語る　CHə　(共)　(人名)

mî　mèiɴ　lé　xîphàɴ　ɣéiɴ　ʔò
寝る　(自然)　(場)　(人名)　家　(遠方)
「(彼は) フイパウンと語らったあと、そのままフイパウンの家に泊まった」(IV-04.307)

(119) thàʊ　thánɴ　nī　phəbàiɴ |
出す　(外方)　(引寄)　毛布

càʊ　làɴ　pjà　wê　jə-　méjâ　nɔ́　lɔ̂
引く　(下方)　(提示)　(強意)　私の　前　(のだ)　(断定)
「(彼は) 毛布を取り出し、私の前に引っぱって来て見せてくれた」(V-02.82)

次のように、従属節助詞を伴わない副詞節が複数現れることもある。

(120) chə-　khléiɴ　châ |
CHə　寒い　非常に

mî　kəmʉ̄ɪnà |
寝る　夜

jə-　dòʊɴkòʊɴ　châ　mā　lɔ̂
1sg　ちぢこまる　非常に　(非常)　(断定)
「大変寒いので、夜寝るとき、私はちぢこまっている」(003.657)

第22章　補文

本論文では、文中において名詞句と同等の役割を担っている従属節を**補文**と呼ぶ。補文には、主語相当の補文、目的語相当の補文、斜格補語相当の補文の3種類がある。任意の従属節が補文であるかどうかは、その従属節を名詞句で代替できるかどうかを見ればよい。

(1) [$_C$ hə-　khlàiɴ　bá　phlòʊɴ]　jɔ̂　ʁâ　[主語相当の補文]
　1pl　話す　(不抗)　カレン　容易な　(疑)
「カレン語を話すことは簡単か?」

—— **ʔənɔ́**　jɔ̂　ʔé
それ　容易な　(否)
「それは簡単ではない」

(2) nə-　θíjâ　[$_C$ ʔəwê　mwɛ̄　phlòʊɴ]　ʁâ　[目的語相当の補文]
2sg　知っている　3se　(繋)　カレン　(疑)
「あなたは彼がカレン人であることを知っているか?」

—— jə-　θíjâ　**ʔənɔ́**　jābò
1sg　知っている　それ　JABO
「私はそのことを知っています」

(3) nə-　mà　bê　[$_C$ ʔəwê　mà]　θò　ʁâ　[斜格補語相当の補文]
2sg　する　(比定)　3se　する　(比定)　(疑)
「あなたは彼がしたとおりにやったか?」

—— jə-　mà　bê　**ʔənɔ́**　θò
1sg　する　(比定)　それ　(比定')
「私はそのとおりにやりました」

上の例では、それぞれの補文を、答えの文で ʔənɔ́「それ」で受けている。補文はこのように、名詞句で置き換え可能という特徴を持つ。以下、様々な補文を見ていく。

22.1　主語相当の補文

まず、主語相当の補文の例を挙げておこう。

(4) [$_C$ hə-　ʔáɴ　chədòchəlá]　ɣì
1pl　食べる　野菜　良い
「野菜を食べることは良いことだ」

(5) [$_C$ hə-　khlàiɴ　phlòʊɴ]　ká
　　1pl　話す　カレン　難しい
　「カレン語を話すことは難しい」

主語相当の補文は、後述する目的語相当の補文と違って、補文を表す標識が現れない。

(6) *lé　[$_C$ hə-　ʔáɴ　chədòchəlá]　ɣì
　　(補)　1pl　食べる　野菜　良い

(7) *lé　[$_C$ hə-　khlàiɴ　phlòʊɴ]　ká
　　(補)　1pl　話す　カレン　難しい

これは、主語相当の補文と目的語相当の補文の間の大きな違いである。

ところで、主語相当の補文は、表面上 (NP) V (NP) V (NP) という形を取るという点で分離型動詞連続と一見似ている。分離型動詞連続の例を挙げておく。

(8) ʔəwê　khlàiɴ　phlòʊɴ　phlɛ́
　　3sg　話す　カレン　速い
　「彼のカレン語の話し方は速い」

しかし、第 17 章 17.5 で論じているとおり、主語として補文を取った構造と分離型動詞連続との間には、次のような違いがある。第一に、補文の場合は、補文を代名詞で置き換えることができるが、分離型動詞連続の場合は補文に対応する部分、すなわち V1 とそれを取りまく名詞句を代名詞で置き換えることはできない。第二に、補文の場合は、分裂文化によって補文を後置することができるが、分離型動詞連続の場合は、V1 とそれを取りまく名詞句を後置することができない。第三に、補文の場合は補文の中の動詞を否定できるが、分離型動詞連続の場合は V1 を否定することができない。したがって、主語として補文をとった構文と分離型動詞連続は形の上では似ているけれども、構造的には別のものだと考えられる。

このような構造上の差異は、何に起因するのだろうか。次の二つの文を比べてみよう。

(9) < chəphʊ́chəlì　jò　kəmə̂ɴ　tháɴ>　ɣì　[**補文**]
　　植物　この　繁る　(完成)　良い
　「この植物が繁っているのは良いことだ」

(10) < chəphʊ́chəlì　jò　kəmə̂ɴ　tháɴ>　ɣì　[**動詞連続**]
　　植物　この　繁る　(完成)　良い
　「この植物は良く繁っている」

この二つの文は、表面的にはまったく同一だが、(9) は主語部分に補文が現れた構造であり、(10) は動詞連続である。< > で括った部分は、前者では補文であり、後者では、動詞連続の「主語 + 最初の動詞句」である。この二つの意味的差異を見てみると、(9) では、二番目の動詞 ɣì「良い」という動詞が表す状態の持ち主は、「この植物が繁る」という事象そのものである。一方で、(10) の ɣì の表す状態の持ち主は、「この植物が繁る」という事象そのものではなく、敢えて言うとすれば、「この植物の繁り方」だろう。すなわち、こ

の二つの構造の違いは、ɣì の表す状態の持ち主が何であるかに起因すると言ってよい。ɣì の表す状態の持ち主が事象そのものである場合、上で < > で括った部分が補文として機能するのである。

主語相当の補文を取ることのできる動詞は、状態動詞である。以下に、例をいくつか挙げる。

(11) [$_C$ pə-　chɨ̀phʊ́　jò　mə-　làɴmā　wê]　nɔ́　thîchà　lɔ̂
　　1pl　民族　(題)　(非現)　消える　(強意)　(題)　確かな　(断定)
「(このような状況が続けば) 私達の民族が消えてしまうことは確実である」(IV-01.58)

(12) chəlé　khì　θí　jò　[$_C$ hə-　tài　wī　ʔəméjâ]　θí
　　(強調)　時代　(複)　この　1pl　出る　(先行)　前　(類似)

　　ɣì　ʔé.　[$_C$ ʔɔ́thɔ̄　lāɴkhâiɴ]　θí　ɣì　ʔé
　　良い　(否)　残る　後　(類似)　良い　(否)
「今の時代は、(他人より) 先に前に出るのも良くない。後に取り残されるのも良くない」(V-05.59)

(13) [$_C$ lə-　náɴ　bá]　nɔ́　ʔə-　ɣì　tháʊ　lɔ̂
　　(否)　覚えている　(否')　(題)　(名詞化)　良い　(最上)　(断定)
「思い出さないのが、いちばん良い」(014.44)

(14) kəphə̂ɴkəphə̂ɴ　[$_C$ chə-　chə̀ɴ　θēiɴnìkhlòɴ]　θí　ʔɔ́　chī
　　時々　CHə　降る　一日中　(類似)　ある　(婉曲)
「時々、一日中雨が降るということもある」(012.14)

(15) [$_C$ nə-　ʔɔ̀　thî]　nī
　　2sg　飲む　水　可能な
「あなたは水を飲んでもよい」

(16) [$_C$ plɛ̀tɔ̀　lóθà]　bá　kɛ́　wê　klà　lɔ̂　jābò
　　許す　(相互)　(当為)　可能な　(強意)　いつも　(断定)　JABO
「いつも互いに許しあうことができなければならないのだ」(V-04.231)

22.2　目的語相当の補文

目的語相当の補文は、補文の前に、補文を表す助詞 lé あるいは dè を置くことができる。この助詞は、補文を「表す」のであって、補文を形成する機能を持つのではない。なぜなら、省略可能だからである。

(17) jə-　kətɔ̀　(**lé** / **dè**)　[$_C$ ʔəwê　mə-　lì]
　　1sg　心配な　(補)　3se　(非現)　行く
「私は彼が行くのではないかと心配だ」

目的語相当の補文と類似するものに、引用文がある。補文と引用文は明確に区別しておく必要がある。下の (18) は補文、(19) は引用文である。

(18) ʔəwê　lɔ̀　[$_C$ ʔəwê　mə-　lɨ̀]
3se　語る　3se　(非現)　行く
「彼は自分は行くと言った」

(19) ʔəwê　lɔ̀　“ jə-　mə-　lɨ̀”
3se　語る　1sg　(非現)　行く
「彼は『私は行く』と言った」

lɔ̀「話す, 物語る, 言う」, càì「言う」, khlàiɴ「話す」, lɔ̀pərə̂ɴ「伝える」, ʔáɴcà「尋ねる」などの発話に関する動詞と、chô̂ɴmóɴ「考える」, ʔɔ́θà「(ふと) 思う」などの思考に関する動詞は、引用文を目的語として取ることができる。目的語として取っていると考えられる根拠は、補文と同様、名詞句に代替が可能だからである。

(20) ʔəwê　lɔ̀　“ ʔɔ́　chóɴ　lā　chàì”
3se　語る　いる　健康な　(願望)　CHAI
「彼は『健康でありますように』と言った」

—— ʔəwê　lɔ̀　ʔənɔ́　ʁâ
3sg　語る　それ　(疑)
「彼はそれを言ったのか」

また、補文と同様、引用文の前にも lé あるいは dè が前に現れることがある。

(21) ʔəwê　lɔ̀　lé / dè　“ jə-　mə-　lɨ̀”
3se　語る　(補)　1sg　(非現)　行く
「彼は『私は行く』と言った」

このように、目的語位置に現れた引用文は補文と類似している。

補文と引用文を識別するためには、(1) 補文では同一の対象を指示する直示表現が主文と同一になるのに対して引用文では同一になるとは限らない、および、(2) 補文には文助詞が現れないが引用文には文助詞が現れる、という二つの差異を利用することができる。

第一の差異に関しては、上の (18) と (19) を見ていただきたい。(18) の文で、主文の ʔəwê と補文の ʔəwê は同一の人物を指示している。ところが、(19) では、同一の人物を指示しているにもかかわらず、主文では三人称単数代名詞の ʔəwê が使われ、引用文においては一人称代名詞の jə- が使われている。発話をそのままコピーするのが引用文であるから、引用された発話の発話者が文全体の発話者と異なるのであれば、直示表現が異なるのも当然である。

第二の差異における、引用文には文末助詞が現れるという特徴は、ありとあらゆる発話が引用文になり得ることを反映したものである。次の引用文を見られたい。

(22) ʔəwê　lɔ̀　“ jə̀　nɔ́”
3se　語る　1SG　(題)
「彼は『私は...』と言った」

(23) ʔəwê　lɔ̀　“ jə̀　ʔáɴ　ʔé.　ʔɔ̀　θí　ʔɔ̀　ʔé”
3se　語る　1sg　食べる　(否)　飲む　(類似)　飲む　(否)
「彼は『私は食べなかった。飲みもしなかった』と言った」

(22) の引用文は文としては不完全な言語形式であるし、(23) の引用文は複数の文からなる。このように、ありとあらゆる発話は引用文になることができる。したがって、当然のことながら、文末助詞を従えた完全な文を引用することもできる。一方で、文末助詞は文に付くものなので、従属節の一種である補文には、現れることができない。例えば、文末助詞の xɔ̄ を用いて確かめてみよう。(18) と (19) に xɔ̄ を入れると、前者は不適格になるが、後者は適格である。

(24) *ʔəwê　lɔ̀　[$_C$ ʔəwê　mə-　lì　**xɔ̄**]
　3se　語る　3se　(非現)　行く　XO

(25) ʔəwê　lɔ̀　“ jə-　mə-　lì　**xɔ̄** ”
　3se　語る　1sg　(非現)　行く　XO
　「彼は『私は行くよ』と言った」

このように、補文と引用文とは別のものである。しかし、次の二つの文のように、補文と引用文は表面上まったく同じ形を取ることが可能なので、補文であるか引用文であるかを区別することが難しいこともあり得る。

(26) ʔəwê　lɔ̀　[$_C$ mə-　lì]
　3se　語る　(非現)　行く
　「彼は行くと言った」

(27) ʔəwê　lɔ̀　“ mə-　lì”
　3se　語る　(非現)　行く
　「彼は『行く』と言った」

以下に目的語相当の補文を取る動詞を見ていく。以下では動詞を意味的に共通性のあるものごとにまとめて分類しておいたが、この分類は、使役を表す動詞を除くと、あくまでも便宜的なものである。

22.2.1　発話等を介した情報の授受に関する動詞

lɔ̀「話す, 物語る, 言う」, cài「言う」, lɔ̀pərə̂ɴ「伝える」, ʔáɴcà「尋ねる」, tōʊɴpàiɴ「約束する」などの動詞である[1] 。

(28) jə-　**lɔ̀**　thá　ʔəθí　[$_C$ làláʊ　khó　mə-　ɣê　thàiɴ
　1sg　語る　(保持)　3PL　月末　(未来)　(非現)　来る　帰る

　chó　phí　ʔəθí　kháʊchwɛ̄　nāɴ　phə̂ɴ]
　持つ　(裨益)　3PL　そば　(少数)　～回
　「私は彼らに、月末になったらそばを買ってきてやると言ってあった」(V-03.88)

[1]動詞 khlàiɴ「話す」は、引用文を目的語として取ることができるが、補文は取らないようである。

(29) pə-　**lɔ̀**　bá　kɛ́　dè　[$_C$ ʔəθí　màbòmàchə̀ɴ
1pl　語る　(不抗)　可能な　(補)　3pl　助ける

cháichā　θí]　nɔ́　chī　lɔ̂
農民　(複)　(のだ)　(婉曲)　(断定)
「彼ら (鳥たち) が農民を助けてくれていると言うことができる」(II-01.16)

(30) **lɔ̀**　ɣə̂ɴ　jà　[$_C$ mə-　lì　cáiɴ　wī
語る　聞こえる　1SG　(非現)　行く　遊ぶ　(先行)

lé　**ʔə-**　lì　ʔɔ́　nāɴchūphʊ́]　lɔ̂
(場)　3sg　孫　所　少し　(断定)
「(彼女は) 私に、彼女の孫のところに少し行ってくる、と言ったよ」(V-02.18)

(31) [$_C$ lɨ̄kà　khʊ́dà　ʔəɣìtháʊ　chəjɔ̀　lə-　jɔ̀]　hə-　**cài**　lānâɴ　θí ...
この世　表面　最良　夏　一　夏　1pl　言う　(逆接)　(類似)
「この世で一番良いのは夏だと人は言うけれども...」(V-05.11)

(32) **lɔ̀pərə̂ɴ**　bá　ʔəwêθí　[$_C$ jə-　nɔ́　tháɴ　bá　ʔəθí
伝える　(催促)　3pe　1sg　覚えている　(変化)　(無意)　3PL

kò　nì　dè　lɔ̂]　nɔ́　chī　lɔ̂
(毎)　～日　(毎')　(断定)　(のだ)　(婉曲)　(断定)
「私が毎日彼らのことを思い出していますよと、彼らに伝えてくださいよ」(012.9)

(33) ʔəwê　**ʔáɴcà**　[$_C$ nī　lə-　nī]
3se　尋ねる　できる　(否)　できる
「彼はできるかどうか聞いた」

(34) thʊ́pəɣʊ́ʊ́　nɔ́　**tōʊɴpàiɴ**　làɴ　θà　lé　[$_C$ ʔəwê
梟　(題)　約束する　(帰的)　(再帰)　(補)　3se

mə-　phʊ́lâɴ　chəkəlò]　nɔ́　chī　lɔ̂
(非現)　与える　謝礼　(のだ)　(婉曲)　(断定)
「梟は、謝礼を払うことを約束した」(I-03.20)

▷ tōʊɴpàiɴ は、おそらく、モン語 (Mon) の tàŋpaɲ「承知する」に由来する。

22.2.2　視覚に関する動詞

jʊ̄「見る」、dá「見える」などの視覚に関する動詞である。

(35) tháɴ　**jʊ̄**　wê　[$_C$ lé　θéiɴ　phàdʊ́　khî　nɔ́
上る　見る　(強意)　(場)　木　大きな　先　(題)

ʔɔ́　dè　ʔəthāphə̀ɴ]
ある　(共)　穴
「(猟師は木に) 上って、(その) 大きな木の先に穴があるのを見た」(IV-05.14)

(36) [$_C$ càɴ　ʔɔ́　θə̄ɴ　phlóʊɴ]　nɔ́
　小屋　ある　三　～個　(題)

mwɛ̄　nə-　**dá**　chī　ʁâ
(繋)　2sg　見える　(婉曲)　(疑)
「小屋が三つあるのがお前は見えるか?」(I-06.32)

(37) təwâphjāphʊ́　θíləphá　ʔəθí　mə-　**dá**　báθà
生徒　(複)　3pl　(非現)　見える　(欲求)

lé　[$_C$ cɔ̀thōɴ　mə-　dàʊnɛ́　làɴ　lâɴlàɴʔɔ̀thîcóɴ]　nɔ́ ...
(補)　(人名)　(非現)　見せる　(下方)　虹　(前提)
「生徒達は、チョートンが虹を見せてくれるのを見たくて...」(II-10.6)

(38) **dá**　bá　wê　[$_C$ phlòʊɴchɨ̀phʊ́　chə-　màdə́ɯɴmànà
見える　(不抗)　(強意)　カレン人　CHə　いじめる

lé　khāɴməɲā　klà]　nɔ́tā ...
(場)　外国　間　(前提)
「外国でカレン人を人々がいじめているのを見て...」(IV-07.60)

▷ この例では、目的語の phlòʊɴchɨ̀phʊ́ が主題化されて補文の初頭に現れている。つまり、補文の中でも主題化は生じる。

(39) lə-　**dá**　[$_C$ nə-　ɣɛ̂　thánɴ　cáiɴkwè]
(否)　見える　2sg　来る　(上方)　遊ぶ

lə̀ɴ　bá　jái　phɔ̄　nà
もはや　(否')　久しい　(臨場)　～だなあ
「あなたが来るのを見なくなって久しいなあ」(V-02.108)

22.2.3　聴覚に関する動詞

chôɴná「聞く」、ɣə̂ɴ「聞こえる」、nāɣə̂ɴ「聞こえる」などの聴覚に関する動詞である。

(40) jə-　**chôɴná**　[$_C$ ʔəwê　mà　thàkhʊ́]
1sg　聞く　3se　する　歌
「私は彼が歌を歌うのを聞いた」

(41) lái　nɔ́　**ɣə̂ɴ**　cò　[$_C$ thwí　ɕā　lɔ̀　chə̀　bênɔ́θò]　ɣòɴ ...
鳶　(題)　聞こえる　(遠隔)　犬　老いた　語る　CHə　そのように　(継起)
「鳶は、老いた犬がそのように言ったのを聞いて...」(I-01.10)

(42) ʔə-　phūkhwâ　**ɣə̂ɴ**　bá　lé　[$_C$ ʔə-　wɛ̄khwâ　dʊ́ɕā　thánɴ]
3sg　弟　聞こえる　(不抗)　(補)　3sg　兄　豊かな　(変化)

nɔ́tā |　təmjâɴ　bá　ʔə-　θà　dʊ́mā　lɔ̀
(前提)　奇妙な　(基準)　3sg　心　大変　(断定)
「弟は、彼の兄が豊かになったと聞いて、大変驚いた」(II-14.14)

(43) jə-　**nāɣə̂ɴ**　cò　[$_C$ dí　ɣáɴkò]
1sg　聞こえる　(遠隔)　蛙　鳴く
「蛙が鳴くのが聞こえる」(I-sen.5)

(44) nāɴphɔ̂ʔwà　lə-　ɣà　**ɣə̂ɴ**　bá　[$_C$ θâɴwàɴphʊ́　xwèɪɴ]　nɔ́ |
(人名)　一　～人　聞こえる　(不抗)　郭公　鳴く　(前提)

jʉ̄ɪ　bá　ʔə-　θà　cwámā　lɔ̂
切ない　(無意)　3sg　心　大変　(断定)
「ナウンポーワーは、郭公が鳴くのを聞いて、大変切なくなった」(V-01.33)

22.2.4　思考に関する動詞

chôɴmóɴ「考える」, ʔɔ́θà「(ふと) 思う」, nɛ̀「信じる」, mʉ̂ʉlá「望む」、jāthəɲā「祈念する」などの思考に関する動詞である。

(45) [$_C$ mə-　bá　thōʊɴcà　mə-　bá　ɣáɴ　klə̀　lɔ̂]　nɔ́
(非現)　(当為)　堪える　(非現)　(当為)　泣く　いつも　(断定)　(題)

mʉ́ʉphʊ́　**chôɴmóɴ**　làɴ　thàiɴ　θà　ʁɔ̄
少女　考える　(帰的)　(再度)　(再帰)　XO
「(道を誤ったら) 堪え忍ばなければならない、そしていつも泣かなければならないということを、少女達よ、考えておきなさい」(IV-08.11)

(46) jə-　**ʔɔ́θà**　bá　[$_C$ mwɛ̄　nə-　lʉ̀　tháɴ　ʔɔ́
1sg　思う　(無意)　(繋)　2sg　行く　(上方)　いる

lé　ʔəphâɴkhʊ́　lə-　thə̂ɴ　ʔò　chʉ̄　jā]
(場)　上　一　～階　(遠方)　(婉曲)　JA
「私は、お前が上の階に行っているのだろうか、と思ったよ」(IV-04.24)

(47) jə-　**ʔɔ́θà**　bá　[$_C$ nə-　kɛ́　tháɴ
1sg　思う　(無意)　2sg　成る　(完成)

dòʊɴkənâɴ　mə̀ɴnɛ̀cà　θɛ̀　jàʊ]　mɨ̂
町　マネージャー　など　(完)　～だよ
「私は、お前が町レベルの管理者になっているものだとてっきり思っていたよ」(V-03.54)

(48) **mà**　dá　ʔəθí　**θà**　[$_C$ **jə-**　tháɴthɔ̂　cwámā　jàʊ]　bádòɴ
する　(限定)　3pl　心　1sg　発展する　大変　(完)　たぶん
「たぶん、私が出世したのだと思ったのだろう」(V-03.55)

▷ mà θà は「考える」という意味の慣用句。

(49) jə-　**nɛ̀ʔáɴ**　[$_C$ ʔəwê　mə-　lʉ̀]
1sg　信じる　3se　(非現)　行く
「私は彼が行くことを信じている」

(50) jə-　**mûlā**　[$_C$ nə-　ʔánʔàʊ]　mwɛ̄　ʔé
1sg　望む　2sg　誉める　(繋)　(否)
「私は、あなたが誉めてくれるのを期待しているのではない」(V-04.229)

(51) jə-　**jāthəɲā**　[$_C$ ʔəwê　mə-　thánthɔ̂]
1sg　祈る　3se　(非現)　発展する
「私は彼の発展を祈っている」

▷ モン語 rèətənèə に由来する。同じ意味を、ビルマ語からの借用語 chûtōɴ を用いて表すことも多い。こちらはビルマ語の shû táuɴ-「祈る」に由来する。

22.2.5　知識や記憶に関する動詞

θíjâ「知る」、nánɴ ～ nɔ́「覚えている」、θànánɴ ～ θànɔ́「忘れる」などの動詞。

(52) klà　nɔ́　**θíjâ**　bá　wê　[$_C$ thʊ́pəɣʊ́ʊ　ʔə-　chəkhlàiɴ
烏　(題)　知る　(不抗)　(強意)　梟　3sg　言葉

lə-　tɔ̀lòɴ　bá]　nɔ́ |　θàɣɛ̂thánɴ　chə̀　ʔəkhʊ́cònɴ ...
(否)　まっすぐな　(否')　(前提)　怒る　CHə　(理由)
「烏は、梟の言葉が本当ではなかったことを知って怒ったので...」(I-03.35)

(53) khəmlənɴ　θí　**θíjâ**　wê　[$_C$ təwânphʊ́　chè　lànɴ　lāiɴtənɴ |
民衆　(類似)　知る　(強意)　村人　刺す　(下方)　あか汲み

mə-　θà　θài　nónɴ]　nɔ́　lə-　blànɴ　tā ...
(非現)　汲む　乾く　池　(題)　一　～回　(前提)
「(魚の) 民たちも、村人があか汲み (泥かき器) を設置して、池を干拓しようとしていることを知って...」(III-15.7)

(54) [$_C$ cɔ̀phâθʊ́ɣɛ̀　lə-　ɣà　dòʊnlɨ̄kà　khʊ́dà　jò
(人名)　一　～人　世界　表面　この

mwɛ̄　ʔɔ́　dài　lə-　ʔɔ́　dài]　nɔ́
(繋)　いる　まだ　(否)　いる　まだ　(題)

ʔəwê　lə-　**θíjâ**　lə̀ɴ
3se　(否)　知る　もはや
「チョーパートゥーゲーがこの世にまだいるのかいないのか、彼女はもう分からなかった」(V-04.24)

(55) jə-　**nánɴ**　thánɴ　thàiɴ　[$_C$ ʔəwê　mə-　lì　kèkhó]
1sg　覚えている　(変化)　(再度)　3se　(非現)　行く　明日
「私は、彼が明日行くことを思い出した」

(56) jə-　**θànánɴ**　[$_C$ ʔəwê　lì　məɣī]
1sg　忘れる　3se　行く　昨年
「私は、彼が去年行ったことを忘れていた」

22.2.6　喜び、好き嫌い、心配、恐れ、後悔などの様々な感情に関する動詞

θà xwî「嬉しい」、bá θà「気に入る」、khū θà「不安な」、kətɔ̀「心配な」、jôNwɛ̄「憂慮する」、θàmɛ́「恐れる」、thəŋôN「後悔する」などの動詞。

(57) [$_C$ jə-　dá　bá　nə̀]　jə-　**θà　xwî**
　　1sg　会う　(不抗)　2SG　1sg　嬉しい
「私はあなたに会えて嬉しい」(002.21)

▷ 厳密には、θà xwî は単語ではなく、θà「心」+xwî「軽い」という構成の慣用句。

(58) mwɛ̄　jə̀　nɔ́ |　lé　[$_C$ thʊ́kò　kɛ́　thánN　cəxwà]　jò
(繋)　1SG　(前提)　(補)　サイチョウ　成る　(完成)　王　(題)

jə-　**bá θà**　lə̀N　ʔé
1sg　気に入る　もはや　(否)
「私としては、サイチョウが (鳥の) 王になっているのは、もういやだ」(II-02.32)

▷ 厳密には、bá θà は単語ではなく、bá「当たる」+θà「心」という構成の慣用句。

(59) ʔèɣòNdɔ̀　[$_C$ ʔàiθài　θí　mə-　ʔánlá　ʔə̀]　nɔ́
そして　修験者　(類似)　(非現)　叱る　3SG　(題)

ʔəwê　**khū θà**　ʔəkhʊ́còN ...
3se　不安な　(理由)
「そして、修験者も自分を叱るのではないかと不安だったので...」(006.90)

▷ 厳密には、khū θà は単語ではなく、khʊ́「暑い」+θà「心」という構成の慣用句。

(60) **khū θà**　[$_C$ cəxwà　mə-　mà　θî　ʔə̀]　nɔ́ |
不安な　王　(非現)　(使役)　死ぬ　3se　(前提)

ʔəwê　bá　thàiN　phʊ́ɪ　ʔàiθài　nɔ́ ...
3se　(当為)　帰る　背負う　修験者　(前提)
「王が自分を殺すことを恐れて、彼は修験者を背負って帰らねばならず...」(III-04.20)

(61) ʔè　cáiN　chəkhū　klà　ʔáʔá　nɔ́ |
(条件)　歩く　暑さ　間　多く　(題)

kətɔ̀　lé　[$_C$ kəlàʊ　thánN　thàiN]　chī
心配な　(補)　ぶり返す　(完成)　(再度)　(婉曲)
「暑い中をたくさん歩くと、(病気が) ぶり返すのが心配なんですよ」(IV-04.130)

(62) thòNnɔ́　θàʊcà　**kətɔ̀**　bá　[$_C$ xîphàN　mə-　thàiN]
すると　(人名)　心配な　(無意)　(人名)　(非現)　帰る
「するとタウチャーは、フイパウンが帰ってくるのではないかと心配になった」(IV-04.227)

(63) **jônwɛ̄**　[$_C$ ʔəcá　mə-　làɴjwà]
憂慮する　人生　(非現)　堕落する
「人生がダメになってしまうことを憂慮している」(IV-07.1)

(64) jà　nɔ́　jə-　**θàmɛ́**　[$_C$ mə-　ʔáɴmə̂ɴʔáɴ　jà]　nɔ́　lɔ̂
1SG　(題)　1sg　恐れる　(非現)　使役する　1SG　(のだ)　(断定)
「私は、(人間が) 自分をこき使うことを恐れているのだ」(I-04.19)

(65) bá　**thəŋôɴ**　thàiɴ　dè　[$_C$ ʔəcá　phɔ̂　xî　làɴjí　dɔ̀ |
(当為)　悔いる　(再度)　(補)　人生　花　美しい　枯れる　遂に
mèiɴ　phlɔ́　lə-　xî]
名前　有名な　(否)　美しい
「人生の美しい花がしまいには枯れてしまって悪名だけが残ったことを悔いなければならない」(IV-08.16)

22.2.7　使役を表す動詞

第 28 章で TYPE 2 と呼んでいる使役構文を作る動詞である。TYPE 2 の使役構文を作る働きのある動詞には、ʔáɴmə̂ɴ「命ずる」、plɛ̀tɔ̀「許可する」(plɛ̀ という形もある)、phílâɴ「与える」がある。

(66) jə-　ʔáɴmə̂ɴ　[$_C$ ʔəwê　lì]
1sg　命じる　3se　行く
「私は彼に行くように命じた」

(67) jə-　plɛ̀tɔ̀　[$_C$ ʔəwê　lì]
1sg　許す　3se　行く
「私は彼に行くことを許可した」

(68) jə-　phílâɴ　[$_C$ ʔəwê　lì]
1sg　与える　3se　行く
「私は彼に行かせてやった」

このタイプの使役構文に見られる特徴の詳細については、第 28 章を見られたい。下に若干の実例を示す。

(69) **ʔáɴmə̂ɴ**　[$_C$ jə-　lì　khlàiɴdə́ɯɪɴ]
命じる　1sg　行く　おしゃべりするする
「(彼は) 私に、行っておしゃべりするよう命じた」(IV-04.72)

(70) jə-　mə-　**ʔáɴmə̂ɴ**　[$_C$ təwâɴphɔ́chā　tàiɴ　dòɴ　jū
1sg　(非現)　命ずる　村人　作る　(模倣)　(試行)
bê　jə-　ʔɔ̀　bá　chəthî　nɔ́　θò]　nàɴ　thí
(比定)　1sg　飲む　(不抗)　液体　あの　(比定')　(少数)　～回
「私が飲んだ液体のようなものを作ってみるよう、村人に頼もう」(IV-05.39)

(71) **plɛ̀**　ʁàɴ　wê　[$_C$ lì　wê　lɯ́
許す　(下方)　(強意)　行く　(強意)　(場)

phjāmɯ́ɕā　təwâɴ　ʔò]　jāwò
おばあさん　村　(遠方)　JABO
「(彼は彼らに) おばあさんの村へ行くことを許した」(026.33)

22.2.8　繋辞動詞 mwɛ̄

mɛ̄ あるいは mə- とも発音する。いわゆる繋辞動詞 (copula verb) である。主語の指示対象が、目的語の表す属性を持つことを表す。

(72) jə-　mwɛ̄　phlòʊɴ
3sg　(繋)　カレン
「私はカレン人だ」

文を強調したいとき、その文をこの mwɛ̄ の補文にして表現することがしばしばある。次の例を見られたい。

(73) ʔəwê　mwɛ̄　[$_C$ ʔə-　mə-　lì]
3se　(繋)　3sg　(非現)　行く
「彼は (絶対に) 行く」

主文の主語と、補文の主語は常に同一指示である。上の例では、主文の ʔəwê と補文の ʔə- が同一指示になっている。

補文を取った mwɛ̄ の否定には、動詞を繰り返すという特殊な方式が使われることがある。

(74) **mwɛ̄**　[$_C$ { ʔəwê / ʔə- }　mə-　lì]　**mwɛ̄**　ʔé
(繋)　3sg(強) / 3sg(弱)　(非現)　行く　(繋)　(否)
「彼は (絶対に) 行く」

ここでは、補文の後でもう一度 mwɛ̄ が繰り返され、それに否定辞の ʔé が付くという形で否定文が作られている。

下に mwɛ̄ が補文を取った例をいくつか挙げておく。

(75) **mwɛ̄**　[$_C$ jə-　má]
(繋)　1sg　誤った
「俺が間違っていたのだ」(V-01.97)

(76) **mwɛ̄**　[$_C$ pɔ̂　tàiɴ]　lɛ̂
(繋)　誰　作る　(疑)
「一体、誰が作ったのか?」(V-02.48)

(77) bònáiɴjò　nɔ́　màɴcɔ̀thôɴdɯ́　lə-　ɣà　**mwɛ̄**　[$_C$ ʔə-　náɴ　dài
現在　(題)　(人名)　一　～人　(繋)　3sg　覚えている　まだ

ʔə-　chəkhlàiɴ　dài]　ʁâ　nɔ́　θíjâ　ʔé　kənɛ̂
彼の　言葉　まだ　(疑)　(題)　知る　(否)　KANE
「今、トンドゥーおじさんが自分の (言った) 言葉をまだ覚えているかどうか分からないわな」(V-03.66)

(78) khìɴθìtâ　**mwɛ̄**　[$_C$ ʔə-　ʔɛ́　ʔə̀]　**mwɛ̄**　ʔé
(人名)　(繋)　3sg　愛する　3SG　(繋)　(否)
「キンティーダーは、彼を愛しているのではない」

(79) cɔ̂　lə-　ɣà　**mwɛ̄**　[$_C$ mə-　chôɴná]　**mwɛ̄**　ʔé
(人名)　一　～人　(繋)　(非現)　聞く　(繋)　(否)
「あなたは (私の言うことを) 聞いてはくれないだろう」(V-05.114)

22.2.9　現実法・非現実法の対立

上で、様々な目的語相当の補文を見てきた。目的語位置に現れる補文は、現実法 (realis modality)・非現実法 (irrealis modality) の対立を持つか否かという点において、異なる振る舞いを見せる。一般的に補文は、現実法・非現実法の対立を持つ。次の例を見られたい。

(80) a. jə-　dá　[$_C$ ʔəwê　klí]
1sg　見える　3se　走る
「私は彼が走るのを見た」

b. jə-　dá　[$_C$ ʔəwê　mə-　klí]
1sg　見える　3se　(非現)　走る
「私は彼が走ろうとするのを見た」

補文の表す事象が、主文の表す事象に時間的に後続するとき、補文には非現実法を表す動詞助詞 mə- が現れる。上の (b) を見られたい。ところが、上で「使役を表す動詞」として挙げた動詞が取る補文、つまり、第 28 章で「TYPE 2 の使役構文」と呼んでいる構文の補文においては、mə- が決して現れない。

(81) a. jə-　ʔánmə̂ɴ　[$_C$ ʔəwê　lɨ̀]
1sg　命じる　3se　行く
「私は彼に行くように命じた」

b. *jə-　ʔáɴmə̂ɴ　[$_C$ ʔəwê　mə-　lɨ̀]
1sg　命じる　3se　(非現)　行く

上の例で、「命じる」という事象と「行く」という事象の時間的関係を考えれば、「命じる」ほうが「行く」に先行しているはずである。ところが、補文には mə- が決して現れない。このような特徴を持つのは、被使役行為を表す補文だけである。第 28 章では、この事実に基づいて TYPE 2 の使役構文を定義している。

実は、上で見てきた動詞のうち、thəŋôɴ「後悔する」が取る補文には、普通、mə- が現れない (例文 (65) を参照)。しかし、この動詞の補文に mə- が現れないことと、使役構文

に mə- が現れないことの間には、根本的な違いがある。使役構文の場合、補文が表す事象が、主文が表す事象に時間的に後続しているにもかかわらず、mə- が生じ得ないのである。一方、thəŋôɴ の場合には、「後悔する」という心理の性質上、補文の表す事象が、主文の表す事象に先行するということはあり得ない。過去に生じた事象についてのみ、「後悔する」という心理が発生し得るからである。すなわち、thəŋôɴ の場合に mə- が現れないのは、将来起こることを後悔することはできないという現実上の時間的順序を反映している。使役構文の場合には、mə- が現れないことの原因を、このような時間的順序に帰することができない。使役構文に mə- が現れないのは、構文上の要請であると思われる。

使役構文の補文のみにこのような制限が現れるのは、使役という事象そのものの性質に関係している可能性がある。使役という事象において、使役者 (causer) は、被使役者 (causee) に何らかの形で働きかける。そして、この働きかけがなければ被使役者は動作を開始しないはずである。つまり、使役者の動作は被使役者の動作に直接的な影響力を持っている。このような性質が、補文において mə- が出現しないという現象につながっているのではないだろうか[2] 。

22.3　斜格補語相当の補文

一部の側置助詞は、補文を取ることができる。現在、補文を取ることが確認できている側置助詞は、dè と bêθò である。下に例を挙げる。

(82) ʔánbɯ́ làɴ ʔəθí θà **dè** [$_C$ lòɴ khà ʔánɴ chəphɔ́chəxā] ...
養う (下方) 3pl (再帰) (共) 追う 撃つ 食べる 動物
「(彼らは) 動物を捕まえて食べることで生活していた」(II-04.3)

▷ この dè は手段を表している。

(83) jə- pɔ̄ bá nə- lái lə- béiɴ nɔ́ |
1sg 読む (不抗) 2sg 手紙 一 ～枚 (前提)

bê [$_C$ phlòʊɴ pwàiθà khâ ʔɔ̀ bá thî khléiɴ lə- khwà] **θò**
(比定) 人 疲れる 時 飲む (不抗) 水 冷たい 一 ～杯 (比定')

khléiɴchó khwái lé θà phàɴ
涼しい (徹底) (場) 心 中
「あなたの手紙を読んだところ、疲れた人が冷たい水を 1 杯飲んだかのように、心の中が涼しくなりました」(009.7)

22.4　ʁâ や lɛ̂ の現れる補文

補文の末尾には、しばしば、「疑問」を表す文末助詞と同形の ʁâ(ʁáとも発音される) や lɛ̂(lɛ́ とも発音される) が現れることがある。次の例を見られたい。なお、ʁâ や lɛ̂ の現れた目的語相当の補文は、主題化されて文頭位置に現れることが多い。

[2]Foley and Van Valin (1984:268-272) は、通言語的に、使役を表す構文において節と節の統語的連結の緊密さが最も強くなると言っている。ポー・カレン語のこの現象も、このような傾向の一つの現れと考えられるだろう。

(84) ʔəjò　ɣì　**ʁâ**　θíjâ　ʔé
　　これ　良い　　知る　(否)
　　「これは良いかどうか知らない」

(85) chənɔ́　ʔɔ́　**lɛ̂**　θíjâ　ʔé
　　何　ある　　知る　(否)
　　「何があるのか知らない」

先に、補文と引用文の差異についての議論において、文末助詞は補文の中に現れないということを述べた。この ʁâ や lɛ̂ が文末助詞だとすると、文末助詞が補文の中に現れないとする一般化に反することになる。この問題をどのように考えるべきだろうか。

さて、文末の ʁâ や lɛ̂ が持っている「疑問」を表す機能とは、厳密に考えると次のように捉えられる。すなわち、ある文において文末に ʁâ や lɛ̂ が現れたとき、ʁâ(および lɛ̂ の一部の用法) の場合は文の表す命題の真偽について、lɛ̂ の場合は不定になっている何らかの内容について、聞き手が話し手に情報を与えなければならない、ということである。例えば、次の例における ʁâ と lɛ̂ は、聞き手の答えを待ち受けているという信号になるので、これを耳にした聞き手は命題の真偽や不定の内容についての自分の考えを提示しなければならない。

(86) ʔəjò　ɣì　ʁâ
　　これ　良い　(疑)
　　「これは良いですか?」

(87) chənɔ́　ʔɔ́　lɛ̂
　　何　ある　(疑)
　　「何がありますか?」

文末の ʁâ や lɛ̂ の働きは基本的には上記のようなものだと考えられる。もちろん、語用論的には、これらが文末に現れた文は、疑問だけでなく、感嘆、納得、確認などの様々な意味を持ち得る。

一方、(84) や (85) のような補文の ʁâ と lɛ̂ は、聞き手に対して情報の提供を要求しない。ʁâ の場合は命題の真偽が問題になっているということを表しているだけであるし、lɛ̂ の場合は不定の内容が問題になっているということを表しているだけである。したがって、このような文に対して、聞き手は、命題の真偽や不定の内容についての考えを提示する必要がない。つまり、補文に現れる ʁâ や lɛ̂ の機能は、文末助詞の ʁâ や lɛ̂ とは根本的に異なるのである。

そこで、本稿では、補文の末尾に現れた ʁâ や lɛ̂ は文末助詞ではなく、補文を導く助詞なのだと考えることにする。補文を導入するとともに、ʁâ の場合はその文において命題の真偽が問題になっているということ、lɛ̂ の場合はその文において不定の内容が問題になっているということを表す。この ʁâ や lɛ̂ は、補文を「表す」機能を持つ lé や dè と違って、補文を「導入する」機能を持っていると考えられる。なぜなら、上の (84) や (85) から ʁâ や lɛ̂ と取り除いてしまうと、文そのものが成り立たなくなってしまうからである。

(88) *ʔəjò　ɣì　θíjâ　ʔé
これ　良い　知る　(否)

(89) *chənɔ́　ʔɔ́　θíjâ　ʔé
何　ある　知る　(否)

結局、補文の中に文末助詞が現れないという一般化は放棄する必要がない。

ʁâ や lɛ̂ は、どのような動詞の補文にも現れることができるとは限らない。現段階で分かっているのは、次のような動詞である。

• 主語相当の補文

thîchà「確かな」

(90) [$_C$ jə-　mə-　lì]　ʁâ　**thîchà**　dài　ʔé
1sg　(非現)　行く　確かな　まだ　(否)
「私が行くかどうかまだ確実ではない」

• 目的語相当の補文

lɔ̀「話す, 物語る, 言う」

(91) [$_C$ ʔə-　mōphā　phîphʉ̂ʉ　θɛ̀
彼の　父母　祖父母　(複)

mwɛ̄　phlòʊɴ]　lɛ̂　**lɔ̀**　wê　ʔé
(繋)　誰　語る　(強意)　(否)
「彼は、自分の父母や祖父母が誰なのか、言わなかった」(V-04.178)

kətɔ̀「心配する」

(92) [$_C$ thîphàɴ　lə-　ɣà　pàthìpàθò　hə̀　khlàɪɴdə́ɯɴ　hə̀
(人名)　一　～人　つきあう　1PL　話す　1PL

mə-　θí]　ʁâ　nɔ́　**kətɔ̀**　bá　dàlɔ̂
(非現)　できる　(題)　心配する　(無意)　(断定)
「ティパウンが俺達と付き合ったり話をしてくれることができるかどうか、心配しているのだ」(001.3634)

θíjâ「知る」

(93) [$_C$ ʔəwêdá　ʔəkí　ʔá |　ʔánmə̂ɴʔánɴ　hə̀
3sg　垢　多い　使役する　1PL

bê　thʉ́kò　θò　chī]　ʁá　**θíjâ**　dài　ʔé
(比定)　サイチョウ　(比定')　(婉曲)　知る　まだ　(否)
「彼が好みがうるさくて、サイチョウのように私達をこき使うかどうかは、まだ分からない」(II-02.35)

(94) [$_C$ láiphlóʊɴ　báʔóʊɴ　nɔ́　mwɛ̄　nɔ́]　lɛ̂
　　単語　???　(題)　(繋)　何

lə-　**θíjâ**　bá |　ʔáɴcà　jʊ̄　phʊ̂ʊ̀bɨ̀　nɔ́　lɔ̂
(否)　知る　(否')　尋ねる　(試行)　大叔母　(のだ)　(断定)
「バーオンという単語は何なのか分からなかったので、大叔母さんに聞いてみた」
(V-02.33)

実は、時として、相手に対して情報を求める文において、θíjâ ʔé「知らない」が用いられることがある。市場で次のような表現を聞くことがある。

(95) ʔəjò　ɕá　lɛ̂　**θíjâ**　**ʔé**
これ　いくら　知る　(否)
「これはいくらですか?」

θíjâ ʔé を用いると、婉曲な表現になるという。これは一見、補文中の lɛ̂ が相手に対して情報を求めないとした、上での議論に対する反例のようにも見える。しかし、本稿では、この θíjâ ʔé を、婉曲を表すための一種のイディオムであると考える。

22.5　目的語として補文を取る動詞の特殊なもの

目的語として補文を取る動詞の中には、補文との関わりにおいて統語的に特殊な振る舞いをする動詞がある。現在までに見つかっているのは、bàʊ「近い」、bádòɴ「似ている」の二つである。

まず、例を見ておく。最初の bàʊ は、補文が表す事象が近い将来に生起することを表す。

(96) **bàʊ**　[$_C$ ʔəwê　mə-　ɣɛ̂　thàiɴ]
近い　3se　(非現)　来る　帰る
「彼が帰って来るのも近い」

bádòɴ は、補文の表す事象の生起が推量されたものであることを表す。

(97) **bádòɴ**　[$_C$ ʔəwê　mə-　ɣɛ̂　thàiɴ]
似ている　3se　(非現)　来る　帰る
「彼は帰って来るようだ」

これらの文は統語的に特殊である。なぜなら、これらの文の主語の位置が空いているにもかかわらず、この位置に何らかの名詞を置くことはできないからである。ポー・カレン語は、文脈によって復元可能な名詞を「省く」ことのできる言語である。したがって、主語の位置に名詞が現れないということはよくあることであるが、その場合は、そこにしかるべき主語名詞を復元することが可能である。ところが、上の例では、主語の位置に復元可能な名詞が存在しない。このような現象は、ここで述べる種類の文にしか観察できない。その意味で、このような文は、ポー・カレン語の文法の中で非常に特殊であると言える。

実は、これらの文はもう一つの意味で特殊である。これらの補文の主語は、主文の主語の位置に置くことができる[3]。

[3] この現象は、生成文法理論等では繰り上げ (raising) の概念を用いて説明されるだろう。

(98) ʔəwê　**bàʊ**　[$_C$ mə-　ɣɛ̂　thàiɴ]
3se　近い　(非現)　来る　帰る
「彼が帰って来るのも近い」

(99) ʔəwê　**bádòɴ**　[$_C$ mə-　ɣɛ̂　thàiɴ]
3se　似ている　(非現)　来る　帰る
「彼は帰って来るようだ」

このとき、補文には決して、主語が現れることはできない。

(100) *ʔəwê　**bàʊ**　[$_C$ ʔə-　mə-　ɣɛ̂　thàiɴ]
3se　近い　3sg　(非現)　来る　帰る

(101) *ʔəwê　**bádòɴ**　[$_C$ ʔə-　mə-　ɣɛ̂　thàiɴ]
3se　似ている　3sg　(非現)　来る　帰る

補文を含めて、ポー・カレン語の従属節には、主語名詞句が現れることのできない従属節は存在しない。したがって、この点においても、bàʊ と bádòɴ が取る補文は特殊である。
　下に、bàʊ と bádòɴ が補文を取った例を挙げる。

(102) **bàʊ**　thánɴ　[$_C$ chə-　mə-　chòɴ]　jàʊ
近い　(変化)　CHə　(非現)　降る　(完)
「もうすぐ雨が降る」

(103) **bàʊ**　thánɴ　[$_C$ θwíwɔ̀θʊ́ʊ́　mə-　thàiɴ]　|
近い　(変化)　(人名)　(非現)　帰る

khâ　thánɴ　kháɴ　ʔəkhâ　nɔ́ ...
踏み出す　(上方)　脚　時　(題)
「トゥイーウォートゥーが帰ろうとして脚を踏み出したとき...」(V-04.122)

(104) lé　ʔəwê　**bàʊ**　thánɴ　[$_C$ mə-　θî]　khâ　nɔ́
(場)　3se　近い　(変化)　(非現)　死ぬ　時　(題)

kò　nʊ̄　thàiɴ　wê　ʔə-　phʊ́　nī　ɣà　nɔ́　lɔ̂
呼ぶ　(引寄)　(元位)　(強意)　3sg　子供　二　～人　(のだ)　(断定)
「(老人は) 死期が近づいたとき、2 人の子供を呼び寄せた」(II-14.2)

(105) ʔəwê　**bádòɴ**　[$_C$ mə-　lʊ̀　lɔ̂]
3se　似ている　(非現)　行く　(断定)
「彼は行くようだ」(003.408)

(106) θɔ̂ɴ　lə-　dʊ̀ʊ　jò　**bádòɴ**　[$_C$ ʔánɴ　ʔwí　ləcɛ̀]
おかず　一　～個　この　似ている　食べる　美味な　少し
「このおかずはちょっとおいしそうだ」(001.705)

(107) **bádòɴ**　[$_C$ kɛ́　lánɴ]　lə-　ʔé
似ている　可能な　(完成)　もはや　(否)
「もはやできないようだ」(008.10)

なお、bádòɴ は、しばしば、「付け足し」(afterthought) によって文の後に置かれることがある。

(108) ʔəwê　mə-　lì　**bádòɴ**
3se　(非現)　行く　似ている
「彼は行くだろう、たぶん」

(109) chə-　mə-　chə̀ɴ　lɔ̂　**bádòɴ**
CHə　(非現)　降る　(断定)　似ている
「雨が降るだろう、たぶん」

第23章　関係節

ポー・カレン語には以下に定義するように3種類の**関係節**がある。この章では、これらがどのように使い分けられているかを、実際のテキストを調査することによって明らかにする。

23.1　ポー・カレン語の関係節の定義と種類

まず最初に「関係節」の定義を行う。ポー・カレン語には、「名詞 (句)」と「動詞文として成立可能な構造」が並置され、全体として名詞句になる構造が、次に図示するように2種類ある。

(a) [$_{\text{名詞句}}$ [名詞 (句)]　[動詞文として成立可能な構造]]
(b) [$_{\text{名詞句}}$ [動詞文として成立可能な構造]　[名詞 (句)]]

(a) と (b) の違いは、[名詞 (句)] と [動詞文として成立可能な構造] の順序である。(a) と (b) のような構造における [動詞文として成立可能な構造] の部分を「関係節」と呼ぶ。また、[名詞 (句)] の部分を「主要部名詞」と呼ぶ。なお、(a) の場合には、関係節を導く標識 lé が介在する [$_{\text{名詞句}}$ [名詞 (句)] lé [動詞文として成立可能な構造]] のような構造も含む。

これがポー・カレン語の関係節の定義である。この定義にあてはまるものには次のものがある。

1) 関係節を表す標識が現れないもの。これには次の2種類がある。
　1-1) 関係節が主要部名詞の後に現れるもの。これを**「後置型」**と呼ぶ。
　1-2) 関係節が主要部名詞の前に現れるもの。これを**「前置型」**と呼ぶ。
2) 関係節を表す標識が現れるもの。これを**「標識介在型」**と呼ぶ。関係節は常に主要部名詞の後に現れる。

この3種類のうち、1-1の「後置型」と2の「標識介在型」が上の定義の (a) に相当し、1-2の「前置型」が (b) に相当する。このように、ポー・カレン語の関係節には、関係節が主要部名詞の前に置かれるものと後に置かれるものとがある。

ところで、語順の普遍性についての先駆的研究である Greenberg (1966:91) は次のように述べる。

Universal 24　If the relative expression precedes the noun either as the only construction or as an alternate construction, either the language is postpositional, or the adjective precedes the noun or both.

つまり、関係節を名詞の前に置くことができる言語は、後置詞を持つ、ないしは、形容詞を名詞の前に置くということである。ポー・カレン語の場合、前置詞に相当するのは側置助詞である。側置助詞には、名詞の後に置かれるものはない。また、adjective という用語を、ポー・カレン語においては「単独で現れた状態動詞」と解釈することにすれば、後で見るように、単独で現れた動詞は名詞に後続するので (ただし主要部名詞が主語に相当する場合)、形容詞は名詞の前には置かれないということになる。したがって、ポー・カレン語は、Greenberg の提案した普遍性への反例となる可能性がある。

以下では、上で示した「後置型」「前置型」「標識介在型」の具体例を見ていく。なお、関係節を含む名詞句全体の後には、しばしば名詞修飾助詞の nɔ́「その, あの」が置かれる。

23.1.1　後置型 (postnominal type)

後置型は、名詞の後ろに直接置かれるタイプの関係節である。

(1) pəɕā　[$_R$ lāɪɴlòɴ　lé　phònθà　nàɪɴ]　ləphá
　人　行き来する　(場)　道　端　(複)
　「道ばたを行き来する人」(I-08.8)

(2) ʔəcá　[$_R$ pətòɴ　lé　jâ]
　人生　築く　(場)　前
　「これから築く人生」(IV-03.11)

(3) cì　[$_R$ mə-　xwè　ʔáɴ　kháʊchwɛ̄]
　金　(非現)　買う　食べる　中華ソバ
　「中華ソバを買って食べる金」(V-03.88)

後置型の関係節は述部のみからなる。次のように主要部名詞と関係節の間に主語が入ることはできない。

(4) *cì　[$_R$ jə-　mə-　xwè　ʔáɴ　kháʊchwɛ̄]
　金　1sg　(非現)　買う　食べる　中華ソバ

なお、次のような関係節は上記の説明に対する反例に見えるが、[$_R$ chəθíchəbá ʔɔ́ ʔá] は二重主語文の述部に相当するので、主要部名詞と関係節の間に主語が入っているのではない。

(5) həmənī　[$_R$ <u>chəθíchəbá</u>　ʔɔ́　ʔá]
　人　技能　ある　多い
　「技術の高い人」(I-05.13)

23.1.2　前置型 (prenominal type)

前置型は、名詞の前に置かれるタイプの関係節である。後置型と違って、関係節は主語を伴ってもよい（主要部名詞が関係節内の主語に相当する場合を除く)。

(6) [$_R$ ʔɔ́　phlòʊɴ　khāɴkənâɴ　phàɴ]　khɔ́lòɴphàθə̂ɴ
ある　カレン　州　中　ドーナ山脈
「カレン州にあるドーナ山脈」(V-06.8)

(7) [$_R$ jə-　θôʊɴ]　lái　nɔ́
1sg　送る　手紙　その
「私が送ったその手紙」(V-04.5)

なお、まれではあるが、後置型および前置型の主要部名詞はゼロになる場合がある。

(8) ϕ　[$_R$ ʔɔ́　thōɴjò]　nɔ́　jə-　báθà
ある　ここ　(題)　1sg　欲しい
「ここにあるやつが私は欲しい」

(9) [$_R$ jə-　ʔánphôɴ　dá]　ϕ　nɔ́
1sg　炊く　(保持)　その
thàiɴ　chó　wái　θâ
帰る　運ぶ　(徹底)　(新局)
「私が炊いたの (ご飯) をさあ持って帰りなさい」

ただし、このようなゼロ名詞の使用は、文脈からゼロ名詞が何を指示するのかが明らかな場合にのみ限られる。また、「正しくない」用法と見なされることもあるようである。

23.1.3　標識介在型 (marked type)

標識介在型は、後置型と同様、主要部名詞の後に置かれるタイプの関係節である。後置型との違いは、関係節を導く助詞 lé が関係節の前に置かれるということと、関係節の主語が現れ得るということである。

(10) θéiɴθá　thî　lé　[$_R$ **ʔə -**　ɣì]　nɔ́
果物　水　(関)　3sg　良い　その
「良い果物ジュース」(II-13.17)

(11) khāɴməŋā　lé　[$_R$ ʔəwê　thòɴ　bá]　θɛ̀　nɔ́
外国　(関)　3se　着く　(経験)　(複)　その
「彼が行ったことのある外国」(V-04.49)

標識介在型において特徴的なのは、(10) に示したように、関係節化された名詞に対応する代名詞が関係節内で繰り返されることがあるということである。他の例を挙げる。

(12) θàimʊ̄ɪ　lé　[$_R$ **ʔə -**　mà　ɣàɣòɴ　bʊ́ɪ]　θíləphá　nɔ́
幼虫　(関)　3sg　(使役)　壊れる　稲　(複)　その
「稲を食い荒らす幼虫」(II-01.16)

(13) chəkhlîchəθá　lé　[$_R$ **ʔə -**　làɴkhàʊ　làɴchéiɴ]　θí
種　(関)　3sg　こぼれる　こぼれる　(複)
「こぼれた種」(II-04.6)

(14) phlòʊɴ　lé　[$_R$ jə-　dʊ́　**ʔà**]　nɔ́
人　(関)　1sg　殴る　3SG　その
「私が殴った人」

(15) phlòʊɴ　lé　[$_R$ jə-　lì　dè　**ʔà**　phléphlé]　nɔ́
人　(関)　1sg　行く　(共)　3SG　一緒に　その
「私が一緒に行った人」

ただし、次の例に見られるように、代名詞の存在は必須ではない。

(16) bʊ́ɪxā　lé　[$_R$ mà　ɣàɣòɴ　bʊ́ɪ]　θíləphá　nɔ́
米の虫　(関)　(使役)　壊れる　稲　(複)　その
「稲を食い荒らす虫」(II-01.15)

(17) phlòʊɴ　lé　[$_R$ jə-　dʊ́]　nɔ́
人　(関)　1sg　殴る　その
「私が殴った人」

(18) phlòʊɴ　lé　[$_R$ jə-　lì　phléphlé]　nɔ́
人　(関)　1sg　行く　一緒に　その
「私が一緒に行った人」

23.1.4　主要部内在型の関係節は存在するか?

ところで、次のような例は、一見、主要部内在型関係節 (internal relative clause; Keenan 1985 などを参照) であるかのように見える[1] 。

(19) máimái　tháʊ　chàiɴkɛ̀　ʔəkhâjò　nɔ́
(人名)　乗る　バイク　今　その
「マイマイが今乗っているバイク」(ビデオ劇 *khʊ́ʔwàjānlʊ́thò* の台詞)

もし、主要部内在型だとすると、次のような構造を持つことになる。(下線部が主要部名詞)

(20) [$_R$ máimái　tháʊ　<u>chàiɴkɛ̀</u>　ʔəkhâjò]　nɔ́
(人名)　乗る　バイク　今　その

しかし、次に挙げる (a) は適格だが、(b) は不適格である。

(21) a. [$_R$ jə-　tháʊ　lé　dàʊ　phòɴ]　<u>kháɴphài</u>　nɔ́
1sg　はく　(場)　部屋　中　草履　その
「私が部屋の中ではいている草履」

[1] チベット・ビルマ系の言語では、チベット語などに主要部内在型関係節が存在するとされる (白井 1998 参照)。

b. *[$_R$ jə-　tháʊ　kháɴphài　lé　dàʊ　phə̀ɴ]　nɔ́
　　1sg　はく　草履　(場)　部屋　中　その

(a) は前置型の関係節である。(b) が不適格なのは、関係節の後に置かれるべき主要部名詞が関係節内部に置かれた形になってしまっているからだと考えられる。したがって、ポー・カレン語に主要部内在型関係節は存在しないと見るべきである。おそらく (19) は、前置型の関係節であり、次のような構造を持つと考えられる。

(22) [$_R$ máimái　tháʊ]　chàiɴkɛ̀　ʔəkhâjò　nɔ́
　　(人名)　乗る　バイク　今　その

ʔəkhâjò 「今」は、chàiɴkɛ̀ ʔəkhâjò「今のバイク」が言えることから[2] 、chàiɴkɛ̀ 「バイク」のみあるいは máimái tháʊ chàiɴkɛ̀ 「マイマイが乗っているバイク」全体を修飾する名詞句だと考えるべきだろう。

23.2　調査と考察

23.2.1　関係節の使用の実態

Purser and Saya Tun Aung (1922) は、形容詞が名詞を修飾する例として後置型に相当する例を挙げるものの、名詞を修飾する節 (Purser and Saya Tun Aung は adjective clause と呼ぶ) としては標識介在型の次の例のみを挙げている (p.216)。前置型についての報告はまったくない。この理由としては、扱った方言が違う可能性および歴史的変化による差異の可能性がある。当時の発音は分からないため、翻字により示しておく[3] 。

(23) ＜ li4　lA0　[$_R$ y　pha0　kwe5　we3]　nO2
　　本　(関)　1sg　父　書く　(強意)　その

qO2　lA0　c pwE1　kho2　lO3 ＞
ある　(場)　机　上　(断定)
「私の父が書いた本は机の上にあります」(翻字は加藤 [2001c] で用いた方式による)

しかし、上で既に見たように、現代のポー・カレン語東部方言においては 3 種類の関係節が使用されている。これらがいかなる条件によって使い分けられているのかを明らかにする必要がある。ところが困難なことに、同じ内容を表すのにこれら 3 種類の関係節すべてを用いることができる場合が少なくない。次の例を見よ。

(24) a. chəphɔ́chəxā　[$_R$ mà　ɣàɣòɴ　chə̀　θí]　nɔ́
　　昆虫　(使役)　壊れる　CHə　傾向がある　その

[2] ʔəkhâjò は第 8 章で述べた名詞句の構造の中の「側置助詞句」の位置に現れている。ʔəkhâjò の前には側置助詞 lé が現れて、chàiɴkɛ̀ lé ʔəkhâjò とも言える。時を表す名詞は、このように、側置助詞なしで名詞を後から修飾することがある。

[3] Purser and Saya Tun Aung (1922) はポー・カレン語の語彙集であるが、巻末にポー・カレン語文法の概略を載せている。表記は、加藤 (2001c) が「キリスト教ポー・カレン文字」と呼ぶ文字によって行っている。この本は残念なことに、語彙集にも文法説明にも、東部方言の形式と西部方言の形式が入り混ざっていて、明確な区別がされていない。文法説明は基本的に西部方言の文法に基づいている。

b. [$_R$ mà　ɣàɣòɴ　chè　θí]　chəphʊ́chəxā　nɔ́　(II-01.22)
(使役)　壊れる　CHə　傾向がある　昆虫　その

c. chəphʊ́chəxā　lé　[$_R$ ʔə-　mà　ɣàɣòɴ　chè　θí]　nɔ́
昆虫　(関)　3sg　(使役)　壊れる　CHə　傾向がある　その
「物 (農作物) に損害を与える性質を持つ昆虫」

そこで筆者は、これらの使用の実態を知るために、(i) 主要部名詞の関係節における統語役割、(ii) 関係節の長短、という二点に着目し、手持ちのテキスト資料[4] における関係節の現れを調査した。

ところで、加藤 (2001a) における調査で、筆者は語彙化した事例を関係節に含めて考えた。意味が特殊化し、個々の単語の意味からは全体の意味を導き出せなくなる現象を語彙化と呼ぶ (影山 1993:8 などを参照)。名詞に関係節が付いた構造はしばしば語彙化する。本論文では、語彙化したものは関係節に含めずに考える。以下に例を挙げる。

(25) thîlá [chə̂ɴ] （塩＋甘い）「砂糖」(I-02.13)

(26) lōʊɴ [jì] （石＋緑色の）「ヒスイ」(II-07.15)

(27) thà [θəwài] （鉄＋吸う）「磁石」(III-01.1)

(28) já [ʔʊ́ɪ] （魚＋腐る）「ガピ (魚醤)」(V-03.127)

(29) mʊ̄ɪ [tháɴ] （太陽＋上る）「東」(III-17.21)

(30) θə̂ɴ [ʔɔ̀] （おかず＋飲む）「スープ」(V-03.47)

(31) lái [thʊ̂ɪ] （文書＋巻く）「貝葉」(III-08.10)

(32) chəbóʊɴ [ʔáɴ bʊ́θâɴkhʊ́] （祭り＋食べる＋新米）「新米を食べる祭り（新嘗祭）」(III-14.3)

(33) lâɴ [làɴ ʔɔ̀ thî] (雷神＋下りる＋飲む＋水)「虹 (下りてきて水を飲む雷神)」(II-10.1)

(34) lái [jʊ̄kwè] (本＋見て遊ぶ)「娯楽本」(III-07.12)

加藤 (2001a) ではこのような語彙化したものを含めて調査を行ったのだが、そのために分析が非常に煩雑になり、関係節を取り巻く問題の本質が見えにくくなってしまった。そこで本論文では語彙化した事例を関係節の分析では扱わないことにした。本論文においては、語彙化した事例を形態論の複合において扱っている (第 6 章を参照されたい)。

さて、調査の結果を表 1 に示す。

以下、調査において着目した (i) 主要部名詞の関係節における統語役割、(ii) 関係節の長短、という二つの観点について説明する。

[4]本章の調査では、第 30 章に掲げた資料のうち、005 から 017、I-01 から I-10、II-01 から II-14、III-01 から III-17、IV-01 から IV-10、V-01 から V-06 を用いた。

(表 1) **関係節の出現回数**（主要部名詞の関係節内における統語役割別）

統語役割	関係節の種類		関係節の長短	
主語 (subject)	後置型	241 (81%)	長	66
			短	175
	前置型	42 (14%)	長	42
			短	0
	標識介在型	15 (5%)	長	13
			短	2
小計		298		
目的語 (object)	後置型	4 (4%)	長	2
			短	2
	前置型	84 (92%)	長	81
			短	3
	標識介在型	3 (3%)	長	3
			短	0
小計		91		
斜格補語 (oblique)	後置型	2 (5%)	長	2
			短	0
	前置型	35 (92%)	長	35
			短	0
	標識介在型	1 (3%)	長	1
			短	0
小計		38		
非節内要素 (non-clause internal element)	後置型	3 (15%)	長	3
			短	0
	前置型	16 (80%)	長	16
			短	0
	標識介在型	1 (5%)	長	1
			短	0
小計		20		
総計		447		

• (i) の「主要部名詞の関係節における統語役割」は、主要部名詞が関係節のがわから見てどのような統語役割を持つかという観点である。例えば、次の (a) における主要部名詞は、(b) の文を見れば明らかなように、関係節の主語に相当する要素である。なお、以降、「主要部名詞が関係節の主語に相当する」ということを、「主要部名詞が 主語である」というように簡略に表現する場合がある (主語以外も同様)。

(35) a. phlòʊnchɨ̀phʊ́ [$_R$ ʔɔ́ dòʊɴ θəròʊɴ phàɴ] ləphá
カレン民族 いる 町 タトン 中 (複)
「タトンの町にいたカレンの人々」(III-08.9)

b. phlòʊnchɨ̀phʊ́ ʔɔ́ dòʊɴ θəròʊɴ phàɴ
カレン民族 いる 町 タトン 中
「カレンの人々はタトンの町にいた」

また、次の (a) における主要部名詞は、(b) の文を見れば明らかなように、関係節の目的語に相当する要素である。

(36) a. [$_R$ pə- θí thá wɛ̀] lái nɔ́
1pl できる (保持) (備え) 文字 その
「私たちが既に習得している文字」(IV-01.36)

b. pə- θí thá wɛ̀ lái jò
1pl できる (保持) (備え) 文字 この
「私たちは既にこの文字を習得している」

また、次の各例の (a) における主要部名詞は、各 (b) を見れば分かるとおり、関係節の斜格補語に相当する。

(37) a. [$_R$ jə- dʊ́ ʔəwê] lé nɔ́
1sg 叩く 3se 棒 その
「私が彼を叩いた棒」

b. jə- dʊ́ ʔəwê dè lé
1sg 叩く 3se (共) 棒
「私は彼を棒で叩いた」

(38) a. [$_R$ nə- lɔ̀ chə̀] ʔəthí nɔ́
2sg 話す CHə 回数 その
「おまえが話す回数」(IV-04.291)

b. nə- lɔ̀ chə̀ lə- thí
2sg 話す CHə 一 回
「おまえは 1 回話す」

ただし、名詞が目的語であるか斜格補語であるかを判断するのはときとして難しい。

(39) [$_R$ jə-　lì]　ɣéiɴ　nɔ́
　　1sg　行く　家　その
　「私が行った家」

というのは、この例における ɣéiɴ 「家」は、動詞の目的語としても斜格補語としても出現可能だからである。次を参照せよ。

(40) jə-　lì　(lé)　ʔə-　ɣéiɴ
　1sg　行く　(場)　3sg　家
　「私は彼の家に行った」

本論文では、このような例は目的語に含めて考える。

次のように、主要部名詞が関係節内のいかなる要素にも相当しないものもある。このような名詞句を「非節内要素」と呼ぶ。

(41) [$_R$ phlòʊɴ　dòʊɴləkōʊɴ　θɛ̀　lì　thə́ɯɴlī　tōʊɴ
　　人　ヤンゴン　(複)　行く　踊る　ドン

　lé　cìɴkəpʊ̀ɯ]　bìdìʔòkhwè　nɔ́
　(場)　シンガポール　ビデオテープ　その
　「ヤンゴンの人たちがシンガポールに行ってドン [カレンの民族舞踊] を踊った (のを撮った) ビデオテープ」(016.34)

なお、加藤 (2001a) では、「所有者名詞」という項目を立てた。例を示す。

(42) ʔàiθài　[$_R$ ʔə-　nâ　thɔ̂]　nɔ́
　仙人　3sg　鼻　長い　その
　「鼻の長い仙人」(III-04.5)

考え方によっては、このような例においては主要部名詞が関係節内の主語の所有者に相当すると見なすことができる。そのため、加藤 (2001a) では「所有者名詞」という統語役割を別個に設定してその頻度を数えた。しかし、ポー・カレン語においては、このような項目を設定する必要がない。なぜなら、このような文の主要部名詞は、二重主語文の最初の主語に対応すると考えることができるからである。すなわち、対応する文として次のような文を考えることができる。

(43) ʔàiθài　ʔə-　nâ　thɔ̂
　仙人 [subject 1]　3sg 鼻 [subject 2]　長い
　「仙人は鼻が長い」

ポー・カレン語では、所有者名詞に相当する名詞を主要部名詞として関係節で修飾できるのは、このような二重主語文の場合のみである。その証拠として次の例を見られたい。

(44) jə-　θə́ɯɴ　<u>thìθò</u>　ʔə-　ɣéiɴ
　1sg　建てる　友人　3sg　その
　「私は自分の友人の家を建てた」

この下線部を主要部名詞とした関係節は、次に示すように不可能である。

(45) *[$_R$ jə-　θə́ɯɴ　ʔə-　ɣéiɴ]　thìθò　nɔ́
　　1sg　建てる　3sg　家　　友人　その
　(私が家を建てた友人)

(46) *thìθò　lé　[$_R$ jə-　θə́ɯɴ　ʔə-　ɣéiɴ]　nɔ́
　　友人　(関)　1sg　建てる　3sg　家　　その
　(私が家を建てた友人)

すなわち、ポー・カレン語の関係節を考えるとき、主要部名詞の統語役割として「所有者名詞」という項目を設定する必要はない。これは「主語」に含めて考えるべきものである。

• (ii) の「関係節の長短」は、関係節が動詞一個のみからなるかどうかという観点である。次の例で見ると、(a) が「短い関係節」、(b) が「長い関係節」である。このように、関係節が動詞のみからなる場合、短い関係節と考え、動詞以外の要素を含む場合には、長い関係節と考える。

(47) a. thî　[$_R$ khléiɴ]
　　水　　冷たい
　　「冷たい水」

　b. thî　[$_R$ khléiɴ　châ]
　　水　　冷たい　非常に
　　「たいへん冷たい水」

以下、調査結果について考察してゆく。

23.2.2　後置型と前置型

調査の結果を見ると、全体的な傾向として、Purser and Saya Tun Aung (1922) にも挙げられた標識介在型の使用が少ないことが分かる。標識介在型よりも後置型あるいは前置型のほうが、現代のポー・カレン語東部方言においては、より一般的であると言ってもよいかもしれない。そこで、まずここでは後置型および前置型について考察し、標識介在型については後で別個に扱う。

後置型および前置型の出現頻度を比較すると、主要部名詞の統語役割が主語である場合と、非主語の場合（目的語・斜格補語・非節内要素）とで、大きな違いがあることが分かる。主語の場合には後置型が多いの対し、非主語の場合には前置型が多い。以下では、主語の場合と非主語の場合に分けて論じていく。

主語の場合

主要部名詞が主語の場合、後置型が 298 例中 241 例 (81%) と、圧倒的に多い。したがって、この場合、後置型が好まれると言ってよいだろう。後置型の例を挙げる。

(48) thîkhlâɴ　[$_R$ mêiɴ]
湯　　沸く
「沸いた湯」(II-09.5)

(49) ʔəmī　[$_R$ phàthɔ̀]
尾　　長い
「長い尾」(II-06.17)

(50) ʔəphlòʊɴ　[$_R$ ʔɔ̀　chə̀]　ləphá
人　　飲む　物　(複)
「酒を飲んでいる人々」(V-03.29)

(51) thʊ́　[$_R$ màchə̀ɴ　mənī]　θíləphá
鳥　　助ける　人間　(複)
「人間を助ける鳥たち」(II-01.1)

(52) ʔəkhʊ́thò　[$_R$ lə-　bádòɴ　lóθà　bá]　nɔ́
先端　　(否)　同じ　(相互)　(否')　その
「(磁石の) 異なる極」(III-01.42)

(53) lì　[$_R$ ʔɔ́dèiɴ　wɛ̀　lé　thî　klà]　θíləphá
空気　　混じる　(備え)　(場)　水　間　(複)
「水の中に混じっている空気」(II-09.7)

(54) chəʔə́ɯɴkàijɛ̀　[$_R$ ʔɔ́　lé　ʔəthɔ̂]　nɔ́
綿雲　　ある　(場)　高所　その
「高いところにある綿雲」(III-05.25)

(55) lənàɴnàɴ　[$_R$ lì　ʔɔ́　dòʊɴ　phə̀ɴ]　θɛ̀
一部　　行く　住む　町　中　(複)
「都会に出て行って住んでいる人の一部」(IV-06.15)

(56) phlòʊɴ　pəjàɴkhāɴ　[$_R$ ʔánɣʊ́　náʊ　làɴ　θâiɴkhāɴ　phə̀ɴ]　lə-　ɣà
カレン　ビルマ国　こっそり　入る　(内方)　タイ国　中　一　～人
「タイに密入国したビルマ側のカレン人のひとり」(IV-07.7)

(57) phlòʊɴ　[$_R$ cìɕá　ʔɔ́]　θɛ̀ləphá
人　　財産　ある　(複)
「財産のある人たち」(017.18)

(58) thîkhāɴ　dòʊɴthâɴ　[$_R$ chəkhū　chəkhléiɴ　báɣɔ̄]　ləphá　nɔ́
国　　地域　暑さ　寒さ　均等な　(複)　その
「温暖な国や地域」(III-16.3)

一方、前置型は出現数が少なく、298 例中 42 例である (14%)。前置型の使用が少ない傾向は、上の (48) や (49) のように関係節が単独の動詞からなる場合、つまり、短い関係節の場合に顕著である。今回の調査では、前置型の中に短い関係節が見つからなかった。また、これまで収集したデータの中にもまったく見あたらないので、単独の動詞は、主語に相当する名詞を前から修飾できない可能性が高い。

頻度は少ないけれども、前置型の存在は重要である。なぜなら、以下に述べるとおり、前置型と後置型の選択は気まぐれではなく、主要部名詞の特定性 (specificity) が関連していそうだからである。本論文では「特定性」を、「与えられた文脈において名詞が唯一の対象を指示する可能性の度合い」と定義する。しかし特定性を客観的に測ることは難しい。そこで、固有名詞[5] 、代名詞、および代名詞で修飾された名詞は特定性が高いと思われ、かつ、客観的に他と区別することもできるので、これらを本論文では**高特定性名詞**(こうとくていせいめいし) と呼び、特定性を測る一助としたい。下に主語に相当する高特定性名詞が主要部名詞になっている例を挙げる。

(59) [$_R$ ʔɔ́thɔ̄　thàiɴ]　jə̀　lə-　ɣà
　　残る　(追加)　1SG　一　～人
「残された私」(V-03.145)

(60) [$_R$ ʔɔ́　phlòʊɴ　khāɴkənâɴ　phə̀ɴ]　khʊ́lòɴphàθə̂ɴ
　　ある　カレン　州　中　ドーナ山脈
「カレン州にあるドーナ山脈」(V-06.64)

(61) [$_R$ ʔɛ́　chɨ̀chá]　phâθʊ́ɣɛ̀　lə-　ɣà
　　愛する　民族　(人名)　一　～人
「自分の民族を愛するパートゥーゲー」(V-04.34)

(62) [$_R$ lì　ʔɔ́　bá　khāɴməɲā　khɔ̂]　phâθʊ́ɣɛ̀　lə-　ɣà
　　行く　住む　(経験)　外国　(対比)　(人名)　一　～人
「外国に住んでいたことのあるパートゥーゲー」(V-04.63)

(63) [$_R$ xîlà　chêiɴpràɴ　tɛ̀]　ʔə-　mé　nɔ́
　　美しい　清らかな　(非常)　3sg　顔　その
「美しく清らかな彼女の顔」(V-05.18)

(64) [$_R$ θə̂ɴ　blàɴ　tháɴbà]　chɨ̀θàbáɴcʊ́ɪ̀khîláibéiɴ
　　三　回　なる　(雑誌名)
「3 号目になる＜若き民族の力＞誌」(IV-02.3)

(65) [$_R$ θàʊcà　lə-　ʔɔ́　bá]　cɔ̂
　　誠実さ　(否)　ある　(否')　お兄さん
「誠実さのないお兄さん」(V-05.116)

[5]一般名詞であっても、物語において特定の登場人物を指す場合には固有名詞と見なす。

主要部名詞が主語の場合の前置型 42 例を見ると、うち 12 例において上のような高特定性名詞が主要部になっている。一方の後置型の場合、前置型を許す可能性のある「長い」関係節 66 例を見ると、うち、高特定性名詞が主要部になっているのは次の 2 例のみであった。

(66) khìchîphōɴ　[$_R$ ʔɔ́　lé　θéiɴ　khîcōɴ]
　トラの一種　いる　(場)　木　先端
　「木のてっぺんにいたトラ」(III-03.46)

(67) ʔɔ̀　thâɴ　wê　ʔəwê　mó　[$_R$ ʔɔ́　ʔə-　cɯ́ɯ　nī　bòɴ　chàʊ]　nɔ́
　飲む　(常時)　(強意)　3se　煙草　ある　3sg　指　二　本　隙間　その
　「2 本の指にはさんだタバコをずっと吸い続けた」(V-04.199)

まとめると、前置型では関係節 42 例のうち 12 例において主要部名詞が高特定性名詞であり (すなわち、高特定:非高特定=12:30)、後置型では 66 例 (長い関係節のみ) のうち 2 例のみが高特定性名詞である (すなわち、非高特定:高特定=2:64)。

(表 2) **主要部名詞の特定性が高いか**

	Yes	No	計
前置型	12 (28.6%)	30 (71.4%)	42 (100.0%)
後置型	2 (3.0%)	64 (97.0%)	66 (100.0%)
計	14 (13.0%)	94 (87.0%)	108 (100.0%)

この結果には統計的有意差が認められた (χ^2=14.84, df=2, p<0.001)。したがって、前置型の場合には、後置型に比べて高特定性名詞が主要部名詞になっていることが多いと言える。

まだ推測の域を出ないけれども、主要部名詞が高特定性名詞であることが多いということから、主要部名詞が主語である場合の前置型関係節の機能は、主要部名詞の指示範囲を限定することではなく、主要部名詞の指示対象に何らかの新しい情報を付け加えることであるのかもしれない。このような機能は、英語の非制限的関係節 (non-restrictive relative clause) を思い出させる。まだ結論は出せないが、これは十分にあり得ることだと思う。

しかし、長い前置型関係節 42 例のうち、30 例の主要部名詞は高特定性名詞ではない。次のような普通の名詞である。

(68) [$_R$ thələ̂ɴ　khwái　lé　ʔəlàɴkhâiɴ]　ʔəɣāiɴʔəcóɴ
　過ぎる　(徹底)　(場)　後ろ　事柄
　「既に過ぎ去ってしまったこと」(V-05.19)

(69) [$_R$ ɣɛ̂　làɴkhâiɴ]　phɯ́dìprí　θíləphá
　来る　後ろ　若者　(複)
　「将来の若者たち」(III-07.14)

(70) [$_R$ mə-　dɯ́ɕā　cìklà　thəjōpràthâ　wê　dɔ̀]　khāɴkənâɴ
　(非現)　栄える　賑わう　知れ渡る　(強意)　今後　地域
　「今後発展する地域」(III-17.27)

(71) [$_R$ dʊ́　thánɴ　lànkhâiɴ]　phʊ́dìprí　θíləphá
　大きい　(変化)　後ろ　若者　(複)
「今後偉くなっていく若者たち」(III-07.14)

これらの例において前置型が用いられている理由は明確ではない。ただ、先行文脈で同一の名詞が現れている、あるいは、話し手が特定の指示対象を念頭に置いている、などの条件により、このような例における主要部名詞の特定性が高まっている可能性はあるだろう。この問題については今後の課題としたい。

なお、先に述べたように、短い関係節の場合には後置型しか用いられないため、高特定性名詞の場合にも後置型しか現れない。次のような例がある。

(72) kəchânɴ　[$_R$ θî]　ʔə-　ʔònɴ　phàɴ
象　死ぬ　3sg　腹　中
「死んだゾウの腹の中」(I-09.22)

(73) chəʔàʊ　[$_R$ chînànɴ]
猿　座る
「座っているサル」(III-12.19)

今回の調査では、短い後置型関係節 175 例のうち 7 例の主要部名詞が、高特定性名詞であった。

以上の議論をまとめておく。

- 主要部名詞が主語の場合、後置型と前置型とでは、基本的には後置型のほうが好まれる。特に、短い関係節の場合には後置型しか使えない可能性がある。
- 長い関係節の場合には前置型も現れる。これは主要部名詞が高特定性名詞である場合に好まれる選択である。

非主語の場合

調査の結果を見ると、主要部名詞が非主語 (すなわち目的語・斜格補語・非節内要素) の場合には、主語の場合と違い、前置型が多く使われていることが分かる。目的語の場合には 91 例中 84 例 (92%)、斜格補語の場合には 38 例中 35 例 (92%)、非節内要素の場合には 20 例中 16 例 (80%) が、前置型だった。したがって、非主語の場合、前置型が好まれると言ってよいだろう。以下に、目的語・斜格補語・非節内要素の順に例を挙げる。

- 目的語

(74) [$_R$ ʔwàʔwà　chônmóɴ　thá　wɛ̀]　lə-　cóɴ　nɔ́
(人名)　考える　(保持)　(備え)　一　～ 箇所　その
「ワーワーが前から考えていた一件」(V-05.88)

(75) [$_R$ nɛ̀ʔáɴ　tɛ̀]　cɔ̂
信じる　(非常)　お兄さん
「(ワーワーが) 信じていた彼氏 (恋人)」(V-05.95)

(76) [$_R$ nə-　phî　tàiɴ　ʔáɴ]　kʊ́
　2sg　祖母　作る　食べる　菓子
「お前のおばあさんが作って食べる菓子」(V-02.13)

(77) [$_R$ thâiɴ　dè　ɕâ]　klòɴləkōʊɴ　ɣàɴ
　編む　(共)　竹ひご　シュエダゴンパゴダ　絵
「竹ひごで編んだシュエダゴンパゴダの絵」(V-02.24)

(78) [$_R$ jə-　lɔ̀]　chəkhlàiɴ　nɔ́
　1sg　語る　話　その
「私が語った話」(006.94)

(79) [$_R$ ʔəθíwê　θə́ɯɪɴ　làɴ　thá]　chəpʊ́chəbòɴ　θíləphá
　3pe　植える　(下方)　(保持)　植物　(複)
「彼らが植えておいた植物」(II-04.9)

(80) [$_R$ hə-　bá　θàmɛ́　tháʊ]　phʊ́xā
　1pl　(当為)　恐れる　(最上)　昆虫
「我々が最も恐れなければならない昆虫」(II-12.2)

(81) [$_R$ pə-　θá　thánɴ　θá　làɴ]　lì
　1pl　呼吸する　(上方)　呼吸する　(下方)　空気
「私たちが吸ったり吐いたりする空気」(II-13.3)

(82) [$_R$ thóɴ　làɴ　thàiɴ]　bʊ́ɯ
　精米する　(下方)　(再度)　米
「精米した米」(III-02.26)

● 斜格補語

(83) [$_R$ θâɴkhlàɴ　làɴ]　ʔəklà　lə-　nì
　水祭り　下りる　真ん中　一　～日
「水祭りが行われる真ん中の日」(V-06.39)

(84) [$_R$ θəwài　chə̀]　ʔəɣāiɴ
　吸う　CHə　力
「(磁石が) 物を吸い寄せる力」(III-01.10)

(85) [$_R$ dʊ̀ɯlâ　ɣɛ̂　kɛ́　thánɴ　θí]　chəʔəlāɴklɛ̀
　蝿　来る　成る　(完成)　傾向がある　場所
「ハエが発生しやすい場所」(II-12.16)

(86) [$_R$ θéiɴthò　ʔɔ́]　wāplàɴ
　切り株　ある　原っぱ
「切り株がある原っぱ」(III-12.4)

(87) [$_R$ phíθətài　　mʉ́ʉ́phʉ́]　láiblài
　　注意を促す　少女　　手紙
「少女達に警告する手紙」(IV-08.1)

● 非節内要素

(88) [$_R$ kɛ́　　thánɴ　　nī　　θài]　ʔəkhánɴthài
　　成る　(完成)　(努力)　酒　　始まり
「(水が) 酒になった始まり」(IV-05.1)

(89) [$_R$ thàθəwài　càʊlé　chə̀]　ʔəɣāiɴ
　　磁石　　引く　CHə　事柄
「磁石が物を引っぱるということ」(III-01.1)

(90) [$_R$ bòɴ　làɴ　　θài]　θɔ̀
　　注ぐ　(下方)　酒　　音
「酒をつぐ音」(V-03.57)

(91) [$_R$ mʉ̀ʉmé　chèɕɔ̄　　làɴ]　ʔəljāphàɴ
　　太陽　　反射する　(下方)　光
「太陽 (の日差し) が反射した光」(II-10.18)

(92) [$_R$ mídòʊɴ　phàɴ　θʉ̀ʉrîθʉ̀ʉrî]　ʔənàiɴ
　　電球　　光る　チラチラ　　傍ら
「電灯がチラチラと光るかたわら」(V-03.98)

(93) [$_R$ phlòʊɴ　dòʊɴləkōʊɴ　θɛ̀　lì　　thə́ɯɴlī　tōʊɴ
　　人　　ヤンゴン　　(複)　行く　踊る　　ドン

lé　　cìɴkəpʉ̀ʉ]　bìdìʔòkhwè　　nɔ́
LOC　シンガポール　ビデオテープ　その
「ヤンゴンの人たちがシンガポールに行ってドン [カレンの民族舞踊] を踊った (のを撮った) ビデオテープ」(016.34)

ところで、主要部名詞が主語の場合、短い前置型関係節は現れにくいということを先に見たが、非主語の場合は短い前置型関係節も現れることがある。

(94) [$_R$ ʔɛ́]　thìθò
愛する　友人
「愛する友」(016.49)(目的語)

このように、主要部が非主語のときに前置型が好まれるのは明らかだが、後置型も見てみる必要がある。後置型の例を挙げる。

● 目的語

(95) thədò　[$_R$ thâiɴ　nī　dè　θéiɴklàɴkláiɴlɛ̂]
キンマ入れ　編む　(努力)　(共)　(木の一種)
「インド菩提樹 (の一種) で作ったキンマ入れ」(V-02.59)

(96) ʔəcá　[$_R$ pətòɴ　ləjâ]
人生　築く　将来
「これから築く人生」(IV-03.11)

• 斜格補語

(97) cì　[$_R$ mə-　xwè　ʔánɴ　kháʊchwɛ̄]
金　(非現)　買う　食べる　中華ソバ
「中華ソバを買って食べる金」(V-03.88)

• 非節内要素

(98) θà　[$_R$ ʔɛ́　phlòʊɴ　chɨ̀　phlòʊɴ　chəxîlà]
心　愛する　カレン　民族　カレン　文化
「カレン民族やカレン文化を愛する心」(V-04.214)

意味的に見ると、主要部名詞が非主語の場合、前置型では関係節が個別的な事象および一般的な事象の両方を表すことができるのに対して、後置型の関係節は一般的な事象しか表さないという傾向があるようである。例えば、次の (a) の前置型関係節は、特定の時間・場所において特定の行為者が草履を部屋の中で履いたということ、例えば、「私が昨日、部屋の中で履いた」という個別的な事象と、特定の場所・時間・行為者に限定しない「部屋の中で履く」という一般的な事象の両方を表すことができるが、(b) の後置型関係節は後者の一般的な事象しか表すことができない。

(99) a. [$_R$ tháʊ　lé　dàʊ　phàɴ]　kháɴphài　nɔ́
履く　(場)　部屋　中　草履　その
「(私が昨日) 部屋の中で履いた草履　／ 部屋の中で履くための草履」

b. kháɴphài　[$_R$ tháʊ　lé　dàʊ　phàɴ]　nɔ́
草履　履く　(場)　部屋　中　その
「部屋の中で履くための草履」

おそらく、主要部名詞が非主語の場合に前置型が多く現れているのは、前置型のほうが後置型よりも意味的に限定されないということに関連しているように思われる。このような意味的特徴は、後置型の関係節が主語を従えることができないことに起因するのかもしれない。行為者が「抑圧」されることによって、特定の行為者による行為ということが意識されなくなり、そのために一般的な事象を表すという性質が生じるのではないか。一方、主要部が主語の場合には、主要部名詞として主語が現れているためか、後置型であっても、個別的な事象も一般的な事象も表すことができるようである。

以上をまとめると次のとおりである。

- 主要部名詞が非主語（目的語・斜格補語・非節内要素）の場合、後置型と前置型とでは、前置型のほうが好まれる。

- 意味的に見ると、前置型は個別的な事象と一般的な事象の両方を表せるのに対し、後置型は一般的な事象しか表さない。この意味上の違いが、前置型が好まれるという傾向につながっているように思われる。

23.2.3　標識介在型

最後に標識介在型を見てみよう。下に、主要部の統語役割別に標識介在型の例を挙げる。

- 主語

(100) θéiɴθá　thî　lé　[$_R$ ʔə-　ɣì]　nɔ́
　　果物　水　(関)　3sg　良い　その
　　「良い果物ジュース」(II-13.17)

- 目的語

(101) khāɴməɲā　lé　[$_R$ ʔəwê　thòɴ　bá]　θɛ̀　nɔ́
　　外国　(関)　3se　着く　(経験)　(複)　その
　　「彼が行ったことのある外国」(V-04.49)

- 斜格補語

(102) jádòʔwà　lé　[$_R$ ʔəwêdá　thàʊ　ʔə-　nâthî　ɣòɴ]　nɔ́
　　ハンカチ　(関)　3se　拭く　3sg　鼻水　終える　その
　　「彼（風邪の患者）が鼻水を拭き終えたハンカチ」(II-13.15)

- 非節内要素

(103) θí　xwè　lé　[$_R$ ʔəwê　bjàɴ　blá　thʊ́pəɣʊ́]　nɔ́
　　薬　値段　(関)　3se　治す　治る　フクロウ　その
　　「彼がフクロウを治してやった薬代」(I-03.34)

調査の結果を見ると、標識介在型は、現代ポー・カレン語東部方言においてはあまり好まれないとの印象さえ受ける。標識介在型が現れたのは、全 447 例中、20 例のみ (4%) だった。

実は、標識介在型が使われる条件については分からないことが多い。しかし、次に挙げる 3 点は明らかである。

第一点として、二つの目的語を取る動詞の場合に、第一目的語を主要部名詞としたいときには、前置型ではなく標識介在型を用いなければならないということが挙げられる。例えば次のとおりである。

(104) thìθò　lé　[$_R$ jə-　phílâɴ　láiʔàʊ]　lə-　ɣà
　　友人　(関)　1sg　与える　本　一　～人
　　「私が本をやった友人」

同じことを前置型の関係節を用いて表現することはできない。

(105) *[$_R$ jə-　phílâɴ　(láiʔàʊ)　]　thìθò　lə-　ɣà
　　1sg　与える　本　　友人　一　～人

láiʔàʊ を括弧でくくっているのは、この関係節から第二目的語を取り去っても適格にならないことを示している。実は、今回のテキストを用いた調査においては、第一目的語が主要部名詞になった例が一例も見つからなかった。したがって、第一目的語が主要部名詞になった関係節自体がポー・カレン語では好まれないという可能性もある。第一目的語の場合に前置型を用いることができない理由は、第一目的語と第二目的語が表面上、普通とは逆の語順で現れることによる違和感である可能性がある。しかし、(105) から第二目的語を取り去っても適格にならないことから、このことだけが原因ではないだろう。この問題の解決にはもう少し時間を要しそうである。

第二点は構造の明確化である。下の例を見られたい。

(106) ʔəθí　mə-　dá　báθà　[$_R$ nə-　dʊ́　phí
　　3pl　(非現)　見える　(欲求)　2sg　撮る　(裨益)

　　ʔəθí]　ʔəɣàɴ　nɔ́　chī　lɔ̂
　　3PL　写真　その　(婉曲)　(断定)
　　「彼らは、あなたが (彼らに) 撮ってあげた写真を見たがっています」

(107) ʔəθí　mə-　dá　báθà　ʔəɣàɴ　lé
　　3pl　(非現)　見える　(欲求)　写真　(関)

　　[$_R$ nə-　dʊ́　phí　ʔəθí]　nɔ́　chī　lɔ̂
　　2sg　撮る　(裨益)　3PL　その　(婉曲)　(断定)

前置型の (106) では、関係節部分の文中における役割が、主要部名詞である ʔəɣàɴ 「写真」が現れるまで分からない。というのは、動詞 dá は補文を取る動詞なので、関係節の部分が補文と解釈される可能性があるからである。(107) のように標識介在型の関係節を用いれば、主要部名詞が動詞の直後に現れ、なおかつ関係節を導く助詞 lé がその直後に現れるので、文の構造がたちどころに分かる。よって、標識介在型の関係節は、構造を明確化したいときに使われるという可能性がある。

第三点として、標識介在型については、ポー・カレン語話者自身の「格式ばった言い方」であるとの内省報告があることを指摘しておきたい。具体的な場面としては、大勢の前での演説や物語の語りなどに使われる。確かに筆者の印象でも、くだけた会話体において標識介在型が使われることは極めて少ないように思われる。標識介在型が、格式張った文体と結びついている可能性は否定できない。

23.3　まとめ

終わりに、本章の考察で明らかになった重要な点を以下に列挙する。

- 主要部名詞が主語である場合、後置型が多く使われる。前置型も使われることがあるが、前置型は高特定性名詞の場合に好まれる選択である。

- 主要部名詞が非主語の場合、前置型が多く使われる。
- Purser and Saya Tun Aung (1922) で報告された型である標識介在型の出現頻度はあまり多くない。

主要部名詞が主語の場合にのみ後置型が多く使われ、非主語の場合には前置型が多く使われるのはなぜだろうか。ポー・カレン語の基本語順では主語が動詞の前に現れ、非主語が動詞の後に現れるということが、名詞と関係節の順序に影響している可能性はあると思う。しかし、基本語順と同じであるということは逆に、ある音連続が関係節を用いた構造であることを気づきにくくする要因にもなりかねないことには留意しなければならない。

主要部名詞が主語である場合の前置型は、英語の非制限的関係節に似て、主要部名詞の指すものに新しい情報を付け加えるという機能を持っていることを示唆した。しかし、この推測が本当だとすれば、なぜ名詞の前に置かれた関係節がこのような機能を持ち得るのかについては、答えがまったく見出せていない。

主語の場合を除けば前置型が多用されることについては、「関係節」が主要部名詞に前置されるタイプの言語であるビルマ語との接触も原因として考慮に入れる必要があるだろう。下にビルマ語の例を挙げる。

[Burmese]

(108) θù　yé　dɛ̂　sà
　　彼　書く　(現実法)　手紙
　　「彼が書いた手紙」

ビルマのカレン系言語を見ていると、ビルマ語の影響は様々なレベルで無視できない要因として働いているように思われる。ただ、このことを実証するのは難しい。ビルマ人の居住者が多いため言語の接触も頻繁であるはずの西部方言 (イラワジデルタ方言) においては、かえって標識介在型に相当する関係節が多く使われるという印象を筆者は抱いており、このことは言語接触について云々することの難しさを物語っている。

このように、本章で明らかになった傾向の原因を特定するのは難しい。これを究明する作業は今後の大きな課題として残されている。

第VII部

その他の助詞

第24章　副助詞

動詞句の後に付いて、動詞句を拡張する働きを持つのが**副助詞**(adverbial particle) である。このうち一部のものは述語名詞句に付いて、名詞述語を拡張する場合もある。

以下では、副助詞を意味的な観点から便宜的に、(A) 程度にかかわるもの、(B) 様態にかかわるもの、(C) 事象のアスペクト的把握にかかわるもの、(D) 否定にかかわるもの、(E) 話し手の態度にかかわるもの、に分類して見ていく。

副助詞は、おおむね、上の (A)(B)(C)(D)(E) の順に並べられるようであるが、配列順序に関して詳しいことはまだ分かっていない。

副助詞のうち話し手の態度にかかわるものは特に、文助詞に似た機能を持っている。文助詞と副助詞の大きな違いは、否定を表す ʔé を除けば副助詞が従属節の中に現れることができるのに対して、文助詞は従属節の中に現れないということである。しかし、副助詞が文末に現れた場合、その副助詞が文助詞として機能しているということもあり得ないことではない。もしかすると、副助詞と文助詞の間には明確な境界線がないということも十分にあり得ることである。この問題は非常に難しい問題である。ここでは指摘するだけにとどめたい。

24.1　程度にかかわるもの

24.1.1　mā

mà とも発音される。程度がやや強いことを表す。

(1) jə-　ʔáɴjâ　**mā**　lɔ̂
1sg　謝る　(断定)
「私は強く謝りたいと思います」(006.69)

(2) lənɨ̀jò　jə-　chəbóʊɴ　ɣì　**mā**
今日　1sg　運　良い
「今日、私はけっこう運が良い」(I-09.16)

(3) ʔəwêθí　ɣáɴkò　wê　θí　ʔá　mèiɴ　**mā**　chī　lɔ̂
3pl　鳴く　(強意)　できる　多い　～種類　(婉曲)　(断定)
「彼ら (=鳥) は何種類もの鳴き方ができる」(II-01.17)

(4) chəphʊ́xā　náʊ　làɴ　wê　ləpòʊɴ　**mā**　lɔ̂
虫　入る　(内方)　(強意)　たくさん　(断定)
「虫がたくさん入ってきたのだ」(001.1416)

24.1.2　kɨ̄

程度が非常に強いことを表す。ʁɨ̄ とも発音される。ときに chəkɨ̄ という形も使われる。

(5) ʔəxwè　khà　**kɨ̄**
値段　高い
「値段が非常に高い」(004.312)

(6) jə-　jū　nə̀　báɴ　**kɨ̄**　mədè
1sg　見る　2SG　若い　～ですよ
「あなたは見たところ非常に若いよ」(002.951)

(7) jə-　ʔáɴxûɯ　nə̀　mjâ　ʔá　nì　**kɨ̄**　jàʊ
1sg　探す　2SG　非常に　多い　～日　(完)
「私は何日もあなたを探しまくった」(V-04.139)

(8) jái　nɔ́　jái　**chəkɨ̄**　jàʊ　chī　nɛ̂
久しい　(題)　久しい　(完)　(婉曲)　NE
「(時間が) 経ったかというと、かなり経っていたんですよね」(V-03.61)

24.1.3　pəθài

否定を表す助詞と共に使われ、否定をやわらげる働きをする。「あまり～でない」「あまり～しない」。

(9) jə-　mà　ʔwí　**pəθài**　ʔé
1sg　取る　嬉しい　(否)
「私はあまり気に入らない」(001.2477)

(10) báɯɴ　**pəθài**　ʔé
勇気がある　(否)
「あまり勇気がない」(001.2784)

(11) pəjàɴ　chəʔáɴchəʔɔ̀　ʔáɴ　θí　**pəθài**　ʔé
ビルマ　食べ物　食べる　できる　(否)
「ビルマの食べ物はあまり食べられない」(002.449)

(12) jə̀　jò　jə-　ʔɛ́　jə-　mâ　θí　**pəθài**　ʔé
1SG　(題)　1sg　愛する　1sg　妻　できる　(否)
「私は、自分の妻をあまり愛することができない」(009.46)

24.2　様態にかかわるもの

24.2.1　phɔ̄

発話が行われている眼前で事象が生起しているということを生き生きと表現する。wɔ̄ とも発音される。「今まさに～する」「今まさに～した」。

(13) θéiɴ　ɣàkhɨ̄　làɴ　**phɔ̄**
木　倒れる　(下方)
「木が倒れるぞー / 木が倒れたぞー」(III-03.50)

(14) ká　**phɔ̄**　lə-　blàɴ　jò
難しい　一　～回　この
「今回は難しいことになったな」(IV-04.420)

(15) [$_C$ lə-　dá　[$_C$ nə-　ɣɛ̂　tháɴ　cáiɴkwè]
(否)　見える　2sg　来る　(上方)　遊ぶ

làɴ　bá]　jái　**phɔ̄**　nà
もはや　(否')　久しい　～だなあ
「あなたが遊びに来るのを見なくなって久しいなあ」(V-02.108)

(16) thòɴ　**phɔ̄** .　ʔəwê　thòɴ　**phɔ̄**
着く　3se　着く
「着いた。彼は着いたのだ」(V-04.39)

(17) cəxwà　phʊ́khwâ　lì　dá　**wɔ̄**
王　息子　行く　見える
「(それを) 王の息子は行って見てしまった」(020.37)

(18) jə-　lə-　chôɴná　mʊ̄phā　chəkhlàiɴ　bá |
1sg　(否)　聞く　父母　言葉　(否')

jə-　dákhōɴ　chənà　**phɔ̄**
1sg　会う　災難
「私は父母の言葉を聞かなかったから、災難に遭ってしまったのだ」(III-12.24)

24.2.2　bjāɴ

完璧に消滅することを示す (?)。

(19) mìjɔ̀　ʔè　ʔɔ́　nɔ́ |
猫　(条件)　ある　(題)

jʊ̄ɪ　θí　làɴmā　**bjāɴ**　chī　lɔ̂
鼠　(類似)　消える　(婉曲)　(断定)
「猫がいると、鼠がすっかりいなくなる」(I-sen.93)

(20) nə-　làɴmā　mātɛ̀　**bjāɴ**　lɔ̂　mɨ̀
2sg　消える　大変　(断定)　～ですね
「しばらくぶりですね (直訳:あなたはすっかり消えてしまいましたね)」(003.1011)

24.2.3　pōʊɴ

「急激」「突然」を表す。「急に ～ する」「いきなり ～ する」。

(21) lànthîphā　**pōʊɴ**
転ぶ
「いきなり転んでしまった」(003.608)

(22) phó　khwái　**pōʊɴ**
折れる　(徹底)
「(歯が) いきなり折れてしまった」(001.3010)

(23) khʊ́xwí　lànblè　**pōʊɴ**
頭　砕ける
「(事故で) 頭が砕けてしまった」(001.3082)

(24) bá　ʔé.　təphlá　**pōʊɴ**
当たる　(否)　はずれる
「(矢が) 当たらなかった。それてしまった」(001.3185)

(25) thələ̂ɴ　nə-　ɣéiɴ　**pōʊɴ**
過ぎる　2sg　家
「あなたの家を行き過ぎてしまった」(003.655)

(26) thōʊɴ　cà　wái　**pōʊɴ**　jàʊ
受ける　負ける　(徹底)　(完)
「負けてしまったよ」(003.681)

24.2.4　tō

「不運さ」を表す。「不運にも ～ する」「折り悪しくも ～ する」。

(27) θà　ɕā　nɔ́ |
年齢　老いた　(継起)

ʔɔ́　lə-　máʊ　nī　bá　**tō**
いる　(否)　快適な　(執拗)　(否')
「(彼は) 年老いて、病気になってしまったのです」

(28) mî　má　**tō**　lɔ̂↩　nī　ɣà　nɔ́
寝る　熟睡する　(断定)　二　～人　(題)
「(ちょっと) 寝ていたら、熟睡してしまった、二人は」(025.24)

(29) mə-　klí　báθà　lànâɴ　θí |
(非現)　走る　(欲求)　(逆接)　(類似)

lànthîphā　**tō**
転ぶ
「走りたかったんだけど、転んでしまったのだ」(003.927)

24.3　事象のアスペクト的把握にかかわるもの

24.3.1　dài

同じ事象の累加を表す。具体的には、同じ事象が再び生起すること、あるいは、ある時点で生起した事象が、後続する時点においても継続していることを表す。「再び ～ する」「依然として ～ している」「依然として ～ だ」。

動態動詞の場合、「再び ～ する」という読みと、「依然として ～ している」という二つの読みが可能である。ただし、dǔ「殴る」, θî「死ぬ」のような瞬時で終わる事象を表す動詞の場合、後者の読みが可能なのは、事象が複数回生起するときのみである。

(30) ʔəwê　ʔánɴ　**dài**
3se　食べる
「彼はまた食べた / 彼はまだ食べている」

(31) ʔəwê　dǔ　**dài**
3se　殴る
「彼はまた殴った / 彼はまだ殴っている」

(32) phlòʊɴ　θî　**dài**
人　死ぬ
「人がまた死んだ / (人々が) まだ死んでいる」

状態動詞の場合、「依然として ～ だ」という読みだけが可能である。

(33) ʔəwê　pî　**dài**
3se　小さい
「彼はまだ小さい」

(34) ʔəjò　cîcá　**dài**
これ　汚い
「これはまだ汚い」

否定を表す助詞と共に用いられると、依然として事象が生起していないことを表す。

(35) jə-　lì　**dài**　ʔé
1sg　行く　(否)
「私はまだ行かない」

(36) ʔəwê　dǔ　**dài**　ʔé
3se　大きい　(否)
「彼はまだ大きくない」

dài は同一節中に 2 回現れることがある。動詞の直後と動詞句の最後尾である。次の文を見ていただきたい。動詞の直後の dài は取り去ってしまってもかまわない。同一節中に 2 回現れることができるのは、副助詞の中で dài だけに見られる特徴である[1] 。

(37) [$_C$ bònáiɴjò　nɔ́　màɴcɔ̀　thôɴdʉ́ʉ́　lə-　ɣà
　　現在　(題)　おじさん　(人名)　一　～人

mwɛ̄　ʔə-　nánɴ　(**dài**)　ʔə-　chəkhlàiɴ　**dài**]　ʁâ
(繋)　3sg　覚えている　3sg　言葉　(疑)

nɔ́　θíjâ　ʔé　kənɛ̂
(題)　知る　(否)　KANE

「今もトンドゥーおじさんが自分自身の言葉を覚えているかは分からない」(V-03.66)

二つ現れた場合が一つしか現れない場合と意味的にどのように異なるかは今のところ分かっていない。

dài の用例を見ていくと、再び生起した事象が以前に生起した事象と必ずしも同じでない場合がある。

(38) θàɴkhâ　phʉ̄ʉcài　lâiɴphʉ́　màbòmàchəɴ |
僧侶　お坊さん　(地名)　助ける

lʉ̀　thòɴ　lʉ́ʉ́　càithò　**dài**
行く　着く　(場)　(地名)

「ラインプーのお坊さんも手伝ってくれて、チャイトーまでも行ってくれたのだよ」(015.10)

この文例は、「お坊さんがチャイトーに行く」という事象が再び起こったということを言っているのではない。様々な形で手伝ってくれたお坊さんが、「チャイトーに行く」という行為によっても手伝ってくれたということを言っているのである。この文で「チャイトーに行く」という行為は、何種類もある「手伝う」という行為の中の一つとして捉えられており、「チャイトーに行く」ことによって「手伝う」という行為が繰り返されたと捉えられている。したがって、dài が表す「同じ事象の累加」という意味における「同じ事象」というのは厳密な意味での同一の事象を意味しない。ゆるやかな意味での同一性であるということをふまえておく必要がある。次のような例も同じように捉えることができる。

(39) kəbàɴjʉ̀ʉ　θí　bá　θàmɛ́　**dài**　lɔ̂
飛行機　(類似)　(当為)　恐れる　(断定)

「(積乱雲は) 飛行機でさえもが恐れなければならない」(III-05.53)

この例でも、「飛行機が恐れる」ということが繰り返されるのではない。「普通の人間が恐れる」という前提があり、「技術の粋を尽くした飛行機でさえ恐れる」ということが、事象の累加として捉えられている。二つの事象は、「恐れる」という点で共通しているのであり、それゆえ「同じ事象」として捉えられるのである。

もう一つ、比較を表す文で dài が頻繁に使われることを指摘しておかなければならない。

[1] スゴー・カレン語では、語源的かつ意味的にポー・カレン語の dài に対応する diʔ、jàʊ に対応する lí、lɔ̀ɴ に対応する lɔ̄ は、3 個とも同一節中に 2 回現れることができる。Kato (1991) 参照のこと。

(40) ʔəjò　ɣì　dá　ʔənɔ́　**dài**
これ　良い　(比較)　それ
「これはそれよりも良い」(001.1221)

この dài も「同じ事象の累加」という枠の中で捉えることができる。「良さ」を有しているという点で、「これ」と「それ」が共通だとして、「これ」のほうが良いとしたら、「これ」には「良さ」がより多く付け加わっているのだと捉えることができるだろう[2]。

以下に dài が用いられた様々な例を見ていく。

(41) jə-　θà　bánklán　**dài**
1sg　年齢　若い
「私はまだ若い」(001.750)

(42) jə̀　θí　jə-　lɔ̀　bá　**dài**　ʔé
1SG　(類似)　1sg　語る　正しい　(否)
「私もまだ知りません」(001.655)

(43) jə-　chəphàichəmà　ɣòn　**dài**　ʔé
1sg　仕事　終わる　(否)
「私の仕事はまだ終わっていない」(001.1022)

(44) jə-　chəchâ　kɛ́　thán　**dài**　dɔ̀
1sg　病気　成る　(完成)　(別個)
「私の病気がまた出た」(001.1202)

(45) phàjàin　**dài**　ʁá
かなり遠い　(疑)
「まだかなり遠いですか?」(003.109)

(46) ʔɔ́　**dài**　θə̂n　nwê　**dài**
ある　三　～週
「まだ 3 週間ある」(003.1000)

(47) nəθí　dá　lóθà　phə̀nphə̂n　**dài**　jā
2pl　会う　(相互)　何度か　JA
「あなたがたはその後また会いましたよね」(012.8)

(48) lənìjâ　jə-　thàin　thòn　lé　thəʔàn　**dài**
先日　1sg　帰る　着く　(場)　(地名)
「先日私はまたパアンに帰った」(012.24)

[2]なお、日本語で「これはそれよりもまだ良い」と言うと、「これ」と「それ」は共にあまり良くないのだが、あえて比べると「これ」のほうが良い、というニュアンスがあるが、ポー・カレン語の dài を用いた比較の文にはこのような否定的なニュアンスはない。

(49) cɔ̀ʔɛ́phlòʊɴ　lə-　ɣà　θànáɴ　hə̀　**dài**　ʔé　mɨ̂
(人名)　一　～人　忘れる　1PL　(否)　～ですね
「チョーエープロンは私達のことを忘れてはいないのだね」(014.17)

(50) jə-　ɣɛ̂　thòɴ　mɔ̀khʊ́　**dài**　lɔ̀
1sg　来る　着く　さっき　(断定)
「私はまださっき来たばかりです」(V-02.110)

(51) lì　**dài**　xì
行く　(禁止)
「まだ行くな」(003.60)

(52) mʊ́mʊ́ʊ　lɔ̀　chə̀　nāɴ　mèiɴ　**dài**　ʔé
(人名)　語る　CHə　(少数)　～種類　(否)
「ムームーはまだ何も言っていなかった」(V-04.146)

(53) jáijái　khó　nə-　phlòʊɴchɨ̀　jò　mə-　ʔɔ́　**dài**　ʁá
しばらく　(未来)　2sg　カレン民族　(題)　(非現)　いる　(疑)
「しばらく経ったとき、あなたのカレン民族はまだ存在しているのだろうか」(IV-06.6)

(54) mʊ̄ʊ　lə-　nì　khó　jə-　mə-　ɣɛ̂　thàiɴ　chōɴ　nə̀　**dài**
日　一　～日　(未来)　1sg　(非現)　来る　帰る　迎える　2SG
「そのうちまたお前を迎えに来るよ」(V-04.13)

(55) [$_R$ chəʔɛ́　lə-　ʔɔ́　lə̀ɴ　bá]　mʊ̄ʊ　lə-　nì　nɔ́
愛　(否)　ある　もはや　(否')　日　一　～日　(題)

mə-　khá　náiɴ　ʔəlɛ̂iɴ　lá　**dài**
(非現)　苦い　(比較)　(植物の名)　葉
「愛がなくなった日には、(恋人の男が私に対して) アレインの葉よりも苦くなる (=辛くあたる) だろう」(V-05.102)

なお、dài は、次のように述語名詞句に付くこともある。

(56) ʔəwê　phʊ́　**dài**
3se　子供
「彼はまだ子供だ」

24.3.2　jàʊ

この助詞は、基準時点 (=多くは発話時点) より前に生起した事象そのもの、あるいは、その事象の生起によってもたらされた何らかの影響が、基準時点まで継続していることを表す。

事象が時間的な幅を持っているものとして捉えられた場合、その事象そのものが基準時点まで継続していることを表す。これを「事象継続の読み」と呼ぶことにする。

(57) ʔəwê　ʔáɴ　mì　**jàʊ**
3se　食べる　ご飯
「彼はもうご飯を食べている」

(58) ʔəwê　θà　ɕā　**jàʊ**
3se　年齢　老いた
「彼はもう年老いている」

(57) のような継続可能な動作や、(58) のような状態の場合、単一の事象であってもこの読みが可能である。次の例に見える dʊ́「殴る」や θî「死ぬ」のような瞬時で終わる事象を表す動詞の場合、事象継続の読みが可能なのは、事象が複数回生起するときのみである。

(59) ʔəwê　dʊ́　ʔə-　phʊ́　**jàʊ**
3se　殴る　3sg　子供
「彼はもう子供を殴り始めている」

(60) phlòʊɴ　θɛ̀　θî　**jàʊ**
人間　(複)　死ぬ
「人々が死に始めている」

(59) は「殴る」という行為を何度も行っている状況であるし、(60) は複数の人間が死んでいるという状況である。

一方、事象が一つの点として捉えられた場合、事象の生起によってもたらされた何らかの影響が基準時点まで継続していることを表す。これを「影響継続の読み」と呼ぶ。この読みは、状態動詞としての特徴を持った述部には生じない。

(61) ʔəwê　ʔáɴ　mì　**jàʊ**
3se　食べる　ご飯
「彼はもうご飯を食べた」

(62) ʔəwê　dʊ́　ʔə-　phʊ́　**jàʊ**
3se　殴る　3sg　子供
「彼はもう子供を殴った」

(63) ʔəwê　θî　**jàʊ**
3se　死ぬ
「彼はもう死んだ」

「影響」が何であるかについては、文脈が限定されなければ無数の解釈が可能である。(61) の場合、例えば「彼」はご飯を食べて腹一杯になった状態にあるという解釈が一例である。(62) の場合は、例えば「彼」が子供を殴った結果、子供が怪我をしてしまってその状態が続いているという解釈、次の (63) の場合は、「彼」が死んでしまって基準時点においては既に生き返らせることはできないという解釈、等々が可能である。

事象そのものあるいは事象生起の影響が基準時点まで継続しているという事象把握の仕方は、英語などに見られる完了 (perfect) の事象把握の仕方に似ている (Comrie 1976 を参照)。助詞 jàʊ は、完了を表す助詞であると言ってもよいかもしれない。

ところで、上で「基準時点」としたものは、発話時点であることが多い。しかし「発話時点」としないのは、次のように、発話時点とは異なる時点が基準となることがあるからである。

(64) ʔəkhâ　nɔ́　jə-　chəmà　ɣòɴ　**jàʊ**
時　その　1sg　仕事　終わる
「その時私の仕事は終わっていた」

(65) kèkhó　jə-　chəmà　mə-　ɣòɴ　**jàʊ**
明日　1sg　仕事　(非現)　終わる
「明日、私の仕事は終わっているだろう」

(66) では「その時」、(67) では「明日」が基準時点である。

以下、事象継続の読みと影響継続の読みの実例をそれぞれ挙げていく。まずは事象継続の読みの例を挙げる。

(66) mànchòɴnā　θɔ̂　**jàʊ**
鉦　鳴る
「鉦 (かね) が鳴り始めた」(001.2521)

(67) bátəkè　**jàʊ**　ʁá
順調な　(疑)
「順調になったか?」(002.378)

(68) ʔəkhâjò　hə-　thîkhāɴ　chə-　chèɴ　làɴ　**jàʊ**
今　1pl　国　CHə　降る　(下方)
「現在、私達の国ではもう雨が降っている」(012.11)

(69) jə-　blɛ̀　**jàʊ**
1sg　腹一杯の
「私はもう腹一杯だ」(001.779)

(70) ɣì　**jàʊ**
良い
「良くなった」(IV-04.828)

(71) jə-　náθí　**jàʊ**　θàʊcà
1sg　理解している　(人名)
「もう分かったよ、タウチャー」(IV-04.292)

(72) θâɴwɔ̀phʊ́　θɛ̀　xwèiɴ　thánɴ　wê　**jàʊ**　lɔ̂
郭公　(複)　鳴く　(外方)　(強意)　(断定)
「カッコウ達も鳴き始めている」(V-01.32)

次は影響継続の読みの例である。

(73) ʔəwê　ʔánlɛ̀　thánɴ　θà　**jàʊ**
3se　変える　(完成)　(再帰)
「彼は変わってしまった」(001.296)

(74) jə-　cà　nə̀　**jàʊ**
1sg　負ける　2SG
「私はお前に負けた」(001.862)

(75) ʔəwê　kɛ́　thánɴ　chə̂râmʊ́ʊ　**jàʊ**
3se　成る　(完成)　女教師
「彼女は先生になった」(001.1646)

(76) chəchə̀ɴ　tháʊ　**jàʊ**
雨　やむ
「雨がやんだ」(001.3318)

(77) chəchâ　blá　**jàʊ**　ʁâ
病気　治る　(疑)
「病気は治ったか?」(002.605)

(78) jə-　cáɪɴ　lánɴ　khwái　chəmà　**jàʊ**
1sg　出る　(外方)　(徹底)　仕事
「私はもう仕事をやめた」(012.18)

(79) nə-　dákhòɴ　dè　jə-　θʊ́mʊ́ʊ　títí　**jàʊ**　nɛ̀
2sg　会う　(共)　1sg　女友達　(人名)　NE
「あなたは私の友達のティーティーにもう会いましたよね」(014.25)

(80) pə-　thòɴ　thánɴ　lé　khāɴməŋnā　**jàʊ**
1pl　着く　(外方)　(場)　外国
「私達は外国に来ている」(IV-03.4)

(81) cɔ̀cɔ̀θéɪɴlá　ɣɛ̂　thàɪɴ　**jàʊ**
(人名)　来る　帰る
「チョーチョーテインラーは帰ってきている」(V-01.79)

なお、jàʊ は、次のように述語の位置に現れた名詞句に付くこともある。

(82) ʔəwê　chə̂râ　**jàʊ**
3sg　教師
「彼はもう教師になった」

jàʊ は否定辞とは決して共起しない。否定を表す助詞が現れた場合には次節に述べる lə̀ɴ を用いる。

24.3.3　lə̀ɴ

事象がある時点で生起しなくなり、基準時点に至るまで継続して生起していないことを表す。「もう〜しない」。この助詞は否定を表す副助詞 ʔé, ləxì を用いた主節、あるいは、動詞助詞 lə- を用いた従属節にしか現れない。これら否定を表す助詞が使われた節をここでは「否定節」と呼び、否定を表す助詞が使われていない節を「肯定節」と呼ぶことにする。下に lə̀ɴ を用いた例を示す。

(83) jə-　báɴ　**lə̀ɴ**　ʔé
1sg　若い　(否)
「私はもはや若くない」

(84) jə-　lì　**lə̀ɴ**　ʔé
1sg　行く　(否)
「私はもう行かない」

▷ この文は、過去のある時点から現在に至るまで「行かない」という状況が続いたとも解釈できるし、「今後は決していかない」という決意を表す文であるとも解釈できる。後者の解釈の場合、基準時点は未来の任意の時点であると考えられる。

(85) jə-　lə-　lì　**lə̀ɴ**　bá　ʔəkhʊ́còɴ ...
1sg　(否)　行く　(否')　(理由)
「私はもう行かないので...」

(86) lì　**lə̀ɴ**　xì
行く　(禁止)
「もう行くな」

「事象がある時点で生起しなくなり、基準時点に至るまで継続して生起していないこと」というのは、裏を返せば、「ある事象が生起しないということがある時点で開始し、基準時点までそのことが継続する」と読みかえることができる。これは先に見た jàʊ の表す「事象継続の読み」と似ている。なおかつ、jàʊ は肯定節にしか現れず、lə̀ɴ は否定節にしか現れない。つまり jàʊ と lə̀ɴ は、節が肯定節であるか否定節であるかという条件に従って相補分布を示す。以上のことから、**jàʊ と lə̀ɴ は、肯定節に使われるか否定節に使われるかが違うだけで、表す意味は同じである**と考えることができる。

下に lə̀ɴ を用いた文の例を挙げる。

(87) hə-　mà　**lə̀ɴ**　ʔé
1pl　取る　(否)
「もういりません」(005.18)

(88) ʔəwê　thàiɴ　bá　**lə̀ɴ**　ʔé
3se　帰る　正しい　(否)
「彼は (道に迷って) 帰れなくなってしまった」(006.14)

(89) bádòɴ　kɛ́　lánɴ　**lə̀ɴ**　ʔé
似ている　可能な　(完成)　(否)
「もうできないようです」(008.10)

(90) ʔəkhâjò　chə-　khū　təɕā　**lə̀ɴ**　ʔé　chī　lɔ̂
今　CHə　暑い　かなり　(否)　(婉曲)　(断定)
「今はもうあまり暑くありません」(012.13)

(91) thʉ́kò　θə́ɯɴ　thánɴ　ʔə-　nàɴ　nɔ́　ɣòɴ　θí　**lə̀ɴ**　ʔé
サイチョウ　建てる　(上方)　3sg　宮殿　(題)　終わる　できる　(否)
「サイチョウの宮殿の建築は、もう際限がない」(II-02.9)

(92) dá　já　nàɴ　béiɴ　**lə̀ɴ**　ʔé
見える　魚　(少数)　～匹　(否)
「(農民達には) もう魚が一匹も見えなかった」(III-15.35)

(93) láilɛ̄　thàibòɴ　lə-　ʔɔ́　bá　nɔ́ |　ʔə-　chɨ̀phʉ́　θɛ̀ləphá　nɔ́
文学　伝統　(否)　ある　(否')　(継起)　3sg　民族　(複)　(題)

[$_C$ mə-　khə̂ɴnòɴ　wê　dài]　nɔ́　mwɛ̄　**lə̀ɴ**　ʔé
(非現)　堅固な　(強意)　まだ　(題)　(繋)　(否)
「文学の伝統がなければ、その民族はさらに堅固になるということがもはやなくなってしまう」(IV-01.21)

lə̀ɴ は次のように動詞と目的語の間に現れることもある。

(94) ʔəlêiɴphʉ́　ʔə̀ɴkhài　lə-　béiɴ　lə-　nánɴ　wê　**lə̀ɴ**
ムクドリ　愚かな　一　～羽　(否)　覚えている　(強意)

ʔə-　mū　chəkhlàiɴ |　phʉ̂ʉ̄　làɴ　ʔánlʉ̄ʉ̄　wê　thî　lé
3sg　母　言葉　跳ぶ　(下方)　浴びる　(強意)　水　(場)

thîkhló　phə̀ɴ　ʔò　chī　lɔ̂
川　中　(遠方)　(婉曲)　(断定)
「愚かなムクドリは、母の言葉を忘れて、川の中に飛び込んで水浴びをしたのだった」(IV-07.44)

24.4　否定にかかわるもの

24.4.1　ʔé

主節に用いられ、否定を表す。従属節の否定には動詞助詞の lə- が使われる (第 18 章 18.2)。次の例を見ていただきたい。主節の否定には ʔé が使われ、従属節の否定には lə- が使われている。

(95) jə-　ʔɔ́　**lə-**　chóɴ　bá　ʔəkhʉ́còɴ |
1sg　いる　(否)　健康な　(否')　(理由)

jə-　lì　cōɴ　kɛ́　lə̀ɴ　**ʔé**
1sg　行く　学校　可能な　もはや　(否)
「私は病気なので、学校にはもう行けない」(001.84)

第 18 章 18.1 の mə- についての記述で述べているとおり、ʔé が使われた節は現実法 (realis) と非現実法 (irrealis) の区別を失う。すなわち、動詞助詞 mə- が現れない。例えば、

(96) kèkhó　jə-　mə-　ʔáɴ
明日　1sg　(非現)　食べる
「明日私は食べる」

に対応する否定文は、

(97) kèkhó　jə-　ʔáɴ　**ʔé**
明日　1sg　食べる
「明日私は食べない」

である。従って、

(98) jə-　ʔáɴ　**ʔé**
1sg　食べる
「私は食べない / 私は食べていない / 私は来なかった」

は、「(過去において) 私は食べなかった」「(未来において) 私は食べない」「(現在) 私は食べていない」「(習慣的に) 私は食べない」などの様々な解釈が可能である。
以下にいくつか例文を挙げておく。

(99) jà　nɔ́　lô　nāɴ　mèɪɴ　**ʔé**
1SG　(題)　欲する　(少数)　～種類
「私は何もいらない」(001.2356)

(100) chə-　cə́ɯɪɴ　nə-　θà　**ʔé**　ʁâ
CHə　退屈な　2sg　心　(疑)
「退屈じゃないか?」(002.19)

(101) pə-　bá　θàmɛ́　chà　ʔɔ́　nāɴ　mèɪɴ　**ʔé**　chī　lɔ̂
1pl　(当為)　恐れる　CHə　ある　(少数)　～種類　(婉曲)　(断定)
「我々が恐れるべきものは何もない」(001.2184)

(102) ʔəkwà　ʔɔ́　**ʔé**
問題　ある
「どういたしまして (直訳:問題ありません)」

▷ 礼を言われたときに返す言葉。

なお、名詞文を否定するとき、通常は次のようにいわゆる繋辞動詞 (copula verb) の mwɛ̄ が必要である。

(103) ʔəwê　mwɛ̄　phlòʊɴ　**ʔé**
3se　(繋)　カレン
「彼はカレン人ではない」

ただし、ぞんざいな会話では次のように mwɛ̄ が省かれることもある。話者によっては、このような文を正しくないと判断する。

(104) ʔəwê　phlòʊɴ　ʔé
3se　カレン
「彼はカレン人ではない」

24.4.2　ləxì

否定の命令に使われる助詞。xì とも発音される。動詞 ɣì「良い」に否定辞の lə- が付いたものが起源であると考えられる。つまり xì の部分は元来 ɣì であった。このことは、スゴー・カレン語の対応する形式が təɣē であり、また、西部ポー・カレン語の対応する形式が ləɣé であることから推測できる。

肯定の命令文においては無意志動詞を用いることはできないが、ləxì を用いた命令文においては、次のように無意志動詞を用いることができる。

(105) klòɴ　**ləxì**
悪辣な
「悪人になるな」

本論文で動詞の意志性を判断するときのテストは、あくまでも、動詞をそのまま命令文として使えるかというテストである。ləxì を付けた段階で「そのまま」という条件に抵触する。したがって、ləxì が現れた文を意志性のテストに用いることはできないということを強調しておきたい。

以下に ləxì を用いた文の例を見ていく。

(106) kətɔ̀　chə　nàɴ　mèiɴ　**ləxì**
心配する　CHə　(少数)　～種類
「何も心配するな」(III-15.18)

(107) ʔáɴ　mì　dè　cʊ́ʊ́cí　**ləxì**
食べる　ご飯　(共)　左手
「ご飯を左手で食べるな」(I-sen.14)

(108) ʔɔ́kíthɔ̄　cháichā　dè　kəlôʊɴchā　**ləxì**　chài
置き去りにする　農民　(列挙)　労働者　CHAI
「農民と労働者を置き去りにするな」(I-sen.59)

(109) mà　bê　jò　θò　**xì**
する　(比定)　これ　(比定')
「こんなことはするな」(IV-04.68)

(110) ʔánlɔ̂　nācɛ̀　**xì**　ʁɔ̄
嘘をつく　少しだけ　XO
「少しも嘘をつかないでくださいよ」(IV-04.283)

(111) ɣánɴ　**xì**　xîphànɴ
泣く　(人名)
「泣くな、フイパウン」(IV-04.317)

(112) nə-　klòɴ　náiɴ　nə-　wɛ̄　θɛ̀　**xì**
2sg　悪辣な　(比較)　2sg　兄　(複)
「お前は、お前の兄より悪い人になるな」(IV-07.38)

(113) nəθí　lì　jā　krànɴ　bá　thî
2pl　行く　泳ぐ　(無根)　(催促)　水

lé　thîkhló　phònɴ　ʔò　**ləxì**　bɔ́
(場)　川　中　(遠方)　～よ
「お前たち、川の中に入って泳いだりするなよ」(I-06.42)

(114) nə̀　lə-　ɣà　dákhòɴ　bá
2SG　一　～人　出会う　(催促)

ʔəcá　bê　mūtôʊɴ　jò　**ləxì**
人生　(比定)　母　この
「お前はお母さんのような人生には遭遇しませんように」(V-05.17)

(115) cɔ̂　ʔəthàibòɴ　phlòʊɴ　chɨ̀phʊ́　phânkhʊ́　nɔ́
兄　血筋　カレン　民族　上　(題)

chəʔɛ́　ànɴ　ɕà　bá　**xì**
愛情　落ちる　下がる　(催促)
「あなたの民族であるカレン人に対しては、愛情が減りませんように」(V-05.112)

24.5　話し手の態度にかかわるもの

24.5.1　chī

婉曲を表す。この助詞は極めて頻繁に使われる。ɕī あるいは jī とも発音される。日常の速い会話では、chī よりも ɕī や jī と発音されることが多い。

(116) jə-　kèpərə̂ɴ　nə̀　lái　ləcɛ̀phʊ́　**chī**　lɔ̂
1sg　書く　2SG　手紙　少し　(断定)
「私はあなたにちょっと手紙を書きたいと思います」(008.7)

(117) ʔəkhâjò　jə-　ʔɔ́pwài　lé　ɣéiɴ　**chī**　lɔ̂
今　1sg　休む　(場)　家　(断定)
「現在、私は家で休暇を取っています」(012.19)

(118) nə-　ʔē　dá　**chī**　dʉ̀ʉ̄ |
2sg　(条件)　会う　(条件')

lɔ̀pərə̂ɴ　bá　ʔəwê̂θí　“ jə-　nɔ́　thánɴ　bá　ʔəθí
伝える　(催促)　3PL　1sg　覚えている　(変化)　(無意)　3PL

kò　nì　dè　lɔ̂　nɔ́　**chī**　lɔ̂”
(毎)　～日　(毎')　(断定)　(のだ)　(断定)
「もし (彼らに) 会ったら、私が彼らを毎日思い出しています、と伝えてください」(012.9)

(119) ʔè　mwɛ̄　ʔəchóɴ　phàthɔ̂　nī　bòɴ　dè　ʔəchóɴ　phɨ́　nī
(条件)　(繋)　毛　長い　二　～本　(列挙)　毛　短い　二

bòɴ　ʔè　ʔɔ́　**chī**　tā |　mwɛ̄　wê̂dá　phlɔ̀θánā　ʔəphâ　nɔ́　lɔ̂
～本　(条件)　ある　(題)　(繋)　(強意)　ゴキブリ　オス　(のだ)　(断定)
「もし長い毛 (=尻尾)2 本と短い毛 2 本があったなら、(それは) ゴキブリのオスである」(II-06.18)

(120) pə-　ʔè　dòɴ　khʉ̄　thánɴ　**chī**　thî　nɔ́ |
1pl　(条件)　火にかける　熱い　(変化)　水　(題)

mə-　lá　thánɴ　wê̂dá　lɔ̂
(非現)　沸騰する　(完成)　(強意)　(断定)
「水を火にかけて沸かすと、沸騰する」(II-09.4)

▷ この例では chī は目的語の前に現れている。

主題化された要素に一般助詞の θí が現れると、述部に chī が現れることが多い。

(121) jə̀　θí　báθà　phʉ́　jàʊ　**chī**
1SG　(類似)　欲しい　子供　(完)
「私も子供が欲しくなりました」(009.26)

(122) lənéiɴjò　θí　bê　xāxòɴ　néiɴ　θɛ̀　θò　**chī**
今年　(類似)　(比定)　他　年　(複)　(比定')
「今年も、例年の通りだった」(V-05.22)

(123) chəphàichəmà　θə́ɯɴ　chîphó　θə́ɯɴ　jāθàʊ　θí
仕事　植える　サトウキビ　植える　キンマ　(類似)

ʔɔ́　wê　**chī**　lɔ̂
ある　(強意)　(断定)
「サトウキビを植えたりキンマを植えたりする仕事もある」(III-17.18)

(124) nə̀　θí　nə̀　**chī**　mʉ́ʉ
2SG　(類似)　2SG　女
「お前もお前だぞ、恋人よ」(V-04.196)

▷ X θí X chī は、ある人物 X の過ちを責めるときの決まり文句。日本語の「X も X だ」によく似ている。

24.5.2　lɔ̂

断定を表す。これも非常に頻繁に使われる助詞である。演説や書き言葉などでは特に多く使われ、文章によってはほとんどの文にこの助詞がついていることもある。

(125) jə-　lì　**lɔ̂**
1sg　行く
「私が行ったのだ」

(126) nə-　kâɴ　ɣì　mā　**lɔ̂**　nɛ̀
2sg　運　良い　(非常)　NE
「あなたは運がいいんですね」(002.154)

(127) ʔwí　mā　**lɔ̂**　xɔ̄
美味しい　(非常)　XO
「とても美味しいよ」(003.76)

(128) nə-　phlɛ̄　khlî　θí　chī　**lɔ̂**　jā
2sg　漕ぐ　舟　できる　(婉曲)　JA
「あなた、舟は漕げますよね」(I-06.16)

(129) ʔɔ́　máʊ　**lɔ̂**　chī　jā
いる　快適な　(婉曲)　JA
「お元気ですよね」(008.5)

(130) ʔè　lə-　láʊ　cì　bá　nɔ́　ɣòɴ　**lɔ̂**
(条件)　(否)　失う　お金　(否')　(継起)　終わる
「お金がなくならなければそれでよい」(IV-04.34)

▷ ここでの ɣòɴ「終わる」は、「それで構わない」という意味で使われている。

(131) dòʊɴláʊθôɴθà　nə-　nâ
世界　2sg　鼻

ʔə-　thɔ̂　tháʊ　**lɔ̂**　ʁà　θíʲâ　ʔé
(名詞化)　高い　(最上)　(疑)　知る　(否)
「この世界であなたの鼻が一番高いかも知れない」(006.21)

この助詞は、近い将来において生起する事象を表すことがよくある。

(132) chə-　mə-　chɔ̀ɴ　**lɔ̂**
CHə　(非現)　降る
「雨が降るぞ」

(133) màɴcɔ̀　mə-　lɔ̀　**lɔ̂**　xɔ̄
おじさん　(非現)　語る　XO
「さあ話してあげよう」(006.7)

(134) pə-　mə-　thàiɴ　**lɔ̂**
1pl　(非現)　帰る
「さあ帰るぞ」(I-06.85)

(135) mə-　pətháʊ　**lɔ̂**　ʁɔ̄
(非現)　止める　XO
「(手紙を書いていて) もうペンを置きます」(009.50)

(136) kèɣɔ̀khó　mə-　thàiɴ　**lɔ̂**　mwɛ̄　jā
明日　(非現)　帰る　(繋)　JA
「明日、帰るんですよね?」(IV-04.296)

また、数や量に関わる表現と共に用い、その数や量に限定されるということを表す。

(137) jə-　lì　thánɴ　lə-　ɣà　**lɔ̂**
1sg　行く　(上方)　一　～人
「私は 1 人だけで行った」(IV-04.25)

(138) nāɴ　phə̂ɴ　**lɔ̂**　ʁâ
(少数)　～回　(疑)
「(今後ご馳走してくれるのは)1 回だけか?」(V-03.77)

(139) khlàiɴ　nī　phlòʊɴ　chəkhlàiɴ　pìpì　**lɔ̂**　xɔ̄
話す　(努力)　カレン　言葉　もっぱら　XO
「努めてカレン語だけを話しなさい」(003.811)

24.5.3　dàlɔ̂

断定を表す。tàlɔ̂ とも発音される。最初の音節を中平調で dālɔ̂, tālɔ̂ と発音することもある。

(140) mwɛ̄　cɔ̂khléiɴ　ʔɛ́kwì　xîphàɴ　**dàlɔ̂**　ʁá　θíjâ　ʔé
(繋)　(人名)　愛する　(人名)　(疑)　知る　(否)
「チョークレインはフイパウンを (本当に) 愛しているのかしら」(IV-04.258)

(141) ɣɛ̂　cáiɴkwè　mɔ̀ləmjâiɴ　**dàlɔ̂**
来る　遊ぶ　(地名)
「モールメインに遊びに来たのです」(IV-04.103)

(142) jə-　jʊ̄　klàɴ　**dàlɔ̂**
1sg　見る　(無根)
「ただ漫然と見ていただけなんだよ」(IV-04.60)

(143) ʔəjò　ɣàmʉ́ʉ　ɣɛ̂　làɴ　xwè　thîlá　thî　**dàlɔ̂**
　　これ　おばさん　来る　(内方)　買う　食塩　水
　　「ええと、私は生理食塩水を買いに来たのですよ」(IV-04.443)

(144) tháɴ　tɛ́kəθò　ʔəkhâ　láʊ　cìɕá　**tālɔ̂**
　　上る　大学　時　失う　金銭
　　「大学に通っている時は、お金がなくなるばかりですよ」(V-03.118)

24.5.4　bòlɔ̂

dàlɔ̂ と同じく、断定を表す (?)。

(145) jə-　ʔáɴ　**bòlɔ̂**
　　1sg　食べる
　　「(食べたくないけれど) 食べたんですよ」(001.817)

(146) ʔəjáʊ　mə-　ʔɔ́　nāɴ　ləchînī　néiɴ　**bòlɔ̂**
　　年齢　(非現)　ある　(少数)　十二　～年
　　「(彼女は)12 才くらいにはなるだろう」(V-04.76)

dàlɔ̂ と組み合わせて bòlɔ̂ dàlɔ̂ の形で使うこともある。

(147) lɔ̀　jʊ̄　wá　**bòlɔ̂**　**tàlɔ̂**
　　語る　(試行)　(無意)
　　「試しに言ってみただけなんだよ」(003.860)

24.5.5　nɔ́

名詞修飾助詞の nɔ́「あの」に由来する。「自分 (=話し手) が伝えたい情報に関して、聞き手が何らかの推定をしている」と話し手が考えていることを表す (?)。今のところこの助詞の機能は完全には把握できていない。日本語には「～のだ」と訳すことができる場合が少なくない。

(148) lənìjò　mwɛ̄　ʔətáʊ　mʉ̄ʉnì　**nɔ́**　lɔ̂
　　今日　(繋)　日曜　日　(断定)
　　「今日は日曜日なのです」(I-06.3)

(149) phjā　ʔɔ́　lə-　ɣà　**nɔ́**　jā
　　もの　いる　一　～人　JA
　　「(ある所に) 人が 1 人いたんですよ」(019.16)

(150) lé　ʔəklà　lə-　phlóʊɴ　nɔ́
　　(強調)　真ん中　一　～個　(題)

mwɛ̄　wêdá　phā　ʔə-　càɴ　**nɔ́**　lɔ̂
(繋)　(強意)　父　3sg　小屋　(断定)
「真ん中のやつがお父さんの小屋なのよ」(I-06.33)

(151) thòɴnɔ́　lə-　phɔ̂ɴ　ʔəwêdá　bá　θî　khwái　mèiɴ　wê
そして　一　～回　3se　(当為)　死ぬ　(徹底)　(自然)　(強意)

lé　ʔə-　kùɯ　phɔ̀ɴ　**nɔ́**　chī　lɔ̂
(場)　3sg　殻　中　(婉曲)　(断定)
「そして、彼 (=亀) は、自分の殻の中で死んでしまったのでした」(II-11.18)

(152) càdìθɔ̂ɴ　nɔ́　ʔɔ́　thəlɔ̂ɴ　khwái　ʔá　néiɴ　ʔá　là　ɣòɴ |
ライオン　(題)　いる　過ぎる　(徹底)　多い　～年　多い　～月　(継起)

θàjūɯ　thánɴ　bá　ʔə-　θʊ́　kəchânɴ　**nɔ́**　lɔ̂
懐かしい　(変化)　(無意)　3sg　友　象　(断定)
「ライオンは、(1 人で) 暮らし出して何年何ヶ月と過ぎたとき、友人の象のことが懐かしくなったのだった」(I-04.27)

(153) lānânɴθí　ʔəwê　mà　lə-　bá　nàɴ　mèiɴ　bá　**nɔ́**　ʔəkhʊ́còɴ |
しかし　3se　する　(否)　正しい　(少数)　～種類　(否')　(理由)

kəljânɴ　thàiɴ　θâ　wê　lé　ʔəlānɴʔəklɛ̀　kò　phàdʊ́　ʔò　lɔ̂
帰る　(元位)　(新局)　(強意)　(場)　故郷　島　大きな　(遠方)　(断定)
「しかし、彼 (=ライオン) は、何もすることができなかったので、故郷の大きな島へと帰っていったのだった」(I-04.33)

(154) ʔəwêθí　cò　ʔánɴ　wê　chəphʊ́xā　lé　θéiɴ　béiɴ　lá
3se　つつく　食べる　(強意)　昆虫　(場)　木　皮　下

θí　**nɔ́**　ʔəkhʊ́còɴ |　mwɛ̄　ʔəwêθí　màbòɴ　màchɔ̀ɴ　wê
(複)　(理由)　(繋)　3pe　助ける　助ける　(強意)

chəmàθéiɴchā　θí　kō　nì　dè　**nɔ́**　lɔ̂
林産業者　(複)　(毎)　～日　(毎')　(断定)
「彼ら (=鳥) は、樹皮の下の虫たちを食べるので、毎日、林産業者たちを助けているのである」(II-01.8)

(155) pə-　ʔè　báθà　wûɯchá　ʔwà　nɔ́ |　bá　dàʊlàɴ　lé
1pl　(条件)　欲しい　米　白い　(継起)　(当為)　入れる　(場)

chāɯɴ　phɔ̀ɴ　**nɔ́**　ɣòɴ |　pə-　klɨ̀cɨ́　ʔánchûɯ　chī　tā |
臼　中　(継起)　1pl　努力する　搗く　(婉曲)　(継起)

ʔəwêdá　mə-　kɛ́　thánɴ　wûɯchá　ʔwà　chī　lɔ̂
3se　(非現)　成る　(完成)　米　白い　(婉曲)　(断定)
「もし白い米が欲しければ、臼の中に入れて、懸命に搗いて (初めて)、それは白い米になるのである」(I-05.6)

第25章　文助詞

文に付いて、文を拡張する働きを持つのが**文助詞**(sentence particle) である。文に付くものであるから、従属節の中には現れない。話し手の様々な態度を表すものが多い。chə̀ のみが文頭に現れ、それ以外はすべて文末に現れる。

25.1　ʁâ

疑問を表す。厳密に言うと、文の表す命題の真偽について、聞き手が話し手に情報を与えなければならないということを表す。ʁá あるいは ʁā とも発音される。次節に述べる lɛ̂ と異なり、疑問語の現れない文に使われる。

(1) nə-　lì　khòlà　khāɴ　nɔ́　máʊ̀　chī　**ʁâ**
2sg　行く　インド　国　(題)　快適な　(婉曲)
「インドに行って楽しかったか?」(009.10)

(2) θíkhʊ́xwíjə̀ɯɴ　ʔɔ́　dài　**ʁâ**
頭痛薬　ある　まだ
「頭痛薬はまだありますか?」(I-sen.37)

(3) nə-　pɔ̄　láiphlòʊɴ　bá　chī　**ʁâ**
2sg　読む　カレン文字　正しい　(婉曲)
「あなたはカレン文字が読めますか?」(I-sen.58)

(4) wɛ̄nâɴ　pə-　lì　cáiɴkwè　lé　phā　ʔə-　chái　phə̀ɴ　ʔò　**ʁâ**
姉　1pl　行く　遊ぶ　(場)　父　3sg　田　中　(遠方)
「お姉ちゃん、僕たちはお父さんの田んぼに行くの?」(I-06.11)

(5) khəmlə̄ɴ　θɛ̀　ʔè　dá |
民衆　(複)　(条件)　見える

nə-　káθà　ʔé　**ʁá**　cɔ̂khléiɴ
2sg　恥ずかしい　(否)　(人名)
「人に見られたら、恥ずかしくないの、チョークレイン?」(IV-04.240)

(6) thàθəwài　nɔ́　mwɛ̄　nəθí　θíjâ　chī　**ʁá**
磁石　(題)　(繋)　2pl　知っている　(婉曲)
「磁石について、あなた達は知っていますか?」(III-01.4)

(7) jə-　ʔɔ́　θéiɴ　wī　lòɴ　jò |
1sg　いる　木　根　上　(近傍)

nə-　dá　jə̀　ʔé　**ʁâ**
2sg　見える　1SG　(否)
「俺は木の根の上にいるのだが、お前には俺が見えないのか?」(III-03.8)

ʁâ は疑問を表すが、ʁâ が使われた文が語用論的にも常に疑問の文として使われるとは限らないことは注意すべきである。ʁâ が使われた文は、疑問以外の様々な語用論的意味を表し得る。例えば、次の例は、「そうなのか？」という疑問を表す文として以外に、相手の主張に対する納得の印 (すなわち相づち) としても使うことができる。

(8) mwɛ̄　**ʁâ**
(繋)
「そうですか」

また、次の例は、ʁâ を用いることによって、命題に対する強い反対の態度を表している。

(9) [$_C$ hə-　bá　θàthánɴ　lóθà]　bá　**ʁá**　nɛ̂
1pl　(当為)　怒る　(相互)　正しい　NE
「私達が互いに腹を立てあっているのは、正しいことかね?(いや正しくない)」(001.687)

このように、文末助詞の ʁâ が用いられていても、常にその文が疑問を表すとは限らない。しかし、意味論的には ʁâ は疑問を表すと考える。

なお、下のような補文の後に現れた ʁâ は、従属節助詞と考える。これについての詳しい議論は、第 22 章 22.4 を見られたい。

(10) [$_C$ ʔəjò　ɣì]　**ʁâ**　θíjâ　ʔé
これ　良い　知る　(否)
「これは良いかどうか知らない」

25.2　lɛ̂

lɛ́ あるいは lɛ̄ とも発音される。語源的にはおそらく、ビルマ語の /-lɛ́/ と関係がある。lɛ̂ には疑問を表す lɛ̂(下の lɛ̂(1)) と 感嘆を表す lɛ̂ (下の lɛ̂(2)) とがある。

25.2.1　lɛ̂ (1)

ʁâ と同様に疑問を表す。ʁâ との違いは、lɛ̂ が基本的には疑問語が現れた文で用いられるということである (第 27 章を参照)。lɛ̂ は、疑問語によって示された不定の内容について、聞き手が話し手に情報を与えなければならないということを表す。下の二つの文を対比せよ。

(11) ʔəjò　ɣì　**ʁâ**
これ　良い
「これは良いですか?」

(12) chənɔ́ ɣì **lɛ̂**
何 良い
「何が良いですか?」

以下に lɛ̂ を用いた例を挙げる。

(13) nə- nī já xwè béiɴ **lɛ̂**
2sg 得る 魚 いくつ ～枚
「何匹の魚を捕まえた?」(I-06.68)

(14) mə- ʔɔ̀ʔánɴ nɔ́ **lɛ̂**
(非現) 飲み食いする 何
「何を食べますか?」(V-03.42)

(15) nə- ɣɛ̂ thàiɴ lé cəpânɴ khāɴ chəɕái **lɛ̂**
2sg 来る 帰る (場) 日本 国 いつ
「あなたはいつ日本から帰って来たんですか?」(V-04.133)

(16) mwɛ̄ θàʊcà mə- lɔ̀ nɔ́ **lɛ́**
(繋) (人名) (非現) 語る 何
「タウチャーは何を言うつもりなの?」(IV-04.214)

(17) mwɛ̄ chônmóɴ nɔ́ **lɛ̂** nɛ̂
(繋) 考える 何 NE
「何を考えているのかね?」(V-03.68)

(18) jɔ̂ bêθí **lɛ̂** θwíwɔ̀
容易な どのように (人名)
「どう簡単だというのだ、トゥイーウォー?」(IV-04.154)

文末助詞の lɛ̂ は意味論的には疑問を表すが、lɛ̂ が用いられた文が語用論的に常に疑問を表すとは限らないのは、ʁâ と同様である。例えば次の文を見られたい。

(19) phlòʊɴ mə- lì **lɛ̂**
誰 (非現) 行く
「誰が行くというのだ」

この文は、基本的には「誰が行くのか」ということを表す疑問の文であるが、「誰も行かないだろう」という主張を表すために用いることもできる。このように、lɛ̂ の場合も、文が常に疑問を表すとは限らない。

実は lɛ̂ は、疑問語が現れていない文でも用いられる場合がある。この場合の lɛ̂ は ʁâ と同様に、命題の真偽を問うていることを表す。ただし lɛ̂ の場合、非常に強い疑念を表す。

(20) nə- bá kəlôɴ chə̀ phɔ̄phɔ̂jò **lɛ̂**
2sg (当為) 急ぐ CHə このように
「お前は (本当に) こんなに急がなければならないのか?」(001.1582)

(21) nə-　mâ　ɣɛ̂　**lɛ̂**
2sg　妻　来る
「(一体) お前の妻は来てるのか?」

強い疑念を表すことから、時に lɛ̂ が用いられた文はしばしば反語的な意味合いを持ち、否定辞と同様の効果を文にもたらすことがある。下の例を見ていただきたい。

(22) phlòʊɴ　bá　θíjâ　jə̀　nāɴ　ɣà　**lɛ̂**
人　(当為)　知る　1SG　(少数)　～人
「他人が誰ひとりとして私のことを知っているはずがない」(V-03.31)

名詞修飾助詞 nāɴ は、否定文で使われると、皆無であることを表す。この文の nāɴ も皆無を表しており、これは、lɛ̂ が使われていることの効果によるものである。

なお、下のような補文の後に現れた lɛ̂ は、先ほどの ʁâ と同様、従属節助詞と考える。これについての詳しい議論は、第 22 章 22.4 を見られたい。

(23) [$_C$ chənɔ́　ʔɔ́]　**lɛ̂**　jə-　θíjâ　ʔé
何　ある　1sg　知る　(否)
「何があるのか私は知らない」

25.2.2　lɛ̂ (2)

詠嘆を表す。程度の甚だしさを表す副助詞の mā(mà) と共起することが多い。

(24) mwɛ̄　nə-　thòɴ　phlài　mà　**lɛ̂**　θʊ́
(繋)　2sg　着く　遅い　(非常)　友
「来るのが何と遅いじゃないか、友よ」(IV-04.279)

(25) ləɣájò　ʔəphlòʊɴ　ʔá　mà　**lɛ̂**
今夜　人　多い　(非常)
「今夜は人が多いなあ」(V-03.9)

(26) kəcài　mwɛ̄　phlɛ́　mà　**lɛ̂**　θʊ́
仏　(繋)　速い　(非常)　友
「ああ、(君が子供をもうけるのが) はやいなあ、友よ」(V-03.75)

(27) θí　mà　**lɛ̂**　bò
できる　(非常)　BO
「よくやり遂げたものだなあ」(V-04.218)

(28) mwɛ̄　pə-　chəbóʊɴ　láʔə̀ɴ　châ　mà　**lɛ́**　cɔ̂khléɪɴ
(繋)　1pl　運　醜い　大変　(非常)　(人名)
「私達の運は何て悪いのでしょう、チョークレイン」(IV-04.406)

25.3 nɛ̂

聞き手の同意を期待するときに用いる。nɛ̀ とも発音される。日本語では、しばしば「ね」で訳すことができる。

(29) nà ʔəkhâjò mə- nī thàiɴ
2SG 今 (非現) 得る (再度)

phʊ́ lə- ɣà lɔ̂ chī **nɛ̂**
子供 一 ～人 (断定) (婉曲)
「あなたは、今度また子供をひとりさずかるんですよね?」(009.19)

(30) nə- dákhòɴ dè jə- θʊ́mɯ́ títí jàʊ **nɛ̀**
2sg 会う (共) 1sg 女友達 (人名) (完)
「あなたはもう私の女友達のティーティーと会いましたよね?」(014.25)

(31) là lə- béiɴ jò chə- khʊ̄ təɕā **nɛ̀**
月 一 ～枚 この CHə 暑い かなり
「今月はかなり暑いですね」(IV-04.6)

(32) θwíwɔ̀ ɣàmɯ́ ʔèiɴɕɯ́ jò
(人名) おばさん (人名) (題)

ʔə- θàʊthəjā ɣì châ mā lɔ̂ **nɛ̀**
3sg 誠意 良い 大変 (非常) (断定)
「トゥイーウォーのおばさんのエインシューは、とても誠意のある人だね」(IV-04.150)

(33) wɛ̀cɔ̀ thòɴ tɛ́kəθòphjācòɴmòɴ θí |
お兄さん 着く 大学 (逆接)

wɛ̄cɔ̀ θànáɴ phɔ̂ʔwà nāɴ phə̂ɴ ʔé **nɛ̂**
お兄さん 忘れる (人名) (少数) ～回 (否)
「僕は大学に行っても、ポーワーのことを決して忘れないからね」(V-01.17)

(34) nə- θíjâ ʔé ʁá
2sg 知る (否) (疑)
「お前は知らないのか?」

—— θíjâ **nɛ̂**
知る
「知ってるさ」

(35) mə- mwɛ̄ ʁá **nɛ̀**
(非現) (繋) (疑)
「本当かね?」(IV-04.57)

▷ 話者は、相手の言ったことに対して強い疑義を抱いている。mə- mwē ʁá の部分は、nɛ̀ がなければ「そうなのか?」の意の疑問を表す。全体としては、「話し手が疑問を抱いたということが当然である」ということに同意を求める文となる。

(36) mwē　ʔé　**nɛ̂**
(繋)　(否)
「(君の意見は) 間違ってるね」(IV-04.76)

25.4　kənɛ̂

おそらく nɛ̂ と同様の機能を持つ。nɛ̂ を使うか kənɛ̂ を使うかは、idiolect による差異である可能性もある。kənɛ̀ とも発音される。

(37) ɣɛ̂　lé　θə́ɯɴphlà　ʔəɣāiɴ　khɔ̂　nɔ́ |
来る　(場)　植える　事柄　(対比)　(前提)

pàkà　ʔé　chī　**kənɛ̂**
注目する　(否)　(婉曲)
「作物の栽培のことになると、気をとめなかったんですよね」(V-03.61)

25.5　jā

話し手が信じている情報を、聞き手に確認するときに用いる。「(～です) よね」。否定を表す副助詞の ʔé と疑問を表す文末助詞の ʁâ が融合同化して発生したのではないかと考えられる。

(38) ʔɔ́　máʊ　lɔ̂　chī　**jā**
いる　快適な　(断定)　(婉曲)
「お元気ですよね?」(008.5)

(39) nə-　phlɛ̄　khlî　θí　chī　lɔ̂　**jā**
2sg　漕ぐ　舟　できる　(婉曲)　(断定)
「舟、漕げるよね?」(I-06.16)

(40) kɛ́　phūɯkhwâ　θí　lɯ̀　lɔ̂　**jā**
さあ　弟　(類似)　行く　(断定)
「さあ、あなたも行くでしょう?」(IV-04.178)

(41) hə-　ɣɛ̂　thàiɴ　lòɴ　tháʊ　nī　thàiɴ
1pl　来る　帰る　追う　乗る　(努力)　(追加)

kəbàɴ　nàɴ　thí　kɛ́　**jā**
船　(少数)　～回　可能な
「今度は船に乗って帰って来るのでもいいでしょう?」(IV-04.10)

(42) cānbò jə- lɔ̀ wɛ̀ nə̀ **jā**
だから 1sg 語る (備え) 2SG
「だから言っておいたでしょう?」(V-03.128)

(43) lé phjā jò **jā** pâ
棒 物 この お父さん
「この棒 (が重要) なんだけどね、お父さん」(020.64)

jā はしばしば nɛ̂ と共に使われる。

(44) thònnáin lóθà **jā** **nɛ̂**
覚える (相互)
「(我々は) 互いに (互いのことを) 覚えておこうじゃないか」(V-03.49)

この文は、「互いに覚えておく」という動作を行うことを聞き手に確認し、同時に同意を求めているのだと考えられる。

25.6 jābò

文の表す命題が真であることに話し手が確信を持っているということを表す。jāwò あるいは jāʁò とも発音される。語源的には、同じく文末助詞の jā および bò の連続したものであるが、jābò 全体の表す意味は、これらを単に合成するだけでは導くことができない。よって、jābò 全体で一つの単語であると見なす。

(45) ʔənɔ́ **jābò**
それ
「まったくその通りですな」

(46) máʊ wê **jābò**
快適な (強意)
「楽しいに決まってるでしょ!」(V-01.6)

(47) dá hə̀ θí lə̀n ʔé wê **jābò**
会う 1PL できる もはや (否) (強意)
「どうせもう私とは会えないんでしょ！」(001.1487)

(48) nə- ʔɛ̀ θíjâ | ɣòn lɔ̂ **jābò**
2sg (条件) 知る 終わる (断定)
「あなたが分かっているのなら、それでいいのよ」(V-05.41)

(49) bê nə̀ lə- ɣà mə- klə̀nkhlân θò |
(目的) 2SG 一 ～人 (非現) 理解する (目的')

jə- mə- lɔ̀ phí thàin **jābò**
1sg (非現) 語る (裨益) (再度)
「あなたが分かるように、話してあげますよ」(V-04.162)

▷ jābò を使うことによって、「必ず」という意味合いが生じている。

(50) plɛ̀tɔ̀　lóθà　bá　kɛ́　wê　klə̀　lɔ̂　**jābò**
許す　(相互)　(当為)　可能な　(強意)　いつも　(断定)
「(僕たち二人は) いつでも互いに許すことができなければならないに決まってるよ」(V-04.233)

jābò は、しばしば、強い勧誘を表すために用いられる。「勧誘」の意味は、話し手と聞き手を動作主とする事象が生起するということを、確信を持って主張することから、語用論的に生じるのだと考えられる。

(51) kèɣɔ̀　khó　thàiɴ　tháʊ　jʊ̄　**jābò**
明日　(未来)　帰る　乗る　(試行)
「明日、(船に) 乗って帰ってみよう」(IV-04.14)

(52) wɛ̄cɔ̀　ʔē　nī　θítɛ́kəθò　bwɛ́　khó |
お兄さん　(条件)　得る　医科大学　学位　(未来)

ʔɔ́　thōɴ　dòʊɴ　ləkōʊɴ |　pàʊ　thánɴ　θítàʊ
住む　(場)　町　(地名)　開く　(完成)　医院

thōɴ　θìtâ　ɣéiɴ　nɔ́　**jābò**
(場)　(人名)　家　(のだ)
「あなたが医科大学の学位を取ったら、(私達は) ヤンゴンに住んで、私 (=ティーダー) の家で医院をやりましょうよ」(V-01.50)

25.7　xɔ̄

話し手の意向や事情を聞き手に理解してもらいたいときに用いる。ʁɔ̄ あるいは jɔ̄ とも発音される。

(53) mə-　pətháʊ　lɔ̂　**ʁɔ̄**
(非現)　止める　(断定)
「(手紙を書くのを) そろそろ止めますね」(009.50)

(54) mə-　thàiɴ　ʔɔ́　ɕòɴ　dè　nə̀　thōɴʔəthòɴ　dài　**xɔ̄**
(非現)　帰る　いる　(皆)　(共)　2SG　必ず　また
「また必ずあなたのところに帰ってきますからね」(V-04.19)

(55) màɴcɔ̀　mə-　phílâɴ　nə̀　ɺjāθài　jò　**xɔ̄**
おじさん　(非現)　与える　2SG　贈り物　この
「おじさんは君にこの贈り物をあげるからね」(V-04.106)

(56) [$_R$ cɔ̂　mə-　ɣɛ̂　thàiɴ]　mʊ̄ɪ̄nì
お兄さん　(非現)　来る　帰る　日

ʔwàʔwà ʔɔ́khò jū làɴ **ʁɔ̄**
(人名) 待つ 見る (内方)
「あなた (=お兄さん) が帰って来る日を私 (=ワーワー) は待ちこがれています」(V-05.76)

(57) pətháʊ lʊ́ʊ ʔò pətháʊ lé jò | jái mèiɴ ləpî **ʁɔ̄**
止まる (場) あそこ 止まる (場) ここ 久しい (自然) 少し
「(バスが) あっちに止まったりこっちに止まったりして、遅れてしまったんですよ」(001.2548)

xɔ̄ は命令文でしばしば用いられる。

(58) kè phí thàiɴ lái nāɴ béiɴ **ʁɔ̄**
書く (裨益) (返答) 手紙 (少数) ～枚
「手紙をまた書いてくださいよ」(011.35)

(59) θàɣɛ̂thánɴ bá nâɴ xì **ʁɔ̄**
腹を立てる (催促) お姉さん (禁止)
「私 (=お姉さん) に腹を立てないでね」(IV-04.205)

25.8 bɔ́

xɔ̄ と同様の働きを持つ (?)。

(60) nəwêdá nə- ʔè θàmɛ́ ʔò |
2se 2sg (条件) 恐れる (題)

lì ɣà ʔɔ́ khwái wê lé ʔəjàiɴ ʔò **bɔ́**
行く 渡る 居る (徹底) (強意) (場) 遠く (遠方)
「(人間が) 恐いのだったら、遠くに行って暮らすがいい」(I-04.24)

(61) nəθí lì jā kràɴ bá thî lé
2pl 行く 泳ぐ (無根) (催促) 水 (場)

thîkhló phəɴ ʔò ləxì **bɔ́**
川 中 (遠方) (禁止)
「お前達は川の中でやたらと泳ぐんじゃないよ」(I-06.42)

25.9 jɛ̄

これも xɔ̄ と同様の働きを持つ (?)。

(62) jə- ɣɛ̂ ʔánxʊ̂ʊ chəθíjânáθí ləcɛ̀ləmwɛ̀ **jɛ̄**
1sg 来る 探す 知識 少し
「私はちょっと調査をしに来たんですよ」(001.1445)

25.10　kə̄

命令文で用いられる。強い催促の気持ちを表す。

(63) ɣɛ̂　thàiɴ　**kə̄**
来る　帰る
「帰ってきてくれ」

(64) klɨ̀cɨ　təɕà　**kə̄**
努力する　確かに
「しっかり頑張ってくれたまえ」(001.1542)

25.11　wê

命令文で用いられる。せかすときに用いる。

(65) lɔ̀　xɛ̀xɛ̀　**wê**　θwíwɔ̀
語る　小声で　(人名)
「小声で話しなさいよ、トゥイーウォー」(IV-04.73)

(66) bòɴ　làɴ　**wê**
注ぐ　(下方)
「(酒を) 早く注げよ」(V-03.18)

(67) ʔɛ̀　θíjâ |　ʔɔ́　xɛ̀　**wê**
(条件)　知る　いる　黙って
「知ってるんだったら黙ってろよ」(V-03.45)

25.12　jāɴ

命令文で用いられる。目下の者に優しく命令するときに用いる (?)。

(68) lɔ̀　thàiɴ　nāɴ　wâɴ　dɔ̀　**jāɴ**
語る　(再度)　(少数)　～回　(別個)
「もう一度言ってごらん」(V-03.103)

(69) màprə̂ɴxòɴ　dè　nə-　phūɪ　nī　ɣà　nɔ́　**jāɴ**
演じる　(共)　2sg　弟　二　～人　(のだ)
「あなたの弟と 2 人で演じてごらん」(V-04.246)

25.13　dʉ̀

聞き手への反論を表す。

(70) jə- dá mūkhó.
1sg 見える さっき

nə- jū thî phàjái chī **dɯ̀**
2sg 見る 確かな 久しく (婉曲)
「(君はあの女性を見ていないと言ったが) 俺はさっき見たぞ。君はしばらくしげしげと見ていたぞ」(IV-04.58)

(71) θò nɔ́ θò lānâɴ θí
友人 (題) 友人 (逆接) (類似)

cì nɔ́ θò ʔé **dɯ̀**
お金 (題) 友人 (否)
「友達は友達だが、お金は友達と関係がない (注:友人にツケを頼まれた店員が拒否の態度を示しながら)」(V-03.25)

(72) dè cáiɴ làɴ cōɴ mà mâ lɔ̂ **dɯ̀**
～してすぐ 出る (下方) 学校 取る 妻 (断定)
「学校を出てすぐ結婚したのだから (当然だ)(注:もう 2 人も子供ができたのかと言われて)」(V-03.76)

(73) nə- chəbóʊɴ ɣì mà lɔ̂ nɛ̀ ʔwàʔwà.
2sg 運 良い (非常) (断定) NE (人名)

nə- chəʔɛ́tàɴ mwɛ̄ wêdá tɛ́kəθò cōɴθā **dɯ̀**
2sg 恋人 (繋) (強意) 大学 学生
「あなたはとても運がいいわ、ワーワー。あなたの恋人は大学生なんだもの」(注:ある男性と関係がないと言い張る聞き手に対して)(V-05.42)

25.14 chə̀

chə- とも発音される。おそらく、代名詞の chə̀ と同源である。この助詞は、文助詞の中で唯一、文頭に置かれ、何かに対する根拠・理由を言いたいときに用いられる。この助詞が使われると、文末に前節で述べた dɯ̀ が現れることが多い。

(74) **chə̀** phʊ́θá dài lɔ̂ dɯ̀
子供 まだ (断定) DU
「まだ子供なのだから (そんなに叱るなよ)」(V-03.110)

(75) **chə-** nə- phà lə- bá dɯ̀
2sg 当てる (否) 正しい DU
「(このお金はもらっておくよ。) あなたは (なぞなぞの答えを) 当てられなかったのだから」(019.24)

(76) **chə-** cəxwà θà ɕā ʁáɴ dɯ̀
王 年齢 老いた (変化) DU
「(若返りの薬が欲しいのは当然だ。) 王は年老いているのだから」(020.50)

25.15　nà

文に述べられた主張が、話し手個人の主観に基づいて述べられていることを表す。

(77) lə-　dá　[$_C$ nə-　ɣɛ̂　thàiɴ　cáiɴkwè]　lə̀ɴ　bá
(否)　見える　2sg　来る　帰る　遊ぶ　もはや　(否')

jái　phɔ̄　**nà**
久しい　(臨場)
「あなたが遊びに来るのを久しく見ていないなあ」(V-02.108)

(78) nə-　ʔɔ́　báθà　ʔəθí　ʔɔ́　θò　nāɴmlái　**nà**
2sg　いる　(欲求)　(比定)　3pl　居る　(比定')　瞬時
「彼らが生活しているように、少しでも生活してみたいな」(V-03.64)

(79) hə̀　jò　mà　kəlôʊɴ |
人　この　する　仕事

hə-　mà　pjáʊ　ʔə-　khâiɴ　máʊ　mā　**nà**
1pl　する　従う　彼の　後　快適な　(非常)
「この人が (先頭に立って) 仕事をすると、一緒に仕事をするのが楽しいな」(001.3757)

25.16　bò

疑問や詠嘆の口調をやわらげるために用いる。wò あるいは ʁò とも発音される。

(80) phɯ̄khwâ　θɛ̀　ʔɔ́　təwâɴ　khɔ̂　lɛ̂　**bò**
弟　(複)　住む　村　どこ　(疑)
「あなた達はどこの村に住んでいるの?」(IV-04.100)

(81) lənìjò　là　láʊ　wêdá　**bò**
今日　月　尽きる　(強意)
「(店に人が多いのは) 今日が月末だからなのだな」(V-03.9)

(82) mwɛ̄　pɔ̂　phló　phí　nə-　mèiɴ　lɛ̂　**bò**
(繋)　誰　名付ける　(裨益)　あなたの　名前　(疑)
「誰があなたの名前を付けてくれたの?」(V-04.100)

(83) θí　mà　lɛ̂　**bò**
できる　(非常)　(詠嘆)
「よくやり遂げたものだなあ」(V-04.218)

(84) mə̂ɴ　bá　ʁá　**wò**
生きている　正しい　(疑)
「(そんな薬を与えただけで病人が) 生きていられるだろうか」(023.36)

25.17 mɨ̂

断定を避けて口調をやわらげる。しばしば否定文で使われる。mûɨ あるいは mə̂ とも発音される。

(85) cɔ̀ʔɛ́phlòʊɴ lə- ɣà θànánɴ hə̀ dài ʔé **mɨ̂**
(人名) 一 ～人 忘れる 1PL まだ (否)
「チョーエープロンはまだ私達を忘れていなかったんだね」(014.17)

(86) θàʊpərái mə- chônmónɴ klàɴ nə̀ lé chəphlɨ̄ɨ **mɨ̂**
警官 (非現) 考える (無根) 2SG (強調) 狂人
「警官は君を気違いだと思ったかもしれないよ」(IV-04.32)

(87) jə- ʔɔ́θà bá [$_C$ nə- kɛ́ thánɴ
1sg 思う (無意) 2sg 成る (完成)

dòʊɴkənânɴ mə̀ɴnècà θɛ̀ jàʊ] **mɨ̂**
町 マネージャー など (完)
「私は、お前が町レベルの管理者になっているものだとてっきり思っていたよ」(V-03.54)

(88) phlòʊɴ thîkhāɴ dòʊɴ thəʔàɴ θí
カレン 国 町 (地名) (類似)

thánthɔ̂ nāɴ mèiɴ ʔé **mɨ̂**
発展する (少数) ～種類 (否)
「カレン州のパアン市も、全然発展していないなあ」(V-04.62)

25.18 chài

話し手の懇願する気持ちを表す。しばしば、願望を表す動詞助詞の lā とともに使われる。

(89) ʔɔ́kíthɔ̄ cháichā dè kəlôʊɴchā ləxì **chài**
取り残す 農民 (列挙) 労働者 (禁止)
「農民と労働者を置いてきぼりにしないでください」(I-sen.59)

(90) kətɔ̀ làɴ dá nə- θà nɔ́ **chài**
心配する (帰的) (限定) 2sg (再帰) (のだ)
「自分のことだけを心配しなさいよ」(II-11.14)

(91) ɣə̂ɴ bá lā **chài**
聞こえる (不抗) (願望)
「聞かせてほしい」(001.1340)

(92) ʔəmátəphlá　ʔē　　ʔɔ́ |
間違え　　(条件)　ある

plɛ̀tɔ̀　lā　　jə̀　　nāɴ　　thí　　**chài**
許す　(願望)　1SG　(少数)　～回
「もし間違えがあれば許してください」(V-04.79)

(93) thî　θíləphá　ɣɛ̂　　thánɴ　lā　　lé　　khʊ́lòɴ　khʊ́　jò　　**chài**
水　(複)　　来る　(上方)　(願望)　(場)　山　　頂上　この
「水がこの山の頂きに沸いてきますように」(III-06.24)

25.19　lāchài

chài と同様に、話し手の懇願を表す。25.18 で chài は願望を表す動詞助詞の lā と共起することが多いことを述べた。lā は動詞助詞であるから、動詞の直後に置かれる。したがって、もし目的語や副詞的要素があれば、これらの要素の前に現れる。次の例を見られたい。

(94) jʊ̄　　**lā**　　ʔəjò　**chài**
見る　(願望)　これ　CHAI
「これを見てください」

ところが、目的語や副詞的要素がない場合、lā と chài が連続してしまう。その結果、lā と chài が一つの助詞のように再分析され、lāchài という文末助詞が生まれたと考えられる。次は lāchài の例である。

(95) ʔwíθàchɔ̀ɴ　kwè　lái　　lé　　jə-　　ʔɔ́
すみません　書く　手紙　(場)　私の　ところ

nɔ̄　　blàɴ　**lāchài**
(少数)　～回
「すみませんが、私のところにもまた手紙を書いてください」(008.16)

(96) thòɴnáiɴ　nī　　kò　　ɣà　　dè　　**lāchài**
覚える　　(努力)　(毎)　～人　(毎')
「皆さん、(このことを) 覚えてくださいね」(III-01.51)

目的語や副詞的要素を欠いた次のような文の場合、lā と chài が 1 単語なのか 2 単語なのかの判別は難しい。

(97) ʔɔ́　　chóɴ　　**lā**　**chài**
居る　健康な
「ごきげんよう」

25.20 báʁɔ̂

文の表す情報について、話し手が確信を持てないということを表す。wáʁɔ̂ あるいは ʁáʁɔ̂ とも発音される。

(98) ʔɔ́ mèiɴ nāɴ chîjɛ̄ néiɴ jàʊ **báʁɔ̂**
ある (自然) (少数) 十五 ～年 (完)
「かれこれ 15 年近くになるだろうか」(V-03.37)

(99) mwɛ̄ jàmətō jàməká jàmənlá θɛ̀θí **wáʁɔ̂** nɛ̀
(繋) (神の名) (神の名) (神の名) (複) NE
「ヤーマトー、ヤーマカー、ヤーマラーなどの神々だったのでしょうね」(025.32)

25.21 lɔ̀wê

文の表す情報の源が話し手ではないこと、すなわち伝聞を表す。動詞 lɔ̀「語る」に強意を表す動詞助詞の wê が付いたものに由来する。すなわち、元々は「(誰かが)～と語った」という意味である。

(100) θéiɴ phàdʊ́ mèiɴláθôɴklà pìpì lɔ̂ **lɔ̀wê**
木 大きな ジャングル ばかり (断定)
「大きな木、そしてジャングルばかりだったそうだ」(021.92)

(101) ʔəwê mjòɴ ʁáɴ nī ʔə- mèiɴçā thí lɔ̂ **lɔ̀wê**
3sg 引っぱり出す (外方) (引寄) 3sg 姑 一気に (断定)
「彼は、姑を一気に引っぱり出したそうだ」(020.47)

(102) θàɴkhâ nɔ́ ʔɔ́ lʊ́ʊ thà ʔò xɔ̂ **lɔ̀wê**
僧侶 (題) いる (場) 上 (遠方) (対比)
「坊さんは上ビルマに住んでいるそうです」(024.3)

基本的な語順に従えば、「～と語った」という意味を表す lɔ̀ wê は、補文の前に現れる。

(103) lɔ̀ wê [$_C$ ʔəwê mə- lʊ̀]
語る (強意) 3se (非現) 行く
「彼は行くと言った」

しかし、伝聞を表す lɔ̀wê は、文末にしか現れない。これは文末に現れて伝聞を表すビルマ語の助辞 /tɛ̂/ の影響である可能性がある。同様の現象は、ビルマ国内の他の SVO 型言語にも生じている。例えばシャン語 (Shan) では、「言う」という意味の動詞 wā が文末に置かれ、伝聞を表す。

25.22　dɛ́

lɔ̀wê と同様、文の表す情報の源が話し手ではないこと、すなわち伝聞を表す。ほぼ確実に、ビルマ語の助辞 /tɛ̂/ の借用である。

(104) lə̰　phə̂ɴ　jò　màɴcɔ̀　θàbjɔ̀　ʔē　ɣɛ̂ |
一　～回　この　おじさん　(人名)　(条件)　来る

dàʊ　ʔɔ̀　θài　ləxɩ̀　**dɛ́**
(使役)　飲む　酒　(禁止)
「今度タービョーおじさんが来たら酒を飲ませるな、という命令です」(V-03.23)

第26章　一般助詞

ここに分類する助詞は、特定の品詞に限定されない様々な要素に付く。様々な要素とは、補語 (主語・目的語・斜格補語)、側置助詞句、動詞句、分離型動詞連続の「主語 +V1 動詞句」、従属節、分裂文の前提部である。このように様々な要素に付くので、これを**一般助詞**(general particle) と呼ぶことにする。ほとんどの一般助詞は、修飾される要素の後に付くが、thōɴ のみは前に付く。一般助詞には大きく分けて、**主題化された要素にしか付かないもの**と、**主題化された要素以外にも付くもの**の二つがある。

26.1　主題化された要素にしか付かないもの

主題として現れ得る要素は、第 4 章の 4.4 で述べているとおり、補語 (すなわち主語・目的語・斜格補語)、側置助詞句、分離型動詞連続の「主語 +V1 動詞句」、従属節、分裂文の前提部である。

このタイプの一般助詞が主題化された要素にしか付かないことを θí「～も」を例に取って見てみよう。下の例で、θí は主題化された目的語名詞 kʊ́ に付いている。

(1) kʊ́　θí　jə-　ʔáɴ
　菓子　(類似)　1sg　食べる
　「菓子も私は食べた」

この θí が主題化された要素に付くことは、名詞 kʊ́ が動詞の後に置かれている場合に、θí をこれに付けることができないという事実から明らかである。

(2) *jə-　ʔáɴ　kʊ́　θí
　1sg　食べる　菓子　(類似)
　「菓子も私は食べた」

つまり、「菓子も食べた」ということを言いたければ、ポー・カレン語では目的語を主題化して表現するしかない。

ところで、第 3 章で筆者は、一般助詞を「何らかの統語的単位を導入する機能を持たないもの」に分類した。主題化された要素にしか付かない一般助詞は、主題という単位を導入しているように見えるかもしれないが、そう捉えることは間違いである。なぜなら、次の文から主題を表す nɔ́ を取り除いてもかまわないからである。

(3) kʊ́　(nɔ́)　jə-　ʔáɴ
　菓子　(題)　1sg　食べる
　「菓子は私が食べた」

つまり、この nɔ́ は、主題を導入しているのではなく、主題を単に表しているだけに過ぎないと考えられる。

26.1.1　nɔ́

主題そのものを表す。名詞修飾助詞 nɔ́「あの、その」に由来する。

この nɔ́ が名詞修飾助詞 nɔ́ と意味が異なっていることは、ʔənɔ́「それ」などと共起することから分かる。

(4) ʔənɔ́　**nɔ́**　ʔwí
あれ　美味な
「あれはおいしい」

一般助詞 nɔ́ は、基本的に主題を表す。時として nɔ́ は対比を表すために用いられているかのように見えることがある。

(5) nə̀　**nɔ́**　nə-　lɛ̀　nə-　mâ　mə-　θí　bádòɴ.
2SG　2sg　なだめる　2sg　妻　(非現)　できる　たぶん

jə̀　**nɔ́**　θí　ʔé
1SG　できる　(否)
「あなたは奥さんをなだめるのが上手なようですね。私はうまくありません」(009.48)

しかし、このようなニュアンスは、主題を持つ文を並置したときに付随的に生じるものであって、nɔ́ の本質的な機能とは関係がないと考える。

以下に様々な例を見ていく。まず、補語の後に付いた例を挙げる。

- 主語

(6) jə̀　**nɔ́**　jə-　jʊ̄　ɣòɴ　jàʊ
1SG　1sg　見る　終わる　(完)
「私はもう見終わった」(016.35)

(7) nə̀　**nɔ́**　mwɛ̄　təlàpòɴɲâchā
2SG　(繋)　知識人

lə-　ɣà　lɔ̂ |　mwɛ̄　ʁā
一　～人　(断定)　(繋)　(疑)
「あなたは知識人のひとりですよね?」(009.14)

- 目的語

(8) nə-　còɴ　**nɔ́**　phlòʊɴ　kàɴkà　klə̀　lɔ̂　chī
2sg　事柄　人　噂する　いつも　(断定)　(婉曲)
「あなたのことはいつも人々が噂しています」(009.16)

(9) màɴcɔ̀　ʔə-　ɣéiɴ　**nɔ́**　dóɴ　wê　dè　chəxé　lɔ̂
叔父　3sg　家　囲う　(強意)　(共)　竹垣　(断定)
「叔父さんの家は竹垣で囲ってある」(I-sen.9)

(10) kəbàɴ　dè　láiɴmí　**nɔ́**　θí
船　(列挙)　汽車　(類似)

nâɴ　wê　dè　thî　ʔəkhɯ́ʔəʔwì　θí　θí　chī　lɔ̂
運転する　(強意)　(共)　水　蒸気　(類似)　できる　(婉曲)　(断定)
「船や汽車も、水蒸気で運転することができる」(I-02.18)

● 斜格補語

(11) lə-　néiɴ　lə-　phə̂ɴ　**nɔ́**　mə-　dá　báθà　nə-　cɯ́ɯ́lāɴ
一　～年　一　～回　(非現)　見える　(欲求)　2sg　筆跡
「1 年に 1 回は、あなたの書いた字を見たい」(011.37)

次は側置助詞句に付いた例である。

(12) lé　mèiɴlá　klà　**nɔ́**　θéiɴ　pəjí　ɣɛ̂　mɛ́　thánɴ
(場)　ジャングル　間　木　チーク　来る　芽生える　(上方)

ʔá　wê　ʔəkhɯ́cɔ̀ɴ |　mèiɴlá　θíləphá　mwɛ̄　wê
多い　(強意)　(理由)　ジャングル　(複)　(繋)　(強意)

lé　[$_C$ ʔəlɯ̄ʔəxwè　dɯ́　wê]　lɔ̂
(補)　価値　大きい　(強意)　(断定)
「ジャングルの中にも、チークの木がたくさん生えるので、ジャングルは価値の高いものと言える」(II-07.14)

次は分離型動詞連続の「主語 +V1 動詞句」に付いた例である。

(13) jə-　phlâɴ　**nɔ́**　θí　dài　ʔé
1sg　与える　できる　まだ　(否)
「お渡しすることはまだできません」(001.3754)

(14) nâɴ　lɔ̂　θí |
運転する　(断定)　できる

pjîɴ　**nɔ́**　θí　ʔé
直す　できる　(否)
「(自動車を) 運転することだけはできますが、修理はできません」(001.2185)

次は従属節に付いた例である。

(15) pə-　ʔè　lì　cáiɴɣà　ʔɔ́　lé
1pl　(条件)　行く　逃げる　住む　(場)

ʔəjàiɴ　ʔò　**nɔ́** |　mə-　ɣì　wê　lɔ̂
遠く　(遠方)　(非現)　良い　(強意)　(断定)
「私達は遠くに逃げて生活したならば、それが良かろう」(I-04.20)

次は分裂文の前提部に付いた例である。

(16) θɜ́ɯɪɴθà　máʊ　tháʊ　**nɔ́**　mwɛ̄　wê　ʔwàʔwà　lə-　ɣà　lɔ̂
心　快適な　(最上)　(繋)　(強意)　(人名)　一　～人　(断定)
「(チョーチョーテインが帰ってくると) 一番うれしいのはワーワーなのだ」(V-05.38)

(17) ʔáɴ　wêdá　ʔáʔálé　**nɔ́**　mwɛ̄　chədòchəlá　nɔ́　lɔ̄
食べる　(強意)　たくさん　(繋)　野菜　(のだ)　(断定)
「(お祖父さんが) たくさん食べるのは野菜である」(II-08.15)

(18) chə-　bá　tōʊɴ　chəchɔ̀ɴ　klà　**nɔ́**　mwɛ̄　jə̀
CHə　(当為)　堪える　雨　間　(繋)　1SG
「雨の中で堪え忍ばなければならないのは私である」(IV-09.20)

26.1.2　nɔ́ 以外の主題を表す一般助詞

上で述べた nɔ́ 以外にも、主題を表す助詞がいくつかある。これら相互の違いは今のところ分かっていない。しかし、主題を表す助詞が複数あることによって、次のような主題を複数持つ文において同じ形式の連続を避けることができるという利点があるということは確かである。

(19) báchâiɴlé　chɨ̀bòɴ　ʔəpî　θɛ̀ləphá　**nɔ́**　ʔəkhâjò
～に関して　民族　小さいもの　(複)　現在

lé　chɨ̀bòɴ　ʔədʊ́　θɛ̀ləphá　**nɔ́ʔò**
(強調)　民族　大きいもの　(複)

ʔáɴjūɯ　làɴbài　khwái　wê　chɨ̀bòɴ　ʔəpî　θɛ̀ləphá　**nɔ́**
飲み込む　塞がる　(徹底)　(強意)　民族　小さいもの　(複)

ʔá　wê　jàʊ　chī
多い　(強意)　(完)　(婉曲)
「小さい民族に関しては、現在、大きい民族が、小さい民族を飲み込んでしまうということが多い」(IV-01.7)

jò

名詞修飾助詞 jò「この」に由来する。

(20) chəmàʔáɴcháí　**jò**　bá　màʔáɴ　wê
稲作　(当為)　生業とする　(強意)

lé　ɣáɴkhʊ́　chədà　phɔ̀ɴ　lé　ɕʊ́　nàiɴ
(場)　土地　表面　中　(場)　川　傍
「稲作は、川のそばの土地で行わなければならない」(III-02.3)

(21) pə-　chɨ̀phʊ́　chəkhlàiɴ　**jò**　mwɛ̄　wê
1pl　民族　言葉　(繋)　(強意)

chɨ̀bòɴ　chəxîlà　chɨ̀bòɴ　ʔəmèiɴʔəθá　lə-　mèiɴ　chī　lɔ̂
民族　文化　民族　印　一　～種類　(婉曲)　(断定)
「民族の言葉というのは、民族の文化あるいは民族の象徴の一つである」(IV-01.28)

ʔò

名詞修飾助詞 ʔò「あの」に由来する。

(22) ʔənɔ́　**ʔò**　kèɣɔ̀khó　má　xɔ̄
それ　明日　～になってはじめて　XO
「それについては、明日になってから (やろうね)」(V-04.156)

tā

これは昔話の語りや、かしこまった場面でよく使われる。

(23) ɣéiɴ　**tā**　chəmà　ʔá　ʔé
家　仕事　多い　(否)
「家では忙しくない (直訳:家は仕事が多くない)」

nɔ́tā

前述の nɔ́ と tā を合成した形式である。

(24) hələmjā　**nɔ́tā**　ʔəwê　mî　wái
猟師　3SG　寝る　(徹底)

thōɴ　ʔàiθài　phjā　nɔ́　lə-　nà　θɛ̀ɣòɴ ...
(場)　修験者　寺　その　一　～夜　(継起)
「猟師は、その修験者の道場に 1 晩泊まってから...」(006.34)

nɔ́ʔò

名詞修飾助詞 nɔ́ および ʔò に由来する。

(25) mōphā　ʔɔ́　**nɔ́ʔò**　jə-　phəʔò　thá　cì　nɔ́　lɔ̂
父母　ところ　1sg　預ける　(保持)　お金　(のだ)　(断定)
「父母のところには、お金を預けてあるのです」(001.2)

26.1.3　θí

主題化された要素の表す対象物や事象が、何らかの点で他の対象物や事象と類似する特徴を持っていることを表す。「～も」「～もまた」。まずは典型的な例を見られたい。

(26) nə-　ʔè　lɩ̀ |
2sg　(条件)　行く

jə̀　**θí**　mə-　lɩ̀
1SG　(非現)　行く
「あなたが行くなら私も行く」

この文では、「行く」という動作を行う点において「私」が「あなた」と類似の特徴を持つということが表されている。

しかし、θí の用例をつぶさに当たっていくと、必ずしも類似の特徴を持たないものに θí が使われることもあることに気付く。次のような事例である。

(27) mìjɔ̀　ʔè　ʔɔ́　nɔ́ |
猫　(条件)　ある　(題)

jʉ̄　**θí**　làɴmā　bjāɴ　chī　lɔ̂
鼠　消える　すっかり　(婉曲)　(断定)
「猫がいると、鼠はすっかりいなくなる」(I-sen.93)

この例で一見、「鼠」は「猫」と類似の特徴を持たない。「猫」についての「いる」という事象と「鼠」についての「いなくなる」という事象は相反する特徴を持っている。しかし、この二つの事象には因果関係があり、その点で密接な関係を持つと言える。おそらく、ポー・カレン語は、因果関係で結ばれた事象の間に、他の事象との間には見いだせない緊密性を見出し、その緊密性を類似のものと解釈するのではないだろうか[1]。

以下に θí を用いた様々な例を見ていく。まず補語に付いた例を挙げる。

- 主語

(28) jə̀　**θí**　báθà　phʊ́　jàʊ　chī
1SG　欲しい　子供　(完)　(婉曲)
「私も子供が欲しくなった」(009.26)

(29) chərâmʉ́ʉ　θéiɴpʉ̂ʉ　**θí**　klɩ̀cɩ̀　bò　wê　chī　lɔ̂
女教師　(人名)　努力する　手伝う　(強意)　(婉曲)　(断定)
「テインプー先生も努力して手伝ってくれています」(015.12)

(30) mə̀ɴkhwâ　**θí**　kèkhâiɴ　khó　ɣɛ̂　cáiɴkwè　thàiɴ　chī　ʁɔ̄
甥　後で　(未来)　来る　遊ぶ　(再度)　(婉曲)　XO
「あなた達も、そのうちまた遊びにきてくださいね」(IV-04.329)

- 目的語

(31) ʔəkhɔ̂pəjɔ̂　**θí**　jə-　θíjâ　jàʊ
意味　1sg　知る　(完)
「私は意味も分かった」(006.101)

[1] ビルマ語の助辞 -lɛ́「～も」も、このような場合に使われることがある。

(32) còɴtàɲí　**θí**　nánɴ　　thánɴ　thàiɴ　chī
(人名)　覚えている　(変化)　(再度)　(婉曲)
「チョンターニーのことも、(私は) 思い出しています」(011.27)

(33) phlòʊɴ　lái　**θí**　khɔ̂　màlʊ́　phí　bá　ʔé
カレン　文字　(対比)　教える　(裨益)　正しい　(否)
「カレン文字も、(一部のカレン人は子供に) 教えることができない」(IV-06.29)

▷ 分離型動詞連続の V1 の目的語の主題化である。

(34) jə-　mʊ̄　ɣéiɴ　**θí**　θə́ɯɴ　ʔəθâɴ　ɣòɴ　jàʊ
1sg　母　家　建てる　新しいもの　終わる　JAU
「私の母の家も、新しいものを建て終わった」(009.40)

▷ 厳密には、jə- mʊ̄ ɣéiɴ ʔəθâɴ(1sg-母-家-新しいの)「私の母の家の新しいの」という名詞句の一部分を主題化している。

● 斜格補語

(35) [$_R$ nə-　phí　thá]　mìphàɴ　**θí**
2sg　与える　(保持)　炊飯器

hə-　dòɴ　mì　kō　nì　dè　lɔ̂
1pl　炊く　ご飯　(毎)　～日　(毎')　(断定)
「あなたがくれた炊飯器も、(それを使って) 私達は毎日ご飯を炊いています」(011.28)

(36) pə-　thîkhāɴ　pə-　dòʊɴ　təwâɴ　pə-　chɨ̀　pə-　chá　ʔəɣāɴ　**θí**
1pl　国　1pl　町　村　1pl　民族　1pl　民族　ため

pə-　màbò　məchàɴ　mə-　kɛ́　thánɴ　wê　chī　nɔ́　lɔ̂
1pl　助ける　助ける　(非現)　可能な　(変化)　(強意)　(婉曲)　(のだ)　(断定)
「私達の国や町や村や民族のためにも、手助けとなることができるのである」(I-07.15)

次は側置助詞句に付いた例である。

(37) lé　ɣéiɴ　phàɴ　**θí**　ʔɔ́
(場)　家　中　ある
「家の中にもある」

次は分離型動詞連続の「主語 +V1 動詞句」に付いた例である。

(38) ʔèɣòɴ　pə-　ʔè　ʔɔ́chóɴʔɔ́khlâiɴ　nɔ́ |
そして　1pl　(条件)　健康な　(題)

pə-　màlʊ́　láilɛ̄　**θí**　θí　wê　phlɛ́　chī　lɔ̂
1pl　学ぶ　文字　できる　(強意)　速い　(婉曲)　(断定)
「そして、健康であれば、勉強するにおいても、できるようになるのが速いのである」(I-07.14)

次は従属節に付いた例である。

(39) nə-　ʔè　dákhòɴ　còɴtàŋí　**θí** |
2sg　(条件)　会う　(人名)

⊂ lɔ̀　phí⊃　⊂ thàiɴ　phí⊃　ʁɔ̄
語る　(裨益)　語る　裨益　XO
「チョンターニーに会ったなら、(よろしく) 言ってください」(017.24)

(40) ʔənâɴkəchā　nɔ́　tàiɴ　khlî　lə-　θí　bá　lānâɴ　**θí** |
彼自身　(題)　作る　舟　(否)　できる　(否')　(逆接)

ʔəwê　kò　nī　chərâ　nàɴ　ɣà　ʔé
3se　呼ぶ　(引寄)　教師　(少数)　～人　(否)
「彼自身は舟を作ることはできないのだが、先生を一人も呼ばなかった」(I-08.6)

次は分裂文の前提部に付いた例である。

(41) phlòʊɴ　ɣɛ̂　thàiɴ　θâiɴ　khāɴ　**θí**　kō　nì　dè　lɔ̂　chī
人　来る　帰る　タイ　国　(毎)　～日　(毎')　(断定)　(婉曲)
「人々がタイから帰ってくるのも毎日のことである」(009.53)

26.1.4　khɔ̂

対比・対照を表す。「面、側 (かわ)、側面」という意味の名詞 ʔəkhɔ̂ に由来する。xɔ̂ とも発音される。

まず補語に付いた例を挙げる。

● 主語

(42) chəʔàʊ　**khɔ̂**　θàmɛ́　[$_C$ mə-　làɴthé　θî]　ʔəkhʊ́còɴ ...
猿　恐れる　(非現)　落ちる　死ぬ　(理由)
「猿は落ちて死ぬことを恐れたので...」(III-12.30)

(43) jə-　chəphàichəmà　**khɔ̂**　ɣòɴ　dài　ʔé
1sg　終わる　終わる　まだ　(否)
「私の仕事はまだ終わっていない」(IV-04.421)

● 目的語

(44) phlòʊɴ　lái　**khɔ̂**　dɔ̀　mà　ʔé
カレン　文字　(別個)　行う　(否)
「カレン文字はというと、書くことができない」(IV-06.21)

● 斜格補語

(45) cɯ̄jâ　khó　**khɔ̂**　θədáɴphʊ́　jáphʊ́　θíləphá
将来　(未来)　小エビ　小魚　(複)

mə-　ʔɔ́ɕɯ́ʔɔ̀bà　bá　wê　chī　lɔ̂
(非現)　平和に暮らす　正しい　(強意)　(婉曲)　(断定)
「これからは、小エビは小魚たちは平和に暮らすことができるだろう」(II-05.13)

次は側置助詞句に付いた例である。

(46) lé　θàʊcà　ʔə-　θà　phàɴ　**khɔ̂**　nɔ́
(場)　(人名)　3sg　心　中　(題)

báθà　θíjâ　chəmɯ́　mèiɴ　jáithà　jàʊ
欲する　知る　女　名　久しい　(完)
「タウチャーの心の中はというと、女の名をずっと知りたかった」(IV-04.62)

次は分離型動詞連続の「主語 +V1 動詞句」に付いた例である。

(47) pə-　bá　thàiɴ　làɴ　thàiɴ　**khɔ̂**　jàiɴ　chī
1pl　(当為)　帰る　(下方)　(再度)　遠い　(婉曲)
「私達は遠くに帰らなければならない」(IV-04.7)

次は従属節に付いた例である。

(48) jə-　dʊ́　ʔè　ɣòɴ　**khɔ̂**　ʔò |
1sg　殴る　(条件)　終わる　(題)

nəθí　dʊ́　ʁàiɴ　θâ　kō　ɣà　dè
2pl　殴る　(追加)　(新局)　(毎)　～人　(毎')
「私が殴り終わったら、お前達がみな殴れ」(020.75)

(49) làɴ　thàiɴ　ʔə-　phʊ́　θè　**khɔ̂** |
下がる　(追加)　3sg　子供　(複)

mə-　khlàiɴ　lʊ́　phí　phloʊɴ　mwɛ̄　lə̀ɴ　ʔé　lɔ̂
(非現)　話す　(学習)　(裨益)　カレン　(繋)　もはや　(否)　(断定)
「子供の代になると、(その子供に親たちが) カレン語を話してやらない」(IV-06.10)

次は分裂文の前提部に付いた例である。

(50) nə-　lɔ̀　**khɔ̂**　nɔ́　“ jō　ɣì　ʔé ”
2sg　語る　(題)　見る　良い　(否)
「お前は口では (彼女が) 美しくないと言う (直訳:お前の言うのは「見たところ美しくない」)」(IV-04.71)

(51) phâθɯ́ɣɛ̀　ʔə-　θə́ɯɪnθà
(人名)　3sg　心

máʊ　**khɔ̂**　lə-　mèiɪn　ɕánɪ　**khɔ̂**　lə-　mèiɪn　dɔ̀
快適な　一　～種類　貧しい　一　～種類　(別個)
「パートゥーゲーの心は、嬉しいのが一面、悲しいのがまた一面だった」(V-04.169)

26.1.5　má

「～であって初めて」あるいは「～さえ」という意味を表す。ビルマ語 -hmâ「～であって初めて」の借用である可能性が高いが、頻繁に使われる。
まず補語に付いた例を挙げる。

(52) chərâmɯ́　**má**　ɣɛ̂　dài　ʔé　dɯ̀
女教師　来る　まだ　(否)　DU
「先生でさえまだ来ていないのに。(もう来たの?)」(V-05.24)

(53) ʔəkhâjò　**má**　nī　là　lə-　khɔ̂　dài　lɔ̂
今　得る　月　一　半分　まだ　(断定)
「(ここに来てから) 今でまだやっと半月です」(001.2439)

次は側置助詞句に付いた例である。

(54) lé　ʔəwêdá　ʔə-　θàlànʔò　khâ　nɔ́　**má**
(場)　3se　3sg　腹が減る　時　その

ɣɛ̂　thàiɪn　ʔánɪ　θâ　wê　lɔ̂
来る　帰る　食べる　(新局)　(強意)　(断定)
「お腹がすいて初めて、食べに帰ることにした」(II-14.11)

次は従属節に付いた例である。

(55) bá　ʔəkhâ　lɔ̀　**má**　|　lɔ̀　bálɛ̂
当たる　時　語る　語る　なぜ
「話す時がきたら、話しなさい」(V-03.110)

(56) pə-　ʔè　pàdʊ́　jàʊjánɪ　làɪn　θà　bênɔ́θò　**má**　|
1pl　(条件)　尊ぶ　敬う　(帰的)　(再帰)　そのように

pəcháiphʊ́chā　jò　chəpəjó　chəbáθà　mə-　dàʊpàiɪn　lɔ̂
農民　(題)　目的　希望　(非現)　満ち足りた　(断定)
「私達 (=農民) がそのように自分たち自身を敬ってはじめて、農民の目的や希望はかなえられるのである」(IV-09.36)

má はしばしば θí と並べて使われ、この場合には常に「～さえ」という意味を表す。(57) は補語に付いた例、(58) は分離型動詞連続の「主語 +V1 動詞句」に付いた例である。

(57) ʔəkhâjò　**θí**　**má**　ɣɛ̂　nāɴ　dʉ̀ʉ　dài　ʔé
今　来る　(少数)　～匹　まだ　(否)
「今になってさえまだ 1 匹も来ていない」(009.24)

(58) ʔɔ́pwài　**θí**　**má**　khlàʊ　lə̀ɴ　ʔé
休む　暇な　もはや　(否)
「もう休む暇さえない」(009.64)

26.1.6　thōɴ

má と同様に、「～さえ」という意味を表す。thòɴ とも発音される。おそらく、動詞 thòɴ「到着する」に由来する。一般助詞のうち、この助詞だけが修飾される要素の前に付く。以下に例を挙げる。(59) は補語 (主語) に付いた例、それ以外は分離型動詞連続の「主語 +V1 動詞句」に付いた例である。

(59) xîphàɴ　chəchâ　nɔ́　**thōɴ**　chə̂râ　dàʊtà　θí
(人名)　病気　(題)　先生　医師　(類似)

bjàɴ　wê　nī　lə̀ɴ　ʔé
治す　(強意)　可能な　もはや　(否)
「フイパウンの病気は、お医者の先生でさえ、もう治すことができなかった」(IV-04.451)

(60) **thōɴ**　nâɴ　cáiɴ　θí　θí　lə̀ɴ　ʔé
お姉さん　歩く　(類似)　できる　もはや　(否)
「私 (=お姉さん) はもう歩くことさえできません」(IV-04.195)

(61) θàʊcà　nɔ́　**thōɴ**　khlàiɴ　tháɴ　θí　tháɴbà　lə̀ɴ　ʔé
(人名)　(題)　話す　(外方)　(類似)　出る　もはや　(否)
「タウチャーは、話そうとしても (言葉が) もはや出なかった」(IV-04.215)

26.1.7　ʁɔ̄

ʁɔ̂ あるいは wɔ̄, wɔ̂ とも発音される。ʁɔ̄bò, ʁɔ̄wò という形もある。対比・対照を表す。「～についてはどうか?」と尋ねる疑問文にのみ使われる。平叙文で使われることはない。この助詞の用法は、ビルマ語の助詞 /kɔ́/ の用法に似ている。

(62) ʔəjò　**ʁɔ̂**
これ
「これは (どうですか)？」

(63) ləwài　nɔ́　**ʁɔ̄**　mwɛ̄　pɔ̂　ləwài　phí　lɛ̂　bò
詩　(題)　(繋)　誰　詩を作る　(裨益)　(疑)　BO
「詩は、誰が作ってくれたんだね?」(V-04.102)

(64) mə̀ɴkhwâ　**ʁɔ̄bò**　nə-　mèiɴ　bɛ̂θí　lɛ̂
甥　2sg　名前　どのような　(疑)
「君は、名前は何ていうの?」(V-04.243)

26.1.8　nɛ̂

nɛ̀ とも発音される。聞き手の注意を喚起するために使われる (?)。日本語に訳す場合、「これは**ね**、僕が買ってきたんだよ」などというときの「ね」で訳すことができる場合が多い。文助詞の nɛ̂ を参照のこと。

(65) lənàjò　**nɛ̀**　màɴcɔ̀　mə-　lɔ̀thàiɴ　pòʊɴ　nāɴ　pòʊɴ
今夜　おじさん　(非現)　語る　昔話　(少数)　～編
「今夜はね、おじさんが君たちに昔話を一つ語ってあげよう」(006.4)

(66) jə̀　nɔ́　**nɛ̂**　jə-　lɪ̀　báθà　ʔé
1SG　(題)　1sg　行く　(欲求)　(否)
「私はね、行きたくないんです」

26.2　主題化された要素以外にも付くもの

以下に見る二つの助詞は主題化されていない要素にも付く。もちろん主題化された要素にも付く。

26.2.1　dɔ̀

今まで話題にのぼっていた物や事象とは別個の物や事象であることを表す。
まず補語に付いた例を挙げる。

- 主語

(67) cɔ̀θéiɴlá　khɔ̂　**dɔ̀**　mà　wê　lə-　bá　lə̀ɴ　nāɴ　mèiɴ ...
(人名)　(対比)　する　(強意)　(否)　正しい　もはや　(少数)　～種類
「チョーテインラーはというと、何もすることができず...」(V-01.91)

(68) mʊ́mʊ́　**dɔ̀**　dá　bá　lái　nɔ́ |
(人名)　見える　(不抗)　手紙　(前提)

θə́ɯɴθà　lə-　máʊ |
心　(否)　快適な

θɤ́ɯɴθà　bá　ɕáɴ　phɔ̄
心　(当為)　貧しい　(臨場)
「ムームーはというと、手紙を見て、楽しくなくなり、いやな気分になった」(V-04.23)

(69) kòtərài　khərə̂ɴ　nɔ́　**dɔ̀**
(地名)　郡　(題)

ʔəlɛ̄　ʔɔ́　wê　θə̄ɴthô̞ɴnījàlə-　màiɴ　nɔ́　lɔ̂
広さ　ある　(強意)　三千二百一　マイル　(のだ)　(断定)
「コーカレイ郡はというと、広さが 3201 平方マイルある」(III-17.8)

● 目的語

(70) bá　thánɴ　θəphjāɴ　lə-　mèiɴ　**dɔ̀**
(当為)　上る　講習　一　～種類
「もう 1 種類の講習に通わなければならない」(009.50)

● 斜格補語

(71) lə-　mèiɴ　**dɔ̀**　nɔ́ʔò　ɣɛ̂　mèiɴ　lā
一　～種類　(題)　来る　(自然)　(願望)

lé　nəkəchā　θí　mwɛ̄　ʔə-　ɣì　tháʊ　lɔ̂
(強調)　あなた自身　(類似)　(繋)　(名詞化)　良い　(最上)　(断定)
「もう一つ (の方法として) は、あなた自身が来るのでも良い」(013.11)

次は側置助詞句に付いた例である。

(72) jə-　mə-　thàiɴ　ʔɔ́xáʊ　dè　phlòʊɴmɯ́　**dɔ̀**
1sg　(非現)　帰る　結婚する　(共)　女性
「私は帰って別の女性と結婚する」(V-04.9)

次は分離型動詞連続の「主語 +V1 動詞句」に付いた例である。

(73) khə̂ɴ　khɔ̂　**dɔ̀**　jái　chī　nɔ́ |
堅い　(対比)　久しい　(婉曲)　(前提)

jə-　xwè　nī　chī　lɔ̂
1sg　買う　(引寄)　(婉曲)　(断定)
「長持ちするので (直訳:堅牢さという点では長続きするので) 私は買い取ったのだ」(V-02.64)

次は従属節に付いた例である。

(74) pə-　ʔè　báθà　nɔ́　**dɔ̀** |
1pl　(条件)　欲する　(題)

pə-　bá　klɨ̀cɨ　ʔánxɯ̂ɯ　màlʊ́　màdòɴ　nɯ̄　wêdá　lɔ̂
1pl　(当為)　努力する　探す　学ぶ　真似る　(努力)　(強意)　(断定)
「もし (教養が) 欲しいのであれば、努力して研究し、学んで獲得しなければならない」(I-05.4)

次は動詞句に付いた例である。

(75) θwíwɔ̀　ʔáɴcà　thánɴ　thàiɴ　**dɔ̀**
(人名)　尋ねる　(外方)　(返答)
「トゥイーウォーは今度は尋ね返した」(IV-04.97)

(76) ləkhâiɴ　khɔ̂　θí　pəɕā　ɣɛ̂
後　(対比)　(類似)　人　来る

lɔ̀　lʊ́　phí　ʔə̀　**dɔ̀**　chɯ̄　lɔ̂
語る　(学習)　(裨益)　3SG　(婉曲)　(断定)
「その後も、人々がやって来て彼にまた (別の方法で) 教えるのであった」(I-08.15)

(77) θàɴkhâ　ʁɔ́　ʔə-　təwânɴ　ʔə-　mèiɴ　θíjâ　ʔé　**dɔ̀**
僧侶　(題)　3sg　村　3sg　名　知る　(否)
「その僧侶については、今度は (私は) 彼の村の名前も知らない」(024.2)

(78) ʔəwê　dá　chə̀　nāɴ　mèiɴ　ʔé　**dɔ̀**
3se　見える　CHə　(少数)　～種類　(否)
「今度は彼には何も見えなかった」(024.25)

(79) ləɣájò　θí　bá　náʊ　làɴ　ʔwíkòɣàphjâ　**dɔ̀**
今夕　(類似)　(当為)　入る　(内方)　(店の名)
「今日の夕方も、ウィーコーガーに入らねばならなかった」(V-03.7)

(80) hə-　lɔ̀　kwè　bá　θí
1pl　語る　(遊び)　(無意)　(類似)

báɯɴ　lɔ̀ɴ　ʔé　**dɔ̀**　ʔɛ́　lə-　ɣà　jò
勇気がある　もはや　(否)　(人名)　一　～人　この
「これからはうっかり冗談も言えないよ、エーさんよ」(V-03.130)

26.2.2　khó

発話時点より後の時点、あるいは発話時点より後に生起する事象を表す。xó とも発音される。

まず、補語に付いた例を見る。この助詞は主語や目的語には付かない。

(81) kèɣɔ̀　**khó**　mà　bêjòθò
明日　行う　このように
「明日、このようにしなさい」(IV-04.9)

(82) kèkhâiɴ　**khó**　má　lɔ̀　thàiɴ　θâ
今後　～はじめて　語る　(返答)　(新局)
「また今度話すことにするよ」(V-03.119)

次は従属節に付いた例である。

(83) nə-　ʔè　blá　thàiɴ　**khó**　|
2sg　(条件)　治る　(追加)

nə-　mə-　bá　phílâɴ　chəkəlò
2sg　(非現)　(当為)　与える　謝礼

lé　thʊ́θâɴwɔ̀　ʔɔ́　nɔ́　lɔ̂
(場)　梟　ところ　(のだ)　(断定)
「あなたは治ったら、フクロウに謝礼を渡さなければなりません」(I-03.17)

(84) ʔè　θà　thî　**khó**　|
(条件)　汲み出す　水

jálɯ̄　jádòɴ　ləphá　cáiɴ　wêiɴwá　mòθɔ̂　nóɴ　phɔ̀ɴ　nɔ́　chài
鰻　鰻の１種 (?)　(複)　出る　暴れる　騒ぐ　池　中　あの　CHAI
「(村人が) 水を汲み出したら、ウナギ達は池の中に出て騒いでください」(III-15.20)

(85) wɛ̄cɔ̀　ʔē　thòɴ　lé　phjācòɴmòɴ　**khó**　|
兄　(条件)　着く　(場)　大学

θànáɴ　bá　phɔ̂ʔwà　xì
忘れる　(催促)　(人名)　(禁止)
「あなたが大学に入っても、ポーワーのことを忘れないでね」(V-01.12)

次は動詞句に付いた例である。

(86) pə-　ʔəcá　mə-　xôʊɴ　plɔ̀　klàɴ　bá　**khó**
1pl　人生　(非現)　堕落する　無駄に　(傾向)　(不抗)
「(そんなことをしていたら) 私達の人生は、無駄に堕落することになるよ」(IV-03.35)

(87) páichâɴ　nɔ́　mə-　jɔ́　bá　**khó**
お金　(題)　(非現)　減る　(不抗)
「お金がそのうち減っていってしまうよ」(023.25)

▷ jɔ́ はビルマ語 /yɔ̂-/「減る」の借用。

26.3　一般助詞を用いた慣用表現

一般助詞のうち、nɔ́ と khɔ̂ と θí には、

V　GP　V　(V=verb, GP=general particle)

という一種の慣用表現がある。前後二つの V は同じ動詞である。

nɔ́ の場合、この慣用表現は留保を表す。すなわち、動詞の表す内容について、話し手が全面的には認めたくないときにこの表現を用いる。例えば、次のとおり。

(88) jə-　báθà　ʔé.　ɣì　**nɔ́**　ɣì
1sg　気に入る　(否)　良い　良い
「私は気に入らない。(しかし) 良いことは良い」

khɔ̂ の場合、この慣用表現は、他の事柄についてはともかくとして、動詞の表す内容は認めることができるということを表す。例えば、次のとおり。

(89) jō　xìlà　ʔé.　ʔwí　**khɔ̂**　ʔwí
見る　美しい　(否)　美味な　美味な
「(この料理は) 見かけは美しくない。(しかし) 美味しい」

θí の場合、他の事柄も認めることできるし、動詞の表す内容も認めることができるということを表す。例えば、次のとおり。

(90) xìlà　**θí**　xìlà.　ʔwí　**θí**　ʔwí
美しい　美しい　美味な　美味な
「(この料理は) 美しいし、美味しくもある」

第VIII部

その他の重要な文法現象

第27章　疑問語

ポー・カレン語には疑問を表す文助詞 (第 25 章参照) が二つある。一つは ʁâ、もう一つは lɛ̂ である。通常の疑問文には次のように ʁâ が使われる。

(1) ʔəjò　ɣì　**ʁâ**
　これ　良い　(疑)
　「これは良いですか?」

しかし、文中に特定の単語が存在すると、その文の末尾には lɛ̂ が現れる。次の文には、そのような単語の一つである chənɔ́ があるため、文末に ʁâ ではなく lɛ̂ が用いられている。

(2) chənɔ́　ɣì　**lɛ̂**
　何　良い　(疑)
　「何が良いですか?」

このように lɛ̂ の出現を惹起する単語を**疑問語**(interrogative word) と呼ぶ。

疑問語が属する品詞は一つではない。これまで、名詞と副詞に属する疑問語が見つかっている。

27.1　名詞に属するもの

27.1.1　chənɔ́

「何」。くだけた会話では nɔ́ となることもある。また、同様にくだけた会話で lɛ̂ の直前に現れた場合、lɛ̂ と融合して chəlɛ̂ となることがある。

(3) ʔənɔ́　mə-　**chənɔ́**　lɛ̂
　あれ　(繋)　何　(疑)
　「あれは何ですか?」(001.2622)

(4) nə-　ɣɛ̂　mà　**chənɔ́**　lé　kāθənî　jò　lɛ̂
　2sg　来る　する　何　(場)　停車場　この　(疑)
　「あなたはこの停車場に何をしに来たのですか?」(001.997)

(5) nə-　mə-　lì　xwè　ʔánɴ　**chənɔ́**　lɛ̂　bò
　2sg　(非現)　行く　買う　食べる　何　(疑)　BO
　「あなたは何を買って食べに行くんですか?」(001.3578)

(6) lənìjò　mūū　**chənɔ́**　lɛ̂
今日　日　何　(疑)
「今日は何曜日ですか?」(002.219)

(7) nə-　mə-　lɔ̀　**nɔ́**　lɛ̂
2sg　(非現)　語る　何　(疑)
「あなたは何を言うつもりなのですか?」(IV-04.285)

(8) **chənɔ́**　kàicà　ʔɔ́　lɛ̂
何　用事　ある　(疑)
「何の用事があるんですか?」

27.1.2　pɔ̂

「誰」。pɔ̀ とも発音される。

(9) pə̀　ləphá　jò　mwɛ̄　**pɔ̂**　ʔəjáʊ　dʊ́　tháʊ　lɛ́
1PL　(複)　(題)　(繋)　誰　年齢　大きい　(最上)　(疑)
「私達のうちで誰が一番年上なのか?」(III-10.9)

(10) mwɛ̀　**pɔ̀**　mə-　ɣɛ̂　ʔáɴkhôɴthəbà　chə̀ɴ　hə̀　lɛ̂
(繋)　誰　(非現)　来る　助ける　(皆)　1PL　(疑)
「誰が我々を助けに来てくれるだろうか (いや来てくれない)」(IV-01.93)

(11) mwɛ̄　**pɔ̂**　phló　phí　nə-　mɛ̀iɴ　lɛ̂　bò
(繋)　誰　名付ける　(裨益)　2sg　名前　(疑)　BO
「誰があなたの名前を付けてくれたんですか?」(V-04.100)

資料の中に、pɔ̂ と文助詞の lɛ̂ とが融合した例が出てきている。

(12) mwɛ̄　**pɔ̂lɛ̂**　ɣāiɴ　mə-　chóɴ　lɛ̂
(繋)　誰　力　(非現)　強い　(疑)
「誰が力が強いだろうか?」(III-03.21)

これは、

(13) mwɛ̄　**pɔ̂**　**lɛ̂**
(繋)　誰　(疑)
「誰ですか?」

のような文が多く使われていくうちに、隣接する pɔ̂ と lɛ̂ が 1 単語と見なされてしまったため、現れた形である可能性が高い。このような形式の出現頻度など詳しいことについては、今後の調査に待ちたい。

27.1.3　pɔ̀wê

「誰のもの」の意。

(14) mə-　**pɔ̀wê**　lɛ̂
(繋)　誰のもの　(疑)
「誰のものですか?」(004.253)

(15) mái　**pɔ̀wê**　lɛ̂
恋人　誰のもの　(疑)
「誰の恋人ですか?」(004.255)

27.1.4　phlòʊɴ

pɔ̂ と同じく、「誰」を表す。pɔ̂ と phlòʊɴ の違いは明らかではない。

(16) mwɛ̄　nə-　lɔ̀thàiɴ　chà　dè　**phlòʊɴ**　lɛ̂
(繋)　2sg　喋る　CHə　(共)　誰　(疑)
「お前は誰と話しているの?」(V-04.119)

27.1.5　khɔ̀khɔ̂

「どの ～」。この疑問語は抽象数詞に属する (第 10 章を参照のこと)。したがって、後に助数名詞を従える。

(17) nə-　báθà　châ　**khɔ̀khɔ̂**　mèiɴ　lɛ̂
2sg　欲する　大変　どの　～種類　(疑)
「あなたはどれが一番欲しいですか?」(001.1770)

27.1.6　xwē

xwè とも発音される。「いくつの ～」。この疑問語も抽象数詞に属する。したがって、後に助数名詞を従える。

(18) ʔɔ́　**xwē**　ɣà　lɛ̂
いる　いくつの　～人　(疑)
「(人間は) 何人いますか?」(001.3575)

27.2　副詞に属するもの

27.2.1　bêθíθò

「いかに」「どのように」。θò を取り除いて bêθí あるいは pəθí とも言う。話者によっては píθò と言う。

(19) lânlàɴʔɔ̀thîcóɴ　ɣɛ̂　thánɴ　kɛ́　nɔ́
虹　来る　上る　成る　(題)

mwɛ̄　ʔəkháɴthài　**bêθíθò**　lɛ̂
(繋)　基礎　どのように　(疑)
「虹ができるのは、原理はどのようなものですか?」(001.1857)

(20) ʔəkhêiɴʔəkhâ　**bêθíθò**　lɛ̂　nɔ́　θíjâ　thánɴ　wêdá　chī　lɔ̂
時期　どのように　(疑)　(題)　知る　(変化)　(強意)　(婉曲)　(断定)
「(作付けをする時期が) いつごろか、分かってきたのである」(II-04.11)

(21) hə-　mə-　khlàiɴdɑ́ɯɴ　bá　**bêθí**　lɛ̂
1pl　(非現)　話す　(不抗)　どのように　(疑)
「僕たちはどうやって話せばいいの?」(IV-04.89)

(22) jɔ̂　**bêθí**　lɛ̂
容易な　どのように　(疑)
「どう簡単だというの?」(IV-04.154)

(23) phūɯkhwâ　θɛ̀　mèiɴ　**bêθí**　lɛ̂
兄弟　(複)　名前　どのように　(疑)
「君たち兄弟は、名前は何?」(IV-04.111)

(24) nə-　mèiɴ　**pəθí**　lɛ̂
2sg　名前　どのように　(疑)
「君は、名前は何?」(IV-04.237)

27.2.2　ɕá

「いくら」「どれくらい」。西部ポー・カレン語の shéiʔʔà に対応することから、語源的には chài + ʔá「多い」に由来すると思われる。*chài は現在の東部ポー・カレン語では失われてしまっているが、おそらく、「どのくらい」を表す接頭辞であった。なお、*chài は スゴー・カレン語の síʔ に対応する。

(25) páichânɴ　láʊ　**ɕá**　jàʊ　lɛ̂
お金　尽きる　どれくらい　(完)　(疑)
「お金はいくらかかったか?」(001.3115)

27.2.3　phōphɔ̂bàʊ

ɕá と同様、「いくら」「どれくらい」を表す。ɕá よりも格式張っている。phəbàʊ とも言う。

(26) jə-　lɔ̀　pjà　ʔəθí　[$_C$ həmənīphlòʊɴ　khānməɲā　lə-　ɣà　θí
1sg　話す　(提示)　3PL　人　外国　一　～人　(類似)

kè lái phlòʊɴ θí **phɔ̄phɔ̂bàʊ**] lɛ̀
書く 文字 カレン できる どれくらい (疑)
「私は、外国人でさえどのくれいカレン語が書けるかを話して聞かせています」(016.9)

(27) [$_C$ lé hə- ɣàɴ pî khâ hə- phā θɛ̀
(場) 1pl 姿 小さい 時 1pl 父 (複)

ʔɛ́ hə̀ **phəbàʊ**] lɛ̂ θíjâ θâ
愛する 1PL どれくらい (疑) 知る (新局)
「自分達が小さいときに親たちがどれほど自分達を愛していたかを (親になってはじめて) 知った」(V-03.93)

27.2.4 ɕèɕé

時を尋ねる。「いつ」。西部ポー・カレン語の shéiʔjéiʔ に対応することから、語源的には chài(どのくらい) + jái「久しい」に由来すると思われる。元の形を幾分か保った chəɕái という形も使われる。

(28) bá dòcɛ́θà **ɕèɕé** lɛ̂
(当為) 受験する いつ (疑)
「試験はいつ受けなければならないのか?」(V-03.99)

(29) nə- ɣɛ̂ thàiɴ lé cəpâɴ khāɴ **chəɕái** lɛ̂
2sg 来る 帰る (場) 日本 国 いつ (疑)
「あなたはいつ日本から帰ってきたんですか?」(V-04.133)

27.2.5 khɔ̂

場所を尋ねる。「どこ」。

(30) nə- mə- lì **khɔ̂** lɛ́
2sg (非現) 行く どこ (疑)
「あなたはどこに行くの?」(IV-04.437)

(31) nâɴ θɛ̀ mə- thàiɴ **khɔ̂** lɛ̂
お姉さん (複) (非現) 帰る どこ (疑)
「あなた方はどこに帰るんですか?」(IV-04.98)

khɔ̂ と同様の意味を持つ語に ɕàiɴkhɔ̂ がある。ɕàiɴ の部分はおそらく、*chài「どのくらい」に由来する。違いは明らかでない。(ɕàiɴkhɔ̂ のほうが古くさいイメージか?)

(32) phlɔ̀θánā ʔədídòʊɴ nɔ́ ʔɔ́ wêdá **ɕāiɴkhɔ̂** lɛ̂
ゴキブリ 卵嚢 (題) ある (強意) どこ (疑)
「ゴキブリの卵嚢はどこにありますか?」(001.3131)

27.2.6　khɔ̀khɔ̂

「どちら」「どれ」。抽象数詞の khɔ̀khɔ̂(前述) も参照のこと。

(33) mwɛ̄　mə-　khléiɴ　tháʊ　**khɔ̀khɔ̂**　lɛ̂
(繋)　(非現)　冷たい　(最上)　どれ　(疑)
「どれが一番冷たいだろうか?」(003.758)

27.2.7　bánɔ́

「なぜ」「どうして」。おそらく語源的に、báの部分は動詞の bá「当たる、ぶつかる」に由来し、nɔ́ の部分は chənɔ́「何」と関係がある。単に bá とも言う。

(34) nə-　kəchí　chɔ̀chūchɔ̀chū　nɔ́　mwɛ̄　**bánɔ́**　lɛ̂
2sg　くしゃみする　しょっちゅう　(題)　(繋)　なぜ　(疑)
「あなたがしょっちゅうくしゃみしているのはなぜですか?」(002.916)

日常会話では、bá(nɔ́) lɛ̂ を文頭に置いた「倒置文」が頻繁に現れる。

(35) **bánɔ́**　lɛ̂　khlàiɴdəɯɴ　lə-　bəɯɴ
なぜ　(疑)　話しかける　(否)　勇気のある
「なぜか、話しかける勇気がないのは?」(IV-04.79)

(36) **bá**　lɛ̂　nə-　kháɴ　bá　khā　nɔ́
なぜ　(疑)　2sg　脚　(当為)　折れる　(題)
「なぜだ、あなたの脚が折れたのは?」(001.679)

bánɔ́ (bá) は、しばしば相手が行動を起こすことを促すためにの表現に用いられる。理由を尋ねる表現がこのような語用論的意味を持つという点で、英語の why don't you ... に似る。

(37) jʊ̄　ʔə̀　**bá**　lɛ̂
見る　3SG　なぜ　(疑)
「彼を見てみなさいよ」(V-03.116)

(38) lì　jʊ̄　**bá**　lɛ̂
行く　(試行)　なぜ　(疑)
「行ってみたら?」(004.218

第28章　使役構文

本章では、ポー・カレン語の二つのタイプの**使役構文**(定義は以下を参照) を概観する。以降、使役構文において使役者 (causer) を導入する役割を持つ要素を使役要素 (causative element) と呼び、被使役事象を表す動詞を被使役動詞と呼ぶ。本章では特に、使役要素と被使役動詞の共起関係、および被使役者 (causee) の意味にスポットを当てる。最終的には、被使役動詞の意志性および被使役者の有生性が、ポー・カレン語の使役構文において重要な役割を果たしていることを示す。

28.1　使役構文の二つのタイプ

ポー・カレン語の使役を表す構文には二つある。一つは、使役要素と被使役動詞が並置されて、これ全体が動詞複合体となり、その後に動詞複合体の目的語として被使役者を表す名詞句が置かれるタイプである。これを**TYPE 1** と呼ぶ。

TYPE 1: [$_{\text{動詞複合体}}$ 使役要素　被使役動詞] 被使役者

もう一つのタイプは、使役を表す要素が補文を取り、被使役者を表す名詞句が補文の主語として現れるタイプである。これを**TYPE 2** と呼ぶ。

TYPE 2: 使役要素 [$_{\text{補文}}$ 被使役者　被使役動詞]

次の (1) が TYPE 1 の例、(2) が TYPE 2 の例である。

(1) jə-　[dà　lì]　ʔəwê
　　1sg　(使役)　行く　3se
　　「私は彼に行かせた」

(2) jə-　ʔə́ɴmə̂ɴ　[$_C$ ʔəwê　lì]
　　1sg　命ずる　3se　行く
　　「私は彼に行くことを命じた」

それぞれの厳密な定義は、以下のそれぞれのタイプの説明において行う。

28.2　TYPE 1

使役要素と被使役動詞が並置されるタイプである。使役要素と被使役動詞の間にはいかなる要素の介在をも許さない。

このタイプの「使役構文」は、**動詞複合体の目的語が、動詞複合体を構成するいずれかの動詞の論理的主語と同一指示である**という特徴によって定義することができる。例えば、(1) で、動詞複合体の目的語である ʔəwê「彼」は、動詞複合体の構成要素である lì「行く」の論理的主語と同一指示である。この点で、(1) の文は、次に挙げるような文と根本的に異なる。

(3) jə-　bá　jūkhwā　ʔəwê
　1sg　(当為)　世話する　3se
　「私は彼の世話をしなければならない」

この文では、動詞複合体の目的語 ʔəwê は、動詞 jūkhwā の論理的主語と同一指示ではない。したがって、この文は使役構文ではない。

TYPE 1 は、2 種類のタイプに分けることができる。一つは、使役を表す要素が動詞助詞である場合であり、もう一つは、使役を表す要素が一般の動詞である場合である。以下、それぞれについて見ていく。

28.2.1　使役助詞を用いる場合

使役を表す動詞助詞 (動詞助詞については第 18 章参照) を、以降、使役助詞と呼ぶ。代表的な使役助詞には dà がある (dàʊ, dài あるいは də- とも発音される)。dà は正真正銘の助詞であると考えられる。その理由は以下に挙げるとおりである。

- 単独で使われることがない。
- 対応する動詞がない。(ただし、同形の動詞に「戦う、攻撃する」という意味の dàʊ があることはあるが、同源かどうかは不明である)
- 発音が極めて弱くなり、də- となることさえある。つまり、音韻面において動詞への従属度が高まっている。

使役助詞を用いた場合、被使役者が現れる位置について、以下に記述するような現象が観察される。被使役動詞が自動詞の場合、被使役者を表す名詞句は、動詞複合体の目的語として現れる。

(4) jə-　dà　klí　**ʔəwê**
　1sg　(使役)　走る　3se
　「私は彼を走らせた」

次に、被使役動詞が目的語を一つ取り得る動詞である場合には、被使役者を表す名詞句は動詞複合体の第一目的語として現れる。

(5) jə-　dà　ʔáɴ　**ʔəwê**　mì
　1sg　(使役)　食べる　3se　ご飯
　「私は彼にご飯を食べさせた」

この場合、第二目的語は、道具・手段などを表す側置助詞 dè を用いて導入することもできる。

(6) jə- dà ʔánɴ ʔəwê **dè** **mì**
1sg (使役) 食べる 3se (共) ご飯
「私は彼にご飯を食べさせた」

最後に、被使役動詞が目的語を二つ取り得る動詞である場合には、元の第一目的語と第二目的語はそのままの位置にとどまり、被使役者を表す名詞句は側置助詞 dè を用いて導入される。

(7) jə- dà phílâɴ ʔəwê láiʔàʊ **dè** **jə-** **phā**
1sg (使役) 与える 3se 本 (共) 1sg 父
「私は父に頼んで彼に本を渡してもらった」

ここで仮に、一つの目的語を取る動詞 (動詞複合体) の目的語、および、二つの目的語を取る動詞 (動詞複合体) の無生物目的語を「直接目的語」と呼び、かつ、二つの目的語を取る動詞複合体の有生物目的語を「間接目的語」と呼ぶならば、上で述べた現象は、被使役行為を表す動詞の結合価が増えるに従って、被使役者を表す名詞句が「直接目的語 → 間接目的語 → 斜格名詞句」のように「格下げ」される現象であるというように捉えることができる。もしそうであるとするなら、これは Comrie (1976) が提示した世界の諸言語の一般的傾向と合致する[1] 。実際、筆者は以前、Kato (1999) においてそのような主張をした。しかし、そもそも、ポー・カレン語の二重目的語文における有生物目的語を「間接目的語」と呼んでよいのかという疑問が生じる。ポー・カレン語では、二重目的語文における無生物目的語を側置助詞 dè によって斜格補語に換えることができるのであって、その意味では、有生物目的語のほうがむしろ「直接目的語」と呼ばれるのにふさわしい。したがって、ポー・カレン語のパターンが Comrie (1976) の主張した通言語的な傾向に従っていると簡単に断言することはできない。

さて、被使役動詞として様々な結合価の動詞が現れるということは、使役要素がそれだけ生産的に用いられるということの証しである。残念ながら、被使役動詞として二つの目的語を取り得る動詞が現れることができるのは、dà のときだけである。しかし、使役要素の中には、被使役動詞として少なくとも自動詞と他動詞の出現を許すものがある。それは、mà「する」、phílâɴ「与える」、kò「呼ぶ」、lɔ̀「語る」の四つである。下にこれらを用いた文の例を挙げる。

(8) a. jə- mà θî ʔəwê
1sg する 死ぬ 3se
「私は彼を殺した」

b. jə- mà pjò ʔəwê mì
1sg する 吐く 3se ご飯
「私は彼にご飯を吐かせた」

(9) a. jə- phlílâɴ mî ʔəwê
1sg 与える 寝る 3se
「私は彼を寝させてやった」

[1] Comrie (1976) の説に関してのその後の議論の展開については、Comrie (1981)、Song (1996)、Van Valin and LaPolla (1997) などを参照されたい。

b. jə-　phlílâɴ　pɔ̄　ʔəwê　láiʔàʊ
1sg　与える　読む　3se　本
「私は彼に本を読ませてやった」

(10) a. jə-　kò　mî　ʔəwê
1sg　呼ぶ　寝る　3se
「私は彼に泊まりに来るよう言った」

b. jə-　kò　ʔáɴ　ʔəwê　mì
1sg　呼ぶ　食べる　3se　ご飯
「私は彼を呼んでご飯をごちそうした」

(11) a. jə-　lɔ̀　nī　ʔəwê
1sg　語る　笑う　3se
「私は彼を笑わせた」

b. jə-　lɔ̀　ɣə̂ɴ　ʔəwê　pòʊɴ
1sg　語る　聞こえる　3se　昔話
「私は彼に昔話を語って聞かせた」

このような、自動詞も他動詞も現れ得るという現象は、使役要素として一般の動詞を用いた使役表現 (後述) では観察できない。

(12) a. jə-　dʊ́　θî　thwí
1sg　殴る　死ぬ　犬
「私は犬を殴り殺した」

b. *jə-　dʊ́　pjò　thwí　mì
1sg　殴る　吐く　犬　ご飯
(私は犬を殴ってご飯を吐かせた)

本論文では、このように自動詞も他動詞も現れることが可能になっているのは、mà, phílâɴ, kò, lɔ̀ が、dà と同じ使役助詞に近づいているからであると考え、文法化の一例と見なすことにする。そこで、本論文では、dà に mà, phílâɴ, kò, lɔ̀ を加えた五つを使役助詞と呼ぶ。以下にこれら五つの使役助詞について考察していく。

28.2.1.1 dà

dàʊ あるいは dài とも発音される。また、速い発音では弱化して də- となることもある。ポー・カレン語西部方言 (/ɗəɯʔ/) やスゴー・カレン語 (/dʊ́ʔ/) との対応から考えると、dàʊ が元来の発音だと考えられるが、現在では dà と発音されることのほうが多い。

dà は、被使役動詞が意志動詞である場合も無意志動詞である場合も使うことができる。下に示すのは意志動詞の例である。

(13) jə- dà phʉ̂ʉ ʔəwê
1sg (使役) 跳ぶ 3se
「私は彼にジャンプさせた」

(14) jə- dà klí ʔəwê
1sg (使役) 走る 3se
「私は彼を走らせた」

(15) jə- dà ʔánɴ jə- thwí chá
1sg (使役) 食べる 1sg 犬 餌
「私は犬に餌を食べさせた」

(16) jə- dà ʔánɣʉ́ʉ ʔəwê chà
1sg (使役) 盗む 3se CHə
「私は彼に盗みをやらせた」

一方で、次のように無意志動詞の場合にも用いることができる。

(17) jə- dà θî ʔəwê
1sg (使役) 死ぬ 3se
「私は彼に死なせた」

Kato (1999) では、dà は無意志動詞と共起しないので、無意志動詞の場合には使役助詞として mà 「する」を用いるなどしなければならないとした。確かに話者によってはそのような判断を示す場合がある。しかし一方で、「使える」との判断を示す話者もいる。その場合、dà は、「間接的な」使役を表すようである。mà と対比することによって、dà を使った場合の意味の特徴を見てみよう。まず次の例では、mà を使った (b) は、直接手をかけて殺す場合であるが、dà を使った (a) の場合、食事を与えないなどして殺す状況を表す。

(18) a. jə- dà θî ʔəwê
1sg (使役) 死ぬ 3se
「私は彼に死なせた」

b. jə- mà θî ʔəwê
1sg (使役) 死ぬ 3se
「私は彼を殺した」

次の例では、mà を使った (b) は、直接押すなどして転ばせる状況を表すが、dà を使った (a) は、例えばゆかをすべりやすくしておいて転ばせるような状況を表す。

(19) a. jə- dà làɴthîphā ʔəwê
1sg (使役) 転ぶ 3se
「私は彼を転ばせた」

b. jə- mà làɴthîphā ʔəwê
1sg (使役) 転ぶ 3se
「私は彼を転ばせた」

次の例では、mà を使った (b) は、机の上に置いてあった本を払い落とすような状況を表すが、dà を使った (a) は、本を落ちやすいところに置いておいて、自然に落ちるのを待つような状況を表す。

(20) a. jə-　dà　　làɴthé　láiʔàʊ
　　1sg　(使役)　落ちる　本
　　「私は本を落とした」

　　b. jə-　mà　　làɴthé　láiʔàʊ
　　1sg　(使役)　落ちる　本
　　「私は本を落とした」

次の例では、mà を使った (b) は、家をダイナマイトを使ったりして直接壊す状況を表すが、dà を使った (a) は、風雨にさらして自然に壊れるのを待つような状況を表す。

(21) a. jə-　dà　　ɣàɣòɴ　ɣéiɴ
　　1sg　(使役)　壊れる　家
　　「私は家を壊した」

　　b. jə-　mà　　ɣàɣòɴ　ɣéiɴ
　　1sg　(使役)　壊れる　家
　　「私は家を壊した」

このように、使役要素として mà を用いた場合には、被使役者に直接働きかける状況を表すが、dà を用いた場合には、間接的に働きかける状況を表すのである。しかし、Kato (1999) にも記したとおり、無意志動詞のときには dà を用いることができないと考える話者がいることも事実である。このような判断の差が何に起因するものであるかは今のところ分からない。

なお、今まで示してきた例から分かるとおり、dà を用いた場合の被使役者は、有生物でも無生物でも構わない。被使役動詞が無意志動詞のときの容認度が下がる話者の場合、事実上、被使役者は有生物に限られるが、これは、被使役動詞が意志動詞であることに起因するものであり、dà そのものの性質ではない。

28.2.1.2 mà

mà は、動詞としては「する、行う」という意味を持つ。動詞としての mà は、次のように一つの目的語を取る。

(22) jə-　mà　　kəlôʊɴ
　　1sg　する　仕事
　　「私は仕事をした」

使役助詞としての mà が共起する動詞は、次に示す例に見られるように、無意志動詞である。先ほど見たように、dà と異なって、直接的な使役を表す。

(23) jə- mà θî ʔəwê (=18b)
1sg (使役) 死ぬ 3se
「私は彼を殺した」

(24) jə- mà thé phlì
1sg (使役) 切れる 糸
「私は糸を切った」

(25) jə- mà ɣâɴ thátɴ θə̂ɴ
1sg (使役) 塩辛い (変化) おかず
「私はおかずを塩辛くした」

(26) jə- mà cɔ́ châiɴ
1sg (使役) 濡れている シャツ
「私はシャツを湿らせた」

(27) jə- mà ɣàɣòɴ ɣéiɴ (=21b)
1sg (使役) 壊れる 家
「私は家を壊した」

(28) jə- mà nī ʔəwê
1sg (使役) 笑う 3se
「私は彼を笑わせた」

(29) jə- mà pjò ʔəwê mì (=8b)
1sg (使役) 吐く 3se ご飯
「私は彼に (指を突っ込むなどして) ご飯を吐かせた」

mà は次に示すように意志動詞とは共起しない。

(30) *jə- mà chînàɴ ʔəwê
1sg (使役) 座る 3se
(私は彼を座らせた)

(31) *jə- mà lì ʔəwê
1sg (使役) 行く 3se
(私は彼を行かせた)

(32) *jə- mà ʔáɴ ʔəwê mì
1sg (使役) 食べる 3se ご飯
(私は彼にご飯を食べさせた)

(33) *jə- mà dʊ́ ʔəwê phʊ́θá
1sg (使役) 殴る 3se 子供
(私は彼に子供を殴らせた)

以上のように、mà は無意志動詞と相性が良く、意志動詞とは共起しにくいという特徴を持つ。

なお、以上の例からも分かるとおり、mà を用いた場合の被使役者は、有生物でも無生物でも構わない。

28.2.1.3 phílânɴ

phílânɴ は、動詞としては「やる、与える」という意味を持つ。動詞の phílânɴ は phlânɴ あるいは phí と発音されることがあるが、使役助詞の phílânɴ も phlânɴ あるいは phí と発音されることがある。動詞としての phílânɴ は、次のように二つの目的語を取り得る。

(34) jə-　phílânɴ　ʔəwê　khòθá
　　1sg　与える　3se　マンゴー
　　「私は彼にマンゴーをやった」

使役助詞としての phílânɴ は、被使役動詞が意志動詞であるか無意志動詞であるかに関わりなく使うことができる。次の (35)(36) は意志動詞の例である。

(35) jə-　phílânɴ　klí　ʔəwê
　　1sg　(使役)　走る　3se
　　「私は彼に走らせてやった」

(36) jə-　phílânɴ　ʔánphônɴ　ʔəwê　mì
　　1sg　(使役)　炊く　3se　ご飯
　　「私は彼にご飯を炊かせてやった」

また、次の (37)(38) は無意志動詞の例である。

(37) jə-　phílânɴ　mə̂ɴ　thánɴ　ʔəwê
　　1sg　(使役)　生きている　(変化)　3se
　　「私は彼を生き返らせてやった」

(38) jə-　phílânɴ　xî　thánɴ　ʔəwê
　　1sg　(使役)　美しい　(変化)　3se
　　「私は彼女を美しくしてやった」

phílânɴ が今まで見てきた dà や mà と異なるのは、使役行為が「誰かのため」であるという裨益の意味が加わることである。被使役者が有生物である限り、受益者は被使役者と同一である。ところが、下の例のように、被使役者として無生物が現れることが時にある。その場合には、受益者は被使役者とは同一でない。

(39) jə-　phílânɴ　khū　thánɴ　thî　ʔəwê　ʔəɣànɴ
　　1sg　(使役)　暑い　(変化)　水　3se　ため
　　「私は彼のために水を沸かしてやった」

(40) jə- phílâɴ phàɴ thánɴ dàʊphə̀ɴ
1sg (使役) 明るい (変化) 部屋の中
「私は (彼女のために) 部屋の中を明るくしてやった」

(39) では、被使役者は thî「水」であるが、受益者は ʔəwê「彼」である。(40) では、被使役者は dàʊphə̀ɴ「部屋の中」であるが、受益者は、文中には現れていない何者かである。このように、被使役者が無生物の場合には、受益者は被使役者とは異なる有生物である。

ただし、話者によっては、被使役者＝受益者でなければならないという意識を持っており、(39) や (40) が良くないと判断する場合がある。このような話者の場合は、被使役者は次の (41)(42) に挙げるような、有生物でなければならない。受益者は、(41) のような人間である場合以外に、(42) のような動物である場合もある。

(41) jə- phílâɴ jā jə- phʊ́ thî
1sg (使役) 泳ぐ 1sg 子供 水
「私は子供に泳がせてやった」

(42) jə- phílâɴ jā jə- thwí thî
1sg (使役) 泳ぐ 1sg 犬 水
「私は自分の犬に泳がせてやった」

このような判断の差が、何に起因するものであるかは、現段階では分からない。

28.2.1.4 kò

kò は、動詞としては「誘う」または「呼ぶ (声をかけるの意)」という意味である。次のように一つの目的語を取る。

(43) jə- kò ʔəwê
1sg 呼ぶ 3se
「私は彼を誘った/呼んだ」

使役助詞としての kò を使った場合、被使役動詞は意志動詞でも無意志動詞でもよい。kò は、「誰かを呼び寄せて何かをさせる」あるいは「誰かに呼び掛けて何かをさせる」という状況を表す。次の (44)(45) は意志動詞と共起した例である。

(44) jə- θò kò mî jə̀
1sg 友人 (使役) 寝る 1SG
「友人が私に泊まりにくるよう言った」

(45) jə- kò ʔánɴ ʔəwê mʉ̀
1sg (使役) 食べる 3se ご飯
「私は彼を食事に招待した」

また、次の (46) は無意志動詞と共起した例である。

(46) jə-　kò　nɔ́　thánɴ　ʔəwê
1sg　(使役)　目覚める　(完成)　3se
「私は彼に声をかけて目覚めさせた」

使役助詞 kò の使用において重要なのは、被使役者が人間でなければならないということである。したがって、次の (47) は適格な文であるが、「犬」が被使役者となっている (48) は非文である。

(47) jə-　kò　ɣɛ̂　thánɴ　jə-　phʊ́
1sg　(使役)　来る　(上方)　1sg　子供
「私は子供を呼んで (家に) 上がらせた」

(48) *jə-　kò　ɣɛ̂　thánɴ　jə-　thwí
1sg　(使役)　来る　(上方)　1sg　犬
「私は自分の犬を呼んで (家に) 上がらせた」

これとまったく同じ選択制限は、動詞の kò にも見られる。

(49) jə-　kò　nī　thàiɴ　jə-　phʊ́
1sg　呼ぶ　(引寄)　(元位)　1sg　子供
「私は子供を呼び寄せた」

(50) *jə-　kò　nī　thàiɴ　jə-　thwí
1sg　呼ぶ　(引寄)　(元位)　1sg　犬
「私は犬を呼び寄せた」

(48) が適格でないのは、動詞 kò の選択制限の特徴を、使役助詞 kò がそのまま引き継いでいるためであろう。

28.2.1.5 lɔ̀

lɔ̀ は、動詞としては「語る」という意味である。次のように二つの目的語を取る。

(51) jə-　lɔ̀　ʔəwê　pòʊɴ
1sg　語る　3se　昔話
「私は彼に昔話を語った」

使役助詞としての lɔ̀ は、誰かに話しかけて、話しかけた相手に何らかの状況を引き起こすことを表す。被使役動詞は無意志動詞でなければならない。次の (52)(53) を見ていただきたい。

(52) ʔəwê　lɔ̀　châ　jà
3se　(使役)　痛い　1SG
「彼は私の悪口を言った (直訳:彼は私に語って私を痛くさせた)」

(53) jə- lɔ̀ ɣə̂ɴ ʔəwê pòʊɴ
1sg (使役) 聞こえる 3se 昔話
「私は彼に昔話を語って聞かせた」

被使役動詞として意志動詞を用いることはできない。

(54) *ʔəwê lɔ̀ klí jə̀
3se (使役) 走る 1sg
(彼は私に走るよう言った)

使役助詞 lɔ̀ の被使役者は、普通、人間を含む動物でなければならない。これは、語った内容を聞くことができる者でなければならないということだろう。

(55) jə- lɔ̀ ɣə̂ɴ jə- thwí
1sg (使役) 聞こえる 1sg 犬
「私は自分の犬に話して聞かせた」

(56) *jə- lɔ̀ ɣàɣòɴ ʔə- ɣéɪɴ
1sg (使役) 壊れる 3sg 家
(私は彼の家に話しかけて壊した)

28.2.2 一般の動詞を用いる場合

ここまで見てきたのは、使役要素として使役助詞を用いる場合だったが、ここで見るのは使役要素として一般の動詞を用いる場合である。先ほど述べたように、使役要素として一般の動詞を用いた場合、被使役動詞は自動詞に限られる。

実は、このタイプの使役構文は、第 17 章において、連結型動詞連続の中の主語非同一型として論じたものである。主語非同一型は、V2 の論理的主語が動詞複合体の目的語と同一指示になるので、TYPE 1 の使役構文の定義に合致し、使役構文と見なすことができる。ここで今一度例を見ておこう。

(57) jə- chè θî ʔəwê
1sg 刺す 死ぬ 3se
「私は彼を刺し殺した」

(58) jə- ʔáɪɴ blè kʊ́
1sg かむ 砕ける 菓子
「私は菓子をかみ砕いた」

(59) chəphʊ́xā ʔáɴ ɣàɣòɴ bʊ́ɪ
虫 食べる 壊れる 稲
「虫が稲を食い荒らした」

(60) jə- dʊ́ káɪɴ lé
1sg 殴る 曲がる 棒
「私は棒をたたき曲げた」

(61) jə-　ʔɔ́kí　ɕúɪ　làɴ　thìkhlâɴ
　1sg　置く　冷たい　(変化)　茶
　「私は茶を置いて冷ました」

動詞連続についての議論で述べたとおり、主語非同一型の連結型動詞連続における V2 は必ず無意志動詞であり、意志動詞が V2 になることはないのだった。

(62) *jə-　dʊ́　chînàɴ　thwí
　1sg　殴る　座る　犬
　「私は犬を殴って座らせた」

(63) *jə-　chánɴ　khwɛ̀　jə-　phʊ́
　1sg　押す　這う　1sg　子供
　「私は子供を押して這わせた」

一般動詞が使役要素となった場合、例を見ればわかるとおり、被使役者は有生物でも無生物でも構わない。

28.3　TYPE 2

次に TYPE 2 の考察に移る。TYPE 2 では、被使役者は使役要素の目的語の位置に現れた補文内の主語として現れる。このタイプにおいて、使役要素として現れる動詞には、ʔánmə̂ɴ「命ずる」、plɛ̀tɔ̀「許可する」(plɛ̀ とも言う)、phílâɴ「与える」がある。

(64) jə-　ʔánmə̂ɴ　ʔəwê　lì
　1sg　命じる　3se　行く
　「私は彼に行くように命じた」

(65) jə-　plɛ̀tɔ̀　ʔəwê　lì
　1sg　許す　3se　行く
　「私は彼に行くことを許可した」

(66) jə-　phílâɴ　ʔəwê　lì
　1sg　与える　3se　行く
　「私は彼に行かせてやった」

このタイプの使役構文は、**目的語の位置に補文を取る構文の中で、補文に現実法 (realis modality)・非現実法 (irrealis modality) の対立が生じないもの**という定義ができる。目的語の位置に補文を取る構文には、他に次のようなものがある。

(67) jə-　lɔ̀　[$_C$ ʔəwê　lì]
　1sg　語る　3se　行く
　「私は彼が行ったと言った」

(68) jə- θíjâ [$_C$ ʔəwê lì]
1sg 知る 3se 行く
「私は彼が来たことを知っている」

(69) jə- dá [$_C$ ʔəwê klí]
1sg 見える 3se 走る
「私には彼が走るのが見えた」

このような補文は、現実・非現実の対立を示す。換言すると、非現実法を表す動詞助詞 mə- を補文内部の動詞に前接することができる。

(70) jə- lɔ̀ [$_C$ ʔəwê mə- lì]
1sg 語る 3se (非現) 行く
「私は彼が行くだろうと言った」

(71) jə- θíjâ [$_C$ ʔəwê mə- lì]
1sg 知る 3se (非現) 行く
「私は彼が来ることを知っている」

(72) jə- dá [$_C$ ʔəwê mə- klí]
1sg 見える 3se (非現) 走る
「私には彼が走ろうとしているのが見えた」

補文内の動詞に mə- がついた場合、補文の動詞が表す事象は、主文動詞が表す事象よりも時間的に遅れて発生することが示される。ところが、TYPE 2 の使役構文においては事情が異なる。(64) から (66) では、それぞれ、「行く」という行為よりも、「命ずる」「許す」「(行く機会を) 与える」という行為のほうが時間的に先行しているはずである。ところが、それにもかかわらず、これらの補文内の動詞に mə- をつけることはできない。

(73) *jə- ʔánmə̂ɴ ʔəwê mə- lì
1sg 命じる 3se (非現) 行く

(74) *jə- plɛ̀tɔ̀ ʔəwê mə- lì
1sg 許す 3se (非現) 行く

(75) *jə- phílâɴ ʔəwê mə- lì
1sg 与える 3se (非現) 行く

このような振る舞いを基準として、目的語位置に補文を取る文のうち、補文内の動詞に mə- を付けることのできないものを TYPE 2 の使役構文として認定することができる[2]。補文内の現実法・非現実法の対立については、第 22 章もご覧いただきたい。

[2]補文の内部に現実法・非現実法の対立が見られないということは、補文が主文に強く従属していることを示すのだと思われる。このことを支持する証拠の一つとして、主文と補文が別々に時間を表す語句をとることができないという事実が挙げられる。
*lənìjò jə- ʔánmə̂ɴ ʔəwê lì kèkhó
今日 1sg 命じる 3se 行く 明日
(今日、私は彼に明日行くよう命じた)
これは、例えば英語で次のように言えるのと対照的である。
Yesterday Fred persuaded John to wash his car tommorrow.

次に、被使役者を表す名詞句は、主文動詞の目的語ではなく、補文の中の主語であることを示したい。その根拠は以下に示す三つである。ʔánmə̂ɴ を例にとって示すことにする。

(i) 被使役者を表す名詞句の前にポーズを入れることは可能であるが、後にポーズを入れることはできない。(ポーズを♯で示す)

(76) a. jə-　ʔánmə̂ɴ　♯　ʔəwê　lì
　　1sg　命じる　　3se　行く

　　b. *jə-　ʔánmə̂ɴ　ʔəwê　♯　lì
　　1sg　命じる　3se　　行く

(ii) 使役要素に後続する部分全体を主題化することはできるが、被使役者を表す名詞句だけを残して主題化することはできない。

(77) a. ʔəwê　lì　nɔ́　jə-　ʔánmə̂ɴ
　　3se　行く　(題)　1sg　命じる
　　「彼が行けということを私は命じたのだ」

　　b. *lì　nɔ́　jə-　ʔánmə̂ɴ　ʔəwê
　　行く　(題)　1sg　命じる　3se
　　「行けということを私は彼に命じたのだ」

(iii) 補文を表す助詞 lé は、被使役者を表す名詞句の前にのみ現れることができる。

(78) a. jə-　ʔánmə̂ɴ　lé　ʔəwê　lì
　　1sg　命じる　(補)　3se　行く

　　b. *jə-　ʔánmə̂ɴ　ʔəwê　lé　lì
　　1sg　命じる　3se　(補)　行く

これと同じことは、plɛ̀ と phílâɴ にもあてはまる。以上の理由により、被使役者を表す名詞句は、主文の動詞の目的語ではなく、補文の主語であると考えられる。

下に三つの動詞を個々に見ていく。

28.3.1　ʔánmə̂ɴ

ʔə́ɴmə̂ɴ は「命ずる」という意味である。ʔánmə̂ɴ を用いた文では、補文の動詞は意志動詞でなければならない。そのため、下に示す (80) は不適格である。

(79) jə-　ʔánmə̂ɴ　ʔəwê　chînàɴ
　　1sg　命じる　3se　座る
　　「私は彼に座るよう命じた」

(80) *jə- ʔánmə̂ɴ ʔəwê làɴthîphā
1sg 命じる 3se 転ぶ
「私は彼に転ぶよう命じた」

また、被使役者は人間でなければならない。そのため、次の (82) は不適格である。

(81) jə- ʔánmə̂ɴ jə- phʊ́ ʔánɴ mì
1sg 命じる 1sg 子供 食べる ご飯
「私は子供にご飯を食べるよう命じた」

(82) *jə- ʔánmə̂ɴ jə- thwí ʔánɴ mì
1sg 命じる 1sg 犬 食べる ご飯
「私は飼い犬にご飯を食べるよう命じた」

28.3.2 plɛ̀tɔ̀

plɛ̀ とも言う。plɛ̀tɔ̀ は、「許可する」「許す」という意味である。ʔánmə̂ɴ の場合と同様に、補文の動詞は意志動詞でなければならない。したがって、次の (84) は不適格である。

(83) jə- plɛ̀tɔ̀ ʔəwê chînàɴ
1sg 許す 3se 座る
「私は彼に座ることを許した」

(84) *jə- plɛ̀tɔ̀ ʔəwê θî
1sg 許す 3se 死ぬ
「私は彼に死ぬことを許した」

また、被使役者が人間でなければならないことも、ʔánmə̂ɴ の場合と同じである。したがって次の (86) は不適格である。

(85) jə- plɛ̀tɔ̀ jə- phʊ́ ʔánɴ mì
1sg 許す 1sg 子供 食べる ご飯
「私は子供にご飯を食べるのを許した」

(86) *jə- plɛ̀tɔ̀ jə- thwí ʔánɴ mì
1sg 許す 1sg 犬 食べる ご飯
「私は飼い犬にご飯を食べるのを許した」

28.3.3 phílâɴ

phílâɴ は「与える」という意味である。phlâɴ とも発音される。TYPE 1 で見た使役助詞の phílâɴ と同じく、これが用いられると、裨益の意味を含む。ただし、TYPE 2 では、受益者は常に被使役者である。この phílâɴ は裨益を表すという点で、TYPE 1 の phílâɴ と同じであるため、両者は、次のように互いにパラフレーズが可能な場合が多い。

(87) a. jə-　phílâɴ　lì　ʔəwê　(TYPE 1)
1sg　(使役)　行く　3se
「私は彼に行かせてやった」

b. jə-　phílâɴ　ʔəwê　lì　(TYPE 2)
1sg　与える　3se　行く
「私は彼に行かせてやった」

(88) a. phílâɴ　jāiɴ　jə̀　nə-　cháikā　(TYPE 1)
(使役)　踏む　1SG　2sg　輪タク
「あなたの輪タクを私にこがせてください」

b. phílâɴ　jə-　jāiɴ　nə-　cháikā　(TYPE 2)
与える　1sg　踏む　2sg　輪タク
「あなたの輪タクを私にこがせてください」

しかし、次のような点で、TYPE 2 の phílâɴ は、TYPE 1 の phílâɴ と異なる。

まず、TYPE 1 では、被使役動詞は意志動詞でも無意志動詞でもあり得た。ところが、TYPE 2 では、被使役動詞は意志動詞でなければならない。したがって、次の (89b) は不適格である[3]。

(89) a. jə-　phílâɴ　xî　thánɴ　ʔəwê　(TYPE 1)
1sg　(使役)　美しい　(変化)　3se
「私は彼女を美しくしてやった」

b. *jə-　phílâɴ　ʔəwê　xî　thánɴ　(TYPE 2)
1sg　与える　3se　美しい　(変化)

次に、TYPE 2 では、ʔánmə̂ɴ や plɛ̀tɔ̀ の場合と同じく、被使役者は人間でなければならない。一方、TYPE 1 では、被使役者は無生物でもかまわない。また、被使役者は受益者でなければならないという意識を持つ話者であっても、動物の被使役者までは許容する。

(90) a. jə-　phílâɴ　jā　jə-　thwí　thî　(TYPE 1)
1sg　(使役)　泳ぐ　1sg　犬　水
「私は自分の犬に泳がせてやった」

b. *jə-　phílâɴ　jə-　thwí　jā　thî　(TYPE 2)
1sg　与える　1sg　犬　泳ぐ　水

このように、TYPE 1 の phílâɴ と TYPE 2 の phílâɴ は振る舞いが異なるのである[4]。

[3]Kato (1999) では、TYPE 2 の phílâɴ が、無意志動詞を補文にとることもできるとしたが、その後の追調査の結果、無意志動詞の場合に容認度が極端に下がることが分かった。

[4]LaPolla (p.c.) によれば、通言語的な傾向から見て、TYPE 2 の phílâɴ のほうが TYPE 1 よりも古く、TYPE 1 の phílâɴ は TYPE 2 から発生した可能性があるという。

28.4　まとめ

以上の議論を表にまとめると次のようになる。「—」は「無指定」を表す。

使役要素の種類	動詞の意志性	被使役者の種類
TYPE 1		
使役助詞 dà	—	—
使役助詞 mà	無意志	—
使役助詞 phílâɴ	—	— (話者によっては「生物」)
使役助詞 kò	—	人間
使役助詞 lɔ̀	無意志	動物
一般動詞	無意志	—
TYPE 2		
ʔánmə̂ɴ	意志	人間
plɛ̀tɔ̀	意志	人間
phílâɴ	意志	人間

第29章　類似要素反復

ポー・カレン語には、意味的な共通点を持つ2個の要素を、要素間の関係を表す標識を用いずに並べるという表現方法がある。この表現方法を本論文では**類似要素反復**と呼ぶ。類似形反復と同様の現象は他の東南アジア諸語にも広く観察される。カレン系言語に限ると、Bwe Karen 語については Henderson (1997 vol.II:xiv-xv) が elaborate expression という用語で、Kayah 語については Solnit (1997:271-287) が parallelism という用語で報告している。

類似要素反復の例を挙げよう。

(1) nī　phǒ　nī　mâ
　得る　子　得る　妻
　「妻子を持つ」(001.2671)

この例では、二つの要素 nī phǒ と nī mâ が並べられている。どちらも「動詞 + 目的語」であるという点で、同一の統語的特徴を持つ。全体の意味は各要素の意味を足し合わせた意味になる。

類似要素反復の一般的な特徴を以下に列挙する。

- 類似要素反復はしばしば表現の文体的価値を高める働きをする。したがって、くだけた会話で類似要素反復が現れることは相対的に少なく、逆に、かしこまった場面における発話ではより頻繁に現れる。
- 類似要素反復によって並べられる要素は実に様々である。しかし、常に二つの要素の統語的特徴は一致しており、全体としての統語的特性も各要素の統語的特性を引き継ぐ。
- 類似要素反復によって並べられる2要素の順番は、基本的には自由である。
- 二つの要素は、どちらも2音節以上を含み、かつ、同じ音節数から成る。ただし、それぞれの要素が非常に長い場合に限り、音節数が多少異なることもある。

以下に類似要素反復の例を、反復される要素の種類別に挙げる。各要素を ⊂ ⊃ で囲んで示す。なお、反復される要素の種類は、ここに挙げたもの以外にも存在する可能性が十分にある。

29.1　様々な例

29.1.1　名詞句の反復

単独の名詞から成る名詞句

(2) ⊂ thŭphŭ⊃　⊂ líphŭ⊃
　　小鳥　　リス
「小鳥とリス」(II-11.13)

(3) ⊂ chəkhū⊃　⊂ chəkhléiɴ⊃
　　暑さ　　寒さ
「暑さと寒さ」(001.496)

通常、名詞の列挙には名詞修飾助詞の dè 等が用いられる。

(4) thŭphŭ　dè　líphŭ
　　小鳥　　と　リス
「小鳥とリス」

しかし、時として dè を用いない列挙も使われることがあり、このような場合と類似形反復の区別は難しい。

(5) thŭphŭ,　líphŭ
　　小鳥　　リス
「小鳥とリス」

「代名詞 + 名詞」から成る名詞句

(6) ⊂ ʔə-　cŭ⊃　⊂ ʔə-　kháɴ⊃
　　3sg　手　　3sg　足
「彼の手と足」(II-11.6)

(7) ⊂ ʔə-　cì⊃　⊂ ʔə-　thôɴ⊃
　　3sg　銀　　3sg　金
「彼の金と銀」(II-14.8)

(8) ⊂ ʔə-　mū⊃　⊂ ʔə-　phā⊃
　　3sg　母　　3sg　父
「彼の母と父」(IV-01.11)

(9) ⊂ jə-　phŭ⊃　⊂ jə-　lì⊃
　　1sg　子　　1sg　孫
「私の子と孫」(015.26)

29.1.2　動詞句の反復

単独の動詞から成る動詞句

(10) ⊂ pàdʊ́⊃　⊂ jàʊjáɴ⊃
　尊敬する　尊敬する
「尊敬している」(017.11)

(11) ⊂ ʔɛ́kwì⊃　⊂ ʔɛ́chə̂ɴ⊃
　愛する　愛する
「愛する」(017.19)

(12) ⊂ nə̂ɴmə̂ɴ⊃　⊂ nə̂ɴcà⊃
　香る　香る
「香る」(I-02.7)

(13) ⊂ lɔ̀thàiɴ⊃　⊂ kàɴkà⊃
　喋る　噂する
「お喋りする」(II-02.14)

(14) ⊂ pàkà⊃　⊂ θàmɛ́⊃
　気にとめる　恐れる
「気にする」(III-03.10)

(15) ⊂ báchí⊃　⊂ báʔà⊃
　くしゃみする　鼻がつまる
「くしゃみしたり鼻がつまったりする (=風邪をひく)」(001.642)

(16) ⊂ dʊ́ɕā⊃　⊂ tháɴthɔ̂⊃
　豊かな　向上した
「発展している)」(001.1211)

「動詞 + 目的語」からなる動詞句

(17) ⊂ mà　chái⊃　⊂ mà　klò⊃
　作る　田　作る　沖積地の農地
「稲作を営む」(I-10.19)

(18) ⊂ θàʊ　nì⊃　⊂ θàʊ　nà⊃
　動かす　日　動かす　夜
「延期する」(001.484)

「動詞 + 斜格補語」から成る動詞句

(19) ⊂ ʔɔ́tháʊ　lɯ́　ʔò⊃　⊂ ʔɔ́tháʊ　lé　jò⊃
止まる　(場)　あそこ　止まる　(場)　ここ
「(バスが) あちらこちらに止まる」(001.246)

「動詞助詞 (前置されるもの)+ 動詞」から成る動詞句

(20) ⊂ bá　klɨ̀cɨ̀⊃　⊂ bá　ʔánxɯ̂ɯ⊃
(当為)　努力する　(当為)　探す
「努力したり (知識を) 探求したりしなければならない」(I-05.21)

(21) ⊂ dàʊ　ʔánˢ⊃　⊂ dàʊ　ʔɔ̀⊃
(使役)　食べる　(使役)　飲む
「ご馳走する」(001.1246)

「動詞 + 動詞助詞 (後置されるもの)」から成る動詞句

(22) ⊂ θá　thánˢ⊃　⊂ θá　làˢ⊃
呼吸する　(上方)　呼吸する　(下方)
「息を吸ったり吐いたりする」(II-09.7)

(23) ⊂ phɯ̂ɯ　thánˢ⊃　⊂ phɯ̂ɯ　làˢ⊃
跳ぶ　(上方)　跳ぶ　(下方)
「跳んだり跳ねたりする」(001.633)

29.1.3　「主語 + 動詞」の反復

(24) ⊂ phài　xâiˢ⊃　⊂ já　xâiˢ⊃
皮　乾く　肌　乾く
「皮膚が乾燥する」(001.3535)

(25) ⊂ θéiˢ　phōˢ⊃　⊂ wá　phōˢ⊃
木　破裂する　竹　破裂する
「(山火事で) 木や竹が割れる」(II-11.13)

29.1.4　分離型動詞連続の反復

(26) ⊂ lɔ̀　ɣì⊃　⊂ khlàiˢ　bá⊃
語る　良い　話す　正しい
「話し方が上手だ」(016.20)

(27) ⊂ ʔánᴺ　jə̀ᴺ⊃　⊂ ʔɔ̀　xwè⊃
食べる　十分な　飲む　満ちた
「食生活が満ち足りている」(I-10.19)

(28) ⊂ ʔɔ́　xʉ̂ɪ⊃　⊂ ʔɔ́　xàᴺ⊃
いる　団結した　いる　平らな
「一致団結する」(001.225)

29.1.5　「主語＋分離型動詞連続」の反復

(29) ⊂ jə-　jā　thî　θí⊃　⊂ jə-　thánᴺ　θéiᴺkhî　θí⊃　jàʊ
1sg　泳ぐ　水　できる　1sg　上る　木のてっぺん　できる　(完)
「私はすでに泳ぎもできるし、木のてっぺんに登ることもできる」(001.1880)

上の例では、thî の部分と θéiᴺkhî の部分の音節数が異なっている。このように、各要素が長い場合、それぞれの音節数が異なることもある。

29.1.6　副詞の反復

(30) ⊂ ʔèphlîlái⊃　⊂ ʔèchêiᴺpràᴺ⊃
清潔に　清潔に
「清潔に」(I-07.3)

(31) ⊂ ʔèthî⊃　⊂ ʔèklà⊃
正確に　明確に
「正確かつ明確に」(I-sen.70)

29.1.7　従属節の反復

(32) mənī　chɨ̀phʊ́　lə-　mèiᴺ　nɔ́
人間　民族　一　～種類　(題)

⊂ ʔè　lə-　pɔ̄　láipərə̂ᴺ⊃
(条件)　(否)　読む　新聞

⊂ ʔè　lə-　jʊ̄　láipərə̂ᴺ⊃　bá　nɔ́ ...
(条件)　(否)　見る　新聞　(否')　(題)
「ある民族が、新聞を読まないということであれば、(その民族は発展しているとは言えない)」(III-07.8)

29.2　動詞を含む要素の反復について

上の 29.1.2、29.1.3、29.1.4、29.1.5 で述べた類似要素反復は、いずれも動詞を含む要素の反復である。これらを従属節において否定する場合、次のように全体の前に一つだけ lə- を置くこともできるし、

(33) lə-　⊂ pàkà⊃　⊂ θàmɛ́⊃　wê　bá　ʔəkhʊ́cònˢ ...
(否)　気にとめる　恐れる　(強意)　(否')　～なので
「虎が蛙を気にも留めなかったので...」(III-03.10)

次のように各要素の前に一つずつ lə- を置くこともできる。

(34) lə-　⊂ pàkà⊃　lə-　⊂ θàmɛ́⊃　wê　bá　ʔəkhʊ́cònˢ ...
(否)　気にとめる　(否)　恐れる　(強意)　(否')　～なので
「虎が蛙を気にも留めなかったので...」

加藤 (1998) ではこれらを動詞連続の一種と見なした。そして、lə- を各要素の前に置くことを根拠とし、動詞連続の一つのタイプと考えて「並列型」の動詞連続と名付けた。しかし、これらが一定の文体的意味合いを帯びている (すなわち洗練された表現である) こと、また、意味的に類似する要素の連続であることを考えると、これらを動詞連続という現象の中で取り扱うべきではなく、類似要素反復という操作によって作られたものと考えるほうが適切である。したがって、本論文では、このような構造体について、動詞連続を扱った章では論じていない。

29.3　単独では使われない形態素を含む類似要素反復

類似要素反復で使われる要素の中には単独では使われない形態素を含むものがある。例えば次の例で、前部要素に現れた形態素 thî はこれ単独では用いることができない。

(35) ⊂ hə-　thî⊃　⊂ hə-　khāⁿ⊃　(代名詞 + 名詞句)
1pl　?　1pl　国
「私達の国」(IV-07.19)

thî は「水」という意味では使われるけれども、単独で「国」に似た概念を表すことはない。おそらく、過去のある時点で thî は「国」に似た概念を表し、かつ単独で使うことのできる名詞だったのではないか。そのような名詞が何らかの理由で元の意味を失ったものの、類似要素反復の中でのみ残ったのではないか。このような類似要素反復は、多かれ少なかれイディオム化していると考えられる。なぜなら、前部要素と後部要素を交換することができないからである。

(36) *⊂ hə-　khāⁿ⊃　⊂ hə-　thî⊃
1pl　国　1pl　?

以下に、単独では使われない形態素を含む類似要素反復の例を挙げる。逐語訳に「?」を付したのが単独では使われない形態素である。このような形態素を文法の中でどのように扱うべきかについては後で論じる。

(37) ⊂ ɣàɣòⁿ⊃　⊂ ɣàcá⊃　(動詞の反復)
壊れる　?
「壊れる」(001.1383)

(38) ⊂ hə-　lāɴ⊃　⊂ hə-　klɛ̀⊃　(「代名詞＋名詞」の反復)
1pl　場所　1pl　?
「私達の場所 (故郷)」(IV-07.19)

(39) ⊂ pə-　mɛ́⊃　⊂ pə-　θwâ⊃　(「代名詞＋名詞」の反復)
1pl　歯　1pl　?
「私達の歯」(001.2006)

(40) ⊂ ʔə-　thì⊃　⊂ ʔə-　θò⊃　(「代名詞＋名詞」の反復)
3sg　?　3sg　友人
「彼の友人」(II-10.5)

(41) ⊂ thî　ɣāiɴ⊃　⊂ khāɴ　ɣāiɴ⊃　(「名詞＋名詞」の反復)
?　事柄　国　事柄
「国情」(V-03.57)

(42) ⊂ dè　thì⊃　⊂ dè　θò⊃　(「側置助詞＋名詞」の反復)
(共)　?　(共)　友
「友人と」(I-sen.21)

(43) ⊂ lɔ̀　phí⊃　⊂ thàiɴ　phí⊃　(「動詞＋動詞助詞」の反復)
語る　(裨益)　?　(裨益)
「話してやる」(017.24)

(44) ⊂ nī　ɣāiɴ⊃　⊂ nī　bjà⊃　(「動詞＋目的語」の反復)
得る　力　得る　?
「元気が出る」(001.1389)

(45) ⊂ mà　cháiɴ⊃　⊂ mà　nà⊃　(「動詞＋目的語」の反復)
作る　田　作る　?
「稲作を行う」(001.2495)

(46) ⊂ jʊ̄　thî⊃　⊂ jʊ̄　chà⊃　(連結型動詞連続の反復)
見る　確かな　見る　?
「確かめる」(001.1466)

(47) ⊂ ʔɔ́　ɕɯ́ɪ⊃　⊂ ʔɔ́　bà⊃　(分離型動詞連続の反復)
いる　平和な　いる　?
「平和な」(001.225)

(48) ⊂ ʔá　mèiɴ⊃　⊂ ʔá　cèiɴ⊃　(助数名詞句の反復)
多い　～種類　多い　?
「多くの種類」(III-07.12)

以下の例における θə́ɯɴ は「肝臓」という意味である。これらの例においてこの語は「心」という意味で使われている可能性がある。しかし、対になって使われている θà「心臓」が単独でも「心」という意味で用いられるのに対して、θə́ɯɴ は単独では「心」という意味では用いられない。このようなものも、広い意味での「単独では使われない要素」と考えることができる。

(49) ⊂ ʔə-　θə́ɯɴ⊃　⊂ ʔə-　θà⊃　(「代名詞 + 名詞」の反復)
　3sg　?　　3sg　心
「彼の心」(I-04.10)

(50) ⊂ θə́ɯɴ　máʊ⊃　⊂ θà　lə̀ɴ⊃
　?　快適な　心　暖かい　(「主語 + 動詞」の反復)
「嬉しい」(016.7)

▷ 全体として「嬉しい」ことを表すイディオム。

(51) ⊂ dòɴ　θə́ɯɴ⊃　⊂ dòɴ　θà⊃　(「動詞 + 目的語」の反復)
　真似る　?　真似る　心
「同情する」(017.16)

▷ 全体として「同情する」ことを表すイディオム。

下の例では、前部要素が θə́ɯɴ を含み、後部要素も単独で用いられることのない形態素 thó を含んでいる。

(52) ⊂ θə́ɯɴ　ʔwí⊃　⊂ θà　thó⊃
　?　楽しい　心　?　(「主語 + 動詞」の反復?)
「嬉しい」(017.9)

▷ 全体として「嬉しい」ことを表すイディオム。

29.4　対応する二音節語との関係について

類似要素反復には、対応する二音節語が見出されることがある。すなわち、類似要素反復を ⊂ A_1 A_2 ... A_n ⊃ ⊂ B_1 B_2 ... B_n ⊃ (A と B はそれぞれ前部要素と後部要素に含まれる任意の音節。数字は最初の音節から数えた順番) と表すと、A_iB_i という構成を持つ二音節語が存在する場合がある ($_i$ は任意の正の整数。つまり、音節 A_i と音節 B_i は、それぞれの要素における順番が同じである)。

対応する二音節語を持つ類似形反復を下に挙げる。対応する二音節語を「*cf.*」の後に示す。

(53) ⊂ jə-　phʊ́⊃　⊂ jə-　lì⊃　(=9)　*cf.* phʊ́lì「子と孫; 子孫」
　1sg　子　1sg　孫
「私の子と孫」(015.26)

(54) ⊂ mà　　cháiɔ　⊂ mà　　klòɔ　　(=17)　　*cf.* cháiklò「水田」
作る　田　　作る　沖積地の農地
「稲作を営んでいる」(I-10.19)

(55) ⊂ θéiɴ　phōɴɔ　　⊂ wá　phōɴɔ　　(=25)　　*cf.* θéiɴwá「木と竹」
木　　破裂する　　竹　　破裂する
「(山火事で) 木や竹が割れる」(II-11.13)

(56) ⊂ ʔáɴ　　jònɔ　　⊂ ʔɔ̀　　xwèɔ　　(=27)　　*cf.* jònxwè「満ち足りた」
食べる　十分な　　飲む　満ちた
「食生活が満ち足りている」(I-10.19)

(57) ⊂ ʔɔ́　　xûɪɔ　　⊂ ʔɔ́　　xàɴɔ　　(=28)　　*cf.* xûɪxàɴ「団結した; 平らな」
いる　団結した　　いる　平らな
「一致団結する」(001.225)

(58) ⊂ ʔèthîɔ　⊂ ʔèklàɔ　　(=31)　　*cf.* thîklà「明確な」
正確に　　明確に
「きちんと」(I-sen.70)

以下の諸例は、一方の要素に単独では用いられない形態素を含む。

(59) ⊂ hə-　lāɴɔ　⊂ hə-　klɛ̀ɔ　　(=38)　　*cf.* lāɴklɛ̀「場所」
1pl　場所　　1pl　?
「私達の場所 (故郷)」(IV-07.19)

(60) ⊂ ʔə-　thìɔ　⊂ ʔə-　θòɔ　　(=40)　　*cf.* thìθò「友人」
3sg　?　　3sg　友人
「彼の友人」(II-10.5)

(61) ⊂ thî　ɣāiɴɔ　⊂ khāɴ　ɣāiɴɔ　　(=41)　　*cf.* thîkhāɴ「国」
?　事柄　　国　　事柄
「国情」(V-03.57)

(62) ⊂ lɔ̀　　phíɔ　　⊂ thàiɴ　phíɔ　　(=43)　　*cf.* lɔ̀thàiɴ「話す」
語る　(裨益)　　?　　(裨益)
「話してやる」(017.24)

(63) ⊂ nī　　ɣāiɴɔ　⊂ nī　　bjàɔ　　(=44)　　*cf.* ɣāiɴbjà「力」
得る　力　　得る　?
「元気が出る」(001.1389)

(64) ⊂ jō　　thîɔ　　⊂ jō　　chàɔ　　(=46)　　*cf.* thîchà「確実な」
見る　確かな　　見る　?
「確かめる」(001.1466)

(65) ⊂ ʔə-　θə́ɯɴ⊃　⊂ ʔə-　θà⊃　(=49)　*cf.* θə́ɯɴθà「心」
3sg　?　3sg　心
「彼の心」(I-04.10)

(66) ⊂ θə́ɯɴ　ɣì⊃　⊂ θà　ʔwà⊃　*cf.* θə́ɯɴθà「心」; ɣìʔwà「清らかな」
?　良い　心　白い
「心が清らかな」(I-04.10)

このような類似要素反復は、対応する二音節語を分解することによって作られると考えることはできるだろうか。このように考えることには二つの利点があるように見える。

第一は配列順序の問題である。類似要素反復の配列順序は、最初に述べたとおり、基本的には自由である。例えば、

(67) ⊂ lɔ̀thàiɴ⊃　⊂ kàɴkà⊃
話す　噂する
「お喋りする」(II-02.14)

は、順序を逆にして次のようにしてもよい。

(68) ⊂ kàɴkà⊃　⊂ lɔ̀thàiɴ⊃
噂する　話す
「お喋りする」(001.1708)

ところが、順序が自由ではない場合がある。例えば次の例は前部要素と後部要素を逆にすることができない。

(69) ⊂ ʔə-　mʊ̄⊃　⊂ ʔə-　phā⊃
3sg　母　3sg　父
「彼の母と父」(IV-01.11)

(70) * ⊂ ʔə-　phā⊃　⊂ ʔə-　mʊ̄⊃
3sg　父　3sg　母

この原因の一つとして考えられるのは、mʊ̄phā「両親」という二音節語の存在である。筆者が知り得る限りでは、対応する二音節語が存在する場合、類似要素反復はその二音節語に対応する順序で要素を並べなければならない。このことを説明するためには、二音節語を分解して類似形反復を作ったと考えると便利に見える。

第二は、単独では使われない形態素を含む反復の問題である。

(71) ⊂ hə-　thî⊃　⊂ hə-　khāɴ⊃　(=35)
1pl　?　1pl　国
「私達の国」(IV-07.19)

この類似要素反復には、対応する thîkhāɴ「国」という二音節名詞がある。この二音節語を分解してこの類似要素反復が作られたと考えれば、意味を持たない要素 thî の由来が説明しやすくなるように見える。

このように、対応する二音節語を統語レベルで分解して類似要素反復を作るという操作を考えることは可能だろうか。結論を先に言うと、この考え方には無理がある。その理由は二つある。

第一に、二音節語は分解することができないのが普通だからである。例えば、ɣàʊphôʊɴ「腹」という単語がある。この語の最初の音節は単独でも「腹」という意味を持つ。一方、2 番目の音節は何の意味も持たない。これを次のように二つに分解することはできない。

(72) * ⊂ ʔə-　ɣàʊ⊃　⊂ ʔə-　phôʊɴ⊃
　　3sg　腹　　3sg　?

第二に、単独では使われない形態素を含む類似要素反復の中には、対応する二音節語を持たない場合があるからである。例えば次の例を見ていただきたい。

(73) ⊂ ʔɔ́　<u>ɕɯ́</u> ⊃　⊂ ʔɔ́　<u>bà</u> ⊃　(=47)
　　いる　平和な　いる　?
　「平和な」(001.225)

(74) ⊂ θə́ɯɴ　<u>ʔwí</u> ⊃　⊂ θà　<u>thó</u> ⊃　(=52)
　　心?　楽しい　心　?
　「嬉しい」(017.9)

(75) ⊂ pə-　<u>mɛ́</u> ⊃　⊂ pə-　<u>θwâ</u> ⊃　(=39)
　　1pl　歯　1pl　?
　「私達の歯」(001.2006)

(76) ⊂ mà　<u>chái</u> ⊃　⊂ mà　<u>nà</u> ⊃　(=45)
　　作る　田　作る　?
　「稲作を行う」(001.2495)

(77) ⊂ ʔá　<u>mèiɴ</u> ⊃　⊂ ʔá　<u>cèiɴ</u> ⊃　(=48)
　　多い　～種類　多い　?
　「多くの種類」(III-07.12)

(73) の下線部に対応する動詞 *ɕɯ́bà、(74) の下線部に対応する動詞 *ʔwíthó、(75) の下線部に対応する名詞 *mɛ́θwâ、(76) の下線部に対応する名詞 *cháinà、(77) の下線部に対応する助数名詞 *mèiɴcèiɴ は存在しない。したがって、これらの例の単独では使われない形態素についての説明は依然として不可能である。

したがって、本論文では、二音節語を統語レベルで分解して類似要素反復を作るという操作を認めない。それでは上で見た二つの問題、すなわち、配列順序の問題と単独では使われない形態素の問題は、どのように解決したら良いだろうか。

配列順序の問題については、類似要素反復を作るとき、もし対応する二音節語があるならば、それを参照して配列順序が決定されるのだと考えれば良い。

次に、単独では使われない形態素を含む類似要素反復については次のように考える。(71) の thî や (73) の bà のようなものは、統語レベルにおいて、通常の名詞や動詞と同じよ

うに振る舞うので、語と見なさざるを得ないだろう。筆者はこれらを意味を持たない語であると考える。これらは辞書 (lexicon) に単独の項目として掲載することにする。そして辞書には、これらが成句的な類似要素反復でのみ使われる語であるという記述を行っておき、ペアになる語を記載する。次は辞書における記述の方法の一例である。

(78) thî　名詞。成句的な類似形反復のみに使われる語。khāɴ「国」との組み合わせで、⊂ ... thî ... ⊃ ⊂ ... khāɴ ... ⊃ の順序で用いられる。

(79) bà　動詞。成句的な類似形反復のみに使われる語。ɕúɨ「平和な」との組み合わせで、⊂ ... ɕúɨ ... ⊃ ⊂ ... bà ... ⊃ の順序で用いられる。

(80) chà　動詞。成句的な類似形反復のみに使われる語。thî「確実な」との組み合わせで、⊂ ... thî ... ⊃ ⊂ ... chà ... ⊃ の順序で用いられる。

ところで、上の ⊂ ... ɕúɨ ... ⊃ ⊂ ... bà ... ⊃ からは、繰り返しを用いて、ɕúɨɕúɨbàbà「平和に」という副詞を作ることができる。したがって、第 7 章で述べたように、AABB タイプの副詞は、AB という動詞から作られると考えるよりも、A から作られた AA という副詞と、B から作られた BB という副詞が複合したものだと考えるほうがよい。

29.5　類似要素反復の拡張

基本的に類似要素反復は二つの要素に関わる手続きである。しかし、類似要素反復を繰り返すことによって、より大きな構造体を作ることができる。例えば下の例では、四つの要素が、類似要素反復を 2 度行うことによって配列されている。

(81) ⊂ ⊂ θə́ɯɴ　xwî⊃　⊂ θà　jô⊃ ⊃　⊂ ⊂ máʊ　θə́ɯɴ⊃　⊂ máʊ　θà⊃ ⊃
　　?　軽い　心　易しい　快適な　?　快適な　心

kò　ɣà　dè　ɣòɴ ...
(毎)　～人　(毎')　(継起)
「(祭りで) みな楽しんでから...」(III-11.19)

第IX部

付録

第30章　分析に用いた資料

本論文での分析に用いた資料の一覧をここに掲げておく。以下の資料は筆者によってすべて簡略化した発音記号によって電子化してある。なお、文字資料を電子化したもののすべては、元資料では仏教ポー・カレン文字で書かれている。

1の「筆者が調査等で集めたデータ」は、筆者が調査で集めたデータおよび友人からもらったポー・カレン語の手紙を電子化したものである。

2は、パアンで出版されているポー・カレン語の教科書『ポー・カレン語読本第1課程』に載せられた文章を電子化したものである。

3は、パアンで出版されているポー・カレン語の教科書『ポー・カレン語読本第2課程』に載せられた文章を電子化したものである。

4は、パアンで出版されているポー・カレン語の教科書『ポー・カレン語読本第3課程』に載せられた文章を電子化したものである。

5は、雑誌『若き民族の力』掲載の文章を電子化したものである。この雑誌は、タイに住むビルマ国籍の東部ポー・カレンの人々によって不定期に発行されているポー・カレン語の雑誌である。主にエッセイや短編小説からなる。本論文でデータとして用いたのはこの雑誌の第7号 (1996年12月) である。

6は、雑誌『大学カレン語雑誌』掲載のポー・カレン語東部方言による文章を電子化したものである。この雑誌は、1978年にラングーン大学のカレン学生委員会によって出版された。ビルマ語、スゴー・カレン語、西部ポー・カレン語、東部ポー・カレン語の4言語で書かれた様々な文章を載せている。主にエッセイや短編小説からなる。

本論文では、例文をこれらの資料から引く場合、和訳の後に資料番号を付した。例えば、(007.2) とあれば、資料番号007の2個目の文を指す。あるいは、(IV-04.353) とあれば、資料番号IV-04の353個目の文を指す。例文に資料番号を付したのは筆者自身の便宜のためであるが、このデータ一覧を参照すれば、どのようなジャンルの文章に現れた文であるかの見当がつくだろう。資料番号を付していない例文は、未整理の例文である。

1 筆者が調査等で集めたデータ。

001 — 調査で得た作例、会話の中で耳にした文など様々な用例を電子化し、単語ごとに配列したもの

002 — 調査で得た作例、会話の中で耳にした文など様々な用例を電子化したものの一つ

003 — 調査で得た作例、会話の中で耳にした文など様々な用例を電子化したものの一つ

004 — 調査で得た作例、会話の中で耳にした文など様々な用例を電子化したものの一つ

005 — thwí khâiɴphòɴ　「犬の尻の穴」(調査で採集した民話。1997 年 2 月にパアンで採集)
006 — nò thɔ̌ náiɴ nâ　「口が鼻より高い」(調査で採集した民話。1998 年 2 月にパアンで採集)
007 — 筆者が友人からもらったポー・カレン語の手紙
008 — 筆者が友人からもらったポー・カレン語の手紙
009 — 筆者が友人からもらったポー・カレン語の手紙
010 — 筆者が友人からもらったポー・カレン語の手紙
011 — 筆者が友人からもらったポー・カレン語の手紙
012 — 筆者が友人からもらったポー・カレン語の手紙
013 — 筆者が友人からもらったポー・カレン語の手紙
014 — 筆者が友人からもらったポー・カレン語の手紙
015 — 筆者が友人からもらったポー・カレン語の手紙
016 — 筆者が友人からもらったポー・カレン語の手紙
017 — 筆者が友人からもらったポー・カレン語の手紙
018 — màɴklóɴthàiɴ　「タマリンドの枝」(調査で採集した民話。2000 年 11 月にパアンで採集)
019 — ɕìɕɔ̀ chə̀　「なぞなぞ」(調査で採集した民話。2000 年 11 月にパアンで採集)
020 — dʊ́ báɴ làɴ θà kɛ́　「叩くと若くなる」(調査で採集した民話。2000 年 11 月にパアンで採集)
021 — hə- phʊ́ ʔɔ́　「子供はできるさ」(調査で採集した民話。2000 年 11 月にパアンで採集)
022 — θéiɴ bálɛ̂ káiɴ　「木はなぜ曲がっているの?」(調査で採集した民話。2000 年 11 月にパアンで採集)
023 — màthákòʊɴ　「王子が死んだ話」(調査で採集した民話。2000 年 11 月にパアンで採集)
024 — θàɴkhâ mə̂ɴ thán thàiɴ　「僧が生き返った話」(調査で採集した民話。2000 年 11 月にパアンで採集)
025 — phlòʊɴ bà θàɴkhâ dè phlôʊɴ bà jwà　「仏教徒とキリスト教徒」(調査で採集した民話。2000 年 11 月にパアンで採集)

2 『ポー・カレン語読本第 1 課程』 phlòʊ̀ɴ lái pɔ̄ lə- châɴ

ここから採った資料は次のとおり。これらの資料番号にはローマ数字の I を付す。

I-01 — thwíláiθêiɴ dè klà　「山犬とカラス」(民話)
I-02 — thî ʔəɣāiɴ　「水について」(エッセイ)
I-03 — klà bá lò thʊ́pəɣʊ́ʊ̄ ʔəmā　「フクロウの借金を返さなければならなくなったカラス」(民話)
I-04 — càdìθə̂ɴ dè kəchâɴ　「ライオンと象」(民話)
I-05 — wʊ̂ʊ̄chá bá ʔánchʊ̂ʊ̄ pòɴɲâ bá ʔánxʊ̂ʊ̄　「籾米は搗かなければならない、知識は探求しなければならない」(エッセイ)

I-06 — lì cáɪnkwè lé phā chái phònɴ 「お父さんの田んぼに遊びにいく」（会話形式の読み物）
I-07 — ʔɔ́ chónɴ ʔɔ́khlâɪnɴ ʔəɣāɪnɴ 「健康について」（エッセイ）
I-08 — chərâ ʔá kɛ́ thánɴ nʊ́wá 「先生が多くてしゃもじになってしまった」（ことわざの解説）
I-09 — thwí wūθânɴ dè kəchânɴ 「犬とコブラと象」（民話）
I-10 — pə- təwânɴ ʔəɣāɪnɴ 「私たちの村について」（エッセイ）
I-sen — この読本に載せてある様々な短文を電子化したもの。

3 『ポー・カレン語読本第 2 課程』 phlòùɴ lái pɔ̄ nī chânɴ

ここから採った資料は次のとおり。これらの資料番号にはローマ数字の II を付す。

II-01 — thʊ́ mà chònɴ mənī θí ləphá 「人間を助ける鳥たち」（エッセイ）
II-02 — thʊ́kò dè thʊ́ɕá 「トゥーコー鳥とトゥーシャー鳥」（民話）
II-03 — thîlá 「塩」（エッセイ）
II-04 — θə́ɯɴ ʔánɴ θə́ɯɴ ʔɔ̀ chə̀ ɣɛ̂ kɛ́ thánɴ lé kháɴthài ʔəɣāɪnɴ 「農耕の始まり」（エッセイ）
II-05 — θədánɴ θwí dʊ́ 「うぬぼれの強いエビ」（民話）
II-06 — phlɔ̀θánā 「ゴキブリ」（エッセイ）
II-07 — pə- thîkhānɴ 「私たちの国」（エッセイ）
II-08 — ʔɔ́kí nò phònɴ ʔè chêɪnpràɴ 「口を清潔に保て」（エッセイ）
II-09 — mà khō thánɴ thî 「水をわかす」（エッセイ）
II-10 — lânɴ lànɴ ʔɔ̀ thî cónɴ 「虹」（エッセイ）
II-11 — khlài dè wūɯ 「カメとヘビ」（民話）
II-12 — dɯ̀lâ 「ハエ」（エッセイ）
II-13 — chə- khléɪnɴ khlàʊ nī bá chí bá ʔà 「伝染するかぜ」（エッセイ）
II-14 — ʔánɴ lé ʔə- ʔwí nɔ́ 「おいしいものを食べよ」（民話）

4 『ポー・カレン語読本第 3 課程』 phlòùɴ lái pɔ̄ θə̄ɴ chânɴ

ここから採った資料は次のとおり。これらの資料番号にはローマ数字の III を付す。

III-01 — thà θəwài càʊlé chə̀ ʔəɣāɪnɴ 「磁石の吸引力について」（エッセイ）
III-02 — mà ʔánɴ chái xàʊ ʔəɣāɪnɴ 「農業について」（エッセイ）
III-03 — díθʊ́ɯ dè khîchìphōɴ 「カエルとトラ」（民話）
III-04 — nò thɔ̂ náɪnɴ nâ 「口が鼻より高い」（民話）
III-05 — chə- ʔə́ɯɴ 「雲」（エッセイ）
III-06 — həlmjā kò thánɴ thî 「水を呼んだ猟師」（民話）
III-07 — láipərə̂ɴ 「新聞」（エッセイ）
III-08 — phlòùɴ lái thàibònɴ 「ポー・カレン文字の起源」（エッセイ）
III-09 — phlòùɴ nādèɪnɴ 「カレンの竪琴」（エッセイ）
III-10 — dʊ́ náɪnɴ hə̀ nɔ́ ʔò bá jàʊjánɴ 「目上の人は敬わなければならない」（エッセイ）

III-11 — phlòùɴ néiɴ thánɴ θânɴ　「カレンの正月」（エッセイ）
III-12 — mō phā chə- khlàiɴ bá chônná　「親のことばは聞かなければ」（民話）
III-13 — jáʔɯ́thî　「魚醤」（エッセイ）
III-14 — ʔánɴ bɯ́ɪ θânɴ khɯ́　「初物の米を食べる」（エッセイ）
III-15 — jáphlāthônɴ　「ヤープラートン魚」（民話）
III-16 — wá　「竹」（エッセイ）
III-17 — phlòʊɴ khānɴ kənânɴ　「カレン州について」（エッセイ）

5 『若き民族の力』 chɨ̀ θàbánɴ cɯ́khî　ここから採った資料は次のとおり。これらの資料番号にはローマ数字の IV を付す。

IV-01 — chɨ̀ khânnònɴ ʔəthài chîjɛ̄ phlònɴ　「民族が強固になるための 15ヶ条」（エッセイ）
IV-02 — chə- khlàiɴ khōʊɴtà　「謝辞」（編集後記）
IV-03 — cánɴ mé wɛ̀khɛ̀ chə- jəɯɪɴcàʊ　「眼をしっかり開け。誘惑に負けるなかれ」（エッセイ）
IV-04 — θíjâ ʔɛ́chânɴ lànmā θà mânɴ　「愛を知りそして命を失った」（短編小説）
IV-05 — kɛ́ thánɴ nī θài ʔəkhánthài　「酒のはじまり」（エッセイ）
IV-06 — lə- mwɛ̄ phlòʊɴ θî bá lànmā　「死人ではないが、消え去る運命にある」（エッセイ）
IV-07 — jônwɛ̄ ʔəcá mə- lànjwà　「人生堕ちることを心配して」（エッセイ）
IV-08 — lé ʔò, phí θətài mɯ́phɯ́ láiblài　「書簡：少女たちに警告する」（エッセイ）
IV-09 — chái phɯ́ chā　「農民たち」（エッセイ）
IV-10 — chɨ̀ θàbánɴ cɯ́khî ʔə- chəlɔ̀　「若き民族の力によせて」（序文）

6 『大学カレン語雑誌』 /tɛʔkəθò kəyìɴ mɛ̀ʔgəzíɴ/（ビルマ語による標題）
ここから採った資料は次のとおり。これらの資料番号にはローマ数字の V を付す。

V-01 — plɛ̀tɔ̀ lā chài kō ɣà dè　「みなさん許してください」（短編小説）
V-02 — phlòʊɴ cɯ́lānɴ　「カレンの技術」（エッセイ）
V-03 — təmjânɴ nɔ́ təmjânɴ lānânɴ θí　「奇妙なことは奇妙なのだけど」（短編小説）
V-04 — ʔɔ́ chónɴ lā chài θwíwɔ̀wɔ̀　「＜民族の血＞さん、お元気で」（短編小説）
V-05 — mà ɣàɣònɴ bɯ́ɪ mwɛ̄ bɯ́xā　「米を食いあらすのは害虫だ」（短編小説）
V-06 — phlòʊɴ khānɴ lānklɛ̀ thânɴ ʔá tɛ̀　「鍾乳洞の多いわがカレンの土地」（エッセイ）

第31章　テキスト

この章では、各単語の品詞についての情報を付してポー・カレン語の昔話 4 篇 (資料番号 020, 018, 021, 019) を提示する。この章ではポー・カレン語を次のように示す。

(xx)　lɯ̀　jʊ̄
　　行く;v　(試行);vp
　　行ってみた。

グロスのセミコロンの後に示した v や vp などの略号は、各単語の品詞を表す。助詞については助詞の下位区分を示し、一部の特殊な名詞についても下位区分を示す。下に略号の一覧を掲げる。

助詞以外

n　名詞
v　動詞
a　副詞
i　感嘆詞

助詞

ap　側置助詞
sp　従属節助詞
gp　一般助詞
np　名詞修飾助詞
vp　動詞助詞
av　副助詞
se　文助詞

特殊な名詞

nu　数詞
nc　助数名詞
Ln　場所名詞
an　側置名詞

31.1　テキスト 1「叩くと若くなる」(資料番号 020)

(1) phjāmʉ́ʉ　ɕā　ʔə-　phʊ́mʉ́ʉ　nɔ́
女;n　老いた;v　3sg　娘;n　(題);gp

dàikhâ　dè　lʉ̀ʉlêiɴ　nɔ́
結婚させる;v　(具);ap　詐欺師;n　のだ;av
ある老いた女の娘を [その女が] 詐欺師と結婚させたのだ。

▷ lʉ̀ʉlêiɴ はビルマ語 lùlèiɴ の借用。

(2) dàikhâ　dè　lʉ̀ʉlêiɴ　nɔ́tā(ʉ̀)　|
結婚させる;v　(具);ap　詐欺師;n　(前提);sp

lʉ̀ʉlêiɴ　nɔ́tā　ɕàʊ　dá　lé　ʔə-　lé
詐欺師;n　(題);gp　こする;v　(保持);vp　(強調);np　3sg　棒;n

nī　cʉ́ʉkhʊ́　lə-　kàʊ　jò
ほど;ap　腕;n　一;nu　部分;nc　この;np
詐欺師と結婚させたところ、[あるとき] 詐欺師は腕一つぶんほどある棒をこすっていた。

(3) ɕàʊ　wê　ʔə-　lé　nɔ́ |
こする;v　(強意);vp　3sg　棒;n　(前提);sp

ʔəwê　lɔ̀　lʊ́　wɛ̀　ʔə-　mèiɴɕā　nɔ́
3sg　語る;v　(学習);vp　(備え);vp　3sg　姑;n　のだ;av
こうして棒をこすりながら、彼は姑に入れ知恵をしておいた。

(4) ʔəwê　mèiɴɕā　nɔ́　ʔəwê　pàkɛ́　ʔə-　mâ
3se　姑;n　(題);gp　3se　させる;v　3sg　妻
姑に、彼は妻のふりをさせた。

(5) lé　ʔə-　mâ　nɔ́　ʔəwê　kòkí　dá　wɛ̀
(強調);np　3sg　妻　(題);gp　3se　置く;v　(保持);vp　(備え);vp

lʉ́ʉ(ʉ̀)　dò　phɔ̀ɴ　ʔò
(場);ap　部屋;n　中;Ln　(遠方);np
妻には、部屋の中にいさせた。

(6) ɕàʊ　dá　lé　nɔ́tā(ʉ̀)　|
なでる;v　(保持);vp　棒;v　(前提);sp

cəxwà　phʊ́khwâ　[lì](v1)　[dá](v2)　phɔ̄
王;n　息子;n　行く;v　見る;v　(臨場);av
棒をなでていると、そのとき、王の息子が通りかかってそれを見た。

(7) “nə- mʊ̄ mà chəlɛ̂ ↩
2sg (非現);vp する;v 何;n

nə- lé jò”
2sg 棒;n この;np

bōkənɛ̀
ということだ;se
「お前は何をしようとしているのだ、その棒は」と言った。

(8) “lé jò” lɔ̀ wê
棒;n この;np 語る;v (強意);vp

“phlòʊɴ θà ɕā θí
人;n 年齢;n 老いた;v (類似);gp

[dʊ́](v1) [báɴ ʁàɴ](v2) θà kɛ́(↗)”
殴る;v 若い;v (変化);vp 年;n 可能な;v
「この棒は」彼は答えた。「老いた人も、殴ると若くすることができる」

(9) ʔə- mèiɴɕāmʊ́ʊ́ nɔ́ ʔəwê pàkɛ́ ʔə- mâ
3sg 姑;n (題);gp 3se させる;v 3sg 妻;n
姑には妻のふりをさせた。

(10) ʔə- mâ mɔ̄mɔ̂ nɔ́ kòkí wê lʊ́ʊ́ dò phàɴ ʔo
3sg 妻;n 本当の;v (題);gp 置く;v (強意);vp (場);ap 部屋;n 中;Ln あの;np
本当の妻は部屋の中にかくれさせていた。

(11) ʔəwê thàʊ ʁáɴ ɲâɴ
3se 出す;v (外方);av 知恵;n
彼は悪知恵をしぼったわけだ。

(12) làɴthéwáθà phɔ̄ cəxwà phʊ́ ʔəméjâ nɔ́
つまり;a ちょうど;np 王;n 子供;n 前;Ln (題);gp

ʔə- mâ jò ʔə- θà ɕā(↗) jābò
3sg 妻;n この;np 3sg 年齢;n 老いた;v なのだよ;se
つまり、王の息子の前では彼の妻 [らしき人] は年を取っているわけだ。

(13) “mʊ̄ mwɛ̄ ʁâ” cəxwà phʊ́khwâ lɔ̀
(非現);vp (繋);v (疑);se 王;n 息子;n 語る;v
「本当か？」王の息子は言った。

(14) “<ʔà> mwɛ̄ nâ” lɔ̀ wê
えっ;i (繋);v よ;se 語る;v (強意);vp
「えっ?そうですよ」[詐欺師は] 言った。

(15) “mə-　mwɛ̄　ʁâ　lə-　mwɛ̄　ʁâ |
(非現);vp　(繋);v　(疑);se　(否);vp　(繋);v　(疑);se

nə-　dʊ́　jʊ̄　wá　ní　jɔ̄”
2sg　殴る;v　(試行);vp　(催促);vp　一度;nu+nc　くださいよ;se
「本当かどうか、お前一度殴ってみよ」

▷ ní は、漠然と少ない数を表す語 nāɴ と助数名詞 thí「～ 回」の融合したもので、「一回、一度」を表す。

(16) ʔəwê　mjòɴ　ʁáɴ　nī　ʔə-　mèɪɴɕā　thí(↗)　lɔ̂
3se　引き出す;v　(外方);vp　(引寄);vp　3sg　姑;vp　一気に;a　(断定);av

lɔ̀　wê
語る;v　(強意);vp
彼は姑を [部屋の中へ] 一気に引っぱっていったそうだ。

(17) dài　cáɪɴ　làɴ　wái　lé　ɣéɪɴ　khlôʊɴ　nɔ́ |
(使役);vp　出る;v　(下方);vp　(徹底);vp　(場);ap　家;n　外;Ln　(前提);sp

dài　klí　wái　phlòpài
(使役);vp　走る;v　(徹底);vp　ひたすら;a
[そして姑を] 家の外に出てゆかせ、ひたすら逃げさせた。

(18) ʔəwê　[thàɪɴ](v1)　[dʊ́](v2)　dàɪɴ　khlɔ́　lʊ́ɪ　ʔò
3se　帰る;v　殴る;v　(追加);vp　ござ;n　(場);ap　あちら;n

pàʊpàʊpàʊ　θɔ̄ɴ　thí |
パンパンと;a　三;nu　回;nc

ʔəwê　thàʊ　ʁáɴ　nī　dàɪɴ
3se　出す;v　(外方;vp)　(引寄;vp)　(再度);vp)

“báɴklɔ́ɴ　jābò”
若い;v　なのだよ;se
彼はというと [部屋の中に] 戻って向こう側でござをパンパンパンと 3 回たたいた。[それから] 彼は [本当の妻を] 引っぱり出した。[そして]「ほら若いでしょう」[と言った。]

(19) báɴklɔ́ɴ　thòɴnɔ́θò　nɔ́ |
若い;v　そのように;a　(前提);sp

<pâ>　cəxwà　phʊ́khwâ　ʔáɴkèɪɴ　xwè　təklɛ̀　lɔ̂　jābò
なんと;i　王;n　息子;n　頼む;v　買う;v　その場で;a　(断定);av　なのだよ;se
そのように若くなったので、なんとまあ、王の息子はその場で [棒を] 買うことを申し出た。

▷ ʔáɴkèɪɴ は動詞句を目的語として取ることのできる動詞である。「～ することを申し出る」ことを表す。この場合は xwè を目的語として取っている。

(20) chə- cəxwà θà ɕā ʁáɴ dʉ̀nɔ́
なのだから;se 王;n 年齢;n 老いた;v (変化);vp なのだから;se
[父である] 王が年老いているからだ。

(21) làɴthébáθà
つまり;a

[dʉ́](v1) [báɴ làɴ](v2) kɛ́ phɔ̀phɔ̂nɔ́ |
叩く;v 若い;v (変化);vp 可能な;v それほど;a

mə- [thàiɴ](v1) [[dʉ́](v1) [báɴ làɴ](v2)](v2) báθà
(非現);vp 帰る;v 叩く;v 若い;v (変化);vp (欲求);vp

phā nàɴ thí jī jābò
父;n 少数;nu 度;nc (婉曲);av なのだよ;se
つまり、叩いてそれほど若くできるのなら、[王宮に] 帰ってから父君を叩いて若くしてあげたいと思ったわけだ。

(22) lʉ̀lêiɴ nɔ́ lɔ̀
詐欺師;n (題);gp 語る;v

"kəjāɴ jə- ʔáɴchâ wáθà ʔé"
できれば;a 1sg 売る;v (欲求);vp (否);ap
「私としては、売りたくありません」と詐欺師は言った。

(23) "jə- mâ phjā jò ʔə- θà ʔè ɕā láɴ nɔ́ |
1sg 妻;n もの;n この;np 3sg 年齢;n (条件);sp 老いた;v (変化);vp (題);gp

jə- lé jò(⇑) lɔ̂ ⟵ mə- [$_C$ jə- mà báɴ ʁàɴ θà] "
1sg 棒;n この;np (断定);av (繋);v 1sg (使役);vp 若い;v (変化);vp 年齢;n
「この私の妻が年老いたときには、やはりこの棒によってですから、[妻の] 年齢を若くできるのは」

▷ コピュラ動詞 mwɛ̄ (mɛ̄ あるいは mə- とも発音される) は、後に補文を取って補文内の主張を強調する働きをする。ただしこのような役割を担う mwɛ̄ の一部はほとんど助詞化している可能性もある。以降、このような働きを示す mwɛ̄ の後に現れた補文には [$_C$] を付さない。

(24) "<ʔàʔá> nəwêdá nɔ́ nə- [tàiɴ](V1)
いや;i 2se (題);gp 2sg 作る;v

[θí(↗)](V2) jàʊ" cəxwà phʉ́khwâ lɔ̀
できる;v (完);av 王;n 息子;n 語る;v

"mwɛ̄ lé jə- phā θà ɕā(↗) lə- ɣà jò
(繋);v (強調);np 1sg 父;n 年齢;n 老いた;v 一;nu 人;nc この;np

mwɛ̄ ʔè báɴ làɴ lā tɛ̀ nāɴ thí"
(繋);v (条件);sp 若い;v (変化);vp (願望);vp 非常に;vp 少数;nu 度;nc

bōkənɛ̀
というわけだ;se
「いやいや、お前は [棒を] 自分で作れるだろう」王の息子は言った。「私の年老いた父が若くなってくれればなあ」

(25) thòɴnɔ́θò　nɔ́
そのように;a　(題);gp

“ʔɛ̀　mà　ʔò |　mà(↗)　kənɛ̀”
(条件);sp　取る;v　(条件’);sp　取る;v　よ;se
すると「ほしいなら持っていけばいいよ」[と詐欺師は言った。]

(26) “ɕá　lɛ̂↩　nə-　mə-　mà”
いくら;a　(疑);se　2sg　(非現);vp　取る;v
「いくら取るのか？」[王の息子が言った。]

(27) “θɔ̂ɴphāɴ(↗)　lɔ̌”
三百;nu　(断定);av
「300 チャットです」

(28) thòɴnɔ́θò　lə-　thí　nɔ́tā
そのように;a　一;nu　度;nc　(題);gp

cəxwà　phʊ́khwâ　chê　wái　cì　pjàpjàpjàpjà　tà |
王;n　息子;n　精算する;v　(徹底);vp　金;n　チャリンチャリン;a　(前提);sp

cəxwà　phʊ́khwâ　thàiɴ　nī　wê
王;n　息子;n　帰る;v　(引寄;vp)　(強意);vp

lʊ́ɪ　ʔə-　nʊ̄　wə̀ɴ　ʔēbò
(場);ap　3sg　宮殿;n　中;Ln　のだよ;se
こうして、王の息子はチャリンチャリンと金を払って、[棒を] 持って宮殿へと帰っていったのだ。

▷ chê はビルマ語 /chè/「精算する」の借用。

(29) thàiɴ　nī　lʊ́ɪ　nʊ̄　wə̀ɴ　nɔ́ |
帰る;v　(引寄;vp)　(場);ap　宮殿;n　中;Ln　(前提);sp

ʔə-　phā　kəchā　ʔáɴcà　“nə-　mə-　mà　chəlɛ̂　<phʊ́khwâ>
3sg　父;n　主;n　尋ねる;v　2sg　(非現);vp　する;v　何;n　息子;n

lé　lə-　bòɴ　jò　nî(⇑)nì　jò　lə-　bòɴ”　bōkənɛ̀
棒;n　一;nu　本;nc　この;np　ほど;ap　これ;n　一;nu　本;nc　というわけだ;se
宮殿に帰ると、「何をするつもりか、息子よ。これほどの棒一本で」と父親である主が尋ねたのだ。

(30) “lé　phjā　jò　jā　<pâ>　phlòʊɴ　θà　ɕā　θí
棒;n　もの;n　この;np　ね;gp　父;n　人;n　年齢;n　老いた;v　(類似);gp

[dʊ́](v1)　[báɴ　ʁàɴ](v2)　θà　kɛ́(↗)”
叩く;v　若い;v　(変化);vp　年;v　可能な;v
「この棒はね、お父さん、老いた人も叩けば若くなることができるんだ」

(31) “<ʔà>　mə-　mwɛ̄　ʁâ　<phʊ́khwâ>”
おお;i　(非現);vp　(繋);v　(疑);se　息子;n
「おお、本当か、息子よ」

(32) “mwɛ̄　<pâ>
(繋);v　父;n

jə-　dá　wá　mɔ̄mɔ̂”
1sg　見える;v　(不抗);vp　本当に;a

nɔ́θò　jī̱　jābò ↩　ʔəwê　lɔ̀
このように;a　(婉曲);av　なのだよ;se　3se　語る;v
「本当です、お父さん。確かに見たのですから」かくのごとくだ、彼が言ったのは。

(33) “ʔəkhōɴthò　nɔ́tā　jə-　dá　mɔ̄mɔ̂　<pâ>”　lɔ̀　wê
効能;n　(題);gp　1sg　見える;v　本当に;a　父;n　語る;v　(強意);vp
「効能は私が確かに見たのですから、お父さん」彼は言った。

(34) “ʔè　dá　wá　wò | ”　ʔə-　phā　lɔ̀
(条件);sp　見える;v　(不抗);vp　(条件');sp　3sg　父;n　語る;v

“kèkhó　nɔ́　báchâɪɴlé(⇑)　phlòʊɴ　θà　ɕā　nɔ́
明日;n　(題);gp　関して;ap　人;n　年齢;n　老いた;v　(題);gp

[cáɪɴ](v1)　[cɔ̀ɲâ](v2)　wá　kò(↗)　ɣà　dè　jābò”
歩く;v　宣伝する;v　(催促);vp　毎;nu　人;nc　毎';nu　なのだよ;se
「見たのなら、」父は言った。「明日、年老いた人に対して、すべての人に歩いて知らせようじゃないか」

▹ cɔ̀ɲâ はビルマ語 /cɔ̀ɲà/ の借用。

(35) <pâ>　thòɴnɔ́θò　nɔ́
ああ;i　そのように;a　(題);gp

[cáɪɴ](v1)　[cɔ̀ɲâ](v2)　θɛ̀mjà　nɔ́ |
歩く;v　宣伝する;v　一体全体;av　(前提);sp

hə-　[lɔ̀](V1)　[θí](V2)　lə̀ɴ　ʔé
1pl　語る;v　できる;v　もはや;av　(否);ap
ああ、こうして知らせて歩いたところ、とんでもないことになった。

(36) bálənɔ̀nɔ̀　ɣɛ̂　dè　nʊ́thò
一部;n　来る;v　(具);ap　杖;n
ある者は杖をついてやってきた。

(37) bákənɔ̀nɔ̀　[ɣɛ̂](v1)　[tháʊ](v2)　dè　láiɴ
一部;n　来る;v　乗る;v　(具);ap　車;n
ある者は牛車に乗ってやってきた。

(38) phlòʊɴ　θà　ɕā　jābò
人;n　年齢;n　老いた;v　なのだよ;se
そりゃ老人だからね。

(39) bánɴ　ʁàɴ　wáθà　dʉ̀ɪ
若い;v　(変化);vp　(欲求);vp　なのだから;se
若くなりたいだろうよ。

(40) dè　nʊ́thò　ʔɔ́ |　dè　láiɴ　ʔɔ́ |
(具);ap　杖;n　いる;v　(具);ap　車;n　いる;v

ʔɔ́　dè　chəlɛ̂　kò(↗)　mèiɴ　kənɛ̀
いる;v　(具);ap　何;n　毎;np　種;nc　よ;se
杖で来るのもいれば、牛車で来るのもいる、それこそあらゆる方法でやってきた。

(41) thònnɔ́θò　nɔ́　“kòʊɴ(↗)　jàʊ　ʁà”
そのように;a　(題);gp　集まる;v　(完);av　(疑);se
そこで「集まったか？」[と王は言った。]

(42) “kòʊɴ(↗)　jàʊ”
集まる;v　(完);av
「集まりました」

(43) “ʔè　kòʊɴ |”　cəxwà　lɔ̀
(条件);sp　集まる;v　王;n　語る;v

“jə-　bá　dʊ́　wī.
1sg　(当為);vp　叩く;v　(先行);vp

jə-　dʊ́　ʔè　ɣòɴ　ʁɔ̂　ʔò |
1sg　叩く;v　(条件);sp　終わる;v　(対比);gp　(題);gp

nəθí　dʊ́　ʁàiɴ　θâ　kò(↗)　ɣà　dè’
2pl　叩く;v　(追加);vp　(再帰);vp　毎;np　人;nc　毎’;np
「集まったなら」王が言った。「私が最初にやる。私が終わったら、お前達がみなやりなさい」

(44) châ　làɴ　ʔəmêiɴ　bê　nɔ́　θò　jābò
下す;v　(下方);vp　命令;n　(比定);ap　それ;n　(比定’);ap　なのだよ;se
そのように、命令を下したというわけだ。

▷ châ はビルマ語 /châ/ の借用。ʔəmêiɴ はビルマ語 /ʔǎmêiɴ/ の借用。

(45) thòɴnɔ́θò　　nɔ́
そのように;a　(題);gp

“ʔè　　kòʊɴ　　ʔò |　　jə-　　mə-　　dʊ́　　wī　　xɔ̄”
(条件);sp　集まる;v　(条件’);sp　1sg　(非現);vp　叩く;v　(先行);vp　よ;se
「みな集まったなら、私が最初に叩くぞ」

(46) <ʁūŋjā(↗)bò>　ʔəlɔcóɴ　nɔ́　　θà　　ɕā　　myâ　　nɔ́ |
何と;i　民衆;n　(題);gp　年齢;n　老いた;v　大変;av　(前提);sp

[lɔ̀](v1)　θí　　[θí](v2)　ʔé
語る;v　(類似);gp　できる;v　(否);ap
まったくもって、一方の民衆達は、そりゃ年老いていたものだから、[来たときの苦労は] 語るに尽くせぬほどだ。

(47) bá　　tháʊ　　dè　　láiɴ
(当為);vp　乗る;v　(具);ap　車;n
牛車で来たりしなければならない。

(48) [　[ɣɛ̂](v1)　[cáiɴ](v2)](V1)　[thòɴ](V2)　ʔé
来る;v　歩く;v　着く;v　(否);ap
歩いて来たら来られるわけがない。

(49) thòɴnɔ́θò　　lə-　　thí　　nɔ́
そのように;a　一;nu　度;nc　(題);gp

dʊ́　　ʁɔ̂　　jābò
叩く;v　(対比);gp　なのだよ;se
こうして、[まず王を] 叩くことになったわけだ。

(50) ʔə-　phʊ́　　dʊ́　　ɕàʊ　　pàʊpàʊpàʊ　　θə̄ɴ　　thí　　nɔ́ |
3sg　子供;n　叩く;v　(無信);vp　バシッバシッバシッ;a　三;nu　度;nc　(前提);sp

cəxwà　khwàiɴdàiɴ
王;n　死ぬ;v
息子がバシッバシッバシッと３回叩くと、王は息絶えてしまった。

(51) phjā　[$_R$ ɣɛ̂　　dè　　láiɴ]　θɛ̀　　mʊ̄khó
もの;n　来る;v　(具);ap　車;n　(複);np　さっき;n

[mà](V1)　láiɴ　[khlàu](V2)　nāɴ(⇑)　ɣà　　ʔé
取る;v　車;n　暇な;v　少数;nu　人;nc　(否);ap
先ほど牛車で来た老人たちは、誰一人として牛車に乗り込む暇などなかった。

(52) [[thàiɴ](v1)　[cáiɴ(v2)]　dàiɴ](V1)　thòɴ(V2)　pìpì
　　帰る;v　歩く;v　(再度);vp　着く;v　全部;a
全員、自分の足で帰ることができたそうな。

31.2　テキスト 2「タマリンドの枝」(資料番号 018)

(1) <kɛ́>　phjākhwâ　ʔɔ́　lə-　ɣà
　さて;i　男;n　いる;v　一;nu　人;nc
さて、男が一人いた。

(2) phjākhwâ　lə-　ɣà　nɔ́tā(介)
男;n　一;nu　人;nc　(題);gp

chə-　phàɴ　ʁáɴ |　chə-　phàɴ　ʁáɴ |
CHə　明るい;v　(変化);vp　CHə　明るい;v　(変化);vp

jʊ̄　tháɴ　màɴklóɴ　thàiɴ　lòɴ　nɔ́ |
見る;v　(上方);vp　タマリンド;n　枝;n　上;Ln　(前提);sp

phjāphʊ̂ɪ　ɕā　ʁɔ́　dá　tā |
爺さん;n　老いた;v　(題);gp　見える;v　(前提);sp

“mɛ̄　phʊ́θá　phjā　nɔ́
(繋);v　独身男;n　もの;n　(題);gp

ʔə-　chəɲâɴ　ʔɔ́　mâɴ(↗)　jàʊ”　lɔ̀　wê
3sg　智恵;n　ある;v　確かな;v　(完);av　語る;v　(強意);vp
その男は、夜が明けるたびにタマリンドの枝を [思慮深そうに] 見上げていたので、ある年輩の男性がそれを見て、「この独身男が智恵のあるのは確かだ」と言った。

▷ mâɴ はビルマ語 /hmàɴ/「正しい」の借用。

(3) “dē　jə-　phʊ́mʊ́ɪ　nɔ́　jə-　mə-　dàikhâ　ní”
(具);ap　1sg　娘;n　(題);gp　1sg　(非現);vp　結婚させる;v　一度;nu+nc
わしの娘と結婚させようではないか。

(4) léjái　ʔəwê　dàikhâ　wái　wê　jābò
しばらくして;a　3se　結婚させる;v　(徹底);vp　(強意);vp　なのだよ;se
しばらくたって、彼は [その男と娘を] 結婚させた。

(5) dàikhâ　wê　θɛ̀ɣòɴ　nɔ́ |
結婚させる;v　(強意);vp　(前提);sp　(題);gp

lé　chəphàɴ　phjā　phʊ́θá　nɔ́
(場);ap　夜明け;n　もの;n　独身男;n　(題);gp

jʊ̄　màɴklɑ́ɴ　thàiɴ　lòɴ　nɔ́ |
見る;v　タマリンド;n　枝;n　上;n　(前提);sp

mwɛ̄　ɲâɴ　chəlɛ̂　chəlɛ̂　nɔ́　θíjâ　ʔé
(繋);v　知恵;n　何;n　何;n　(題);gp　知る;v　(否);ap
結婚させてからも、夜明けになると独身男はタマリンドの枝を見上げていたので、どのような智恵があるのだろうか [と思った]。

▷ θíjâ ʔé は「～だろうか」「～かしら」という意味を表す。

(6) phjāphʊ̄ɪ　ɕā　thîɴ　nɔ́
おじいさん;n　老いた;v　思う;v　(題);gp

[$_C$ mwɛ̄　ʔə-　ɲâɴ　phàdʊ́]
(繋);v　3sg　知恵;n　大きい;v
じいさんは [婿が] 智恵者だと思っていた。

▷ thîɴ はビルマ語 /thìɴ/「考える」の借用。理由もなくふと考える場合には、この thîɴ を用いる場合が多い。

(7) léjái　phjāphʊ̄ɪ　ɕā　nɔ́
しばらくして;a　おじいさん;n　老いた;v　(題);gp

ʔáɴcà　ʔə-　má　wɔ̄
尋ねる;v　3sg　婿;n　(臨場);av
しばらくして、じいさんは婿に尋ねた。

(8) “mwɛ̄　chəlɛ̂　<nāɴ　wà> ↩
(繋);v　何;n　娘;n　夫;n

chə-　phàɴ　ʁáɴ |　chə-　phàɴ　ʁáɴ |
CHə　明るい;v　(変化);vp　CHə　明るい;v　(変化);vp

nə-　jʊ̄　màɴklóɴ　thàiɴ　lòɴ　nɔ́”
2sg　見る;v　タマリンド;n　枝;n　上;Ln　(題);gp
娘の夫よ、なぜだ、お前が夜が明けるとタマリンドの枝を見上げるのは?

(9) <pápàpà>　ʔəwê　lɔ̀　wêdá　mwɛ̄　cābò
なんとまあ;i　3se　話;v す　(強意);vp　(繋);v　このように;a
なんとまあ、婿はこのように答えた。

(10) “màɴklóɴ　thàiɴ　phjā　nɔ́　nɛ̂
タマリンド;n　枝;n　もの;n　あの;np　～はね;gp

mwɛ̄　ʔè　tàiɴ　ɕàʊ　thóɴ　ní |
(繋);v　(条件);sp　作る;v　(無信);vp　コマ;n　一度;nu+nc

mʊ̄　ɣánphʊ̀ʊ　ɣáɣè(↗)”
(非現);vp　鳴る;v　かなり;a
あのタマリンドの枝ですがね、もしコマを作ったらずいぶんといい音がするだろうなあ。

31.3　テキスト 3「子供はできるさ」(資料番号 021)

(1) <kɛ́>　phjāmʊ́ʊ　ɕā　dè　ʔə-　wà　lə-　ɣà
さて;i　女;n　老いた;v　(列挙);np　3sg　夫;n　一;nu　人;nc

dè　ʔə-　phʊ́　lə-　ɣà　kənɛ̀
(列挙);np　3sg　子供;n　一;nu　人;nc　だよ;se
さて、中年女とその夫、それからその子供の話だ。

(2) lɔ̀　wê　dòʊɴ　təwâɴ　wə̀ɴ　nɔ́
語る;v　(強意);vp　町;n　村;n　中;Ln　(題);gp

lɔ̀　wê　chə-　ɕáiɕáʊ
語る;v　(強意);vp　CHə　混乱した
[あるとき、ある] 地方が混乱したそうだ。

(3) chə-　bá　chəcàʊchəchâ
CHə　ぶつかる;v　病気;n
病気がはやったのだ。

(4) [ʔɔ́](V1)　dòʊɴ　təwâɴ　wə̀ɴ　[bə́ɯɴ](V2)　lə̀ɴ　ʔé
いる;v　町;n　村;n　中;Ln　勇気がある;v　もはや;av　(否);ap
もはや [その] 地方に住んでいる勇気はない。

(5) lɔ̀　wè　“mə-　bá　cáiɴɣà　wái　jābò”
語る;v　(強意);vp　(非現);vp　(当為);vp　逃げる;v　(徹底);vp　なのだよ;se
「逃げなければならないな」と言った。

(6) dòʊɴ　təwâɴ　wə̀ɴ　nɔ́　həmənī　lə-　nì　nì
町;n　村;n　中;Ln　(題);gp　人間;n　一;nu　日;nc　日;nc

[θî](V1)　[xwè](V2)　nɔ́ |　xwè　nɔ́　jʊ̄　lɔ̂
死ぬ;v　満ちる;v　(前提);sp　満ちる;v　のだ;av　(婉曲);av　(断定);av
町や村の中では毎日毎日、人が死んであふれて、[死体で] 満ちた。

(7) ʔəθíwê　lɔ̀　wóθà |　thəmə̂ɴwà　nɔ́　bánòbánā　nɔ́ |
3pe　語る;v　(相互);vp　夫婦;n　(題);gp　同意する;v　(前提);sp

lànthébáθà bóɴ nī chəbáinchəbóɴ |
つまり;a 包む;v (努力);v 荷物;n

cáiɴ(介)ɣà wái wê lɔ̂ jābò
逃げる;v (徹底);vp (強意);vp (断定);av なのだよ;se
彼らは、そこで、話し合い、夫婦ふたりとも同意したので、結局、荷物をまとめて逃げ出した。

(8) cáiɴɣà wái wê nɔ́ |
逃げる;v (徹底);vp (強意);vp (前提);sp

cáiɴɣà ɕàʊ ləthí lɔ̂
逃げる;v (無信);vp ひたすら;a (断定);av
逃げ出して、そして、ひたすら逃げ続けた。

(9) lànthébáθà dá dòʊɴ təwânɴ nāɴ phlóʊɴ ʔé
結局;a 見つける;v 町;n 村;n 少数;nu 個;nc (否);ap
結果、町や村は一つも見つからなかった。

(10) θéiɴ phàdʊ́ mèiɴláθôɴklà pìpì lɔ̂ lɔ̀ wê
木;n 大きな;v ジャングル;n ばかり;a (断定);av 語る;v (強意);vp
大きな木、そしてジャングルばかりだったそうだ。

(11) jáijáiʁánɴ chó wè ʔə- phʊ́
しばらくすると;a 持ち上げる;v (強意);gp 3sg 子供;n

kɛ́ lə- ʔé
可能な;v もはや;av (否);ap
やがて、子供を抱くことができなくなった。

(12) phjā ʔəphʊ̂ʊ ɕā nɔ́
もの;n おじいさん;n 老いた;v (題);gp

chó ʔə- phʊ́ lə- kɛ́ wá nɔ́ |
持ち上げる;v 3sg 子供;n (否);vp 可能な;v (否');vp (継起);sp

ʔə- mâ chó
3sg 妻;n 持ち上げる;v
男が子供を抱けないので、妻が抱いた。

(13) ʔə- mâ chó ɣòɴ nɔ́ |
3sg 妻;n 持ち上げる;v (前提);sp (題);gp

ʔəwê chó kədà |
3se 持ち上げる;v (逆);vp

chó kədà dàiɴ kɛ́ lə- ʔé
持ち上げる;v (逆);vp (再度);vp 可能な;v もはや;av (否);ap
妻が抱き終えると、彼が再び抱こうとしたが、もはや抱くことはできなかった。

(14) <ʔɯ̄jābò>　khlòthɔ̄　wái　pōʊɴ
なんと;i　置いていく;v　(徹底);vp　(意外);av
[そこで] なんと [子供を] 置き去りにした。

(15) ʔə-　mâ　lɔ̀　“phʊ́θá　lə-　ɣà　ʁàwɔ̀(↗) ”
3sg　妻;n　語る;v　子供;n　一;nu　人;nc　～は?;ge
妻は言った、「子供はどうするの？」

(16) “<hà>　phʊ́θá.
えっ;i　子供;n

ʔəkwà　ʔɔ́　ʔé　<phlòʊɴmʊ́ɯ　ɕā>.
問題;n　ある;v　(否);ap　女;n　老いた

hə-　bá　cáiɴ　chəjái.
1pl　(当為);vp　歩く;v　遠く;n

mwɛ̄　nə̀　dè　jə̀　ʔè　ʔɔ́　nɔ́ |
(繋);v　2SG　(列挙);np　1SG　(条件);sp　いる;v　(題);gp

hə-　phʊ́　ʔɔ́(↗)”　ʔəwê　lɔ̀
1pl　子供;n　いる;v　3se　語る;v
「子供？問題ないさ、妻よ。我々は遠くまで行かなければならないんだ。お前と俺さえいれば、子供はできるからな」と彼は言った。

31.4　テキスト 4「なぞなぞ」(資料番号 019)

(1) lʊ́ɯdáʔò　chəxwà　ʔɔ́　lə-　ɣà　jā(↗)
昔;a　王;n　いる;v　一;nu　人;nc　なのだよ;se
昔、王が一人いた。

▹ 「王」は chəxwà とも cəxwà とも発音される。おそらくシャン語からの借用。cf. ビルマ語 /sɔ̀bwá/

(2) phlòʊɴ　ɕìɕɔ̀　chə̀　nɔ́ |
人;n　なぞかけする;v　CHə　(前提);sp

ʔəwê　[phà](V1)　[bá](V2)　pìpì
3se　当てる;v　当たる;v　全部;a
人がなぞなぞを出すと、彼はすべて正しく当てることができた。

(3) cānbò　ʔəwê　nɔ́
だから;a　3se　(題);gp

nɛ̀ʔánɴ　ʁànɴ　θà　nɔ́ʔò |
信じる;v　(内方);vp　(再帰);vp　(前提);sp

thōɴ　ʔə-　thîkhāɴ　wònɴ　nɔ́
(場);ap　3sg　国;n　中;Ln　(題);gp

phlòʊɴ　[$_R$ [ɕìɕɔ̀](V1)　chò　[bá](V2)　]
人;n　なぞかけする;v　CHə　当たる;v

ʔè　ʔɔ́　jī　ʔò　nɔ́ |
(条件);sp　いる;v　(婉曲);av　(条件');sp　(題);gp

ʔəwê　mə-　ʔánthà
3se　(非現);vp　賭ける;v
だから彼は自信があったので、もし彼の国になぞなぞのうまい人間がいるならば、賭けをすることにした。

(4) chəxwà　nɔ́　mə-　ʔánthà　ləmə̂ɴ
王;n　(題);gp　(非現);vp　賭ける;v　千;nu
王は 1000 チャット賭ける。

(5) phlòʊɴ　nɔ́　ləphàɴ　lɔ̂　θí
人;n　(題);gp　百;nu　(断定);av　(類似);gp

ʔəwê　[ʔánthà](V1)　[bə́ɯɪɴ](↗)(V2)
3se　賭ける;v　勇気がある;v
相手は 100 チャットだけだが、王は賭けをする勇気がある。

(6) phjā　ʔɔ́　lə-　ɣà　nɔ́　jā
もの;n　いる;v　一;nu　人;nc　のだ;av　なのだよ;se
ある男がいた。

(7) ʔəwê　mə-　ɕìɕɔ̀　wáθà　chəxwà　nɔ́
3se　(非現);vp　なぞかけする;v　(欲求);vp　王;n　(題);gp

nàɴ　ní
少数;nu　度;nc
彼は王になぞなぞを出してみたかった。

(8) chəxwà　nɔ́　[ɕìɕɔ̀](V1)　[bə́ɯɪɴ(↗)](V2)　wê　jābò
王;n　(題);gp　なぞかけする;v　勇気がある;v　(強意);vp　なのだよ;se
王は応じる勇気があった。

(9) chəxwà　nɔ́　ləmə̂ɴ　θí
王;n　(題);gp　千;nu　(類似);gp

chəxwà　[thàʊ　lánɴ](V1)　bə́ɯɴ(↗)(V2)
王;n　出す;v　(外方);vp　勇気がある;v
王は 1000 チャットだが、それでも出す勇気があった。

(10) phlòʊɴ　lɯ́ɯ　ʔò　nɔ́　ləphànɴ　lɔ̀
人;n　(場);ap　あそこ;n　(題);gp　百:nu　(断定);av
相手はたった 100 チャットである。

(11) “<ʔé>　ʔè　mwɛ̄　cājò |
さあ;i　(条件);sp　(繋);v　このような;a

lì　lánɴ　wê　lɯ́ɯ　chəxwà　ʔɔ́　ʔò　jābò”
行く;v　(上方);vp　(強意);vp　(場);ap　王;n　ところ;Ln　(遠方);np　なのだよ;se

lɔ̀　ʁánɴ　wê　nɔ́　jābò
語る;v　(完成);vp　(強意);vp　のだ;av　なのだよ;se
「さあ、それでは王様のところに行こうではないか」と言った。[そして王のところへと向かった]。

(12) “lémwɛ̄bò　<chəxwà> ”　lɔ̀　wê
このような;a　王;n　語る;v　(強意);vp
「こういうなぞなぞです、王様」と言った。

(13) “lɯ́ɯ(⇑)　ʔəwī　dáʔò”　lɔ̀　wê　“chə-　ʔɔ́　lə-　dɯ̀ɯ |
(場);ap　以前;n　(過去);np　語る;v　(強意);vp　CHə　いる;v　一;nu　匹;nc

ʔə-　mī　ʔɔ́　nī　bòɴ |
3sg　尻尾;n　ある;v　二;nu　本;nc

wà　nî　bòɴ　láʊ(↗).
震える;v　二;nu　本;nc　両方;np

mwɛ̄　chənɔ́　lɛ̂”
(繋);v　何;n　(疑);se
「昔、」彼は言った「こういう生き物がいました。しっぽが 2 本あって、2 本とも震えている。何でしょう」

(14) <pâ>　chəxwà　nɔ́　[phà](V1)　lə-　mèiɴ　mèiɴ　[bá](V2)　ʔé
ああ;i　王;n　(題);gp　当てる;v　一;nu　種類;nc　種類;nc　当たる;v　(否);ap
ああなんと、王が何かを答えても当たらない。

(15) [phà(↗)](V1)　lə-　mèiɴ　mèiɴ　[bá](V2)　ʔé
当てる;v　一;nu　種類;nc　種類;nc　当たる;v　(否);ap
やはり何かを答えても当たらない。

(16) “mwɛ̄　dàɴlāiɴ　ʁâ”
(繋);v　ヤモリ;n　(疑);se
「ヤモリか？」

(17) “mwɛ̄　ʔé”
(繋);v　(否);ap
「違います」

(18) “mwɛ̄　khàʊ　ʁâ”
(繋);v　オオトカゲ;n　(疑);se
「オオトカゲか？」

(19) “mwɛ̄　ʔé”
(繋);v　(否);ap
「違います」

(20) “mwɛ̄　tɔ̀tɛ̀　ʁâ”
(繋);v　トッケー;n　(疑);se
「トッケーか？」

(21) “bá　ʔé”
当たる　(否);ap
「間違っています」

(22) phà(↗)　lə-　mèiɴ　mèiɴ　nɛ̂
当てる;v　一;nu　種類;nc　種類;nc　よ;se
[**王は**] **あれこれと答えてみた。**

(23) bá　ʔé
当たる;v　(否);ap
当たらない。

(24) “<kɛ́　chəxwà>　nə-　[phà](V1)　[bá](↗)(V2)　ʁâ”
さあ;i　王;n　2sg　当てる;v　当たる;v　(疑);se
「さあ王様、当てることはできますか？」

(25) “[phà](V1)　[bá](V2)　ʔé”
当てる;v　当たる;v　(否);ap
「当てられない」

(26) “nə-　[phà](V1)　lə-　[bá](V2)　wá　ʔò |
2sg　当てる;v　(否);vp　当たる;v　(否’);vp　(条件);sp

nə-　pháichâɴ　ləmə̂ɴ　nɔ́
2sg　金;n　千;nu　(題);gp

jə-　ʔáɴ　wái　jàʊ　jābò.
1sg　食う;v　(徹底);vp　(完);av　なのだよ;se

chə-　nə-　[phà](V1)　lə-　[bá](V2)　dʉ̀”
CHə　2sg　当てる;v　(否);vp　当たる;v　なのだから;se
「王様が当てることができないのなら、王様のお金 1000 チャットは私がいただきます。当てることができなかったわけですから」

▷ pháichân はビルマ語 paiʔshàn の借用。固有の語彙では cì と言う (元来は「銀」の意味) が、最近はあまり使わないようである。

(27) <kɛ́>　chəxwà　nɔ́　ʔánɴcà　nàiɴ　ʔà　jābò
さて;i　王;n　(題);gp　尋ねる;v　(返答);vp　3SG　なのだよ;se
さて、王は彼に尋ね返した。

(28) “<kɛ́>　ʔè　mwɛ̄　cājòθò |
さて;i　(条件);sp　(繋);v　このような;a

jà　nɔ́　jə-　[phà](V1)　[bá](V2)　ʔé.
1SG　(題);gp　1sg　当てる;v　当たる;v　(否);ap

phà　nàiɴ　nà̀　ʁə́　nàɴ　thí　dɔ̀”
当てる;v　(返答);vp　2SG　その;np　少数;nu　度;nc　(別個);gp
「さて、この様子では、私は当てることができない。今度はお前が答えを言ってみよ」

(29) ʔəwê　ʔánɴcà　nàiɴ　phjā　[$_R$ ɕìɕɔ̀　chà]　chā　nɔ́ |
3se　尋ねる;v　(返答);vp　もの;n　なぞかけする;v　CHə　主;n　(題);gp

“jà　θí　khɔ̂　jə-　[phà](V1)　[bá](V2)
1SG　(類似);gp　(対比);gp　1sg　当てる;v　当たる;v

ʁə́　kɛ́　ʔé　jʉ̄”　ʔəwê　lɔ̀
(題);gp　可能な;v　(否);ap　(婉曲);av　3se　語る;v
王がなぞなぞを出した男に尋ねると、「私も答えが分からないのです」と言った。

(30) [phà](V1)　lə-　[bá](V2)　wá　ʔò |
当てる;v　(否);vp　当たる;v　(否’);vp　(条件);sp

chəxwà　ʔánɴ　nàiɴ　wê　ʔə-　páichânɴ　ləphānɴ　dɔ̀
王;n　食う;v　(返答);vp　(強意);vp　3sg　金;n　百;nu　今度は;gp
答えが出せなかったので、王は彼の金 100 チャットを召し上げた。

(31) ʔəwê　mjá　khwīphānɴ　jàʊ
3se　儲ける;v　九百;nu　(完);av
[結局] 彼は 900 チャットを儲けた。

▷ mjá はビルマ語 /myaʔ/ の借用。

第32章　語彙

本章ではポー・カレン語 (Pwo Karen) の東部方言と西部方言の基礎語彙を対照して示す。この対照語彙表によって、東部ポー・カレン語（ポー・カレン語東部方言）と西部ポー・カレン語（ポー・カレン語西部方言）の異同の一端を感じ取っていただきたい。

基礎語彙表についての注意事項は以下のとおりである。

- EP は東部方言を示し、WP は西部方言を示す。同一項目に意味的に対応する形式が二つ以上ある場合には、「,」で区切って並べた。東部方言 (EP) の形式はパアン方言 (Hpa-an dialect)、西部方言 (WP) の形式はチョウンビョー方言 (Kyonbyaw dialect) のものである。チョウンビョー (Kyonbyaw; Kyonpyaw; Burmese /còuɴbyɔ̀/) は、パテイン (Pathein; Bassein) の北東約 80km に位置する都市で、エーヤーワディー管区 (Ayeyarwadi division; Irrawadi division) に属する。第 3 代ビルマ大統領マン・ウィンマウン (Mann Win Maung) の故郷でもある。

- 掲載項目は服部編 (1957)『基礎語彙調査票』の必須項目 (457 項目) を中心に選んである。総項目数は約 840 である。項目の選択にあたっては藪 (1982) を参考にした。項目番号に A,B, ... がついているものは藪 (1982) が独自に付加した項目である (原著では小文字で示してある)。また、a,b, ... がついているものは筆者が独自に付け加えた項目である。

- 意味的に対応するスゴー・カレン語形式 (Sgaw Karen) も参考のため可能な限り挙げてある。 (SK ...) のように括弧でくくって示す。スゴー・カレン語の表記は加藤 (1993) で用いたものを少し改変して用いる。挙げてあるのはパアン方言 (Hpa-an dialect of Sgaw Karen) の形式である。これは 1991 年 3 月にタイ国メーサリアン (Mae Sariang) でパアン方言を調査したときの資料に基づく。調査協力者はプータームー (Phu Tah Moo) さん (男性) である。なお、借用語の可能性の高い項目は、参考のために現代ビルマ語 (Modern Burmese) や現代モン語 (Modern Mon) などの形式を付記する場合がある。モン語形式は坂本 (1994) の表記によっている。

次に、チョウンビョー方言の音素目録を示す。次のページを見ていただきたい。

チョウンビョー方言 (Kyonbyaw dialect) の音素目録

子音

p	θ	t	c	k		ʔ
ph		th		kh		
ɓ		ɗ				
b	ð					
		s	ɕ	x		
		sh				
		z		ɣ		
m		n	ɲ	ŋ	ɴ	
w			j			
		l				
		r				

母音

i	ɨ	ɯ	u
e	ə		o
ɛ	a		ɔ

声調

má	[44]
mà	[11]
mâ	[41]
(maʔ	[41])
(mə	atonic)

すべての韻母

i	ɨ	ɯ	u	ai	au
e	ə		o		
ɛ	a		ɔ		

əɴ	eiɴ	əɯɴ	ouɴ	ɨʔ	eiʔ	əɯʔ	ouʔ			
aɴ	aiɴ	auɴ	eʔ	oʔ						
				aʔ						

チョウンビョー方言の音素について、以下に注意すべき点を述べる。

この方言の音節構造は C1(C2)V1(V2)(C3)/T と表すことができる。C2 として現れることのできるのは、w, j, l, r の 4 種類である。一方、C3 として現れることのできるのは、ʔ, ɴ の 2 種類である。ɴ はパアン方言と同じく口蓋垂鼻音である。完全な閉鎖は形成せずに母音の最後尾を鼻音化することもある。パアン方言と違って、口蓋垂鼻音が完全に脱落することはない。

この方言には ɓ:b および ɗ:d の対立がある。b や d は比較的最近になって生じてきたものと思われる。b の例としては、bá「私達」、bə́「中」などがある。パアン方言 pə̀「私達」および phə̀ɴ「中」と比較せよ。

また、この方言には有声歯間閉鎖音 ð がある。これも比較的最近になって生じてきたものと思われる。この音素を持つ例としては、ðeiʔ「まだ」がある。パアン方言 dài「まだ」と比較せよ。

ʔ で終わる音節（促音節;stopped syllables) は常に下降調でかつ短く発音される ([41])。これについての解釈には、(1) 促音節は声調を持たないが自動的に [41] で発音されるとする解釈、(2) 促音節には mâ と同じ声調のみが現れ得るとする解釈、(3) 促音節のピッチはあくまでも別個の声調であり ʔ は声調に付随する特徴であるとする解釈、以上三つの可能性があり得るが、どの解釈が正しいかについては今後の検討を要する。本論文では、母音記号の後に ʔ を置くことのみにより促音節を表すことにする。このように表記すると (2) の解釈は排除しているかのように見えるかもしれないが、これはあくまでも表記上の便宜である。

チョウンビョー方言の調査協力者は Dahlia Win さん (女性) である。

東西ポー・カレン語の対照基礎語彙

＜人体＞

1. 頭 head　EP khú, khʊ́xwí　WP khò, khòkhwì　(SK khô)
1-a. 頭が痛い head aches　EP khʊ́xwí jòʊɴ　WP khòkhwì jéiɴ
1-b. 髪をとかす to comb　EP khwî khʊ́　WP khwì khò　(SK khwí khô)
1-c. 櫛 comb(n)　EP θíçàɴ　WP θìçáɴ　(SK θî)
1-1. 髪の毛 hair　EP khʊ́θʊ̂　WP khòθwì　(SK khôθú)
1-2. 頭がはげた bald　EP méthə́ɯɴ khlè　WP khò khlá　(SK khô klā)
1-3. 脳 brain　EP khʊ́náʊ　WP khònou?　(SK khônù?)
2. ひたい forehead　EP méthə́ɯɴ　WP me?θəɗə́　(SK mè?tùkhô)
3. 目 eye　EP mé　WP me?　(SK mè?)
3-a. 目を開ける open eyes　EP cáɴ mé　WP sàɴ me?　(SK sɔ̀ mè?)
3-b. 目を閉じる close eyes　EP béiɴ mé, bí mé　WP ɓèiɴ me?　(SK bî mè?)
4. まゆげ eyebrow　EP mémə̂ɴ　WP me?thʊ̂　(SK mè?tù)
5. 涙 tear　EP méthî　WP me?thì　(SK mè?thí)
6. めくらの blind　EP mé blɔ́　WP me? ɓlàu　(SK mè? blɔ̂)
7. 鼻 nose　EP nâ　WP nàphù　(SK násē)
7-a. 鼻がつまる be choked up　EP nâ bài, nâ bá?à　WP nà ɓei?, shə- ɓá?àɴ
8. 耳 ear　EP nā　WP nâ　(SK nà)
9. つんぼの deaf　EP nā ?àɴ　WP nâ ?ə́　(SK nàtə?ə́)
9-a. 耳が遠い　EP nā xə̂ɴ　WP nâ xə̀
10. 口 mouth　EP nò　WP no?　(SK nó?, thá?khô)
11. 唇 lip　EP nòphài　WP no?phlʊ́　(SK plū)
12. 舌 tongue　EP phlì　WP phlé　(SK plē)
13. 唖の dumb　EP ?óɴ?à　WP ?əɯ??a?　(SK ?ʊ́??á?)
14. 歯 tooth　EP mé　WP θwà　(SK mé) cf. Burmese　/θwá/　(注)EP に対応する WP 形式 mài は「動物の牙 (きば)」の意。
15. 唾液 saliva　EP nòthî　WP no?thì
16. 息をする breathe　EP θá　WP θà　(SK θá, kəθá)
17. 声 voice　EP ?əlū　WP ?əlû　(SK kəlù)
18. 咳をする cough　EP kàʊ　WP ɓàkou?　(SK kú?)
19. くしゃみする sneeze　EP kəchí　WP ɣa?shè　(SK shé)
20. あくびする yawn　EP kàɴ tháɴ　WP ká thàɴ, kə́ thàɴ　(SK təkɔ́ thɔ̂)　(注)EP の tháɴ および WP の thàɴは動詞助詞。
21. あご jaw　EP khá, kháthə̄ɯɴ　WP khàla?　(SK khâ)
22. 顔 face　EP méθá　WP me?θà　(SK mè?θâ)
23. 頬 cheek　EP nòpà　WP me?pà　(SK bó?pā)
24. ひげ　EP nòchóɴ (口ひげ mustache), kháphlʊ̀ (あごひげ beard)　WP no?shàuɴ (口ひげ mustache), khàla?shàuɴ (あごひげ beard)　(SK nó?shû, khâshû)
25. 首 neck　EP khóbòɴ　WP kho?ɓáʊɴ　(SK kò?bó)
26. 喉 throat　EP khójū　WP kho?jʊ̂phláuɴ　(SK kó?jù)
27. 肩 shoulder　EP çʊ̂thàikhʊ́　WP kho?ɓei?thei?　(SK phíbâkhô)
28. 腕 arm　EP cʊ́dʊ́　WP sùɗù　(SK sʊ́dʊ̂)
29. ひじ elbow　EP cʊ́nōʊɴkhâiɴ　WP sùnôuɴkhàiɴ　(SK sʊ́nə̀khí)
29-1. 手首 wrist　EP cʊ́khó　WP sùɗéiɴ　(SK sʊ́dékò?)
30. 手 hand　EP cʊ́　WP sù　(SK sʊ́)
31. 指 finger　EP cʊ́bòɴ　WP sùnóuɴ　(SK sʊ́nə́)
32. 爪 nail　EP cʊ́mí　WP sùmì　(SK sʊ́mê)
33. 胸 breast　EP θànâ　WP θa?nà　(SK θá?nápɣà)
34. 乳房 breast (of woman)　EP nʊ̄　WP nû　(SK nʊ̀)
34-3. 肺 lung　EP bòθò　WP po?θo?　(SK pəθô)
35. 心臓 heart　EP θà　WP θa?　(SK θá?)
36. 腹 belly　EP ɣàʊphôʊɴ　WP ɣou?phòuɴ　(SK hə́phə́)
37-1. 腸 intestines　EP xwái　WP xwei?　(SK pɣì?)
37-2. 胃 stomach　EP phʊ̂　WP phù　(SK kəphʊ́)
38. 肝臓 liver　EP θə́ɯɴ　WP θə̀　(SK θû)
39. へそ navel　EP dì　WP ɗé　(SK dé)
40. 背中 back　EP khlòʊɴchâɴ　WP khlóuɴsàuɴkhò　(SK khlə́)
41. 腰 waist　EP jāɴdèiɴ　WP jâɴɗéiɴ　(SK jòdé)
42. 尻 buttock　EP khâiɴ　WP khàiɴ　(SK khí)
42-1. 糞 (大便) excrement　EP chə?í　WP shə?ə?è
42-2. 糞 (大便) をする void excrement　EP ?íchâ　WP ?èshà　(SK ?êshá)
42-4. 小便 urine　EP chəchí　WP ?əshì
42-5. 小便する urinate　EP chíchâ　WP shìshà　(SK shîshá)
42-6. おならをする break wind, pass gass　EP nə̂ɴ ?í　WP nə́ ?è
42-7. 陰茎 penis　EP thí　WP thè
42-7a. 睾丸 testicles　EP díθá　WP ɗîθà
42-6. 陰門 vulva　EP lēiɴ　WP lêiɴ
42-11. もも thigh　EP kíthōɴ　WP kìpà　(SK kîdʊ̂)
43. ひざ knee　EP kháɴtōʊɴkhʊ́　WP kìɗú　(SK khôlèkhô)
44. 脚 leg　EP kháɴ　WP khàɴ　(SK khɔ̂)

45. 足 foot　EP kháɴjâθà　WP khàɴlûkhò

46. びっこをひく limp　EP cáiɴ khlètɔ̀khlètɔ̀　WP ɣaʔpha?　shîthôshîthô　(SK há?　təklè)

47. からだ body　EP mūɕā　WP môɕâ　(SK nòkhó)

48. 毛 hair　EP ʔəchóɴ　WP ʔəshàuɴ　(SK shû)

49. 皮膚 skin　EP ʔəphài　WP ʔəphei?　(SK phí?)

50. 膿 pus　EP ʔəphí　WP ʔəphì　(SK ʔəphí)

51. 汗 sweat　EP khūθwê　WP khôθwè　(SK kəpə̄)

52. 垢 dirt　EP ʔəkí　WP ʔəkì　(SK tàbâʔə́)

53. 血 blood　EP θwí　WP θwì　(SK θwî)

54. 骨 bone　EP ʔəxwí　WP ʔəxwì　(SK ʔəxí)

55. 肉 flesh　EP ʔəjá　WP ʔəjà　(SK ʔəɲâ)

56. 力 strength　EP ʔəɣāiɴ, ʔəɣāiɴʔəbjà　WP ʔəɣâiɴ, ʔəɣâiɴʔəɓa?　(SK ʔəɣìʔəbá)

57. 見る look at　EP jū　WP jô　(SK kwà)

57-a. 見える see　EP dá　WP ɗà　(SK thî)

58. かぐ smell (vt)　EP nàɴmə̀ɴ　WP nə́ʔwì　(SK nə́)

59. 聞く listen　EP chôɴná　WP khoʔnà　(SK kənâ)

59-a. 聞こえる hear　EP ɣə̂ɴ　WP ɣə̀　(SK hú)

60. 笑う laugh　EP nī　WP nî　(SK nī)

61. 泣く cry　EP ɣáɴ　WP ɣàɴ　(SK hɔ̀)

62. 叫ぶ shout　EP kòɕà　WP koʔɕaʔ　(SK kóʔpəθú)

＜衣＞

63. きもの clothes　EP chəkònchəθò　WP shəkáuɴshəθoʔ　(SK tàkútàkā)

64. 着る clothe (shirt, coat, shoes, etc.)　EP θò　WP θoʔ　(SK θóʔ)

64-a. はく (腰布, ズボンなど) clothe (sarong, trousers, etc.)　EP kòɴ　WP káuɴ　(SK kú)

65. 脱ぐ take off　EP kwɛ́ làɴ　WP kwɛ̀ láɴ　(SK bê lə̄)

66. はだかの naked　EP ʔɔ́bóɴ　WP lóɴkóɴ　(SK bêshé)

66-1. ぼうし hat, cap　EP khə́láʊ　WP khòlouʔ　(SK khôphlɔ̂)

66-1a. 笠 bamboo hat　EP khə́mó　WP khòmoʔ　(SK khômòʔ)

66-1b. (ぼうしを) かぶる wear (hat)　EP khláʊ　WP khlû

66-1c. 傘 umbrella　EP khə́mó　WP sáuɴ

66-1d. ターバン turban　EP khə́phə́ɯɴ　WP khòphə̀

66-2. シャツ shirt　EP châiɴ　WP pəlouʔ　(SK shékā)　cf. Mon　/paʔlɒʔ/

66-3. 腰布 sarong　EP thədòɴ (男用), ní (女用)　WP ɕàɴ (男用), nì (女用)　(SK thɛ́kū, nî)

66-8. ぞうり sandal　EP kháɴphài　WP khàɴpheiʔ　(SK khɔ̂phíʔ)

66-10. 布 cloth　EP chəkàiɴjá　WP shəkáiɴjaʔ　(SK tàkíɲàʔ)　cf. Mon　/yàt/

68. 針, くぎ needle, nail　EP thà　WP thaʔ　(SK thá?)

69. 糸 thread　EP lə́khə́　WP lùkhù　(SK lû)

70. 縫う sew　EP chà　WP shaʔ　(SK shá?)

＜食＞

71. 食べ物 food　EP chəʔáɴchəʔɔ̀　WP shəʔàɴshəʔáu　(SK tàʔɔ̂tàʔɔ́)

71-1. ご飯 rice　EP mì (炊いた米; 食事), ɣə̂chá (炊く前の米), bə́ (脱穀前の米, 稲)　WP mé (炊いた米; 食事), ɣə̂shà (炊く前の米), ɓù (脱穀前の米, 稲)　(SK mē, hə́θaʔ, bə́)

71-1a. おかず side dish　EP θə̂ɴ　WP θə̀　(SK kəθú)

71-1b. 餅米 glutinous rice　EP mìʔàiɴ　WP méʔàiɴ　(SK pəʔí)

71-1c. わら straw　EP lɔ̄kháɴ　WP lâukhàɴ　(SK lɔ̀)

71-7. 豆 bean　EP pɛ̄　WP thô, pɛ̀　(SK pəthóʔ)　cf. Burmese　/pɛ́/

72. 小麦粉 flour　EP côʊɴ　WP kòməɯʔ　(SK kôkəmû)　cf. Burmese　/jòʊɴ/

72-a. やまいも yam　EP néthī　WP nàithî　(SK nwêtì)

72-b. さといも taro　EP xə́thī　WP xùthî　(SK khə̂tì)

72-c. キュウリ cucumber　EP thìθá　WP thíθà　(SK dí)

72-d. ダイコン radish　EP báthī　WP ɓàthî

72-2. とうもろこし corn　EP bə́khê　WP ɓùkhè　(SK bə́khé)

73. 肉 (食べ物としての) meat　EP chəjá　WP ʔəjà　(SK tàɲâ)

73-1. たまねぎ, にんにく onion, garlic　EP θə̂ɴkhə́θá　WP θə̀khòθà

74. 実 fruit　EP ʔəθá　WP ʔəθà　(SK tāθâ)

75. 種 seed　EP ʔəθáθà　WP ʔəθàkhlì　(SK tākhlí)

76. 卵 egg　EP ʔədí　WP ʔədî　(SK tàdî)

77. 塩 salt　EP thîlá　WP thílà　(SK ʔíθâ)

77-a. 胡椒 pepper　EP xwáiθá　WP xweiʔθà　(SK mòɣìʔphó)

77-b. トウガラシ chillie　EP chəɣɛ́θá　WP shəɣàiθà

77-c. 魚醤 fish sauce　EP jáʔə́thî　WP shəɣànthì

77-1. 砂糖 sugar　EP thîláchə̂ɴ　WP thílàshə̀

77-3. 油 oil　EP θə́　WP θò　(SK θó)

78. 脂 grease　EP ʔəθə́　WP ʔəθò　(SK θó)

79. 乳 milk　EP chənūthî　WP shənûthì　(SK tànùthí)

79-a. 牛乳 cow's milk　EP wɔ̀bɛ́iɴnūthî　WP khlâunûthì　(SK klɔ̀nùthí)

80. 水 water　EP thî　WP thì　(SK thí)

80-2. 湯気 steam　EP ʔəʔwì　WP ʔəʔwí

80-3. 緑茶 green tea　EP thìkhlâɴ　WP thìkhlàɴ　(SK thíkhlɔ́)

80-3b. 茶葉 tea leaf　EP láphà　WP laʔphaʔ

80-3c. そそぐ to pour　EP khɛ̀ làɴ　WP khái láɴ

80-5A. スープ soup　EP θɔ̀ɴʔɔ̀　WP θɔ̀thì
80-7. 酒 liquor　EP θài　WP ɣaʔthì　(SK θíʔ, ɣàʔthí)
80-7a. ひかえる, 避ける abstain (liquor)　EP dúɩ́　WP dùɩ　(SK dúɩ̂)
80-8. 酒に酔う drunk　EP mɔ̀ɴ θài　WP mɔ́ ɣaʔthì　(SK mú θíʔ)
80-9. たばこ tobacco　EP mó　WP θìmoʔ　(SK mòʔ, ɲáθúʔ)
80-9a. たばこを吸う to smoke　EP ʔɔ̀ mó　WP ʔáu θìmoʔ
80-9b. キンマ betel　EP phūlá　WP phúɩ̂là
80-9c. 菓子 confectionery, bread　EP kʊ́　WP kò　(SK kô)
81. 料理する cook　EP ʔáɴphôɴ　WP ʔàɴphàuɴ　(SK phɔ́)
81-a. 煮る boil, simmer　EP ʔáɴxwī　WP ʔàɴxwî
81-1. 焼く roast　EP ʔáɴká　WP ʔàɴkà　(SK kâ)
81-1a. あぶる broil, toast　EP ʔáɴxʊ́　WP ʔàɴxò
81-1b. 揚げる, 炒める fry, deep-fry　EP ʔáɴchè, cɔ̂ (Burmese /cɔ̀/ の借用語。日常会話ではこれを使うことが多い)　WP ʔàɴsheʔ　(SK shéʔ)
81-1c. 蒸す steam　EP ʔáɴɣôʊɴ　WP ʔàɴɣòuɴ　(SK hə́)
81-1d. 炒る parch　EP ʔáɴwé　WP ʔàɴweʔ
81-3. 生の raw　EP θêiɴ　WP θèiɴ　(SK θí)
82. 熟する ripe　EP mêiɴ　WP mèiɴ　(SK mí)
83. 食べる eat　EP ʔáɴ　WP ʔàɴ　(SK ʔɔ̂)
84. なめる lick　EP ʔáɴláiɴ　WP ʔàɴlàiɴ　(SK lê)
84-a. なめる (飴玉などを) keep in the mouth (candy)　EP ʔáɴmʊ̀　WP ʔàɴmó
84-b. 飲み込む swallow　EP jūɩ̄ làɴ　WP júɩ̂ láɴ
85. かむ chew　EP ʔáiɴ　WP ʔàiɴ　(SK ʔê)
85-a. かみくだく chew to pieces　EP ʔáiɴ blè　WP ʔàiɴ bleʔ　(SK ʔê bléʔ)
86. 飲む drink　EP ʔɔ̀　WP ʔáu　(SK ʔó, ʔɔ́)
87. 吸う suck　EP ʔáɴchàʊ (口で直接), θəwài (ストローなどで)　WP ʔáushouʔ (口で直接), sweiʔ (ストローなどで)　(SK shúʔ)
88. 吐く vomit　EP pjò　WP pjoʔ　(SK bɣɔ́ʔ)
cf. Burmese /pyô/
89. (つばを) 吐き出す spit　EP thʊ́phlè　WP thòphleiʔ　(SK thúʔpɣèʔ)
90. 腹減った hungry　EP θàwī mì, làɴʔò mì　WP θaʔɓái mé　(SK θâwī)
90-a. 腹いっぱいの full　EP blè　WP ɓlɛ́　(SK blē)
91. のどが乾いた thirsty　EP θàwī thî　WP θaʔɓái thì　(SK θúθáʔ)
92. おいしい tasty　EP ʔwí　WP ʔwì　(SK wî)
93. 甘い sweet　EP chôɴ　WP shə̀　(SK shə́)
93-1. 塩辛い salty　EP ɣâɴ　WP ɣàɴ　(SK hɔ́)
93-1A. 辛い hot, spicy　EP ɣɛ́　WP ɣài　(SK hɛ́)
94. 苦い　EP khá　WP khà　(SK khâ)
94-1. すっぱい sour　EP cháiɴ　WP shàiɴ　(SK shî)
94-2. くさい bad smelling　EP nə̀ɴ　WP nə́　(SK nə́)
95. くさった rotten　EP ʔʊ́pàʊ (肉などが), nə̂ɴcí (汁などが)　WP ʔùɩ (肉などが), nə́shàiɴ (汁などが)　(SK ʔûɩ)
95-1. かび mould　EP xə̀ɴ　WP xə́

＜住＞
96. 家 house　EP ɣéiɴ　WP jèiɴ　(SK hî)
96-a. ビル bilduing, edifice　EP tàʊ　WP tɯʔ　(SK tə́ʔ)　cf. Burmese /taiʔ/, Mon /taək/
96-b. 小屋 hut, shed　EP càɴ　WP cáɴ
96-c. 便所 toilet　EP hàidài　WP shəlâɴkhàiɴ
97. 建てる build　EP θə́ɯɴ　WP θə̀　(SK θû)
98. ドア, 窓 door　EP pàitərâɴ　WP təràɴ　(SK pɛ́trɔ́)　cf. Mon /taʔraŋ, paɲtaʔraŋ/
98-1. 部屋 room　EP dàʊ　WP ɗouʔ　(SK dɔ́ʔ)　(注) タイ (Thai) 側のポー・カレン語では家 (house) を表す。
98-2. ゆか floor　EP ɣéiɴdà　WP θèiɴpà　(SK θêbâkhô, phúɩ́dákhô)
98-2A. ござ mat　EP khlɔ́　WP khlàu　(SK khlɔ̂)
98-3. 柱 pillar, post　EP tə̀ɴ　WP tə́　(SK tə̀)
cf. Burmese /tàiɴ/, Mon /taəŋ/
99. 壁 wall　EP chədóɴ　WP shəɗàuɴ　(SK tàdû)
99-a. 寝台 bed　EP khà　WP khaʔ　(SK kháʔ)
99-b. テーブル table　EP cəpwɛ̄　WP səpwɛ́　(SK səpwɛ́)　cf. Burmese /zəbwɛ́/
100. 屋根 roof　EP ɣéiɴkhʊ́　WP jèiɴkhò　(SK hîkhô)
101. 火 fire　EP mí　WP mè　(SK mê)
102. 煙 smoke　EP míkhʊ́ɩ́　WP mèkhù　(SK mêʔúkhûɩ)
103. 灰 ash　EP phêiɴkhlámʊ́ɩ́　WP phléiɴkhà　(SK phâshá(Burmese Sgaw), phékhâ(Thai Sgaw))
103-2. 薪 firewood　EP θéiɴmûɩ　WP θèiɴmûɩ　(SK θêmûɩ)
104. (火を) 消す extinguish　EP mà θî mí　WP má θì mè　(SK mā θí mê)
104-a. (電灯を) 消す turn off　EP mà làɴpháí mí　WP má láɴpheiʔ mè　(SK mā lɔ̄pàʔ mê)
104-b. 火をつける to light　EP dwɛ́ mí　WP thouʔ mè
105. 燃える burn　EP mí ʔáɴ (ex. ɣéiɴ mí ʔáɴ 家が燃える)　WP mè ʔàɴ　(SK mê ʔɔ̂)
105-a. 火がつく catch on fire　EP mí khè　WP mè khâi (EP との対応では khái が予想されるが、実際には khâi が使われる)　(SK mê kē)
106. 座る sit　EP chînàɴ　WP shə̀náɴ　(SK shênɔ̄)
107-1. 横たわる lie down　EP mînàɴ　WP mìnáɴ　(SK mínɔ̄)
108. 眠る sleep　EP mî　WP mì　(SK mí)
108-a. うとうとする sleepy, nod　EP mîkhêiɴ　WP míkhèiɴ　(SK míkhé)
109. 夢を見る dream　EP mîmɔ̄　WP mìmâɴ　(SK mímɔ̀)

109-1. めざめる wake　EP nɔ́ θà　WP nàɴ θaʔ　(SK phɯ́θínɔ̂)

110. 起きる (寝た状態から) get up　EP ɣēthə́ɯɴ　WP ɣâithə̀　(SK ɣēshə́thə̂)

111. 立つ, 立っている stand　EP chîthə́ɯɴ　WP shə́thə̀　(SK shə́thə̂)

111-1. 井戸 well　EP kəmlə̂ɴ　WP thìphə́　(SK thípū, thíkəmlə́)

111-2. 垣根 hedge　EP thó　WP thənâ　(SK kərə́)

112. 閉める shut　EP mà bài, pái (Burmese /peiʔ/ の借用。日常会話ではこれを使うことが多い)　WP phaʔ ɓeiʔ　(SK káʔ bìʔ)

113. 開ける open　EP pàʊ thánɴ　WP wâi thàɴ　(SK ʔóʔ thɔ̂)

114. 住む live　EP ʔɔ́　WP ʔàu　(SK ʔô, ʔôshóʔ)

＜道具＞

114-a. うちわ fan　EP nɯ́wīθɯ́　WP nòphouʔphaʔɕù

114-2A. 機械 machine　EP cɛ́　WP sɛʔ　(SK sɛ́ʔkəhâ)　cf. Burmese /sɛʔ/

114-3. 鏡 mirror　EP jwà　WP nwá　(SK mɛ̀ʔthíkəlā)

114-5. 皿 dish　EP thwê　WP ɓàiɴ

114-6. 匙 spoon　EP nɯ́thòʊɴ　WP nòthóuɴ　(SK nɔ̂tə̄)

115. つぼ pot　EP môɴ (大きいもの), nōʊɴ (小さいもの)　WP màuɴ (大きいもの), nôuɴ (小さいもの)　(SK θəpə̄, kó, kətī)

116. 鍋 pan　EP θə̂ɴphə̀ɴ (炒め物用の鍋), mìphə̀ɴ (炊飯用の鍋)　WP phə́θə̀ (炒め物用の鍋), phə́mé (炊飯用の鍋)　(SK θəpə̄)

116-3. こぼれる to spill out　EP làɴkhàʊ　WP lánkhəɯʔ

117. 包丁 knife　EP xé (包丁), dɔ̀ (斧)　WP xeʔ (包丁), ɗáu (斧)　(SK xɛ̀ʔ, dɔ́)

118. 刃 edge　EP xémé　WP ʔəθwà　(SK xɛ̀ʔkənâ)

118-1. 臼 mill　EP chə́ɯɴ　WP shàuɴ　(SK shə̂)

118-4. つく pound　EP thōɴ (小さい物を), ʔánchû (大きい物を),　(ex.) thōɴ já (魚をつく)　WP ɗoʔ　(SK tò)

118-13. 研ぐ whet　EP klàiɴ　WP kláiɴ　(SK klé)

119. 土ぼこり dust　EP pháimɯ́　WP pheiʔməɯʔ, phə́məɯʔ　(SK phâkəmû)

120. 拭く wipe　EP kài　WP keiʔɗouʔ　(SK thwá)

120-a. こする rub　EP thàʊ　WP thouʔ

120-b. 掃く sweep　EP wé　WP weʔ　(SK wɛ̀ʔ)

120-1. 箱 box　EP təlâ　WP təlà　(SK təlá)　cf. Mon /kaʔla/

120-3. かご basket　EP dàɴ　WP ɗáɴ　(SK tɔ̀)

120-3a. かごを頭にのせて運ぶ carry a basket on one's head　EP tàɴ dàɴ　WP jɯ́ ɗáɴ

120-3b. ゆりかご cradle　EP cháʊ　WP shouʔ　(SK sùʔ)

120-4. 袋 bag　EP thóʊɴ　WP thòuɴ　(SK thə̂)

121. つな, ひも rope, cord　EP phlì　WP phlɯ́　(SK plī)

122. 魚とりの網 fishing net　EP cáɴ　WP sàɴ　(SK sɔ̂)

122-1. 杖 walking stick　EP nɯ́thò　WP nòthoʔ　(SK nɔ̂thɔ́ʔbó)

123. 棒っきれ stick of wood　EP lébòɴ　WP nòkhù　(SK nɔ̂ké)　cf. Mon /lèʔ/

123-a. しゃもじ rice paddle　EP nɯ́wá　WP nòwaʔ　(SK nɔ̂dókwàʔ)

＜生活・戦い＞

123-3. 生まれる be born　EP phà thánɴ　WP lánphlài, ʔàuphlài　(SK ʔôphlê)

125. 育つ grow　EP dɯ́ thánɴ (人, 植物が)　WP xó thàɴ (人が), kài thàɴ (植物が)　(SK dô thə̂)

125-a. 芽が出る sprout　EP mé thánɴ　WP mài thàɴ

126. 生きている alive　EP môɴ　WP mə̀　(SK mú)

127. 太った fat　EP bánɴ　WP ɓàuɴ　(SK bɔ̂)

128. やせた thin　EP xwē　WP xwê　(SK xɛ̄)

129. 疲れた (全身が) tired (all the body)　EP pwài θà　WP pwíʔ θaʔ　(SK bwíʔ θáʔ)

129-a. 疲れた (身体の一部分が) tired (a part of the body)　EP xwíkàiɴ　WP ké

130. 病気の sick　EP càʊchâ, chônkàiɴ　WP souʔshà, kɔ̀ θaʔ　(SK shóké)

131. 傷 wound　EP chəchâphə̀ɴlāɴ　WP ʔəphə́lâɴ　(SK pūlɔ̀)

131-a. きずあと scar　EP ʔəxòʊɴlāɴ　WP ʔəxóuɴlâɴ

132. 痛い pain　EP châ　WP shà　(SK shá)

133. かゆい itchy　EP θà　WP θaʔ　(SK θáʔ)

133-a. くすぐったい ticklish　EP kwí　WP kwì　(SK kòkwí)

134. 掻く scratch　EP khwá　WP kwaʔ（注：無気音）　(SK wàʔ)

134-1. 薬 medicine　EP θí　WP θèiɴxwì　(SK kəθî)

135. 治す cure　EP bjàɴ　WP ɓláɴ (介子音の違いに注意)　(SK jáblá)

135-1. 治る get well, be cured　EP blá　WP ɓlà　(SK blá)　cf. Mon /plɛ̀əh/

136. 殺す kill　EP mà θî　WP má θì

137. 死ぬ die　EP θî　WP θì　(SK θí)

137-2. 墓 tomb　EP θwákhɯ́　WP θwàkhò

138. 神 god　EP (chə)ná (精霊), pō (守護神), là ～ wílà (霊魂), θəlèθəkhà (悪霊), chəmə̀ɴxā (魔女), jwà (キリスト教の神)　WP kəloʔkəlaʔ (精霊), rôuɴcâi (精霊?), kəshâjwá (キリスト教の神)　cf. Mon /kaʔlok/

138-a. おばけ, 幽霊 ghost　EP tɛ̀phlē　WP shəmôxwaʔ

138-b. 信仰する believe in (religion)　EP bà　WP ɓá

138-c. 僧侶 buddhist monk　EP θàɴkhâ　WP θàɴkhà　cf. Pali saŋgha　(注)EP では僧侶が来る (come) ことを kəɲàと言う (cf. Mon /ɲaʔ/'出迎える (receive,greet)'。また僧侶が死ぬことを pɔ̀と言う (cf. Mon /pɔ/)

138-d. 仏塔 pagoda　EP klòɴ, cài　WP kláuɴ, câi　cf. Mon /cyac/

139. けんかする quarrel　EP ʔáiɴ lóθà　WP teʔ loʔθaʔ (SK ʔê lòʔθáʔ)

139-1. 戦争する fight, make war　EP dàʊ　WP ɗəɯʔ (SK dɯ́ʔ)

139-2. 勝つ win　EP nàɴ　WP nə́ (SK mānə́)
cf. Burmese /nàiɴ/

139-3. 負ける defeat　EP cá　WP sà (SK ɕú, xâ)

140. 逃げる run away　EP cáiɴɣà　WP sàiɴphloʔ (SK xè thɔ̂ kwìʔ)

141. 追いかける pursue　EP lòɴ　WP láuɴ (SK lū)

142. 刀 sword　EP xé phàdʊ́　WP xeʔ phaʔɗò (SK xèʔ)

144. 弓 bow　EP khlí　WP khlì (SK khlî)

145. 矢 arrow　EP phlā　WP phlâ (SK plà)

＜人間・人間関係＞

146. 人間　EP phlòʊɴ, mənī (人間を表す格式ばった言い方)　WP pəɕá (SK pɣākəɲɔ́)

146-a. ポー・カレン人 Pwo Karen　EP phlòʊɴ, phlòʊɴɕū (格式ばった言い方)　WP phlóuɴ, môthei? (「母方」の意), phlóuɴɕô (格式ばった言い方)　(SK pɣò)

146-b. ビルマ人 Burmese　EP pəjàɴ　WP ɗáuɴwóuɴ, pəján (SK pəjɔ̄)

146-c. タイ人 Thai　EP θâiɴ (シャン人 Shan に対する呼称も θâiɴ)　WP tháiɴ　(注) カレン州やモン州に住むビルマ人、カレン人、モン人、パオ人たちは、ビルマ語でもタイ人を/ɕáɴ/ (=Shan) と呼ぶ。

146-d. モン人 Mon　EP jʊ̀　WP jókhrô

146-e. スゴー・カレン人 Sgaw Karen　EP ɕàɴ　WP phâthei? (「父方」の意)　(SK sɣɔ̄)

146-f. 西部ポー・カレン人 West Pwo Karen　EP bàɴklán　WP なし

146-g. パオ人 Pao　EP tòɴθû　WP なし
cf. Burmese /tàuɴðù/

146-h. 中国人 Chinese　EP təràʊ　WP tərouʔ
cf. Burmese /təyouʔ/

146-i. インド人 Indian　EP khʊ̀là　WP khólá
cf. Burmese /kəlá/

146-j. 民族 race　EP chɨ̀　WP shɨ́　(SK sɔ̄)

147. 男 male　EP ʔəkhwâ　WP ʔəkhwà (SK ʔəkhwá)

147-a. オス male animal　EP ʔəphâ　WP ʔəphà

148. 女 female　EP ʔəmɯ́　WP ʔəmɯ̀ (SK ʔəmɯ̂)

148-a. メス female animal　EP ʔəmō　WP ʔəmô

149. 子供 child　EP phʊ́　WP phò (SK phó)

149-a. 未婚男性 unmarried male　EP phʊ́θákhwâ　WP phòθàkhwà

149-b. 未婚女性 unmarried female　EP phʊ́θámɯ́　WP phòθàmɯ̀

149-c. 少女 maiden, girl　EP ʔəmɯ́nàɴ　WP mɯ̀nə́ɴphò (SK mɯ̀kənɔ̄)

150. 若い young　EP θà báɴ　WP θaʔ ɓàɴ, θaʔ shei? (SK θáʔ bɔ̂, θáʔ sà)

151. 年取った old　EP θà ɕā　WP θaʔ ɕâ (SK θáʔ pɣà)

152. 父 father　EP phā, pàpâ (幼児語), tàpâ (幼児語)　WP phâ (SK pà)

153. 母 mother　EP mū, mūtôʊɴ (幼児語), tòʊɴtôʊɴ (幼児語)　WP mô (SK mò)

153-1. 父母 parents　EP mūphā　WP môphâ (SK mòpà)

153-2,3. 義父母 parents-in-law　EP mèiɴɕā　WP méiɴɕâ

153-3a. まま父 stepfather　EP phājā　WP phâjâ

153-3b. まま母 stepmother　EP mūjā　WP môjâ

153-4. 祖父 grandfather　EP phɯ̂　WP phù (SK phɯ́)

153-5. 祖母 grandmother　EP phî　WP phì (SK phí)

153-6. おじ uncle　EP màɴ　WP mə́ɴ

153-7. おば aunt　EP ɣā　WP ɣâ (SK mɯ̀ɣà)

154. 息子 son　EP phʊ́khwâ　WP phòkhwà (SK phókhwá)

155. 娘 daughter　EP phʊ́mɯ́　WP phòmɯ̀ (SK phómɯ̂)

155-1. 孫 grandson, granddaughter　EP lì　WP lí (SK lī)

156. 年上の兄弟姉妹 elder sibling　EP wē　WP wâi (SK wè)

157. 年下の兄弟姉妹 younger sibling　EP phɯ̄　WP phɯ̂ (SK pɯ̀)

157-5. 従姉妹, 従兄弟 cousin　EP təkhwâ　WP təkhwà

157-a. きょうだい sibling, brother(s) and sister(s)　EP təphɯ̂wē　WP thə̀phɯ̂wâi (SK dɔ́pɯ̀wè)

158. 夫 husband　EP wà　WP wá (SK wā)

159. 妻 wife　EP mâ　WP mà (SK má)

159-a. 夫婦 husband and wife　EP thə̂ɴmə̂ɴwà　WP thə̀ɓə̀wá (SK dɔ́mówā)

159-b. 王 king　EP cəxwà, chəxwà　WP səxwá (SK sɔ̄pā)　cf. Sawbwa of Shan

159-c. 奴隷 slave　EP xōɴ　WP xâuɴ

159-3. 結婚する marry　EP ʔɔ́xáʊ, tháɴɕā　WP ʔàuxəɯʔ, thàɴɕâ (SK ʔôxɯ̀ʔ)

159-3a. 家族 family　EP ɣéiɴxâɴchā　WP jèiɴphòxáɴphò

159-6. 友人 friend　EP thìθò, ɣòpháɴ　WP thíθoʔ, lôθaʔ (SK tīθəkóʔ)

159-7. 敵 enemy　EP θənà　WP ɗɯ̀ɗá
cf. Mon /hnaʔ/ (SK dɯ̂dá)

159-10. 名 name　EP ʔəmèiɴ　WP ʔəméiɴ (SK ʔəmī)

159-10a. 名づける give a name　EP phló　WP phloʔ

＜社会・職業・生産＞

160. 村 village　EP təwâɴ　WP təwàɴ (SK θəwɔ́)　cf. Mon /kwan/

160-a. 国 country　EP thîkhāɴ　WP thìkhâɴ (SK kɔ̀)

160-1. 町 city　EP dòʊɴ　WP wêiɴ (SK wè)
cf. Mon /dəŋ, waəŋ/, Thai /wiaŋ/

160-2. 市場 market EP phjâ WP zé (SK phjá) cf. Mon /phya/, Burmese /zé/

162. 撃つ shoot EP khà WP kha? (SK khá?)

162-a. パチンコ slingshot EP khlíchānphôʊɴ WP kòuɴ

162-2. 釣る to fish EP ʔánkhwê WP ʔànkhwè (SK təkhwɛ́)

162-4. 貧しい poor EP ɕánɴ WP ɕànɴ (SK phɣɔ̂)

162-4a. 金持ちの rich EP θɛ̀thî (n. rich person) WP kàiɗò (v) cf. Burmese /θəthé/, Mon /sethi/, Pali /seThi /

163. 盗む steal EP ʔánɣɯ́ WP ʔànɣù (SK hɯ̂)

163-2. 田 rice-field EP chái WP sheiʔ (SK sìʔ)

163-3. 畑 field EP xàʊ WP xəɯʔ (SK xɯ́ʔ, khɯ́ʔ)

164. 仕事する work EP mà kəlôʊɴ WP má shəmá (SK mā tàmā)

165. 休む rest EP ʔɔ́pwài WP ʔàupwí (SK ʔôbɣíʔ)

165-1. 耕す to plow EP thê WP thè cf. Mon /thɔa/, Burmese /thè/, Thai /thǎi/

165-2. 蒔く to seed EP xwí WP xwì (SK phɣí)

165-3. 稲を刈る reap rice EP kàʊ bɯ́ WP kouʔ ɓɯ̀ (SK kúʔ)

165-3a. 稲を植える plant rice EP phlà bɯ́ WP phlaʔ ɓɯ̀ (SK phláʔ)

166. 剥く peel EP kɯ́ làɴ, ʔò thánɴ WP kù lánɴ, ʔoʔ thàɴ (SK ʔóʔ thɔ̂)

166-a. はがす knock off (ex. bark of a tree) EP klò WP kloʔ

166-b. つける fix, attach EP khədà, thò bàʊ WP thoʔ ɓouʔ

166-c. とりつける furnish, install EP thânɴ thánɴ WP thê thànɴ

166-1. 編む knit EP thâinɴ WP thàinɴ (SK thé)

166-3. 織る weave EP thà WP thaʔ

＜移動・交通＞

167. 行く go EP lì WP lé (SK lɛ̄)

168. 来る come EP ɣê WP ɣài (SK hɛ́)

168-1. 帰る return EP thàinɴ WP tháinɴ (SK kē)

168-2. 残る remain EP ʔɔ́thɔ̄ WP ʔàuthânɴ (SK ʔôtè)

168-3. ついていく follow EP pjáʊ WP phoʔ (SK pòʔ)

169. 出る go out EP cáinɴ WP sàinɴ (SK háʔ thɔ̂)

170. 入る enter EP náʊ WP nəɯʔ (SK nɯ̀ʔ)

171. (道を) 曲がる turn EP káinɴ phə̀ɴθà WP kheʔ phə́θaʔ (SK tərí?)

171-3. 着く arrive EP thòɴ WP tháuɴ (SK tū)

172. 止まる stop EP pətháʊ WP ʔàuthɔ̂ (SK pətùʔ, shókətɔ̀) cf. Mon /tàʔ, pətàʔ/

172-1. 越える go beyond, cross EP khânɴ WP khànɴ (SK khɔ́)

173. 歩く walk EP cáinɴ WP ɣaʔphaʔ (SK háʔphá?)

174. 走る run EP klí WP sàinɴ (SK xê)

175. 速い fast EP phlɛ́ WP khlàinɴ (SK khlɛ́)

176. 遅い slow EP xɛ̀ WP ɕâu (SK kəbɛ́ʔ, kəjɔ̄)

176-a. ゆっくり slowly EP xɛ̀xɛ̀ WP ɕâuɕâu

177. 這う creep, crawl EP cwà (蛇, ヤモリなど), khlāinɴ (ワニなどが), khwè (赤ちゃんが) WP swá (人間, 蛇, ヤモリ), khwái (大型の動物が) (SK swá)

177-1. 乗る ride EP tháʊ WP thouʔ (SK dóʔ)

177-2. 運ぶ carry EP chó WP shoʔ (SK sòʔ)

177-2a. 持ち上げる lift EP jò WP joʔ (SK jòʔ) cf. Thai yók

178. 道 road EP phə̀ɴθà WP phə́ɴθaʔ (SK klɛ́)

179. 橋 bridge EP thòɴ WP tháuɴ (SK tō) cf. Mon /haʔtòn/

180. 車 (牛車, 馬車など) carriage EP láinɴ WP làinɴ (SK lê)

180-a. 車を運転する drive a carriage EP nânɴ láinɴ WP nànɴ làinɴ (SK nɔ́)

181. 車輪 wheel EP láinpēinɴ WP ɓéinɴ (SK khɔ̂ríʔ) cf. Burmese /béinɴ/

182. 舟 boat EP khlî WP khlì (SK khlí)

182-a. 船 ship EP kəbànɴ WP kəɓánɴ (SK kəbɔ́) cf. Mon /kaʔbaŋ/

182-2. 舟をこぐ row a boat EP phlē khlî WP waʔ khlì

＜言語・伝達＞

183. ことば language EP chəkhlàinɴ WP shəkhláinɴ (SK klòʔ)

184. 話す speak EP khlàinɴ WP khláinɴ (SK kətɔ̄)

185. 言う say EP cài WP seiʔ (SK síʔ)

185-a. 語る tell EP lɔ̀ WP láu

185-1. 黙る keep silent, say nothing EP ʔɔ́ xɛ̀xɛ̀ WP ʔàu kəsɯ́

186. 尋ねる ask EP ʔánɴcà WP ʔànɴsànɴ (SK θíkwà)

186-1. 答える answer EP thàinlɔ̀ WP láu tháinɴ (注) WP の tháinɴ は「再び〜する」ことを表す助詞。元来の意味は「帰る」(cf. 168-1)。EP では lɔ̀thàinɴというと単に「語る」ことを表し、「答える」は thàinlɔ̀と言う。

186-1a. 返事する reply to EP wîdə́ɯɴ WP wáinɗàuɴ

186-3. 嘘をつく to lie EP ʔánlɔ̂ WP ʔànlàu

186-4. 本当 truth, real thing EP təɕà WP təɕá

186-5. 文字 letter, writing EP lái WP leiʔ (SK lìʔ) cf. Mon /lòc/

186-6. 書く write EP kè, kwè WP kwé (SK kwɛ́ʔ)

186-7. 読む read　EP pɔ̄　WP phɔ̌　(SK phá?)　cf. Mon /pòh/,　Burmese /pha?/

186-8. 紙 paper　EP càkhɔ̌　WP sa?khàu　(SK sá?khó)　cf. Burmese /sɛ?kù/,　Mon /cakkhau/

187. 呼ぶ call　EP kò　WP ko?　(SK kó?)

187-1. 命令する order, command　EP ʔánmə̂ɴ　WP ʔàɴmə̀　(SK mə́)

＜遊び・芸術＞

189. 遊ぶ play　EP lókwè　WP lòkwé　(SK lò?kwɛ̄)

190. 歌う sing　EP mà thàkhʊ́　WP θa??wì　(SK θá?wî)

191. 踊る dance　EP thə́ɯɴlī　WP ɣáthəlèiɴ　(SK ɣɛ̄kəlî)

＜授受＞

192. やる give　EP phílâɴ,　phlâɴ　WP phèlàɴ,　phlàɴ　(SK hê)

(EP)　jə-　phlâɴ　ʔəwê　kʊ́
　　1sg　やる　3se　菓子
「私は彼に菓子をやった」

(WP)　jə-　phlàɴ　ʔəwè　kò
　　1sg　やる　3se　菓子
「私は彼に菓子をやった」

192-1. 手に入れる get　EP nī　WP nê　(SK nè)

192-2. 売る sell　EP ʔánchâ　WP ʔàɴshà　(SK shá)

192-3. 買う buy　EP xwè　WP xwé　(SK pɣē)

192-4. 貸す, 借りる lend, borrow　EP ʔánlōɴ　WP ʔàɴlâɴ　(SK hêtəlò)

192-5. (金で) 貸す, 借りる lend, borrow (with money)　EP ʔánlèiɴ　WP ʔàɴléiɴ　(SK hêtəlò)

192-5a. お金 money　EP páichâɴ　WP sé　cf. Burmese /paiʔshàɴ/　(SK sé)

192-6. 送る send　EP θôʊɴ　WP θòuɴ　(SK shɣə́,　ɕə́)

＜対人動作・対物動作＞

193. 会う meet　EP dákhòɴ,　tòɴnóɴ　WP ɗàloʔ,　ɗàkháuɴ　(SK thî(Burmese Sgaw), tókɔ́ʔ(Thai Sgaw))

194. 待つ wait　EP ʔɔ́khò,　ʔánkhò　WP khoʔ　(SK ʔôkhóʔ)

194-1. 真似る imitate, mimic　EP màdòɴ　WP máɗáuɴ

194-2. ほめる praise　EP ʔàʊ　WP ʔouʔ

194-3. 叱る scold　EP ʔánlá　WP ʔàɴlaʔ

195. 殴る, たたく hit, strike　EP dʊ́　WP ɗò　(SK dó)

195-a. たたく knock (door)　EP dʊ́thó　WP ɗòthoʔ　(SK dótəklóʔ)

195-b. 抱く embrace　EP phòʊɴɣôʊɴ　WP wâ

195-1. 頼む ask, request　EP ʔánkèiɴ　WP ʔàɴkéiɴ　(SK xé)

195-2. 手伝う help　EP màchə̀ɴ　WP máshə́　(SK māsə̄)

195-2a. 救う save　EP plài　WP má pháuɴphleʔ　(SK mā pūphlɛ́ʔ)　cf. Mon /prac/

195-a. ぶつかる bump　EP báthài　WP ɓàtheiʔ

196. かみつく bite　EP ʔáiɴ　WP ʔàiɴ　(SK ʔê)

197. 取る take　EP mànī　WP mánê　(SK mānè,　híʔnè)

198. 持つ, つかむ hold　EP kái　WP phàuɴ　(SK phɔ̂)

199. つかまえる catch　EP phóɴ　WP phàuɴ　(SK phɔ̂)

200. 放す release　EP kwɛ́phəjā　WP phlâ　(SK plà)

201. 投げる throw　EP khwái　WP khweiʔ　(SK kwìʔ)

201-1. 棄てる throw away　EP khwáiɕò　WP khweiʔɕoʔ

202. さわる (無意志的に) touch (unvolitionally)　EP bá,　báthài　WP ɓà,　ɓàtheiʔ　(SK bâ)

202-a. さわる (意志的に) touch (volitionally)　EP kái　WP phàuɴ

203. こする rub　EP thàʊ　WP thouʔ　(SK thʊ́ʔ)

204. (ビンなどを) 振る shake　EP ɕʊ̀ɕʊ́　WP θùwâ　(SK wìwà)

204-a. ゆする rock, swing (vt)　EP thʊ́wà　WP thòwaʔ

204-b. ゆれる rock, swing (vi)　EP wàthó　WP wâthoʔ

205. 押す push　EP chánɴ　WP shàɴ　(SK shɔ̂)

206. 引く pull　EP càʊ　WP couʔ　(SK thʊ́ʔ)

206-a. 引きずる drag, trail　EP càʊlé　WP couʔtəleʔ

207. しぼる squeeze　EP bài　WP ɓeiʔ　(SK bíʔ)

207-a. はさむ put something between two things　EP thái　WP theiʔ　(SK tìʔ)

208. 背負う carry on one's back　EP phʊ́　WP plʊ̀　(SK wí)

209. 蹴る kick　EP thè (足の甲で), thə̂ɴ (足のひらで)　WP thə̀ (足の甲, ひらで)　(SK təklàʔ, thú)

210. 踏む step on, tread on　EP jāiɴ　WP jâiɴ　(SK jɔ̀)

210-2. なくなる be lost　EP làɴmā　WP láɴmâ　(SK hámà)

211. かくす hide, conceal　EP kòkíθʊ́　WP ʔàukèθù　(SK pàʔ khúθû)

212. さがす seek　EP ʔánxʊ̂　WP jôxwâ　(SK xʊ́)

213. みつける find　EP dá　WP ɗà　(SK thî)

214. 見せる show　EP dànɛ́　WP ɗəɯʔnài　(SK dʊ́ʔnɛ̂)

215. 置く put　EP kòkí (口語的),　ʔɔ́kí (格式ばっている)　WP ʔàukè　(SK pàʔ)

215-1. 包む wrap　EP bóɴ　WP ɓàuɴ　(SK bô)

215-2. 広げる unfold　EP dà làɴ　WP ɗá láɴ　(SK dá)

215-2a. たたむ to fold　EP dɔ́　WP ɗɔ̀　(SK dɔ̂)

215-4. 入れる put in　EP chʊ̂ làɴ　WP thêiɴ láɴ

215-4a. よそう ladle (cooked rice)　EP bàʊ làɴ　WP ɓəɯʔ láɴ

215-5. 出す put out　EP thàʊ tháɴ　WP thəɯʔ thàɴ　(SK thɯ́ʔ)

215-5a. 追い出す drive out, expel　EP nâɴ　WP nàɴ　(SK nɔ́)

216. 集める collect　EP pəkòʊɴ　WP səɯʔkàɯɴ　(SK thə́phɣô)　cf. Mon　/paʔkom/

217. 作る make　EP tàiɴ　WP táiɴ　(SK té)

218. こわす break(vt)　EP mà ɣàɣòɴ　WP má ɣaʔɣáɯɴ　(SK mā háʔɣɔ̄)

218-a. こわれる break(vi)　EP ɣàɣòɴ　WP ɣaʔɣáɯɴ　(SK hâʔɣɔ̄)

218-b. 割れる break(vi)(as dish, glass)　EP théphà　WP thêphaʔ　(SK θêpháʔ)

218-c. 欠ける break off(vi)(as edge)　EP phó　WP phoʔ　(SK phòʔ)

218-d. ひびが入る crack(vi)　EP xè　WP xái　(SK xɛ̄)

219. 直す mend, repair　EP tàiɴ ɣì　WP má ɣé　(SK bɣɔ́)

220. 裂く tear　EP ɕâɴ　WP ɕàɴ　(SK phɣɔ́)

220-a. 裂ける be torn　EP já　WP jaʔ　(SK ɲàʔ)

221. 曲げる bend　EP bò káiɴ　WP ɓoʔ kàiɴkhwáɴ　(SK bóʔ kê)

221-a. 曲がる to be bent　EP káiɴ　WP kàiɴkhwáɴ　(SK kê)

222. 折る bend to break　EP bò khā　WP ɓoʔ khâ　(SK bóʔ kà)

222-a. 折れる to be broken (long thing)　EP khā　WP khâ　(SK kà)

223. 洗う wash　EP ʔáɴθîjà(手足, 皿などを), ʔáɴchûjwà(衣類などを), phlā(顔を), ʔáɴphlùʊ̀(頭を)　WP θùwaʔ(手足, 皿などを), ʔàɴshòwaʔ(衣類などを), phlâ(顔を), ʔàɴphlúʊ̀(頭を)　(SK θé手足・皿を, shɣûʊ衣類を, plà mèʔ 顔を, pɣī 頭を)

223-a. 水浴びする bathe　EP ʔáɴlūʊ thî　WP ʔàɴlûʊ thì　(SK lùʊ thí)

224. 巻く wind, roll　EP thûʊ tərài(紙などを), khúʊ(糸などを)　WP thù khlêiɴ(紙などを), ɓáiɴ(糸などを)　(SK thú)

225. むすぶ tie　EP kàthə́ɯɴ (糸を結ぶ), càɴthə́ɯɴ (物を何かにゆわえつける), bàiɴ (何かを糸で束ねる)　WP kaʔ (糸を結ぶ), sɔ́ (物を何かにゆわえつける)　(SK sɔ́)

226. ほどく untie　EP kwé làɴ　WP kwè láɴ　(SK xê lɔ̄)

227. かぶせる, おおう cover　EP kà bài, khà bài　WP phoʔ ɓeiʔ　(SK káʔ bìʔ, kā bíʔ)

228. ふくらむ swell　EP kà tháɴ (風船などが), phú tháɴ (水疱などが)　WP phò thàɴ (風船などが), ɓó thàɴ (水疱などが)　(SK kəphó thɔ̂)

229. 突き刺す stab, pierce　EP chè　WP sheʔ　(SK shéʔ)

229-a. 引き抜く pull out　EP thè　WP theʔ　(SK théʔ)

230. 切る cut　EP mà thé (糸などを), phé thé (木などを), dáɴ thé (魚などを), thái (髪の毛を)　WP má theʔ (糸などを), pheʔ theʔ (木などを), ɗàɴ theʔ (魚などを), theiʔ (髪の毛を)　(SK dɔ̂, klɔ́)

230-a. 切れる to be cut　EP thé　WP theʔ　(SK tèʔ)

230-b. 剃る shave　EP lòʊɴ　WP lóɯɴ

231. 混ぜる mix　EP lè dèiɴ　WP lái xəɯʔ　(SK xá xùʔ)

231-a. こねる knead　EP chīcà　WP shíɓoʔ　(SK sìxá)

232. 掘る dig　EP khə́ɯɴ　WP khə̀　(SK khû)

＜一般動作＞

233. する do　EP mà　WP má　(SK mā)

233-1. 始まる begin (vi)　EP tài tháɴ　WP saʔ thàɴ　(SK sáʔ thɔ̂)　cf. Mon　/tac/ 'go out'

233-2. 終わる end　EP ɣòɴ　WP ɣáɯɴ　(SK wī)

234. うごく move (vi)　EP wà　WP ɣáiwaʔ　(SK wáʔ)

234-a. 移動させる move something to another place(vt)　EP θàʊ　WP θəɯʔ　(SK θɯ́ʔ)

234-b. 移動する move to another place(vi)　EP θàʊ θà　WP θəɯʔ θaʔ

234-2. 転ぶ fall down　EP làɴthîphā　WP láɴthíphâ

235. 跳ねる jump　EP phûʊ　WP phùʊ　(SK phúʊ)

236. のぼる go up　EP tháɴ　WP thàɴ　(SK thɔ̂)

237. おりる go down　EP làɴ　WP láɴ　(SK lɔ̄)

238. 落ちる fall　EP làɴthé　WP láɴtheʔ　(SK lɔ̄tèʔ)

238-a. ぶら下がる hanging, pendent　EP làɴchè　WP láɴsháiɴ

239. 濡れた wet　EP cɔ́　WP ɓàsàu　(SK bâcɔ̂)

240. 乾いた dry　EP xâiɴ (魚など), θûʊ (洗濯物, 池など)　WP xàiɴ (洗濯物, 魚など), θwì (池など)　(SK xé, θú)

240-1. 比べる compare　EP thə́xòɴ　WP jôxáɯɴ

240-2. 選ぶ choose　EP lwī　WP rwî　(SK rwé)　cf. Burmese　/ywé/,　Mon　/rùi/

240-3. 慣れる get used　EP jûʊjā　WP jíjâ

240-6. 変える change　EP ʔáɴlè　WP ʔàɴlái

＜知識・精神活動＞

241. 考える think　EP chôɴmóɴ　WP sháɯɴmàɯɴ　(SK shókəmô)

242. 知る know　EP θíʊ̂â　WP θèjà　(SK θêɲá)

242-1. わかる understand　EP ná θí　WP nàθè　(SK nàpə̀)

243. 忘れる forget　EP θànɔ́　WP θaʔnàɴ　(SK θáʔpēnɔ̂)

243-1. 思い出す remember　EP nɔ́ tháɴ　WP nàɴ thàɴ　(SK θênɔ̂ thɔ̂)

243-1a. 覚える memorize　EP thònnáiɴ　WP thâɯɴnàiɴ

244. 教える teach　EP màlʊ́ phí　WP θàuɴlò　(SK θôló)

244-1. 教わる, 学ぶ learn　EP màlʊ́　WP málò　(SK māló)

245. 恐れる fear　EP θàmɛ́　WP θaʔmài　(SK plī)

245-a. 注意する be careful　EP pà θətài　WP thə̀ ʔəθaʔ

245-1. 驚く bet surprised　EP ɕàʊ (驚かされたりしてドキッとする)， təmjâɴ bá θà (驚嘆する)　WP ɕəɯʔ (驚かされたりしてドキッとする)，thɔ́mìthɔ́mà (驚嘆する)　(SK kəmə́kəmâ)

246. 好む like　EP báθà　WP ʔài　(SK ʔɛ̂)
(注) ポー・カレン語で「好む」を一語で言い表すのは難しい。ここで挙げた EP báθàは「欲しい want」、WP ʔài は「愛する love」の意に近い。それでは「好む」はどのように表現されるのか？一例を挙げると、食べ物であれば「食べておいしい」、娯楽などであれば「して楽しい」ということを分離型動詞連続を用いて表す。これがポー・カレン語において「好む」という心理を表現する最も一般的な方法である。

(EP)　jə-　ʔáɴ　khòθá　ʔwí
　1sg　食べる　マンゴー　おいしい
「私はマンゴーが好きだ」

(WP)　jə-　ʔàɴ　khoʔθà　ʔwì
　1sg　食べる　マンゴー　おいしい
「私はマンゴーが好きだ」

(EP)　jə-　pɔ̄　láiʔàʊ　jò　máʊ
　1sg　読む　本　この　楽しい
「私はこの本が好きだ」

(WP)　jə-　phɔ̂　leiʔʔouʔ　jɔ́　məɯʔ
　1sg　読む　本　この　楽しい
「私はこの本が好きだ」

246-a. 愛する love　EP ʔɛ́　WP ʔài　(SK ʔɛ̂)

246-b. 楽しい, 心地よい happy, amused, comfortable　EP máʊ　WP məɯʔ　(SK mɯ̀ʔ)

246-1. 嫌う, 憎む dislike　EP θàɣâiɴ　WP θaʔɣàiɴ, mélái　(SK θáʔhé)

247. 喜ぶ glad　EP θàxwî　WP θaʔxwì　(SK θáʔphɣí)

247-1. 悲しむ sad　EP θàlàɴ　WP θaʔláɴ　(SK θáʔʔɯ́ʔ)

247-3. 信ずる believe　EP nɛ̀ʔáɴ　WP nái　(SK nàʔ)

248. 怒る get angry　EP θàtháɴ　WP θaʔthàɴ　(SK θáʔ thɔ̂)

248-1. ゆるす forgive　EP plɛ̀tɔ̀　WP phlâ

248-2. 恥ずかしがる be ashamed　EP káθà　WP meʔmâi　(SK mɛ̀ʔshɣáʔ)

248-3. 心配する be anxious　EP kətɔ̀　WP khàiɴkeiʔ

248-4. がまんする be patient　EP thōʊɴ　WP thôuɴ　(SK tù)

248-5. 馬鹿な stupid　EP kəthɯ̂　WP ʔəɯʔʔaʔ

249. 心 heart, mind　EP θà　WP θaʔ　(SK θáʔ)

249-1. きちがいの insane, mad　EP phlɯ̄　WP phlɯ̂　(SK plɯ̀)

＜地学＞

250. 空 sky　EP màʊkhʊ́　WP mouʔkhò　(SK múkhô)

251. 雲 cloud　EP chəʔə́ɯɴ　WP shəʔə̀　(SK tàʔə̂)

252. 霧 fog　EP chàɴ　WP sháɴ　(SK pəsɔ̄)

253. 雨が降る to rain　EP chə̀ɴ　WP shə́　(SK sū)

254. かみなり thunder　EP lâɴ　WP làɴ　(SK lɔ́)

254-a. かみなりが鳴る to thunder　EP lâɴ xwèiɴ　WP làɴ xwéiɴ　(SK lɔ́ pɣē)

255. 稲妻が光る to lighten　EP lâɴ wɛ̄dài　WP làɴ wâiɗeiʔ　(SK lɔ́ phláʔ)

256. 虹 rainbow　EP lâɴlàɴʔɔ̀thî (「水を飲みに下りたかみなり」の意)　WP làɴ (「かみなり」に同じ)　(SK tə̀kwɛ̄)

257. 雪 snow　EP なし　WP なし

258. 氷 ice　EP thîkhʊ́lóɴ (「凍った水」の意)　WP thìlôuɴ (「水の石」の意)　(SK thíkòlò)

259. 凍る freeze　EP khʊ́lóɴ　WP khlèiɴláɴɗaʔ　(SK lɔ̄θəkā)

260. 溶ける melt　EP phlī làɴ　WP phî thàɴ　(SK pɣì)

261. 太陽 sun　EP mɯ̄mé　WP mɯ̂meʔ　(SK mɯ̀mɛ̀ʔ)

262. 月 moon　EP là　WP lá　(SK lá)

263. 星 star　EP ɕá　WP ɕà　(SK shâ)

264. 光 light　EP chəphàɴ　WP shəpháɴ　(SK tàkəpɔ̄)

265. かげ shade　EP làɕɯ́　WP làɗɯ́, shəɗɯ́　(SK tàkədɯ́)

266. 明るい light, bright　EP phàɴ　WP pháɴ　(SK kəpɔ̄)

267. 暗い dark　EP khài　WP kheiʔ　(SK khíʔ)

268. 風 wind　EP lì　WP lí　(SK kəlī)

269. 風が吹く wind blows　EP lì ɣɛ̂, lì ʔɯ́　WP lí ɣài, lí ʔù　(SK kəlī ʔú)

269-1. 静かな silent　EP jɯ̄jèiɴ　WP kəsɯ́

269-1a. うるさい noisy　EP θàʊ　WP θouʔ

270. (客観的に) 暑い hot (objectively)　EP khʊ̄　WP khô　(SK kò)

270-a. (主観的に) 暑い hot (subjectively)　EP khʊ̄ʔwì　WP khôθəwí　(SK kòθwáʔ)

271. (客観的に) 寒い cold (objectively)　EP khléiɴ　WP khlèiɴ　(SK khɯ̂)

271-a. (主観的に) 寒い cold (subjectively)　EP ɣɔ̄ɴ
WP ɣâuɴ　(SK ɣò)

272. 暖かい warm　EP lə̀ɴ　WP lə́　(SK lə̀)

272-1. 地面 ground, land　EP ɣáɴkhʊ́　WP ɣàɴkhò　(SK hɔ̂khô)

272-1a. 地震が起きる to earthquake　EP ɣáɴkhʊ́ wà　WP phùshì ɣɯ̂

273. 山 mountain　EP khʊ́lòɴ, lâiɴ (岩山)　WP khòláuɴ　(SK kəsə̀)

274. 森, ジャングル forest　EP mèiɴlá　WP ɕoʔ　(SK pɣà)

275. 野原, 平原 field, plain　EP jwāpràɴ, wāpràɴ　WP shəpláɴphə́　(SK plɔ́pū)

276. 湖, 沼 lake　EP nóɴ　WP nàuɴ　(SK nô)
276-a. 池 pond　EP kəmâ　WP kəmà　cf. Mon /kaʔma/
277. 川 river　EP ɕʊ́khló, thîkhló　WP ɓíkhloʔ, thìkhloʔ　(SK thíkló)　cf. Mon /bi/
278. 泡 bubble　EP pjàʊ　WP thìʔəlʊ̂　(SK thíθəbɣé, sîpóló)
279. 沈む sink　EP lànbə̀ɴ　WP lánɓə́　(SK lɔ̄blə́)
280. 浮かび上がる float　EP tháɴphɔ̂　WP thàɴphɔ̀　(SK thɔ̂phɔ́)
281. 流れる flow　EP lànjwà　WP lánjwá　(SK lɔ̄jwā)
282. 川岸 shore　EP ɕʊ́nàiɴ　WP thìkhloʔnáiɴ　(SK kə̀nī)
283. 海 sea　EP mâchəmài　WP pànlè　(SK pɔ̂lê)　cf. Mon /saʔmasaʔmac/, Burmese /pìɴlè/
284. 波 wave　EP ləpɔ̀　WP ləpɔ́　(SK ləpɔ́)　cf. Mon /lèəʔpɔh/
285. 島 island　EP kò　WP klóuɴ　(SK kɔ́ʔ)　cf. Mon /taʔkɔʔ/, Thai /kɔ̀ʔ/
286. 石 stone　EP lōʊɴ　WP lôuɴ　(SK lə̀)
286-a. 石灰 limestone　EP bə̀ɴ　WP ɓə́
287. 砂 sand　EP pətì　WP meʔ　(SK méʔ)　cf. Mon /haʔtɒi/
288. 土, 泥 soil, mud　EP pháí　WP pheiʔ　(SK pìʔ)
288-3. 鉄 iron　EP thà　WP thaʔ　(SK tháʔ)
288-4. 金 gold　EP thôɴ　WP thàuɴ　(SK thú)
288-5. 銀 silver　EP cì　WP sé　(SK sé)
288-6. 銅 copper　EP thōɴ　WP thâuɴ　(SK tò)

＜植物＞

289. 木 tree　EP θéiɴ　WP θèiɴ　(SK θê)
290. 草 grass　EP nánɴ, nɔ́　WP nàɴ　(SK nɔ̂)
290-a. 草をむしる pick off grass　EP thè nɔ́　WP theʔ nàɴ
291. 幹 trunk　EP θéiɴ ʔəthə́ɯɴ　WP θèiɴ ʔəthə̀　(SK ʔəthû)
292. 樹皮 bark　EP θéiɴphài　WP θèiɴpheiʔ　(SK ʔəbê)
293. 茎 stem　EP ʔəbòɴxwí　WP ʔəɓáuɴxwì　(SK ʔəbɔ́)
294. 枝 branch　EP ʔəthàiɴ　WP ʔətháiɴ　(SK θêdé)
295. 葉 leaf　EP ʔəlá　WP ʔəlà　(SK ʔəlâ)
295-1. つる creeper, vine　EP mūɯ　WP mʊ̂
295-2. 棘 prickle, thorn　EP chəchʊ́　WP shəshù　(SK tàshɣʊ̂)
296. 花 flower　EP phɔ̂　WP phàu　(SK phɔ́)
297. 根 root　EP ʔəwī　WP ʔəwî　(SK ʔəɣì)
298. 生える grow, come out　EP mé tháɴ　WP mài thàɴ　(SK mé thɔ̂)
298-1. 実がなる bear fruit　EP θá tháɴ　WP θà thàɴ　(SK θâ thɔ̂)
299. 枯れる wither　EP lànjí　WP lánjeiʔ　(SK lɔ̄ɲwíʔ)
299-a. ココヤシ coconut　EP phlɔ̀　WP phláu　(SK xɔ̄)
299-b. サトウキビ sugar cane　EP chîphó　WP shìphoʔ　(SK thípòʔ)
299-1. 竹　EP wá　WP wà　(SK wâ)
299-2. きのこ mushroom　EP xə̀ɴ　WP xə́

＜植物＞

300. 動物 animal　EP chəphʊ́chəlì　WP shəphòshəxâ　(SK shâphókɔ̀phó)
301. 鳥 bird　EP thʊ́　WP thò　(SK thô)
302. 魚 fish　EP já　WP jà　(SK ɲâ)
303. 虫 insect　EP chəphʊ́chəxā　WP shəphòshəxâ　(SK tàphóxà)
304. 犬 dog　EP thwí　WP thwì　(SK thwî)
304-1. 猫 cat　EP mìjɔ̀　WP mìjáu　(SK θâmíjɔ̄)
304-2. 馬 horse　EP kəθí　WP θè　(SK kəθê)
304-3. 牛 cattle, etc.　(注) 両方言とも地域によって様々な呼び方がある　EP khlɔ̄, wɔ̀béiɴ, chənə̂ɴ　WP khlâu, shəméiɴ　(SK klɔ̀)　cf. Mon /klèə/
304-3a. 水牛 baffalo　EP pənā　WP pənâ　(SK pənà)
304-6. 豚 pig　EP thò　WP thoʔ　(SK thóʔ)
304-7. 鶏 chicken　EP châɴ　WP shàɴ　(SK shɔ́)
304-9. 虎 tiger　EP khî　WP ɓɔ̂　(SK bɔ̂θô)
304-14. 猿 monkey　EP chəʔàʊ　WP shəʔouʔ　(SK tāʔúʔ)
304-15. 兎 rabit　EP pədè　WP pəɗâi　(SK pədé)　cf. Mon /haʔtai/
304-16. 鼠 mouse　EP jūɯ　WP jû　(SK jʊ̀ɯ)
304-17. 象 elephant　EP kəchâɴ　WP kəshàɴ　(SK kəshɔ́)
304-21. 蟹 crab　EP chwé　WP shwè　(SK shwê)
304-22. 蝦 shrimp　EP θədáɴ　WP θəɗàɴ　(SK θədɔ̂)
305. 貝 shellfish　EP khrʊ́　WP khrò　(SK khlô)
305-a. 貝がら shell　EP kʊ̀ɯ　WP kú
305-4. 鵞鳥 (ガチョウ) goose　EP thʊ́thà　WP thòthá　(SK thôdê)
305-5. 山鳩 rufous turtle-dove　EP lwī　WP lwî　(SK lwì)
305-6. 鴉 (カラス) crow　EP klà　WP klaʔ
305-7. 雀 sparrow　EP thʊ́xwài　WP thòxweiʔ, thòθouʔphò　(SK thôphíʔ)
305-8. 蝶々 butterfly　EP jâɴkòphèiɴ　WP phìɗoʔkhá　(SK sɔ̄kəpē)
306. アリ ant　EP thəɯɴxwī　WP thʊ̂　(SK tə̀)
306-1. 蜘蛛 spider　EP kàɴchɔ̀　WP kháɴ　(SK kəpɔ̄)
306-2. 蜜蜂 bee　EP nî　WP nè　(SK kəné)
307. 蚊 mosquito　EP cícòɴ　WP shəphò　(SK pəsɔ̄)
307-a. 蚊帳 mosquito net　EP θòʊɴ　WP tənàu　cf. Mon /kaʔnao/

308. ハエ fly　EP dùlâ　WP ɗúlà (SK θâbúlá, θâbílá)
308-a. ゴキブリ cockroach　EP phlɔ̀θánā　WP phláuθà
310. しらみ louse　EP θə́ɯɴ　WP θə̀ (SK θû)
311. ヘビ snake　EP wūī　WP ɣû (SK ɣù)
311-1a. ヤモリ house lizard　EP dànlāiɴ　WP ɗáɴlâiɴ
311-1b. カメ turtle　EP khlài　WP khleiʔ (SK khlíʔ)
311-1A. カエル frog　EP dí　WP ɗê (SK dê)
312. つの horn　EP ʔənòʊɴ　WP ʔənóuɴ (SK ʔənə̄)
314. 尾 tail　EP ʔəmī　WP ʔəmê (SK ʔəmè)
315. くちばし beak　EP ʔənó　WP ʔənoʔ (SK ʔənóʔ)
316. つばさ wing　EP ʔədài　WP ʔəɗeiʔ (SK ʔədíʔ)
317. 羽毛 feather　EP thǘchóɴ　WP thòshàuɴ (SK ʔəshû)
318. 巣 nest　EP ʔəθwî　WP ʔəθwì (SK ʔəθwí)
319. 飛ぶ to fly　EP jùɯ　WP jú (SK jū)
320. 泳ぐ swim　EP jā thî　WP jâ thì (SK pɔ̀ thí)
320-1. 鳴く cry (animals or insects)　EP ɣáɴkò　WP ɣànkoʔ
320-1a. 吠える bark (dog)　EP màɴ　WP mánɴ (SK mɔ̄)
320-2. 卵を生む lay eggs　EP dí làɴ　WP dì lánɴ (SK dî lɔ̄)
320-3. 飼う raise, rear　EP ʔánbǘ làɴ　WP ʔànlǘ (SK bǘ lɔ̄)

＜形・色・音・匂＞

321. 円い round (circle)　EP wànkhwàɴ　WP khwánɴ (SK kəwɔ̄)
321-a. 丸い round (sphere)　EP póʊɴlóʊɴ, phóʊɴlóʊɴ　WP phlòuɴ (SK phlɔ̂)
322. するどい (包丁の刃など) sharp　EP ʔáiɴ (85.「かむ」に同じ)　WP nəɯʔ (170.「入る」に同じ)　(SK ʔê)
322-a. とがっている (針など) sharp-pointed　EP cùɯ　WP sú (SK sú)
323. 鈍い dull　EP làɴlài　WP láɴleiʔ (SK lū)
323-1. 平らな flat　EP xǘ, xǘxàɴ　WP xánɴ (SK pə̄)
324. 穴 (壁などの突き抜けた穴) hole　EP chəphōʊɴ　WP ʔəphôuɴ
324-a. 穴 (地面などの突き抜けていない穴) hollow　EP chəphàɴ　WP ʔəphə́ (SK tàpū)
324-1. くぼんだ be hollow　EP làɴʔóʊɴ　WP lánɴʔòuɴ (SK lɔ̄pə̄)
325. まっすぐな straight　EP lòɴ　WP láuɴ (SK lō)
325-4. 物 thing　EP chə̀, chə̄　WP shə̂ (SK tà)
326. 大きい big　EP dǒ　WP xó (SK dô)
327. 小さい small　EP pî　WP sheiʔ (SK shíʔ)
328. 長い long　EP thàu　WP thɔ̂ (SK thɔ́)
328-a. (時間が) 長い long (time)　EP jái　WP jeiʔ (SK jìʔ)
329. 短い short　EP phɨ́　WP phɨ̀ (SK phû)
329-a. (時間が) 短い short (time)　EP mɔ̄　WP mɔ̂
330. 厚い thick　EP tánɴ　WP tàɴ (SK tɔ̂)
331. 薄い thin　EP bə̀ɴ　WP ɓə́ (SK bú)
332. 色 color　EP ʔəljā, ʔəjôɴ　WP ʔəlwê (SK ʔəlwê)　cf. Mon. /lɛ̀əʔjɛ̀əh/, Burmese /ʔəyàuɴ/
333. 赤い red　EP ɣɔ̀, wɔ̀　WP ɣáu (SK ɣɔ̄)
334. 青い blue　EP lâ　WP pjà (SK lá)
335. 黄色い yellow　EP bàɴ　WP ɓánɴ (SK bɔ́)
336. 緑色の green　EP jî　WP jè (SK láhé)
337. 白い white　EP ʔwà　WP ɓwá (SK wá)
338. 黒い black　EP θə̂ɴ　WP θə̀ (SK θú)
338-a. 茶色い brown　EP làʊ　WP louʔ (SK xáʔ)
338-1. 塗る to paint　EP ɣǘ　WP ɣùɯ (SK phú)
339. 音 sound　EP ʔəθɔ̂　WP ʔəθàu (SK tàθɔ̂)
340. におう to smell　EP nə̂ɴ　WP nə̀ (SK nə́)

＜性質＞

340-4. 勇気のある brave　EP bə́ɯɴ (一時的な気持), dùɯ (恒常的性格)　WP bə̀ (一時的な気持), dú (恒常的性格)　(SK bû, dú)
340-8. 怠ける lazy　EP cə́ɯɴ　WP cə̀ (SK kə̀)
341. 強い strong　EP chóɴ　WP shàuɴ (SK shû)
343. 正しい correct, right　EP bá　WP ɓà (SK bâ)
343-A. 間違った wrong　EP má　WP ɓàmà (SK kəmâ)
344. 良い good　EP ɣì, tèiɴnèiɴ　WP ɣé, məŋâ (SK ɣē)
344-A. 似合う, ふさわしい to suit, to fit　EP kəlɨ̀　WP kriʔ (SK krə́ʔ)　cf. Mon /kraək/
345. 悪い bad　EP ʔə̀ɴ　WP ʔə́ (SK ʔə́)
345-1. 易しい easy　EP jɔ̂　WP jàu (SK ɲɔ́)
345-2. 難しい difficult　EP ká　WP kà (SK kɔ́)
345-2a. 困難 difficulcy, hardship　EP chəkáchəɣɛ̀　WP shəkàshəɣái
345-4. きつい tight　EP kəthái　WP kaʔ (SK xíʔ)
345-5. ゆるい loose　EP khlâɴ　WP khlàɴ (SK klɔ́)　cf. Burmese /chàuɴ/ (Written Burmese khyoŋ) , Mon /khlaɲ/
346. すべっこい smooth　EP phlî　WP phlè (SK blé)
347. 古い old　EP lāɴlì　WP lâɴlí (SK lī)
348. 新しい new　EP θâɴ　WP θàɴ (SK θɔ́)
349. 美しい beautiful　EP xîlà　WP xìlá (SK xílā)
349-1. みにくい ugly　EP láʔə̀ɴ　WP xòxâ
350. 清潔な clean　EP pràɴ, chêiɴ　WP pláɴ, shèiɴ (SK kəshɣɔ́)

351. 汚い dirty　EP cîcá　WP ɓàθaʔlò (SK bâʔɔ́)　(注)WP 形式に対応する EP の θàlɔ́ は「気味が悪い detest,loathsome」の意。EP 形式に対応する WP の形式は存在しない。

352. 固い hard　EP nòɴ　WP náuɴ (SK kō)

352-a. 堅固な firm, solid　EP khɔ̂ɴ　WP khɔ̀　cf. Burmese /khàiɴ/, Mon /khaəŋ/

353. 柔らかい (綿など) soft (as cotton)　EP pháʊ　WP phouʔ (SK kəpʊ̀ʔ)

353-a. 柔らかい (調理した肉など) soft (as meat)　EP bɛ̀　WP ɓái

353-b. 柔らかい (肌が) soft (as skin)　EP báɴ　WP ɓàɴ

＜空間＞

353-1. 場所 place　EP ʔəlāɴ　WP ʔəlâɴ (SK tàlɔ̀)

354. 前 front　EP ʔəméjâ　WP ʔəmeʔjà (SK ʔəmɛ̀ʔɲá)

355. 後 back　EP ʔəlāɴkhâiɴ　WP ʔəlâɴkhàiɴ (SK ʔəlɔ̀khí)

356. 間 between　EP ʔəklà, ʔəθàklà　WP ʔəklá (SK ʔəklá)

357. 上 upside　EP ʔəphâɴkhʊ́　WP ʔəpháɴkhò (SK ʔəphɔ́khô)

358. 下 downside　EP ʔəphâɴlá　WP ʔəphàɴlaʔ (SK ʔəphɔ́làʔ)

359. 中 inside　EP ʔəphàɴ　WP ʔəphɔ́ (SK ʔəpū)

360. 外 outside　EP khôɴ　WP khàuɴ (SK ʔəkhlɔ́)

361. 右 right　EP ʔəxò　WP sùthwè (SK sʊ́thwɛ́)

362. 左 left　EP ʔəcí　WP sùsè (SK sʊ́sê)

363. 先端 point, tip　EP ʔəkhʊ́thò　WP ʔəkhìthoʔ (SK ʔədɔ́khô)

363-a. 端 (はし) edge　EP ʔənàiɴ　WP ʔənáiɴ

364. 近い near　EP bàu　WP ɓouʔ (SK búʔ)

365. 遠い far　EP jàiɴ　WP jáiɴ (SK jī)

366. 高い high　EP thɔ̂　WP thàu (SK thɔ́) cf. 328

367. 低い low　EP phɨ̂　WP phɨ̀ (SK phʊ̂) cf. 329

368. 深い deep　EP jó　WP joʔ (SK jòʔ)

369. 浅い shallow　EP chūɪ　WP phɨ̀ (SK dɔ̂)

370. 広い wide　EP lɛ̄　WP lâi (SK lɛ̀)

371. 狭い narrow　EP ʔéiɴ　WP ʔàiɴ (SK ʔî)

372. いっしょに together　EP phléphlé　WP màuɴxáuɴ (cf. 455)　(SK θəkóʔθəkóʔ)

373. 満ちた full　EP xwè　WP xwé (SK pɣɛ̄)

374. 空っぽの empty　EP plɔ̀plɔ̀　WP ʔókhló (SK ʔôkəlɔ́)

374-a. 暇な free　EP khlàʊ　WP khàu (SK khʊ́uʔ)

375-1. 東 east　EP mūtháɴ　WP mʊ̂thàɴ (SK mʊ̀thô)

375-2. 西 west　EP mūnáʊ　WP mʊ̂nəɯʔ (SK mʊ̀nʊ̀ʔ)

375-3. 南 south　EP máithàkhʊ́　WP mʊ̂khèiɴ, líkhì (SK kəlīthíʔ)

375-4. 北 north　EP kháɴthàilá　WP líthei̇ʔ (SK kəlīsòʔ)　(注) 南と北の呼び方は地域によって異なることが多く、両方言とも 375-3, 375-4 は一例にすぎない。また南と北の呼び方を知らないポー・カレン人も多い。スゴー・カレン語でもこれと似た傾向がある。

＜時間＞

376. 朝 morning　EP kəɣɔ̀, kəwɔ̀　WP ɣáukhàu (SK mʊ̀ɣɔ̄)

376-1. 正午 noon　EP mūthə́ɯɴ　WP mʊ̂thɔ̀ (SK mʊ̀thô)

377. 昼間 daytime　EP kəmūchâ　WP mʊ̂shà (SK mʊ̀shá)

378. 夕方 evening　EP kəɣá　WP mʊ̂ɣà (SK mʊ̀há)

379. 夜 night　EP kəmūnà　WP mʊ̂ná (SK mʊ̀nā)

380. 早い early　EP chʊ̂　WP shò (SK shó)

380-a. 朝早い early in the morning　EP ɣɔ̀, wɔ̀　WP ɣáu (SK ɣɔ̄)

381. おそい late　EP təcwī, phlài　WP jeiʔnâɴ, nâucaʔ (SK phlíʔ, sɛ̄khí)　cf. Burmese /nauʔcâ-/

382. 今 now　EP ʔəkhâjò　WP ɓójɔ́ (SK khɛ́ʔī)

383. ～する前に before　EP kəlā... dài bá　WP ləkhləɯʔ... ɗeiʔ ɓà　(注)EP の kəlā はおそらく Pali kāla の借用 (第 21 章参照)。一方、WP の ləkhləɯʔ は khləɯʔ「間に合う」に否定辞がついたもの。

(EP) kəlā ʔəwê lə- ɣê dài
とき 3se (否) 来る まだ
bá | jə- mə- lì
(否') 1sg (非現) 行く
「彼が来る前に私は行く」

(WP) ləkhləɯʔ ʔəwè lə- ɣài ɗeiʔ
前 3se (否) 来る まだ
ɓà | jə- kə- lé
(否') 1sg (非現) 行く
「彼が来る前に私は行く」

383-a. 以前 before, formerly　EP ʔəwī　WP ʔəɣʊ̂

384. あとで afterwards　EP ʔəlāɴkhâiɴ, ləkhâiɴ　WP ʔəlâɴkhàiɴ, ləkhàiɴ (SK lɔ́ khí)

385. いつも always　EP klə̀　WP kəthìxâɴ (SK thɔ́bó)

386. しょっちゅう often　EP chʊ̀chūchʊ̀chū, ləthəlàiləthəlài　WP khoʔmaʔkhoʔmaʔ (SK tənɛ́ʔnɛ́ʔ)

386-1. ときどき sometimes　EP kəblàɴkəthā　WP ɓàkəcàcà

387. 今日 today　EP lənìjò　WP kəníjɔ́ (SK tənīʔī)

388. 昨日 yesterday　EP mūɣá　WP mʊ̂ɣà (SK məhákə̀ʔ)

388-a. 一昨日 the day before yesterday　EP təɣá　WP təɣàní, kəɣàní

389. 明日 tomorrow　EP kèkhó　WP kòmʊ̂shàiní (SK khɛ́mʊ̀shê)

389-a. 明後日 the day after tomorrow　EP kètɔ̀khó　WP kòtəshàiní

390. 毎日 everyday　EP kò nì dè, θèiθêinì　WP koʔ ní ɗeʔ, kòníkòní　(SK kóʔ nī déʔ)

391. 日 day　EP mūnì　WP mûní　(SK múnī)

391-A. 時間 time　EP ʔəchɔ̂ɴʔəthɔ̄, ʔəkhêiɴʔəkhâ　WP ʔəshə̀ʔəthɔ̂, ʔəkhèiɴʔəkhà　(SK tàshɔ́kətɔ̀)

391-1. 一週間 one week　EP lə- nwê　WP kə- nwì　(SK tə- nwí)

391-2. 月 month　EP là　WP lá　(SK lá)

392. 年 year　EP néiɴ　WP nèiɴ　(SK nî)

392-a. 昨年 last year　EP məɣī　WP màɴkánèiɴ

392-b. 来年 next year　EP nāɴ néiɴ dɔ̀　WP nâɴ nèiɴ ɗɔʔ

392-c. 暑期 hot season　EP chəjɔ̀khâ　WP shəjáukhà

392-d. 雨期 rainy season　EP chəchə̀ɴkhâ　WP shəshɔ́khà

392-e. 涼期 cool season　EP chəɣōɴkhâ　WP shəɣâuɴkhà

392-1. 年齢 age　EP ʔəyáʊ　WP θaʔ　(SK θáʔ)　cf. Mon　/ʔayək/,　Pali　/āyu/

＜数・量＞

393. 数える count　EP ná　WP wî　(SK ɣì)

394. 1　EP lə̂ɴ / lə-　WP lə̀ / kə-　(SK tə́)　(注)EP,WP ともにスラッシュの左は単独で使われる場合の形。スラッシュの右は助数名詞が後続する場合の形。以下同様。併記しない場合はどちらも同じ形が使われる。

395. 2　EP nî / nī　WP nì / ní　(SK khí)

396. 3　EP θə̂ɴ / θə̄ɴ　WP θə̀ / θə́　(SK θə́)

397. 4　EP lī　WP lî　(SK lwì)

398. 5　EP jɛ̄　WP jâi　(SK jɛ̀)

399. 6　EP xûi / xūi　WP xù / xú　(SK xúi)

400. 7　EP nwê / nwē　WP nwì / nwí　(SK nwí)

401. 8　EP xó　WP xoʔ　(SK xóʔ)

402. 9　EP khwī　WP khwì / khwí　(SK khwí)

403. 10　EP ləchî　WP kəshì　(SK təshí)

404. 20　EP nīchî　WP níshì　(SK khíshí)

405. 100　EP ləjà, ləphāɴ (物の価格についてのみ使われる形)　WP kəjá　(SK təkəjā)

405-11. 1,000　EP ləthôɴ, ləmə̂ɴ (物の価格についてのみ使われる形)　WP kəthàuɴ　(SK təkəthó)

405-14. 10,000　EP ləlá　WP kəlaʔ

406. 回 time　EP phə̂ɴ, blàɴ　WP cà, ɓlánɴ　(SK blɔ́)

406-a. 1 個 (一般的) one thing　EP lə- dùi　WP kə- ɗúi　(SK tə- dúi)

406-b. 1 回 one time　EP lə- phə̂ɴ　WP kə- cà　(SK tə- blɔ́)

406-c. 1 枚 one flat thing　EP lə- béiɴ　WP kə- ɓèiɴ　(SK tə- bê)

406-d. 1 個 (丸いもの) one round thing　EP lə- phlóʊɴ　WP kə- phlòuɴ　(SK tə- phlɔ̂)

406-e. 1 本 one long thing　EP lə- bòɴ　WP kə- ɓáuɴ　(SK tə- bó)

406-f. 1 人 one person　EP lə- ɣà　WP kə- ɣá　(SK tə- ɣā)

406-g. 1 匹 one animal　EP lə- dùi　WP kə- ɗúi　(SK tə- dúi)　(注) 両方言とも哺乳類を数えるときにはこれを用いるが、鳥類・爬虫類・昆虫などを数えるときには EP béiɴ,　WP ɓèiɴを用いる (cf.406-c)。ただし蛇を数えるときには EP bòɴ,　WP ɓáuɴを用いる (cf.406-e)

406-h. 1 台 one vehicle　EP lə- khʊ́　WP kə- khò　(SK tə- khô)

406-5. 二人目 second person　EP nī ɣà lə- ɣà　WP ní ɣá kə- ɣá　(SK khí ɣā tə- ɣā)

407. 全部 all　EP láʊchêiɴ　WP thɔ́ ʔəlou　(SK khɛ́lə̀ʔ)

407-1. 誰も everyone　EP kò ɣà dè　WP koʔ ɣá ɗeʔ　(SK kóʔ ɣā déʔ)

408. 半分 half　EP lətəwà　WP kətəwaʔ　(SK təwáʔ)

408-4. 測る, 計る, 量る measure　EP thʊ́　WP thò　(SK thô)

409. 重い heavy　EP xə̂ɴ　WP xə̀　(SK xə́)

410. 軽い light　EP xwî　WP xwì　(SK phɣí)

411. 多い many　EP ʔá　WP ʔà　(SK ʔá)

412. 少ない few　EP ɕà　WP ɕá　(SK sɣā)

＜代名詞など＞

413. わたし I　EP jə̀　WP já　(SK jā)　(注) 人称代名詞は、動詞や前置詞の目的語位置に現れる形 (第二形) を挙げておく。

414. わたしたち we　EP hə̀　WP bá (ɓでなく b であることに注意)　(SK pɣā)

415. おまえ thou　EP nə̀　WP ná　(SK nā)

416. おまえたち ye　EP nəθí　WP nəθì　(SK θúi)

417. 彼, 彼女 he, she　EP ʔə̀, ʔəwê　WP ʔəwè　(SK ʔɔ̄, ʔəwɛ́)

418. 彼ら, 彼女ら they　EP ʔəθí　WP ʔəwéθì　(SK ʔəwɛ́θê)

419. 自分 oneself　EP nâɴkəchā　WP nàɴkəshâ　(SK kəsà)

420. これ this one　EP ʔəjò　WP ʔəjɔ́　(SK ʔəʔī)

421. あれ, それ that one　EP ʔənɔ́　WP ʔənɔ̀　(SK ʔənê)

422. ここに here　EP lê jò, thōɴ jò　WP lə- jɔ́, thəjɔ́　(SK lə́ ʔī)

423. あそこに, そこに there　EP lé nɔ́, thōɴ nɔ́　WP lə- nɔ̂, thənɔ̂　(SK lə́ nê)

424. 誰 who　EP pɔ̀, phlòʊɴ　WP məpá　(SK mətā)

(EP)　pɔ̀　lì　lê
　　誰　行く　(疑)
　　「誰が行ったのか？」

(WP)　məpá　lé　lài
　　誰　行く　(疑)
　　「誰が行ったのか？」

425. 何 what　EP chənɔ́　WP mənɔ̀, mənài (SK mənūī)

(EP) nə- ʔáɴ chənɔ́ lê
2sg 食べる 何 (疑)
「あなたは何を食べたのか？」

(WP) nə- ʔàɴ mənɔ̀ lài
2sg 食べる 何 (疑)
「あなたは何を食べたのか？」

426. どれ which　EP khɔ̀khɔ̂+ 助動詞詞　WP thəthə- ＋助動詞

(EP) nə- ʔáɴ khɔ̀khɔ̂ dùɪ lê
2sg 食べる どの ～個 (疑)
「あなたはどれを食べたのか？」

(WP) nə- ʔàɴ thəthə- dúɪ lài
2sg 食べる どの ～個 (疑)
「あなたはどれを食べたのか？」

427. どのように how　EP bêθí lê, bêθíθò lê, píθò lê　WP pəθè lài (SK dí? lê)

(EP) nə- ʔáɴ mì bêθí lê
2sg 食べる ご飯 いかに (疑)
「あなたはご飯をどのように食べますか？」

(WP) nə- ʔàɴ mé pəθè lài
2sg 食べる ご飯 いかに (疑)
「あなたはご飯をどのように食べますか？」

428. どこ where　EP khɔ̂ lè　WP khəlài, thəlài (SK phélê)

(EP) nə- ʔáɴ mì khɔ̂ lè
2sg 食べる ご飯 どこ (疑)
「あなたはご飯をどこで食べましたか？」

(WP) nə- ʔàɴ mé khəlài
2sg 食べる ご飯 どこで
「あなたはご飯をどこで食べましたか？」

429. いつ when　EP ɕìɕí lê, ɕàiɕái lê　WP məshei ʔlài (SK ʔəkhá phélê)

(EP) nə- ʔáɴ mì ɕìɕí lê
2sg 食べる ご飯 いつ (疑)
「あなたはご飯をいつ食べましたか？」

(WP) nə- ʔàɴ mé məshei? lài
2sg 食べる ご飯 いつ (疑)
「あなたはご飯をいつ食べましたか？」

430. いくつ how many　EP xwē　WP xwê (SK pɣē)　(注) 後ろに助数名詞を置いて用いる。

(EP) khòθá xwē phlóʊɴ lê
マンゴー いくつ ～個 (疑)
「いくつのマンゴーか？」

(WP) khoʔθà xwê phlòuɴ lài
マンゴー いくつ ～個 (疑)
「いくつのマンゴーか？」

430-1. いくら how much　EP ɕá lê　WP xwêθè lài (SK shíʔʔá lê)

(EP) bá phlâɴ ɕá lê
(当為) 払う いくら (疑)
「いくら払ねばならなかったのか？」

(WP) ɓà phlàɴ xwêθè lài
(当為) 払う いくら (疑)
「いくら払ねばならなかったのか？」

431. いくつか some　EP kənɔ̀nɔ̀, lənɔ̀nɔ̀　WP lənáɴnáɴ (SK tənɔ̄nɔ̄)

431-a. 少し a little　EP ləcè　WP kəshei? (SK təsɛ́ʔ)

＜副詞・接続詞など＞

431-1. とても, 非常に very　EP châ, cwá, nànàlé　WP ɗòmaʔ, ʔácí, naʔnaʔleʔ (SK dômáʔ, náʔmáʔ)　cf. Burmese /ʔájí/

(EP) ɣì châ
良い 大変
「非常に良い」

(WP) məŋâ ʔácí
良い 大変
「非常に良い」

431-1a. あまり ～でない not very　EP pəθài　WP phoʔnɔ̀

(EP) ɣì pəθài ʔé
良い あまり (否)
「あまり良くない」

(WP) məŋâ phoʔnɔ̀ ʔeʔ
良い それほど (否)
「あまり良くない」

431-2. 最良の best　EP ɣì tháʊ　WP ɣé thəɯʔ (SK ɣé kətə̀)

431-3. 全然 not at all　EP nāɴ ... ʔé　WP náɴ ... ʔeʔ　両方言とも、間に助数名詞を入れ、全体を文末に置く。 (SK nɔ́ tə- ... bâ)

(EP) phlòʊɴ ʔɔ́ nāɴ ɣà ʔé
人 いる (少数) ～人 (否)
「人が一人もいない」

(WP) pəçá ʔàu náɴ ɣá ʔeʔ
人 いる (少数) ～人 (否)
「人が一人もいない」

431-4. ～すぎる too ...　EP ... thəlɔ̂ɴ　WP ... lɨ̀ (SK ... lùʔkwìʔ)

(EP) pî thəlɔ̂ɴ
小さい すぎる
「小さすぎる」(分離型動詞連続)

(WP) sheiʔ lɨ̀
小さい すぎる
「小さすぎる」

431-5. より良い better　EP ɣì dá　WP ɣé nàiɴ (SK ɣé nè)　(注)EP の dáおよび WP の nàiɴはともに動詞助詞。前置詞ではない。

(EP) ʔəjò ɣì dá ʔənɔ́
これ 良い より あれ
「これはそれより良い」

(WP) ʔəjɔ́ ɣé nàiɴ ʔənɔ̀
これ 良い より あれ
「これはそれより良い」

432. また again　EP dɔ̀, nāɴ phɔ̂ɴ dɔ̀　WP ɗɔʔ, nâɴ cà ɗɔʔ (SK kədɔ́ʔ, nɔ́ tə- blɔ́)

433. まだ yet, still　EP dài　WP ɗeiʔ (SK díʔ)

(EP) ʔəwê ʔáɴ θàkwìθá dài
3se 食べる バナナ まだ
「彼はまだバナナを食べている」

(WP) ʔəwè ʔàɴ θaʔklúθà ɗeiʔ
3se 食べる バナナ まだ
「彼はまだバナナを食べている」

434. もう already, any longer　EP jàʊ (肯定文で) , lə̀ɴ (否定文で)　WP jouʔ (肯定文で) , lə́ (否定文で)　(SK lí, lə̄)

(EP)　ʔəwê　lì　jàʊ
3se　行く　(完)
「彼はもう行ってしまった」

(WP)　ʔəwè　lé　jouʔ
3se　行く　(完)
「彼はもう行ってしまった」

(EP)　ʔəwê　lì　lə̀ɴ　ʔé
3se　行く　もう　(否)
「彼はもう行かない」

(WP)　ʔəwè　lé　lə́　ʔeʔ
3se　行く　もう　(否)
「彼はもう行かない」

435. もし if　EP ʔè...　WP ... ɓó　(SK mè...)

(EP)　ʔəwê　ʔè　ɣɛ̂ |
3se　(条件)　来る

jə-　lì　ʔé
1sg　行く　(否)
「彼が来るなら私は行かない」

(WP)　ʔəwè　ɣài　ɓó |
3se　来る　(条件)

jə-　lé　ʔeʔ
1sg　行く　(否)
「彼が来るなら私は行かない」

＜助詞など＞

436. ～へ,～に (到着点) to　EP lə- , lé, lʊ̂　WP lə- , lə́　(SK lə́)

(EP)　jə-　lì　lé　ləkōʊɴ
1sg　行く　(場)　ラングーン
「私はラングーンに行った」

(WP)　jə-　lé　lə́　təkhóuɴ
1sg　行く　(斜)　ラングーン
「私はラングーンに行った」

437. ～まで till　EP thōɴ　WP thə́　(SK tʊ̄)
cf. EP thòɴ「着く」WP tháuɴ「着く」(233-2)

(EP)　thōɴ　ʔə-　thòɴ　lə-　nàdì
まで　3sg　着く　1　時
「1 時まで」

(WP)　thə́　ʔə-　tháuɴ　kə-　nàrì
まで　3sg　着く　1　時
「1 時まで」

438. ～から from　EP lə- , lé, lʊ̂　WP lə- , lə́　(SK lə́)

(EP)　jə-　ɣɛ̂　lé　ləkōʊɴ
1sg　来る　(場)　ラングーン
「私はラングーンから来た」

(WP)　jə-　ɣài　lə́　təkhóuɴ
1sg　来る　(斜)　ラングーン
「私はラングーンから来た」

439. ～で; に (場所) in　EP lə- , lé, lʊ̂　WP lə- , lə́　(SK lə́)

(EP)　jə-　ʔɔ́　lé　ləkōʊɴ
1sg　いる　(場)　ラングーン
「私はラングーンにいる」

(WP)　jə-　ʔàu　lə́　təkhóuɴ
1sg　いる　(斜)　ラングーン
「私はラングーンにいる」

441. ～と (共同) with　EP dē, dè　WP lə- , lə́　(SK dɔ́ʔ)

(EP)　jə-　lì　ləkōʊɴ　dē　ʔə̀
1sg　行く　ラングーン　(共)　3SG
「私は彼とラングーンに行った」

(WP)　jə-　lé　təkhóuɴ　lə́　ʔəwè
1sg　行く　ラングーン　(斜)　3sg
「私は彼とラングーンに行った」

442. ～と (列挙) and　EP dè　WP lə- , lə́　(SK dɔ́ʔ)

(EP)　ʔəjò　dē　ʔəjò
これ　(列挙)　これ
「これとこれ」

(WP)　ʔəjɔ́　lə́　ʔəjɔ́
これ　(斜)　これ
「これとこれ」

443. ～の (所有) of, 's　EP chərâ ʔə- láiʔàʊ (先生の本;the teacher's book)　WP shərà ʔə- leiʔ-ʔouʔ (先生の本)　(SK θərâ ʔə- lìʔ)　(注) 両方言とも「先生–[3sg–本]」という head-marking 型の表示になっている。ただし両方言ともに 3sg 代名詞は省略も可能。

444. ～も also, too　EP θí　WP lə́, mə́　(SK sèkɔ́ʔ)

(EP)　jə̀　θí　jə-　θíjâ
1SG　も　1sg　知る
「私も知っている」

(WP)　já　lə́　jə-　θèjà
1SG　も　1sg　知る
「私も知っている」

446. ～で (道具) by means of　EP dè　WP lə- , lə́　(SK dɔ́ʔ)

(EP)　jə-　ʔáɴ　mì　dē　nʊ́thòʊɴ
1sg　食べる　ご飯　(共)　さじ
「私は匙でご飯を食べる」

(WP)　jə-　ʔàɴ　mé　lə́　nòthóʊɴ
1sg　食べる　ご飯　(斜)　さじ
「私は匙でご飯を食べる」

447. ない (否定辞) not　EP lə- ... bá (従属節) , ʔé(主節)　WP lə- ... ɓà (従属節) , ʔeʔ(主節)
(SK 従属節, 主節ともに tə- ... bâ)

(EP)　ʔəwê　lə-　ɣɛ̂　bá　ʔəkhʊ́còɴ ...
3sg　(否)　来る　(否')　(理由)
「彼が来ないので...」

(WP)　ʔəwè　lə-　ɣài　ɓà　ʔəcáuɴ ...
3sg　(否)　来る　(否')　(理由)
「彼が来ないので...」

(EP)　jə-　ʔáɴ　mì　ʔé
1sg　食べる　ご飯　(否)
「私はご飯を食べない」

(WP)　jə-　ʔàɴ　mé　ʔeʔ
1sg　食べる　ご飯　(否)
「私はご飯を食べない」

447-1. ～するな Do not...　EP ... (lə)xì　WP ... ləɣé　(SK ... təɣē)

(EP) (nə-) ʔáɴ mì ləxì
2sg 食べる ご飯 (禁止)
「あなたはご飯を食べるな」

(WP) (nə-) ʔàɴ mé ləɣé
2sg 食べる ご飯 (禁止)
「私はご飯を食べるな」

447-2. ～か (question) EP ... ʁâ, ... lê WP ... ɣà, ... lài (SK ɦá, lê) (注) 疑問詞のない文では EP ʁâ, WP ɣàを、疑問詞のある文では EP lê, WP lài をそれぞれ文末に置く。 cf. Burmese /lé/, Mon /ha/, Shan /hâa/

(EP) nə- ʔɔ́ lé ləkōʊɴ ʁâ
2sg いる (場) ラングーン (疑)
「あなたはラングーンにいるのか？」

(WP) nə- ʔàu lɔ́ təkhóuɴ ɣà
1sg いる (斜) ラングーン (疑)
「あなたはラングーンにいるのか？」

(EP) chənɔ́ ʔɔ́ lê
何 ある (疑)
「何があるのか？」

(WP) mənɔ̀ ʔàu lài
何 ある (疑)
「何があるのか？」

448. ～だから (理由) because EP ... ʔəkhʊ́còɴ WP ... ʔəcáuɴ (SK ʔəxó) (注)447 の例文を参照のこと。

449. ～だけれど (逆接) although EP ... lānâɴ WP ... lânàɴɣé (SK θənàʔké)

(EP) ʔəwê lə- ɣê bá
3se (否) 来る (否')

lānâɴ | jə- mà
(逆接) 1sg する
「彼が来なかったが私はやった」

(WP) ʔəwè lə- ɣài ɓà
3se (否) 来る (否')

lânàɴɣé | jə- má
(逆接) 1sg する
「彼が来なかったが私はやった」

449-a. ～して, そして ..., and ... EP ... ɣòɴ, ... θèɣòɴ WP ... ɣáuɴ (SK wī) cf. EP ɣòɴ「終わる」WP ɣáuɴ「終わる」(233-2)

(EP) ʔəwê ʔánlū thî ɣòɴ |
3se 浴びる 水 そして

ʔáɴ mì
食べる ご飯
「彼は水浴びしてご飯を食べた」

(WP) ʔəwè ʔànlû thì ɣáuɴ |
3se 浴びる 水 そして

ʔàɴ mé
食べる ご飯
「彼は水浴びしてご飯を食べた」

450. ～させる (使役) let someone do something EP dà ＋ V (dàʊ, dài という発音もある) WP dəɯʔ ＋ V (SK dɯ́ʔ)

(EP) jə- dà ʔáɴ ʔəwê kʊ́
1sg (使役) 食べる 3se 菓子
「私は彼に菓子を食べさせた」

(WP) jə- dəɯʔ ʔàɴ ʔəwè kò
1sg (使役) 食べる 3se 菓子
「私は彼に菓子を食べさせた」

452. ～したい (願望) want to EP V + báθà WP mô+ V (SK mò) (注)EP における非現実法を表す動詞助詞 mə- は元来「 ～ したい」の意味を持っていたと思われる。現在 EP では動詞の後に báθà「欲しい」に由来する動詞助詞を置くことによって「～ したい」を表す。

(EP) jə- ʔáɴ báθà kʊ́
1sg 食べる (欲求) 菓子
「私は菓子を食べたい」

(WP) jə- mô ʔàɴ kò
1sg (欲求) 食べる 菓子
「私は菓子を食べたい」

452-a. 文末助詞 (some sentence final particles)

「(行ってください) **ね**」 Would you ... , please?
(EP) lì xɔ̄
行く ね
「行ってくださいね」

(WP) lé ɓɔ̀
行く ね
「行ってくださいね」

「(これは良いです) **ね**」 It is ... , isn't it?
(EP) ʔəjò ɣì nê
これ 良い ね
「これは良いですね」

(WP) ʔəjɔ́ ɣé nè
これ 良い ね
「これは良いですね」

452-b. ～しよう will, be going to EP mə- WP kə- (SK kə-) (注)WP の kə- は Sgaw Karen の irrealis marker kə- と同源であろう。EP の mə- は、452 の注に述べたように、元々は「～ したい」という意味を持っていたものが非現実法を表すようになったものと思われる。

(EP) jə- mə- ʔáɴ
1sg (非現実) 食べる
「私が食べる」

(WP) jə- kə- ʔàɴ
1sg (非現実) 食べる
「私が食べる」

452-c. ～しなければならない must, have to EP bá WP ɓà (SK bâ) (注) 両方言とも「当たる; 正しい」の意味を持つ動詞に由来する動詞助詞を動詞の前に置く。

(EP) jə- bá ʔáɴ
1sg (当為) 食べる
「私は食べなければならない」

(WP) jə- ɓà ʔàɴ
1sg (当為) 食べる
「私は食べなければならない」

＜重要単語・連語＞

453. ある, いる be, exist EP ʔɔ́ WP ʔàu (SK ʔô)

(EP) láiʔàʊ ɔ́
本 ある
「本がある」

(WP)　lei??ou?　?àu
本　ある
「本がある」

453-1.　ない there is no　EP　?ɔ́　?é　WP　?àu　?e?　(SK tə-　?ô bâ)

454. できる (能力) can　EP　θí　WP　θè　(SK θé)

(EP)　jə-　pɔ̄　lái　θí
1sg　読む　文字　できる
「私は文字を読むことができる」
(分離型動詞連続)

(WP)　jə-　phɔ̂　lei?　θè
1sg　読む　文字　できる
「私は文字を読むことができる」

454-1. 持っている possess　EP　?ɔ́　WP　?àu　(SK ?ô)

(EP)　láiʔàʊ　ɔ́　lé　jə-　?ɔ́
本　ある　(場)　1sg　ところ
「私は本を持っている」

(WP)　lei??ou?　?àu　lɔ́　jə-　?àu
本　ある　(斜)　1sg　ところ
「私は本を持っている」

455. 同じの same　EP　mɔ̂mɔ́　WP　màuɴxáuɴ　(SK díʔθóʔθóʔ)

455-1. 似ている similar, alike　EP　bádòɴ　WP　lánɣa?　(SK lɔ̄ɣàʔ)

456. 他の物 other　EP　?əɣûɣà　WP　?əɣùɣá　(SK ?əɣā)

457.　～のために for the sake of　EP　?əɣāɴ　WP　?əɣâɴ　(SK ?əɣɔ̀)

(EP)　jə-　phā　?əɣāɴ
1sg　父　ため
「私の父のために」

(WP)　jə-　phâ　?əɣâɴ
1sg　父　ため
「私の父のために」

457-2.　～のような as, like　EP　bê ...　θò　WP　ɓó ...　θo?　(SK díʔ... θóʔ)

(EP)　bê　jə-　phā　θò
(比定)　1sg　父　(比定')
「私の父のように/ような」

(WP)　ɓó　jə-　phâ　θo?
(比定)　1sg　父　(比定')
「私の父のように/ような」

457-4. はい yes　EP　mwē　WP　mwê　(SK mè)
(注)EP　mwē, WP　mwê はともにコピュラ動詞 (copula verb)。

457-5. いいえ no　EP　mwē ?é　WP　mwê ?e?　(SK tə-　mè bâ)

457-10. ありがとう Thank you　EP　chəkhōʊɴchətà　WP　shəkhôuɴshətá　(SK tà blúʔ)

参考文献

Anonymous
(1989) *Pwo Kayin–Myanmar Dictionary.* (Written in christian Pwo Karen script, pp.260) Rangoon: Pwo Kayin Baptist Conference.

Ballard, Emilie
(1993) *Say it in Karen.* (I–III) Chiang Mai: The Thailand Baptist Missionary Fellowship.

Benedict, Paul K.
(1972) *Sino-Tibetan: a conspectus.* Cambridge: Cambridge University Press.

Comrie, Bernard
(1976) *Aspect.* Cambridge: Cambridge University Press.
(1989) *Language Universals and Linguistic Typology.* (2nd edition) Chicago: University of Chicago Press.

Cooke, J.R., E. Hudspith and J.A. Morris
(1976) "Phlong (Pwo Karen of Hot District, Chiang Mai)." (In) William A. Smally (ed.) *Phonemes and Orthography: Language Planning in Ten Minority Languages of Thailand* (Pacific Linguistics Series C-43), pp.187-220.

戴慶厦, 劉菊黄, 傅愛蘭
(1991) 「克倫語」戴慶厦, 黄布凡, 傅愛蘭, 仁增旺姆, 劉菊黄編『藏緬語十五種』pp.388-414. 北京: 北京燕山出版社.

戴慶厦, 黄布凡, 傅愛蘭, 仁增旺姆, 劉菊黄
(1991) 『藏緬語十五種』 北京: 北京燕山出版社.

Dixon, Robert M. W.
(1997) *The Rise and Fall of Languages.* Cambridge: Cambridge University Press.

Dryer, Matthew S.
(1986) "Primary objects, secondary objects, and antidative." *Language* 62.4:808-845.

Duffin, C.H.
(1913) *A Manual of the Pwo-Karen Dialect.* Rangoon: American Baptist Mission Press.

Foley, William A. and Robert D. Van Valin, Jr.
(1984) *Functional Syntax and Universal Grammar.* Cambridge: Cambridge University Press.

Gilmore, David
(1898) *A Grammar of the Sgaw Karen.* Rangoon: American Baptist Mission Press, F. D. Phinney Supt.

Goral, Donald R.
(1986) "Verb concatenation in Southeast Asian languages." Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.

Greenberg, Joseph H.
(1966) "Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements." (In) Greenberg, Joseph H.(ed.) *Universals of Languages (second edition)*, pp.73-113. Cambridge/Massachusetts: MIT Press.

Grierson, George A.
(1928) *Linguistic Suvey of India (vol.1, part II).* Reprinted in 1990,1994 by Low Price Publications, Delhi.

Hansell, Mark
(1966) "Serial verbs and complement constructions in Mandarin: a clause linkage analysis." (In) Robert Van Valin (ed.) *Advances in Role and Reference Grammar*, pp.197-233. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

服部四郎
(1957) (編)『基礎語彙調査票』東京: 東京大学言語学研究室.
(1960) 『言語学の方法』東京: 岩波書店.

Haudricourt, André-G.
(1946) "Restitution du karen commun." *BSLP* 42:103-11.
(1953) "A propos de la restitution du Karen commun." *BSLP* 49:129-32.
(1972) *Problèmes de Phonologie Diachronique.* Paris: SELAF.
(1975) "Le système des tons du karen commun." *BSLP* 70.1:339-43.

Henderson, Eugenie J. A.
(1961) "Tone and intonation in Western Bwe Karen." *Burma Research Society Fiftieth Anniversary Publication, No. 1*, Rangoon.
(1979) "Bwe Karen as a two-tone language?" *Pacific Linguistics*, Series C, No.45.
(1997) *Bwe Karen Dictionary, with Texts and English-Karen Word List.* (2 Vols) London: School of Oriental and African Studies, University of London.

Honda, Isao
(1996) "Negation: a cross-linguistic study." Ph.D. dissertation, State University of New York at Buffalo.

飯島茂
(1974) 「国民形成と少数民族問題–ビルマにおけるカレン族の悲劇–」『アジア・アフリカ言語文化研究』8:117-135.

Jones, Robert B.
(1961) *Karen Linguistic Studies.* Berkley and Los Angeles: University of California Press.

影山太郎
(1993) 『文法と語形成』東京:ひつじ書房.

Karen (Pwo) Dictionary Compiling Committee (The Open Society Institute's Burma Project)
(199?) *Karen (Pwo)–Burmese–English Dictionary.* (pp.287) Bangkok: Karen (Pwo) Dictionary Compiling Committee. (Written in buddhist Pwo Karen script)

加藤昌彦 (Kato, Atsuhiko)
(1991) "On three Karen particles diʔ, lí and lɔ̄ : the Karen version of 'still' and 'anymore'." 『東京大学言語学論集』12:97-117.
(1993) 「スゴー・カレン語の動詞連続」『アジア・アフリカ言語文化研究』45:177-204.
(1995) "The phonological systems of three Pwo Karen dialects." *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 18.1:63-103.
(1997) 「カレン人とその言語」田村克己・根本敬編『暮らしがわかるアジア読本　ビルマ』pp.42-49. 東京：河出書房新社.
(1998) 「ポー・カレン語（東部方言）の動詞連続における主動詞について」『言語研究』113:31-61

(1999) "Two types of causative construction in Pwo Karen (the Eastern dialect)." (In) Shintani Tadahiko (ed) *Linguistic and Anthropological Study on the Shan Culture Area*, pp. 55-93. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
(2000) 「カレン」『世界民族事典』pp.188-189. 弘文堂.
(2001a) 「ポー・カレン語（東部方言）の関係節 (Relative clauses in Pwo Karen [Eastern dialect])」『東京大学言語学論集』20:275-300.
(2001b) 「仏教ポー・カレン文字 (Buddhist Pwo Karen script)」『世界文字辞典』pp.847-851. 東京:三省堂.
(2001c) 「キリスト教ポー・カレン文字 (Christian Pwo Karen script)」『世界文字辞典』pp.333-337 東京:三省堂.
(2002) 「ビルマにおける東部および西部ポー・カレン語の対照基礎語彙」『東京外大東南アジア学』7:212-249.
(2003a) "Pwo Karen." (In) Graham Thurgood and Randy LaPolla (eds) *The Sino-Tibetan Languages*, pp.632-648. London and New York: Routledge.
(2003b) 「カレン系言語の状況」崎山理 (編)『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』国立民族学博物館調査報告 39, pp.115-125.

Keenan, Edward L.
(1985) "Relative clauses." (In) Timothy Shopen (ed) *Language Typology and Syntactic Description II, Complex Constructions*, pp.141-170. Cambridge University Press.

Keenan, Edward L. and Bernard Comrie
(1977) "NP accessibility and universal grammar." *Linguistic Inquiry* 8:63-99.

LaPolla, Randy J.
(1994) "Parallel grammaticalizations in Tibeto-Burman languages: evidence of Sapir's drift." *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 17.1:61-80.

Lefebvre, Claire (ed.)
(1991) *Serial Verbs: grammatical, comparative, and cognitive approaches.* Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Lehman, Frederic K.
(1967) "Kayah society as a function of the Shan-Burma-Karen context." (In) J. H. Steward (ed.) *Contemporary Change in Traditional Societies, Vol. II*, pp.1-104. Urbana, Chicago, and London: University of Illinois Press.
(1979) "Who are the Karen, and if so, why? Karen ethnohistory and a formal theory of ethnicity." (In) Ch. F. Keyes (ed.) *Ethnic Adaptation and Identity: the Karen on the Thai frontier with Burma*, pp.215-53. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues, Inc.

Luce, Gordon H.
(1959) "Introduction to the comparative study of Karen languages." *Journal of Burma Research Society* 42.1:1-18.
(1991) *Phases of Pre-Págan Burma: languages and history.* Oxford: Oxford University Press.

Lyons, John
(1977) *Semantics.* (2 Vols) Cambridge: Cambridge University Press.

Matisoff, James A.
(1973) *The Grammar of Lahu.* Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
(2003) *Handbook of Proto-Tibeto-Burman.* Berkley, Los Angeles and London: University of California Press.

Mazaudon, Martine
(1985) "Proto-Tibeto-Burman as a two-tone language? Some evidence from proto-Tamang and proto-Karen." (In) Graham Thurgood, James A. Matisoff and David Bradley (eds) *Linguistics of the Sino-Tibetan area: the state of the art. Papers presented to Paul K. Benedict for his 71st birthday* (Pacific Linguistics, series C-87), pp.201-229.

Muansuwan, Nuttanart
(2002) "Verb complexes in Thai." Ph.D. dissertation, University at Buffalo, the State University of New York.

Nichols, Johanna
(1986) "Head-marking and dependent-marking grammar." *Language* 62.1:56-119.

Nishi, Yoshio
(1995) "A brief survey of the controversy in verb pronominalization in Tibeto-Burman." (In) Yoshio Nishi, James A. Matisoff, and Yasuhiko Nagano (eds.) *New Horizons in Tibeto-Burman Morphosyntax*, pp.1-16. Osaka: National Museum of Ethnology.

西田龍雄
(1964) 「R.B. ジョーンズ Jr. 著　カレン語研究:記述・比較・テキスト」(Jones 1961 に対する書評)『東洋学報』46.4:01-013.
(1966) 「ビルマにおけるパオ族の言語について—南方パオ語パアン方言覚え書」『言語研究』50:15-33.
(2000) 『東アジア諸言語の研究 I　巨大言語群—シナ・チベット語族の展望』京都:京都大学学術出版会.

Okell, John
(1969) *A Reference Grammar of Colloquial Burmese.* (2 Vols) London: Oxford University Press.

Phillips, Audra
(1996) "Dialect comparison among the Pwo Karen of Central Thailand." *Proceedings of the Fourth International Symposium on Languages and Linguistics* Vol.III:1122-1162.
(1999) *Western Thailand Pwo Karen Text Collection.* (pre-publication draft) Thammasat University and Summer Institute of Linguistics.
(2000) "West-Central Thailand Pwo Karen phonology." *33rd ICSTLL Papers*:99-110. Bangkok: Ramkhamhaeng University.

Phon Myint
(1975) *bud-dha bhaa saa pui: ka rang pe caa sa muing: (1851-1970)* (The History of Palm-leaf Inscriptions of Buddhist Pwo Karens: 1851-1970 [in Burmese, pp.306]) Rangoon: Dhabye-Oo Sapedaik.

Purser, W.C.B. and Saya Tun Aung
(1922) *A Comparative Dictionary of the Pwo-Karen Dialect.* Rangoon: American Baptist Mission Press.

坂本恭章
(1976) 『モン語語彙集 (Mon vocabulary)』東京:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
(1994) 『モン語辞典 (Mon-Japanese dictionary)』東京:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

澤田英夫
(1989) 「現代ビルマ語における動詞配列の類型について」『言語学研究』7:73-110. 京都大学言語学研究会.
(1999) 「ビルマ語文法 (１年次・２年次)」(1998 年版の補訂版)(ms.).

Saya Kan Gyi
(1915) *Introduction to the Study of Sgaw Karen.* Rangoon: American Baptist Mission Press, F. D. Phinney Supt.

Sebba, Mark
(1987) *The Syntax of Serial Verbs.* Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Shafer, Robert
(1966-67/1974) *Introduction to Sino-Tibetan.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

柴谷方良 (Shibatani, Masayoshi)
(1985) "Passives and related constructions: a prototype analysis." *Language* 61.4:821-848.
(1997) 「言語の機能と構造と類型」『言語研究』112:1-32.

沈力
(1997) 「現代中国語の動詞構造の研究–語形成と句形成の平行性を中心に」京都大学博士論文.

Shintani, Tadahiko L. A.
(2003a) "Classification of Brakaloungic (Karenic) languages in relation to their tonal evolution." Shigeki KAJI (ed.) *Proceedings of the Symposium Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: historical development, phonetics of tone, and descriptive studies*, pp.37-54. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.
(2003b) "Notes à propos de l'étymologie du mot karen." *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 26.1:15-21.
(2003c) "Les deux phases d'assourdissement des initiales sonores et de dédoublement du système tonal dans les langues karen." *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* XCVIII fasc. 1:409-416.

白井聡子
(1998) 「現代チベット語の名詞修飾構造」『言語研究』116:59-95

Solnit, David
(1997) *Eastern Kayah Li: grammar, texts, glossary.* Honolulu: University of Hawai'i Press.

Song, Jae Jung
(1996) *Causatives and Causation: a universal-typological perspective.* London and New York: Longman.

Stern, Theodore
(1968) "Three Pwo Karen scripts: a study of alphabet formation." *Anthropological Linguistics* 10.1:1-39.

Thepkanjana, Kingkarn
(1986) "Serial verb constructions in Thai." Ph.D. dissertation, University of Michigan.

角田太作
(1991) 『世界の言語と日本語』東京:くろしお出版.

Van Valin, Robert D., Jr. and Randy J. LaPolla
(1997) *Syntax: structure, meaning and function.* Cambridge: Cambridge University Press.

Wade, Jonathan
(1888) *Karen Vernacular Grammar.* (2nd edition) Rangoon: American Baptist Mission Press, F. D. Phinney Supt.

Weidert, Alfons
(1987) *Tibeto-Burman Tonology.* Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

藪司郎
(1982) 『アツィ語語彙集 (Atsi vocabulary)』東京:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
(1988) 「カレン語群」『言語学大辞典』pp.1312-1318. 東京:三省堂.

湯川恭敏
(1999) 『言語学』東京:ひつじ書房.

索 引

-lé, 62
-phʊ́, 61
bá < 経験 >, 346
bá < 催促 >, 348
bá < 当為 >, 285
bá < 判断の基準点の導入 >, 347
bá < 不可抗力 >, 345
bá < 無意志 >, 343
báchâiɴ, 141
bánɔ́, 516
báʁɔ̂, 491
báθà < 欲求 >, 338
bê ... θò, 137, 397
bêθí, 513
bêθíθò, 513
bjāɴ, 457
bɔ́, 485
bò, 488
bòlɔ̂, 474
càibò, 391
cāɴbò, 380
chəlé, 165
chənɔ́, 511
chə̀, 104
chə̀ < 文助詞 >, 487
chài, 489
chàmwɛ̄, 166
chə̀ɴ < 一斉 >, 331
chə̀ɴ < 協力 >, 330
chə̀ɴchə̂ɴ, 404
chī, 470
chóɴ < 強制 >, 337
cò < 遠隔 >, 310
dá < 限定 >, 357
dá < 比較 >, 358
dáchəθà < 詠嘆 >, 336
dáʔò, 175
dáwê < 願望 >, 320
dà < 使役 >, 286, 520
dài, 459
dàlɔ̂, 473
dɛ́, 492
dè, 134, 170, 379, 398
dèiɴ, 402
dɔ̀, 504
dòɴ < 模倣 >, 306
dʊ̀, 486
ɣɛ̂ < 漸次的変化 >, 289
ɣì, 183, 402
ɣòɴ, 393
ɣʊ́ < 違法、反道徳 >, 310
jàʊ, 176, 462
jā, 482
jābò, 483
jāɴ, 486
jɛ̄, 485
jò, 170, 406, 496
jʊ̄ < 試行 >, 312
kəbá, 381
kədà < 逆向き >, 304
kəjāɴ, 383
kəjɛ̄, 168
kəlā, 403
kəlɨ, 382
kənɛ̂, 482
kənī, 167
kə̄, 486
khə̄, 404

khè < 代行 >, 352
khɔ̂, 500, 515
khó, 506
khɔ̀khɔ̂, 127, 513, 516
khwái < 徹底 >, 313
kóɴ < 共同 >, 330
kò < 使役 >, 289, 525
kò ... dè, 124
kò ... dèmèiɴká, 125
kòʊɴ < 共同 >, 329
kràɴ < 意外性 >, 308
kràɴ < 傾向 >, 308
kràɴ < 根拠のなさ >, 307
kwè < 遊び >, 342
kɨ̄, 456
lə- < 否定 (従属節)>, 281
ləphá, 176
ləxì, 469
láʊ, 181
láʊdè, 169
lə̀ɴ, 466
làɴ < 下方 >, 297
làɴ < 再帰的な動作 >, 300
làɴ < 状態の変化 >, 299
làɴ < 内方向への移動 >, 299
làɴ-, 61
lā < 願望 >, 315
lāchài, 490
lānâɴ, 380, 396
lɛ̂, 478
lé < 強調 >, 165
lé < 空間・時間 >, 129
lé < 従属節助詞 (関係節を導く)>, 407
lé と dè < 従属節助詞 (補文を表す)>, 407, 415
lì < 慣れ >, 311
lɔ̂, 472
lóθà < 相互行為 >, 364
lɔ̀ < 使役 >, 289, 526
lɔ̀ɴ < 無分別 >, 290
lɔ̀wê, 491
lʊ́ < 学習 >, 305
lʊ́ɪ, 129
mə- < 非現実 >, 277
má, 502
mábá < 過誤 >, 343
mà < 使役 >, 287, 522
mā, 455
mātɛ̀ < 甚だしさ >, 336
mèiɴ < 自然な成り行き >, 323
mɨ̂ , 489
náiɴ < 比較 >, 359
nà, 488
nāɴ, 122
nɛ̂, 481, 504
nî, 140
nī < 引き寄せ >, 349
nī < 執拗 >, 351
nī < 努力 >, 348
nī < 判断の基準点の導入 >, 351
nɔ́, 170, 405, 474, 494
nɔ́ʔò, 497
nɔ́tā, 406, 497
nʊ́-, 60
pə-, 60
pəθài, 456
pəθí, 513
phà-, 60
phílâɴ, 531
phílâɴ < 使役 >, 288, 524
phílâɴ < 裨益 >, 353
phlòʊɴ, 513
phɔ̄, 142, 456
phɔ̄-, 61
phɔ̄phɔ̂bàʊ, 514
píθò, 513
pjáʊ < 専念 >, 333
pjà < 提示 >, 356
plɛ̀, 531
plɛ̀tɔ̀, 531
plɔ̀ < 無価値 >, 326, 327
pɔ̂, 512

pɔ̀wê, 513
pōʊɴ, 458
ʔə-, 58
ʔəcòɴ, 149
ʔəɣāɴ, 146, 409
ʔəkhâ, 408
ʔəkhâiɴ, 160
ʔəkhánthài, 161
ʔəkhlôʊɴ, 158
ʔəkhʊ́còɴ, 380, 393
ʔəkhʊ́dà, 162
ʔəkhʊ́thò, 162
ʔəklà, 160
ʔəlá, 157
ʔəlāɴkhâiɴ, 160
ʔəlòɴ, 159
ʔəméjâ, 159
ʔənàiɴ, 163
ʔəphâɴkhʊ́, 154
ʔəphâɴlá, 157
ʔəphɔ̀ɴ, 158
ʔəʔɔ́, 150
ʔəthài, 161
ʔəxɔ̀ɴnàiɴ, 163
ʔáɴɣʊ́ < 違法、反道徳 >, 290
ʔáɴmə̂ɴ, 530
ʔé, 467
ʔè, 389
ʔè-, 60
ʔèɣòɴ, 381
ʔò, 170, 497
ʁâ, 477
ʁâと lê < 従属節助詞 (補文を導く)>, 407, 426, 511
ʁɔ̄, 503
ɕá, 514
ɕàʊ < 驚愕 >, 327
ɕàʊ < 信念のなさ >, 328
ɕèɕé, 515
ɕòɴ < 共同 >, 328
θâ < 新局面 >, 325
θâɴ < 最前、最近 >, 308
θà < 再帰 >, 361
θà < 自発 >, 363
θɛ̀, 176
θɛ̀ɣòɴ, 395
θí <～も >, 497
θí < 従属節助詞 >, 406
θí < 複数 >, 176
θʊ́ɪ < 内密 >, 309
təkhɔ̂lé (khɔ̀khɔ̂lé), 141
tàlɔ̂, 473
tā, 406, 497
tɛ̀ < 甚だしさ >, 335
thəmjânɪ̄ʊ, 382
thâɴ < 常時 >, 332
thə̂ɴ-, 61
thá < 保持 >, 339
tháɴ < 外方向への移動 >, 294
tháɴ < 完成 >, 296
tháɴ < 上方 >, 291
tháɴ < 状態の変化 >, 292
tháʊ < 最上 >, 360
thàiɴ < 繰り返し >, 302
thàiɴ < 元の位置への移動 >, 301
thàiɴ < 事象の追加 >, 302
thàiɴ < 返答、応酬 >, 304
thɔ̀ɴ ... θâ, 126
thàʊ < 続行 >, 332
thòɴ, 132, 400
thòɴnɔ́, 381
thōɴ, 503
tō, 458
wê < 強意 >, 334
wê < 文助詞 >, 486
wêdá < 強意 >, 335
wɛ̀ < 備え >, 340
wī < 先行 >, 341
xáʊ < 共同 >, 330
xāɴ, 182
xì, 403, 469
xɔ̄, 484

xwè, 140, 401
xwē, 126, 513
ʔɔ́ chóɴ lā chài, 318

Ballard, i
Benedict, 7

Comrie, 464, 519
Cooke et al., ii, 7, 22

Dahlia Win, vi, 573
Dixon, i
Dryer, 42
Duffin, i, ii, 5

Foley and Van Valin, 372, 426

Gilmore, i
Goral, 207
Greenberg, 433

Haudricourt, 8, 22
Henderson, 8, 535
Honda, 280

Jones, ii, 5, 8, 21, 22

LaPolla, 103, 532
Lefebvre, 207
Linguistic Survey of India, 5
Luce, 8
Lyons, 31

Matisoff, 7
Mon-Khmer, 7
Muansuwan, 207

Nishi, 103

Phillips, ii, 7, 22, 25
Phon Myint, ii, 12
Phu Tah Moo, 571
Purser and Saya Tun Aung, i, ii, 5, 17, 437, 442

reduplication, 83

Saw Hla Chit, vi
Saw Htalon, vi
Saw Thurein, vi
Saya Kan Gyi, i
Sebba, 207
Shibatani, 363
Shintani, 8
Solnit, i, 535
Song, 519
Stern, ii

Taylor, 5
Thepkanjana, 207
Tibeto-Karen, 7
TYPE 1, 517
TYPE 2, 423, 425, 517

U Pyinnyathami, vi
U Sandawara, vi

V1 事象の実現が含意されない動詞連続, 252
V2 事象の実現が含意されない動詞連続, 228
Van Valin and LaPolla, 51, 187, 519
Violet Kyaw, vi

Wade, i
Weidert, 8

アスペクト, 459

飯島茂, 10
池田一人, 10
意志性, 187, 517
意志動詞, 187
一般助詞, 29, 493
一般助詞を用いた慣用表現, 508
移動動詞, 227
意味役割, 50
イントネーション, 23
韻母, 15
引用文, 415

宇佐美洋, 23
裏声, 26

穏やかな上昇調イントネーション, 24

介子音, 15
影山太郎, 199
可能タイプ, 236
関係節, 389, 433
感情を表す動詞, 154
間接的な使役, 521
感嘆詞, 27, 385
完了 (perfect), 464

基礎語彙, 571
基本語順, 31
疑問, 36, 477, 478
疑問語, 511
急激な上昇調イントネーション, 25
狭義のカレン語, 3
強勢形, 95
キリスト教スゴー・カレン文字, 10
キリスト教ポー・カレン文字, 11

具体数詞, 113
繰り上げ, 429
繰り返し, 83

繋辞動詞, 40, 424, 468
軽声音節, 22
原因－結果, 210
現実法, 278
現実法・非現実法の対立, 425, 528

語彙的アスペクト, 187
項, 37
行為者, 50
後置型, 433
肯定節, 466
高特定性名詞, 444

再帰, 361
坂本恭章, 571
澤田英夫, 155, 207
使役, 423
使役構文, 517
事象, 31
時制, 53
自他の対応, 194
自動詞, 192
柴谷方良, 363
自発, 363
斜格補語, 37
斜格補語相当の補文, 426
従属節, 389
従属節助詞, 29, 389
従属節助詞を伴わない副詞節, 262, 409
主語, 37
主語相当の補文, 413
主語同一型, 213
主語の倒置, 32
主語非同一型, 213
主題, 46, 493
主題化, 46
手段－目的, 210
述語, 44
述部, 44
主動詞, 214, 254
主要部, 64, 433
主要部内在型関係節, 436
主要部名詞, 433
照応, 95
畳語, 83
状態動詞, 190
譲渡不可能 (inalienable), 135
助詞, 27
助数名詞, 113, 115
助数名詞句, 116
所有, 54, 135, 152
白井聡子, 436
資料の一覧, 549
新谷忠彦, v

数詞, 113
数量詞遊離, 120

声調, 15, 21
西部方言, 3, 5, 571
西部ポー・カレン語, 3
声母, 15
接辞, 57
接辞 (affix) と助詞 (particle), 57
前置型, 433

相互行為, 364
促音節の解釈, 573
側置助詞, 29, 129
側置助詞句, 43, 129
側置名詞, 145

態, 52
第一目的語, 42
第一形, 95
戴慶厦, 103
第二形, 95
第二目的語, 42
代名詞, 95
代名詞化 (pronominalization), 47, 102
他動詞, 192

チベット・ビルマ祖語の *s-, 194
抽象数詞, 113, 122
チョウンビョー方言, 571
直接的な使役, 522

角田太作, 155

テキスト, 553

動作主性, 187
動詞, 27
頭子音, 15
等式文, 40
動詞句, 201
動詞句を目的語として取る構造, 202, 258
動詞助詞, 29, 277
動詞の配列規則, 222
動詞複合体, 201
動詞文, 51
動詞連続, 207
動詞連続と外見が類似する構造, 257
動態動詞, 190
東部方言, 3, 5, 571
東部ポー・カレン語, 3
特定性, 444

西田龍雄, 8, 194
二重主語文, 40
入破音, 16
認識的法, 278

パアン, 3
場所格交替, 195
場所名詞, 153
服部四郎, 25, 196, 571

非現実法, 53, 277
非制限的関係節, 445
非対格動詞, 199
否定, 35, 467
否定辞, 35
否定節, 466
被動者, 50
非能格動詞, 199
評言, 46
標識介在型, 433
描写タイプ, 236
ビルマ語との接触, 452
品詞, 27

複合, 63
複合動詞, 79
複合名詞, 63
副詞, 27, 375
副詞節, 389
副詞的要素, 201
副助詞, 29, 455
複数を表す助詞, 176
仏教スゴー・カレン文字, 11
仏教ポー・カレン文字, 12, 549
文助詞, 477
文体的価値, 535
文法化, 266

文末助詞, 29
分離型, 208
分裂文, 49

補語, 37
補文, 389, 413
補文と引用文, 416

末子音, 15

無意志動詞, 187

名詞, 27
名詞句, 91
名詞句を構成する要素, 91
名詞修飾助詞, 29, 165
名詞文, 51
命令文, 51, 315, 320

目的語, 37
目的語相当の補文, 415
モン語, 571
モン語の影響, 5

藪司郎, 571

有生性, 517
湯川恭敏, 120

様態－動作, 210
呼びかけ, 183

類似要素反復, 535

レーケー文字, 14
連結型, 208
連結型動詞連続の形態統語論上の位置づけ, 233

論理的主語, 212
論理的主語の同一指示性, 212